

Sunshine!!
ORB

星宇海

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

光の魔王獣マガゼットンが倒されてから3年……。平和となった街に突如として現れる怪獣たちに、光の巨人ウルトラマンオーブが再び立ち上がる。

スクールアイドルとして輝きを目指す少女たち。そして彼女たちを支えるためにマネージャーとして所属する青年、暁一真。Aqoursとオーブ……。彼女たちが様々な出来事を経験した末に見つけた“私たちだけの輝き”とは……。

輝きを掴もうとする少女たち、そして闇を照らす戦士の物語。

【完結しました】

目次

STAGE 1 取り戻せ光

| | | |
|------|----------------|-----|
| 第1話 | オーブの光 | 1 |
| 第2話 | 輝きの輪 | 23 |
| 第3話 | 怪鳥大激突 | 34 |
| 第4話 | 嵐を呼ぶ翼 | 49 |
| 第5話 | 最初の関門 | 67 |
| 第6話 | 新たな羽ばたき | 91 |
| 第7話 | フタリノキモチ | 107 |
| 第8話 | 紅ノ戦意 | 143 |
| 第9話 | 立ち入り禁止! 怪獣水源!! | |
| 166 | | |
| 第10話 | 悪臭注意!? オーブvsマガ | |

ジャツパ!!

| | | |
|-----|----------------|-----|
| 第1話 | 墮天使降臨 | 180 |
| 第1話 | 墮天使勧誘 | 194 |
| 第2話 | 墮天使勧誘 | 215 |
| 第3話 | 墮天使誘拐 | 234 |
| 第4話 | 私たちの住む街 | 253 |
| 第5話 | 彼の愛した街 | 273 |
| 第6話 | あなたが決める明日 | |
| 295 | | |
| 第7話 | わたしの決める明日 | |
| 306 | | |
| 第8話 | A q o u r s、東へ | |
| 320 | | |
| 第9話 | 降りかかる挫折と最悪 | |

| | | | | | |
|------------|-----------|-----|------------|-------------|-----|
| Episode 27 | たぶるゝ狂るゝ | 492 | RB | | 702 |
| 第20話 | 最悪と最凶 | 345 | Episode 28 | あかつきゝ暁 | 514 |
| 第21話 | 悔しさの果てに…… | 384 | 第29話 | 嘆きの星 | 531 |
| 第22話 | 彼女たちは夢を見る | 400 | 第30話 | 決意の聖剣 | 571 |
| 第23話 | 純白の判決者 | 427 | 第31話 | センチメンタルヨーソロ | 597 |
| 第24話 | 黒き拳は正義を砕く | 450 | 第32話 | 友情に潜む鬼 | 618 |
| 第25話 | 忘れていたもの | 472 | 第33話 | 再来の地 | 641 |
| Episode 26 | こしかたゝ過去 | 492 | 第34話 | 勇者と輝き | 669 |
| | | | 第35話 | 光は青空へ | 684 |
| | | | 第36話 | 未来への切符 | 702 |
| | | | | 光る星 | 702 |

S T A G E 2 闇夜を照らす輝き

| | | |
|------|--------------|-----|
| 第37話 | 次なる輝きへ | 722 |
| 第38話 | 太陽は道を照らす | 742 |
| 第39話 | 宝石と真珠 | 762 |
| 第40話 | スターズインページョン | |
| 779 | | |
| 第41話 | 狂暴城壁 | 793 |
| 第42話 | ハジマリの呼び声 | 811 |
| 第43話 | 波風の序曲 | 831 |
| 第44話 | 波風メロデー | 847 |
| 第45話 | 何をとるか、何を選ぶか | |
| 869 | | |
| 第46話 | 舞い踊る者、輝きの問い掛 | |

け

| | | |
|------|--------------|------|
| 第47話 | ダイヤさんは呼ばれたい | 883 |
| 894 | | |
| 第48話 | 赤の守り、紅の刃 | 921 |
| 第49話 | 彼女らが巡り合う時 | |
| 945 | | |
| 第50話 | 獅子の名は | 962 |
| 第51話 | 蠶靡く時 | 982 |
| 第52話 | 越えるべき壁 | 1004 |
| 第53話 | 漆黒の聖剣 | 1021 |
| 第54話 | WAVEインターバル | |
| 1046 | | |
| 第55話 | 今のAqoursを越えて | |

行け

第56話 その名のもとに

第57話 輝きの波

第58話 全力の果てに

第59話 見つめる海

第60話 A q o u r s、北の地にて

第61話 隠された想い

第62話 私たちの力

第63話 聖なる刃が光る夜

第64話 思いがけないこと

第65話 星に祈る

第66話 彼女らがいた場所

1282125512371223119911841166 11381114110210781061

第67話 ロートスの果実

第68話 ポベートールの暗躍

1315

S T A G E 2 . 5 天地繋ぐ光

第零節 プロログ

第一節 狂者の再来

第二節 囚われの人

第三節 奇機械怪獣

第四節 想いを束ね

第五節 新世代の力

S T A G E 3 闇夜を照らす輝きII

第69話 決戦の地へ

第70話 紺碧の世界

14821466 143414101390137313521341 1301

| | | |
|-------------|--------------------|------|
| 第71話 | 女帝の一手 | 1495 |
| 第72話 | 悪魔(クグツ)の巡る先 | |
| 1511 | | |
| 第73話 | 逆襲の融合大魔王獣 | |
| 1524 | | |
| 第74話 | 決意の叫び | 1549 |
| 第75話 | 眩耀の行末 | 1576 |
| 第76話 | 終幕の歌声 | 1606 |
| STAGE FINAL | 虹を越えて | |
| 第I章 | — これまでの道、これからの道 — | 1618 |
| 第II章 | — 迫る困難 — | 1640 |
| 第III章 | — 踏み出すために — | 1660 |
| 第IV章 | — Aqours、故郷から離れて — | 1680 |
| 第V章 | — 水の都、花の都 — | 1698 |
| 第VI章 | — 繫いだ想いは — | 1722 |
| 第VII章 | — 海上巨人対決 — | 1737 |
| 第VIII章 | — もう一度輝こう — | 1755 |
| 第IX章 | — 魔導士の企み — | 1776 |
| 第X章 | — オープの輝き — | 1799 |
| 最終章 | — 宇宙(ソラ)の彼方で輝く光 — | 1819 |

STAGE 1 取り戻せ光

第1話 オープの光

「はあ、はあ、はあ……!」

息遣い、そしてアスファルトを蹴る音が2つ。しかし、そんな小さな音はすぐにかき消されてしまう。鳴り響くサイレンや車、爆発、そして人々の悲鳴によって。

(ここを嗅ぎつけられた……?でも何で……!?)

少年は走りながらも消えない疑問と格闘していた。しかし、手を引いた少女が転んだことでその疑問はプツリと消えてしまう。

「大丈夫?さあ、行くよ!!」

少女を起こしてケガの確認をするが目立った外傷はない。それを確認した少年は再び走り出した。彼らは只走っているわけではない。

逃げているのだ。

——顔の中央部と胸に2つの光が怪しく輝く、角を持った怪物がこちらに迫ってきているのだから。

すぐ近くで聞こえる爆発音と、地面を揺らす足音。

そして昼間まで美しかった景色も、今は全てオレンジと黒に塗り潰されてしまった。いくつもの建物が崩壊し、炎があふれ出している。地獄の具現化……そう言ってもいい

のかもしれない。

(これじゃあ、まるで……)

すると、怪物の火球がすぐ後ろで爆発した。その衝撃に飛ばされる2人。ここまで繁栄を築いてきた彼らも、あの巨大な怪物には無力だったのだ。戦闘機もなす術なく簡単に落とされていく。

「はあ……はあ……この……!!」

少年は少女を庇うようにうして抱き込む。自分の無力さをここでも悔いる。

すると、空から光を放った巨人が舞い降りたのだ。巨人は少年を護るかのように立ち上がり、後ろを確認する。

そして少年らの安全を確認すると前方の怪物へと走り出した。2体がぶつかり合い、地面が揺れ、空気が揺れた。その最中に少年が耳にしたのは、一定間隔で鳴り続ける音。しかしそれが決して良いものでないことは、こちらにも明らかだった。

「な、なんだ……」

こちらの体力も限界だ。その証拠に声がかまく出せないし、目の前がクラクラする。しかし、少年が抱えている少女はまだ生きています。彼女だけでも助けなければ、自分が

ここまで来た意味がない。

「が、がん……ばれ……」

少女に声を発し、再び立ち上がるだけでも息が上がる。おまけに巨人と怪物のぶつかり合いのせいで上手く歩けない。それでも……と少年は歩く。もう誰も失いたくないと言ったのはいつだっただろうか。それを夢物語だ理想だと言われたのは……。

直後、巨人と対決する怪物は顔の付近にエネルギーを集中させ火の玉を放った。それが通つていくたびに周りの建物が鉛細工のように溶けていく。巨人は右手に持った巨大な剣でその攻撃を防ぐが、その防いだことによつて起きた爆発が彼らを襲った。

「くそっ……抜けない……」

爆風が収まり、塵が舞う。先ほどの爆発のせいで建設物が崩れ、少年は倒れてきた鉄骨の一部に足を挟まれたのだ。幸い、少女の方は無事であり少年の前方で伏せているだけであった。すると、彼女は起き上がり少年を助けようとする。

しかし

「い、行け……」

彼は逃げるようにと喉を震わせた。自分を助ける時間があるのなら、その時間を使って逃げた方が助かる確率も高くなる。

「で、でも……」

「はやくっ!!」

彼の剣幕に少女は言われた通り走り出した。目の前の小さい背中が、より小さくなつていく。それを見て笑う少年。いつか、勇気と無謀は違ふと誰かに言われたことをまた思い出した。

「そうだなあ……お前の言う通りかもな……ははっ」

彼の目がゆつくりと閉じられると同時に、巨人は決着をつけるべく空に大きく円を描く。それが何重にも重なり、束となり、剣へと集約する。巨人は光り輝く剣を怪物に向けて、虹色の熱線が一直線に怪物へと発射された。膨大な熱量が怪物に直撃。撃ち終わると一瞬の閃光……。そして次の瞬間、はじけるように大爆発と轟音がこの場を支配した。

怪物の姿がないことを確認した巨人は剣にもたれかかるようにして膝をつく。数少ない活動エネルギーが底を尽きようとしているのだ。光となり、この星で活動する姿に変わろうとした瞬間……巨人の目に入ったのは意識を失った少年の姿だった。彼を見た巨人は……。

くく

「うわああっ!？」

天井から大きな物音が朝の室内に響いた。それは下の一室にいる明るいブラウン系の短い髪を持った高海家の次女、高海美渡にも聞こえていた。

「なに?！」

「多分千歌ちゃんだと思うけど……」

それに答えるのは前髪が控えめな黒髪ロングでおっとりした雰囲気の高海家の長女である高海志満だ。

「まだやってんの。お客さんに迷惑だよ」

「言っただけだね」

彼女の口から「お客さん」と言う言葉が出てくるのは、家が十千万という旅館を経営しているからだ。

「美渡さん、何かあったんですか?！」

そう言つて部屋に入つてくる16歳くらいの男子。

「カズ、ちよつくら上のバカ千歌に言つてやつてよ。こんな田舎じゃ無理だつて」

カズ……と呼ばれた男は何かを察し、苦笑しながらわかりましたとだけ伝えて二階へとぼつていく。

「大丈夫？」

「へーき、へーきもう一度。どう？」

おもいつきり尻もちをついたオレンジ髪の子が高海千歌。対してベッドに座つて彼女のポーズとム^u sとを比較しているのは灰色で癖毛の子が渡辺曜である。

「おい、おい千歌ー？」

すると外から先ほどの男子の声が聞こえた。

「カズくんどうしたの？」

「どうしたつて……下まで聞こえてたぞ？志満さんや美渡さんに迷惑かけんなよ」

カズため息を吐きながらも、千歌に忠告した。

「カズくんおはヨーソロー！」

「曜もおはよう。で……」

曜にはにこやかに返す。そして改めて注意をしようとする前に、千歌が先を越して

いってしまおう。

「カズくん見て、私部活立ち上げるの！」

と白いパネルを見せてきて笑う千歌。部活とはスクールアイドル部のことだろう。なんでも、春休み中に東京の秋葉原に行つてスクールアイドル『μ's』とやらを見て引き込まれたらしい。その時から彼女はスクールアイドルのとりこになつたようだ。

「部員は？」

「今のトコだれも。曜ちゃんが水泳部じゃなかったら誘つてたのになあ……」

カズの問いに千歌は落ち込み調子で言った。すると曜はかねてからの疑問を千歌へと投げる。

「でも、今までどんな部活にも興味ないって言つてたのに、どうしてスクールアイドルを？」

しかし、彼女は笑うだけで特に何かを言うことはなかった。すると千歌と曜は重要なことを思い出し、壁に掛けてある時計に目を向けた。時刻は7時45分を少し回つたところだ。つまり、もうすぐバスが来る。カズはすでにいない。先に行つたのだ。

「もうこんなじかーん!？」

2人は慌てながらも玄関へと急ぐ。表玄関は使うなど言われるが謝罪してその場は切り抜けた。外に出るとちょうどバスが目の前を通り過ぎる。

「ちよつと待って!？」

「の、乗りまくす!？」

こうして新学期、そして彼と彼女たちの物語は慌ただしく始まっていくのだった。

「はあ、間に合ったらつてなんで言ってくれないのさ!」

「なんか話しづらかった……から?」

「嘘っ!」

「まあ間に合ったわけだし、カズくんも悪気があつたわけじゃ……いやあるか」

「おいー！」

と、乗客の少ないバスの後ろの席を確保する3人。こうやってからかい合うのも、もう3年くらい経つのだろうか。そんなことをポーッと考えるカズの後ろで千歌はチラシを取り出した。その内容は勿論スクールアイドル部の勧誘へのものだ。

「そんなものまで作ってたんだけだ」

千歌の楽しみという感情の反面、曜は何かを危惧している。しかし

「よっしゃ、今日は千歌ちゃんのために一肌脱ぎますかー！」

と言って千歌の勧誘に協力しようだ。

「頑張れよ〜」

変わってカズは協力する気は微塵もない様子。

「え〜、カズくんも手伝ってよ〜！」

「カズくんもお願い！どうせ、教室だとやることないでしょ？」

「な、曜お前な……わかったよ。チラシ配りだけな」

「やったー！」

痛い事実を突かれたため、了承する。そして手伝いの初仕事として

「あとスクールアイドル部、字間違ってるぞ」

とだけ伝える。後ろから千歌の「ええ!？」と言う声と、曜の笑い声が聞こえるが、カ

ズはそんなことお構いなしに窓の外から見える淡島や富士山、そしてきれいな海を眺めた。

俺、あかつきかずま 暁一真には記憶がない。今から3年前に病院で目覚めた時にはもう、何も覚えてはいなかった。この暁一真と言う名前は、その時着ていた服に付けてあったネームプレートからだ。それからいろいろあつて、千歌の家に拾われる形になったのだ。

(にしても……3年もあれば傷跡なんか残らないものなんだな)

流れていく景色の中、俺はそんなことをふと考えた。

俺が記憶を失ったと思われる3年前。人類は未知の脅威と対峙した。全人類の技術でも倒すことのできない脅威……それは怪獣と呼ばれた。多くの被害をだした怪獣はその後現れることはなかったが、この出来事を機に防衛隊の設立も検討された……とか何とか。

3年前に現れた怪獣の名称は、太平風土記に書かれていたものと特徴が一致することから“マガゼットン”と呼ばれた。そう言われれば太平風土記はその後の話を聞か

いが、一体どこに行つたのだろうか。

これも忘れてはいけませんが、時を同じくして怪獣と共に現れた光の巨人。それを超人的な力で倒したことからウルトラマンと呼称されている。しかし彼も3年前を最後に姿を現していない。まあ、現さない方が平和でいいのだが。

何はともあれ、記憶を失つた3年前とその事件には何らかの関係はあるとみているが、俺の記憶が戻るそぶりは見えないし、俺の両親や知り合いも見つからないんだ。それに……

「……………くん、……………ズくん」

「カズくん？ 学校、もう着くよ？」

「あ、ああ悪い」

そんなこんなで浦の星学院近くのバス停に到着する。ここは以前女子高であったが、生徒数の減少で共学となったのだ。バスを降りると、あたたかな太陽の光に身を照らされ、潮の匂いが鼻孔をくすぐる。そして咲き誇る桜の存在が、新学期の始まりであることを意識させてくれた。

桜咲き誇る中始まった部活への勧誘はどこも熱心に行っていた。1人でも多くの

数を獲得したいがために、どここの部活も勧誘に熱が入っているのだ。それはスクールアイドル部（仮）の千歌、そして曜も同じだ。一真だつて笑顔でチラシを配ろうとしている。しかし、熱心な姿勢と新入生の興味は別であることから、誰も見てくれないし、チラシももらつてくれない。

その後も……

「でもマルは……」

栗色の長髪に黄色いカーデイガンを着た子にスカウトしたり……

「ピギヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!?!!」

彼女の後ろにいた、興味ありげな赤い髪をツインテールにした子にもスカウトするが、彼女はなんと究極の人見知りらかつたり……

「この体はあくまで仮の姿……」

さらにさらに自身を墮天使ヨハネと名乗る人物も出てきて……

今年は随分と個性的な生徒が入学してきて楽しそうだと感じる一真。もちろん、2年生の2人も個性的だが。

そしてしまいには生徒会長黒澤ダイヤと千歌が生徒会室でぶつかり合う始末……。

「私が生徒会長である限り、スクールアイドル活動は認めないからです!!」

ダイヤはその黒い長髪を風に吹かれながら宣言する。なんとこれは……新学期早々

疲れる始まり方だ。

（ ）

放課後、一眞たちは連絡船に乗って淡島へと向かう。淡島に住んでいる友人に贈り物を届けるためだ。連絡船の中では、先ほどのダイヤの言葉に元気をなくしている千歌が不思議そうにあることを呟いたのだった。

「でもどうしてスクールアイドルはダメ……なんて言うんだろう」

「あれはどう見ても「……嫌い、みたい」

一眞の推測よりも曜の事実が先を越して放たれた。以前クラスの人物が創設したいと言った時もダイヤは断つたらしい。

「でもほんと、なんでダメなんだろうな……」

一眞は空を見上げて言った。しかし考えても彼女の真意は見えないままである。

そうこうしているうちに淡島へ着くと、一行はダイビングショップに向かった。

「遅かったね。今日は入学式だけでしょ？あ、今日はカズも来たんだ。珍しいね」

青いポニーテールを揺らした子は振り向きながら言う。

「それがいろいろあつて……」

「お久しぶりです。果南さん。ダイビングショップ、お疲れ様です」

曜や一眞はあいさつする。

「カズ固いよ。敬語はナシって言ったじゃん」

「いや、やっぱそんなわけにはいかないですよ。先輩ですし……」

「ハグ、するよ？」

「うっ!？」

一眞は基本年上にたいしては敬語で接している。しかし、果南はどうやらそれが嫌なようでタメで話せと要求してくる。断るとハグされるのだが、千歌や曜にニヤニヤされる（以前された）のは嫌なので一眞は敬語を辞めるしかない。

「わ、わかったよ。これでいいだろ？ で本題は、千歌」

「はい、回覧板とお母さんから」

「ここに来たのは回覧板と大量のミカンを果南に届けに来たのだ。」

「新学期から学校これそう？」

曜は果南に問う。なんでも彼女の家はダイビングショップを経営しているわけなの

だが、果南の父親がケガをしてしまい、彼女が手伝わなければいけないという状況だ。そのため今は学校を休学している。

「果南ちゃんも誘いたかったな〜」

千歌が残念そうに言うが、果南は何の話か分からず聞き返す。

「千歌はスクールアイドルを始めるから、その部員についてこと」

一眞の言葉に果南の手が一瞬止まる。が、何事もなかったかのように彼女はスクールアイドルへの加入は拒むのだった。

すると、遠くからプロペラ音と小さな点が段々と近づいてくる。そして一眞たちの頭上を何事もなく通り過ぎていく。

「こんなところに何の用だ……?」

「なんだろうね……」

「小原家でしょ」

と果南は言った。

その後一眞は千歌よりもはやく十千万へと戻り、自分の部屋であるものを見つめていた。

目覚めた時、記憶のない俺が唯一持っていたものだ。それは謎の銀の全体、中央部に青い円の形がデザインされたホルダーらしきものだ。しかも中身にはカードが入っていた。そのうちの何枚かは白紙同然に何も描かれてはいない。しかし、とある2枚だけは描かれていた。

赤と銀色の体を持った者と、紫や赤、そして金のプロテクターのようなものをつけた者がまるで何かを包むようなポーズをしているというデザインだ。その2つに共通しているのは瞼や瞳が見られないが、まばゆい光を輝かせている目と胸で光る青い光である。何やら文字が書かれているが明らかに地球の文字ではない。

これが俺の記憶に関係があるのだろうか、何をもってこれを持ち歩いていたのだろうか。

「なんなんだこれは……」

すると、どこからともなく巨大な地響きと共に何か空から降ってきた。

「な、なんだ……!?!」

一眞は窓から顔を出して外を見る。するとそこには、まるで虫のような触覚と鋭い角をはやし、腕には鋭利なかぎ爪をもった巨大な生物。その雰囲気はどこか3年前と似ている。

「……怪獣、だよな」

一眞は急いで外へと飛び出した。そして砂浜まで駆け出すと、そこには制服のままずぶ濡れになった千歌とバスタオルを被ったピンク髪の少女がいた。彼女らも突然現れた怪獣に恐怖と困惑を抱いている。

「おおい、千歌！」

「カズくん!?!」

「ケガはないみたいだな……と、その人も」

「あ、はい。私も大丈夫です」

2人が無事であることを確認した一眞は千歌にその少女を連れて志満さんたちにも伝えて逃げろと言い、一目散に怪獣がいる方向へと駆け出して行った。

「ちよつと、カズくんは!?!」

「俺は逃げ遅れた人がいないか見てくる！」

その後の千歌の言葉は聞かずに、走り出していつてしまった。

一方、別の場所からは蹂躪する怪獣を見ながら呟く少女の姿があった。

「いるんでしょう？ ウルトラマン。早く出てきなさい」

彼女の手には、禍々しい色で輝くリングの下部に持ち手が付けられた謎のアイテムが

握られていた。

一眞は逃げ遅れた人を確認するため……と言ったが半分は嘘である。その半分というのは、無意識にあの怪獣のもとに行つて止めなければという自分でもわからない感情に動かされていることだ。その近くまで行くと怪獣の行動見た一眞は足を止める。

「なんだ、あの怪獣……尻尾を地面に刺してんのか……？」

一眞は、怪獣の取つている行動に疑念を抱いていた。破壊するわけでもなく、地面に尻尾を刺しているだけだ。一体何の目的があつて行動しているのだろうか。すると、尻尾を地面から抜いた怪獣は口から火球を吐いて街の方に放つた。このままでは、多くの被害が出てしまう。

「行動が謎なんだよおおお!!」

怪獣に愚痴りつつ、再度駆けだした。

「おお、おばあちゃん、大丈夫ですか?」

たくさんさんの逃げていく人々。その中で転びそうなおばあさん助け、近くの若い人に預ける一眞。その時、ここまで持ち歩いていたホルダーを腰の右側へとつける。

「これ付けられんのかよ……」

さらに走っていくと怪獣は、こちらに顔を向けた。

「あ、やば……」

その怪獣はどんどん近づいてくる。そして終いにはまたもや火球を吐いてくるのだった。爆発し、建物の一部が崩壊する。一眞は下敷きになることこそなかったものの、崩壊したコンクリートなどに囲まれ出られなくなってしまった。

「ぐ……んんん……ダメか……どうすれば……」

あの怪獣を止めたいのに、自分には何にも力がないことを痛感する。そう考えるだけで、拳に自然と力が入る。すると、左手に違和感を感じ、視線を移すとそこには青いリングの左右に羽のようなパーツ、そして下部には持ち手がついたアイテムが握られていた。

「え、なんだこれ……」

自分は以前にもこれを握ったことがあるように手に馴染むそれを見つめていると、ホルダーが光り始めた。不思議に思っただけの2枚のカードを取り出す。するとその2枚が光り輝き、宙に浮いた。

「……なんだ」

すると2枚は一眞の周りをグルグルと周りはじめ、リングの中心へと通っていく。

《ウルトラマン》

「ええ!？」

なぞの声が響き驚愕する一眞。しかしそれは止まることなく次のカードも通つていく。

《ウルトラマンティガ》

青、黄色の順に発光し、半分が青、半分は黄色へとリングが発光する。そして一眞の左腕を無理やり動かすようにして天高くへと掲げた。すると左右の翼のようなパーツが開き、青い輪っか状の光が一眞の胸へと入り込んだ。一瞬、ノイズがかった光景が頭の中へ広がる。数多の怪獣を前にして戦う戦士の後ろ姿。そして左右に立つカードに描かれていたのと似たような戦士たちの姿。

自分の体の変化を覚えた一眞。ここで死ぬわけにもいかない。そして千歌や曜たちが暮らすこの街をこれ以上破壊されないために、彼は覚悟を決めた。

「うう……うおおおおお!!!」

彼は光に包まれ巨大化していくのだった。

《ウルトラマンオーブ スペシウムゼペリオン》

怪獣の目の前に光の柱が突き出てくる。そのまばゆい光は怪獣はおろか、逃げ惑う人々にさえもまぶしいものであった。光がやむとそこには、赤と銀の身体に紫のラインがはしり、胸に金のプロテクターを付けた戦士が立っていたのだ。その姿は3年前に怪獣と共に現れた光の巨人、ウルトラマンと酷似している。

現れたその巨人の姿に、非難していた人々や千歌たちも見上げていた。

「う、これが俺……」

自身が変わったことに驚きを隠せない一真は、腕や脚、目の前に映るものを見ている。背が伸びたとか冗談が言えないくらい大きくなっているし、何より地面が柔らかいのだ。まるで砂の上を歩いているかのように。

「■■■■ ツーロー!!」

すると怪獣は、使い古されたキャスターのような、ドリルで削り取られるような不快な咆哮を轟かせ、こちらに向かってきたのだった。

第2話 輝きの輪

宇宙悪魔と巨人が激突している中、木々の生い茂る中から見ている影が2つあった。「出てきたじゃないか、ウルトラマン。いや、ウルトラマンオーブって言った方がいいかな」

「……」

男は禍々しく輝くリングを持った少女の後ろへと立つ。しかし少女は無反応である。

「ダークリングもうまく使えているようだし、僕が来る必要はなかったね」

「……何の用？」

「君がうまく扱えていなかったら僕が引き継いでやろうかと思つてね」

男はそう言い、近くの木に体を預ける。少女は顔色一つ変えず、男を見るとすぐさま目の前で行われている戦いに目を移した。

「怒ったのかい？ だったら謝るよ。まあ、君は怒っても顔には出さないだろうけど

……」

冗談で言っているのかはわからないが、男は少女に再度近付いて彼女の頬を突ついたり、髪を触り始めた。

「…………やめて」

その言葉にすぐさま手を離す男。

「おや、これは失礼。髪は女の命……とはこの星の言葉だったね。まあ髪を触られてうれしい奴なんてそうそういないけど……。それより、ベゼルブは本来の目的を果たしたんだからここで戻してもいいんじゃないか？」

「ダメ。ウルトラマンはここで倒す」

これまで抑揚のない話し方だったのに対し、その言葉にはとある感情が込められているように感じられる。その姿に男はフツと笑うと彼女の元を後にする。

「うまくやりなよ、スピカ。僕は先に戻ってる」

彼は歩きながら、オーブのことを考える。

「君は希望を運ぶ光か、それとも絶望を運んでくる闇……かな？」

(……で止める……！)

一真／ウルトラマンオーブ スペシウムゼペリオンは迫りくるベゼルブの体に掴みかかり、押し戻すことに成功する。

「■■■■■■■■ー■■■■■■■■！！」

再度迫りくる突進には手を使って受け流す。すると彼の脳裏にノイズがかかりながらもとあるビジョンが浮かび上がる。

(うう……なんだよ……これっ!?)

ひとつは腕を十字に組んで光子熱線を放つ姿。もうひとつは丸鋸のようなものを投げる姿だった。

一真はそのビジョンの1つに従い、腕を十字に組んだ。すると腕からビジョンで見た通り光線が放たれた。しかしその反動によって制御が利かず、あらぬ方向へと飛ばしてしまう。

(ちよっつ、うう、なんだ!?)

急いで腕を離すことで光線の発射を中止させる。しかし、そんな隙を見せてしまった事をベゼルブが悠長に待つてくれるわけもなく、両腕の鎌で斬りかかってきた。

左の鎌は胸のO字型の水晶付近を抉り斬られれ苦悶の声を漏らすオーブ。

(痛ってえ……)

ジワリと胸中を駆ける痛みを堪えながら、オーブは走り出した。

「シユアツ!」

飛び上がりからのチョップ、左ストレート、最後に横蹴りを食らわせた。チャンスとオーブは近付くが、ベゼルブは顎の部分にエネルギーを凝縮させ、火球として放った。

戦闘の素人、ましてや火球を放つ相手と叩くのが初めての彼が咄嗟によけられる筈もなく、もろに食らってしまふ。

「ウアアアッ!!」

オーブは吹き飛ばされ、そのまま近くの建造物へと倒れていく。建物は紙で作られているかのようにペしやんこになる。するとオーブの胸の水晶は青から赤へと変わり点滅を始めた。立ち上がった一眞は体から力が抜けていくのを感じる。

(なんだ力が……)

加えて体から半透明の巨人が2体、オーブの体からよろめきながら出てくる。

しかしここで一眞が倒れれば、あの怪獣はまた街を破壊するだろう。そうなれば3年前と同じ、それよりひどい事態になる。それだけは避けなくてはならない。まだ彼女は何も始めてない……このまま終わらすわけにはいかないのだと、一眞は力を入れ再度、地面を思いつきり蹴った。

(……んのおおおっ!!)

その彼の意志は体をめぐる赤のラインを光らせ、ベゼルブをパンチひとつでいとも簡単に飛ばせるほどの怪力を発揮させる。地面に伏し、痛みでのた打ち回るベゼルブの尻尾を掴みジャイアントスイングを決めた。空へと放り投げられたベゼルブはそこで羽を展開しブレーキをかけ、そのまま空から突進する。

(真正面なら狙いやすい……)

オーブは両腕を水平に広げ、右腕を頭の横まで持つてくる。すると手にはエネルギーを高速回転させた光輪が出現。オーブは迫りくるベゼルブに向かって投擲した。

紫の帯を描いて飛んだ光輪は、ベゼルブの頭から尻尾までを綺麗に切り裂いた。そして2つの半身は地上へ落下しながら大きな爆発を起こすのだった。

(おわった……よな……)

爆発を見届け、下の方で微かに聞こえる歓声を聞きながらオーブは光に包まれ消えていくのだった。

「……役立たず。けど本来の目的は果たせた」

先の爆発から出た光をダークリングに集めると、それはベゼルブが描かれたカードになった。それを回収したスピカは毒づきながらも、踵を返すのだった。

くく

翌日、テレビでは昨日の怪獣とウルトラマンの情報で持ち切りだった。3年前の来訪

だとか、姿が違うだとか、どこに消えたのかだとかずつと聞こえてきている。ネットにも昨日の戦闘を動画に撮って投稿しているアカウントもあり、世間がその波に吞まれているのだと感じた。それはいつも登校する2人も同じことで

「カズくんも見たんでしょ？ ウルトラマン！」

「ま、まあな……」

「どうだった!？」

「デカかったよ。……に、にしても大惨事にならなくてよかったな」

逃げ遅れた人を助けに行ったのだから、間近で見られたのだろうか？　と言う問いを適当に誤魔化す。

「カズくん、ホントは見えないんでしょく？」

「嘘つかなくても私も千歌ちゃんも何も言わないって」

ホントは見えないと言う千歌は正解だ。しかしそれは自分がウルトラマンだったからですとは到底言えるはずもなかった。

「曜もスクールアイドル部入るのか？」

バスの中では昨日のこと、そして今朝一真がバス停にくる前に起きたことを千歌が話してくれている。昨日会った音ノ木坂の生徒のこと。そして曜が水泳部の掛け持ちと

はいえ、スクールアイドル部に入ってくれること。

「うん。千歌ちゃんと一緒に夢中で何かやりたいって思ってたし！」

「そうか。がんばれよ」

「ええ!?! カズくんはやらないの!?!」

「ああ」

「いやいやいや、そこは俺も入るかって……場面じゃないの!?!」

一眞の返答に千歌と曜はツツコミを入れる。曜が少し声を似せたのは謎だが。

「スクールアイドルって女子だけだろ? それに俺が入ったところで何すんだよ」

「それは……色々!」

千歌の具体例のない答えに一眞はため息を吐くのだった。

(まあ、こんな日常を護れるのなら、ウルトラマンも悪くない……か)

窓の外の景色に目を通す。そして後ろで話す2人の声を聞きながら、一眞は心の中で
そう思うのだった。

「ふわあ〜」

「今日は珍しく眠そうだね」

「ああ。昨日はちよつと寝れなくてな」

2年の教室で欠伸をする一真とそれを珍しがる曜。昨日寝れなかったというのは嘘である。本当は、珍しく疲労がたまりすぎたせいではなかなか起きれなかったのだ。原因は十中八九、昨日の戦闘だろう。

「で、どうだったんだ？ 千歌が音楽の教科書を引っ張り出してる件も含めて説明してくれ。気になってしょうがない」

曜が説明するには、ダイヤには認めてもらうことはできなかつたようだ。「何故」と食い下がない千歌とそれに対抗するダイヤ。もはやここで厳格なイメージは無くなりつつあるが、ここでは触れないでおこう。

「作曲？」

「うん。なんでも、ラブライブ……？ に出場するにはオリジナルの曲じゃないとダメなんだって」

カバー曲でスクールアイドルの数がいらずらに増えてしまうことを防ぐための決まりなのかもしれないが、難関にもほどがあるだと一真は感じた。

「にしても不思議だな」

「え、何が？」

首をかしげながら言う一真に、曜は問いかけてくる。一真も自分の違和感を何とか言葉にする。

「いや、生徒会長つてスクールアイドルが好きじゃないんだよな？」

「そう……だと思う」

「だったらさ、なんでスクールアイドルの最初の難関なんて知ってるんだ？」

もし嫌いだとしたら、そんな最初にあたる壁を知っているのだろうかという疑問が眞にはあった。

「さあ、調べたんじゃないかな」

「……そうかもな。具体例だせば希望者も下がってくれるだろうし」

曜の言葉に納得は行かないが頷く。どんなに考えても推測は推測。結局は本人に聞かなければ正解はわからないのだ。

「それで話を戻すと……」

「千歌が作曲をね……」

2人は千歌を見る。本人は音楽の教科書をまじまじと見つめているができるころには卒業してしまうだろう。

すると担任が教室に入ってきてHRが始まるのだった。

「はいみなさーん。ここで転校生を紹介します」

そんな先生の言葉に、クラスがざわつき始める。3年間の高校生活の中で、1度あるかないかの出来事だ。それに心躍らせない人はいないだろう。

先生の入ってきてと言う声と共にドアを潜ってきたの彼女は昨日見たとても少女に似ていた。

……………いや、同一人物であった。

「東京の音ノ木坂から転校してきました。桜内梨子です」

奇跡……………とはこの状況のことを言うのかもしれないと、そう思えた。

「スクールアイドル、やりませんか？」

その奇跡はここで巡り合い、スクールアイドルを始める為と言わんばかりのものであると、そう感じられるほどに……………。

梨子は千歌の誘いに微笑む。千歌も微笑み返す。そして

「……………いめんさい」

第3話 怪鳥大激突

ここは深夜の内浦。この時間になると家の灯りは消え、街灯だけが道を照らしているだけとなってしまふ。そしてたまに走る車の音がよく響くのだ。そんな時間に道を歩く影が一人。暁一眞。先日ウルトラマンへと変身する能力を授かった少年だ。

彼は誰もいないような森の中へと入っていく。ガサガサと風で木々や葉が揺れる音があちこちで聞こえる。そんな雰囲気の中、顔を変えずに歩く一眞はとても度胸があるのだろう。

(怖えええっ!! マジで深夜に森とか来るんじゃないやなかつたああ……)

しかし彼がここまで怖い思つて来たのにも理由があつた。

「よし、始めるか……」

彼は腕時計のタイマーをスタートさせると、左手にオーブになるためのアイテム『オーブリング』を持ち、起動させた。(オーブリングは一眞が念じれば出てきてくれるようだ。)そして右腰に付けたカードホルダーから『ウルトラマン』『ウルトラマンティガ』のカードを取り出し、オーブリングにリードさせウルトラマンオーブへと変身した。(これで変身完了。大体手順は覚えたな)

彼がやっているのはオーブの状態で何ができ、何ができないかを確かめているのだ。これは以前のように光線をしっかりと撃てないなどのミスをしなないようにするためだ。ニュース等ではあの光景は使われたいなかったからいいものの、ネットでは

「光線撃ててないですよ（笑）」

「外すな当てる」

「下手くそwwww」

「ゼ〇スカよ」

という声がありショックを受けた一真。

これ以上言われないうちに一真はこうして自分の力を試しているのだ。

ここに来る以前にも彼は変身してトレーニングなどをしたのだが、変な物音がしたよね？みたいな声がありドキッとしたのは昨日の話だ。

（だから今日は……）

オーブは念じると光り輝き、その体を縮小させたのだ。これも昨日試していたら見つけた技（？）である。

（これならそんなに迷惑はかけないだろう……）

そうして彼は体を動かしてみたり、光線技の練習を開始した。

(ここで大きく飛ぶと……飛べたあ!!)

ジャンプと飛ぶという曖昧な違いの感覚を彼はトレーニングの中で掴んでいったりもした。すると、胸の水晶が青から赤に変わり点滅を始める。そしてオーブの中から半透明な2体の戦士倒れ出てくるように姿を現した。

(ああ、この感覚は慣れそうもない……)

時間が経つにつれて点滅が早くなる水晶。しかしここで変身を解くわけにはいかない。力が抜けていき、地面に伏すオーブ。そして点滅が止み、光が消えてしまう。すると強制的に変身が解除され、一眞の姿に戻る。

「はあ……はあ……」

息を切らしながらも腕時計のタイマーを止める一眞。

「3分がいいところか……。やっぱ決まってるんだな」

そう。この姿でいられるのはどのくらいかを計っていたのだ。オーブでいられる時間は約3分。それが過ぎれば変身は解除されてしまう。そこまでに怪獣と決着をつけなければいけないのだ。

「今日はここまでだな。帰ってちよつとでも寝なきや……」

そうして一眞は十千万に戻っていくのだった。

く

「ごめんなさい」

淡々とした声色で梨子は断りの言葉を口にする。その姿はもう何言われても意思を変えないという心の現れにも見えた。

それに対抗するのはスクールアイドル部を立ち上げようとする少女、千歌だ。彼女はスクールアイドルの素晴らしさを何とか伝えようとするが、梨子は話を聞かずに去ってしまう。

しかし、千歌はへこたれず梨子に説得を試みるが彼女が了承する兆しは見えない。むしろ遠のいていつている気さえする。

「なにあれ?」

カチューシャした同級生むつは彼女の行動が不思議でたまらないらしい。

「なんでもない。いつものことだよ」

「ええ!?! いつもやってるの……?」

「まあ……ここ最近はな……」

一眞の答えでさらに困惑している様子のむつ。その姿に曜は苦笑いをするしかなかった。

放課後。中庭でダンスのステップを確認する2人。そして向いのベンチに座っている一眞。彼はスマホで気になる記事を読みながら彼女たちの話に参加している。一眞も千歌や曜に頼まれてはいるが、スクールアイドル部の申請書に名前を書いていない。ここにいるのは暇だからと言うのもあるし、なんやかんやで放っておけないというものもあるのだ。

「またダメだったの?」

「でも、あと一歩、あと一押しって感じ!」

「それはないだろ……」

千歌のポジティブ発言をすぐに否定した一眞。

「ホントだよ! だって最初は……」

千歌は梨子の「ごめんさい」という声のトーンの変化でもう一押しと言う結論になったらしい。声真似がうまくいったと一眞は思ったが、彼は言わないことにした。

「嫌がってるだろそれ……」

「私もカズくんの意見に賛成」

「えー、大丈夫だって! いざとなったら何とかするし」

またもや音楽の教科書を取り出した千歌。それだけはいけないと思いつつも、梨子

を強引に誘うわけにもいかなないと感じる一眞はため息を吐くしかなかった。

「で、カズくんは何見てるの?」

隣に座った曜は一眞に問いかけた。

「このニュース記事。曜も見たる?」

「ああこれ今朝のニュースでやってたやつだね」

スマホの記事に書いてあったのは『A国に巨大な鳥の巣!? 毒ガスで市民に外出制限か?』と言う記事だった。なんでも、A国の都市部に巨大な鳥の巣ができていて、さらに追い打ちをかけるように出てきた赤いガス。なんとそれが猛毒のガスとして市民を脅かしているのだそうだ。

「なにそれ、私は見てないよ?」

「お前は寝坊したからな。見てる暇もなかったんだろ?」

「そ、そうだけどさー」

千歌は唇を尖らせながら言う。仕方なく、千歌にもスマホを貸して見せた。

「カズくん、これって……」

「怪獣の仕業……だと思う」

「また、こつちにも来るのかな……」

曜は不安げな様子だ。しかし千歌は異なっており

「大丈夫だよ。怪獣が出てきたらまたウルトラマンがやつつけてくれる！」
と明るく言い放った。

「そ、そうだよね」

曜は不安を脱ぎ払えないようだが、大丈夫だと自分に言い聞かせているようにも感じた。

(ここの言われちゃ、こつちも頑張らなきゃな)

一真は自分を振るい立たせたのだった。

「そうだ、曜ちゃんの方は？」

千歌に聞かれ曜は元氣よく「描いてきた」と答えた。曜は制服が大好きなので、スクールアイドルの衣装を担当してもらうことになっているのだ。場所は変わり教室で、一真たちは曜の描いてきた制服案を見ているのだが……

「どう？」

「やっぱ絵上手いな……」

「でしょ！」

「カズくん、デザイン。デザインの方見て」

千歌の言う通り、デザインにも目を通す。しかしそれはアイドルと言うより車掌であつた。

「スカートとかは無いの?」

アイドルっぽいのは? と遠回しに言う千歌。しかし彼女は警官の制服を出してきた。

「可愛いのはないのか?」

一真が言うのと曜はスケッチブックを捲った。そこに書かれていたのはまるで軍人のような服が描かれたイラストであつた。

「武器もつちやつた……」

「まあ世はスクールアイドル戦国時代つて言つても過言じゃないだろうし、武器を持つつてのはある意味正しいのかもしれない……ないわけないだろ! 可愛いやつだよ。」

一般視点から見た“可愛いやつだよ!”

「そうそう、もつとスクールアイドルっぽいやつ!」

「と言われると思つて、はい」

またスケッチブックを捲る。

言われるの予想してたのかよ、今までののはなんだつたんだ? ツツコミスキルを上げたかつたのか? 遊びか? 遊びなのか!?! という感情が喉まで登つてきたが、それを無言で飲み込む一真。

そこに描かれていたのは、オレンジ色のまさしくアイドルといった衣装だつた。

曜はこのイラストのような衣装を作れると言い。千歌はその言葉にやる気を刺激されたようだった。彼女たちの姿を見ながら、一眞は記事を更新させた。

「なっ……っ!?!」

するとリアルタイム記事に『軍出動！ 怪鳥が襲撃!!』と書かれたものが現れた。そのことに驚愕し声をだした一眞。それに「どうした」と2人。今の雰囲気から彼女たちを不安にさせないようにフリックして記事を消す一眞。

「アルバムが発売日がすぐ近くだったから驚いただけ」

何とか言い訳する一眞。そして唐突に思い出したかのように

「そうだ、俺図書館行つてくるから！ 生徒会室に行くんだろ？ 頑張れよ」

と言って教室を後にした。しかし彼が向かうのは当然図書館ではない。誰もいない校庭の陰に行き、オープリングを取り出した。

（行くぞ……!）

彼は覚悟を決めてオープリングを掲げた。

《ウルトラマン》

カードをリードさせると彼の左側に赤と銀の巨人ウルトラマンの幻影が現れる。

《ウルトラマンティガ》

右側には赤や銀、紫の体のウルトラマンティガの幻影。

オーブリングスイッチを押すことで羽が展開、2体のウルトラマンは一真へと重なり、各々の特徴が現れたボディを形成させた。

《ウルトラマンオーブ スペシウムゼペリオン》

学校から飛び立ったオーブ。彼は怪鳥の現れた方向へと一刻も速く向かうために翔する。

(もつと……速く!!)

彼が念じると体の紫のラインが輝き、そのスピードを何倍にも高めて飛んでいった。

軍が総出撃で怪鳥を迎え撃つが、その攻撃が効いているようには見えない。怪鳥はまるで巨大なハゲワシを思わせる姿で空を飛翔している。そして時折降ってくる白い雪のような結晶は都会へと近づくと赤い猛毒ガスに変わり、軍を苦しめていた。彼らもガスマスクをして応戦しているが、市民に配れるほどのない故、苦戦を強いられていた。

「■■■■ ツー……」

咆哮を上げながら飛ぶ始祖怪鳥テロチルス。音に敏感なのか、発砲を続ける小隊へと強大なその攻撃が当たると瞬間……

「シューアッ！」

オーブがその体を引っ張り食い止めたのだった。そのまま足と腕で投げ飛ばすが、そ

れをものともせず飛翔するテロチルス。急旋回しオーブの肩へとアタック。オーブも首元へとチョップしダメージを与える。

しかし驚くべきことにテロチルスの嘴はオーブの体を宙へと持ち上げ始めたのだ。

(コイツ……どんだけ力があるんだよ！)

抗うことなくオーブも空へと上がる。しかし、テロチルスは素早く飛んでいることから攻撃を当てるのが難しい。さらに驚くべきことはその体の頑丈さだ。どんなにダメージを与えても怯ませられていないのだ。

(スペリオン光輪でも怯まないのか……)

であればスペリオン光線も効くのか怪しいところだ。この怪獣は己の肉弾戦で勝つしかないと思いを固める一眞。

すると飛行するテロチルスの鼻から放たれたビームはオーブの体に直撃。地上へと墜落する。

「ウウウウ……」

そこから連続する嘴の攻撃に防戦一方のオーブ。この力強くタフな怪獣にやられてしまうのかと戦いを見ている人たちは不安にかられてしまう。

(なら力には力で……!!)

しかし一眞の戦意は消失などしていなかった。体の赤いラインが光輝き、オーブは強

大な怪力を発揮した。頭を持ち上げ、右ストレートを放つ。後ろに交代するテロチルスに間髪与えずに首を掴み背負い投げる。

苦悶の声を上げるテロチルスに馬の乗りになり、チョップや肘打ちを繰り出した。だがその姿勢を自慢の力で脱し、空へと逃げる。

(逃がすかよ！)

オーブも空を飛び急いで追いかける。残り時間を現す水晶“カラータイマー”もすでに点滅を始めている。早く決着をつけなければ、あの怪獣が人々を襲う範囲は拡大するだろう。いずれは日本。そして内浦にも……。それは絶対に防がなくてはならない。それが、自分がこの力を授かった意味なのだと思信じて。

(……は速さと力の応用だ……)

テロチルスの脚をしつかりと両腕で掴む。もがいて腕を離しそうになるが、踏ん張って耐えるオーブ。そして紫のラインを光らせ、その場でコマのように高速で回転を始めた。回転の遠心力を大きな力に変え、地面へと投げ飛ばす瞬間に怪力を発揮させる。

テロチルスは抵抗できずに落下していき、地面に大きな衝撃を与えながら叩きつけられる。その衝撃で地面には大きな凹みが生まれたのだった。

その凹みの中から体が再度起き上がらないことを確認したオーブは、近くの高い葉の

ようなものを取り上げて、宇宙へと持っていき処分した。

制限時間、力、全てにおいてギリギリの戦いを制したオーブは大急ぎで地球の内浦へと戻っていくのだった。

二回戦にしては強敵すぎないかと考えながら光となつて変身を解除した一真。彼は誰にも見られていないことを確認し、フラフラになりながら十千万の近くの道へと出る。これが都会だったら上手くないかなんだろうなあ……と思いつながらなんとか道を歩いていると、目の前の浜辺から自分を呼ぶ声が聞こえた。視線を映して見るとそこには千歌と転校生、梨子の姿がそこにはあった。

「どうしたんだ？　こんなところで」

一真は尋ねると千歌が答える。

「今度の日曜、梨子ちゃんと海の音を聴きに行こうって話してたんだ。だからカズくんもどうっ？」

「海の音……？　俺も？」

まったく話の见えない事柄に困惑している一真に梨子は

「高海さん、困ってるでしょ。えつと……」

「一真。暁一真。改めてよろしく」

「私は桜内梨子って言います。ってもうクラスの前で自己紹介してましたね」

「こやかに微笑む梨子。その中に千歌が入り」

「カズくん、こう言いながら付き合いはいいから大丈夫！ ね！」

「俺もいいのか？ 桜内さんだって困るだろ……」

「いえ、私は大丈夫ですよ」

「なんだかわからないが、一真は海の音とやらに興味がわき同行することを承諾するのだった。」

「テロチルス……強敵だったね。オーブもギリギリだったんじゃないかな？ よく勝てたよ」

「どうせなら倒れて欲しかった……」

「またそんなこと言って。可愛い顔が台無しじゃないか」

「……」

A国市街地。世間、否、世界中がウルトラマンオーブの活躍を称賛している中、ここテロチルスの亡骸が眠る場所で男とスピカは立っていた。オーブを称賛しているようにとれる男の感情とは真逆に、スピカは憎しみの籠ったような感情を抱いていた。そし

て続く彼の言葉には切り裂くように睨むことで、自分の感情を伝えた。彼は悪びれる様子もなく、笑い飛ばして続ける。

「まあまあ、僕らの目的はこいつじゃあない。もつと大きなもの……そうだろ？」

「そう。もつと大きな力を持つ怪獣……いえ、魔王獣」

スピカは右手に持っていたダークリングを亡骸の方向へと向けた。すると、リングの中央にどす黒い赤の粒子が集まっていき、テロチルスのカードを生成した。

「さあ、コイツで封印を解こうか。計画もさらに一歩前進だ」

「ええ……」

彼らは風の魔王獣が眠ると言われている地へと向かい出したのだった。

第4話 嵐を呼ぶ翼

時は経ち日曜日。当初の予定通りに“海の音”を聴くために海に出た一真たち。船やダイビング道具に至っては果南に協力してもらっている。

「音ノ木坂からの転校生だって」

「そうなんだよあのμ'sのだよー」

と果南に紹介する一真と彼女の転入前の学校に興奮している千歌。しかし彼女が一体なぜそこまで興奮しているのかわからない梨子。

「知らないんだ……」

「と言つても何年も前の話だしな」

「でも有名なんだよ？ カズくんだって知ってるでしょ？」

そこまで興味がない様子の一真に詰め寄る千歌。そんな2人の様子に少し不安が和らいだ梨子であった。

「カズは行かなくていいの？」

千歌と曜そして梨子が水中へ潜った後、果南はそう尋ねてきた。

「最初は一緒に行こうと思っただけどアイツら見てたら、なんだか3人だけにしておきかないって思ってたよ」

脚だけを水中にいれながら答えた。しかし彼の遠方を見据える目は、なんとなく楽しそうだと感じた果南は彼に近付き再度話しかける。

「カズ、いつもより楽しそうじゃん」

「え、俺が？ そうかな……」

「うん、昔よりも生き生きしてる」

一眞は否定しなかったが果南が言う通り、今はとても楽しい。彼女たちがスクールアイドルになろうと努力しているところを見ると、記憶のない自分も何か変われるのではないかとそう思えるのだ。だがそれを素直に言うのも恥ずかしいので一眞は沈黙を貫くのだが。

おもむろに果南は空を見上げる。すると青い色が続いている途中で、黒い雲が青空を覆い隠しているところを発見した。

「嵐がくるね……」

果南はポツリと言った。それに一眞も空を見上げてそうだねと返す。

「最近は変な天気が続くからね。ニュース観た？ 世界中で台風……それにエジプトで

雪だよ？　こんなのあり得ないってお父さんも言ってたし。また怪獣の仕業とか言われてるんだよね」

「大丈夫。ウルトラマンが何とかしてくれるよ」

そのようなニュースは一真も確認済みだ。ネットで調べると巨大な鳥を見たともいわれているが、ネット情報なので半信半疑だ。しかし、もし仮にそうなのであれば、自分が倒すと心に誓っている。

「ウルトラマンね……彼つて言っつていいのかな。なんだか、ふわふわしてるつて言うか……足元が安定してないつて言うか……まだ初心者つて感じ」

「果南は動き見ただけでわかるのか？」

果南の評価にギクツとしながら反応する一真。確かにまだ力の使い方が完全とは言い切れない。しかしそれを見抜かれてしまうとは、どんだけ動きに出ているんだと恥ずかしくなる。

「だって最初の光線だつて腰を安定させないからあんなことになるんだよ。もつと体を安定させなきゃ」

「へえ、参考にな……じゃなかった。果南は誰かのフォームとか見てたの？」

「え？」

「いやだつて、そんな誰かの動きとかに目が行くのつてそういうことやってた人じゃな

いとすぐにはわからないだろ。今のダンスの確認だって、飛び込みやつてる曜がフォーム見ているわけだし……俺の憶測でしかないけど」

すると一瞬果南は黙り込む。

「……そりゃあダイビングやつてるし、お客さんの動きも見えてあげないとね」

一真が何か言いかけた時、水面から千歌たちが飛び出したのだ。彼女たちは見事、海の音を聴くことができたのだった。その3人の笑顔、笑い声を聞いた一真は柔らかな微笑みを浮かべた。

梨子や果南と別れた後、一真たちは沼津へと出かけていた。雨が降りそうと止めたのだが、2人は構わないと聞かずにバスに乗った。先ほどのダイビングの疲れを感じさせない2人の動きに一真はぶつくさ言いながらも付いていく。ちょうど見たいものもあつたしと自分を納得させた。

「私と曜ちゃんはスクールアイドルのグッズ見てくるね！」

「そうか。俺CDみてくるわ」

といつて一時解散となった。一真がCDショップへと向かったのと反対に千歌と曜はスクールアイドル専門ショップへと向かう。彼女たちだってスクールアイドルの前

にファンでもあるのだ。

「うくん、どれにしようか悩むね〜」

「時間はいっぱいあるし、焦らず見ていこうよ」

そう話す2人は前から歩いてくる男とぶつかってしまふ。

「ああ!! すいません!!」

「ごめんなさい!」

頭を下げる2人を見つめて男は微笑む。

「大丈夫ですよ。むしろ2人の方が心配だ。ケガはないかい?」

丁寧な口調で話しかける男。見たところその姿は千歌たちと同じ年くらい。ここに

はいないが一真と同じくらしいの背丈である。

「はい……私たちは大丈夫です。ね、曜ちゃん?」

「うん。大丈夫です」

「ならよかった」

遠くの方から雷が鳴り響いてくる。音の方向に千歌たちが視線を向けると、男も彼方を見て

「荒れるな……これは」

と呟く。「変な天気だよねー」と曜も続いて言う。

「僕は好きなんですよね。こういう変な天気は退屈を紛らわしてくれますから」

しかし彼の意味が分からず千歌と曜は呆気にとられていた。

「では僕はここで」

結局男はそのまま去ってしまう。2人は顔を見合わせて何だったのだろうかと考えた。

すると頭上に大きな暗黒の渦が発生。そこからいくつもの竜巻が生まれ、ビルを破壊し吸い込んでいく。数々の悲鳴、そして逃げまとう人々。天変地異のようでまるで意思を持ったようなまさしく“悪魔の風”とでもいうのだろうか。

「千歌ちゃん逃げよう!!」

「うん……!!」

2人が逃げていると強烈な風圧に千歌は巻き上げられてしまった。

「千歌ちゃあああああん!!!」

「うわああああああああああああ!!!」

宙に浮き、絶叫する千歌。このまま空高くまで打ち上げられてしまうのかとなったその時――

「千歌、目つぶつてろよ!!」

よく耳にしている声が聞こえ、言われて通りに目をつぶる。

誰かに抱えられる感覚と、下へと重力に引つ張られる感覚がほぼ同時に千歌を襲った。彼女は絶叫するしかなかった。そしてドスンと体に重さが一瞬掛るとそれ以降は体全体を襲った風も、衝撃も起きなかった。恐る恐る目を開けると、目の前には

「カズくん!？」

「大丈夫か？」

一真が助けしてくれたのだろう。しかし今が自分がどのような状態なのかを何となく把握すると、急に恥ずかしくなり彼を叩く。今はいわゆるお姫様抱っこの状態なのだから。

「カズくん、早く降ろしてよ!!」

「なんだよ急に、せっかく助けたのに……」

彼が下におろしたタイミングで曜が走ってきた。

「千歌ちゃん、大丈夫!」

「大丈夫みたいだよ」

一真が拗ね気味で答えた。千歌は曜へと抱き着く。さつきは人が考えられないような状態に陥ったのだ。無理もない。すると目の前に猛禽類を思わせる青い羽と体を持つた怪獣が渦の中から姿を現し、巨大な咆哮を沼津の街に轟かせたのだった。

「アレが原因か……2人は早く逃げろよ!」

「え、ちよつとカズくん!」

またしても走り去っていく一眞。彼はまた名も知らぬ誰かを助けに行つたのだろう。そう思つた千歌と曜は言われた通り避難していくのだった。

一眞は誰にも見られない場所を探していると、証明写真機がふと目につく。中に入つてカーテンを閉めオーブリングをかざした。

《ウルトラマンオーブ スペシウムゼペリオン》

紫の光に包まれながら、ウルトラマンオーブは沼津の大地に立つ。獲物を見つけたかのように走り迫ってくる風の魔王獣マガバツサーにオーブは迎え撃つために構える。

ダッシュで勢いづけて飛び立ったマガバツサーの突進を受け止め、頭を持ち上げる。その顔面に左ストレートを打ち込んだ。マガバツサーも自慢の巨大な羽を振るう。風を切り裂く音がとても鋭く感じられ、羽には斬撃属性があるのだろうと察したオーブは体を逸らして避ける。

攻撃でがら空きになつたボディにキックを放ち後退させる。しかしその距離から飛び込んできたマガバツサー。体で受けないように、前方へ転がつて避ける。怪獣が振り向くより早く動き出し首元にチョップ、さらにパンチを食らわせる。

マガバツサーは怒つたのか咆哮をあげ、強力な脚力と爪を使い体を引つ掻いてくる。

この衝撃に地面へと倒れるオーブ。

(この……！)

寸でのところで足を掴みビルの方へと放り投げる。マガバツサーは危険を感じたのか、羽をはばたかせ、強烈な風を引き起こす。オーブが風で身動きができない隙に飛んで逃げようとする。

マガバツサーとオーブとの戦いを遠くから見ている千歌と曜。

「頑張れー!!」

「頑張つてウルトラマン……!」

怪獣と対決する巨人にエールを送る2人。

「彼の名前はウルトラマンオーブ」

どこからともなく現れた男はウルトラマンの本当の名前を呟いた。

「ウルトラマン……オーブ」

「アイツは地球を護るために降り立った光の戦士なんだってさ」

千歌と曜の反応を一切無視して話を続ける男。

「なんでそこまで知ってるの……あなたは誰なの?」

千歌の疑問にニヤツと笑みを浮かべながら答える。

「僕も昔と会ったことがあつてね……それで知つたんだよ。僕の名前はアオボシ……とでも名乗つておこうか」

強風が千歌たちの視界を奪う。目を開けると謎の青年アオボシの姿は消えていた。

オーブはスペリオン光輪をマガバツサーに向けて放つが、上空へと飛んだことによつて外してしまう。しかし、高速移動で光輪をキャッチし投げ返すと同時に二発目を放つた。2枚の光輪は左右の翼の根元を捉えて羽を切り裂いた。

翼を失つたマガバツサーは地面へと落下する。だがその獰猛さは失われておらず、立ち上がると羽を失つた怒りと痛さで声を上げる。

胸のカラータイマーが点滅を始めた。ここで勝負を決めるためにオーブは光線を放とうとしたその時、

——最初の光線だつて腰を安定させないからあんなことになるんだよ。

と果南の声が脳裏に響く。

オーブは右腕を上げて左腕を水平に伸ばしエネルギーを貯める。そして腰を安定させ反動でよろめかないよう構え、球体状に圧縮したエネルギーを十字に組みなおした腕

で放った。これがスペシウムゼペリオンが誇る必殺光線。その名も——
(スペリオン光線ッ!!)

光線を全身に受けたマガバツサーは青い閃光を輝かせながら、すさまじい爆音と共に砕け散ったのだった。

爆音後の静けさの中佇むオーブは空高く飛び去っていくのだった。

(なんか落ち着いたら飛び去るんでしょなんてニユースで言われたからやってみたけどこれ良いな……)

何事もなく証明写真機から出てきた一眞は、取り出し口に入っている写真を取り出した。

「なんで動いてんだよ……。てか顔半分がウルトラマンに変わってるんだが……」

これは何としても見られてはいけないとポケットにしまう一眞。するとオーブリングが光り始めて、一眞をとある場所へと導いた。

そこはあのマガバツサーの残骸である赤いクリスタルが落ちている場所であった。オーブリングを掲げるとクリスタルが砕け散り、その粒子はオーブリングを介してホルダーへと入っていった。一眞がホルダーを展開すると新たなカードがその輝きを取り戻していたのだ。赤と銀の身体にひし形のカラータイマーを持ったウルトラマンだっ

た。

「新しい力……なのか」

それよりも千歌たちが心配な一眞はすぐにホルダーにしまうと駆け出して行った。

「大丈夫か？」

「カズくんこそ大丈夫？」

「急に駆けだすんだから心配したよ」

千歌と曜はどちらも無事のようにだ。

「ウルトラマンが倒したんだろ？」

「オーブ。ウルトラマンオーブだって」

千歌がその名を出したときは一眞は驚いた。そんな正式名称を言った覚えはない。もしかして見られていたのだろうか。

「オーブ？」

「うん、アオボシ……？　さんが言ってたんだ」

「誰だそれ？」

「私たちにもわからないんだよね。突然現れて、突然消えちゃった感じだし……」

曜の言葉にアオボシとなる人物も気になったが、今は平和になったことを喜ぼうとその話は深堀しないようにしたのだった。

同時刻、ダークリングを掲げたスピカはその輪の中からマガバツサーのカードを生成した。

「……………」

カードを手に取り、無言で見つめるだけのスピカ。そこには個人的な感情はない。マガバツサーが倒されたこと。それは終わりではない。むしろ、これは始まりに過ぎないのだ。

—— 強大な力を持った卵を孵すための。

くく

「ここ旅館でしょ?」

「そう、けど千歌の家でもあるからな」

「カズくんもでしょ?」

「俺は居候なので……」

翌日、学校終わりに4人は十千万に来ていた。

なんと梨子が曲作りを手伝ってくれと言ってくれたのだ。しかし曲作りを手伝ってくれると言ってはくれたものの、詞が無いという現状のためまずは歌詞を作ることになった。そのために時間を気にせず行うことができる千歌の実家でもある十千万に来たという訳だ。

千歌は梨子に志満さんを紹介し、梨子も挨拶をする。しかし彼女の視線は近くにいる飼い犬しいたけに向けられている。目も毛でおおわれているため確認できないが、その見られている感覚に梨子は複雑な思いを抱えていたのだった。

場所は移り千歌の自室。早速作詞に取り掛かりたいところだったが、千歌は千歌で美渡さんが食べていたプリンのご立腹の様子。

千歌を煽る美渡さん。そしてヒートアップした千歌に梨子が怒っていたのを一頁を手を口に当て、笑いをこらえながら見ていた。

「初っ端から恋の歌はやめとけって」

作曲を開始したが、千歌は「Snow halationのような曲」が作りたいらしく、アイディアが出てこず何枚もの紙が床に落ちていた。

「じゃあ恋愛経験はあるの？」

「ないけど……じゃあμ'sの誰かが恋をしてたってこと？」

梨子の言葉を受け千歌はパソコンを開く。ネットに載ってようものなら一部が燃えるだろう。

「千歌ちゃんはスクールアイドルに恋してるからね」

曜は呆れながら言った。それには梨子も同意する。

「それじゃね〜」

天井を見ながら呟く一真に曜と梨子は顔を見合わず。“それだ”と。

「千歌ちゃんさっきの話聞いてた？」

「スクールアイドルにドキドキした感覚とか、ワクワクするとかそんな気持ちを書けばいいんじゃないかな」

曜の言葉を受け、白紙にペンを走らせていく千歌。その姿を見た梨子は、幼少期にピアノを弾いていた時のことを思い出したのだった。

千歌のスクールアイドルが大好きという感覚、それは自分が成長していくにつれ、段々と忘れ去っていつてしまったものなのだと感じていた梨子なのであった。

その日の夜。浜辺へと出ていた梨子を見かけた一真は声をかけたのだった。

「こんな時間に何してるんだ？」

「一真くん……ちよつと考え事をね」

「そっか……」

しばらくの沈黙の後、一真が再度口を開いた。

「始めるのか？ スクールアイドル」

「え？」

予想外の質問に彼女は一言しか出なかつた梨子。一真はそう言った訳を説明する。

「ちよつと千歌との会話が聞こえてつい……」

「盗み聞きなんて趣味悪いわよ？」

「ごめんごめん」

笑つて謝罪する一真。

作詞の後、梨子は千歌の言ったユメノトピラを再生した。そして弾くことのできなかつた記憶と向き合いながら、ピアノの鍵盤に指を置き、弾き始めた。それを聴いた千歌に再度誘われたのだ。スクールアイドルをやってみなかと。

しかしここでピアノを諦める訳には行かないと答える梨子に、千歌は優しく

やってみて笑顔になれたら、変われたらまたピアノを弾けばいい。そんな思いでやるのは失礼だと拒否する梨子に千歌は続ける。スクールアイドルが梨子の力になれたのならそれが嬉しいのだと。そして――

「みんなを笑顔にするのが……スクールアイドルだ……って」

彼女が言ったことに頷き一真は言った。

「アイツらしいな。千歌の言うように」何か変わるかもしれない……俺もそう思えるんだ」

何故彼もそう思つてのか……疑問に思つた梨子は一真に尋ねた。

「俺……記憶がないんだ。ここ3年間より以前の記憶が。だから自分が本当は何者なのか、どこで生まれてどこで育つたのか、何もわからないんだ。でもあれを見ると、こんな空つぼの自分でも何か掴めるんじゃないか、変わるんじゃないかって……そう思うんだ」

記憶がない空つぼであるが、それでも彼の月に照らされた横顔は悲壮の表情ではなかった。希望溢れると言つた表情で海を見つめていた。そんな彼を見た梨子は、先ほどの千歌とのやり取りを思い出す。

届かない手を伸ばしてでも掴もうとする千歌。彼女となら、またピアノが弾けるのかもしれない。変わるのかも知れない。自分も踏み出さなくては。そう思い掴んだ手

は簡単には途切れたりはしないだろう。

千歌によつて己が変わるために新たな一歩を踏み出した梨子。そして一真。

——ここに新たな絆の輪が結ばれたのだつた。

第5話 最初の関門

早朝の浜辺。まだ冷たい潮風が頬を掠りながら吹いているこの時間帯に、ステップの確認をしている千歌と曜、そして梨子。部としては承認されてはいないものの、こうやって着実に動き始めていた。動きの確認のためのスマホ、そしてリズムを取るためのスマホと二台を使つての練習。しかし彼女たちの動きを捉えているのはスマホのカメラだけではなかった。

「なんで俺も……」

暁一真その人である。早朝になんとなく家から連れ出された彼は、ランニングや柔軟なども手伝い今は動きの確認をするために彼女たちの前に座っている。

「はいストツプ〜」

一真の声で動きを中断した彼女たちは、録画した動画を再生した。

「う〜ん、ここの蹴り上げとここの動きがまだ弱いかな」

曜はさすが全員の問題点を見つけ出していく。

「さすがね」

「高飛び込みやってたからフォームの確認は得意なんだ」

梨子の賞賛に曜はそう答えた。そういえば、前にこんな話を誰かとしたような……とおぼろげな記憶をかき分けて探す一真。

(何か違和感を感じていたのは確かなんだけどな……誰だっけな)

「リズムはどうだった？」

「千歌が遅れてるくらいじゃないか？ てかなんで俺も手伝ってるんだよ」

文句を言いながらも放っておけない一真を見て微笑む曜と梨子。指摘された千歌は頭を抱えながら上を見た。

プロペラの回転する音が段々と近づいてくる。ピンクと白のカラーのヘリが頭上を飛んでいるのだ。

「小原家のヘリだね。淡島にあるホテルを経営してるんだよ」

梨子は小原家のことを知らないようなので、曜が簡単に説明してくれた。詳しいことは一真も知らず、「すっげー金持ち」ぐらいにしか考えていない。

「新しい理事長もその人らしいよ」

「へえ」

千歌と一真の声が被る。一真は抜けてるところがあるので、このようにしつかり話を聞いてないことが稀にあるのだ。

言っているうちにヘリは旋回し高度を下げてきている。まるでこちらに向かってき

ているようだ。

「こつちに来てない?」

「気のせいよ」

認めたくない現実からそのような言葉が出てきていたのかもしれないが、非情にもへりは頭上を通過。そのせいで音はプロペラのローター音しか聞こえなくなり、巻き上げられた砂によつて視界も遮られてしまった。4人は大騒ぎだ。

「なんだっ!?!」

珍しく素つ頓狂な声を出した一真。この手の轟音にはなんだか慣れない。

へりが目の前でホバリングすると、搭乗口のドアが開かれる。

「チャオ〜!」

金髪のハーフ系の少女がそこには乗っていたのだった。制服は浦の星のもの。そしてリボンを見る限り緑色であるので3年生だろう。

場所は変わり浦の星。理事長室に通された一行は並んで立っている。しかし一真は

理事長室に入ることが初めてなので、後ろに飾られた品を見ているというなんとも自由な行動をとっていた。

「え、新理事長？」

「Yes! でもあんまり気にしないでマリイって呼んでほしいな!」

そう。目の前に立ち、今朝へりに乗っていた少女、小原鞠莉が新理事長だというのだ。そのことを聞いた一真はすぐさま3人と同じく並んだ。

「すいません。勝手なことをしてしまつて……」

「だからそんなに気にしないでつて言つてるでしょ?」

「あの、新理事ちよ……「マリイだよ!」

どうも彼女のペースに乗せられてしまう。そして千歌は困りながら彼女のリクエスト通り、マリイと呼ぶと快く話を聞いてくれた。

(また敬語ダメな人ですか……俺苦手なんだよな)

果南に続く敬語ダメ系上級生の現れに一真は内心困っていた。

「その制服は?」

「変かな〜ちゃんとリボンも3年生のしたんだけど」

千歌の問いにリボンなどを触り、どこか変かと確認してくる。しかし千歌が聞きたいのはそんなことではないのだ。

「そうじゃなくてですね、理事長ですよね？ 生徒じゃなくて？」

「生徒謙理事長。Curry&牛丼みたいなものね！」

なんと彼女、生徒と理事長を兼任しているときた。本来ならばあり得ることではない。それをなんだかよくわからない例えで茶化されているようだ。梨子も同意見のよう。「わからないのか」と鞠莉に問われている。

「わかりませんわ！」

そこに割り込んできた声。梨子や一真はピンと来ていないようだったが、鞠莉や千歌、そして曜にはなじみ深い声であった。

「生徒会長!？」

4人はダイヤがここに現れたことに驚いているが、鞠莉は彼女を見るや否やすぐに抱き着いたのだ。「久しぶり」という声も聞こえることから彼女たちは昔馴染みなのだろう。久しぶりに会った親戚のおじさんのようなムーブをかましてくる鞠莉に、ダイヤは「触るな」と拒否してくる。

「でも胸は相変わらずね〜」

すると鞠莉はダイヤの胸を触ってきたのだった。さすがにダイヤも声を荒げる。しかし恥ずかしいのか凶星なのか、声がだんだん小さくなっていくという状況を、一真は曜に目を覆われたことで見ることができなかつた。

「おい、なんだよ！ な、なんだよ囉！」

「ごめん、咄嗟だったからつい……」

曜は手を合わせて謝罪してきた。一眞はその一部始終を見ることができなかったが声はぼつちり聴いてしまったので、何があったのかは大体予想できる。

(いやでもこれ言ったら袋叩きだろ……イワンデオコ……)

怪獣より恐ろしい目に合うんじゃないかと感じた一眞は、口をしつかりと閉じるのだった。

「一年の時にいなくなっただけだと思っただけ、こんな時に帰ってくるなど……いったいどういうつもりですか？」

ダイヤは「この時期」になぜ帰ってきたのかを問い詰めようとしたが、彼女は全くもって無視し、カーテンを開けた。

「シャイニー!!」

都合が悪いのかな……それともホントに話を聞いてないだけなのかな……俺帰っていいかな……とかなんとか考えている一眞。

「高校生が理事長だなんて、冗談にもほどがありますわ」

そうそう、とダイヤが言っていることに首を縦に振る一眞。だが、どうやらそれはジョークではなく、その証拠として彼女を理事長と認める任命状を出してきたのだっ

た。

「小原家の学校への寄付は相当な額なの」

自信ありげな発言に「どんだけ金持ってんだよ……」と驚くと同時に呆れかえる一真。

「実はこの浦の星にスクールアイドルが誕生したという噂を聞いてね」

ダイヤに邪魔されてはかわいそうだから応援しに来た——それが彼女が理事長になった理由であった。

「ほんとですか!？」

ダイヤと同じ3年生、しかも理事長という強力な存在が味方に付いたことに喚起する千歌。

「デビューライブには秋葉Domeを用意してみたわ」

小型のノートパソコンを開き、写真を見せる鞠莉。その行為に喜ぶものと、驚愕するもの、そして（小さいノートパソコンだな……）とまったく違うことを考える2年生組。最後のは一真である。

「It's joke!」

「ジョークのためにそんなもの用意しないでください」

冷やかな千歌の声が飛ぶ。そして本当のライブ場所に案内された。

「はいいど〜」

「ええ。ここを満員にできたら、人数に係わらず部として承認しますよ」

浦の星の体育館であった。人数に係わらず承認というのは異例のことだ。

「満員にできれば承認なんですか？」

「部費も使えるしね」

答えが返つてくると少し考え込む一真。

「でも満員にできなければ？」

成功ではなく失敗の時のことも聞く梨子。リスクも知らないで安易にやると言っ
はいけないものだ。

「その時は解散してもらおうしかありません」

きつぱり解散と言いつつ鞠莉に非難する千歌。

「嫌なら断つてもらつても結構ですけど？」

悪い笑みを浮かべる鞠莉。このまま部として承認されなくてもかもしれない毎日を送る
か、ここで一発逆転の大チャンスをもにするのか……彼女にはどちらを取るのかわ
かつてこの案を出したのだろう。

「結構広いよね……やめる？」

曜は千歌に問いかけると、彼女は「やるしかないよ！」とはつきりと答えた。その姿

にはさつきまでの弱気なトコロは見られない。

やるということを決まりましたねと鞠莉が去っていったところで、梨子はとあることに気が付いて疑問を共有した。

「ねえ、この学校の生徒って全部で何人？」

その問いにハツとさせられる曜。しかし千歌は気付いてないようで、一真が説明した。

「仮に全校生徒が全員来ても、ここは満員にはならないんだ……」

人数が少ない故の、弊害が彼女たちの前に立ちはだかったのである。

日直の仕事を終わらせ、廊下を一人で歩いている一真。千歌たちはすでにバス停に行つたはずだ。先に帰つてもいいと言つたのだが、彼女たちは待つているだろう。そんなやさしさに甘えながらも、はやめに行こうと歩くスピードを上げる。すると

「一真〜!」

背後から聞こえてくる声。それに振り向くと、声の主は先ほど（朝ですけどね）話した鞠莉だった。

「どうも。お疲れ様です」

頭を下げる一真に、鞠莉は「カタいってば〜」とやめてほしそうに言った。

「で、何の用です？」

「あなた、申請書に名前書いてないわよね？」

スクールアイドル部のことなのだろう。確かに名前は書いていない。自分が入るつもりはない。あくまで手伝いだけだと答える。

「見た感じもう入っていると書いてもいいくらいだけど」

「そう見られても仕方ありません」

ニコッと微笑み返す一真。彼は正直も迷っているのだ。梨子に言ったように何か変わるのかもしれないという期待感を持ちながら活動を見ている。しかし、自分にはもう一つの顔がある。ウルトラマンというもうひとつの顔が。「やっていけるのか？」という小さな不安が、彼を留めているのだった。

「しつかり、彼女たちを見ていてあげて」

次の瞬間、鞠莉の口から出た言葉に思考が停止する一真は「え？」と聞き返す。

「私たちの時にいなかった存在だからこそ、みんなを繋ぎとめてあげてほしいの」
「それってどういうことですか……？」

一真は彼女の言っていることがわからないままであった。しかし鞠莉は言い終えると「バイバイ！」と喋って踵を返してしまった。廊下で立ち尽くす一真は、その言葉を飲み込めずにいたのだった。

一眞たちはとりあえず、千歌の部屋で作戦会議をすることになった。最初に千歌は下に降りていつて何かをしてきたようだが、帰ってきたときには額に「バカチカ」と書かれているだけであつた。何の成果もあげられなかつたという訳だ。

聞けば、美渡さんの働いているところの従業員を誘つてライブに来てほしいと頼んだのだ。

「お姉さんの気持ちもわかるけどね〜」

裁縫をしながら答える曜に「お姉ちゃん派ー!?」と落胆する千歌。

「地道に人集めるしかないだろ……」

一眞もどうにかして人に知らせることができないかとポスターをみて考えている。

「あれ、梨子ちゃんは」

千歌は梨子を探してふすまを開けるとそこには、壁と手すりに手足をつき橋のようにして下にいる生物を刺激しないよう移動……避けている。

「それよりも、人を集める方法でしょ?」

「そうだな……チラシ配るか」

「そうだね。やるんだつたら高校生の多い沼津の方がいいね」

梨子はスルーされ、人集めのアイディアが出ていく。

「町内放送だつて頼めば使わしてくれるよ」

「使わしてくれんの、アレ？」

「カズくんは知らなかったつけ。あそこは……」

曜が一真に説明を始めた瞬間、モノが落ちるドスンという音とイヌのキャフンという声がほぼ同時に聞こえたのだった。その後は……説明しないでおう。

くく

翌日、彼女たちは沼津駅の前にやってきたのだった。

「東京より人は少ないけど、やっぱり都会ね」

「それは仕方ないよ。俺だつてあの人の多き見た後じゃ、比べちゃうのもわかるけど」

人がにぎわう沼津の駅前をみて話す梨子と一真。記憶を失つた後に見た東京の人の多さは目を見開いてしまうほどの驚きがあった。これまでに見たことがないほどの人が歩く姿に酔ってしまったのも今は懐かしい。

「そろそろ部活終わった子たちがくる頃だよ」

曜の呼びかけに火が付いた千歌は意気こんでいった。

「よし、気合入れて配るぞー!!」

そしてピラ配りがスタートした訳だが……そう上手くいくものではないのが現状だ。しかし曜は気持ちとタイミングを意識しながらピラを配りに行く。

「ライブのお知らせですー！ よろしくお願ひしまーす!!」

2人の生徒に配りに行くと

「あなたが歌うの？」

「はい、来てくださいー!」

と敬礼のポーズとウインクといういつもの調子で宣伝する。すると興味を持ってもらったのか、ピラを見ながら「行ってみようか」と話が聞こえた。これが理想形である。

「さっすが曜だ……」

その姿を見た千歌にもさらに火がついて

「ライブやります是非」

「で、でも……」

「是非!」

壁ドンからの圧をかけていくなんてトンデモナイことを実行し始めた。

「圧かけんなよ……」

壁ドンされた側は、ピラを受け取って逃げるように走っていく。

「勝った」

「勝負してどうすんだよ……てか完璧に嫌がられたら……」

一方梨子もポスターに向かって練習だとか言つて渡すふりをしている。

「練習してる暇はないよ！」

「強引だな……」

「それでもしないと梨子ちゃん配らないよ」

千歌に押し出された梨子は水色のコートをは覆ったサングラスとマスクをした人にビラを配っていた。またこちらも逃げるようにして取られていたが、一応成功なのかもしれない。

「ライブのお知らせです」

一真も声を上げてビラを配っていく。次に狙いを決めたのは、黒い服を着たピンク髪の少女であつた。

「あの一！」

「……？」

背後から声をかけてしまったが、彼女は立ち止まり振り向いてくれた。こう言つては失礼だが、なんとも表情を認識しづらい子だなと一真は感じた。

「ライブのお知らせです」

一眞はそう言ってビラを差し出す。

「ライブ……?」

「ええ、イラストに描いてある子たちがやるんです。ぜひ来てください」

ビラを受け取りながら少女は一眞と目を合わせる。

「……ッ!?!」

すると彼女の表情が目に見えた変わった。驚愕と言った感じだろう。あり得ないという感覚にも感じられたその表情に一眞は心当たりのないという想いでいっぱいだった。

「なにか……?」

「……い、いえ」

彼女はビラを取ると、すぐに駆けて行ってしまふ。

「……なんだ?」

すると千歌が寄ってきて聞いた。

「知りあい?」

「いや……」

一眞は否定するが、彼の中にはじめてとも思えないという感情も確かにそこにはあったのだった。

なんとかやり方のコツを掴めてきたのか、順調に配り進めていく一同。すると千歌は、遠くに知り合いの姿を確認し、声をかけた。それは黄色のカーデイガンを着た栗色のロングヘアの国木田花丸。そして赤い髪をツインテールにした黒澤ルビィであった。

「ほら、カズくんも！」

袖を引っ張られながら連行される一真。そして千歌によって花丸やルビィに紹介される。

「暁一真。千歌から話は聞いてるよ。よろしく」

あらかたのことは千歌から聞いている。ルビィが生徒会長であるダイヤの妹であることも知っているのだ。

「オラ……じゃなかったマルは国木田花丸です。こっちは黒澤ルビィちゃん」

「よろしく……」

挨拶する一真。しかしルビィが花丸の背後から出てくることはない。極度の人見知りで男性も苦手なのだとか。「ダブルパンチじゃねえか」と彼女と関わる未来が無いことをさとる一真。

「それでね、私たちライブやるんだ。花丸ちゃんたちも来てね」

その言葉にかみついたのはルビィであった。彼女は大のスクールアイドル好きらしい。これだと姉妹で正反対である。

「絶対満員にしたいんだ。だから来てね」

やさしく千歌はルビィと目線を合わせ、話しかけると彼女はビラを手を取ってくれた。こういうところは妙になれてるよな……と千歌を見て思う一真。

「じゃあ、私たち他にも配らなきゃいけないから！」

「だから引つ張るなって……！」

何しに連れてきたんだ……と文句を言う一真よりも、ルビィの声が千歌の耳に入った。

「あ、あのっ……グループ名はなんていうんですか！」

ルビィの問いに千歌と一真はビラを見て、顔を見合わせる。

「あっ……」

「やってしまった」という表情を見せる2人。グループ名など、決めていなかったのだ。

一方、沼津にある地下駐車場に先ほどのピンク髪の少女スピカは立っていた。いつものようにダークリングを持ってはいるが、もう片方に持った「ライブのお知らせ」と書

かかれていた紙を見ていた。

渡してきた少年の顔を思い出し、しばらく紙を見つめていると彼女の背後に男の背中
気配を感じた。

「何を見てるんだ？」

「……!!? あなた……何のつもり？」

その男はスピカの肩に頭を乗せ、左耳にささやいている。

「ライブに興味があるのか？ 君がそんなものに関心を持つとはね。驚きだよ」

「関心なんてない。ただ……」

「ただ？」

男は聞くがスピカは言葉に詰まる。

「僕たちの目的は、あの方のために魔王獣を復活させることだ。そのために君はダーク
リングを授かった……役目を忘れるなよ」

そう言ってアオボシはスピカに怪獣カードを渡した。スピカは告知の紙を投げ捨て、
ダークリングへカードをリードさせる。

「さあ、悠久の時より目覚めさせろ!!」

アオボシの叫びに答えるように地面が揺れ始める。

「魔王獣の咆哮を轟かせろお!!」

地上でも地震が起き、地盤が崩れ始める。いくつものビルが沈み込んでいく。さらに赤い光が道のように走っていき、四方が交差する場所から光の柱が出現。光が消えるのと、金属の体で覆われ、三つのかぎ爪を持つ左腕にハサミのような右腕……。土の魔王獣マガグランドキングだ。

「また怪獣かよっ!」

「地震だ!?!」

「曜、梨子、千歌を頼む!!」

一真はそれだけを告げると怪獣の現れた方向へ走って行ってしまった。

「一真くん!!」

地面が揺れている中、遠ざかっていく背中を見て梨子は叫ぶ。

「梨子ちゃん、逃げよう!」

「でも一真くんが……!?!」

しかし曜は

「大丈夫……カズくんはいつもあんな調子だから」

と無理やり笑って言う。

「いつも?」

「うん。カズくん、何かあるとすぐに助けに行っちゃうんだ。まるで前もそうしてたみたい……」

彼女も心配している。しかしそれ以前に彼を信じている。だからこそ送り出せるのだった。

一真はマガグランドキングへと近づくとオーブリングをかざしたのだった。

《ウルトラマンオーブ スペシウムゼペリオン》

紫の円形のエネルギーを迸らせながら、オーブは空から降り立った。

「花丸ちゃん、あれ……!」

「ウ、ウルトラマン……?」

駅前にいた花丸やルビイもオーブの姿を目にしていた。

巨大な体格を誇るマガグランドキングに、オーブは戦闘の構えで相手を見据える。

そしてオーブは先制攻撃として頭へ膝蹴り、そのままチョップを繰り出した。しかしその強固な体には効いてないようだ。再度、頭をまわし蹴りで蹴飛ばす。

右腕のハサミをドリルのように回転させ突き刺してくるが、紫のラインが光り（スカイタイプの力）紙一でこれを躲す。さらにパンチやキックの力を底上げするために赤い

ラインが光る。(パワータイプの力)

だが、装甲を突破してダメージを与えることができないのだ。

(痛つてえ〜！ どうなつてんだコイツ……)

攻撃をよけながらも突破口を考える。すると体の中央を走る発行体から強力な衝撃波が放たれた。広範囲にわたるそれを受けて、ビルが次々に倒れていく。さらには凄まじい風や砂埃で視界が遮られる。

(この……スペリオン光線!!)

至近距離からのスペリオン光線を与えるも、それをものともしない。まさに動く要塞だ。

「どうしよう光線が効かないよ……!」

「まだ何か手はあるはず……!」

「でもあんな硬い体にどうやって攻撃するのよ!」

曜や千歌、梨子もその脅威に不安を覚える。

勝負を決めに来たのか、胸部の発光体から発射するレーザー光線を放ってきた。オーブは側転で避けると後ろのビルに着弾した。その貫通力は強力で、ビルが倒壊せずに綺麗な穴が開いてしまう程であった。ビルを確認し、驚愕するオーブに連続照射を開始したマガグランドキング。

オーブも当たらないように必死に避けていく。これでは攻撃ができずに時間切れになってしまう。残り時間が少なくなり、カラータイマーも点滅を始めた。その隙を突かれてレーザーがオーブを襲う。

焼かれるような痛みにも声を上げるオーブ。無慈悲にも再度照射されたレーザーをよける。

すると

ガラス張りのビルがレーザーを反射したのだ。

(これだ……!)

マガブランドキングのレーザー光線を自分も鏡を作り上げて同じように反射させる。強力な照射力で狙いが定めづらいが、パワータイプの力を使って体に当たるようレーザーを反射させた。

「そっか、あのレーザーは自分の装甲を貫くのね!!」

梨子はオーブの行動を分析した。

マガブランドキングの体を開けられた大きな穴。ここに向かって光線を撃てばダメージが行き届く。

(コイツで……決まれええええ!!!)

最後の一押しであるスペリオン光線を体内に向けて放つ。すると体が風船のように膨張、爆発したのだった。その爆発は機械の体であること故なのか、二度も三度も起きたのだった。

静けさを取り戻したことを確認すると、オーブは空高く飛んでいったのだった。

「やつぱこれあるよな」

一真は赤いクリスタルを見つけると、オーブリングをかざした。すると光の粒子となり、ホルダーに入っていく。

「こんどはどんな姿かな……」

そこに描かれていたのは、二つの巨大な角を持った赤き戦士であった。

「……?」

そのポーズに既視感を覚えた一真は先日手に入れたカードも取り出した。やはりポーズが似ているのだ。

「この二つがペアってことね。機会があつたら試してみるか」

同じころ、スピカもカードを手に入れていた。それは先ほど倒されたマガグランドキ

ングのカードである。

「ありがとう……と言っておくわ」

しかし今の彼女は心ここにあらずと言った感じであった。

「カズくん、大丈夫だった？」

その後戻った一真は千歌たちに心配された。だが本人は

「大丈夫だよ。ほら、この通り」

と無傷であることをアピールした。それを見て梨子もほっとしているようだ。

4人は穴が開いたビルたちを見つめながらも、すぐさま復興することを信じてこの日は解散となった。

第6話 新たな羽ばたき

放課後、ストレッチをしながら相談する一同。グループ名という重大なものをここにきてようやく思い出すという失態である。ルビイに言われなかつたらどうなっていたのだろうかなんて考えたくもない。

「まさか、決めてないなんて……」

「梨子ちゃんだつて忘れてたくせに」

「早く決めないとね」

「つつてもなかなか難しいぞ……」

責任を押し付け合う千歌と梨子と早く決めようと言いつつ出さず。しかし一眞の言うように、一筋縄でいかないのがグループ名だ。これには覚えやすくインパクトのあるという条件が出てくる。難しくてもダメだし、簡単では埋もれてしまう……。なかなか頭を悩ませる問題だ。

「どうせなら学校の名前が入ってた方がいいよね？ 浦の屋スクールガールズとか？」

「まんま（じゃない）」

千歌の案に梨子と一眞からの否定が入る。「なら梨子ちゃんが決めてよ」と千歌。「東

京の最先端の言葉とかあるでしょ」は曜。

(最先端とか、SNS……? とかやってればわかるんじゃないか)

梨子はしばらく考えてから出したのは……

「3人海で知り合ったからスリーマーメイドとか……?」

2人はスルーしてストレッチを続行する。ダメらしい。

恥ずかしくなったのか「今のは無し」と訂正を入れるが、聞き入れてもらえなかった。

「曜ちゃんは何かある?」

曜の出した案は

「制服少女隊とか! どう?」

「ないね」

「そうね」

千歌と梨子は言った。そのことに曜は「ええく!!」と不満を漏らす。「結構気に入って

たんだな」と一真。

(俺は来ないよな……)

静かに距離を開ける一真に対して曜が「カズくんは?」と聞いてくる。

「デスヨネ」

少し考えた後、結構投げやりに

「浦の星制服マーメイドとか……」

「ごめん、聞いたのが間違いだった……」

「ええ!？」

曜に謝られる始末。「カズくんは感性が独特だからなく」と千歌は言った。

その後も浜辺にたくさんさんの案を出したがこれと言ったものが出てこず、しまいには「みかん」とか書き始めてしまった。

「こういうのはやっぱ言い出しつべに付けてもらうべきよね」

梨子の提案もあつて最初の千歌に戻る。

すると千歌は海辺に書かれた文字に視線を落とす。そこには誰が書いたかもわからない文字がそこにはあつたのだった。

“A q o u r s”と書かれたそれを見つめる4人。

「えーきゅーあわーず?」

「アキユア……」

「もしかしてアクアじゃない?」

千歌と梨子を悩ます文字を曜が推測する。

「水………つてことか」

水と私たちという意味を掛け合わせた造語だろう。それを踏まえてもう一度見た千

歌は

「グループ名にどうかかな？」

と提案する。

「誰が書いたのかもわからないの？」

「だからいいんだよ。名前決めようとしてる時にこれに出会った……それってすごく大切なんじゃないかな？」

梨子は苦言を申すが、千歌の考えに突き動かされる。

「いつまでたっても決まりそうにないからな」

「ここにいる者たちの意思は固まった。ここから彼女たちは——

「「浦の星学院スクールアイドル」A q o u r s」です!!!」

町内放送のスピーカーを通してその名が伝えられた。

が……

「でも学校から正式な承認貰ってないんじゃないやあ……」

「ああ!？」

「浦の星学院非公認アイドル……」

纏まりが悪くなりながらも、彼女たちはなんとかライブの日程を町中に伝えていった。

この後、放送を許可してくれた人に謝罪しに行きそのやさしき、寛大さに感謝する一眞が見られたのは別の話。

翌日も沼津でビラ配り……なのだが

「なんで俺が写真を……」

「いいからいいから、カズくんお願いね!」

曜や他校の生徒に頼まれ、一眞はカメラを構えていた。

「全速前進……」

「ヨーソロー!」

曜と他校の生徒が敬礼した写真をカメラに収める一眞。

「ビラ配りは!?!」

撮影会のようになってしまった現状にツツコミを入れる。

ライブまでの残り少ない期間には学校の友人にステージの手伝いを頼んだり、曲を完成させたり……

「ならここでステップ入れれば……」

「ここで動いた方がお客さんに正対できていいと思うけど」

「じゃあ私が回り込んでサビに入る？」

振付やステップの相談をしたりと、着実に完成へと近づかせていった。

そしてついに来たライブ当日。しかし外はあいにくの雨。しかも土砂降りだ。まるで空が彼女たちに悪戯を仕掛けにきているかのように。

体育館では彼女たちとは別の場所に一真はいた。この時間は彼女たちだけで話あつてほしいと考えてのことだ。

緊張しているのは当たり前。それに満員に満たなければいけないという条件も重なり、とても強い圧がかかっているのかもしれない。しかし、彼女たちがやってきたことは嘘ではない。一真もきつとうまくいくと、そう信じている。

ステージ裏では千歌たちは手を繋いで円を組んでいる。思いを一つにして気合を入れるために千歌は声をあげた。

「今を……全力で……輝こう!!」

「「A q o u r s ! サンシャイン!!」」

そしていよいよ開演の幕が開く――

しかし、現実とは時に残酷に牙をむく。今この体育館にいるのは、満員どころか10人にも満たない人たち。その多くが浦の星の生徒だったのだから。一般の人など片手で数えられるほど……。

その期待とは裏遠くかけ離れた事実には彼女たちは表情を曇らせてしまうものの、それでも……と、ここまでやってきたことに嘘をつかないため、彼女たちはライブを開始した。

「私たちはスクールアイドル、セーの……」

「「A q u o r s です!!」」

彼女たちはその輝きと諦めない心、信じる力にあこがれスクールアイドルを始めたこと、そして何を目標としているのかを語る。

「目標はスクールアイドル……っ、s です!!」

千歌の宣言の後、曲が始まった。

『ダイスキだったらダイジヨウブ!』

その曲は、ここにいる誰をも魅了した。ダンスや配置も完璧にこなしていくその姿に一真は息を呑む。この出来に……もしかしたら……と淡い期待を持つ一真。

その瞬間——

バチンツ!!という巨大な音共に、辺りが暗くなってしまう。一瞬のことで思考が回らなくなる。しかし、その冷たくなる空気を感じ取って一真は最悪の事態であることを理解する。どこかに雷が落ちてしまい、停電が発生したのだ。

そのどうしようもない事態に呆然と立ち尽くしてしまう。心臓が早く脈打ち、息も上がっていく……反面、頭の中では脳をフルに回転させ始めていた。

(冷静に……冷静に……ここで終わらすわけには行かないだろ……!!)

はじめてのはずなのに……以前にもこのような緊急事態を経験しているかのように、言い聞かせていくほど彼の頭の中は冴えていく。

(電気が落ちた……でも復旧までに時間がかかる……なら!!)

一眞は一部の望みを導きだし、体育館を後にして土砂降りの中を全力疾走する。

災害などによつてはここも避難場所になる。すれば、電気が使えなくなるような時を想定してどこかに予備電源が存在しているはずだ。

(そして体育館からあまり離れてない場所に……!)

雨粒が目に入つて痛む。しかしそれを気にしている余裕はない。ここま彼女たちがやってきたことを……一番近くで見えてきた自分だからこそ、こんな終わり方にはさせない……そんな一心であつた。

体育館裏倉庫に着くとすでにドアが開いていた。どうやら自分と同じ考えに人がいたようだ。

「ありがとう……つて生徒会長!？」

その人物に一眞は声を上げてしまう。なんとそこにいたのは「スクールアイドル部は

認めない」と言っていた生徒会長の黒澤ダイヤであったのだ。

「たくさんの方々に来ていただいているのに、停電で中止となつてはこの学校の何も傷がついてしまいますから」

ここにいる訳を話すダイヤ。そして「たくさんの人……？」と一眞は動きを止めてしまふが、ダイヤの「早くしないと人が来てしまいますわよ」の声で協力して予備電源を移動させる。

「全部つなぎましたか？」

「はい、大丈夫です！」

一眞の確認がとれたダイヤは電源のスイッチを押し起動させる。それと同時に「バカチカー！ あんた開始時間間違えたでしょ！」と美渡さんの声が聞こえた。すると外からは多くの人が体育館へ続々と入っていく。その数は体育館を簡単に満員へと持つていった。

千歌へ断っていた美渡さんも会社にポスターを貼ってライブを知らせ、他の浦の星の生徒もビラ配りをしてきてくれたのだ。千歌たちの知らないところで、千歌たちを応援する人が助けてくれていたのだ。

たくさんの人々の前で千歌たちはライブを再開させた。

するとライブは大成功を納めたのだ。溢れんばかりの歓声や拍手が鳴りやまないほ

どに。

1人の生徒がステージ前に立つ。本来であれば多くの人がいて音が吸われてしまうはず……しかしそれでも全員に聞こえるほどの声でダイヤは言った。

「これは今までのスクールアイドルの功績と、町の人の善意があつての成功ですわ！勘違いしないように！」

ダイヤの言葉は正しかった。今回のファーストライブは、千歌たちの呼び声に賛同してくれた彼らの善意がなければこれほどの成功は望めなかつただろう。だが、千歌はそれをわかつていてダイヤに言葉を返す。

「見ているだけでは始まらない。今しかない瞬間だから——」

「「輝きたい!!」」

と。

彼女たちを陰から見ているのは幾人か居たが、その中には

「……………これが……………スクールアイドル」

自分の想像を超えた姿を見たように目を見開いたスピカの姿もあった。

「退屈だな……これでも召喚するか」

傘をさしたアオボシは、スピカから取ったダークリングを持ってカードをリードした。

《バドリユード》

体育館でも地響きを感じ、一真は外へと飛び出る。そこには白い体に黒のラインで幾何学的な模様が描かれた、オレンジ色のモノアイを光らせる機械生命体が立っていた。

「こんな時に……」

《ウルトラマンオーブ スペシウムゼペリオン》

千歌たちも体育館から飛び出し、その地響きの原因を探す。

「なになになに?! ……か、怪獣!!」

「早く非難しないと!」

「千歌ちゃん、曜ちゃん見て!」

梨子が指を指す方向にはバドリユードへと立ちふさがるオーブが立っていた。

「うるとらまん、がんばれー!」

沈黙をやぶって、ライブを見に来てくれていた小さな男の子がオーブに向かって応援

を始めた。

するとその男の子に触発されたのか、たくさんの人々が応援を始めた。

「頑張れえええ!!」

そして千歌もライブ後とは思えないくらいの声量でオーブに向かってその想いを届ける。

(今日はソツコーで終わらす)

オーブはバドリユードへを構えると地面を蹴って駆けていく。バドリユードの攻撃をブロックし、左ストレートを打つ。機械の腕のフックを頭を下げるようにして躲し、腹部に横蹴りを食らわせた。その攻撃で怯んだ隙に、オーブは渾身の力で背負い投げる。

追い打ちで放ったスペリオン光輪は見事、胸の装甲を切り裂いた。

バドリユードも反撃のためと口元に両手をあててから超音波光線を発射するが、それを見切ったオーブは前転で避ける。

(スペリオン光線ッ!)

流れるように発射された光線はバドリユードの胸中を貫き爆散したのだった。

機械の破片が飛び散り怪獣の姿が消えるとオーブはゆっくりと立ち上がる。

さつきまで降っていた雨はやみ、雲の隙間から光が漏れ始め、学校やオーブを照らす。雨上がりの空に飛ぶ鳥は、まるで彼女たちの新たな飛び立ちを感じさせるようなものであったのだった。

納得いかないという表情でアオボシはオーブを見つめていた。

「なんだよ……元の姿で戦わないのか……」

彼はオーブの“本来の姿”を所望のようであった。しかしオーブがその姿を見せることが無いまま戦いが終わってしまった。もう少し強いのが良かったかなと先の戦いを思い出していると、ふとある疑問が生じた。

「それにしても、3年前はあんな戦い方だったか？」

彼が見たオーブの戦い方はまるで素人。やつと板についてきた程度のものであった。しかし彼の知るオーブはもつと戦い慣れていた筈……。少なくともアオボシの記憶ではそうだった。

そんな鼻で笑うような戦い方であるのに、アオボシには長年近くで見てきたかのような動きにも見えていたのだ。

飛び去っていくオーブを見ながら、アオボシは呟く。

「誰なんだ……お前」

ライブ後、一眞は千歌たちに頭を下げていた。

「俺もマネージャーとして入れてくださいー！」

と。先のライブを見て踏ん切りがついたのだ。自分も近くで見たいと。

「もう入ってるみたいなものだけどね」

「そうよね。今更って感じかも」

曜や梨子に言われる一眞は「でも申請書に名前書いてないしくほら、こういうのってやっぱりしつかり言つとかないと……」と言っている一眞に千歌は近付き。

「うん、カズくんよろしく！」

と迎え入れてくれた。さっきまでの賑やかな雰囲気とは打って変わり、4人は穏やかな顔でお互いを見つめ合う。

こうして一真を入れたAqoursは最初の一步を踏み出したのだった。

第7話 フタリノキモチ

日本某所。普段は人々の生活がありながらもどこか静けさが残る街。しかし、今はそれとは正反対であった。鳴り響くサイレンや人々の悲鳴で大パニックである。

その原因は逃げる人々をバツクに戦闘を繰り広げているウルトラマンオーブと体が金属の巨体であった。

「オリアアアツ!!」

オーブが空中からのキックを上半身へと決めると鈍い金属音が響いた。しかしその怪獣……否、鉄人兵器は後ろに数歩下がるだけで大きなダメージには至ってない様子である。

(コイツ……)

オーブに変身している一真は、このどうしようもない体の強固さに頭を抱えていた。この鉄人兵器が現れてから戦闘を繰り広げているわけだが、今の今まで有効な攻撃を与えられていないのだ。よくて数歩後ろに下げられるくらい。

構えを取り、睨み合う両者。

途端、鉄人は両肩に付けられた砲身からビームを発射する。その砲撃を避けるオーブだったが、なんと弾がオーブのいる方向に向かって“曲がった”のである。そのことに動きが止まり2発とも被弾してしまう。

(ホーミングってやつ……なっ!?)

見上げると、いつの間にか目の前に近付かれていたようで、その強靱な腕での攻撃を受けてしまう。しかし2度目の攻撃は何とか受け止めてホールド。そのまま頭や首にパンチやチョップを繰り返すが、やはり攻撃が効いていない。

「うーん、やはりあの方のツテってのはいいものを持っているね」

「ええ」

遠くからこの戦いを見ているアオボシはスピカに向かって話しかける。スピカは淡々と、そして相変わらずの無表情で応答した。

そう、オーブと対峙している『無双鉄神インペラザー』は“あの方”と呼ばれている者が、その知り合いである惑星侵略連合と呼ばれる組織から譲り受けたものなのだ。

密着して攻撃を繰り返しているオーブを蹴り飛ばしたインペライザー。その衝撃でオーブは地面へと転がる。しかしオーブは起き上がらず、とある攻撃がくるのを待った。

鉄神はオーブを倒すという命令を忠実に実行するため近づいていきながら、両肩の兵器『ガンポート』からビームを発射した。

(待ってたぜ！ その攻撃ッ!!)

オーブは即座に以前マガグランドキング戦で使用したミラーウォールを生成。攻撃を反射させ、その強固な体へと当てた。小規模な爆発が起こり煙が舞うが、インペライザーは止まることなく、オーブの首を掴んできたのだ。

(こ、この……だったらこのまま！)

首を掴まれ持ち上げられている中、オーブはエネルギーを貯めて腕を十字に組んだ。

(スペリオン……光線ッ!!)

至近距離で発射されたスペリオン光線は、インペライザーの“再生しかかった体”へと流れ込んでいく。

過剰量へと陥った体内のエネルギーが外へと漏れだし、大爆発を起こす。

フラフラの状態で立つオーブ。目の前には下半身だけが残されたインペライザーの残骸が残されていた。

それは今だにオーブへと近づこうと歩みを止めない。その機械故の不気味さに冷汗が流れる。

一步……

二歩……

三歩……

そこで謎の光に包まれて消えた下半身。再度現れるのかと警戒するがそこには道路やビル、そして空が先の方まで続いている景色しか見えなかった。

緊張が途切れるとオーブは空高く飛翔していく。

「ダメみたいね……」

戦いを見終えたスピカは言う。やはりあの連合が持ってきたものはガラクタだった

のかと感じている彼女に、アオボシは笑って答えた。

「いいや、これでいいんだよスピカ。これで十分なデータはとれたようだし……インペライザーの真の恐ろしさはこんなもんじゃない……」

不敵な笑みへと変わるアオボシがそこにはいた。

くくく

見事ファーストライブを成功させた千歌たちは理事長の承認により正式な部活動として認められ、部室も与えられることとなった。体育館内に設けられた空き部屋がスクールアイドル部の部室だ。

しかし、なぜ理事長が自分たちの肩を持つてくれるのかが不思議で仕方ない梨子と曜。だがスクールアイドルが好きなだけ……では到底思えないのも事実だ。

そこで一真は以前鞠莉から言われた言葉を思い出していた。

——しつかり、彼女たちを見ていてあげて

の
——私たちの時にいなかった存在だからこそ、みんなを繋ぎとめてあげてほしい

戸惑っていて彼女のことをよく見ていなかったが、あの時の鞠莉はいつもの所謂「シャイニー！」と言った感じではなく、何か心残りがあるようだった。もしかすると何か関係が——

「カズくんも入ろう！ 部室っ！」

と考えかけたところで千歌に声をかけられ、「え？」と聞き返す。

「だから、部室に入ろう？ 何か考え事してた？」

とつさに「いやなんでも」と答えてしまう一眞。ともかく、自分が見ていてあげれば何も問題は無いのだ。そう鞠莉も頼んできたのだらうし、自分もそのつもりで入ったのだから。

心弾ませながら入っていく千歌を追い、一真も中に入る……前に部室の上に飾られたプレートに目をやる。

『スクールアイドル陪部』

一真は（後で取り換えておくか……）と心のどこかに誓いながら部室の中へと入っていった。

「うわああ……」

「片づけて使えって言ってたけど……」

「こりゃ酷いな……」

部室内には埃がたまり、本や段ボールが散乱していた。ずっと物置として使っていたのだろう。全員が予想以上の悲惨さに肩を落とす。

「これ全部……!？」

千歌が駄々をこねるように声を上げるが、こうなった以上仕方ないと腕をまくったり、ブレザーを脱いだりして掃除する気満々の他3人。

「言っても誰もやってくれないぞ。このままでいいって言うなら別にいいけど……」

「よくない！」

一眞の言葉に梨子は反対する。

2人の言葉を聞きながら千歌はダルそうに歩いていく。

「なんか書いてある」

千歌が見ているホワイトボードには薄い字で何行も書かれていた。それは勉強で扱ったようなものではなく

「歌詞……？」

「でもなんでここに？」

「さあな、行事か何かで使ったんじゃないか？」

「でもここに書き残したままじゃ置いとかないと思うんだけど」

曜の言葉に尚更謎が深まる歌詞……。

「それよりもこれ……」

一同は謎に放置された歌詞を見ていくが、それよりも後ろに何冊も置いてある本の方へと関心が移っていくのだった。

一眞たちがせつせと片づけをしている頃、同学校の図書室では国木田花丸が貸し出し

カウンターに座って本を読んでいた。

彼女以外見当たらない物静かな空間に、ガラツとドアの開く音が聞こえ、彼女の親友がその赤いツイントールを揺らしながら入ってきたのだった。

「やつぱり部室できてた!!」

いつもより興奮した様子で黒澤ルビイは花丸に告げた。そのことに花丸も良かったねと声をかける。ルビイは早くも次のライブに心躍らせていると、またもや扉の開く音が聞こえた。

「ここにちわ〜!」

そこに入ってきたのはスクールアイドル部の面々。しかし人見知りのルビイは陰に隠れてしまう。

「花丸ちゃんと……ルビイちゃん!」

千歌は見つけられたと堂々と胸を張っているが、実際は扇風機の後ろに隠れただけでバレバレである。

(なんでだ……誰かツツコめよ……今のは褒められるほどのもんじゃないだろ……!?)

そんな状況に一真は困惑しているが、そんなことよりルビイの可愛さに釘付けの3人は気にも留めていなかった。

「あの、用は……?」

「そうそう……これ、部室にあった本だ」

花丸の言葉に目的を思い出した一眞たちは何冊も積み重ねられた本をカウンターに置く。

「図書室の本じゃないかなと思って」

花丸に確認するよう梨子がお願いする。花丸は慣れた手つきでページをめくっていき確認していく。

「多分そうです。ありがとうg……」

花丸の言葉すら遮り、千歌は2人の手を固く握る。その際にはなったのは——
「スクールアイドル部によるこそ！」

だった。案の定後ろから苦い顔で見られていることは気にせず、千歌は勧誘する。

「結成したし、部にもなったし……悪いようにはしないよ？」

「それ、悪いようにするってことだろ？」

一眞の冷静なツッコミもスルーし千歌は2人に言う。

「2人が歌ったら絶対にキラキラする！間違いない!!」

だがいきなりの勧誘でもあるし、迷いもあるのだろう。でも……と言葉詰まりしてしまふ。

「千歌ちゃん、強引に迫ったら可哀想だよ？」

「そうよ。まだ入学したばかりの一年生なんだし……」

「可愛いからついでと謝罪する千歌。すると曜がそろそろ練習の時間だということを伝え、図書室を後にした。」

「とまあ……結構強引なところあるけど、言っただのは本心だから。ごめん」

千歌たちが去ったところで再度謝罪する一真。

「いえ……オラ……」

「……?」

「マルは気にしてないので大丈夫です」

「そっか。じゃあ練習あるから」

一真も同様に図書室を出ていく。

先ほどと打って変わって静かになった図書室で、花丸はルビイい問いかけた。

「ルビイちゃん、やりたいんじゃないの? スクールアイドル」

「でも……」

ルビイにはその決心に踏み切れない理由があった。

ルビイの姉、黒澤ダイヤは元々、スクールアイドルが大好きだったのだ。

しかしある時を境に嫌いになってしまったと……ルビイは語る。

姉が嫌いなものは、妹である自分も嫌いにならなくてはいけない。だが……どうしてもそのようにはなれないでいるのだ。

ルビイの“好きなものに蓋をしている”姿を見た花丸は、あることを思いついたのだった。

くく

「無理よ……」

「でも……*ム*、sも階段上って鍛えたって……」

早朝、淡島にある神社の階段を上ることによって体力強化をしようと始めた千歌たち。だがこれがなかなか長く、急であるために体力が持たないのだ。今は想像以上に続く階段に体力を持っていかれたため、踊り場で休憩をとっている。

「はあ……はあ……結構きついな……ってか太もも痛え……」

一真も参加しているが彼女たちよりも疲れを感じさせていない様子である。

「それにしても……一真くん結構体力あるんだね……」

梨子の発言に「無駄に体力はあるからな……昔から」と答える一真。昔とは言っても3年前の話だが。

「ホントだよ。記憶失う前はなにかスポーツやってたんじゃない?」

「どうだか……」

曜と話していると上から地面を蹴る音が聞こえてきたので、視線を上に向ける。するとそこにいたのは果南であった。

「果南ちゃん!」

かなりのハイペースで下ってきた果南に曜は「上まで登ってきたの!」と聞く。それに「日課だからね」と答えられ、言葉を失うしかなかった一同。

「千歌たちこそいきなりなんで?」

「スクールアイドルで体力付けなくっちゃって思ってた」

千歌の答えに関心が低いのか、それとも触れなくなかったのか、果南は軽くあしらい自分は店があるからと下に降りていった。

「息ひとつ切れてないなんて……」

「上には上がいるんだね……」

と彼女の底なしのような体力に驚かされる一同。

「やっぱり体力オバケじゃないか……」

「果南ちゃんに言っちゃうよ」

「ああああ!! 待て待て待て!?!」

つぶやきを聞いてた曜が冷やかすと、一真は慌てて止めるように言った。

「なんであんなに慌ててるの?」

「昔何回か本人の前で言っちゃったことがあつて……」

梨子が千歌に聞くと、昔なんの考えもなしに「体力オバケ」と言った一真は果南からシカトされたり、ヘッドロック決められたりと散々なことしか起きていないのだ。

「ほ、ほら、私たちも頑張るぞ」

最後には体に疲れが残っているせいでヘナヘナく、となり締まりが悪くなってしまう千歌に苦笑する3人。だが何とか頂上にまで登りきることができたのだった。

……だったが

「zzzz」

「ね、寝てるよ……」

反動が授業に来てしまうのは避けられないことであつた。

くく

「ホントツ!？」

放課後、思いもよらぬニュースが舞い込んできた。

なんと、ルビイと花丸が体験入部してくれることになったのだ。

「やった〜! これぞラブライブ優勝だよ、レジエンドだよ!!」

千歌はその嬉しさのあまり空高くジャンプした後、梨子や曜と肩を組んだ。ジャンプ力結構あるんだなと一真。

「千歌ちゃん待って、体験入部だよ?」

「え?」

この「え?」は何それ、おいしいの? というリアクションだと汲み取った梨子は体験入部がどういうことなのかを説明した。

「仮入部は”お試し”ってこと。それでいけそうだったら入るし、合わなかったら辞めるし」

「どうして?」

何故、と千歌。

「もしかして生徒会長？」

「はい、ですからルビィちゃんどこに来たのは内密で」

曜の問いかけに花丸が答え、さらに頼んでいる間にも千歌はポスターはなにやら書き連ねていた。

「できたー！」

「バカ、話聞けつての！」

「いったあ!? カズくん何するの〜!?」

「その、バカの頭にチョップしたただけだが何か？」

話を聞かず、ポスターに花丸やルビィの名前を書き入れてしまい一真に脳天チョップを食らわされる。

「もう、仕返し！」

「おっと、動きが止まって見えるぜ？」

「むう、カズくんのバーカ！」

千歌も仕返しにチョップしようとするが一真には簡単に避けられてしまった。

「ああつ!? 一年生がいるのに……もう……」

「あはは……」

醜態をさらしていることに頭を抱えつつ、練習がスタートしていくのだった。

「とりあえず、梨子と相談して作ったのがこれ」

円内には準備運動やボイストレーニング、基礎体力作りなどが細かく区切られて配置してある。

「でも曲作りは？」

「それは別の時間にやるしかないわね……」

と時間外になってしまった事に申し訳なく答える梨子。しかし、このような具体的なレッスンスケジュールができたできただけでも大きな前進と言えよう。

だが、新たな問題が浮上した。

「練習場所はどうしようか？」

今までは浜辺などに設定していたが、これでは移動時間に部活の多くの時間を取られてしまう。なるべく学校内がいいのだが……既にほかの部活が使っているケースが多々であった。

「屋上はダメですか？」

ルビイの提案に同意していく千歌たち。まさか屋上とは盲点であった。

「もしだめなら、理事長に頼み込めばいذار……へへへッ」

「ええ……」

一眞の権力に物言わせようとする姿には苦笑いであったが。

「ずいぶん広いんだな〜」

屋上にはもちろん人は居らず、何より広々としたスペースがそこには広がっていた。

「富士山もくつきり見えるね〜」

日差しがちよつと強いが、それがいいのだと千歌は言う。

「気持ちいずら〜」

日差しで暖かくなった地面に寝っ転がる花丸。一方一眞は屋上から見える景色を見ていると

『オレは——』

『すごいだろこの——』

『よろしく、シリ——』

ノイズがかった映像が頭の中を流れていく。それは妙に懐かしい気がして、そして何

より――

「カズくん？」

ふと誰かのかけてきた声で我に返る。

「大丈夫？ ボーツとしてたみたいだけど……」

「あ、ああ大丈夫だよ。練習始めるのか？」

頷く曜を横目に背伸びする一真。

「あのさ……」

「なに？」

彼女はジエスチャーで目の下を指さした。それが自分の顔をさしているかわかったので、すかさず手を当てる。すると奇妙なことに、一筋の涙が流れていたのだった。

「なんだ……これ？」

「潮風が目に沁みちやったのかな？ それより始めよ！」

いつもの調子で氣遣ってくれる曜を見ながらも、涙のことを不思議に思う一真だった。

練習を始めてみると、ルビイは初めてとは思えないほどにダンスをやっている。やはりスクールアイドルが好きとのことなので真似ていたことによる影響だろう。花丸も

なんとかくらいついて行くこうとしている中に、楽しさが含まれていたことを誰もが目にしていた。

「これいつきに上ってるんですか!？」

場所は変わり淡島。因縁深き階段ダツシユである。やはりルビイや花丸もこの長く急な階段は不安なようだ。

「もちろん」

「いつも途中で休憩しちゃうんだけどね」

胸を張るが曜の真実にえへへと苦し紛れの笑いを出す千歌。

「まあ、こつちもまだ始めたばっかだしな。これからだよこれから」

フォローを入れておく一真にも「まあ一真くんも登れてないんだけどね」と梨子が言う。

「さあ、μ s 目指してー!!」

と千歌の声と共に駆け上がる。

「どうしたの?」

ルビイが脚を止めるとそれを曜が気にするが「先に行つててください」とお願いする。彼女は遅れてしまった花丸を待っているのだ。

「ルビイちゃん？」

「一緒に行こう」

笑顔でそう言ったルビイ。しかし花丸は彼女のその誘いを断る。当然、そのことにルビイは困惑する。

「ルビイちゃんはおもつと自分の気持ちを大切にしなきゃ」

花丸がずっと彼女を見てきたからこそ言える言葉……。しかしルビイも否定したい気持ちと認めたい気持ちがせめぎ合う。姉が嫌いだから……。でも自分は……

「だったら前に進まなきゃ」

まっすぐな瞳でルビイを見つめる花丸。

「さあ、行つて」

——彼女の背中を押してやるための……精一杯の笑顔

「で、でも……」

「さあ」

彼女の言葉や表情、想いに突き動かされたルビイは先を見据え、階段を駆け上がっていく。

そのひたむきに、駆けあがっていくルビイの背中を見た花丸は満足そうに登ってきた階段を下りていくのだった。

花丸が下りていくところには一真が立っていた。彼は花丸に何か言いたそうにしている。

「もしかして、一真さんは知ってたんですか？」

私の考えを見抜いていたのかと、聞かれるが首を横に振る。

「別に、ただの勘だよ勘。なんとなくそう思っただけ」

「オラはルビイちゃんが辛そうに……好きなものに蓋をしている姿を見たくなかったんです」

だから彼女は体験入部と言って彼女を誘い、背中を押してやったのかと……。

「一真さんも早く行ってあげてください。ルビイちゃん、人見知りだけいい子なんです。だからいつかは一真さんとも話せるようになると思うので」

そう言つて横を通り過ぎる彼女に一真は問いかけた。どうしても聞いておきたかったのだ。

「花丸は!? もういいのか? スクールアイドル……」

「マルの……役目は終わったのもう、本の世界に戻るんです。それで……いいんです」
その姿に何も言えず、一眞は見送ることしかできなかった。

「なんですの。こんなところに呼び出して」

花丸が下つていくと、声をかけられる。中腹あたりに設けられたベンチに座っていたのは黒澤ダイヤであった。会話から察するに、彼女も花丸に呼び出されたのだろう。

「ルビイちゃんの話、彼女の気持ちを聞いてあげてください」

それだけ伝え終えると、彼女はダイヤのことも気に留めずに走り去ってしまった。

「そんなの……わかってる」

ポツリ、とそんな言葉をこぼしてしまう。

「お姉ちゃん!」

しかし彼女の表情は、ルビイの声を聞くとすぐにいつもの厳しい表情へと戻ってしまった。

「これはどういうことですか?」

何故スクールアイドルをやっているのかを聞きたいのだろう。しかもルビイは無断

である。

「私が「千歌さん」

ルビィに止められた千歌。そして、前へ踏み出していく。

「ルビィ……」

彼女^{花丸}の言葉を思い出し、姉の目をまっすぐ見て伝えた。

「ルビィね——」

くく

「よろしくお願いします」

翌日、部室では入部届に名前を書くルビィの姿があつた。自分の気持ちに嘘をつかず、姉に自分がなにをしたのか、どうなりたいのかを恐れずに伝えた結果だ。その証拠に、彼女の表情は晴れ晴れとしている。

ある一点を除いては

「そう言えば、国木田さんは？」

梨子の言ったことに何か心残りがあるかのように反応するルビィ。

「行つてくればいい」

視線がすべて一眞へと集まる。

「行つて伝えててくればいい。ルビィが背中を押されたように、今度は花丸の背中を押してやれ」

大きく目を開いたルビィ。そして次の瞬間、部室を勢いよく出ていく。

「カズくんは昨日でも花丸ちゃんを説得できたよね？ でもしなかったのは……」

「俺よりルビィやみんなの方が適任だろ？」

曜の言葉に微笑んで返す一眞。

確かに昨日の時点で花丸を説得できたのかもしれない。しかし、そんな出会つてすぐの人間よりも長年一緒にいるルビィや彼女に近い立場の人間の方が適任だろうと一眞は思ったのだ。

図書室。

スクールアイドルの雑誌を寂しそうに見つめ、自分はもういいからとゆつくりと本を閉じようとする花丸。

「ルビィね！」

突然、自身の横から聞き慣れた声が聞こえ顔を上げる。

「ルビィね、花丸ちゃんのこと見てた！」

無理してやっているんじゃないか、合わせているのではないか……ルビィは心の内を吐露する。

——だが

「練習にいた時も、屋上にいた時も、みんなと話しているときも花丸ちゃん……嬉しそうだった！」

そんなことは無かった。彼女は、彼女は好きだったのだ。スクールアイドルが。それもルビィと同じくらいに……

花丸は体力がない、と自信が向いていないと訴える。

けれど、雑誌に書かれていたスク^星ールア^空イドル^凜も自分と同じ悩みを持っていたことを知った。

「好きだった、やってみたいと思った。最初はそれでいいと思うけど？」

「図書室に到着した梨子が呼びかける。

「ルビィ、スクールアイドルがやりたい！ 花丸ちゃん!!」

最初は些細なきっかけでいい。興味があつたや好きだからだとか、やってみたいとか……。純粋な好奇心からで。向いてない、できるかわからないは二の次だ。

「一番大事なのはできるかどうかじゃない。やりたいかどうかだよ！」

そう言つて差し伸ばされた千歌の手を、花丸はとつた。自分が……スクールアイドルをやりたいから。

「じゃあいくよ」

千歌は声と共にエンターキーを押す。正式にA q o u r sとしてスクールアイドルのランキングに登録したのだ。画面には『RANK 4999』と表示される。そのスクールアイドルの多さに、圧倒される一同。

「さあ、ランニングいくぞら〜！」

しかし花丸はそれに怖じることなく、ランニングするために発破をかけた。

先は長く険しいこと間違いなしだが、彼女たちなら乗り越えられる。そう感じた一貞だった。

く
く

彼女たちがランニングしていると、突然空から光の柱が降ってきた。

「うわ、なにになに!？」

突然のことにパニックになる千歌たち。

「き、機械ずら………」

光が消えていくと、そこには鉄のロボットが佇んでいた。

「あ、あれは………」

一真は驚嘆し、そのロボットを見つめる。それもそのはず。あれはかつて自分が倒しているのだから。

中心の三連のガトリングが鈍く輝き、起動した無双鉄神インペライザーは街を破壊していくためレーザーを発射する。響く轟音に、立ち込める煙。そして伝わる爆発の熱

風。

「また怪物!？」

「ピギイツ!？」

こちらにも伝わってくる衝撃に、うろたえる一同。そこに一眞は声を張り上げて言った。

「はやく逃げよう!」

「う、うん……!」

「そうだね……」

彼の言葉で我に返った一同は、その震えそうな足を動かしてインペライザーから逃げていく。

しかし、その巨体と人間では一步の距離に差が生まれる。いくら逃げててもインペライザーとの距離は離れない。むしろ近付いてすらいる。それを感じ取った一眞は千歌たちから離れ、人気のない場所へと移動した。

「あれ、一眞さんは!？」

彼がないことに気付いた花丸は辺りを見渡す。

「カズくん、また誰かを助けに……!？」

信じているとはいえ、無言でいなくなつたことに憤りを覚えた千歌。

刹那

インペライザーと相対して土煙やO状の光を出しながら何者かが着地する。それは紫や赤、銀色の身体に金色のプロテクターを付け、胸元にはこれもサークル状の青い水晶を身に付けた戦士だ。

「来た……」

「私たちの……」

「ウルトラマン」

内浦の大地に立ったオーブはインペライザーへと構える。

インペライザーもオーブの姿を確認すると妙な機械音を上げてこちらへと向かってきた。

（今度こそ倒し切つてやる！）

オーブはジャンプし、高所からの勢いをつけたチョップをインペライザーの脳天にお見舞いする。続けざまに胸元に殴打や横蹴りを繰り返していくが、先の戦いと同じくびくともしないのだ。

オーブは攻撃を続けていくがどの攻撃も腕にガードされたり、軽々と躲されてしま

う。躲されるだけならまだしも、段々とカウンターを受けていく回数が増えていく。

(このっ……！)

オーブは地面を力強く蹴り、スピードと威力をブーストさせた渾身の右ストレートを振るった。

だがその攻撃も当たることは無く、逆にガラ空きになった背中にインペライザーの拳が振り下ろされる。

「グオツ!」

巨大な轟音と共に地面に伏すオーブに、インペライザーは攻撃の手を緩めない。まるで甚振られるかのように踏みつけや、蹴りがオーブへと襲い掛かる。

だがなんとかインペライザーのバランスを崩すことによつてその場を脱出。体制を整えることができた。

前回は攻撃が効かなかったものの、これほど動くことは無かった。しかし今は避けてばかりいたのが徐々にカウンターを使い始めてきたのだ。

これはまるで……

(読めてますってか……)

「どうだい……これが機械の強みつてとこかな。倒されても学習し強くなる。ラーニングするのは恐ろしいよね。パターンも分析できちゃうんだからさ……」

遠目で見ているアオボシはニヤリと口角を上げた。

形勢が逆転。今度はインペライザーの猛攻を必死で躲している。あの硬い鉄拳での攻撃をもう何発も受けてはいられない。だが、インペライザーの攻撃の速度も徐々に上がっているように感じた。

瞬間、頭部のガトリング砲から発射されたビームによってオーブは後方へと吹き飛ばされる。

(しまった……遠距離もあるんだった……)

避けることに精一杯で遠距離武装のことが完全に頭から消失していたことに、一真は自分を殴りたくなる。

オーブのその姿に千歌たちにも不安が募っていくのだった。

「これじゃオーブが……」

「何度も地面へと倒れているオーブを見ると『敗北』という未来が迫ってくるようだった。」

「で、でも……ウルトラマンを信じるしか……」

「そんなルビイの声が巨大な音と共に溶けていく。」

（これなら……）

「スペリオン光輪を腕の関節部へと投擲する。見事に命中し、右腕が地面へと落ちる。チャンスと見定め、再び接近していく。」

しかし

「腕は宙に浮き、最初から切断されていなかったかのように綺麗に接合したのだ。そして右腕は奇妙な音を立てて、なんと大剣『インペリアルソード』へと変貌したのだ。」

「……!?!」

その光景にはオーブやAqoursの全員もが驚愕した。

「そうだよ。これがインペライザーの恐ろしいところさ！ 存分に楽しみな！」

「アオボシはついに種明かしができたかのような喜びで声を張り上げた。」

「繰り出される剣撃を避けられないと感じ取ったオーブはスペリオン光輪を右手に持つて受け止める。しかしその剛力から繰り出される圧は相当なものであり、スペリオン」

光輪が砕け散ってしまおう。

(もう時間が)

迫りくる限界。しかし鉄神はこちらの都合を考慮してくるほど情があるわけではない。

宙返りで距離を取りエネルギーを貯めた。

(スペリオン光線ッ!!)

直線に放たれた熱線は肩に付けられたガンポートを吹き飛ばすことに成功。

しかし再生能力が起動し、元通りに修復されてしまった。

(なっ……!?)

「フ、フフフッ……」

カラータイマーの点滅が始まり、なす術無しと立ち尽くすオーブ。

終わりだと宣言するかのように放たれたガトリングガンからのビーム。

—— 刹那

最後の抵抗としてミラウォールを生成し跳ね返したビームは肩の“とある装置”

に直撃する。

すると突然エラーを起こしたかのように動きが止まるインペライザー。

フラフラとオーブも力尽き地に倒れる。その後光の粒子となって消えてしまった。

「チツ、侵略連合め……十分な整備をしておかなかったな」

提供元の不備に舌打ちをするアオボシ。目の前で案山子のように立ったインペライザーは光の柱によつて消えた……否、“回収”されたのだった。

「カズくん！ どこにいるのー！」

「一真さーんどどこにいるずらく!?!」

怪獣が去つても戻つてこないことに心配した千歌たちは一真を探していたが、一向に見つかる気配がしなかった。

もしかして……と最悪な場面が頭をよぎるが頭を振つてかき消す。

「千歌ちゃんっ!?!」

すると遠くから梨子の気迫迫った声が聞こえた。ただ事ではないと、走って向かう千歌。

「嘘……」

「そんな……」

「せ、先輩……」

スツ……と嫌になるくらい明確に、血の気が引いていくのがわかった。

——そこには血を流して倒れている一眞の姿があったのだ。

第8話 紅ノ戦意

「どうしたんだい？」

アオボシはこのところ常に行動を共にしているピンク髪スの少女カへと話しかけた。

「別に」

短く、そして冷淡に返されてしまう。しかし彼は懲りることなく話かける。

「どうあれ、ウルトラマンは倒されたんだ。よかったじゃないか」

「でも……私の手で倒したかった」

「君の手ではなく、君が」 召喚した「怪獣や魔王獣で……だろう？」

彼の訂正にイラつときたのだろう。スピカは無言で睨みつける。

「まあそんなに怒らないで。大丈夫、彼は生きてる」

どこにそんな確信があるのか……スピカは疑問に感じていると彼は続けた。

「魔王獣を倒したんだ。あんな鉄くずに負けるとは思えないね」

「ずいぶん信頼しているのね」

「僕の仮説が正しければ、アイツは幾度となく立ち上がるよ」

彼の放った言葉は信頼にも嫌悪にもとれた。

「それに、君もその方がいいだろ……だって、君はウルトラマンに復讐したいから」
アオボシの発した言葉を受け、無言になるスピカ。

「ウルトラマンに家族を殺された」復讐」を……ね」

ねつとりと絡みつくようなトーンでアオボシは言う。

「……」

彼女は無言でありながらも、拳はこれまでかという程強く握られていた。

くく

目の前の爆炎や立ち込める煙……そして悲鳴を上げて逃げる人々。

それは、これまでの状況と似ている。そう、似ているだけ。

自分がオーブになった日から見ているそれとは多少異なっている。一番顕著な違いは服装。見たこのとないような民族の衣装を着ているのだ。加えて後ろに見えるのは、巨大な船と……獰猛な怪獣たち。

早く倒さなければ——

脚を踏み出すが、肩を掴まれ止められる。

「お前が行ってどうする」

でも逃げるだけなんて……声が出ているかわからないが、口を動かす。

「なら方法はあるのか」

オーブリングを出そうとする

しかし——

無い。いつもなら手に持っている筈なのに今は手元がないのだ。それに腰に付けていた筈のホルダーも消えている。

追い打ちをかけるように、自分の口は勝手に動き「何もできない」と話したようだった。

そんな……自分にはオーブに変身する力が無いというのか。だが先ほど自分はオーブに——

ノイズが走り、目の前の景色が変わる。

次の瞬間目に入ってきたのは、自分がよく見ている場所……内浦だった。

「
どうやら自分は会話中のようだった。これは回想……なのかただの夢なのか自分でよくわからない。しかし、かといつて夢という程現実から離れたものでもないと感じられた。」

そして隣にいる誰かと話しているのはわかる。だがまったくと言っていいほど話している人物誰なのか、男なのか女なのか、自分とどんな関係なのか……その全てがわからないのだ。すべてが黒い影となって表れているのだ。

隣に座っている“誰か”は立ち上がり、背伸びをする。そして自分に向かって語りかけた。

「そうだな……■の夢は——」

「はっ……!?!」

目を覚ますと、まず最初に白い天井が目に入った。数秒後に何かで頭を殴られたかのような鈍痛が走る。

痛さによる気持ち悪さと体の倦怠感を感じながらゆっくりと起き上がる。

「うっ……」

再度頭を走る痛みを漏らす。

見回してみると、カーテンに閉じられた簡素なベッドの上……どうやらここは病院の一室のようだ。自分がここに至るまでの経緯を推測する。

「あの鉄野郎……」

インペライザーとの相打ちの結果、力を使い果たし、おまけにダメージを追ってここに担ぎ込まれたのだろう。

「相打ちなんてもんじゃないよな……」

あれは相打ちなんて言えるものではなく、敗北と言った方がいいのだろう。インペライザーの動きがおかしくなるような状況が起きなくても、一眞はこのように倒れていた。であれば、あの鉄神が内浦を蹂躪してしまうという最悪の結果になっていた筈だ。

「……」

自分の力なさを痛感した一眞は、自然と拳に力が入る。彼女たちが新たな一步を踏み出した矢先、自分がこのような醜態を晒してしまった事……そして何より、自分の力が奴に及ばなかったことがどうしようもなく悔しかったのだ。

ガラガラと病室のドアが開く音が聞こえ、足音は徐々に近づいてくる。そしてカーテ

ンが開けられるとそこには

「カ、カズ……くん？」

千歌や曜、梨子が立っていた。彼女たちはとても驚いた様子でこちらを見てきているが、一真はいきなりの状況でどうしようかと咄嗟に

「……よっ！」

と声をかけたのだった。

ノソノソと近づいてくる千歌に、さすがにあの挨拶は怒られるかと身構える。
が

「よかった！ よかったよっ!!」

胸へとダイブされ泣かれてしまった。

「ど、どうしたよ。そんな大げさな……」

「大袈裟なんかじゃないよ!! ホントに大変だったんだからねっ!」

千歌に迫られてしまう。曜や梨子も安心したという表情を浮かべており

「千歌ちゃんの言うことはホントよ? 私たちだって心配したんだから」

「なんか練習も身に入らなかつたしね」

と言われ事の重大さに気付かされる。

「……ごめん。今のは軽率だったな。それにこんなことになって……」

謝る一眞に「わかったから今は休んで」と梨子が言う。

「早く治してマネージャーに復帰してよね！」

「確かにカズくんいないと回らないかも……」

涙目で訴える千歌。それを見て笑顔を取り戻す曜。

「ケガの方は大丈夫？」

話題がひと段落すると、曜はケガの具合について聞いてきた。

「う、うん。大丈夫っぽい」

半分嘘ではあるが、もう半分はホントだ。

「昔っからケガの治り早いもんね〜」

曜は笑いながら言う。隣の梨子は「そうなの？」と尋ねてくる。

「カズくんはケガしてもすぐ治っちゃうかも」

千歌も記憶を掘り起こしながら答えた。

「男の子だからかな？」

「なわけ……」

一眞は苦笑しながら否定する。

しかし、思い返してみれば彼女たちの言ったように怪我の治りは早い気がする。これもオーブと関係あるのだろうかと考えてみるが、どこまで行っても憶測でしかない。

「そうだ、忘れてたわ。これ、今日の分の授業」

そう言つて梨子を取り出したのはノートであつた。そこで今日が普通に平日であり、授業日であつたことを思い出す。

「あ、ありがとう」

「じゃあ、そろそろ行くね」

「帰るのか？」

「うん、もう時間も遅いし」

外を見ると暗くなり始めていた。自分は随分長い時間眠つていたのかと思ひ知らされる。

「バイバーイ！」

「またねー」

手を振りながら部屋を出ていく彼女たちを見送る一眞。

再び戻る病室の静寂。一眞は心を落ち着かせると、ベッドに仰向けになり彼らや怪獣のことに思ひを募らせたのだった。

くく

翌日は果南が見舞いに来てくれた。

「ケガしたくなんて千歌に言われたからビックリしちゃったけど、なんともなさそうだね」

「俺のケガってそんなに治るの早い？」

「周りの子と比べたら結構早い方だと思うけど？」

「マジか……」

そんな他愛のない話は、いつしか学校の話へと変わっていく。

「変わりない？ 学校は」

「特に変化は……」

変化は起きてないと言いかけたところで、大きな変化（個人的なもの）を思い出す。

「でも、スクールアイドル部は承認された……ってこれは千歌から聞いたか」

千歌が立ち上げたものがどんどん大きくなっていく。ファーストライブが成功し、人数も増えた。それが一真には嬉しく、今までにない感情を湧き立てていたのだ。

「……そうなんだ」

「新しく入った子も、まだ見ぬポテンシャルを秘めてる……。マネージャーとして早く復帰したいよ」

「頑張ってるね。それに……やっぱり変わったよ、カズは」

「そうかも」

果南は店があるようで早くも帰ってしまう。

「……」

また聞きそびれてしまった。果南には何かあると思いながらも、彼がその話題を吹っ掛けられないままいつも話が終わってしまうのだった。

「こりゃ、触れんでくれってことか」

もう時が来るまで聞かないでおこうと諦める一真はベッドに横になる。

数分後、またもやドアをノックする音が聞こえた。

「どうぞー」

千歌たちなのだろうか。だとしたら来過ぎだろ……なんて考えている間にドアが開いた。

「こ、こんにちは」

「……ど、どうも」

「花丸と、ルビィ!? どうしたんだ?」

そこには加入したての1年生。花丸とルビィが来ていたのだった。

「成程ね。交代で来たわけか」

「千歌さんたちの方がよかったですか?」

「そんなことないよ。逆に花丸たちは嫌じゃないのか?」

同じ部の人とは言え、そんな見知った仲間でもないのに来るのは嫌だったのではと感じた一眞は尋ねてみるが「そんなことないすら! っ!?……ないです」と答える花丸。

「花丸、別に喋り方を無理に直す必要ないからな?」

「はい……ありがとうございます」

すぐにとはいかないが、まあ時間をかけていけばいいかと決め、笑う一眞。

そこからは、花丸やルビイたちの話へと話題が向いていくのだった。

「へえ、じゃあ2人は結構前から知り合ってるんだね」

出会いは中学生の時。花丸が図書室から出ていこうとするときに、棚の陰でスクールアイドルの雑誌を読んでいたルビイを見かけたのがきっかけらしい。

昔から変わっていないことに微笑ましくなる一眞。そんな自分が若干キモイと心中で戒める。

「お互いがお互いを思いあつたってわけか」

どちらも友人の思い知っていたからこそ、1人は背中を押し、1人は手を差し伸べたという行動につながったのかと納得する。

それにしても“2人がスクールアイドルをできている”ことに感激する一眞。

「長年の付き合いつていいね……」

「か、一眞さんは千歌先輩たちとどうやって知り合たんですか？」

珍しくルビイが訪ねてきたことに驚きながらも、一眞は千歌や曜たちとの出会いを思い出す。

「うーん、なんとなく？　なりゆき……かな」

「なんとなく……ですか」

「そう。俺は——」

一眞は語った。記憶が無くなり、家族すらわからない状況で最終的に千歌の家に引き取ってくれたこと。そこから千歌と話すようになり、曜とも話していく仲になり……それがいつしか今の仲を作り上げていったこと。

「そんなとこだよ」

「なんか申し訳ないずら」

「すいません……」

聞いてしまった事に罪悪感を感じている花丸とルビイには気にしてないと告げる一眞。

「なんか昔のこと思い出せて楽しかったよ」

その後もたくさんのお話をしてくれた2人。そこにはもう、最初に感じていたような緊

張はなかった。しばらくして、花丸やルビイも帰ると言い、病室を後にした。

何度か訪れた静寂。すると彼はベッドから立ち上がり、背伸びをして窓の方へと歩いていく。

外の景色を見ようとした彼の目線の先に映ったのは、以前と同様の光の柱とそこから現れる鉄の巨体……。

「あれは……」

インペライザーが沼津の街を蹂躪しているのだ。肩や頭から発射されるビーム、そして腕の大剣で街を破壊していく。街からは赤と黒の煙が立ち込める。

さらに遅れるようにして怪獣の警報を伝えるサイレンもなり始めた。

——行かなければ。

そう思いながらも、一眞の脚が動かないのはあの“敗北の記憶”があるからだ。今度こそ……今度こそは本当に負けるかもしれない。そんな不安と恐怖が彼の脚には絡み

ついでいた。

しかし彼の目の前に広がる景色……数秒前とはまるで別物の街の様子。それを見てしまった一眞。

勝てるとか、勝てないとかは考えることではない。やらなければいけないのだ。誰かを護れる力を持つている自分だから、あの巨大生物に立ち向かう力を持つているのだから……それが自分の……” 暁一眞 ”の——

「俺の……やるべきこと」

覚悟を決めた一眞は逃げたい心をなんとか抑えつつ、外へと駆けていく。

巨大な鉄兵を見上げ、彼はオーブリングを空高く掲げた。

ウルトラマンオーブ スペシウムゼペリオン

地上に降り立ち、構えをとったオーブに目標を定めるインペライザー。

手始めにとガンポートから発射される二発のビーム。それをスペリオン光輪を使って誘導、相殺させる。相殺によって起きた爆発の中を突っ切り、オーブは至近距離へと一気に間合いを詰めた。

「やっぱりだ！ “君”であれば再び起き上がると思っていたよ」

オーブが再び現れたことに嬉しさを感じているアオボシは叫んだ。目の前で繰り広げられている戦いをじっくりと観察しながら、彼は確信を掴んでいた。やはり……と。前までは小さな可能性の話だったが、戦闘データを繰り返し見ていくたびにそれは確信へと変わっていったのだった。

「また会えてうれしいよ……」

彼から滲み出した負の感情は、インペライザーとシンクロするように、オーブへとダメージを与えていた。

「花丸ちゃん、どこ行くの!?!」

一眞の入院している病院から帰る途中で、インペライザーの襲撃にあつた花丸とルビィ。彼女たちは「本来であれば逃げるべき方向」とは逆に、その足を進めていた。

「絶対、絶対あの怪獣には何か弱点があるはず……！」

息を切らしながらも花丸はそう告げる。破壊しても再生する体をもつあの鉄兵。しかしあれが未知の存在であつたとしても、無限に再生ができるというはずではないと彼女は考えたのだ。

「見つけないと……オーブがやられるぞら！」

そう言つて彼女は、自分の持てる限りの体力を使つて走つていくのだった。

オーブの振りぬいた左足がインペライザーの腹部を捉える。だがその衝撃をもつてもせずに、インペライザーの右腕「インペリアルソード」が振り下ろされるが右腕で逸らし、カウンターとして左腕を顔付近に打ち込む。

さらに手から光弾を発射させ、ガンポトへと当てるが、その攻撃も虚しくガンポトは再生してしまう。

「……!?!」

その光景を目にしていた花丸とルビィ。

「ねえ、見た花丸ちゃん!」

「見た……肩が光ってたずら」

そのわずか数秒の点滅を見た2人は、オーブに伝えようと近くまで走っていった。自分たちがいかに危険なことをしているのかは百も承知だ。しかし、このわずかな可能性に賭けなければオーブが敗北してしまう。その思いが、自然と恐怖と言った感情を押しとどめ彼女たちを動かしていた。

(くそ……破壊しても再生される……こんなやつどう倒せばいいんだ)

距離を離しインペライザーに構えを取るオーブ。どの攻撃も効果がなく、破壊しても再生される特性に苦しめられる。

瞬間——、距離を離していたインペライザーの上半身が360度の全方向へと回転しだしたのだ。加えてその素早い回転だけでなく、ガンポットや頭のカトリングガンからビームを乱射している。自身の周りにもあるもの全てを破壊し尽くそうとする荒れ狂った光弾の雨『バニシングサークル』だ。

オーブもその攻撃を避けようとする、しかしその強化された視力が後ろに立つ花丸たちを捉える。

(危ないっ!)

オーブは咄嗟に彼女たちの前に立つ。

無造作に放たれた光弾が辺りに着弾し、爆発が一面に立ち上がっていく。インペライザーの回転が止まると、黒い煙が辺りに立ち込めていた。

煙が消えていき、あたりの詳細が露わになっていく。インペライザーによつて一帯が全壊した中、バリアを張ったオーブはカラータイマーを鳴らし片膝をついていた。

「ウルトラマン……」

心配そうに見つめるルビイだったが、オーブは彼女たちの無事を確かめるために振り向いた。

（なにやってるんだ……！… こんなところで!!）

「ウルトラマーン!!!」

自分でも信じられないほどの声を出し、花丸はオーブへと告げた。

「肩の光っている装置を狙ってオーブ!!」

続いてルビイも声を上げてオーブに伝える。

（2人とも……）

この二人がインペライザーの弱点を探し出したことを理解したオーブ。

このような危機的状況でも……否、だからこそ勝利を信じて託してくれる人がいる。そしてその勝利は、かけがえのない人たちを護ることにつながる。例え身近な人たち

だったとしてもそれは変わらない。そしてスクールアイドルという彼女たちの――

（みんなで描く夢を……守りたい……!!）

この胸で燃える熱い想いがある限り、決して逃げない――そうオーブ^真は今一度決意する。

するとホルダーからカードが2枚出現する。それは、過去にマガバツサーとマガグランドキングを倒したときに手に入れたカードであった。

「よし……この力でアイツを倒す！」

カードを手に取り、オーブリングへとリードさせる。

ウルトラマンタロウ

ウルトラマンメビウス

2人のウルトラマンの力を集め、黄色へと発光したオーブリングを天高く掲げる。

フュージョンアップ

両端の翼が広がり、タロウとメビウスの力がオーブへと集約され新たなボディを形成していく。

ウルトラマンオーブ バーンマイト

空高く飛び上がり何回も空中で回転、そして体をひねり威力を底上げしたキックをインペライザーに食らわせ地面へと倒れ伏した。

インペライザーのが倒れ、オーブの着地と共に大きな衝撃と砂埃で2人は目を覆った。数秒後、目を開いた彼女たちは視線を上にあげる。

「……………?!」

「か、変わってる……………」

さつきまでのヒロイックな立ち姿とは違い、筋肉質で赤い体の巨人が佇んでいた。そして目を引くのが頭部の巨大な2本の角。

「あたらしい姿……………だよね」

大きく変わった姿に2人は見上げたまま立ち尽くしていた。

ウルトラマンNo.6と言われている彼と同じような2本の角『ウルトラホーン』を頭に備えた深紅の体に、かつて地球人との絆をその体に描いた勇者のような金色のファイヤーシンボルをもったオーブの新形態がこのバーンマイトだ。

(コイツで……倒してやるぜっ！)

立ちあがるインペライザーを目で捉えながら接近していくオーブ。

接近を阻止しようと、ガンポートから放たれるビームを手前でクロスした腕で防ぎながら突進していく。

(うおらああああああああああつ！)

地を蹴り、引き絞った燃える左腕をインペライザーの体へと放つ。

衝撃波が走り、焼け焦げた体の鉄兵は後方に追いやられる。

(段違いのパワーだ……これなら……いける！)

純粋なパワーと炎をの力を持ったこの形態では、鉄兵に大きなダメージを与えることを確信したオーブ。インペリアルブレードを簡単に避け、カウンターを食らわした。そのよろけた体に何度も、何度も、何度も、パンチを繰り返す。

(まだまだ!!)

さらに腰を掴んで転倒させ、飛び上がってエルボー・ドロップをお見舞いした。

ガトリングガンの攻撃で後方へと避けるオーブと無表情で立ち上がるインペライザー。

(コイツで……)

オーブはエネルギーを体前方へとため込む。虹色の帯が炎を球体を包み込み、徐々に巨大化。

狙うは肩の装置。次再生されないようにと、装置含めて体全体を跡形もなく燃やし尽くすという彼の意志が火球の温度を上げていく。

(ストビューム……)

膨れ上がった巨大な火球を、彼はこれでもかという声で無意識に技名を叫び放った。

(バーリーストオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!)

インペライザーを包み込むようにして直撃し、何かが収縮する音と共に巨大な爆発音が響き跡形もなく燃え尽きたのだった。

オーブは花丸とルビイの方へと向き直る。そして感謝や安心の意を込めて頷いた。その姿を見た2人も笑顔で手を振っている。それを見届けると空高くへと飛翔していったのであった。

くく

「久しぶり……っていつても3日いなかったただけだよな」

浦の星に登校した一真は教室で千歌たちと話していた。

「3日かく私だったら勉強ついていけないよ〜」

「いや、ちゃんとノートとれよ……」

声を震わせて言った一真の横で曜や梨子が

「今日からスクールアイドル部にも復帰よね?」

「カズくんがいてやつと部活が回るよ〜」

と言われる。ずいぶん頼りにされているようだ。

「あのなあ……」

ため息を吐きつつも「任せろ」と言い放つ一真。

そこは迷いのない晴れやかな顔があつたのだつた。

第9話 立ち入り禁止！怪獣水源！！

「……………」

自然と意識が覚醒し、眼が上がる。少しの眠気とベッドへの誘惑を振り切り、暁一眞は顔を洗うために洗面所へと足を運んだ。

顔を洗い終わると、ふと鏡で自分の顔を見る。

——やはり今日もか。

記憶を失って3年が経ったが、記憶が戻るそぶりは見えない。千歌や曜に仲良くしてもらっているが、やはり記憶がないことへの孤独感は消えないのだ。そもそも暁一眞という名前も本当の名前ではない。

かといって全く手掛かりはないのか……と言えば嘘になる。些細な手掛かりは、あのノイズまみれで脳内に流れるビジョンだろう。しかし自分には全く心当たりがなく、詳細すらもわからない違和感に悩まされている。

「こんなこと……はじめてだもんな」

そう、あんなものが脳内に流れてくることなんてこれまでの3年間にはなかった。いつからと聞かれればそれは――

「ウルトラマン……」

自分がオーブへと変身を遂げる前後が初であった。これにいったい何の関係があるというのだろうか。ひよつとするとウルトラマンになり続ければ記憶が元に戻るのでは……? なんて考えてみるが、そんなバカバカしいことがあるはずもない。

「はあ、どうすれば……つと時間」

ため息を吐いて時計を確認した一真は慌ただしく自分の部屋に戻っていくのだった。

くく

「うへえ……」

「千歌ちゃん、どうしたの?」

教室の机に頭を伏せている千歌に尋ねる曜。その伏した今の彼女は溶けたアイスのようだった。

「最近妙に暑くない? まだ夏は始まってないよ?」

「そう言われればそうよね。ニュースでも言ってたわよ。今の天気は少し変だって」
梨子も例年より早い猛暑を不思議に思いつつ、ニュースでも報道されていたことを伝える。

「ここ最近は謎に暑い。まだ7月に入つてすらいらないのに真夏並みの気温を記録しているのだった。下手をすればそれ以上……。」

「今だったら海に入つても問題ないと思うよ梨子ちゃん」
「なんでその話を蒸し返すの!？」

「気だるげに言った千歌に反応する梨子。4月に海の音を聴こうとして単身海へと入ろうとしたことが梨子にはあつたらしい。たしかに4月では冷たすぎるが、今の気温なら大丈夫だろう。」

「カズくんは……つてこつちもか!？」
「なくに〜?」

「曜がそうリアクションするのも無理はない。一真も千歌と同じように、顔を机に伏している。やはりさながら溶けたアイスだった。」

「だって暑いんだもん! こんな飲まなきややつてらんないつすよ!」
「言い方おじさん……。」

苦笑する曜は両端で溶けたアイスで挟まれているのだ。

気だるげな2人がいる中、授業の合間に設けられた休み時間が終わりを告げようとしているとき、事件は起こった。

「きやあああああああああああああああ?!?!?」

突然、廊下の方から何人かの生徒の悲鳴が聞こえたのだ。

「え、なに!?!」

「なにかあったの!?!」

いつものじゃれあっているときの悲鳴ではない。これはガチの方の悲鳴だ。それを聴きつけた曜や梨子は廊下へと駆けていく。

「え、なんだ?」

「さあ〜」

暑さで溶けている2人は机から動くことは無かった。しかし、再度入ってきた曜の一声で状況は一変する。

「水が、水が臭くなってる!?!」

「な……………」

「え……………」

その信じがたい現象に一真と千歌は言葉を失うのだった。

「で、水を出してから異変に気付いて、嗅いでみたら異臭がしたと……」

「そうなの。で、でもこんなことって今までなかったよね？」

「なかったけど……ダイヤさんはどうでしたか？」

一真たちは女子生徒にさっきの状況を聞いていた。加えてそこには生徒会長の姿もある。先生たちはこの原因究明のために校舎中を駆け回っているため、授業どころではないのだ。

「私もこのような状況は初めてですわ。浦の星の貯水槽になにか異常があったのか今は確認を取っているのですが……」

「まだわからない……か」

ダイヤは深刻な面持ちで頷く。

「……そうだ」

一真は何かを考えつくと廊下を歩きだした。

「どこに行くつもりですか？」

「ちよつと」

「どこに行くか聞いているんです！ 答えなさい！」

ダイヤの声が廊下に響くが、一真は足を止めることは無かった。

「ア、アハハハ……」

「すみません……」

苦笑いする千歌たちの横で梨子がダイヤに謝罪するという姿がそこにはあった。

理事長室のドアをノックすると「どうぞ」と、いつもとはかけ離れたテンションの聲が中から聞こえた。

「失礼します」

「あら、一真。今は先生たちが原因を探しているわ。生徒は大人しく待ってて」
「どうやら鞠莉にも、鞠莉だからこそ聞きたいことがわかったのだろう。」

「今は他の場所からも電話が鳴りばなしなの。どれもこれも水関連のことだね」

電話の対応が忙しいから今は来るなということなのだろう。

「……待ってください。どういうことですか?」

「水から異臭がするけどそちらは大丈夫なの?」って確認よ」

紙やパソコンに目を通しながら鞠莉か答える。

他の場所……例えば市民プールやレストラン、それに近くの水族館も被害を被っているということか。であれば、ここら一帯の……結んだ線が行きつく場所が”異臭水の源”なのだろう。

「鞠莉さん!……ここら一帯の水はどこから運ばれてきていますか!」

「そ、そうね……」

彼の机に乗り出しながら聞いてくる様に驚きつつも鞠莉は地図を出して調べていく。

「(トト)。この水源よ」

ジツと鞠莉が指さした場所を見つめた一真は、それまたすごい勢いで理事長室を出ようとする。

「ちよ、ちよつとカズマ！ 待ちなつて!？」

先ほどからの変わりように困惑する鞠莉。

「恐らく原因は水源です。このままだと言わずには日本中……いえ、世界中に広がってします!!」

原因は何であるかは未だわからない。しかし、直感が告げているのだ。ここ一帯の問題ではない……と。

「では……!？」

風のように去っていく一真にはやはり鞠莉の声は聞こえていない。

そのまま2年の教室に飛び込んでいく一真を、クラスメイトは目を見開き見つめている。

「誰か自転車できた人いないか!？」

彼の突然の問いかけにざわつくクラス。

「一真くんいきなりどうしたの?」

「わかったかもしれないんだ。水の原因」

「「ええええ!!」」

彼の答えに驚く千歌たち。

「どこなの?」

「おそらく〇〇のところの水源だ。もういろんな所の水が臭くなってらしい」

「じゃあ十^ち千万も!」

「多分な……」

自分の家(旅館)の水すらも臭くなっている状況に頭を抱える千歌。じゃあ私の家も!?!とショックを受けているのは梨子だ。

「あの、私の自転車でよかったら貸すよ……」

と、ロックを外すカギを差し出してくれた女子生徒が1人。

「ありがと。必ず返すから!!」

と教室を出ていく一真。

「で、水源に行つて何するつもりなんだろう?」

「でも原因がわかつたら対策はできるし」

「そうね」

慌ただしい一眞を見送った3人。

「ああ、ダイヤさん?!? 水は出さなつてみんなに伝えといてください!」

さらに廊下ですれ違いざまにダイヤを発見し、水を出すことによつて異臭が広がるのを防ぐよう頼む一眞。

「え、あ、わかりましたわ。でも、なんでそれをあなたが……」

「お願いします!」

「ちよつと、お待ちなさい!!」

しかし一眞は止まらず、階段を駆け下りていつてしまった。

「……もう、廊下は走らない……と書いてあるではありませんか……」

彼女の声は虚しく廊下に響いた。

「うおおおおおおおおおおおおおお!!!」

貸してもらつたピンクの自転車を自分でもあり得ないぐらゐのスピードでペダルを漕いでいた。一刻も速くつかなければ……という彼の意思が体に伝わっているのだ。

こんなに早く焦げるのもオーブの力……なのだろうか。

(でもピンクってめっちゃ恥ずかしい……でもそんなこと言つてらんねえ!!)
あまり見られたくないという気持ちもどこかにあつたようだ。

くく

水源にたどり着いた一真。そこにはさつきの水のような。まるで洗っていないザリガニの水槽”のような異臭が漂っていた。

「やつぱりここが原因で間違いなさそうだな……」

一真は服でガードしながら進んでいく。

すると目の前の湖には黄色い鱗に覆われ、まるでタツノオトシゴのような頭をした怪獣がいた。額を見ると禍々しく輝く水晶体がついていた。

「お前が原因か……」

その怪獣はなんとも気持ちよさそうに水に浸かっている。

「オイ! 迷惑も考えずに水浴びとは良い度胸じゃねえか!! ふざけてんのかよ!!!」

暑さで水分を取りたいが、怪獣のせいで水がつかえないという状況。だが怪獣はそれを知らず水浴びをする姿に一真は怒り心頭であった。

その叫びをうるさいと感じたのか、水の魔王獣マガジャツパは鼻から黄色の高圧水流

マガ水流を放った。それは地面を抉り、木々を切り倒していく。一真もギリギリのタイミングで避ける。

「いの……」

「怒ってるね〜とどろく叫びを耳にして……か？」

突然聞こえた声の主を探す一真。しかし一真が探し当てるよりはやく、男は姿を現した。

「なんだお前……？」

怪獣が近くにいるのに驚くどころかニタニタと奇妙な笑顔を見せてつける男に、一真は警戒を強めた。

「おいおい、寂しいこと言うなよ……僕のこと忘れちゃった？」

「誰なんだ……お前なんて知らないぞ」

一瞬寂しそうな表情を見せた男は、笑顔で向き直り自己紹介をした。

「……では改めて、僕の名はアオボシ。まあ他にも名前はあるけど、それはいつか」
頭を深々と下げるアオボシ。その名前に一真は聞き覚えがあった。

「千歌と曜が会った男はお前のことだったのか」

千歌と曜の口からアオボシと名乗った男と接触したことは過去に聞いていた。さらにウルトラマンオーブという名前も彼から知らされていたようだ。

「おや、彼女たちと知り合いだったのか。ホント妬けるなく……そうやって見境なく助けてんのか?」

意味が分からない。彼がどんな意図があつて話しかけているのか、一真には見当がつかないのだ。

すると刹那——

アオボシの恐ろしく速く、それでいて鋭い拳が一真の体へと迫った。

「ぐうッ……」

拳が身体にめり込んだような痛み。そして衝撃でつぶれたような声しか出ない一真は膝をつく。

「そんな半端な力じゃ、助けるどころか失うだけだぞ」

彼の言葉に脳内でノイズが走るとともに強い頭痛が彼を襲った。

「く……!?!」

「そうだ、思い出せ……お前は——」

「う………るせえっ!」

両方の痛みは残っているが、動ける程度に回復した一真。彼の大幅りの右フックがア

オボシの顔に近付いていく。が、彼は軽々とこれを回避。さらに追撃で左腕を振るうがそれもブロックされる。

「本気で来いよ。僕はそれを望んでるんだ」

「知……………るかっ!」

彼の言葉を一蹴し。その胸元に蹴りも入れるが彼は回るように攻撃を避けた。そして流れるようにしてアオボシの反撃。

だが不思議なことに彼の攻撃が読めたのだ。過去に何度かやり合ったかのように、彼の動きが予測できた。

しかし力は彼の方が上のように、腕で防いでも押し切られてしまいそうだ。

「やっぱり体は覚えている……………ってか?」

「……………!」

彼の言葉に動きを止める。だが、守りは破られないように腕に力を入れている。

「他のウルトラマンの力を借りいなきや変身できないなんて……………笑っちゃうよなあ」

「どういふことだ!」

その煽りに激昂した一真は裏拳からの再度蹴りを入れ、彼と距離を開けた。彼は自分がウルトラマンだと知っている。加えて意味深な言葉たち。彼は自分の過去を知っている人物なのだろうか。

彼に怒りがわくことは確かだ。しかしそれ以外にも……胸に込みあげてくる感情が確かにそこにはあった。

「そのまんまの意味さ。ほら、僕に構ってばかりいると魔王獣が別の場所に行っちゃうよ。」

彼の飄々とした態度に怒りを覚えながらも、一眞はマガジャツパを止めるため走り去っていった。

「やっぱり、光とやらは彼を選ぶのか……クソッ」

アオボシの悪態を聞くものは、誰一人いなかった。

「これ以上水には入らせないっ!」

一眞はマガジャツパを見据えると、空にオーブリングをかざす。

《ウルトラマンオーブ スペシウムゼペリオン》

紫の光がマガジャツパの目の前でオーブの姿へと変わる。

怪獣退治の専門家と言われた戦士の赤と銀のベースに、超古代の光の巨人の紫のラインと金のプロテクターを纏ったオーブ。

彼はマガジャツパに向けて戦闘の構えを取る。生命活動に不可欠な水を護るため、オーブとマガジャツパの戦いの火蓋が切られるのだった。

第10話 悪臭注意!?! オーブ vs マガジャツパ!!

「トリヤアツ!」

マガジャツパに向けたタツクルは見事に胸元へと衝突した。

その攻撃を皮切りに左腕、右腕と拳が頭部の鼻のように出っ張った器官へと飛んでいく。

「■■■■ ツー!!」

痛みによる声を上げるマガジャツパは腕を振りオーブへと攻撃を開始した。

(こんなのツ!)

両腕で弾き、すかさず腹部へと蹴りを入れる。さらに今度は体制を低く屈めて側面へ移動。そこからしなるような横蹴りをお見舞いさせた。

(ハ、この……ううっ)

攻撃が通るには通る。しかしこの魔王獣の最大の特徴が、既に彼を襲っているのだ。た。

魔王獣の“特徴”に襲われている事を自覚し始めているその時、奴の鼻のような器官からマガ水流が発射された。

(っ……!?)

しかし、その兆候をコンマ数秒早く捉えていたオーブは大きく後ろにジャンプ。さらに宙返りで距離を稼ぎ、マガ水流によって切断されたかのような地面へと着地。マガジャツパを見据え、再び構えを取る。

「オエツ……」

すると突然、オーブは口や鼻を抑えるという仕事を始めた。

(なんか……コイツの臭い、だんだん強くなってる?)

彼を襲っているのはそう、水をも汚染させるマガジャツパの全身から淀み出る悪臭である。今まで何とか我慢していたが、オーブが攻撃するたびに鼻から伝達されるその悪臭の強さが増しているのだった。

おそらく、攻撃していくと奴の体に纏わりついた悪臭が空気中へと拡散され、体のもとと相まって臭いが強くなっていくのだろう。

自分で考察しておきながら、攻撃したくない、アイツに近付きたくないと気が滅入っているオーブ。

そんな個人的な事情はお構いなしにマガジャツパは接近し、無情にも攻撃を仕掛けてくる。

「ウウウ、ツツツツ!!」

鼻を取りたくなるくらいの悪臭に苦しみながら、トサカ部分に手刀を繰り出していく。

「ウウ……アア……」

正直、気持ち悪い。触りたくないといふ心はどこかで叫んでいる自分もいる。後方に顔を逸らし、少しでも新鮮な空気を――

「■■■■ツーーー!」

そんな一瞬の隙を突かれ、攻撃を許してしまった。マガジャツパはムチのようにしならせた尻尾をオーブの脇腹へと当てたのだ。

(……ツ!?)

言葉にできないような痛みが彼を襲う。経験したことのない痛みを受けると、人は動けなくなる時がある。一眞は今まさにその状況であり、痛みに悶えていた。マガジャツパはチャンスと腕を力強く振るいオーブを薙ぎ飛ばしたのだった。

身長50m、体重2万tの巨体が地面へと叩きつけられたことにより、ド級の砂埃と衝撃が辺り一帯に発生した。

「■■■■ツーーー!」

上にのしかかろうとしているマガジャツパ。奴の鳴き声は今にも自分^{オーブ}を甚振ろうと笑っている声にも聞こえた。

(舐めやがって……)

首跳ね起きで素早く立ち上がると、行動への処理が追い付いていないマガジャツパに向かつて反撃の飛びまわし蹴りを繰り出した。後退させることに成功し、このまま畳みかけると地面を蹴った。

(はああああああああつ!!)

が

「ウウウツ……アアア……」

その強烈な臭いが、戦意を削いでいくのだ。そして意識すら飛びそうになり、フラフラと後ずさりしてしまう。

くく

「ウルトラマン……大丈夫かな」

「押されてる……のかな」

「口……？　なのかな。そこを抑えてるってことは気持ち悪いってことなんじゃない？」

学校の教室で待機を命じられている千歌たち。そんな中誰かが「ウルトラマンと怪獣の闘いが中継されている」と言っていたことを聞いた3人は携帯を横にしてその中継を見ている。現状を見ている彼女たちの表情は、心配や不安と言ったものを感じ取ることができた。

それは彼女たちでではなく、クラスメイトも同様……と言った感じだ。

「ねえ、そう言えばここってカズくんが言ってた場所に近いんじゃない」

ふと梨子が携帯のマップを見て告げた。千歌や曜は顔を見合わせ

「そう言われれば近いよ……!」

「うん!」

そこで、彼が言っていた言葉が不意に繋がった。

「じゃあカズくんが言ってた原因って……」

千歌の言葉に曜と梨子も察する。

「この怪獣が……」

「水が臭くなった原因……ってこと？」

それと同時に駆けていった彼の……一眞の無事を祈る3人。

くく

「ほお……随分とやるようになったじゃないか。でも、これくらいで苦戦するようじゃ理想には近づけないぜ」

マガジャツパと交戦するオーブを見て、アオボシは肩をすくめて呟いた。

「にしても……強烈な臭いだよ……」

ポケットからハンカチを取り出した彼は、スツと鼻や口を押えたのだった。

(くそっ!?)

信じられないほどの悪臭に苦しめられるオーブは、中距離からの攻撃を放つために体に力を籠める。すると体にある紫のラインが発光し、高速移動を可能とした。ティガの形態の一つ『スカイタイプ』力だ。

マガ水流と軽々と躲し、死角へと移動する。奴が気付いたときにはすでに遅く、別の場所へと移動し手裏剣状の光弾『スペリオンスラッシュ』を手から放つ。

スピード故の残像を作りながら、左右に移動したり上空へと飛び上がり、攻撃を当てていく。オーブの放ったスペリオンスラッシュは体へ着弾し、身体からは火花を上げていた。

(喰らえッー!!)

止め際にスペリオン光輪を何発も同時射出。これで終わりかと思つた矢先——
身体を丸め込むようにして黄色い鱗を目立たせると、その全てを弾き返したのだ。

(んだと……)

直後、マガジャツパは奇妙な声を上げると“目の前から消えた”。

姿を確認しようとして辺りを見るが、どこにもあの魔王獣は見当たらない。

(透明か——うああっ!?)

背後からの衝撃にオーブは地面に倒れる。背中を走る激痛に歯を食いしばりながら、オーブは立ち上がる。

今まで以上に目を凝らす、やはりマガジャツパの姿を視認することができない。肩を上下させながら辺りを必死に探していると

「ガアッ……!?!」

顔に一発。

「グウアアアッ!」

腹部に一発。

「ウアアアアアッ!」

再度、背後に一発を食らってしまう。

攻撃を受け続ける数秒の間、地面へと視線を向けたオーブはあることを思いつく。

(これだつ——!)

身体を勢い良く回転させ、土煙を上げ始めた。上空へと巻き上げられそれをオーブは周囲に向かって放射した。

するとある場所だけ、土煙が怪獣の形を取り始めたのだ。

(そこだああああ!!)

反射的に手から放たれた何発ものスペリオンスラッシュユがマガジャツパの体を爆発させ、透明化を解いたのだった。

いつだったかは覚えてないが、透明になった相手に土をかけて見破るといふ戦法を漫画かテレビで見えていたことを思い出し、それを実践したのだ。

(これでっ!)

いい加減、勝負を終わらせるためにオーブは空へと跳躍する。

《ウルトラマンオーブ バーンマイト》

カラータイマーを中心に赤い光がオーブを包み込むと、2つの角を持った形態“バーンマイト”へとチェンジした。

「リアアアアッ!!」

空中で何度も回転や捻りを加えたキックが、爆発音とともにマガジャツパの頭部へ直撃した。

(こいっ！)

燃えがる力を体現させたその体で、オーブは構えを取る。

「■■■■ ツーロー!!」

そつちこそ来い、とマガジャツパは腕を広げ、そこにある吸盤はものすごい力で引き寄せ始めたのだ。その証拠に周囲の木々や砂さえもマガジャツパへと向かっている。

(な、ちよつと、あああああ!?)

見事に腕の吸盤へと吸い寄せられたオーブは、ゼロ距離から口から出す臭気ガス『マガ臭気』を浴びてしまう。

「ウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!」

今までの何倍もの悪臭、そして身体が痺れてしまったような感覚に陥る。カラータイ

マーも点滅を始めてしまった。

「■■■■ウ、■■ツ■■ツ■■ツ■■」

勝利を隠したかのように声を上げるマガジャツパだったが……。

(ふざけてんじゃねえぞおおおお!!)

身体から噴き出る炎に、マガジャツパは拘束を解いてしまう。

「ウオオオオオオオオオオオオ!!!」

激昂の声と共に繰り出されたアツパーカットは水の魔王獣の頭を打ちあげた。

マガ水流を放つため動作に入ったことを確認したオープは近くにあった泥を救い上げその穴を塞ぎ、さらに手に込めた炎で焼くことよって固めた。

「■■■■?!?!」

塞がれたことにパニックを起こすし、憤怒したマガジャツパの攻撃を胸部で受け止める。

「ハアアアアツ!!」

さらに腕を持ち上げ腹部を蹴り上げ、クビに足を挟み込んで全体重をかけ地面へと叩きつける。

追撃が終わることなく、背後に回り込んで尻尾を掴みジヤイアントスイングで投げ飛ばす。さらに逆さまの状態で掴み上空から投げ下ろす。

(これで……終わりだああああああああああ!!!)

体中に炎のエネルギーを充満させたオーブは、マガジャツパに突進。その破壊エネルギーはマガジャツパを焼き尽くすほどの高温と、爆発力を生み出した。

「(ストビューム……ダイナマイトオオオオオオオ!!!)」

オーブを中心とした大爆発がマガジャツパを木っ端みじんに粉砕した。

大爆発の煙の中から確認できるカラータイマーの点滅……。この水源での勝者はウルトラマンオーブだ。

「……」

彼の周りを飛ぶへりに気付くと彼は首を縦に振り、それ高く飛翔していく。

携帯での中継を見ていた千歌たちも「「ふう……」」と安心の一息を吐いたのだった。

いつものクリスタルから光を集め、ホルダーから取り出す一真。その姿に目を凝らして見つめる。

「え!? なにこれ、おんなじ人?」

そのカードに描かれていたのはどことなく『ウルトラマン』と似ていたのだ。

「あ、でも模様違う……って早く戻んなきゃ……」

カードをしまい、急ぎ足で自転車の下へと向かう一真であった。

同じようにしてダークリングでマガジャツパのカードを手に入れるアオボシ。

「この調子で最後まで頼むよ」

「オーブは倒したのね」

と、背後から近づいてきたのはスピカである。すると、先の闘いを見ていたのか、彼女は尋ねた。

「ねえ、貴方と彼の間には何か関係があるの?」

それを聞いたアオボシはニヤツと笑う。

「どうだか。何、もしかして——」

「いいえ。ただ不思議に思っただけ。彼とだけは真っ向から勝負を仕掛けたがる貴方に」

「別に……アイツには現実を知らしめたいだけだよ」

それよりとアオボシは続ける。

「最後の魔王獣はどうしたんだ?」

「あなたが動くよりも早く復活させたわ」

そう言つて彼女は空に輝く恒星を見上げるのだった。

くく

「はあく一時はどうなるかと思つたわよ……」

「まあまあ、問題も解決したみたいだし！」

「千歌は能天気だよホント……」

「それどういう意味!？」

そこからは普段通りに進み、今練習を終えて帰宅しているところだ。一真も教室に戻った時は心配されたが、「いや〜ウルトラマンに助けられちった!」とか言つて誤魔化しておいた。

(ほんと……今回も強敵だった。色んな意味で)

もうあんなとは戦いたくないと心底思う一真。

教師陣や生徒会長そして理事長も、今回の事件が魔王獣絡みと知つてどう思つたのだ

ろうか。とりあえずお疲れ様ですと心の中でねぎらっておく。

だがまだ完全に終わったようではないらしく

「学校はまだバタバタしてるみたいだけどね……」

「お姉ちゃんも今日は遅くなるって言ってましたし」

曜やルビイの言葉に、今回の騒動の大きさを痛感する。

水という生命維持に必要な不可欠なもの……それが汚染されれば多大なる被害を被る。あの魔王獣にそんな罪の意識はなかったのかもしれない。しかし、存在自体が環境を悪化させてしまうとはなんともアレな話だが。

そして話が脱線していくにつれ一眞は花丸に話しかける。

「花丸ちゃんは今日も沼津に?」

「はい、ノートを届けに」

自分の荷物以外にもバックを持っている花丸。話によれば、新学期初日から自己紹介を失敗したらしくそれから来ていないのだとか。(花丸に聞いた話を一眞が雑に解釈した結果)

「大変だな」

学年によっていろいろあるんだなとぼんやり考える一眞を乗せたバスは、次の停留所をアナウンスするのだった。

第11話 墮天使降臨

誰も使われなくなった廃工場。

普段であればそんな場所に誰かがいる……なんてことは無い。しかし、その工場内でノートパソコンを広げている男が1人。

彼が見ている画面にはなにやら暗い部屋で蝋燭を灯し、呪文のような言葉を唱えている少女の姿が映し出されていた。少なくともこの星で日常的に使うような言葉ではない。

地球に潜伏して数ヶ月。このような言葉を使うのはメディアで取り上げられるフィクション作品がほとんどである。

『かの約束の地に降臨した墮天使ヨハネの魔眼が、その全てを見通すのです!』

「やはりこの女は面白いなあ……」

そう言って彼はコメントを送り、次の餌は彼女にでもしようかなと考えてみる。

『すべてのリトルデーモンに授ける……墮天の力を！』

彼女の目の前に配置されていた蠟燭の炎が消えると同時に、放送が終了したことを知らせるテロップが現れる。

地球の文化も、そこに住む人々も変わってるなと思いつつながら彼は工場の奥に潜ませている。何かへと歩いていった。そこには怪しい光が黄色く輝いているのだった。

と、同時に遠方では「やってしまったああー!!!」と少女の声が過剰な暑さで満たされた外で響いてたとかなんとか……。

く
く

「とまあ、教科書に書いてある通りなんだが……」

季節外れにもほどがあるだろ！ と叫びたくなるほどの暑さが相変わらず続いている。しかし、原因は未だ不明ときたから不思議でしようがない。このような暑さと訳の分からぬ授業でのコンボは、物理的に頭から湯気が出てきそうだと一真に思わせていた。

「最近暑いね。もう何か燃えてんのかつてくらい暑いね。それで思い出したんだけどね……」

教科書の内容から脱線を始める教師。心なしこつちの方が楽しそうにしゃべる。

（いやこれも実は覚えておくといけないことがあるんじゃない……）

「消火って言っても色々方法があつてね、そんな中でも爆風消火つてのがあるのよ。強力な爆風で火を吹き飛ばすつてやつね。これね、すぐくつてね、一瞬で消火可能なの。特に森林火災とか油田火災とかに用いられるのね。まあ、この話は覚えなくつていいから……」

（覚えなくていいのかよ……期待して損した）

「か、一真くん……大丈夫？」

それにどこに思い出す要素があつたのだろうか。窓を開け熱気を逃がそうとしているがあまり効果が見受けられない教室の空気を憂鬱に思いながら、一真はノートに視線

を落とした。

隣では言葉には出さずともわかりやすい反応を示していた一眞を心配する梨子の姿があつたが、誰にも気付かれることは無かつた。

気温の異常な上昇という前代未聞な環境的問題と同じくらいに、とある問題がスクールアイドル部には存在していた。

「今日も上がつてないね……」

千歌のため息とともに曜が言った。見ているのはスクールアイドルAqoursのランキング。登録はしたものの、現実には甘くなく、数多くいるスクールアイドルのただ一つに過ぎないという現実を突きつけられているのだ。

「4856位で今日が4768位ね……」

「落ちてはいないけど」

「かといって喜べる順位でもないけどね」

梨子と一眞もため息を吐いてしまう。下がつてはいない。しかし誰からも注目される順位なのかと聞かれると首を横に振るしかない。

「ライブの歌は評判良いんですけどね……」

「あと新加入の2人もなかなかの評判だぞ」

ルビイは「そうなんですか!？」と興奮気味に問う。すると曜が、その評判を裏付ける証拠の書き込みを読み上げていった。ルビイや花丸が可愛いと言った書き込みがここ最近では多く書かれている。もちろん、千歌や曜、梨子への書き込みも確認できた。

が、花丸は評判よりも

「これがパソコン……」

「そこっ!？」

目の前にある、情報機器に釘付けであった。

「これが知識の海に繋がっているという……インターネット!？」

ソロソロ……とパソコンへと近づいていく。知識の海……なんて言い方が彼女が普段文学を嗜んでいることを容易に想像させてくれる。

「花丸ちゃん、お家が古いお寺などで電化製品とかほとんどないみたいなんです」

今どきの少女である花丸がなぜパソコンにこれほど興味を抱いているのか、ルビイが説明してくれた。

「だからって大袈裟な……」

一真が呟く。

「カズくんもはじめはこのくらいだったよね?」

「いや、あれは初めて文明の利器に触れた人って感じだったよ」

千歌と曜は彼も花丸と同じ、それ以上のリアクションを過去にとっていたことをニヤニヤしながら話していた。

「そ、そんなのはいいだろ！ 昔の話だし……」

彼も3年前はパソコンや携帯の便利さに声を上げていたのだ。その姿は曜が言っていた“初めて触れた人”であるかのように。

後ろで盛り上がっていたところ、花丸はパソコンのとあるボタンに触れた。すると画面が真っ暗になる。

「なに押ししたの？」

「光ってるボタンがあるから、なにか——」

瞬間、梨子と曜はものすごいスピードでパソコンへと寄った。その速さは花丸の髪の毛が風で舞い上がる程である。

（どんだけスピード出してんの!?!）

「データ保存してたっけな」

「マ、マル……何か悪いことしました？」

後ろに（震え声）がつくくらいには恐る恐る尋ねる花丸。

幸い、データが消えるという非常事態に至ることは無かった。

「こんなに弘法大師空海の情報が……」

その後、パソコンの使い方について説明を受けている花丸。にしても空海を調べるとは……。

「もう、これから練習なのにつ」

「少しくらい、いいんじゃない？」

梨子をなだめる曜に対し、千歌はそれとはまた別の悩みを抱えていた。

「それよりランキングどうにかしないとだよね……」

「スクールアイドルは毎年増えていますから」

A—RISEやμ'sのおかげでスクールアイドルの人気は飛躍的に高まった。だがルビイが言ったように毎年毎年数も段々と増えていつているのも事実。このままでは埋もれてしまう可能性もあるのだ。

「地味&地味で地味なところのスクールアイドルだし」

目立たなければ注目されないし、人気にもならない。取り立てて尖っている（注目さ

れている) ものがないというのは普遍的なものとして見られやすいのだ。

そして地元の地味さという点に肩をおとしている千歌に、梨子はとある案を上げてみる。

「名前をもっと奇抜にしてみるとか？」

「スリーマーメイドに？ あ、ファイブか」

「なんでそれを掘り出してきたんだ……」

梨子の思い出したくない失敗の1つであるスリーマーメイドというグループ名の案。だがルビイには以外にも好評であった。さらに設定を付け始め、ファンの応援があれば足になり踊れるようになるらしい。

「でも代償として声が出せなくなるという……」

「ダメじゃん！」

曜へとツツコミを入れる千歌。もっともだ。つてかなんで人魚姫の話になっているのか。

「盛り上がっているとこ悪いが、今からグループ名変えるとかいろんな人が混乱するからダメだ」

「そ、そうよね」

「えっと、梨子ちゃんなんだっけ？ ス、スリー……」

「うるさいぞ千歌」

ワイワイと騒ぎ始めている中、花丸は校舎の方へと向かっていった。すぐに戻ってくるだろうと考えた一真は、練習を始めようと声をかけた。

「そうだね……って言いたいとこだけど」

曜は空を仰ぐ。この形容しがたい暑さが意欲をさながら氷のように溶かしている。そのことについては、梨子も思うところがあるようだ。

「それにしても、最近暑くて困るわ」

「だな。水分はしっかりとれよ……」

そう言って一真は空を見上げる。青い空には変わらず輝き続ける太陽が2つ。

2つあるのだ。

「ええええええええええええ!?!」

横から千歌の声が聞こえてきた。彼女も空の異変に気付いたのだ。

「どうしたの……ええええええええええええ!?! た、太陽が?!? 梨子ちゃんもほ、ほらあれ!?!」

「どうなっているの!?!」

「ピギイツ!?!」

太陽が2つ現れるという異常現象に驚愕する。すると片方の太陽は火の玉のように周囲から炎を噴出させながら、熱波を飛ばし、火球を撃ちだしたのだ。

無差別に飛ばされ、さらに上空という面から街には被害が大きくなってしまっている。一度に大量の破壊活動を行う火球を見据え、一眞は千歌たちに伝えた。

「早く逃げるぞ！」

「そ、そうだね。みんな下に降りよう！」

階段を使い、玄関まで下りていく。するとそこには花丸と、右側に団子を作った長髪の少女津島善子がいた。一眞は彼女に既視感を覚えつつもみんなを安全な場所へと非難させる。

もつとも、あのよう空から降らされては安全な場所も限られてきてしまう。これ以上の被害を防ぐために、一眞は陰に隠れながらオーブリングを空へと掲げた。

《ウルトラマンオーブ スペシウムゼペリオン》

「オーブずらー！」

「あれが……ウルトラマンオーブ」

花丸と共に光の巨人の姿を見上げる善子。テレビでは何度も見てきた姿。しかし実

際に見るその神々しさに言葉を失う。

オーブは降り注ぐ火球を『スペリオンシールド』というバリアで防いで被害を食い止める。続いて手を合わせて強力な水流を噴射した。辺り一面の火を消すと共に、あの空で怪しく輝く巨大な火の玉を消火しようというのだ。

「手から水も出せるの!？」

「これなら……!」

あの太陽擬きもこれで消せるだろう……誰もそう思っていた。

(これでどうだ……何っ!?)

一時的に消えたものの、なんと再び燃え上がってきたのだ。これにはオーブ含め誰もが驚愕する。

(消火がダメなら……)

オーブは空高く飛び上がり、スペリオン光輪の準備動作にはいる。いつものように右腕を引き絞るが、今回はいつも以上にエネルギーを右手へと集めていく。

「でっか……」

「音が大きいぞら……」

そのエネルギーによって光輪は普段の何倍もの大きさへと変化していった。手で回転している際に発する音も普段以上に重々しくなっている。

（コイツで切り裂いてやるっ！ スペリオン……光輪ツ!!）

空気を裂く音を響かせ、火の玉へと飛んでいく。見事に表面を裂くが、これすらも決定打にはならない。

（くそ、なんなんだコイツは!）

オーブは空に浮かぶ巨大な火の玉を睨みつける。全方位からスペリオン光線を撃つてみるなど策を考える。しかし、そんなエネルギー消費のリスクが高いことをするなど心のどこかで聞こえた気がした。

（なら、どうする……宇宙まで持っていくか?）

水流でもダメ、切断でも効果なし……これでは苦し紛れに宇宙に放るか、と考え始めた一眞の脳裏に今日の授業の1コマ……教師の話が蘇った。

——爆風消火つてのがあるのよ。強力な爆風で火を吹き飛ばすつてやつね。これね、すごくつてね、一瞬で消火可能なの。

（あれだ!）

一眞はすかさず炎を操る二本角の戦士へとフュージョンアップした。

《ウルトラマンオーブ バーンマイト》

もう一つの“本物の太陽”を背に立つオーブ。偽りの日輪を消し去るため、胸部にエネルギーを貯める。オーブは目の前で浮遊する太陽と酷似した火球を生成する。しかしそれは怪しく輝くものではなく、何かを照らし、悪しきものを焼き尽くす輝きであった。

(ストビューム……………バーストオオオオオオオ!!!)

以前に放った以上の剛力で打ち出された火球は、日輪へと直撃。その直後に大爆発を起こした。その爆風によって球体状に包んでいた炎は消え去る。

「なんだっけ……爆風……消火!」

「なに、それ?」

「千歌ちゃん聞いてなかったの!」

2つの火球の衝突を見た梨子は、今朝の記憶からその現象を言い当てる。しかし、どうやら千歌には分からなかったようだ。つまり話を聞いていなかったということ。

爆発の中から赤い体の巨体が地上へと降り立つ。ある場所は刺々しく、ある場所はゴツゴツとした1つの体に2つの首を合体させたような頭。そして真ん中には怪しく輝くクリスタル。

(コイツが元凶ってワケか)

偽りの日輪の正体。火の魔王獣『マガパンドン』である。

「あ、あれが天に浮かぶ偽りの光球の正体!? まさかこの墮天使ヨハネを騙していたなんて……ハッ!」

「怪獣だったなんて……」

「偽りの光球……マル、どこかで似たような言葉を見たことあるような気が……」

Aquoursメンバーや善子がそれぞれ話す中、オーブは目の前のマガパンドンへと構えをとった。

共に地面を蹴り突進。そのまま大地が巻き上がるほどの衝撃を上げながら掴みあう両者。バーンマイトという強力なパワーを持った形態と張り合う程の怪力を見せるマガパンドン。

すかさず懐に膝蹴り、そして脇腹にも横蹴りをあびせる。魔王獣の反撃を寸でのところで躲し、何発ものボディブローをくらわせた。

首元を掴んで声を張り上げる。その声と共に増強された怪力を生かして、オーブのバツクドロップが決まった。

「■■、■■ ツー!!」

2つの首が別々のタイミングで鳴いたかと思うと、口から日輪状態でも撃ちだした火球を放つ。これをもろに受けてしまい、後方へと吹き飛ぶオーブ。その体がビルを瓦礫の山へと変えてしまう。

(コイツ自体の力だったのか！)

マガパンドンは、絶え間なく火球を発射する。1か所に絞っているためか、日輪状態よりも火球の出が早い。オーブは咄嗟に拳でその火球を撃ち払っていくが、さすがに追いつかず『ストビュームディフェンサー』という光の盾を生成し、攻撃を防ぐ。

火球の雨が止んだ瞬間に駆けですが、新しく放たれた2色のビームがオーブの体を抉った。

先ほど撃たれた火球とはまた違った痛みに一眞は顔を滲ませる。

口から再度発射された色違いの光線はアスファルトの地面を削り壊していき、オーブへと近づいていく。

形勢がこちらに向いてきた。マガパンドンは先ほどのように火球を飛ばしてくる。

(同じ攻撃ばかりっ！)

彼は両腕にエネルギーを宿し、攻撃範囲を広くすることで飛んでくる火球を素早く、簡単に叩き落とす。迫りくる火球を落としていきながらマガパンドンへと接近し、オーブはすれ違いざまに光エネルギーを宿した手刀で首元を振りぬいた。

そして魔王獣へと向き直ったオーブは、残り少ないエネルギーでスペリオン光輪を放つ。しかしトドメとなるはずだった攻撃は、マガパンドンの火球で打ち消されてしま

う。

(……………)

だがオーブは動揺などしなかった。ヤツが弾いた瞬間に“もう一つのスペリオン光輪”がマガパンドンの首元を切り裂いたのだ。撃ち落とされるとわかっていての二発目が、ヤツへのトドメとなったのだ。

首から上を失ったマガパンドンはゆっくりと、前へ前へと、足を出していきながら……その巨体を地面へと伏したのだった。

そして最後にはいつものような静けさ……。オーブは辺りを確認したような動作の後、空へと飛んでいくのだった。

「見たとき思ったけど、コイツもクリスタル持ちか」

禍々しく光るクリスタルを見て眩く一真。

「これまた派手な」

新たなカードを見て驚く一真。赤と青のツートンカラーや胸から肩にかけてのプロテクターにも目を引かれる。何よりもその特徴は頭の2つの

「なにこれ……トサカ？　なんか目つきも悪いし……」

とりあえずカードホルダーに入れた一真は先ほどクリスタルのあった場所を見つめる。

「にしても、なんなんだよ一体」

自分が倒してきた怪獣の一部に確認できたクリスタル。そしてそこから手に入るウルトラマンと呼ばれる戦士たちが描かれたカード……。

出現するたびに衝動的に戦っていたが、よくよく考えてみると、何の目的があって、一体何が起こっているのか、一真にはわからないことだらけであった。

「なるほど……今のヤツには2パターンの形態があるという訳か」

廃工場内で映像を見ていた男は感心したように呟く。その映像に映っていたのはオーブと魔王獣の闘いだ。

とある怪獣にオーブの戦闘パターンを学習させ、それをぶつけるつもりなのだ。「へえ、随分と楽しそうなことをしているじゃないか」

男の背後に忍び寄った影。背筋をゾクツとさせ、男は振り向いた。そこには上品なスーツを纏ったアオボシが立っていた。

「お、オマエか……ビビらせるなよ」

「それは申し訳ないことをした。謝るよ」

何事もなかったかのように男は作業を続ける。

「どうだい、順調かな？」

「ああ、あともう少しでオーブとやらにぶつけられる」

その報告を聞き、アオボシは嬉しそうに笑みを浮かべる。また彼は辺りに置かれていゝる。この星のものではない。作業道具を見ている。

「やっぱり不思議なんだが……」

唐突に発された言葉にアオボシは首をかしげる。

「なんでお前がオレたちに手を貸しているんだ？ 惑星侵略連合でもないのに」

作業の手を止めずに尋ねられたことに際して、アオボシはああ……と笑いを含めて話し出した。

「あのお方の命令……だけじゃ不満かな？」

「それ以外にもあるだろ。……なんか含みを感じるぞ」

眉を上げるが、その笑みが消えることは無い。

「惑星侵略連合の長が持っていると言われている。黒き王……。侵略連合に手を貸したら僕の手……と取引を持ち掛けたのさ」

（ま、君たちとは利害の一致。あのお方は不要となったら切り捨てる……所詮はそれだけの関係さ）

「そう言われれば……そんな話を聞いたような気もするな。ま、正直オレには関係のないことだけだな」

アオボシの腹に抱えるものが見抜かれることは無く、男は揚々と話しかけていた。
「ん……？　これは使えそうだ」

とあるものに目が入ったアオボシは不敵に笑い、男に提案をした。その目には狂気が宿っているようにも感じた。

「オーブに確実にぶつきたいのなら、この子で釣るといい」

「どういうことだ？」

「墮天使ヨハネは彼と同じ高校の生徒だ」

「な、なに!?　ってか高校生ってどういうことだ!？」

一角に貼ってあったヨハネの写真を見てアオボシは提案した。しかし、それ以上の情報に彼はうろたえる。その瞬間、アオボシは男へと詰め寄り答えるように迫る。

「僕の情報は確かだ。それを信じるか、信じないか……ここにあるのはそれだけだ」

「わ、わかった。そうさせてもらう」

彼の狂気的な目、そして全身から感じ取れる雰囲気、首を縦に振らざるを得ない男。それを見たアオボシは満足そうに言葉を残して去っていく。

「それじゃあ頼むよ。バット星人」

冷たい風が吹き抜ける。残されたのはバット星人が擬態した男と、後ろでうごめく巨大な陰だけであった。

第12話 墮天使勧誘

「どうして止めてくれなかったのよー!!」

部室内でこれでもかという程の音量で善子は叫んでいた。恥ずかしさと後悔のあまり、机の下で丸まっている。

花丸が言うには、昨日まで学校に来ていなかった（正確には自己紹介でやらかして来れなかった）善子。彼女の昔の癖……という中二病がうっかり出てしまわないかを花丸に監視してほしいという頼み付きで学校に来た。

しかし、事がそう上手くいかないのが現実。趣味の占いを見せて欲しいと同級生の頼みを聞いた彼女は、なんと黒い魔法陣が描かれたシートに、黒いローブを着始め、しまいには蠟燭を取り出したのだそうだ。

「えっと、大変だな……」

自分にはまったくわからない悩みを抱えている善子に一真は困りながらも声をかけたのだった。

彼女は中学時代、自分を墮天使だと思い込んでいたらしく、屋上に立って「墮天使ましよう?」と言っていたことがあるとルビイは説明してくれた。

だが善子自身もわかっている。本当はそんな天使や悪魔などがいないということも。

「だったらなんで、あんなもの（占いセット）を持ってきたの?」

「それは、まあ、ヨハネのアイデンティティみたいなので……あれがなかったら私が私でいられないって言うか……はあっ!」

梨子の問いかけに善子は無意識にポーズをとって話してしまう。やめたいと思っているが、長年身体に刻み込んだ言動はそう簡単には消えてくれない……。

なかなか複雑な状況に置かれているようだ。

「実際今でもネットですぐの配信やっているみたいだし」

ルビイはパソコンを操作し、動画を出す。これは生配信ではなく、ファンによって切り取られた動画になっている。

『またヨハネと墮天使ましょう?』

抜け切れてないじゃないかというメンバーの苦い顔。そこにまた新たなものを見たという一眞の目の輝きは対照的だった。

「私は『普通』の高校生になりたいの！　なんとかして!？」

善子のそれは精一杯のお願いに聞こえた。とは言ってもどうしたらいいのかと、花丸やルビィは視線を下にさげる。すると千歌が一言

「可愛い」

と呟いた。確かに美人である。

「これだ！　これだよ!!」

先ほどの善子の動画を見せてきた千歌。彼女は何か思いついたのかもしれないが、詳しいことがわからず、頭上にはてなマークを浮かべる一同。

そんなことはお構いなしと、千歌は善子の手を握る。

「津島善子ちゃん。いや、墮天使ヨハネちゃん!」

「スクールアイドル、やりませんか?」

唐突に言われた勧誘の言葉に、善子含めて全員がもう一度はてなマークを浮かべるのだった。

「これで踊るの……?」

場所は変わって十千万。彼女たちは新たな衣装へと着替えた。しかし、梨子は不安がっている。それもそのはず。今着ているのは所謂ゴスロリに近いドレスなのだ。

「いいのかな……本当に」

「大丈夫。調べてみたら墮天使アイドルなんていなくて、結構インパクトあると思うんだよね」

「こうだったのが……」

曜はベッドに置かれたファーストライブのアイドル然とした衣装を見た後に

「こうなるんだもんね」

目の前にいる、黒めのドレスを着たAqoursへと視線を上げる。

「恥ずかしい……」

「落ち着かないぞら」

ルビィは花丸は衣装を着るのはこれが初と言っている。しかしいきなりゴスロリチックなのはハードルが高かったのかもしれない。

「ホントにこれでいいの？」

「かわいいね〜」

梨子は不安をぬぐい切れないうのだが、千歌は気にしていないようだ。ぬぐい切れていないのは善子も同じようで、墮天使の恰好でステージには上がりたくないと言った。

確かに、普通になりたいと言っているのに今は正反対の墮天使の恰好をしている彼女の心境はいかに……とは言ったものの、ステージ上で墮天使の魅力を振りまくという千歌の想像を聞いてまんざらでもなさそうであった。

「一真くんからも何か言つてよ」

「俺に振る!? そうだな……いいと思うぞ。可愛いし」

一真は、座つてアイスを食べながら答えた。その反応に梨子は「ええ……」と困り気味であった。止めてくれる最後の切り札として頼ったのかもしれないが、その祈りは届かなかったようだ。

「え、ちよつとカズくんそれ……」

彼の食べているアイスへと視線が映った千歌は彼の手からそのカップを取って見つ

めた。

「ああー!! これ私のアイスじゃん!? なんで食べてるの!」

「え、これ、お前の? 嘘、ごめん!」

千歌が買ったやつを食べてしまった一真。もちろんそのことに千歌は怒り心頭であつた。

「ごめんで済んだら警察はいらないの!!!」

「いやごめん、ホント、すみませんでした!! ああ!」

「カズくん避けないで! 避けたら私にあたるから!」

一真へと枕などが投げられる。避けるなど言われたが、反射的に避けてしまい曜から反撃を食らつてしまう。

「これは先輩が悪いぞ!」

「ええ……」

彼を庇護する人間はここにはいない。

「そりゃあ勝手に食べたら怒られますよ……」

「ルビイさん!!? なんでそんな知ってるような口を……危なっ!!」

一瞬目の死んだルビイを見た気がしたが、千歌と曜の追撃が二度見を許してくれなかつた。

狭い部屋の中で暴れていることに梨子はため息を吐いて部屋を出る。

「あ、いらつしやい」

そこには美渡さんと、彼女と触れ合っている犬のしいたけがいた。

「……」

しいたけも梨子へと視線を向ける。ハアハアと熱を放出しているのだろうか。はたまたまは……

「……」

彼女から視線を外さないしいたけ。そして梨子は

「……………っ!?!」

部屋の中で土下座をしている一真とその前に立つ千歌。すると外の廊下からドタドタと走る音と悲鳴が聞こえた。梨子がしいたけから逃げている。しいたけは遊びたいのだろうか、梨子にはそんなことは通用せずほぼパニック状態で逃げているのだった。

すると音は隣の部屋へと移る。

「大丈夫、しいたけはおとなs——」

「梨子—— ヴっ!?!」

悠長に開けてる余裕すらない梨子のおかげで、ふすまの下敷きになる千歌と、顔面を

蹴られる一眞。

パニック状態のまま逃げる梨子は、衝動的に千歌の部屋の窓から隣接している自分の部屋のベランダへと――

飛んだ。

飛んだのである。

おまけに見事な宙返りを披露してくれた彼女。しかし、梨子はしいいたけから逃げることはできたも、後から来る着地の痛みや母親に見られた恥ずかしさからは逃げられなかった。

くく

この墮天使路線で行くことが決まったAqoursは早速動画を作成。サイトにアップした。

『はあい、伊豆のビーチから登場した待望のニューカマーヨハネよ！ みんなで一緒に

……墮天しない？』

「「「しない？」」」

内容は善子をセンターとし、墮天使衣装に身を包んだみんながポーズをとっている……というものであった。

そのインパクトの大きさからか、スクールアイドルのランキングでは953位まであがっているという結果になった。恐らく、動画配信者である善子も順位の変動に貢献しているのだろう。

しかし動画内ではルビィへの圧倒的人気でコメントがあふれていた。恐らく紹介映像がハートに刺さったのだ。それを見たのは当然Aqoursだけでなく、生徒会長なども見ているわけであり……全校放送で呼び出しを食らうのであった。

一方その頃

「うおっ、ヨハネがスクールアイドルだと……」

この前までは動画を配信していた墮天使ヨハネが、いきなりスクールアイドルになったことへ驚きを隠せないバット星人。

「だが……上手くいけばアイツの餌を大量に確保もできる」

アオボシに言われた“ヨハネを使ってオーブを誘き出す”という作戦の他、あらたな計画を思いついたのだ。

そうと決めたバット星人は、即座に人間社会へと溶け込むことのできる服を取り出していく。

一真や彼女たちが知らないところで、新たな計画が動き出しているのだった。

く

「こういうのは破廉恥というのですわ!!」

案の定、ダイヤに怒られる羽目になってしまった。確かに彼女が怒る理由もわからないくはないが……。

「そういう衣装というか……」

「キャラというか……」

千歌と曜の、語尾になるにつれ小さくなっていく声。そんな彼女へと梨子は忠告しい

たと訴える。

「だから良いの？ って聞いたのに……」

「梨子、やった時点でお前も共犯だから……」

「なら一真くんもだけど……?」

「そうだよ。俺も共犯ですけど!」

「そこ、開き直らない!!」

2人はダイヤの喝に口を閉じる。

「私がスクールアイドル活動をルビイに許可したのは、節度をも——」「ごめんなさい、お姉ちゃん」

ルビイからの謝罪で押し黙るダイヤ。

「と、とにかく、キャラが立ってないとか、個性がないから人気が出ないとか、そういう狙いでこんな事をするのはいただけませんわ」

狙いがバレバレなことに心臓が大きく脈打つ。なぜそこまで見抜けるのか不思議に感じていると、曜が

「でも、一応順位は上がったし……」

しかしそれすらも見越していたかのようにダイヤは言い放った。

「そんなもの、一時的なものでしかありませんわ。なんなら、自分たちの目で確かめてみ

たらどうです」

ダイヤは机に置かれていたパソコンをスライドさせ、千歌たちに渡す。すかさず、ランキングを確認する。すると

「ああ!？」

「下がってるな……」

3桁だったのが4桁台まで来てしまっていた。現に確認中にも数字が下がってしまったところを目にしてしまう一同。

「本気で目指すにはどうしたらいいか……もう一度考えることですね!!」

「失敗したな」

海岸で座り込み、各々反省点を考えていく。ダイヤの言葉が正しいからこそ、胸に刺さってしまうものがあつた。

「いけなかったのは、墮天使」

善子は自分のことでこのような事態に陥ってしまったと思っっている。

「高校生にもなって通じないよ」

「それは違うよ。それは——」「いいんです。先輩」

善子は一眞の言葉を遮った後、立ち上がって言った。今度こそ普通の高校生になれると。でも、やはり彼女の声は——

「スクールアイドルは？」

「うーん、やめとく」

善子はみんなへ振り返ると、感謝のような謝罪のような、両方が入り混じった感情で「少しの間だけど、墮天使に付き合ってくれてありがとうとね」

そのような言葉を口にし、みんなの前から去っていく。

やはりそうだ。彼女の声には——寂しさが残っているのだ。普通になれると言いながら、墮天使を捨て去りたくない……と。

「どうして墮天使だったんだろう……」

梨子がそう疑問を口にする。

「マル、わかる気がします」

花丸は少し悲しそうな顔をして話を続けた。

「ずっと、普通だったと思うんです」

自分より何か秀でてる子、賢い子、才能がある子を前にすると、自分にも何かある

はずだと……。するとある時ふと、これが本当の自分なのか？ と考えてしまう。元々はこんなはずではない。天使のようにキラキラしている。それが本来の自分だと。自分も特別な存在なのだと……。

「いつか羽が生えて、天に帰るんだって……幼稚園の頃言ってたんです」

「なあ、みんな——」

一真はある考えをみんなへと伝えた。それは墮天使が、墮天使でいるための内容であり……。

内容を伝え、解散となった後。一真は一人海岸で座っていた。

「本当の自分……か」

さつきとは打って変わった消え入りそうな声で一真は呟く。

「カズくん？」

彼にとって、その言葉はとても苦しかった。ずっと心の中でへばりついている感覚。あまりそのことで卑屈にもなりたくはないが、でもやはり……気にしてしまうのであった。

(どこまで言っても俺は空っぽなのかも……)

以前に聞いたアオボシの言葉を思い出す。

——— 彼のウルトラマンの力を借りいなきや変身できないなんて……笑っちゃうよなあ ———

ウルトラマンの力を借りなくては満足に戦えないのは、そんな空っぽな自分を現していることではないのだろうか……？

そんな疑念が確信へと変わっ ———

「私ね……」

「千歌？」

「カズくんの悩みを解決できるなんて言えないけど……それでも、一緒に悩むことはできると思う」

視線を上げると、立ち去っていったはずの千歌が隣に座っていた。

「どうせカズくんのことだから、俺は空っぽだとか思ってるんでしょ？」

凶星を突かれて声は出ないし、目を泳がせることしかできない。

「だったら、みんなで作っていけばいいんじゃない？ 曜ちゃんや梨子ちゃんや……みんなまで！」

一緒に悩んでくれるからこそ、千歌たちとの思い出が一真自身を作り上げてくれる。1人では無理でも、誰かの力を借りることによって可能にする……。彼女はそう言いたいのだろうか。

「普通星人にそんなこと言われるなんてな……」

「え、なんでそんなこと言うのー!!」

隣で可愛らしく怒っている千歌。しかし一真も彼女の言葉で、心がすこしだけ軽くなった気がしていたのもまた事実であった。

「でも……ありがとう」

一真は純粹に、彼女への感謝の言葉を口にした。

く

翌朝、墮天使ヨハネとしての道具を箱に詰める善子。彼女は普通になるために、道具

を処分するつもりなのだ。

「いたいた。墮天使ヨハネだ……」

「……」

その箱を名残惜しそうに見つめたあと、彼女は立ち去ろうとする。

「よお」

「へ、な、何ですか!?!」

いきなり声を掛けられたことに驚く善子。

「へへへ、ヨハネ様ちよつと眠つてくれ」

そう言つて男は睡眠スプレーのようなものを吹きかけた。

「な……私は……善……子」

彼女が完全に目を閉じる前に見えたのは、甲冑に身を包んだようなこの星の者とは思

えないものであつた。

千歌たちが善子の家付近に到着したのは、それから数分後であつた。

「……これは」

一眞はゴミ捨て場近くに置かれていた紙を拾い上げる。

「墮天使ヨハネを助けたくば、指定した場所にこい」

「ご丁寧に場所を地図に書いてくれたものまで置いてあつた。見るからに罠だ。しかし、善子が何らかの事件に巻き込まれた可能性があるのなら、放つては置けない。」

「善子が攫われた」

彼の唐突で現実的ではない言葉に、息を呑むような「え？」しか出てこないみんな。

「どういうことですか？」

花丸とルビィは一眞の近くへと寄る。「これだ」と言つて誘拐犯が置いていったと思われる紙を見せる。その事実には声を震わす2人。

「俺が助けてくる」

一眞はやけに落ち着いた口調で伝える。

「ちよと待つて、これつて警察に届けた方が……」

「そうだよ。いくらカズくんでも……」

梨子と曜に引き留められるがそれでも、と彼は言う。

「みんなは警察に届けてくれ！」

またもや千歌たちの声を無視して駆け出していく一眞。

「はあ……一真くんって止めても行くわよね」

ため息とともに梨子は呆れた口調で呟く。

「梨子ちゃんもカズくんのことわかってきたね」

変わって曜は笑い気味であった。彼のことわかってきた梨子の姿が面白いのだろう。

「待って、この格好で警察に行くの？」

「今は緊急事態だからそんなこと気にしてちゃダメだよ!!」

善子を助けるため、一真とAqoursは行動を開始した。

彼女をさらった目的は、そして正体は……今の彼らにはわからないものであった。

第13話 墮天使誘拐

「ん、んん……」

おぼろげな意識の中、目を覚ます善子。

「……………っ!？」

だが腕にひんやりと伝わる鉄の感觸。そして鳴り響く鎖の音によって意識を完全に覚醒させる。自分が何者かにスプレーを浴びせられたことを思い出す。

「外れないっ……」

どうやら自分は柱に縛り付けられているようだ。誰が、何のために……。しかし今そんなことはどうでもいい。大事なのは、逃げることだ。善子は必死に拘束された腕を外そうとするが、上手く取れそうもない。そのことで段々と焦りの感情が積もり始めていた。

「お目覚めかな」

くぐもった声に反応し、聞こえる方を見つめる。

頭部の3本角、そしてロボットののように機械的ながらスマートかつスタイリッシュなボディをもった人型の生物がこちらに近付いてきた。コスプレ……とも思ったが、被り

物と言われれば妙に生物的である。

「あ、あんたは何者なのよ……」

振るえる声在必死に隠し、善子は問う。

「オレはバット星人って呼ばれてるんだ。この星での偽名ってんなら、小森だ」

茶化して言っているわけではなさそうだ。その人間とは全く別の見た目、この地球では見たことのないものである。

彼が宇宙人であることを、この時善子は薄々感づいていたのだ。

ネットの情報をよく見ていた善子は、とあるサイトで密かに囁かれていた噂を思い出した。

この星には宇宙人はすでに潜んでいるという話だ。そのサイトには様々な目撃譚なども書かれていたが、どうも作り話のようだと感じていた。

しかし多発する怪獣被害や、ウルトラマンの存在などでもしかしたら……と思っていたが、まさか自分が宇宙人に捕まるとは夢にも思わなかった。

意気揚々と話すバット星人に向けて、善子は拘束を解くよう鎖を鳴らす。

「残念だがそれはできねえな。ヨハネさんはあのハイパーゼットンデスサイスの餌に

なってもらうんだ」

彼の視線の先には、牛のような2本の角を持ち、体全体が真っ黒なとげとげしい芋虫のような姿をした生物が佇んでいた。顔に走る直線の発光体。そして電子音のような無機質な鳴き声が、目の前にいるのが本当に生物なのかを考えさせられる。

「その恐怖に震える表情……いいねえ」

「な、なんで私なんかを……」

もつともな疑問だ。自分がどうして狙われたのか。こうして餌にされそうになっているのか。

「そうすれば、オーブが助けに来るだろう……つてな」

「オーブが……?」

「ああ。オレの目的はオーブを倒し、この星の侵略すること。だからアイツを釣りだすため、そして栄養になってももらうためだ」

さらに彼が語るには、ゼットン育成に必要なのは恐怖と絶望のエネルギーなのだそう。善子を助けに来るであろうAqoursに、餌となった彼女の一部を見せつけることで、さらなるマイナスエネルギーをも吸収しようというのだ。

「な、なんであなた……Aqoursのことを」

不意に出たその単語で背筋が凍る。なぜ彼女たちの名前が出たのかもそうだが、彼女

たちにおこるであろうことが残酷でたまらなかつたのだ。

「地球の文化とやらを調べているうちにアンタを知り、そしてあのグループを知つたの
ゃ」

まさか自分の放送を見ていた視聴者だったとは……なんとも複雑な思いである。

ピポポポポポ

電子音にも似た声を発する巨大な塊は、腕と一体化した鎌を振り回し始めた。

「もう話してる時間はなきそうだ」

自分が食われると本能で察し、逃げようと身体を動かすが拘束がそう簡単に外れる訳がない。

そして迫ってくる巨大な塊にも見えるハイパーゼットンデスサイズに善子は悲鳴を上げた。

「善子お!!」

その間に響き渡つた男性の声。それは彼女に聞き覚えのあるものであった。

「先輩っ!？」

「ここまで走ってきた勢いを殺すことなく跳躍。バット星人の頭へと一眞の右足が激突する。」

「あああああ!？」

「大丈夫か? ナンダコレ……」

一眞は善子を縛っていた拘束を解く。拘束される側にだけは外せない構造のようだ。

「なんでここがわかったんですか?」

「ご丁寧に地図を置いてくれたからさ」

いきさつを語る一眞に、バット星人は不敵に笑った。

「これは嬉しい誤算だ。オーブがくる前にエサがもう1人来るとは」

「あの宇宙人、私を使ってオーブやズラ丸たちをおびき寄せようとしているの」

「なんで……」

どうして善子をさらうことでオーブが助けに来るとわかっていたのだろうか。

「お前、どうしてそんな——」

大きく建物全体が揺れ始める。恐らく一眞の目線の奥にいるゼットンがその原因だ。

「このままだと下敷きになると判断した彼は、善子と共に外へと続く扉に手を掛ける。」

「待て! このままお前たちを逃がすと思うか!？」

「……っ、これでも喰らうときなさい！」

善子は足元に落ちていた手錠をおもいつきり投げると見事に頭に命中。フラフラと
なつたバット星人を後目に、2人は外へと出ていった。

外へ出てみるとそこは近所にある廃工場であつた。随分と近場に運ばれたのだと考
えていると、その工場の屋根を突き破り、人型の形をとつたハイパーゼットンデスサイ
スが姿を現した。

『こうなつたらこつちからオーブを誘い出してやるう!!』

その巨体からバット星人の声が届いてくる。それと同時にあの電子音に似た鳴き
声も。

顔の発光体から火の玉を街へ放出。爆発と共に崩れ去つていく建造物や、炎を上げる
道路。さらに腕の鎌で邪魔なビルをなぎ倒していく。

「善子、この道をまっすぐにつて知ってるか。とりあえず——危ないっ！」
彼女を押し飛ばしたところに大量の瓦礫が落下してきたのだ。

「先輩!？」

「俺は大丈夫だ。善子にはやく逃げろ!!」

「先輩も、無事でいて！」

一眞の無事を祈り、善子は走っていった。

「それじゃあ、お望みのオーブの出番だ！」

ハイパーゼットンデスサイズを見据えオーブリングを掲げる。

「善子ちゃん!？」

逃げている善子は対向から走ってきた千歌たちと合流する。その服装が昨日見たものののがちよつと不思議であるが。

「一眞さんを見なかった？」

「先輩は、瓦礫で道塞がれたから回り道してこっちに來ると思うわ」

バツが悪そうに言う善子。

「善子ちゃん、安心して。カズくんはきつと大丈夫だから」

彼女のことを察し、元気づける曜。

『ゼツ……トン』

すると宇宙恐竜はこちらに狙いを定めて歩み始める。

「は、はやく逃げなきゃ?!? ああ宇宙人、私たちが狙っているのよ!!」

「ええええええええええ?!?!」

狙いが自分たちだとわがわがわかり、一目散に逃げていく。

『ピポポポポポポポポポ』

ハイパーゼットンの火球がA q o u r sに向かって放たれた瞬間——

光子エネルギーをリング状にし、切断力へと変換させた光輪がその攻撃を防ぐ。

放たれた方向へ頭を回す。先の光輪は、光の巨人ウルトラマンオーブが放ったモノだったのだ。

「オーブ（ずら）」

構えを取るオーブへと視線を送る一同。

無機質な電子音のような声を上げる怪獣。オーブはすかさず拳を打ち込むために右腕を引き絞り、距離を詰めていく。ジャンプと共に拳の勢いを解放する。

——しかし

目の前から姿を消したのだ。勢いを殺しきれずつんのめるオーブ。

(どっだ……)

周りをしきりに確認するが、数秒後背後に出現。すぐに蹴り技を繰り出す。空を切る。そして遠距離から放った火球が背中に直撃した。

激痛に声を上げながらもオーブは地面から立ち上がり前転。宇宙恐竜との距離を詰めずかさずにスペリオン光輪を投げるが、当たる寸前で姿を消す。

(瞬間移動ってやつか)

怪獣の能力の1つが、途中の移動経路を飛ばし別の場所へと瞬時に移動する能力だと見破る。だが見破ったところで状況は変わらない。

『ゼツ……トン』

重々しい声と共に目の前に迫りくる鎌が、オーブの胸部を抉り火花を散らせた。

(い、この……捕まえ……たあ!!)

二撃目の鎌を腕で防ぐ。渾身の力をスカイタイプを使い、速さを上げた一撃でも当てることは叶わない。そればかりかカウンターの切り上げをくらい、宙へ投げ出される。地面へと叩きつけられる。

(くっ……う、ううっ……)

するとまた別の場所に姿を現すハイパーゼットンデスサイス。

『どうだ。このハイパーゼットンデスサイスは？ この強大な力……それにお前の行動パターンも予測済み。この状況でどう戦う？ ウルトラマンオーブ!!』

バット星人は自分がどう動くかを予測していると同時に、強大な火力と鋭い鎌……そして特殊な瞬間移動でこちらを倒しに来ている。おそらくバーンマイトでも対処できないだろう。

既に自分の勝ちを確信しているバット星人は高らかに笑い声をあげる。

『俺の力は予習済みってことか……』

そこで新たに手に入れたカードのことを思い出した。

『だったら新しい姿を見せてやる!!』

立て続けに放った火球を躲して跳躍したオーブのカラータイマーから光があふれ出す。

ウルトラマンの力を借りなければ戦えない……確かにそうなのかもしれない。いや、だからこそ力を借りるのだ。それは“頼りきりになる”とは違う。託してくれた力で、

戦えない人の代わりに……補い合い、助け合いながら戦っていくための力なのだ——

力を……お借りさせてもらいます。

ウルトラマンジャック

ウルトラマンゼロ

フュージョンアツプ

ウルトラマンオーブ ハリケーンスラッシュ

巨大な質量が降り立った音が街に響く。しかし地面には宇宙恐竜の姿しか見当たらない。

「見て、ビルの上！」

梨子の言葉で全員が指を指したビルの方へと視線を持っていく。

「いろんな姿があるのね……」

「相手に合わせて使い分けてる……のかなあ」

青や赤の体に、肩から腕にかけてのプロテクター。その姿は身軽な戦士を思わせ、他2つの形態とは異なる頭上の装飾物の反射が、鋭く輝いていた。

『いくぞ、コイツの動きも予測してみな!!』

ビルから飛び降りると同時に放たれた輝くキックが頭の触覚のような部位に衝突する。その輝きはさながら流星のごとく。

地面に着地し、流れるような勢いで足蹴りを組み合わせる。リング状のエネルギーも発生させ、ハイパーゼットンデスサイスの体表面を切り裂いていく。留まることのない攻撃。それはまるで荒れ狂う台風のようだった。

(んだこれ……動きがはやくて意識ついて行かねえ)

まるで拳法の使い手に体を乗っ取られているようであり、変身している一真すらもその力に振り回される一歩手前である。

負けじと鎌を振り回していくがその身軽な動きで翻弄し、カウンターを叩きこんでいく。

瞬間移動で惑わされるが、頭部から光のブーメラン『オーブスラッガー』を投擲する。今まで通り避けられるが、オーブの念力に反応し追撃を始める。

『な、なんだこれは……動きが、読めない』

瞬間移動で消えてしまう宇宙恐竜。

だが先ほどのような見えない不安で満たされるよりも、心の中で研ぎ澄まされた感覚が水の波紋のように広がっていく。

—— ツー！ そこだっ!!

振り向きざまに放ったオーブスラッガーショットと火球が中心で衝突し、巨大な爆発が起こる。

その隙にオーブスラッガーを体の前で高速回転させ、ハリケーンスラッシュ専用の武器を作成する。

『オーブスラッガーランス!!』

槍型の武器を振り回し、火球を切り落とすしていく。すでにカラータイマーの点滅も始まっているため、彼はここで勝負をつけようというのだ。

中距離からの攻撃を振るい、自身に迫ってくる鎌を受け止める。今までとは腕に来る衝撃が幾ばくかマシになっていることに気付く。オーブは鎌を上段に払い、その隙に腕の関節部を切り払う。さらに足をかけて体制を崩し、スラッガーランスを胸元を突き刺した。

(う………つらああああああああああ!!!)

槍を突き刺したことによる重みを感じながら、空へと向ける。さらにオーブスラッ
 ガーランスのレバーを2回引いた。

ランス全体から矛先向かってエネルギーが流れていく。

『このおおおお、このままでは……』

ゼロ距離から火球を飛ばそうとチャージするが、オーブの方が一手早かった。

『ビックバンスラストッ!!!』

強大なエネルギーを内部へと放出。体はその膨大な力に耐えることができずに胸を
 貫通した。

『ゼツ……ト……ン——?!?!?!』

肉体は瞬時に崩れていくと同時に、街を揺らすほどの轟音と共に爆散したのだった。

おそらくバット星人とやらも、あの爆発で消し飛んだ。

そうしてようやく戻った街の静けさをオーブは感じ、空高く飛翔していく。

く

「改めて、堕天使ヨハネちゃん」

闘いの後、千歌たちは本来の目的である善子へ改めて言った。

「二スクールアイドルに入りませんか？」

しかし、善子は再度、断るために首を振る。

「昨日、言ったじゃない。ヨハネはもう……」

お終いにする……と言いかけたところで千歌の声が遮る。

「良いんだよ。堕天使で自分が好きならそれでいいんだよ！」

とは言っても、昨日のこともあり彼女は否定しようと声を発した。先ほどよりも大きく。

「生徒会長にも怒られたでしょ!？」

「それは私たちがいけなかった。でも善子ちゃんはいいの。そのまま堕天使でいれば」

どういう事だと、意味が分からないと彼女の表情が伝える。千歌は一步前へ踏み出

し、自分の憧れであるグループが、如何にして伝説を作れたのかを語った。

「私ね、考えたの。どうして、sがそこまでして伝説を作れたのか、スクールアイドルが繋がってきたのか……」

息を吸い込み、彼女は続けた。その理由を口にした。

「ステージの上で、自分の“好き”を迷わず見せることなんだよ。どう思われるとか、人氣がどうか関係ない。自分が好きなものを、輝いている姿を見せることなんだよ!!」
自分が好きである限り、誰に何と言われようとその姿を捨てないこと。それが輝くとだと。千歌の考え抜いた答えなのだ。だから――

「いいの? 変なこと言うかも」

「いよ」

曜が頷く。

「時々、儀式とするかもよ?」

「そのくらい我慢するわ」

梨子も受け入れると。

「リトルデーモンになれって言うかも……」

「それは……」

苦笑する千歌。だがすぐに表情を変え

「でも、嫌だったら嫌だって言うー！」

いつもの明るい表情で言った。

拒絶するわけではない。彼女を彼女として受け入れるということの証明なのだ。

「いいんじゃないか？」

そこに一真も入る。どうやら本当に無事だったようで、善子もメンバー全員も安堵する。

「善子を善子として受け入れるってことだよ。な？」

千歌は黒い羽を善子に差し出した。それは昨日彼女が捨てたもの。それでも心残りだったもの。

そして善子は――

羽を手を取ったのだった。

くく

「鞠莉さん!!」

理事長室に駆けこんだダイヤ。その声と行動から、何か信じがたいようなものを目の当たりにしたような感じである。

「あのメールはなんですか?!」

「何って、書いてある通りデース」

「そ、そんな……」

鞠莉の肯定を聞いてしまったダイヤの声は酷く、現実を受け止めきれないという想いを感じさせるものであった。

それは鞠莉も同じようで、目を伏せている。その顔は彼女の悔しさをこれでもかと思いで現していた。

生徒会長と理事長……学校のトップ2人が直面したものとは一体……？

第14話 私たちの住む街

「バット星人がやられたようだ」

寒々しい空間に響くバリトンボイス。その声の主は人とはかけ離れた容姿を持つものであった。セミに似た顔、ザリガニを思わせる大きなハサミ状の両手。その名はバルタン星人。高度な知能を備えた直立二足歩行の異星人である。

「そうか……優秀なやつだったのに……」

バット星人の死を惜しんでいるのも人間ではない。黒い肌に赤い水晶が浮き出ている顔、手首や足首に見られる毛。そして目を引くのは、白い体の至る所に赤い突起物があるということだ。

彼はナツクル星人。別名では暗殺宇宙人や暗殺宇宙星人。

「詰めが甘かったのだ。それにヤツは“地球の文化”とやらに現を抜かしておつたと聞いておる。所詮はその程度だったという訳だ」

青い鱗のような体を持ち、背中には金色の羽のようなものを備えている宇宙人が言う。その骨太で頑丈な体は、どこか西洋の甲冑を思わせてくれる。そんな彼はテンペラー星人。極悪宇宙人とも呼ばれている。

「どういうことだ、アオボシ?」

事の発端、バット星人にアドバイスをしたというアオボシにその眼は向けられた。

「いえ……僕はただ、彼とオーブとの対決を実現させようとしただけです」

あつけらかんと彼は悪気のない様で答えている。

「それにあなた達だってオーブとの対決はしたいでしょ?　そして勝つて地球を征服する……」

「貴様はアルファルドからの遣いだ!　どうにも信用できん!!」

宇宙人たちの内にあるもの“オーブと戦い倒すことで自分の力を証明する”という面を見事に言い当てる。別に次元でも“ウルトラ戦士”と呼ばれるような者たちと戦いを繰り広げた種族だ。そう考えてしまうのも無理はなかった。

だが彼から発せられる言葉の1つ1つには、どうも胡散臭さも混じっている。それが気がかりなのだ。協力関係を結びたいと持ち掛けてきた者と同じように。

「そんな。あの方もあなた方と同じく、地球を手に入れようとする者……協力関係ではありませんか」

アオボシたちが“あの方”と呼称するアルファルドも、そして目の前にいる惑星侵略連合の面々も……目的は同じく地球の侵略なのだ。

「確かにそうだ。あの男、そしてお前が何を隠し持っていようが今は協力体制となった

身だ。その力を存分に振るってくれ」

「もちろんです」

道化師のような振る舞いで頭を下げるアオボシ。

(ま、バット星人ごときにオーブを倒してほしくないからなんだけどね)

お辞儀の下でアオボシの口角は上へと上がっていた。

とは言ったものの、今回はアオボシが表立った行動をすることは無い。

「では今回の侵略には君の力を借りたい……」

の呼びかけで出てきたのはツリ眼と星形の口が特徴で、胴体と頭が一体となった体を持つ異星人であった。

「——ザラブ星人」

「ええ、わたしにお任せを。必ずやオーブに敗北という二文字を与え、地球を我らがものに……」

目の前のバルタン星人に向かい、ザラブ星人は深々と頭を下げながら言った。

「う〜ん……」

「何をそんなに悩んでいるの？」

自分の机で頬杖をつき、唸っている一真を不思議がり訪ねてきた梨子。

「A q u o u r s のメンバーが増えたのはいいけど、どうにもランキングの伸びがな……」
善子が加入し6人（一真は除く）になったのは記憶に新しい。それによってランキングも上がっていったのだが、大きな変動というものでもなかったことに彼は頭を悩ませていたのだ。

「そうね。まだライブも1回しかやってないし……」

「なにか方法を考えないとな」

ライブの映像も少なく、アピールできるものが圧倒的に足りていないというのが問題であった。

すると廊下から足音を響かせて曜が走ってきた。

「大変だよー!？」

彼女の声に反応する2人。曜もルビイから聞いたらしいが、耳を疑ったそうだ。それ

は――

「統廃合?」

部室にてその情報を伝えられた一真や梨子、そして千歌。生徒数の減少に伴い沼津にある学校と統合され、浦の星は廃校となってしまうのではという話をルビイはしてくれた。

「それはいつなの?」

「それはまだ……一応入学希望者を見て判断するみたいなんです」

ルビイは質問に答えた。これは良くも悪くも、入学希望者次第という点が大きい。あまりにも突然すぎて言葉が出てこない。

「……廃校」

千歌の小さな声が耳に入る。

「キタ! 遂にキタ!!」

彼女は顔を上げた。随分と興奮気味である。どうやら廃校になるかもという状況が嬉しいようだ。

「どうした千歌……」

あまりにも真逆な反応に不安になる一真。

「統廃合つてつまり〃 廃校〃 つことだよね？ 学校の危機つてことだよね!!」

「千歌ちゃん？」

「まあそうだけど」

千歌の今の状態に困惑しているのは、両サイドにいる曜や梨子も同じであった。

「廃校だよ!!? 音ノ木坂と一緒になんだよ!!」

憧れのμ₄ sが結成された理由と同じだから、彼女はここまで嬉しそうにしているようだ。彼女は部室をグルッと一周してくるとまた部室内に戻ってくる。

(だからなんで時々、訳わかんねえスピードで走り出すんだ……)

「これで舞台は整ったよ! 私たち学校を救うんだよ!!」

「そして輝くの! あの……μ₄ sのように!!」

千歌と善子は、まるでペアで行うダンスのようなポーズを決めている。やる気満ち溢れる千歌を冷ややかな目で見つめているのは2年生組だけであった。

簡単にできるものではないと梨子は言ったが、彼女の耳には入っていない。それと同時にルビイも花丸へと聞いてみるが

「統廃合〜!!」

「こちらも嬉しそうな様子……。」

「つてことは沼津の高校になるずらね? 沼津の街に通えるずらよね?」

あ、学校云々よりも沼津に行く理由になる、賑わった街に毎日行けるといのが理由なのね。と一眞は苦笑する。

「相変わらずねズラ丸」

幼稚園からの付き合いである善子が語るには、センサーで点く街灯にも未来を感じていたらしい。

「な、なるほどね……」

「善子ちゃんはどう思う？」

「それは統合した方がいいに決まってるわ。私みたいな流行に敏感な生徒も集まってるだろう——」

「よかったずらね。中学校の頃の友達に会えるずら」

「やっぱ統合反対!!」

「流れるように反対派に回った善子。理由は……まあ言わなくてもわかるだろう。」

「た、大変だなく……1年」

様々な事情があるようで、一眞は変わらず苦笑いをするしかなかった。

「とにかく、廃校の危機が迫ってるってわかった以上……A q o u r s は学校を救うため、行動します!!」

彼女の一声で一斉に集まった視線。その中で宣言した千歌であった。

「ヨーソロー！ スクールアイドルだもんね!!」

「それで、方法は どうするつもり？」

「……………」

梨子の質問に無言で返す千歌。そうつまり……

「……………え？」

ノープランだったという訳だ。

とりあえず、同じような状況に陥ったスクールアイドルの行動を振り返ってみた千歌たち。

「ランキングに登録して……………」

屋上でのストレッチ中に。

「ライブライブに出て有名になって……………」

淡島での階段ダッシュ中に。

「生徒を集める……………」

「それだけ!？」

浜辺で休憩中に……といった具合で情報を頼りに整理してみたが、なんともぎつくりしすぎという気もする。

「ほら、もつと途中にもなんかさあ……」

一真が言いかけたところ、道路の方からまた別の声がかきこえた。メガネをかけた彼女は見た目的に高校つ世ぐらいだろうと判断できた。

「あの……PV撮影……していたと思います」

「え、それは、sがつてこと?」

「はい……」

その話を聞いた千歌は、少しの沈黙の後——

「それだよ!!」

と声を上げ、ジャンプした。それは彼女がPVを撮影していたと言ったことが、千歌たちのとる行動のヒントになったからであろう。

「この街のことをもつと知ってもらうんだよ!」

都会とは違い、街の良さが簡単に世間に伝わるわけではない。それを映像で伝えようと彼女の話から千歌は思いついたのだ。

「それをネットに流せば、たくさんの人に見てもらえるってわけか。それじゃあ……」

一真も千歌の意図を理解したようで、ぶつぶつと何かを唱えるように考えをまとめていく。

(え、これ……わたしがアイディア渡しちやった？ ええ!?)

内心やってしまったと思っているのは、メガネをかけた少女。そんな彼女とは裏腹に、千歌は手を握りブンブンと振る。

「ありがとう！ あなたのおかげで良い案が思いついた！ えつと……」

「わ、わたしは岡部……沙羅」

沙羅と名乗った少女にお礼する千歌。

「俺からも言わせてくれ！ ホントありがとう!!」

さらに一真も加わり、混乱状態である。

(ええ……適当に言って混乱させるためだったのに……)

岡部沙羅は人間の少女に化けたザラブ星人である。彼もアオボシから

「まずは浦の星のAqoursを潰すんだ。オーブの身近にある”守りたいもの”が無くなれば今ほどの力を発揮できない……」

「やつの心は脆い。壊れた瞬間に戦えなくなるはずさ」

と言われたのだ。だが……近付いてみればこの通りである。

(話が違うではないか……)

PV撮影の下りはバット星人から聞いた話を使っただけに過ぎない。

(てか地球の文化に浸かりすぎだろアイツ?!?)

ザラブ／岡部の心情は知られることなく、話が進んでいくのだった。

「というわけで、ひとつよろしく!」

カメラに向かってメンバーの一人一人が、街の魅力などを話していこうという流れになった。撮影は曜に頼んでいる。さらに千歌曰くアドバイザーとして沙羅さんにも同行してもらっている。

「あ、いや、マルには無理ず……無理」

花丸は話せないと、カメラはルビィへと向けられる。しかし、ルビィも姿を消してしまふ。

「あれ……?」

「どこに行ってしまったんでしよう?」

誰もが見失ってしまったが、善子だけは「見える!」と生えている木の上の方を指さした。

「違いますー!!」

ほぼ背後にある看板のほうから顔を出すルビィ。真逆の位置である。

（全然違うではないか！ 墮天使とは!?!）

「ピギッツ!?!」

カメラを向けられると一目散に逃げていく。

「おお！ なんだかレベルアップしてる!!」

「そんなこと言ってる場合!?!」

と梨子。

「前途多難……って感じだな」

不安を感じ始める一真。

（フッフッフ……一時はどうなると思ったが、これは自滅するかもな）

そんな中、ザラブ星人は静かに勝利を確信していた。

「どうですか？ この雄大な富士山!!」

ここからはリーダーである千歌に説明を頼んで、引き続きPVを撮影することになった。

「それと、この綺麗な海!」

だが彼女は慣れているのかカメラを変に意識することもなく、順調にシーンを撮って

いく。

「さらに、みかんもどっさり！」

さらに、地域の特徴をピックアップして撮ってみれば……という沙羅さんのアドバイスもあつてのことでもあるのだ。単にみかんが好きだから……というわけではあるまい。……と信じたい。

「そして街には……街には……特に何もありません!!」

「ああ、それは一番ダメだろ！」

「マイナスになっちゃおう」

街のことが思いつかなかったのか、笑顔で言ったが一真と曜に止められる。

「バスでちよつと行くとそこは大都会！」

曜へとバトンタッチし、沼津も映していく。

「お店もたつつくさんあるよ！」

なんでこんな自然体でカメラに映れるのだろうか……と沙羅や一真是疑問に思っていた。それに

(こんなもの撮ったところで、いずれ破壊されるのがオチだというのに……)

と内心感じている沙羅。しかし、この街の雰囲気は彼自身が穏やかな気持ちになつて

いるというのも事実であった。

「そして……え……ちよつとお……」

レンタルした自転車を坂道を漕いでいく。

「自転車で……坂を越えると……商店街が……」

梨子は顔を上げられないくらい息を切らしていた。それは誰から見てもキツそう……だとわかるくらいであった。

「おい、沙羅さん大丈夫か？」

「だ、大丈夫……です……」

（し、し、死ぬう……）

自転車で楽々行ける距離ではなかった。その証拠に全員が汗を流し、息も切れ切れ……立てなくなっている人もいるという状況が広がっていた。

「バスでも500円以上かかるし……」

ルビイが言ったように体力面でも経費面でも、“ちよつと”とはとても言えるものはなかった。

「いい加減にしてよ……」

ならば……と映しているのは善子……ではなく墮天使ヨハネであった。

「リトルデーモン、墮天使ヨハネです。今日は、このヨハネが降臨してきた地を紹介してあげましょう。これが……土!!」

とカラーコーンに囲まれ、盛り上がっている土を紹介したのだった。一体なんの紹介なのだろうか……。

「これはもう一度考え直した方がいいね」

「そうだな……」

曜と一眞の意見に「え、面白くない？」と返した千歌。そしてそれに反論している梨子。面白いかどうかが問題ではないのだ。

くく

喫茶店でPVの案を練り直すことにした。どうして？ と善子は尋ねる。

「まさか、この前騒ぎすぎて怒られたり……」

ルビイは不安になったが、それは杞憂であった。梨子が「しいたけを繋いでないなら行かない」と言っただけだそう。相当犬が苦手なのだろう。

「曜はいつまで撮ってるんだ？」

「だって花丸ちゃんの食べてる姿も可愛いし！」

ジト目になった一眞は曜に尋ねたが、帰ってきた答えには「そうか……」としか答えられなかった。

「おいしい……」

変わって沙羅は、初めて食べたケーキに感動を覚えていた。

しかし喫茶店にも子犬がいたことで、梨子は怯えている。

「ひいっ……?!」

「こんなに小さいのに？」

手で抱えられるくらいの子犬でも梨子はダメらしい。

「大きさは関係ないわ。その牙！ そんなので噛まれば……死つ！」

「んな大袈裟な……」

「カズくんの言う通りだよ。ね、わたちゃん」

千歌は「わたちゃん」と呼んだ子犬と抱え上げ、慣れさせようと梨子に近づけさせる。

しかし子犬が鼻を舐めた途端、梨子はトイレへと直行し籠ってしまった。

(可愛い……)

沙羅(ザラブ星人)ですらも可愛いと思っていた。

「聞いてるからはやく続けて!!」

梨子を呼び出そうとする曜。だが彼女は続けてと声を発していた。

「できた？」

千歌はパソコンで動画を編集している善子と、同じく編集のために席を移動していた一真へと視線を向けた。

「簡単に編集したけど……お世辞にも魅力的とは言えないわね」

「そう……だな」

出来から見て、完成品をネットにアップするのはよくないと判断した。最悪、マイナスなイメージを持たれてもおかしくはない。

「やっぱりここだけじゃ難しいんですかね……」

ルビィは落ち込んだ様子で呟く。

「じゃあ沼津の賑やかな映像を混ぜて……これが——」

「そんなの詐欺でしょ（だぞ）」

「なんでわかつかったの!？」

彼女のアイディアは一真と梨子に潰される。私たちの街ですと言おうと思ったのだろうが、バレバレであったのだ。

「段々行動パターンがわかってきているのかも」

「そんな……」

自分の考えが見透かされるほどのものだったのかとショックを受けている千歌。

すると喫茶店の窓からバスの姿が目に入った曜は、慌てて帰り支度をする。それは善子も同じであった。

「フフフツ、ではまた——」

「ヨーシコー！」

バス停の方へと走っていく2人。

「では私も」

そう言つて沙羅さんも席を立った。

「今日は本当にありがとうございました。それとすみません」

アドバイスをくれたことのお礼と、それを活かしきれなかったことへの謝罪である。

「千歌さん、そんな。わたしも色々楽しめましたし、いい収穫にもなりました……」

(ほつといても自滅するしな。あとはオーブだ)

笑いを堪えつつ店を後にした沙羅もといザラブ星人。だが先ほど千歌に言つた言葉も、また事実であった。

「結局何も決まらなかったな……」

気を落としてしまうように声を漏らす千歌。

「うあああ!?! もうこんな時間!!」

ルビイも慌てるように席を立った。時刻はあと5分で7時と言ったところだ。日が伸びた影響もあつて長居してしまつたのだろう。

「花丸ちゃんも帰るよ!」

花丸の襟を掴んで引きずつていくルビイ。何気にしつかりしてんだなと感心している一真。すると残つたのは千歌と一真。あとトイレに籠つた梨子だけだった。

「意外と難しいんだな。住んでるところの魅力を伝えるのって……」

「住めば都。住んでみないとわからないことだつて沢山あるし」

「そうだな」

映像で見たりするよりも、実際に足を運んだからこそ見えてくるものも確かにある。けど全員ができるわけではないこともわかっている。だからこそ伝えるのは難しいのだ。

「でも、学校が無くなつちやつたらこういう毎日もなくなつちやうんだよね」

「……………」

先ほどのように、友達と放課後遊ぶことは沼津の方でもできるかもしれない。しかし内浦でこそその良さがある。そんな心持ちで千歌は子犬を離し、歩いていく方向を見つめ

ている。

「スクールアイドル頑張らなきゃな」

「今更？」

「ま、いいんじゃないか。改めてつてことで」

「それもそうね」

いつに間にかトイレから出てきていた梨子はふふつ、と笑う。

「今気が付いた。無くなっちゃダメなんだって。私……この学校が好きなんだ」

この日常も、そして学校も好きだから……だからこそ無くさないために千歌は言ったのだ。

それは梨子や一真も同じ思いであると互いに微笑する。

当たり前の日常……彼女たちとは別に、それを聞いた一真もウルトラマンとしての在り方を改めて決意していた。

第15話 彼の愛した街

寒々しい空間が広がっている惑星侵略連合の宇宙船内部。その中で1人、変身を解いたザラブ星人は思い悩んでいた。

この寒々しい場所にいると思い出してしまふ。それは今日行ったPV撮影のことだ。それは彼にとっては初めての経験だった。楽しそうに街を行きかい、正体を知らないとは言え自分にすら優しくしてくれる人々。共存する生物……。

そしてなにより、自分たちの街の魅力を伝えようとする彼女たちの熱意。

口では（心の中では）言っていたものの、本当に侵略していいものなのか……と、彼は悩んでいる。

侵略された星々をいくつか見てきたザラブ星人。しかしそこにはあのような笑顔も、悩み奮闘する姿もなかった。

生気のない仮面のような表情。まるで青白い世界にいるのではと錯覚するほどの沈

んだ風景……。今まで見てきた世界とは真逆だったから、今日の出来事はこれほどまでに焼き付いているのかもしれない。

そして彼が行おうとしているのは、まさに“今まで見てきた世界”にすることへの第一歩なのだ。

「……………」

「おい、どうした？」

そんな姿を見かけたナツクル星人が声をかけた。

「い、いや別に？」

急に声を掛けられたせいも、上ずった声で返事してしまう。だが、怪しまれることなく「そうか」と返され一安心する。

「なあ」

と思わず彼は訪ねてしまう。

「侵略なんてやめてしまいたい……そう思ったことはないか？」

だがナツクル星人は肩をすくめて「そんな訳ないだろう？」と返す。

「そ、そうだよな。よかったよ……」

それを聞いても特に何も返さず、ナツクル星人は去っていった。こういうところは鈍感で助かったと安堵した。しかし、自分の悩みは……一向に晴れることは無かった。

く

『以上、がんばルビィこと黒澤ルビィがお伝えしました』

「どうでしょうか？」

浦の星の理事長室で、完成したP Vを鞠莉に見てもらっている。

彼女からの評価を待つ千歌たちだったが……。

「Z z z z z ……!?!」

あろうことか彼女は寝ていたのである。ここまでの試行錯誤でやっと完成したものを、こども雑に扱われてしまった事に抗議する千歌であった。

「もう、本気なのに!!? ちゃんと見てください!!」

「本気で?」

「はい!」

鞠莉へと強めに返事する千歌であったが、次に返ってきたのは耳を疑いたくなるほど

の批評だった。

「それでこのテイタラクですか？」

「ていたらく……？」

「それはさすがに酷いんじゃない……」

意味がわからなかったのか言葉を復唱する千歌。だが隣にいる曜は「この出来なのか？」という意味を汲み取り、反論する。さらに梨子も「作るのがどれだけ大変だったか……」と言うが

「努力の量と結果は比例しません!!」

と一蹴され、さらには

「大事なものは、townやschoolの魅力をちゃんと理解してるかデース！」

ダメ出しを食らう。鞠莉は遠回しに「君たちにはこの街の魅力を理解しきれていない」と言いたいのだ。

それは花丸やルビィも読み取っていた。

「なら——」「じゃあ理事長は魅力がわかってる……っていうの？」

一真より先に善子が語気を強めて鞠莉に尋ねる。すると彼女は

「少なくとも、あなたたちよりは……聞きたいですか？」

彼女の問いに、一真と千歌はほぼ同時に口を開き――

「どうして2人とも」聞かない」なんて答えたの」

帰りの際の玄関で、梨子から問いかけられる。それは他のメンバーも思った事であり、視線がこちらに向いていた。

「なんか、聞いちゃダメな気がしたから」

「右に同じ」

「なに意地はつてんのよ」

「意地なんかじゃない」と善子に返し、自分がそう思った理由を話す千歌。

「それって大切なことだから……。自分で気付けなきや、PV作る資格ないよ」

「アイディアをくれた沙羅さんにも悪いしな」

自分たちで作りはじめたものであるからこそ、答えを教えてもらうわけには行かない。教えてもらったそれは「私たち」のPVではなく、「誰か」のPVとなってしまうからだ。

「そうかもね」

すると梨子も、曜も同意してくれた。

「ヨーソロー！ 今日千歌ちゃん家で作戦会議だ」

そう言つて曜はイタズラ気味な目で梨子を見つめる。毎回毎回、喫茶店に行けるわけもないのでこれは仕方ない。

「よおーし!!」

千歌も気合を入れるが

「あ、忘れ物した」

と言つたものであるから、雰囲気ぶち壊しである。

「部屋に取りに行つてくる!!」

「もう……」

「ほんと、肝心なところで……」

千歌の抜けたところにため息を吐いてしまうのは、梨子や一真であった。

「まったく……」

さらに「なんかあいつ一人だと時間かかりそうな気がする」と言つて一真も千歌の後を追つていくのであった。

一真が歩を進めていくと、体育館入り口で止まっている千歌を発見し声をかけた。

「ん、何やってるんだ?」

「うわっ!? カズくんビックリさせないでよ……。そんなことより、あれ見て」

千歌の指さす方を見ると、そこには体育館で踊っているダイヤの姿があった。

その姿は彼女にふさわしく、可憐に舞っている……と言った方が良いのかもしれない。静と動がバランスよく組み合わせさせたその動きに、2人は目を奪われてしまった。

知らず知らずのうちに千歌はダイヤのもとへと近づき、拍手をしていた。

「凄いです！ 私……感動しました!!」

「な、なんですの……」

自分の感情を素直に表した千歌に戸惑い、驚いているようだ。見られたことへの恥じらいなのかもしれないが。

「ダイヤさんがスクールアイドルを嫌っているのはわかってます……」

千歌は彼女へ何かを伝えようと言葉を繋いでいき、その姿を静かに見守っているダイヤ。

「学校が続いてほしいって、無くなつてほしくないって思ってるんです。だから……一緒にやりませんか？」

目指すものは互いに同じだから……。さっきの舞を見て、共にやっていきたいと千歌は思ったのだろう。

「残念ですけど」

しかし、ダイヤは穏やかな表情でその誘いを断った。あれほど嫌っていたかのように見えた彼女がである。その姿に、いつの間にか集まっていたA q o u r sのメンバーの何人かも困惑している。

「ですが、貴方たちのその気持ちは嬉しく思いますわ。お互い頑張りましょう」

ダイヤは、千歌たちの間を抜けていった。その姿に目を伏せてしまうルビィ。

彼女の落とした紙には『署名のお願い』と書かれていた。ダイヤもダイヤなりの方法で、この学校を救おうとしているのだ。

「ルビィちゃん、生徒会長ってスクールアイドルのこと……」

今までと違った雰囲気疑問を感じた曜は、ルビィへと尋ねる。

「はい。ルビィよりも大好きでした」

その真実に千歌は再度、ダイヤに駆け寄ろうとするが

「今は言わないで！」

ルビィが千歌の前に立って止めたのだった。今まで見せてこなかった彼女の強気な行動だからこそ、動けなくなる。

「ごめんなさい」

千歌を止めてしまった事に力なくつぶやく。だが彼女を責める者も、何があったのか聞こうとする者もいなかった。

くく

「……」

ふすまの間から、千歌の部屋を抜かりなく確認する梨子。一眞の怪訝な目もあるが気にしない。

「しいたけはいないよ。ね、千歌ちゃん」

曜の言葉に同意しているかのように布団がモゾモゾと動く。どうやら千歌は布団の中にいるらしい。

「それよりもPVよ。何も思いついてないでしょ」

善子は本題を振りだ花丸も同意する。

「それもそうだけど……」

梨子は未だに部屋に入ろうとしない。やはり前回の一件を引いているようだ。

皆が頭を悩ませているとそこに「あら、いらつしやい」と志満さんがお茶を運んでくれた。志満さんの登場で、さすがに廊下にいられなくなった梨子も部屋へと入る。

「今日もみんなで相談？」

「そうなんです……」

質問に一真が答えると、彼女は微笑みながらも

「相談はいいけど、明日はみんな早いんだからあまり遅くなつちやダメよ？」
やんわりと注意される。

「明日朝早いのか？」

梨子は訊くが、曜は一旦、一真を見るが首を横に振る。そして彼女も思い当たる節が無いようで「さあ……？」と流してしまふ。

「海開きだよ」

千歌が廊下から伝えた。そのことに一同が驚いて声を上げる。

「じゃあ……」

千歌が廊下にいるということと梨子は察してしまう。そう、布団に潜っていたのは……

「ワンツ!!」

その後どうなったのかは……語らないでおこう。

翌朝、太陽も登っていない時間に集合となった海開き。

梨子は欠伸をしながらも浜辺へと足を運んでいった。

「梨子ちゃん!」

呼ばれた方に目を向けると千歌や曜をはじめとし、すでに多くの人々が浜辺に集まっていた。

「沙羅さん、おはようございます」

「おはよう」

一真とあいさつしたザラブ星人。彼は迷った結果、この海開きへと参加してしまった。自分でも馬鹿なことをやっているとはわかってる。しかし、彼女たちや街の雰囲気には浸りたくなってしまうのだ。

「沙羅さんも来てくれたんですね!」

千歌も嬉しそうにしている。しかし、その笑顔がザラブ星人の心に鋭く突き刺さっていたのだが……。

「曜ちゃん、毎年海開きってこんな感じなの?」

「うん、どうして?」

多くの街の人たちが集まっていたのを初めて見て、曜にきいた梨子であった。

そこで梨子が気付いた。

「ねえ、これなんじゃないかな。この街や、学校のいいところって……」

沢山の人々が互いに協力し合う……そんな温かに照らすような雰囲気がこの街のいいところなのだ。

「そうだ!」

千歌は何かを思いつき、全員の目に入る高台へと登った。

「あの、みなさん! 私たち、浦の星学院でスクールアイドルをやっているA q o u r sです!!」

彼女の一声で注目が集まる。

「私たちは学校を残すために、ここに生徒をたくさん集めるために、みなさんに協力してほしいことがあります!!」

新たに始まったP Vの撮影。それにはたくさんの人々の協力が必要となった。

映像に必要なスカイランタンの制作を始めた。最初はA q o u r sだけで進めてい

たのだが、千歌の声掛けもあってか、浦の星の生徒や、志満さんや美渡さん、たくさんの街の人々が協力してくれたのだった。

「沙羅さんも手伝ってくれるんですか!？」

「はい。わたしもA q o u r sやこの街のファンなので」

沙羅は全面的に協力してくれることになった。また、新曲も並行して制作していくという流れになったため、一真や沙羅はスカイランタン作り、千歌たちは屋上で練習をするという形もとっていた。

そしてスカイランタンを打ち上げる日がやってきた。多くの生徒や街の人達が集まっている。その中には鞠莉やダイヤ、果南の姿もあった。

（ザラブ星人、今ならオーブと人々の絆を破壊するチャンスだ）

沙羅（ザラブ星人）の脳内に、円盤から発せられたバルタンの声が響く。しかし、彼には迷いがあった。

（もうしばらくお待ちを！）

（もう待つことはできない。加えて、今が絶好のチャンスだ。出来ないのであれば、他のものに頼んでもいいのだぞ？）

バルタンの低い声がザラブ星人の心に重く押し掛かってくる。

(わ、わかしまりました……)

ザラブ星人は渋々、ウルトラマンオーブの姿形を真似る。

「ねえ、見て!!」

浜辺の方で誰かがそう叫んだと同時に、巨大な人影が姿を現した。

「ウルトラマンだ!」

その叫びに一真は飲んでいた水を噴出してしまふ。

「ちよつと、カズくん汚いよー!」

「わ、わるい……」

一真もその巨人に視線を注ぐ。確かに、どこからどう見てもスペシウムゼペリオンのオーブであった。だが変身しているのは自分であるとわかつている一真にとっては、なんと信じがたい光景である。

周りの人々も怪獣が現れていないのに姿を見せたオーブに戸惑っているようだ。

「あれ、なんか……雰囲気違くない?」

曜は不思議そうに首をかしげた。

「そう言われれば……」

曜や梨子の話を聞いた花丸やルビィは、注意深くオーブを見る。

ただ佇み、沈黙を貫くオーブは底知れぬ不安感を抱かせていた。

『……』

するとオーブは、人々のいる方向へと体を向けた。

(あんなに目つき悪かったか?)

釣りあがった目つきに尖った脚といった違いが見られた。

(わたしは……わたしは……)

オーブへと化したザラブ星人は酷く悩んでいた。この姿で街やそこに住む人々を襲えば、彼との間に大きな溝を作ることができる。しかし、それをすることができなかった。

(何をしている? はやくそこにいる人々を潰せ)

抑揚のない淡々とした声が響く。以前であれば、喜んで命令を実行しただろう。だがここでの出来事を思い返し、そして浜辺の人々を見た瞬間、彼は決心してしまった。

(できません。わたしは……この街とここに住む人々が好きだから!)

(凶悪宇宙人のお前が何を言う)

(だとしても……わたしはこの星で生きていきたい! 人々と一緒に!!)

彼を裏切り者と判断したバルタン星人は、隣にいたアオボシに命令した。

「やれ」

「では……」

彼は懐からカードを取り出し、ダークリングにリードさせる。

《ヘルベロス》

空から稲妻と共に召喚されたのは赤と黒の体色に、体中に生えた刃状の突起が特徴の怪獣であった。

ニセオーブを捉えた最凶獣は、雄たけびを上げ突進してくる。オーブも応援しようと、拳を突き立てるが、その体中に生えた刃で手を痛めてしまう。

さらに尻尾の振り抜きに足を取られ、地面に倒れてしまった。そのままマウントポジションを取られ、幾度となく体に刃で切り裂かれてしまう。

しかし、ゼロ距離で発射した光弾でヘルベロスを突き放すことに成功。

怒りに吠えたヘルベロスは肘の刃から赤い光刃を放ち、避けることができないオーブの体に命中した。

『アアア……！』

想像以上のダメージにオーブの変身が解け、ザラブ星人本来の体が現れてしまう。

「え、そんな……」

「アレ宇宙人じゃない……?」

ウルトラマンの姿から、まるで別の姿へと変化したことに戸惑いと恐怖の感情を募らせる人々。

だがザラブ星人は周りの声に構うことなく、目の前の怪獣を止めるため立ち向かっていく。しかしヘルベロスの力は予想以上に強く、何度も地面に叩きつけられてしまう。

そんな地球外生命体が、自分たちを守ろうとする姿に心打たれ、困惑の声は次第に応援の声へと変わり始めていた。

それは千歌たち A q o u r s も同じであった。

声援を背中に受け、ザラブ星人はヘルベロスと戦うが奮闘虚しく再度地面に伏してしまった。

「■■■■ー……!」

これで終りだとも言うように、ヘルベロスは口から高熱の火球を吐き出した。

「くそ……スカイランタン……見たかったのにな……」

自分が死ぬ事をさとしてしまったザラブ星人。

彼に当たる直前、横から放たれた火球が衝突しヘルベロスの火球を相殺したのだつた。

その方向にいたのは

「ウ、ウルトラマンオーブ……」

二本角を持った赤い姿のオーブがそこに立っていたのだ。オーブはザラブ星人に向かって頷くと、その横を駆け抜け抜けヘルベロスへと接近。街と人々、そしてザラブ星人を護るため、戦いを展開した。

尻尾の攻撃をギリギリで躲し、そのガラ空きのボディに高速でパンチを打ち込んだ。フラフラと後退するヘルベロスだったが、背中から無数の光弾の発射してきたため、オーブは腕を十字に組んだ光線技『ストビューム光線』で撃ち消していく。

消した勢いで近づこうとするが、頭の角から発射された電撃を受け止めるため腕でガードする。

『グ、ウウウウウウ……ハアッ!!』

完全に打ち消したオーブは姿を変える。

ヘルベロスは再度火球を何発も飛ばしてくるが、どこからともなく現れた光のブーメランによって撃ち落され、残りもザラブ星人の必死の守りによって被害が出ることは無かった。

《ウルトラマンオーブ ハリケーンスラッシュ》

『オーブスラッガーランス!!』

光のブーメランを回転させ、オーブスラッガーランスを作成したオーブはそれを空中に放り投げた。

肉薄したオーブはヘルベロスを持ち上げ何度も回転。そのオーブの周りには、青い突風が吹き荒れ始める。

その勢いを使って空へと豪快に放り投げるとともに、オーブも跳躍。投げておいたスラッガーランスを手に取り、レバーを3回引いた。

『トライアージェントスラッシュ!!!』

残像が現れるほどの速さで何度も体を切り裂き、ヘルベロスを一八つ裂きにする。

そして咆哮を上げる暇もなく、ヘルベロスは空中で大きく爆散したのだった。

「はあ……本物は凄いなあ」

オーブの姿を背後から見ていたザラブ星人は力なくつぶやき、その巨体を消していた。

「待ってくれ」

その後、人知れず去ろうとするザラブ星人を見つけた一眞は呼び止めた。

「見ていってくれよ……ライブも、スカイランタンも」

「いや……わたしは後で見ることにするよ。みんなで作ったPV」

その言葉に一眞は訂正を入れた。

「あなたも……でしょ？」

「ま、まさかバレていたのか？」

見破られていたのかと一眞に尋ねたが、彼は笑いながら「違いますよ」と答えた。

「ただ……貴方がみんなを守ろうとしたのは、ここが好きなんじゃないかって。それに……沙羅さんの姿もいなくなってたし」

彼の言葉に笑いがこぼれてしまうザラブ星人。

「今のわたしは追われる身だ。だからしばらくは身を隠さなければいけない」

それを聞いた一眞は止めようとはしなかったが、一つだけ彼に伝えた。

「じゃあ、またここに来てください。みんな待ってますから」

「ああ。そうするよ」

約束してくれたザラブ星人は静かに、その姿を消していくのだった。

く

「沙羅さんどこに行っちゃたんだろ……」

「そうね。私たちのライブも見てもらいたかったのに」

沙羅が消えたことに残念がる千歌たち。スカイランタンの打ち上げにも参加してもらいたかったと嘆いている。

「颯爽と現れては消えていく……これはヨハネと同じ、魔界の住人っ！」

「そんなわけない啦」

「でも本当にどこ行っただのかなあ……」

彼女がいなくなってしまうた寂しさに沈んでいると

「ちゃんと見てくれるさ。沙羅さんなら」

「うん。そうだね。沙羅さんにも恥ずかしくないよう、頑張らなきゃね！」

一眞の言葉に千歌も同意し、沈んだ空気は薄れていく。

「あの宇宙人にも届くように頑張らなきゃだね!!」

曜が言うように、ウルトラマンと共に怪獣に立ち向かった宇宙人。そんな彼への感謝の張り紙なども、街で見かけるようになった。

そんな感謝の気持ちも込められたスカイランタンが空へと飛んでいくPVと、Aqoursの楽曲『夢で夜空を照らしたい』優しい光が照らしてくれている街の姿を背景に踊っていくAqours。

この景色を学校を失わないために……。そしてこの街や人が好きだと言ってくれた彼が、どこかで見てくれていると信じながら。

第16話 あなたが決める明日

午前中の沼津。普段では何気ない日常を送れるはずだった。

しかし

今ここでは巨大怪獣とウルトラマンの激しい戦いが繰り広げられていた。

(はああっ!!)

オーブスラッガーランスを巧みに扱い、怪獣の身体を切り裂いていく青い体。

薄黒い緑の体にまるで両生類を思わせる怪獣『セグメゲル』も、負けじとその腕で攻撃を繰り出してきた。オーブは槍でガードするが、側面から自身の手足のように操った尻尾が脇腹へと直撃する。

痛みで力が弱まった瞬間、その強靱な脚から繰り出された蹴りで吹っ飛ばされてしまった。

地面に伏したオーブへと、腕を貫通してしまいそうな牙をギラつかせて噛みついてくるセグメゲル。だが槍を噛ませることによって接近を防ぐことに成功する。

(なんて力だ……!)

かといって、バーンマイトに変わる時間などない。このままで倒さなくては。

「怪獣多いよね最近……」

「だね。なんだか不安になっちゃうよ」

「こうして毎日がおくれているのにも感謝しなくちゃ……なんてね」

沼津の街ではそんな不安の声も聴くようになった。3年前の一回きりで終わったのとは異なり、いつまた出てくるかわからないという不安が人々の中にあるからだ。しかし、慣れていくのが人間というもの。ウルトラマンがいるという安心もともなって、そこまで不安視しないという人が一定数いるというのもまた事実ではあるのだが。

そんな人々の声を聞き流しながら歩いているのが1人。彼女は国木田花丸。浦の星の1年にしてAqoursのメンバーでもある。

いつもはルビィや善子といった多人数で沼津を訪れることが多いのだが、今日はあいにく予定があるそうで1人で来たのだ。彼女も書店に立ち寄るだけなので、そこまで悲

観的に捉えることは無い。

「今日はどんな本を買おうかな」

読書家である花丸。彼女は今日、書店で一体どんな本に出会えるか胸を高鳴らせていた。

だが、彼女も女の子である。ショーウインドに飾られた可愛く、きれいな服に目を奪われてしまう。スクールアイドルを始めたことがきつかけなのだろうか。お洒落をしてみたいと感じるようになったのは……。

「……」

「……」

すると、花丸の隣にも同じように陳列窓に飾られた服を見つめている少女がいた。

「あ、あなたもこの服気になってるず……なってるの?」

「なに? あなたもなの?」

やや気の強そうな返しにたじろいだ花丸だったが「別にマルは……」と遠慮してしまふ。似合わないと言われてしまうのが怖かったのかもしれない。

「もしかして似合わないとか思ってたか?」

彼女の言い当てに動揺し、強がってしまう。

「ほんとに? 怪しいなあ」

グイグイと詰め寄ってくる彼女は視線を上下させて花丸の姿を観察し、口角を上げた。

「あんた案外イケそう」

「え……?」

発せられた言葉の意味が分からず聞き返すものの、何かを決心した少女は花丸の手を引いて店へと引つ張っていくのだった。

「だったら私が似合う服見繕ってやるよ!」

「え、ちよつと、待つてくさい〜!」

その少女に連れられた花丸は、まるで彼女の着せ替え人形のように様々な服を着せられた。といっても花丸も自身も楽しんでいた。自分はこれほどまでに綺麗になれるのかと。

例えば、白いシースルーのパフスリーブと赤のフレアスカートの組み合わせ。

例えば、茶色のワンピースにブルゾン。さらに帽子をかぶせてみたもの。

彼女の言われるがままになっているが、どれも魅力的な姿へと変えてくれた。その姿に見惚れてしまう。

「メガネかけちゃうのもアリだ」

「眼鏡はもってるずら……いや、持ってます」

隠すようなことは少なくなってきた花丸の方言だが、しかし初対面の相手となるとどうしても隠してしまう。しかしそれを見た少女は

「別に言葉遣いなんて気にしてないし？ あんたの言いたいようにすればいいんじゃない？」

棘があるようで底から感じられる親切さを感じとった花丸の顔には、自然と笑みがこぼれてしまう。同時に少女の顔にも笑みが浮かぶ。それは心の底から笑っているのだと感ずることができた。

「自己紹介がまだでした。オラは国木田花丸です」

「私は……楓。よろしく」

先ほど試着した服を購入した花丸は、自己紹介を済ませた。

楓……といった少女は、金色の髪をなびかせており所謂“ギャル”と呼ばれる容姿をしていた。しかし自分の想像していた人物よりも優しさあふれる人物であることは、この短時間に知ることができた。

「へえ〜スクールアイドル？ すげえコトしてるんだな」

そのまま2人は、自身の身の回りの話へと変わっていった。

「はい。最初はマルにもできるか不安だったけど、ルビ……マルの友達や先輩のおかげでやれてるんです」

花丸の楽しそうに話す様を見ていた楓も釣られて嬉しそうに微笑む。

「楓さんは今何やってるんですか？」

楓は少し悩んだ後に口を開けた。

「なんていうか……仕事手伝いつて感じかな。新しい立地の調査して……」

「なんか大変そうな仕事を手伝ってるんですね……」

「言われてみれば確かにそうかもな」

だが楓が語っている姿に、どこか違和感……何かつつかえる感じ取った花丸。

「なにか、悩みとか……あるんですか？」

「え、あ、いやまあ……。そうだな。実のところ色々あつてな」

目を泳がせながらも、隠せないとわかった楓は自身の内にあるものを音にした。

「私が手伝っている会社は、なにがなんでも成果を出すことが大事なんだつて言われている。それ以外はいらないつてな。失敗した奴がどうなるかだつて見てきた……」

楓の語る姿から、彼女が手伝っている仕事の辛さというものが嫌でも伝わってきた。成果だけしか求められず、当然失敗は許されない。そんな極限状態では体も、心ももたない。それを彼女はどれくらいのものほどやってきたのだろうか……花丸には想像できな

い。

「けどわたしにも『責任』ってのがあから下手なことは言えない。私にはこれしかないのかもしれない……」

仕方ないと自分では呑み込んではいる。しかし楓は「けど……」と内にある思いを吐露した。

「明日すらくるのが怖い」なんて思うことだつてある」

空を見上げる楓に、花丸は言葉をかけることができなかった。

くく

「……」

花丸はその日の夜、自室で楓の言っていたことを思い出していた。

別に、自分がすべての悩みを解決できるなんて豪語するつもりはない。だが……だが、彼女の姿を目にしてしまったら、どうにかしたいと思ってしまう……けど何も言えない無力な自分……。ルビイの背中を押したようになって、今回は出来ない。そんな現

実に、自然と涙が出そうになる。

花丸は気分を変えようと、洗面所に向かい顔を洗う。明日も楓と会う約束をしたのだ。元気のない顔のままでは、さすがに彼女にも笑われてしまう。

鏡を見ると、そこには変わりなく国木花丸の顔が映っていた。最近はスクールアイドルを始めた関係もあつてか、よく鏡を見る。笑顔を上手く作れているかを確認するためだ。

今の泣き疲れたような顔を見たらルビィや善子、それに先輩たちはなんて言うのだろうか……。今まで考えもしなかったことにフツツと無意識のうちに笑みが零れた。

「はっ……」

今鏡に映っている花丸の表情は、なんとも微妙な笑顔だった。これでお客さんの前に立つたら怒られてしまうほどには……。しかし、ほんの少しだけだが心が軽くなった気がしたと同時に、内から湧き上がってくるものも感じ取っていた。その理由はおそらく……

笑顔だ。笑顔を作ったことで花丸の心は軽くなり、勇気……とでもいうのだろうか。明日、楓に自分の思いを伝えようと決心することができた。

理屈を言われてもいい。拒否されてもいい。だが、その仕事に楓の明日も、未来も決める権利はない。それ以外の生き方もあるはずだと。

花丸は楓に会う楽しみと、それを伝える決意をもって床について行くのだった。

くく

一方その頃。沼津の方で楓はとある人物と対面していた。

「一体どうなっているの?」

「巨人の横槍が入っただけだ。次は上手くやる」

花丸と会った時とは違う、“侵略者”としての面を見せている楓。それに詰め寄るのはスピカ。侵略連合に命令された“セゲル星人”の見張りである。

セゲル星人とは、自分たちが生存出来そうな惑星を調査、そしてそこに文明があれば召喚士を送り込み“セゲル様”と崇められているセグメゲルを使ってその文明を滅ぼ

す……。そうやって自分たちの領土を拡大するという行為を繰り返す侵略宇宙人なのである。

「あなたはセゲル様選ばれた……そう言っていたわよね？」

楓はセゲル星の上層部によって選ばれ、この星に送り込まれた侵略者なのだ。

「ああ……」

「なら、あなたの務めを果たすのね」

耳を塞ぎたくなる文字の羅列を、淡々と躊躇いもなく口に出されていくことに耐えられなくなり、楓はスピカの胸ぐらをつかむ。

「んなことわかってんだよ！ 余計な口出してんじゃねえぞ……」

「長く待って明日が期限よ。あの方も侵略連合もそれ以上は待てないわ」

しかしピンク髪の少女は顔の色ひとつ変えることなく、その瞳は楓を見つめていた。

「わかってんだよ。私が侵略これでしか生きていけないくらい……」

彼女の悲痛な声は、夜の空に溶けていくだけ。スピカは勿論のこと、誰にも聞かれることは無かった。

第17話 わたしの決める明日

沼津を歩く一眞の左手は、包帯を巻いて吊っている。これはセグメゲルの毒炎を浴びてしまった結果だ。幸い、左腕に軽い痛みと痺れを残す程度でとどまっているが。これはオーブの力と関係あるのだろうかかと頭を悩ます。さらに千歌たちにも心配されたが、やんわりと誤魔化した。

気分転換にと思つて街を歩いているが、今それどころではない。

なんと花丸が……ギャルっぽい格好で歩いていたのだ。

（
）

それは一眞が目撃する数分前に遡る。

昨日と同じように、花丸と楓は服を見ていた。すると突然楓が腕を引っ張り、とある

お店に連れて行ったのだ。

「花丸ならコイツも似合うんじゃないか！」

「なにするか教えて欲しいぞらー!？」

それから数分。花丸はいつもとは全く違う格好になっていったのだった。大胆にシャツの胸元を開いた、涼しさを感じさせる青の夏服。それに似た色のスカート……。いつもの彼女を知る者が見たら即倒れかねないほどの変わりようだ。

「なんか……落ち着かないぞら」

花丸自身も恥ずかしそうにしていた。

「なんでだよ。結構似合ってるんぜ？」

その姿を見てひとり納得している楓は、それは気持ちよく笑っていた。

その姿で靴屋やアクセサリーショップを見て回っているとき、偶然歩いていた一真が目撃してしまったというわけだ。

「これ以上ついて行くとストーカーになりそうだな……。帰るか」

花丸の様子が気になってしまい付いて行く一真だったが、自分のしている事の“危なさ”を感じて踵を返していくのだった。

そんな青年に気付かず、花丸は昨日の話に対する自分の考えを楓に言おうと声をかけ

た。

「あの、楓さん」

「ん？」

素っ気ないように感じる応答も、すでに慣れていた。いや、彼女の人辺りを知っているから怖いとも感じないのだろう。

「昨日の……仕事の話すら……」

それを聞いた楓の目は鋭くなる。確かにそうだ。気分転換の時に嫌な話をされるのだから。だが、言わなければいけない。そう決めたのだから。

「オラなりにちよつと考えたすら。それで、その……」

息を吸い、口を開く。

「役割があるのかもしれない、やめるなんて言える状況じゃないのかもしれない。でも……でもその仕事に、楓さんの未来も、明日も決める権利はないと思うすら。だから、別の生き方もあると思うんです」

黙って聞いている楓。しかしその眼を見て伝える花丸。それは以前、親友の背中を押したときのように。

「楓さん自身の自由な生き方も！」

花丸は、笑顔を作る。

「それに幸運は、笑うことから始まっていくと思うすら」

「アハ……アハハハハハッ!!」

すると突然、楓は笑い出した。それは彼女の言葉を嘲笑うかのように。

「お前それ本気で言ってるの？」

突如として変貌した楓の態度に、花丸は固まる。

「こっちはね、お前が思うほど軽いものじゃねえんだよ。星の……種族の使命なんだよ。それを軽々しく捨てろってか？ 下等な生物が、冗談も大概にしとけよ」

「楓さん……？」

言ってることのわけが、意図が掴めない。星？ 種族？ いったい何のことだ。もしかして地球の人ではないのだろうか……。花丸は目の前の少女を見ることしかできなかった。

「はあ……、なんか覚悟決まったわ」

懐から出した水晶を、うつろ気な目で空へと掲げた。

「セグメアクバル・エスタダーハ!!」

数秒の後、空に出現した黒い雲の渦。その中心から怪獣が街へと投下された。

「これで地球も我らセゲル星のものになる……」

「はっ?! 楓さん、待って。こんなことやめてください!」

「うるさい!!」

セグメゲルの下へ行こうとする楓を引き留めようと、花丸は彼女の腕を掴む。しかし手に持っている水晶からの衝撃波で、簡単に引き剥がされてしまう。だが花丸は諦めず、彼女にこれ以上街を壊させまいと説得を試みるのだった。

くく

突如として出現し、街に火を吹き蹂躪していくセグメゲル。その獰猛さに、沼津の街はたちまち崩壊。さらに逃げ惑う人々……まさしくパニック状態だ。その人混みの中を逆走し、怪獣に向かっていく一真。吊っていた布を捨て去り、左腕に視線を移す。

「まあ、マシか……」

激痛や痺れが治りきったわけではないが、なんとか左腕を動かせることを確認した一真は、目の前で街を破壊している怪獣にオーブリングを掲げた。

《ウルトラマンオーブ スペシウムゼペリオン》

上空から地上へと降り立ったオーブ。彼の着地の衝撃で、地面がまるで木屑のように舞い上がる。毒攻撃を撃つてくる以上、素早く避けなければいけない。だからといって力も侮ってはいけないことから、このバランス型のスペシウムゼペリオンを選んだのだ。

「来やがったな……」

楓はその巨人を睨みつける。自分の使命に立ち塞がる強敵……失敗ができない任務を邪魔しようとする者へと向けるには当たり前前の感情であった。

「なんで街を破壊しようとするんですか!?! 昨日も、さつきもあんなに楽しそうだったのに」

「アレはただの見せかけだ。お前との関わりもな!」

息も絶え絶えになりつつ、花丸は説得を続けていた。しかし、何度やっても彼女に弾き飛ばされてしまう。

オーブはセグメゲルに構えると、即座にスペリオンスラッシュで牽制。火花を散らしながらも、怪獣は口から炎を吐き出した。だがギリギリでそれを躲し、流れるように腹部へ蹴りを食らわせる。

反撃と言わんばかりに、爬虫類のように固く、それでいてしなやかな尻尾が左腕を捉

えた。

(グアアアツ!!)

一瞬で何倍もの痛みに膨れ上がったことに声を上げる一眞。そのまま頭突きを受けて、ビルへと倒れてしまう。瞬時にして瓦礫となり飛び散る残骸。

「これが……楓さんのやりたいことなの？」

「……………」

幾たびの転倒で汚れた花丸の問いに、楓は視線をこちらに向ける。

「だって、一緒にシヨツピングしてくれている楓さんの顔……すごく楽しそうだったずら。けど……けど今はそんな悲しそうな顔だから……」

「黙れ、黙れよ！　これが私のやりたいこと、私がやるべきことなんだよ！　セゲル様に選ばれた私の……！」

立ち上がったオーブの頭上に、鞭のようにしなった尻尾が襲い掛ってくる。それを右腕で受け止めるものの、その重さに膝をつく。左腕で支えるが、上手く力が伝わらない。

「ウツ……ウウアアア……」

その痛みと重みに声を漏らす。この状況を脱するために、オーブはバーンマイトへと

姿を変えた。防いでいた尻尾を掴み、遠くへ投げ飛ばす。

(毒には気を付けないと……)

一真攻撃に警戒しながら、セグメゲルへと迫っていく。顔を殴り飛ばし、腹部に数発撃ち込む。痛みに声を上げながら、またもや尻尾を振るってきた。オーブは尻尾を避けることなく掴み、右手に込めたエネルギーで切断した。

途端、切断面から勢いよく噴出した紫色の液体。セグメゲルの体液を全身に浴びたオーブは苦しみだしたのだった。

(ううっ……ああああ!? く……ああああああああ!?)

なんと体液にさえも毒があったのだ。身体中へと侵食していく毒に悶えるオーブ。そのままセグメゲルの攻撃を食らってしまった、地面へと倒れ伏してしまう。

マウントポジションで何度も、何度も一方的に攻撃を食らう。さらには追い打ちの毒炎。カラータイマーの点滅と共に、苦しみの声が響く。そして毒とダメージにより、オーブは殴られるだけの案山子のように動かなくなってしまった。

「じゃあ、じゃあなんで泣いているんですか?」

「はあ……?」

「だから……本当にやりたいことならなんで楓さんは泣いているんですか!」

花丸に言われて初めて気が付いた。楓の顔には、たくさんの涙が頬を伝っていたのだ。手でふき取り、自分でも信じられないと涙のついた手を見つめる。

「こんなこと……本当はやりたくないですよね？」

尋ねた花丸の目にも涙が溜まっていることがわかった。脚に見える擦り傷やほつれが見られる服。それほどボロボロになっても……彼女は自分を信じてくれたと気付いた。楓。

「わ、私も……」

涙で前が見えないが、花丸のいる方向をしつかりと見つめて自分の気持ちを打ち明けた。

「私も、こんなことやりたくない……！ お洒落して、地球人のようにいきたい！ 笑って明日を迎えたいい！」

楓の本心を聞いた花丸は、表情を柔らかくし「やっと聞けました」とうれし涙を零すのだった。しかし、セグメゲルが暴れてしまっているせいで地響きが続いている。このままでは花丸たちがいる場所も崩れてまう。

「早く逃げましょう！」

楓の手を引っ張り、その場から離れていく。

「楓さん、あの怪獣を止めることはできないんですか？」

オーブへと攻撃を続けるセグメゲルを見上げて花丸は聞くが、楓は顔を伏せてしま
う。

「召喚したら最後、破壊し尽くすまで止まることはない……」

「そんなあ……」

オーブも押され、なす術はないのかと落胆するが「でも……」と楓は一つだけ方法を
提示した。

「私たちの体にはあの毒の抗体を持つてる。だから……それをウルトラマンに託す」

水晶を翳し、怪獣を召喚した時と同じ呪文を唱える。すると、身体が青白く発光を始
めた。その光は水晶へと集まり、輝きを増していく。

花丸はその光景、姿を見て察してしまう。抗体を授けるということ……つまりそれ
は、彼女自身の消滅を意味しているのだと。

「そんな!? ダメです! 他にも何か方法が……!」

「これしかないんだ……。悪いな。せつかく仲良くなれたのに……まあでも、これは報
いなのかもな」

花丸は止めようとするが、楓の周りを覆う障壁に阻まれてしまう。

「花丸の言ったように、これは私が明日を決める一歩だからさ……許してくれ」

「嫌です! まだ行ってないお店も、たくさんのお話も、それにスクールアイドルだって

……」

まだ見せていない……と言いかけたところで、「花丸!!」と呼びかけられ、花丸は顔を上げる。

「泣くなつて。幸運は、まず笑うところから始まるんだろ?」

自分の体が消えていつているというのに、楓には未練や、悲しみといった表情が何一つ見られないほどの、屈託のない笑顔で語りかけていた。

そして遂に……楓は水晶と共に光の粒子となつて、オーブのカラータイマーへと飛んでいく。

そこに彼女が決めたことは言え、友人が消えていったことへの花丸の悲痛な叫びがこだまする。それはセグメゲルの咆哮よりもはつきりと、そしてオーブへの猛攻よりも痛々しかった。

光の粒子……毒の抗体がオーブのカラータイマーに入り込む。すると全身にその光は広がっていくのだった。

(なんだ……体が)

先ほどまでの体を動かせないほどの激痛と痺れが薄れていく。すると遠くから、よく聞き慣れた声が聞こえてきた。

「オーブ！ その怪獣を……倒してええええええええ!!」

喉が張り裂けんばかりの音量。そして悲しみによる震えたままの声での、精一杯の頼み。彼女……たちの平和を、そして明日を望む必死の叫びであった。

それを聞いたオーブは自身の体にかすかに残った力を腕へと結集させ、砕けんばかりの勢いで拳を振るった。

勝ちを確信してからの不意打ち。そしてバラバラに碎けるほどの痛みを顎に当てられ、苦しみの声を上げるセグメゲル。

巨体を後退させ、大地に再び立ち上がった二本角の紅の戦士は「あの怪獣を絶対に倒す」と自分を鼓舞するために構えを取る。

(はあああああああああつ!!)

地面を抉る程の勢いで加速し、燃える腕を使ったリアット。その一撃は、怪獣の首を折らんとするほどの威力を發揮した。フラフラと体制を崩したその体へ、先ほどの仕返しと言わんばかりに何発もの殴打を食らわせる。

加えて腹部に穴があげられるほどの威力と、花丸の想いの炎を宿したドロップキックに横転する。すかさずその巨体を頭の高さまで持ち上げ、遠くへと投げ飛ばした。

(これで……終わりだあああああああ!!)

真つ赤な火球を生成し、こちらでも張り裂けんばかりの音量で技名を叫んだ。

「ストビューム………バーストオオオオオオオオ!!!」

負けじと口から青白い火炎の激流を放射するが、火球はそれをもとせずにセグメゲルへ着弾。同時に強大な爆発を発生させ、塵一つ残すことなく肉体を消滅させた。

すぐさま訪れる静寂にオーブは花丸へと向き直る。両者ともに語らうことはしなかったが、オーブは深く頷いた。花丸はオーブと、異星の友人が消えていった空を見つめるのだった。

くく

翌日、怪獣騒ぎの休日が終わりを告げた放課後。いつものようにAqoursは部室に集まっている。その中には花丸も。

「カズくん、もう傷治るの早くない?」

「軽傷だったんだろ……」

「そんなことないよ。絶対痛いやつだったもん」

一眞の左腕の回復にあれこれ言う千歌。それに乗つかる曜や梨子の傍ら、1年生は昨日、一昨日の怪物について話していた。

「天から召喚され、地に落ちる魔物……まさしく墮天!!」

「じゃあ、あれは善子ちゃんか召喚したの?」

「そんな訳ないでしょ。私は街の破壊のために召喚なんかしないわよ」

善子はそっぽ向きながら話し、その答えに笑顔になるルビィ。

「花丸ちゃん、何読んでるの?」

隣で本を読む花丸。しかしいつもの文庫本ではなく、ファッシュ誌であった。

「ズラ丸がファッシュ誌だなんて珍しいわね。何か載ってるの?」

「見覚えのある人が載ってただけ……。それに、オラもこういうの気になるな〜って思っただけずらよ」

雑誌を置き、善子へと話す花丸を見たルビィは「今度、3人で買い物に行こうよ!」と誘う。花丸は言わずもがな。善子も素直ではなかったが、その実誘いに乗り気であった。

「そろそろ練習始めるわよ」

梨子の声が聞こえ、屋上へと向かう花丸たちであった。

第18話 A q o u r s、東へ

「次の計画は、僕が」

侵略連合の宇宙船で、アオボシが名乗りを上げた。

「僕が……いえ、あのお方は地球に眠るある魔王獣を覚まさせるのが目的だ。頃合い的にも丁度よくてね」

「あのお方」の名を借りて発言してくるアオボシにいら立ちを隠せない宇宙人たち。「そのためにもまずは……黒き王のカードを」

遂にしびれを切らし、彼との距離を詰め胸で圧をかけるテンペラー星人。その態度や……何から何まで気に食わなかったのだろう。

「貴様、ふざけているのか？」

「いえいえ、そんなことは」

テンペラー星人は強圧的な声を響かせるが、アオボシは気に留めずバルタンへと頭を下げる。

「これはあの方の命令の1つでもある。それに逆らうことは……出来ませんよね？」
「……」

セミのような構造をした口が不気味に動く。

「わかった。お前にこのカードを託す。必ずや成功させろ」

「承知しました」

道化師のような形式ばった礼をした彼は、宇宙人たちの間を抜けていった。

彼が去っていくときの刺さるその眼には、明らかに殺意も混じっていた。

くく

「この前のPVが5万再生？」

団扇を片手に外を眺めていた千歌が振り返る。もちろんPVというのは、前回撮影したものだ。

「ランタン綺麗だって評判になったみたい」

善子の言うように、楽曲と共に空を舞うランタンには幻想的な美しさがあつた。それが多くの人の心を鷲掴みにしたのだろう。人気急上昇率ではなんと1位。そしてラン

キングでは……

「99位!」

遂に5000組以上いるスクールアイドルの中で、100位以内に入ったのだ。信じられないような状況に誰もが言葉を失う。一真も例外ではなかった。

「キタキタ……! それって全国でつてことでしょ? 5000組いる中で100位以内でつてことでしょ?」

「一時的な盛り上がりつてこともあるかもしれないけど、それでもすごいわね」

梨子は前置きした上での発言だったが、声色からは喜びが見えている。

「なんかさ、このままいったらラブライブ優勝できちゃうかも……!」

「そんな簡単な訳ないでしょ」

千歌の思いがりに、梨子はブレーキを掛けようとしているが彼女は「可能性はゼロではない」と感じていたのだった。一真も話を聞きながら考えていた。梨子の言うように、ラブライブ優勝が狭き門であることを理解していながらも、どこかで期待している自分がいるということ。

(本当に狙えたりしてな……)

すると、パソコンのメールボックスに新着が入る。そのメール内容をルビィが読み上げ始める。そこには、今の自分たちには信じられないようなお知らせが載っていたの

だった。

「Aqoursのみなさん。東京スクールアイドル運営委員会……」

「東京……？」

「東京って東にある都……」

「まんまの意味だぞ、それ」

日本の首都からのお知らせに、一瞬理解が追いつかないような事態に陥る。ここからは、それほどまでに大都会の存在が巨大で不鮮明なものなのだ。

困惑から歓喜の声に変わり始める部室の中……。

それは東京で行われる、スクールアイドルイベントへの招待だったのだ。

自分たちの未熟さを、この時の一真も、Aqoursも知ることには無かった。そして大きな困難が待ち受けていることも……。

「なんでこんなことになってるのよ……」

「……」

梨子の指摘に言葉を返せず、無言になってしまふ一眞。

移動費やらなにやらは、部活として支援が出るとのことで行くことを決めたA q o u r s。そして今日の出発の日。内浦に住む人たちの集合場所として十千万で待っているのだが、千歌の服装を見て唾然としているのだ。

妙に派手派手な服に身を包んだ姿に。「ハイカラですね」なんて冗談でも言いたくない。

後ろで笑う美渡さんを見て（あ、あなたですか、原因は……）と静かに察する一眞のもとに、遅れてルビィや花丸たちも到着する。

「ええ……」

梨子と一眞が声をそろえてしまうほどには、こちらも服装が壊滅的だったのだ。

「どうでしょう……ちゃんとしてますか？」

ピンクが強調された服と装飾物が多く、こちらも壊滅的であった。なぜ姉の生徒会長は止めなかったのだろうかとも考えてしまったが、ここにいない人を責める気にはなれ

なかった。

「これで渋谷の険しい谷も大丈夫ずら」

花丸も花丸で、洞窟探検にでも赴くのだろうかと言わずにはられない衣装であった。

「なにその仰々しい格好」

「渋谷には険しい谷は無いぞ。てか、そのピッケルは危ないから置いといてくれな……？」

2人の常識人枠(?)の指摘に驚愕している。

「2人とも地方感丸出しだよ」

「あなたもよ」

「え、え、ええええ!!」

“笑っていた自分も同じだった”という事実を冷たく指摘された千歌もショックを受けていた。

「はあ……とりあえず、いつもの私服に着替えてこい」

志満さんに送迎されている車の中、一真はとある悩みに襲われていた。それは自分の

力のなきであつた。最近はずうじて勝てる……なんてことも多くなつてきていたのだ。そのせいもあつて、心ない言葉が飛び交つているテレビなどを見てしまい……なんてことも多くなつてきた。

気にするな……とはわかつてしながらも、その悩みは大きくなつていく一方なのであつた。

「俺が……やらなくちゃいけないんだ……俺が……」

「なに、どうしたの？」

「あつ、いや、なんでも!?!」

消え入りそうなレベルで呟いたおかげが、千歌の耳に入ることには無かつた。

「そんなことより東京だよ! カズくんも楽しみでしょ!?!」

「はいはい。楽しみだよ。……つたく、目輝かせ過ぎだ!」

不安な気持ちに蓋をするように、彼は千歌との他愛もない話に思考を預けていくのだつた。

「遅いよ」

「悪い……色々あってな」

曜のジト目で見つめられながらも謝罪する一真。出だしから不安が残るが、横にできた人だかりにも注目する一真には驚きとかよりは、やっぱりか……という感情の方が勝っていた。

善子も例にもれず、顔を白塗りのメイクに赤く長い爪を付け、羽を付けたゴスロリチックな服に身を包んでいた。

「善子ちゃん」

「やってしまいましたね」

「善子ちゃんもすっかり堕天使ずら」

さっきまで同じような服装をしていた人たちが善子を笑う……なんて言う酷い場面に出くわしたが、もう何も言う気力がない一真であった。

「善子じゃなくて……ヨハネッ!!」

ガバツと腕を大きく開いたせいで、彼女を見ていた人だかりは一瞬で散っていった。「溜まりにたまった堕天使キャラを解放するの!」

なにやら善子が横で言っているが、一真は去っていった人々の方向をずっと見てい

た。

「イベント頑張つて来てね」

「クラスの皆から。これ食べて浦の星のすごいところみんなに見せてあげて」

出発前に、同級生たちが見送りに来てくれたのだ。「頑張つてくる」とメンバーの面々は彼女たちに伝え、東京へと旅立っていくのだった。

くく

東京についた面々は、その情報量の多さに興奮してしまう。

「あまり騒ぐと、地方から来たと思われちゃうよ」

曜の注意によって冷静さを取り戻すも、千歌だけは秋葉の街で原宿のことを話してしまっているため、道行く人たちからは、可愛いものだと言われてしまっていた。

さらには、それぞれがそれぞれの好きなものに夢中になってしまい、観光状態になってしまった。

「いました!!」

「すいませ〜ん」

花丸とルビィがはぐれてしまったために電話で誘導している中、曜は制服専門店に。善子は黒魔術が……どうたら専門店に行ってしまった。

「仕方ない。数時間後にここに集まろう。それまでは自由行動ってことで」

一真はそう伝えると、千歌が連絡を曜や善子に流してくれた。それを聞くや否や、梨子がどこかに走り去っていった。自由行動だから別にいいのだが。

自由行動中、一真は一人で秋葉原の道を歩いていた。千歌たちにも一緒に回ろうと誘われたが、今はそんな気分になれなかったのだ。

「なにやっつてんだか……」

せつかく東京まで来ているのに悩んでいるとは、馬鹿馬鹿しいなと思う。だけど、自分しか怪物には立ち向かえないという庄は、なかなか消えないものであった。

ドスンッ

誰かの肩とぶつかり、一真は咄嗟に謝罪する。しかし下げていた頭を上げると、そこ

には見覚えのある顔があつたのだ。それも悪い意味での。

「やあ、久しぶりだね」

「……アオボシ」

アオボシと再会した一眞は黙って彼の後について行く。何が目的かわからないが、一眞には不安のような、安心のような複雑な気持ちが蠢いているのは確かであつた。すると、ここまで無言だつた彼が口を開いた。

「随分とお悩みのようにだね」

「何のことだ」

彼と話すときの一眞は、無意識に声が重々しくなつてしまふ。しかしアオボシはそれに慣れているといった様子で、言い当ててみせた。

「何って、自分の力不足ってやつにだよ」

「……っ!?!」

凶星だからなのか、声だけでなく目つきも鋭くなつていく。「おいおい、そんな怖い顔するなつて」とアオボシは顔に笑みを浮かべながら話を続けている。

「悩んでいるのは自分の欲しいものに蓋をしているから」

「欲しいものなんかない……!!」

「いいや、あるね!」と高圧的な態度で否定し、そのまま話を続ける。

「今の君は純粋な力を望んでいる。脅威を虐げ、圧倒する力をね」

自分が力を……そんなことはないかと否定しようとする。だが、ほんとうにそうか?

と問いかけてくる自分もいた。迫ってくるような思いを否定するために、一眞は口を開く。

「俺は……ただみんなをま——」

「いい子ぶるな!!」

アオボシの激昂にかき消される。そのひと声で、今までの空気とは明らかに異なるものへと変わったことを一眞は感じ取る。

「お前も所詮他の奴らと同じだ……。いつかそんな力に支配されるんだ」

見透かしているようなアオボシへ、一眞は無意識のうちに言葉を発する。自分でもなぜこの言葉が出たのかはわからない。しかしそれは、一眞自身が望んでいることであつた。

「そうはならない……。俺は……誰も傷つけないためにこの力を使っているんだ」

途端、笑い出すアオボシ。だがすぐに笑いをやめる。

「歪だな」

「なに……？」

聞き返す一眞に、振り返りながら彼は答える。

「理想だけを並べているお前は酷く愚かっただよ」

途端、彼もトーンを下げる。いや、こちらが本来の話し方なのだろう。彼は一眞の耳元へと近づく。

「誰も傷つかないなんて夢を見るな。現実はずっと悲惨だぞ。……まあ、すぐにわかるや」

それだけを言い残し去っていくアオボシ。一眞が振り返るころには、その姿も見えなくなっていた。

「ん、……どこだ……」

煮え切らない気持ちを抱えながら、一眞は元の場所に戻るために携帯を取り出した。

そんな2人の話が合った裏で、ルビィと花丸もとある出会いを経験していた。

「ルビィちゃん、ずっと悩んでるすら」

「ごめんね。なかなか決まらなくて」

「いいよ。そんなに焦らなくていいよ」

スクールアイドルのショップにいる2人は、何を買おうか頭を悩ませているのだ。とは言っても、主にルビィが、だが。

「これにしようかな……」

ルビィが手を伸ばすと、もう一方から手が伸び、どちらも同じ商品に手を重ねた。

「あ、ごめんなさい」

互いが互いに顔を見る。ルビィは、申し訳なさそうにしていたが、もう一方は驚いた顔になっていた。

「あなた……黒澤ルビィ?」

「ええ、ルビィ知ってるの?」

見ず知らずの人物から自分の名前が飛び出したことに驚愕する。スクールアイドルで名が知れ渡ったとはいえ、未だに慣れないことであつたのだ。

「ええ。知っているわ。そっちは国木田花丸」

「ずらっ!?!」

驚きのあまり、注意していた方言が出てきてしまう。

「じゃあA q o u r sこと、知ってくれてるんだね」

「フアンずら」

その言葉に戸惑いを見せながらも「そ、そういうことにしておくわ」と答える。

さらに、ルビィは彼女の髪に注目した。

「うわ、ピンクの綺麗な髪だね」

「そ、そんな……。あなたの方が綺麗よ」

照れたのか、顔を逸らしながら逆に賞賛する少女。その姿に親しみやすさを感じたのか、ルビィや花丸は改めて自己紹介を始めた。

「あなたは？」

「私は……」

少し考え込むようにして、彼女は今の自分の名前を口に出した。

「スピカ」

「すぴか……。ちゃん？ 可愛い名前だね！」

「そんな……。可愛いものじゃない」

「でも、スピカって真珠星の和名だった気がするずら。だから、スピカちゃんにピッタリな名前だと思わずら」

彼女は無言のままだったが、それでも雰囲気は和らいでいるようだ。すると、ルビィは壁にかかっていた時計に目をやる。そろそろ集合する時間になるようだ。

「ルビィたち、もう行くね！」

「待つて、これは？」

買おうとした商品。それを買わなくていいのかと聞いているのだ。

「ううん、それはスピカちゃんに譲るよ」

自分たちを応援してくれている存在に会えたことが嬉しかったのだろう。ルビィは笑顔で答え、その場を後にした。

「何やってるんだろ……私」

スクールアイドル……。彼女が内浦で出会い、使命がありながらも、心奪われた存在。自分でも無駄なものだとわかっている。自分が選んだことにも、やらなくてはいけないことにも。だが、彼女たちの歌い、踊る姿をもっと見たいと思う自分もいる。その商品を見つめながら、先の話の思い出す。

「髪褒めてくれたの……兄さんと、あの人以来……なのかな」

昔の思い出に浸る。ピンクに輝く髪を褒めたのは自分の兄と、短い間に知り合ったとある少年。この前まで死んでいると思った……

「もう、時間無くなっちゃたよ」

千歌がぼやきながらも一同は歩みを続けていた。ぼやきに反応した梨子は、買ってきたであろう袋をなぜか背後に隠している。

「なんで隠すんだ？」

「なんでもないから。なんでも……！」

明らかに動揺していたが、本人が何でもないというのならそうなのだろう。

「これはライブのための道具なの!？」

善子は両手に袋を下げていた。どんだけ買ったのだろうか。

「そんな格好して……」

声を震わす千歌の隣で歩く曜は、巫女の恰好をしていた。制服店で買ったのだろう。それぞれが満喫している光景に羨ましくなる一真。目的もなく歩いたのがいけなかつ

たのだが。

「だって神社に行くって言ってたから。似合いますでしょうか!」

「敬礼は違うと思う」と千歌の冷淡な指摘が聞こえながらも、一同はとある神社の前に到着した。

神田明神。μ'sがいつも練習をしていたと言われる場所だ。解散し、時がたった今でもたくさんさんのファンがここに訪れているようだ。

だが今回は幸い、一真たちが来た頃には誰もいないようである。

「上ってみない?」

「そうね」

そうと決まると、千歌は一番乗りで階段を駆け上がっていく。段差があり、急だったが、千歌には些細なことだった。自分が憧れているスクールアイドルと同じ場所で、同じ景色を、同じ目標を見ているのだから。

膝に手を突き、肺へと空気を送り込んでいる千歌。すると、とてもきれいな歌声が耳に入ってきたのだ。聞こえてくる方向へ視線を向けると、夕日で美しく照らされた神社の前に、2人少女の姿があった。見たところ、同じ制服着ている。

彼女たちは、千歌たちの存在に気付き、振り返る。するとAqoursのことを知っ

ているようだった。

「PV見ました。すばらしかったです」

「丁寧な言葉での賞賛に、千歌は緊張した容子で感謝の言葉を口にする。

「もしかして、明日のイベントでいらしたんですか？」

彼女たちの周りに、緊張した空気が張られたのを感じる。だが、「楽しみにしている」という言葉を残し、後は何も言わずに去っていく。加えてツイントールにした少女は、1年生の頭上を宙返りで飛び越した。

その姿に唾然としてしまうのは言うまでもなかった。

その日の夜は旅館に泊まることになり、部屋のなかでまたバタバタと騒いでいたのだが、それでも一眞の心には魚の骨が刺さったかのような違和感がぬぐい切れていなかったのだった。

みんなが寝静まった夜、別室では一眞が眠りへと落ちることができないようでも寝返りを繰り返していた。

「明日がっつとき……」

暑くなってきた体を涼めようと、一眞は外へと出ていく。まだ辛うじて涼しさを残した風に当たっていると、

「起きてたんだ」

後ろから声を掛けられる。それはよく聞き慣れた声であった。

「お前もか、千歌？」

「違うよ、こんな時間に外出てるカズくんを見つけたから」

浴衣姿の千歌はゆつくりと隣に近付く。

「最近、何かあった？」

「なんだよいきなり……」

「別に……いい意味でも悪い意味でもカズくん変わったなって」

オーブの力を手に入れたこと、スクールアイドルのマネージャーを始めたこと。こんな短い期間で、様々なことが自分を変えたのかもしれない。

「そりゃあな。普通星人がスクールアイドルはじめて、人が増えてって、東京までくることになって——」

「そうじゃなくて」と、千歌に言葉を遮られる。それが突然であったから、しばしの戸惑いの後、彼は聞き返した。

「なんか……あった？ 今日車の中でも、神社に行く途中でも、というか最近はずっと

……かな」

心臓が強く脈打つ。オーブの、ウルトラマンのことを言っているのだろうか。真剣に聞く彼女の瞳をしつかりと見据えることが、彼には出来なかった。

(俺は……)

筋肉を引き攣らせ、彼は笑顔で返した。

「なんでもないって、どうやったらもつと輝けるかなって考えてるだけだよ」
「そっか……」

その意味をどう捉えたらよかったのか、今の一真には無理な相談であった。

「さあ、寝るか！ 明日は万全な状態でやらなきゃいけないだし!!」

話を終わらせ、中へと入っていく。

正直に言えば、これ以上聞かれなくなかったから……なのだが。

翌日、千歌たちはランニングでUTXのモニター前まで来ていた。別に、ここに来よう目指していたわけではない。自然と、脚がここに赴いたのだ。初めてスクールアイドルを見て、輝きを知ったこの場所へ。

直後、モニターがついたと思ったら、音楽と共に映像が流れ始めた。それは彼女たち

に最も関係のあるもの。その視線が一点に集中する。

「ラブ……ライブ」

デカデカと書かれた文字に目を輝かせる。

「今年のラブライブが発表になりました!!」

「ついにきたね」

「どうする?」

曜、梨子ともに尋ねるが、千歌は迷いなく言つてのける。

「もちろん出るよ。μ'sがそうだったように、学校を救ったように!」

みんなの意志も同じだと、千歌に視線が集まる。すでに思いは一つだ。

「今を全力で輝こう!」

円を組み、手を重ねる。改めて、全員で鼓舞するために。すると曜が外で見守る彼に

視線と声を

送る。

「カズくんもだよ!」

「え、俺もかよ……」

集まる視線に耐え切れなくなった彼は、輪に加わり手を重ねた。

『A q o u r s e e ! サ n シ ャ イ ン ー !!』

「ランキング?」

「そうなの。出場するスクールアイドルのランキングを、お客さんの投票で決めることになっているの!」

この東京のイベントの概要を、スタッフ兼司会の女性から説明を受けた。ネットの動画にもよく映っている人物であることから、長年この業界に携わってきていることが感じ取れた。

「上位に入れば一気に有名になるチャンスですってことですね?」

「まあ、そうなるかなー」

ここからは完全な実力勝負。入賞グループの力にねじ伏せられることも、あるいは番狂わせが起きることもあり得る。

「出番は2番目。元気にはっちゃけてねー!!」

「2番目……」

「前座ってことね」

周りの多くが、ラブライブ決勝に進んだグループなのだ。実績が圧倒的に足りていな

いAqoursがこの位置にいるのも仕方ないことであつた。

改めて、スクールアイドルというものの大きさを突き付けられる。しかし、千歌は闘志を燃やすのだった。否、だからこそ……だ。

「大丈夫だよな……」

客席の方で見守る一真は、不意に呟いた。ここまでのビッグイベントに出るのは初めてのAqours。そこで彼女たちがないを思い、何が起こるのか。未知数の可能性に不安を抱いているのだった。

（なんで俺がビビってるんだよー。マネージャーだろ。しつかりしろよ暁一真……）
緊張は、ステージに上がる彼女たちの方が何倍も上回っている。だからこそ彼は気持ちを強く保とうとした。

すると、ステージの証明が暗くなり、歓声上がる。それがライブ開始の合図だ。そしてトップバッターとしてステージにいたのは……

「あの2人……!?!」

昨日、神田明神で出会った2人組でつたのだ。

熱狂に包まれる歓声と共に、グループ名が読み上げられる。その名は……

「
S
a
i
n
t
S
n
o
w
:
:
:
:
:
:
」

第19話 降りかかる挫折と最悪

「この街、1300万人も人が住んでいるのよ」

「そうなんだ……」

ライブ後、東京観光を始めたA q o u r sだったが、その声には……楽しさゆえの弾んだ雰囲気はなかった。むしろ落ち込みの感情が勝っていた。

「……」

一真もその姿を横で見ながら、自分はどうすべきか頭を悩ませる。S a i n t S n o wのパフォーマンスから始まったライブ。それ以降も圧巻のステージだった。レベルの高さ、格の違いを見せられ、意気消沈してしまうのも無理はなかった。

(俺は……)

だが、こういう時になんて声を掛ければいいのかだろうか……。それがわからなかった。励ますことなんて下手すれば逆効果だ。でもかといって何も声を掛けないのも良くない。モヤモヤとした正解のない問題に、一真は拳を握る。

(マネージャーとしての役割も碌にできないのかよ……)

心底嫌になった。ウルトラマンとしての務めも、マネージャーとしての務めもこなす

ことができない自分に……。

「どこまで言ってもビルズら」

「アレが富士山かなあ……」

花丸とルビィは双眼鏡で街を見渡す。人工物に覆われた世界。コンクリートジャングル。沼津や内浦とは違う景色を見ている2人すらも、少々沈んだ声色だったのは確かであった。

「最終呪詛プロジェクト、ルシファアを解放……」

善子は黒いマントを羽織り、呪文を呟いていた。そしてルビィや花丸に弄られる……。いつも通りにやっている彼女のおかげで、幾分かは空気がマシになったから感謝しなくてはいけない。口には出さないが。

「おまたせくなにこれすごい!？」

するとアイスを買いに行っていた千歌が戻ってきた。そのいつものようなテンションが、彼女が「気にしていない」という、嘘で塗り固められた仮面をしているように感じられた。

「千歌、おま——」

「はい、カズくんもアイス！」

「あ、ああ」

遮られるように渡されてしまったせいかな、はたまた一真が言いたくなかったせいなのか、すぐに黙って受け取った。

「全力で頑張ったんだよ？ わたしね、今日のライブ、今まで歌ってきたなかで出来が一番よかつたって思った。声も出てたし、ミスも一番少なかったし……」

一番よかつたと、できていたと、聞かれてもいけないことを彼女は語りだした。みんなを励ますため……よりは、自分に言い聞かせるため、の方が強かつたのかもしれない。

「それに、周りはラブライブ本戦に出場してるような人たちでしょ？ 入賞できなくて当たり前だよ」

語った後の笑顔が、やけにぎこちなく見えた。

「私ね、Saint Snowのステージを見た時、これがトップレベルなんだって思った。でも、あの人たち……入賞すらしてなかった。あのレベルでも無理なんだって……」

ラブライブに出て、決勝に行くということ。それは入賞すらできていなかったAqoursにはまだまだ遠い、まるで夢の話のように思えてしまっている。今日のライブでそれを強引に、強制的に、認識してしまったのだ。

「なによ、あれは偶々でしょ？ 天界からはなたれた魔力によって……」

「なにがたまたまなの？」

「何が魔力ずら？」

必死に励まそうとする善子だったが、ルビイと花丸の問いにあっけなく撃沈されてしまった。

「なによ！ 人がせつかくき聞かせてあげたのにー!!」

「そう。今はそんなこと考えてもしょうがないよ。それよりさ、せつかくの東京だし、みんなまで——」

千歌が言い終わる前に、彼女の携帯に着信が入った。

「はい、高海です……はい、まだ近くにいますけど……」

電話を貰い、一同はライブ会場まで戻っていくのであった。

「呼び戻しちゃってごめんさいね。これ渡し忘れちゃってたから……」

先ほどもお世話になった眼鏡をかけた女性が、なにやら封筒を手渡してくれた。なんでも、お客さんの投票を集計したものが書いてあるらしい。

「正直、どうしようかなって思ったんだけど、出場してもらったグループには全員に渡す

ようにしてるから……」

その言葉に、ぐつと息を呑む。口ぶりのに、渡さない選択肢も考えていたってことだろう。面倒だったからではなく、こっちに何か影響しそうだからと考えるのが正しいだろう。

どっちにしろ、あまり期待はできないということだ。

「上位入賞したグループだけじゃなくて、出場したグループ全部の投票数が書いてある……」

その順位と投票数に目を凝らしてみていく千歌。その背後から曜たちも覗くようにしてみている。

「A q o u r s はどこずら……?」

「えつと……S a i n t S n o w?」

自グループを探す前に目に入ったのは、パフォーマンスを間近で見たS a i n t S n o wの文字であった。入賞にはあと一步という9位にその名を置いてある。それでもまだ上に8グループいるのかと、格の違いを嫌でも理解させられる。

「A q o u r s は……!?!」

花丸は急かすように聞いてくる。上位にいた彼女らを見てしまい、自分たちがどの位置にいるのかと、焦るのは当たり前だった。

「あ……30位……」

それはあまりにも残酷な真実であり、現実であった。

「30組中、30位……」

「ビリつてこと!?!」

「わざわざ言わなくていいぞら!」

投票数に目をやると……

「……0」

「私たちに入れなかった人は誰もいなかったこと……?」

一眞は投票には参加していない。彼が参加すれば、Aqoursに肩入れしたしまう。1マネージャーに参加する権利などないと、一眞は決めていたからであった。

文字として、数字として、記録として……紙に書かれた“0”という数字が、千歌に……彼女たちに重く押し掛かる。

「お疲れさまでした」

声をかけたのは、Saint Snowの2人であった。

「素敵な歌でとても良いパフォーマンスだったと思います。ただ……」

それは、今の彼女たちには今は聞きたくなかった言葉なのかもしれない。

「μ'sのようにラブライブ出場を目指しているのであれば、諦めた方がいいのかもしれない

ません」

現実的に見て正しかったその言葉に、彼女たちはショックを受けてしまった。沈んだ心が、さらに下へと沈んでいく。

「バカにしないで……ラブライブは……遊びじゃない！」

目に涙をため、言い放つ。何も言えなかった一真は、手から血が出るのではないかというほどに、拳を握りしめていた。

最悪の空気の中、駅へと向かう途中に、遠方で雷が落ちた。

「な、なに……?」

「天気は晴れてるのに……」

「天界からの刑罰!」

梨子やルビィは、突然のことに声を震わせていた。善子もいつも通りの口調ではあるものの、やはり得体のしれない事象に恐怖していた。

すると、先ほど雷が落ちた場所から紫色のような光を発し始めていた。それを見た街の人々の悲鳴が上がり始めていく。「早く逃げるぞら!」と花丸に押されるように、近く
の警察関係の人間が誘導する方向へと走っていく。その時には誰も気付いていなかった

だが、この時にはもう、一眞の姿は消えていたのだった。

「はあ……はあ……」

肩で息をする一眞。彼は雷が落ち、謎の光が見えた場所へと向かったのだった。そこはまるで、来る人を拒むような森が広がっていた。一度入ってしまったら迷ってしまうほどに……薄暗い森。

「来たね……」

その聞き覚えのある声に一眞は怒りをもって振り向く。

「お前エ……何してんだ……」

得意気味に笑うアオボシに、一眞は憤慨の視線を送る。

「遂に計画の第一段階つてのが終わりそうだね。君にも感謝しなくちゃと思つて。あんなドデカい雷でもだしときゃあ、君も来てくれるだろうつて。そして見事に来たわけ

「さ」

「全部お前の筋書き通りってことか……?」

その問いに対してはいいやと首を振る。そして彼は語った。「君がいることがイレギュラーだったのさ」と。むしろイレギュラー過ぎて大変だったらしい。しかし、一眞にその言葉の意味はわからない。

「でも、そのおかげで僕のやりたいことも増えたから苦じゃないんだけどね」

「なんだと……」

彼の一言一言が、一眞の神経を刺激する。なぜ自分でもこれほどまでに、怒りの感情が湧いてくるのか不思議にもう程に。

「それと、A q o u r s……ダメだったみたいだね」

「……ッ、それが何の関係があるんだ!?!」

触れられたくない話題に、一眞は激昂する。

「いいや。でも君と彼女らとの間には、関係がある。君の大事なもの、守りたいものだろうけど、その気持ちがい互いに離れていつているように見える。君たちの言う絆は案外脆いものなんだよ」

そこで一眞は察する。何故善子が宇宙人に狙われたのか、花丸の近くに怪獣が現れたのか、そして今回……。

「全部、お前が裏で糸を引いていたのか……?」

「全部……とはいかないけど、ある程度は……かな。オーブとAqoursの間に溝ができた時、どれほど弱くなるかを見たかった。君がまたしても僕の前で無力を嘆く姿を見たかった。いろいろやってみただけど、まさか手を下さずとも、ここまで落ち込むとはお——」

刹那、一真が信じられないスピードの蹴りを放った。アオボシがその足を躲したせいで、空を捉えることしかなかったが。

「おいおい、いきなりは無いだろ？ 前は——つと」

一真は無言で蹴りや殴打を浴びせようと、脚や腕を振るったが、一回も当てることは叶わなかった。

「ふざけんな！ お前の勝手な都合で……千歌たちを巻き込むな!!」

「巻き込んでいるのはそつちだろ？」

動きが止まる。見ようとしなかった、目を背けた事実には、胸を撃たれる。

そうだ、彼らの狙いはいつだってオーブだった。であれば、自分があの場合からいなくなれば彼女たちに魔の手が忍び寄ることもないのではないかと、考えてしまう。しかし……けど、でも……そんなことは……したくない。あの場合を離れるなんて自分には——

「…………ツ!? がはっ…………」

腹を突き破るかのような衝撃が一眞の体に走る。意識が強制的に戻されたと思ったら、痛みでまた意識が飛びそうになる。肺にある空気が、全て外に出ていく。

「…………あ…………あああ…………」

地面に四肢をつき、額から冷や汗を流す。痺れたように体が動かない。

「なんかお前…………弱くなった?」

その煽りに、一眞は再び闘志を燃やした。

「お前に、俺の何がわかる!?!」

いつも、一眞を知っているような口ぶりのアオボシに、拳を振るった。だが、脚をとられ地面に倒れこんでしまう。

「何って…………結構いろいろ知ってるよ。昔からの付き合いだしね」

「…………!?!」

一眞とアオボシは、昔からの知り合い。その信じがたい告白に、一眞は目を見張る。

「さて、僕はそろそろ本来の役割を果たさなくちゃ。知っているかい、ここ東京は複数の龍脈と結びつく地点なんだ。そこにはとある存在が封印されている」

倒れる一眞に背を向け、ダークリングを構えた。彼の右手にはフュージョンカードと似た怪獣のカードを持っていた。

《マガタノゾーア》

「はるか昔、ある銀河から飛来した卵は、地球に産み落とされた。それは成長しながら星のエレメントと結びつき、分身を生み出した。でも、ウルトラマンの力によって封印されていた……」

《マガゼットン》

3年前に現れた怪獣……否、魔王獣。

「でも僕たち……いや、君のおかげでカードが揃ったんだ。札を言うよ。暁一真」

《マガバツサー》

スペシウムゼペリオンで倒した魔王獣。

《マガグランドキング》

カードをリードしていくたびに、地中にエネルギーが流れ込んでいく。そして強くなっていく地鳴りに一真は今まで以上の脅威を感じていた。

《マガジャツパ》

《マガパンドン》

6体の魔王獣のカードが空へと飛んでいく。円のように並んだそれは、強大なエネルギーを放射していく。

「そして、この黒き王の力で……」

黒いウルトラマンのような姿が描かれたカードをダークリングへ通す。

《ウルトラマンベリアル》

それと同時に迸る紫色の雷撃は、呼び起こしたクリスタルの中心にあるとある勇者の

封印を打ち壊した。

「さあ、目覚めよ!! 魔王獣の頂点に立つ大魔王獣………マガオロチツ!!!」

アオボシの発した声音共に、ダークリングの羽上のパーツが展開した。

《マガオロチ》

強大な雷撃が降り注ぐと、地面が吹き飛ぶほどの大爆発と共に、大魔王獣はその姿を現した。

赤黒い体表で覆われ、背中には翼のように広がる巨大な二対の突起。さらに頭には赤い一本角を生やし、目も赤く光らせている。胸の部分には6つの目を思わせる器官をもった、その魔王獣は人の金切り声を思わせるような咆哮をとどろかせ、街へと進行していく。

「さあ、アイツを止めて見ろ」

「くっ………このおおお!!」

《ウルトラマンオーブ スペシウムゼペリオン》

オーブは光となり、マガオロチの前へと飛んでいく。

「君も僕と同じように、闇に堕ちるのさ。こんどこそ……ね？」

マガオロチへと近づこうとするオーブだったが、口から放たれた電撃光線『マガ迅雷』を受けてしまう。その威力はすさまじく、オーブの巨体を軽々と持ち上げてしまうほどであった。そのまま抗えず、ビルをなぎ倒しながら倒れてしまった。

（これが……大魔王獣の力……）

マガオロチは光線を撃つのをやめず、周りのビル群や道路にも攻撃をしていく。爆発し、全てが作り物のように崩れ落ちてしまう。

（……ツツ!!）

最悪のコンディションから来た焦りからか、スペリオン光線の発射準備に入ってしまった。
う。

（スペリオン光線ツツ!!）

いつもより倍のエネルギーを腕へと送り込んで放った光線であったが、マガオロチは

防ぐ動作などせず、その身で受け止めながらこちらに向かってくるのだった。

(この……もつと強く！ もつと……もつと……!!)

弾かれた光線の残滓が周りに飛び散り、小規模の爆発を起こす。こんなことすれば、街の被害が拡大することは間違いなしだが、今の一真にそれを考える余裕はなかった。

「花丸ちゃん……怖いよお……」

「大丈夫ずら」

非難した先では、凶悪な見た目の怪獣が街を襲っている様子を見たルビイが体を震わせていた。

「なに怯えてんのよルビイ。ここは何キロか離れてるし、地下から逃げる道もある。それに、オーブが何とかしてくれるわよ」

善子も不安を抱えながらそう口にした。だが、彼女たちは知らなかっただろう。そう言った期待が、一真……オーブへの重圧になっていることに。

(なんで怯まねえんだよ?! 効けよ! 効いてくれええ!!)

だが無慈悲にもマガオロチに光線は通じず、オーブは首を掴まれてしまう。その強力な腕力で、オーブは飛ばされ、地面を転がる。

「■■■■ー!!」

受け身をとって立ち上がろうとすると、すでにその長い尻尾が体に巻き付いた。

「ウウ、ウアアア……」

身体を砕こうとするほどの締め付けに、苦悶の声を漏らす。さらに尻尾を伝わらせ、マガ迅雷を直接体に流し込まれてしまう。

(うああああああああ……?!?!)

激痛に声を上げ、反撃する氣力を失いかけるも即座に形態を変える。

《ハリケーンスラッシュ》

オーブスラッガーを投擲し、尻尾に当てることでなんとか逃れることに成功する。すぐさまオーブスラッガーランスを生成し、技を発動させる。

『オーブランスーシュート!!』

至近距離からの発射された高エネルギーの光線は、マガオロチの背中から火花を飛び散らせ、ふらつかせることができた。

(まだ……これからだっ……)

腕の攻撃をかわし、胸元へ斬撃を加える。リング状のエフェクトが何も当たることな

く、消えていく。ヤツは避けたのだ。今までの怪獣とも、魔王獣とも違う……攻撃を避けるほどの知性をもっているのだ。だからと言って「倒せない」なんて言い訳は通じないし、するつもりもない。倒さなくてはいけないのだ。

マガオロチの猛攻に、オーブは疲弊していく。さらにスラッガーランスを飛ばされてしまったのだ。

(なくたって……!)

一旦距離を離し、頭を押さえ蹴り上げる。そのよろけた隙にまわし蹴りを食らわせた。再び手に取ったオーブスラッガーランスのレバーを3回引き、必殺技を発動させる。

『トライデントスラッシュ!!』

まるで子どもが泣き、投げやりになるような声で発動させたそれは、マガオロチのクリスタルの一部を破壊することに成功した。

(このまま……!)

だが、その腕が切つ先を掴んだのだ。強制的に技が止められたことで動きが鈍くなり腹部に、そして脇腹にも蹴りを入れられてしまい、苦しむオーブ。

最後の一手と言わんばかりに、赤く点滅するカラータイマーから光があふれ出す。

(ストビューム……ダイナマイトオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!)

バーンマイトにチェンジしたオーブの、やけくそじみね叫び。

(俺がやらなきゃ……俺が……俺があああああああああああ!!!)

それはマガタノオロチに肉薄すると同時に巨大な爆発を起こした。

力も限界に近付き、片膝をついたオーブの目の前には灰化したマガオロチ。ついに倒したかと……倒れてくれと、願ってしまっていた。

しかしその灰をぶち壊し、中から現れたマガオロチは未だに健在……無傷であった。仕返しとばかりにフルチャージで放ったマガ迅雷は、オーブの張ったバリアをいとも容易く貫通。彼とその周りにダメージを与えたのだった。

ダメージとエネルギーが限界に達したオーブは、その体を光と粒子に変えて消滅してしまった。

「フッフッフ、アハハハ！ どうだ、これがマガオロチの力だ。さて、コイツは預からせてもらうよ」

気絶した一真からカードホルダーを奪ったアオボシは、靴の爪先で蹴るようにしてそ

の場を後にした。

「まともや君は自分の無力さを呪うがいいさ……。フフツツ、アハハハハ、アーツハハハハハハハ」

彼が去っていく中、自分を止める者が消えたことを確認したマガオロチは、目の前に広がった街に向けてマガ迅雷を飛ばし、尻尾を振るい、次々に破壊していく。逃げ惑う人々や崩壊していく建物。そして火の海となっていく東京……。

怪獣無法地帯。それが今の東京のありさまだったのだ。

第20話 最悪と最凶

「どう?」

「だめ。繋がらない……」

「そっか……」

曜と千歌は互いに顔を暗くした。避難場所に逃げられたのはいいが、その途中で彼一真と逸れてしまったのだ。電話で確認をしようとしたものの、繋がることはなかった。第一、怪獣が暴れまわる中では混線もあつてまともに電話も機能しない。もしかしたら……という淡い望みも、叶わなかったということだ。

「一真くんとは、やっぱり連絡取れない?」

避難所のスペースに戻った時、梨子は訪ねてくる。しかし、彼女自身も察しているようではあつたが。その問いに、千歌も曜も首を縦に振る。彼女たちの知らせに、また一段と空気が重たくなる。

だが先ほどまであつたことを考えると無理もない。彼女たちはスクールアイドル、そして怪獣と言う両視点から大きな困難を食らわされているのだから。

その沈黙をやぶった者が1人。ダークブルーの髪を揺らし、目元に横ピースという

マガオロチの周りには、黒煙を上げたビル群が立ち並び、大きなクレーターがあいた道路も見受けられる。これもすべて、マガオロチの仕業であった。ウルトラマンという巨人が敗れ去った今、人類が戦える手段などどこにもなかった。

加えてこの街の……いや、この星の頂点はマガオロチだと言っても過言ではないくらいに、その巨体は地上を跋扈している。

手当たり次第、気分次第に街を破壊していく様は、まさに悪魔。人という霊長類が作り出した建造物は、一瞬にして崩れ去っていく。

「■■■■……」

すると、破壊と戦闘にエネルギーを使い果たしたのか、マガオロチは生い茂る木々をなぎ倒し、地面へと横たわったのだ。それからは、さつきまでの動きが嘘だったかのようにならなくなり、沈黙した。

「どっ……」

よろめきながら道を進む一眞。息も切れ切れな様子で歩を進めている彼が探し求めているのは、フュージョンカードの入ったホルダーであった。焦りと怒りが混ざり合う心情の中、奪ったであろう人物を探し求める。

また、彼の手にはとあるカードが握られていた。先のマガオロチとの闘いで破壊したクリスタルの一部。地面に落ちていたそのクリスタルを、オーブリングがカードに変換したのだ。その姿はウルトラマンやウルトラマンジャックの姿に似通っているものの、胸を囲むようにした突起物が特徴であった。

カードを強く握り、彼はとある背年の名を口にした。

「アオボシ……!!」

奪った人物なんて、ある程度の目星は……いや十中八九彼しかいなかった。彼は一眞に無力さを味合わせたいのだろう。だからマガオロチを呼び、負けた彼からカードを奪った。そんな個人的な気持ちで場をかき乱すアオボシという男に、一眞は心底腹が立っていた。

「……………」

違う、腹が立っていたなんて生易しいものではなくなっていた。それはつまり――

「……………殺すっ!」

獲物を探す獣のような目で、彼は駆け出していくのだった。

黒いスーツを纏った青年……アオボシは柵にもたれ掛かりながら、一真が近づいてきたことを感じとる。

「見ろ。マガオロチは眠ったよ。破壊するだけ破壊してあとは眠るなんて……随分と身勝手なやつだと思わないか？」

“その封印を解いたのは誰か？”と聞きたくなる想いを必死に呑み込み、無言で彼に詰め寄っていく。

「……ッー」

一真は無言で右ストレートを放つが、アオボシは読んでいたとばかりに避けられてしまふ。立て続けに振るった裏拳も、彼の腕に防がれた。

「おいおい、こんなものか？」

「返せっ……!!」

自分の目的だけを彼に伝える。煽りに耳を貸す暇はない。

「断る……と言ったら？」

「力づくで……!!」

怒涛の攻撃を繰り出していく一眞だったが、それはアオボシの放った拳が腹部にめり込んだことで終了する。柵に背中を預け、ずるずると座り込んでしまう一眞。

「ああく……うう……」

「かつこ悪つ……」

見下したアオボシの視線。そこにはまた別の……失望の感情も含まれているような気がした。

すると、彼の横から一人の少女が現れた。ピンク色の髪をもった彼女の金色の目には、困惑と悲しみ……なにより軽蔑の意が見て取れた。

「なんで……あなたが……」

「き、君は……あの時会った」

Aoursのファーストライブの時、チラシ配りで出会った少女であった。だが、彼女にはそれ以外にもありそうだったのが。

「生きててくれて嬉しかったのに……よりによって……なんであなたがウルトラマンなのっ!?!」

彼女の言葉に、一眞は困惑を強めていた。

「……生きてた? 嬉しい? 何故彼女がそんなことを言うのか。意味が分から

ないその言葉に、一眞はある答えにたどり着いた。

「知っているのか……俺のことを？ 俺が何者か、いったい誰なの——」

だが、一眞の声は少女……スピカの蹴りにかき消されてしまう。

「ああああ……」

「あなたが……お前が、兄さんを奪った!!」

「……っ!?!」

信じられないようなことを口にする。一眞が彼女の兄を奪ったと。そんなはずはないと、彼は否定する。でももし、記憶がない空白の期間にそのようなことをしていたら……? 否定しきれない彼は見る見るうちに顔が青ざめていく。

「俺は……そんなことしていな——あああああつ!?!」

「絶対に……あなたを許さない……!!」

口に出して必死に否定しようとする。だが、スピカによってすべてを言うことは叶わなかった。その細い足になぜそれほどの力が込められているのか……そう思うくらいので一眞の胸に足を食い込ませる。

「お前、以前も地球人と仲良くしてたんだな。僕も妬いちやうよ……さて、そろそろ時間だ。スピカ、行くよ」

「でも、今なら……」

「大丈夫、チャンスならいくらでもある」

彼女を一真から離すと、彼は遠ざかっていく。

「待て……！！ 何がどうなってるんだよ！！ 教えるよ！！」

地面を這いながら追う一真に、アオボシは起き上がる巨体を指さし言った。

「マガオロチは眠りから覚めたみたいだよ？ ……止めるんだろ、オーブ？」

2人は姿を眩ませた。悔しさと、突然起こったことの意味不明さに、彼は地面に拳を打ち付ける。マガオロチの咆哮と、再び耳に入ってくる破壊の音。

彼は立ち上がり、ヤツの元へと向かう。何もできないと頭ではわかっているが、もう、そうせずにはいられなかったのだ。まるで何かに導かれるように……。

ふと彼が地面に目をやると、そこにはカードが落ちていた。それを見た一真はまるで引き寄せられるように、カードへと近づいていく。

「それは……」

一眞は、地面に落ちていたカードを拾う。それは先ほどアオボシが手にしていた“黒き王”と呼んでいたものであった。封印を解くために使用したのに、ここに落ちているとはなんとも不思議であるが、今はそれを気にしているわけにもいかない。

黒い体表に、血のように全体を通る赤。長い両手の爪……。そしてつり上がったその両目は、見る者に畏怖の念を抱かせるものであった。

「……」

一眞はゾフィーのカードとウルトラマンベリアルカードを見つめる。光と闇……相反するようなこの2つの力でまた戦えるはずではある。しかし、一眞は即座に変身しようと踏み込むことができなかった。ベリアルカードに見られる、深淵のような何も見えない闇……。それに吞まれてしまうのではと不安を感じているのだ。

だが、マガオロチの地響きと耳を塞ぎたくなくなるほどの咆哮に、まるで夢からたたき起こされるかのような衝撃を食らう。

（何を迷っているんだ……!）

不安を感じ、カードを見つめているだけの自分を殴りたくなくなる。立ち向かえるのは自分だけ。迷った時間、躊躇った回数だけ……。それだけ犠牲者も街の被害も増えていく。現に目の前の大魔王獣は止まらずに、街を破壊し跋扈している。それを止める為なら

……

(使つてやる……)

自分に言い聞かせ、せり上がってくる不安を押し殺しながらオーブリングを構えた。

ゾフィー

しかしベリアルのカードをリードさせようとするも、途中で弾かれてしまうのだ。まるでカードが拒否しているかのように。

「くそ、なんでだ………頼む！」

焦りを感じている一眞は、何度もリングにカードを通そうとするも弾かれる。何度目の失敗……その際の衝撃で地面に倒れこむ。

自分がやらなければ、自分が倒さなければ……。後ろから囁かれるように、下から湧き上がってくるかのように、そんな声が聞こえる。自然と息も荒くなる。苦しくなる。

「頼む、力を貸してくれえ!!」

まるで親にせがむ子どもようだった。

「おがあざあああん、どこお……どこなのおおおお?!?!?」

その声の方向に目を向けると、そこにはぬいぐるみを抱えた少年が転んでいた。おそらく母親と別れてしまったのだろうか。顔が涙やすずで汚れているなか、必死に母親を呼んでいたのだ。

すると、大きな爆風が一眞の視界を奪う。

爆風が収まり、目をあけた彼の前には衝撃的な光景が広がっていた。

子どものいた場所に、とてつもなく巨大な瓦礫が落下していたのだ。

「は……あ、あああ……そ、そんな……」

目の前の子どもに、何もできなかった悲しみと後悔。はつきりと頭に焼き付いたその顔……。それを明確にイメージすると、思い出そうとすると、胸が張り裂けてしまいうだった。

そうして一眞の中で、何かが砕けた。

目の前で街を破壊するマガオロチに。それを止められなかった自分に。そしてどこかで笑って見ているであろうアオボシに。とてつもないほどの怒りと、殺意を抱いたのだ。それは留まることを知らず溢れ出る毒のように、煙のように自分の心を覆いつくしていく。

「ううう……うああああアアアアアアアアアアアアアア!!」

誰かが乗り移ったかのような二重に響く声と共に、一眞はオーブリングへと通した。

ウルトラマンベリアル

黒い巨人は、まるで一眞が負の感情を見せたことを喜ぶかのように高らかに笑う。

一眞の意識はそのまま暗く、深い闇の中へと落ちていくのだった。

フュージョンアツプ

ウルトラマンオーブ サンダーブレスター

マガオロチの目の前に降り立つオーブ。しかし、普段からは想像できないほどの禍々しい姿がそこにはいたのだ。

鋭くとがった爪。盛り上がった筋肉質な体。肩に見られる、力の一部となった戦士が身に付けている勳章。そして赤くツリ上がった両目。それはもはやヒーローと呼べるものではなく、ただの狂戦士だと錯覚させる。そしてカラータイマーと両目に走っている、血液のような光。

カメラで映されている彼の姿……。その衝撃は街の人は勿論のこと、Aquoursも例外ではなかった。

「なに、これ……?」

「悪魔……ね」

さすがの墮天使と言っていた善子でも、その姿の禍々しさに声を震わせる。

激情に駆られるオーブは、大地が震えるほどの声を上げマガオロチへ向かっていく。数秒にして距離が縮まるその刹那、助走で加速させた跳び膝蹴りがマガオロチの胸に食い込んだ。加えて素早い右腕がマガオロチの顎を捉える。頭がゆがむほどの衝撃に、マガオロチの声が漏れるとともに少量の血を吐いた。

衝撃で焦点がすっかりしていないマガオロチの頭を掴み、膝蹴りを食らわせる。横、そして下から加えられた衝撃に、マガオロチはフラフラと後退する。

「ウアアッ……!!」

その隙に頭を執拗に殴りつけていく様。それは自らの怒りをぶつけているのか、もしくは甚振っているだけなのか。

「■■■■ ツーーーーー!!!」

だがその巨体も不意を突かれ、尻尾により後方へ飛ばされてしまう。

「……ウウ……ウアアアアアアアアアアッ!!!」

自身の攻撃を中断された怒りからか、オーブは天に吠えた。それと同時に体の赤いラインが鈍く輝く。そしてあろうことか、近くにある建造物を引き抜き、マガオ口ちに叩きつけたのだ。原型が無くなるまで叩きつけ、ビルは粉々に砕けてしまう。

「オーブ……こんなに乱暴だったけ……」

「ど、どうだろう……」

その姿を見ていた曜は問うてみるが、なんとも言えない雰囲気です。梨子は返したのだった。やはり2人の声も震えていた。

今のオーブは怪獣と変わりない。ただ、人類と彼の敵が共通しているだけ。だから辛うじて味方に見える……そんなことすら思わせる。実際、あれがオーブではなく別人なのではと考えている人も中にはいた。いや、「別人であってくれと願っている人」と

いったほうがいい。

先の鬨いの仕返しといわんばかりの、反撃が出来ない猛攻。マガオロチの分厚い首を掴み、ビルへと打ち付ける。当然、その衝撃や重みに耐えきれずビルは崩れ落ちていく。起き上がる瞬間に上段から振り下ろされた拳が、大魔王獣の背中にめり込んだ。それは鈍い音を響かせ、再度地面に倒れさせる。追撃として尻尾を掴み、ジャイアントスイングを決める。

その重々しい巨体は遠心力も相まって、周りのビルに頭を打ち付けながら宙を舞った。終いには、左手にエネルギーを丸鋸状に生成した『ゼットシウム光輪』でその長い尻尾を斬り落とした。

「■■■■■■■■■■ー！！！！」

激流の如く吹き出てくる血液。マガオロチは痛みに声を上げて逃げようとするが、オーブの拘束から逃げ出すことができない。するとオーブは、切り落とした尻尾をまるで鞭のように使ってその巨体へ叩きつけた。

何度も、何度も……何度も叩きつけた後、背中に蹴りを撃ち込み前方へ倒れこませる。

「■■■■■■■■■■ッー！！」

遂に光線に耐えられなくなり、断末魔を上げたマガオロチは数秒の無音の後、周囲が揺れるほどの爆発と共に吹き飛んでいくのだった。

「ハハハハッ！ いいぞ。やっと己の闇を見せてくれたなオーブ!! アハハハハッ、ハハハ……」

屋上で静観していたアオボシは、嬉しさのあまり笑い転げていたのであった。

静寂を取り戻したボロボロの地上。そこから空に飛び上がっていくオーブの影。勝利したとはいえ、それはなんとも後味の悪いものであった。

「よお、暁一真くん？」

「お前……」

ドスをきかせて、今にも襲い掛かってきそうな一真に手を上げる。その右手にホルダーを持って。

「ほら、返すよ」

投げ捨てるかのように一真に返したアオボシは、去り際に耳元でささやいた。

「お前も僕と同類だ。せいぜいその力で理想を掲げてろ」

「どう意味だ……!!」

一真が向き直ると同時に、ステップで横に跳ぶ。

「いや、べつにつにつ！ フフツ……じゃあね」

「待て……!!」

また煙のように姿を消したアオボシ。一真は煮え切らない気持ちを抱えたまま、千歌たちのもとへ戻るのであった。

第21話 悔しさの果てに……

大魔王獣マガオロチが倒れた後、街は急速に復旧していった。電車などの交通網もすぐに稼働し始め、千歌たちは沼津へと戻って行くのであった。

「……」

とはいっても車内には沈黙が続いていた。投票数0という現実には打ちのめされたのだ。ラブライブに出られるかもしれないという希望も打ち砕かれた。

一真も同じく、自分の無力さに打ちひしがれていた。マネージャーでありながら、その役目を果たせていないと自分を責めて。さらに多くの守れなかったもの、自分の過去……。彼には抱えるものが増えていった。

「……っ！」

やり場のない思いに、膝においた手を強く握りしめるのだった。

「泣いてたね。あの子……入賞できなくて」

口を開いたのはルビィだった。彼女が思い出したのは、Saint Snowのツインテールにした子の言葉。

「でも、ラブライブを馬鹿にしないでなんて……」

善子が言いかけたところで、思い出したかのように消沈する。

「でも……そう見えたのかも」

どう思っていたしようと、彼女にはそう見えた。それが覆ることは無い。正直、心のどこかで思っていた。ラブライブに出て、学校を救えると。あの時のダイヤの声が、頭の中で反響する。

——これは今までのスクールアイドルの功績と、町の人の善意があつての成功ですわ！ 勘違いしないように！——

如何に町の人と、「スクールアイドル」というものに助けられてきたかを理解する。大きな目で見れば、何百、何千のうちの1つだということ。

「私はよかつたと思うけどな」

千歌は今回のライブが良かったと振り返る。

「精一杯努力して頑張つて、東京に呼ばれたんだよ？ それだけですごいことだと思うでしょ？」

そうやって彼女はプラスの面を見ていこうと口になっている。「だから胸張つていい」

と精一杯の作り笑顔で。

「千歌ちゃんは悔しくないの？」

曜は千歌へと尋ねる。それは感情にしたら当たり前のものだ。あのような結果を突きつけられれば尚更。それに曜は、“誰かと競い合う世界”でも生きてきた。だから気になつてしまうのだろう。しかし千歌は、悔しさよりも嬉しさの方が勝っていると、そう答えたのだった。

沼津についた彼女たちを待っていたのは、浦の星の同級生たちだった。

「どうだった東京は？」

「うん……すごかったよ。なんかステージもキラキラしてて……」

千歌が答えるより先に、たくさんの質問が彼女たちに投げられた。

「ダンスのミスも少なかつたし……」

「これまでで一番よかつたよねって話してたんだ〜」

彼女たちには心配かけまいと、千歌や曜たちは作り笑顔で誤魔化していく。それを聞いてる一真は、もちろんだがいい気分ではなかつた。その賞賛が、千歌たちにダメージ

を与えると知っているから。

「じゃあじゃあ、このまま本気でラブライブ狙えちゃうってワケ？」

ラブライブという言葉に耳にした瞬間、千歌の顔色が変わった。さらに頭を掻いていた腕が、ぎこちなく下がっていった。彼女の青い顔しながら受け答えをする姿なんて……誰も見たくなかった。

「そうだよね……だといいいけど……」

(ももういいだろ……)

一真はそんな千歌たちを見ていられずに、目を背けてしまう。彼は、自分のやるせなさに、使えなさに嫌気がさしていたのだ。

「おかえりなさい」

背後からまた別の声を掛けられた一同は振り向く。その柔らかな、優しい声が体を少し軽くする。安心……と言ったものなのだろうか。

「お姉ちゃん……」

ずっと待っていたのだろう。ルビイの姉は彼女たちを確認すると、優しい微笑みを浮かべた。途端、あらゆる感情の波がルビイを襲い、それは蓋をしきれない膨大な量となって爆発した。

「よく頑張ったわね……」

優しく頭を撫でられ、そのような言葉を掛けられたルビイは、大粒の涙を零しその声を震わすのだった。

くく

「得票……0ですか」

「はい……」

場所を移動した彼女たちは、川の見える場所で今までのことを伝えた。提灯の灯した光も、心なしか暗い。ルビイは泣き疲れたのか、ダイヤの膝の上で寝てしまっている。思いつめていたものを吐き出し、心に余裕ができたのかもしれない。膝にのせているダイヤの姿も、姉というよりは母親であった。

「やっぱりそういう事になってしまったのですね。今のスクールアイドルの中では……」

何かを察しているように話すダイヤ。疑問はあるが、一眞たちはただ黙って話を聞いていた。

「先に言っておきますけど、あなた達は決してダメだったわけではないのです」

多くの練習を積み、観てくれている観客たちを楽しませてくれるほどのパフォーマンスもしていると、彼女は言った。それは実際に東京にいたったこと、ランキングが上がったことがその証拠だろう。だが……それだけではダメと、彼女は言った。

「7236……何の数字かわかりますか？」

その膨大な数字に、誰もが口を噤む。ただ一人を除いて。

「ヨハネの——」「違うぞら」

いつものようなやり取りを交わすが、今回はそう言つてられるものではないと、花丸が先手を打ったのだった。

「去年最終的にエントリーしたスクールアイドルの数ですわ」

「……っ!？」

一眞はその膨大過ぎる数に息を呑む。なんとそれは、第一回大会の十倍以上……。

「確かにスクールアイドルは、以前から人気がありました……」

その人気を急速に加速させたのが、ラブライブ。そしてA-RISEとμ'sの活躍でそれが不動のものとなり、遂には秋葉ドームで決勝が開かれるようになった。

増えていくスクールアイドルの数。それが必然的に、レベルの向上を生んだのだっ
た。

「じゃあ……」

「そう。あなた達が誰にも支持されなかったのも、私たちが歌えなかったのも……仕方
のないことなのです」

“ 私たち ” “ 歌えなかった ” という突然出てきた言葉に戸惑いながらも、千歌や善子
は尋ねた。

「2年前、すでに浦の星には ” 統合になるかも ” という噂がありましたね」

今まで聞いたことのなかったその昔話に、千歌たちは驚きながらも耳を傾けた。

果南とダイヤ、そして鞠莉でスクールアイドルを始め、廃校から救おうとしていたの
だった。今の Aqours と同じように。ライブもうまくいつていた頃、これまた Aq
ours と同じく東京のイベントに招待された。

だが

「歌えなかったのですわ」

他のグループの凄さ、そして巨大な会場の空気に圧倒され……歌うことができなかつ

たとダイヤは話してくれた。

「あなた達は歌えただけ立派ですわ」

「じゃあ、反対してたのは……」

なぜ彼女がスクールアイドルをそこまで反対していたのか、ここにいる誰もが察してしまっていた。

「いつかこうなると思っていましたから」

その予想は的中した。歌えこそはしたものの、心に大きな傷を残した。

これは目の前の状況に心躍らせていた自分たちへの罰なのだろうか、一眞は心の内で問いかける。しかしそれに答えるものも、人もいなかった。

「俺、鞠莉さんに言われたことがあつたんです」

千歌たちと帰ろうとする直前、一眞はおもむろに口を開いた。

「鞠莉さんが？」

「ええ。みんなを繋ぎとめてあげて欲しいと。私たちの時にいなかった存在だからって……」

深くは聞かず、黙って話を聞いているダイヤ。一眞は自嘲気味に笑い、話を続けた。

「でも、俺はそんな役割には向いていないのかもしれない。スクールアイドルを始めた時、その先に何が起こるか、そして彼女たちがどうなるか……何もわかっていなかったんです」

そしてこのありさまだ。マネージャーなのに、彼女たちに何も言えない。ただの置物。

「確かに、私たちの時にあなたのような存在がいてくれれば、あのような終わり方もなかったかもしれないわね」

一眞のくすんだ目を見て、ダイヤは話しかける。

「わかっていなかった……。でも、それを反省として次に活かしていくのが大事だと思いますわ。向いているいないは、関係ないと思います。大事なのは、そこにやりたいという意思があるかどうか」

「でも……俺にはもう——」

できない……と口にしようとした瞬間、

「ネバーセイネバー……知ってますか？」

ダイヤに問われたが、一眞は知らないと言った首を横に振る。

「できないなんて言わない……。言っていたのは果南さんか、鞠莉さんか。もしくは両方かもしれませんわね。こうなってしまった以上、これから千歌さんたちがどう答えを

出すのには知りませんが、あなたは最後までA q o u r sのマネージャーであることを、忘れないでください」

く

ベッドに寝転んで、一眞は天井を見つめている。何とかして眠りに堕ちようと試行錯誤したが結果虚しく、眠れないままの夜を過ごしていたのだった。

眠れないことのため息を吐き、一眞は廊下へと出る。隣の部屋にいるであろう彼女には、未だ声をかけることができなかった。柵に手を置き、目の前に広がっている海へと目をやる。

千歌は帰り際、いつものように「やめる？」と曜に聞かれたが、彼女が答えることは無かった。その言葉を聞くと、いつもアクセルを踏まれたようにやる気をたぎらせていた彼女が……。

「どうすればいいんだ……」

吹き抜けていく風に、彼の気弱な声が溶けていく。何も理解できていないなら投げ出したかった……でもダイヤの言葉が頭で反響する。

「どうしたら……」

柵を持つ手に一段と力が入る。

——しかし、彼に答えを提示するものにはいなかった。

「あれは……」

すると一真の目には、海辺で誰かを探すようなしぐさをしている少女の姿が映った。その姿を確認した彼は、反射的に階段を下りていくのだった。

海へと向かう千歌の姿を見た梨子は、追いかけるようにしてその場へと駆けだした。

しかし梨子が着くころには、千歌の姿は見えなかった。静かな海辺に不安を感じ、何度も千歌の名前を呼ぶ。すると海へと潜っていた千歌は、その呼び声で海から出てきた。

「何も見えなかった」

梨子や千歌たちの元へ向かっていた一眞は、千歌のその言葉で足を止めてしまう。

「でもね、だから思った。続けなきゃって」

その身を隠し、千歌の言葉に耳を傾ける一眞。その沈んだ目は下を向いていて、まるで狭い場所に隠れたのかというくらいに、身を縮こませて……。

「私、まだ何も見えていないんだって。先にあるものが何なのか、このまま続けても0になるのか、それとも1になるのか……10になるのか。ここでやめたら全部わからないままだって……」

それが昨日の曜の問いに対する千歌の答え。

一眞は顔をうずめて考える。どうして、彼女たちの場所に行かないのかと。答えなど簡単。一緒に立つべきじゃない……そう思っているから。

「だから私は続けるよ、スクールアイドル。だってまだ0だもん！ 0だもん……。0

なんだよ。あれだけみんな練習して、みんなで歌を作って、衣装も作って、PVも作って……頑張って頑張って、“みんなにいい歌聞いてほしい”って……スクールアイドルとして輝きたいって……」

千歌は自然と拳に力が入っていく。だがそれを知らず、意識などせず、彼女は続ける。「なのに0だったんだよ!?! 悔しいじゃん!!」

彼女の叫んだそれは、自分の本心。昨日からずっと思っていた彼女が、口にするのできなかった言葉。

「差がすごいあるとか、昔とは違うとかそんなのはどうでもいい! 悔しい……やっぱ私……」

「——悔しいんだよ」

彼女の目からも涙があふれ出した。その姿を見た梨子は、同じように海に入り、千歌を後ろから抱きしめた。

「よかった……やつと素直になれたね」

「だって私が言ったら、みんな落ち込むでしょ? 今まで頑張ってきたのに、せつかくスクールアイドルやってくれたのに……悲しくなっちゃうでしょ?」

自分がやろうと言い出したから、みんなを誘ったから、発起人だから……。だからこそそんな自分が泣くわけにも、弱音を吐くわけにもいかないと、彼女は心の内で我慢していたのだった。

「バカね。みんな千歌ちゃんのためにスクールアイドルやっているわけじゃないの。自分のためにやっているのよ。私も……」

梨子が砂浜の方に目をやる。そこにはスクールアイドルをやろうと決めた少女たちの姿があつた。

「曜ちゃんも、ルビィちゃんも、花丸ちゃんも、もちろん善子ちゃんも」

「でも……」

「だからいいの。千歌ちゃんは感じたことを素直にぶつけて、声に出して」

曜たちも千歌の周りに集まっていく。その顔は誰もが笑顔を浮かべて。

「みんなで、一緒に歩こう……。一緒に」

同じ景色を見る仲なのだから、感じたことを包み隠さず、素直にぶつけよう……。そんな意味。

そこで遂に、千歌は大声を上げて泣いてくれた。素直に自分の感情を露わにしてくれたというのだ。

「今から、0を100にすることは無理だと思う。でも、1にすることはできると思う。」

私も知りたいの。それができるかどうか……」

「……うん！」

そこで千歌にも笑顔が戻った。今は100にすることは無理だとしても、1にすることはできる。1への扉を開こうとするために、彼女たちは上を見上げる。

すると曇っていた空にぽっかりと、太陽の日差しが差し込んでいく。

彼女たちの新たな立ち上がりを見ていた一真。

(前にも、ただ見ていることしかできていなかったような……そんなことがあった気がする……)

そんな不確かな思い出に浸りながら、彼女たちを見ている。

隣には立てない、マネージャーであるとも言えない彼には、その光も、6人の姿も――

「遠いな……」

はるか彼方に感じられるのだった。

第22話 彼女たちは夢を見る

遠い日の記憶——

「……………え？」

唐突に告げられた言葉に、鞠莉は困惑と疑問の声を漏らした。

それはとある日の浦の星。とある日の部室の話。彼女たちが解散した……………そのほんの一幕。

「私……………スクールアイドル、やめようと思う……………」

ホワイトボードにペンを走らせる音を響かせ、果南は言った。部室の外から覗く、ダイヤの悲しげな表情。

「なんで？ まだ引きずっているの？ 東京で歌えなかつたくらいで……………」

東京のイベントで歌うことができなかつたから……………その失敗を引きずっているのかと、鞠莉は問う。しかし、真意は別……………。

「鞠莉に留学の話が来てるんでしょ？ 行くべきだよ」

「冗談はやめて。前にも言ったでしょ、その話は断ったつて。ダイヤもなん——」
ダイヤは答えない。代わりに、ドンツと机に脚が当たる音が部室を支配する。それは、ダイヤも同じ意見だということを意味していた。

果南は言う。「続けても意味はない……」と。

それはお互いがお互いを思ったゆえの、悲しい幕引きであった。

くく

「夏祭り!?!」

そして現代、十千万に集まったA q o u r sにとあるお知らせが来ていた。敗北からの一歩であった。その中で赤いツイントールを揺らしながら、ルビイは嬉しそうに聞き返す。

「^{屋台も}やふあいもえるうら」

「これは、痕跡……わずかに残っている、気配……」

食べながら話す花丸と、寝転んで何やら呟く善子。その謎めいた行動に、曜や梨子、一眞は唖然。ルビイと花丸は眉を寄せていた。東京にいつてから墮天使状態へ戻ってしまつた事をぼやくルビイだったが、花丸は放つておくと、言い放つ。

「しいたけちゃん、本当に散歩でいないわよね？」

「だから居ないって……心配性だな」

「私にとつては重要なのよ!」

詰め寄られた一眞は、両手を上げて「わ、わかりました」と一言。2人のやり取りを尻目に、曜はフロントにいる千歌に尋ねた。

「千歌ちゃんは夏祭り、どうするの?」

「そうだね、決めないとね」

どうやら彼女も悩んでいるようで、机に頭をおいて考えているようであった。

その間に、沼津の花火大会はここの地域で一番のイベントだと曜が説明する。Aqoursを知つてもらうには一番のイベント。だが、いまからでは練習する時間もあまりとれない。

「私は今は練習に専念した方がいいと思うわ」

時間があまりとれないことからすると、本番で十分なパフォーマンスができず、中途半端なものになってしまおうのではという危惧からだ。だからこそ、今は力を貯めるために練習を積み重ねる方が良いのではという梨子からの提案であった。

「私は出たいかな」

千歌は異なったようで、参加を提案した。その表情には迷いはなかった。その意見には曜は勿論、梨子も嬉しそうであった。

「今の私たちの全力を見てもらう。それがダメだったらまた頑張る。それを繰り返すしかないんじゃないかな」

それが、前回のイベントや出来事を通して得た彼女のやり方、答えであった。

「カズくん？ カズくん？」

「え、あ、ああ。何？」

「夏祭り、参加するって」

気の抜けていたかのような反応をする一真へ、曜は「どうしたの？」と尋ねるが彼はあやふやにして誤魔化してしまうのであった。

彼はマネージャーとしての不甲斐なさや、相応しくないという想いを抱えながらもこの場所にいた。その為に、こうやって話を聞いてないことも多くなってきた。しかしそ

れとはまた別に、一眞は果南のことを考えていたのだ。

千歌と一緒に、淡島神社の頂上へ上った日のこと。横を通りすぎる果南に、千歌と一眞は問いかけたのだ。「スクールアイドルをやっていたのか?」と。

「うん、ちよつとだけね」

そう答えた果南は、どうにもぼつが悪そうにしていたことを思い出す。そして階段を下りていく姿は、早くこの場を脱したいと、心なしか急いでいたようにも思えたのだった。

するとどうやら、千歌も同じことを考えていたようでみんなにその疑問を共有した。

「果南ちゃん、どうしてスクールアイドル辞めちゃったんだろうって……」

「生徒会長が言ってたでしょ。東京で歌えなかったからだって」

以前ダイヤが言っていたことが理由だと善子は言う。しかし、千歌はそれだけでは納得がいかなかった。幼馴染であるからこそ、そのような失敗ですぐやめる性格ではないことを知っているからであった。

幼いころ、海へ飛び込むことを恐れていた千歌に果南は

「ここでやめたら後悔するよ」

「絶対できるから」

と勇気づけていたことがあったのだという。

「ネバーセイネバー……」

一眞の発した言葉に、耳を傾け「なにそれ」と聞かれる。一眞は、東京から帰った日にダイヤが鞠莉、もしくは果南が言っていた言葉だと教えてくれたことを話した。

「できないなんて言わない……。果南がもしそう言っていたのなら、そんな簡単に諦められるのかなって……」

「とてもそんな風には見えませんが……ハッ!? すみません……」

千歌や一眞の話を信じきれないルビィは、うっかり漏らしてしまった言葉の謝罪をす。だが、それよりも後の善子の“天界の眷属が憑依した”という推測に意識を持っていかれてしまったが。

「もう少し、スクールアイドルやっていた時のことがわかればいいんだけどな……」

「聞くまで全然知らなかったもんね」

（聞くまで……）

ダイヤさんに聞くまで知らなかった……と考えたところで、とある図式が頭の中に思

い浮かぶ。内情を知るかもしれない、3年生を姉に持つ人がいるのではないかと。「ピギツ!」

全員の視線がルビィに向けられ、迫っていく。

「ダイヤさんから何か聞いてない?」

「小耳にはさんだとか」

「ずっと家にいるのよね。何かあるはずよ」

「小さなことでいいんだ」

2年生に詰め寄せられたルビィは、その場から逃げようとする。だが

「……フツ」

善子は笑うと、ルビィへと絡みつく。

「墮天使奥義、墮天流鳳凰縛!」

所謂コブラツイストという奴らしい。いったいどこからその技を拾ってきたのか……。

それはそうと、技名を叫ぶ善子の頭に手刀が入られる。

「やめるぞら」

いつものようであり、妙に威圧感をだしていた花丸に善子は従うしかなかった。

「ほんとに?」

ルビイが話してくれたことに戸惑い、千歌は確認のために聞き返した。

「ルビイが聞いたのは、『東京のライブが上手くいかなかった』って話くらいです。それから、スクールアイドルの話はほとんどしなくなっちゃったので」

「ただ……」とルビイが続けると皆が耳を傾け、復唱する。

ルビイは以前、家に訪問した鞠莉とダイヤやお茶を出しに行ったとき、2人が話している場面に遭遇した。

——逃げているわけではありませんわ! だから、果南さんのことを『逃げた』なんて言わないで

「逃げた訳じゃない……」

口にしてみる千歌だったが、その言葉の意味を理解できずにいた。どこまで考えても推測の域に、まだそこまで達していない3人の内情は、まるで濁った水のように不鮮明であった。

くく

数日後、果南が復学するという知らせが千歌たちの耳に入った。

「とは言ってもな……直接聞くわけにもいかないだろ」

「うん、前だつてはぐらかされちゃったしね」

「鞠莉さんはどうするって？」

「まだわからないけど……」

「はあく……」

学校のベランダで、同じような姿勢で考えをめぐらす千歌と一真。その姿をみて微笑むのは梨子と曜だった。

「杞憂だったのかも」

「……ええ？」

「カズくん、最近〴〵心ここにあらず〴〵って感じだったから何か悩んでるのかなって思ってたんだ」

曜は彼の変化に戸惑いと心配を感じていたようであった。しかし、今は千歌やみんなと共に悩み、解決策を導き出そうとしている。それは、以前の彼と変わらないものであったことに、曜は安心していたのだった。

「そうね。ああやって千歌ちゃんと悩んでいる姿……久しぶりに見たかも」

彼女たちの眼差しを感じた一真だったが、それが何を意味しているものだったのかはわからなかった。

すると上の階から、何や布が落ちてきたのだった。ヒラヒラと宙を舞い、高度を下げていく。

「くんくん……」

目の前を通り過ぎる白い何かに鼻を鳴らす者が1人。

「制服っ!!」

曜はそれが制服だということがわかると、掴もうとして飛び出した。ここが地上から数十メートル離れた場所であるということを忘れて。

「だめ!!」

千歌と梨子は慌てて曜を止めた。地面と垂直になりかけた曜は、そこでここが何処であるかを思い出した。

「これって……」

安心すると同時に、千歌は曜が掴んだものに目を向けた。それはセーラ服のようにも見える。しかし、胸元には紫のリボンが結ばれているという装飾が施されたものであり、千歌たちには馴染み深いものであった。つまりそれは……

「スクールアイドルの……」

「離して！ 離せて言うてるの!!」

「離さない！ いって言うまで離さないっ！ 強情も大概にしておきなさい!!」

落ちてきた制服について、3年生に問いかけようと上ってきたはいいが、教室ではな入とも入りづらい雰囲気か漂っていた。この場合は、入りにくい……といったほうがいかもしれない。

鞠莉が果南に抱き着いている状況だった。果南はそれを必死に引き剥がそうとし、対して鞠莉は必死に抵抗していた。唐突に始まったこの張り合いに、同級生、ましてや下級生は手を出せないでいた。

「たった一度失敗したくらいでいつまでもネガティブに……」

「うるさいっ！ いつまでもはどっち!? もう2年前の話だよ！ だいたい、今更ス

クールアイドルなんて……私たち、もう3年生なんだよ!」

「2人ともおやめなさい! みんなみてますわよ!」

ダイヤは言葉だけで仲裁を試みるが、一向に“どちらかが折れる”なんて事が起こりそうもなかった。

「いくら粘つても果南さんが再びスクールアイドルを始めることはありませんわ!」

鞠莉の同意への求めに、ダイヤは否定し、もうスクールアイドルをやることは無いと告げる。

鞠莉は何故、どうしてと果南とダイヤに問う。あの時の失敗……歌えなかったことはそこまで引きずることなのかと。同じような経験をした千歌たちは、新たに再スタートを切そうとしているのに……何故、と。

「千歌とは違うの!!」

声を荒げる果南だったが、それ以上の怒声が3年生の教室に響くことになった。
「いい加減に……しろおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

千歌の声は廊下にも響き渡る程の大きさであり、花丸や一真は耳を塞いでいた。

「もう、なんかよくわからない話をいつまでもずーと、ずーと、ずーと! 隠してないでちゃんと話しなさい!!」

「千歌には関係——」「あるよっ!」

3年生だけで話が進んでいる、訳のわからない話に千歌のモヤモヤがはち切れたのだろう。先ほどもまでの言い争いを黙らせ、千歌主体で話が進んでいく。その勢いは、果南の言葉を遮るほどに。

「いや、ですが……」

「ダイヤさんも、鞠莉さんも、3人揃って部室に来てください」

「いや、でも……」

「いいですね？」

行きたくないのだろう。果南は何かを言おうとしたが、千歌は言葉を強め、圧をかけて黙らせる。

「「は……」」

押し通そうとしていく千歌に、3人は大人しく従うしかなかった。

「怖いな」

「千歌ちゃん凄……」

「3年生に向かって……」

彼女の剣幕を見ていた一真や曜、ルビイが言った言葉に、千歌は我に返る。一体何をしたのか……。

「あ……」

く

「だから、東京のイベントで歌えなくたって」

放課後、果南たちは部室に来て話をしてくれているが、内心嫌なのがわかるくらい、そっぽを向いて話している。ふんぞり返って座っているのもその影響だろう。

「その話はダイヤさんから聞いたんだよ」

「でも、それだけで諦める果南ちゃんじゃないでしょ?」

“話したのか?”と睨むが、ダイヤは口を噤み顔を背ける。

その話に「だから何度も言っている」と、鞠莉は千歌の背後から顔を覗かす。果南がそこで諦めるほどの人ではないというのは共通の認識なのだ。だから気になっているのだ。スクールアイドルをやらせないという理由が。

「何か事情があるんだよね?」

千歌の問いに答えない果南は、瞳を揺らすだけに留まる。やはり何かあるのだと、見

て間違いないだろう。

「……ね？」

「そんなものないよ。さつき言った通り、私が歌えなかっただけ」

掴めそうなところでふりだしへと戻ってしまふことに、千歌は頭を抱える。

「あー、イライラするうう〜」

「その気持ちよおーくわかるよ。ほんつと腹立つよねコイツツ!!」

鞠莉も同じように思っていたのか、その怒りをぶつけるように果南へと指を指す。

するとルビイが何かを思い出し、その記憶を手繰り寄せる。

「でも、この前弁天島で踊っていたような……」

それはA q o u r s全員で、果南を尾行していった時に見てしまったものだ。日課のランニングを終えた彼女は、弁天島でそれは綺麗に踊っていたのだった。

「ピギツ!？」

赤く染めた顔でルビイや花丸を睨む。その姿を見られたことが恥ずかしかったのだろう。それもそうだ。まさか、自分がつけられているとは思わない。

「おお〜、赤くなってる〜」

「うるさい……」

「やっぱりまだ未練あるんでしょ〜?」

まだダンスをしていたことに嬉しくなったのか、鞠莉はからかうように聞いてくる。ダイヤも心なしか嬉しそうに笑みを浮かべる。しかし

「うるさい！ 未練なんてない！ ……とにかく私は、もう嫌になったの!!」

立ち上がった果南の手には、何故か力が込められていたが気付く人はいない。

「スクールアイドルは……絶対にやらない」

言い残して去っていく彼女を、ただ見ていることしかできなかった。

「まったく……ダイヤさん？」

梨子の呼びかけにビクツとしながらも顔を向けるダイヤ。まさか自分のところに来るとは思っていなかったのだろうか。

「なにか知ってますよね？」

「え、私は何も……」

「じゃあさつき、どうして果南さんの肩を持ったんですか？」

確実に逃げ場を無くしていく梨子。その落ち着いたトーンが、妙に怖い。

「そ、それは……」

ダイヤは、すぐさま部室から逃げ出した。しかし、

「善子……」

「ギランツ！」

「ヨハネだつてばー!!」

ダイヤを妹と同じようにコブラツイストで捕まえたのだ。この期に及んでもヨハネ呼びに訂正させようとしてくる善子。その横でダイヤは「ピギヤアアア！」と悲鳴を上げる。

「さすが姉妹ずらー」

部屋の方から、花丸の声が聞こえた。

『わぎと〜?』

観念したダイヤの口から語られた真実に、全員が口を揃えて言った。

「歌えなかつたんじゃなくて、歌わななかつた……つてことですか?」

一真の確認に、ダイヤは無言で首を縦に振る。すると、ダイヤの家から窓の外を見て

いた鞠莉が「どうして」と口にする。顔をこちらに向けなかったため、表情は読み取れない。しかし、どんな表情なのかはある程度予想がつく。

「まさか、闇まじゆ——」

善子が茶々を入れようとしたところを、花丸が静かに口をふさぎかつさらっていく。黙れ。ということなのかもしれない。

「あなたのためですわ」

「私の……?」

鞠莉はその理由の意味がわからないと、振り向いて尋ねる。

「覚えていませんか? あの日、鞠莉さんは怪我をしていたでしょ?」

東京でのイベント。その当日に、鞠莉は右足を怪我していたのだった。練習中に負ったものであったが、ここに来るまでには治らなかつたのだ。それも本番直前で、包帯を巻きながらも痛みを顔をしかめるほどには悪い状況であった。しかし、その怪我を押しつけて本番へと臨もうとしていた。

それを見ていた果南は……歌うことをしなかつた。

「そんな……私はそんなこととしてほしいなんて一言も……」

「あのまま進めていたら、どうなっていたと思うんですの？ 怪我だけでなく、事故になってもおかしくなかった」

ダイヤの反論に口を噤む鞠莉。怪我を押しした結果、取り返しのつかないことになっていたとしたら……。その後に残るのは後悔だけだ。仮に鞠莉が納得していた結果だったとしても、果南もダイヤも、一生消えない傷を残すことになるのかもしれない。なかった。

「でも……」

「だから、逃げた訳じゃないって……」

言葉に詰まる鞠莉。その後ろで、以前の言葉の意味に納得するルビィ。「でもその後は？」と曜がダイヤに質問する。

「そうだよ。怪我が治ったら続けてもよかったのに」

千歌が言ったように、まだその後にもチャンスがあつた筈だ。

「そうよ。花火大会に向けて、新しい曲を作って……ダンスも衣装も、完璧にして……」
なのに……と鞠莉は声を震わせ、俯く。

「心配していたのですわ。あなた、留学や転校の話があるたびに、全部断っていたでしょ？」

「そんなの当たり前でしょ!!」

静かな家の中に、鞠莉の荒げた声が響き渡る。スクールアイドルが、浦の星のことが大事なのだ。それを放って、別の学校や、ましてや外国になど行く気など更々なかったのだから。

「果南さんは、思っていたのですわ。このままでは自分達のせいで、鞠莉さんの色々な可能性が奪われてしまうのではないかって……」

果南は自分から鞠莉を誘ってスクールアイドルを始めた。けど、それは彼女の可能性を奪っているのではないか……。ある時、職員室で聞いた鞠莉と先生の留学の話で、彼女は責任を感じてしまっていたのだ。

どんな終わり方になっても、鞠莉の可能性を潰さないために……と。

「まさか……それで?」

「どこへ行くんですの?」

即座に廊下を歩いていく鞠莉を、ダイヤは引き留めた。

「ぶん殴る。そんなこと、一言も相談せずに……!」

「おやめなさい。果南さんはずっとあなたのことを見てきたのですよ?」

誰がそうして欲しいと、留学したいと言ったのか……。そんな思いが溢れる鞠莉。対

して、彼女は言っても聞かないからと、最悪な終わり方になろうとも、鞠莉の将来を案じていた果南。その想いはどちらも正しい。どちらかが間違いだなんて思えないと、一眞は感じていた。

「あなたの立場も、あなたの気持ちも……そして、あなたの将来を……誰よりも考えている」

大雨の中、夢中で駆け出していく鞠莉。雨粒が目に入ることも、服がずぶ濡れになることにも構わず、彼女は足を動かし続ける。その脳内では、さっきの会話が残響している。

「そんなのわからないよ……どうして言ってくれなかったの？」

「ちゃんと伝えていましたわよ。あなたが気付かなかっただけ」

目に涙を浮かべながらも、その土砂降りの中を走る。道に躓き、転んでも再び立ち上がり走った。あの頃の記憶を思い浮かべながら、3人で笑いあつた日々を浮かべながら。

「——離れ離れになってもさ、私は鞠莉のこと……忘れないから」

とつくに言っていたのに……ようやく、2年という月日の果てに気付いたことに鞠莉は涙を流し、声を上げる。

それを降りしきる雨の音が、やさしく打ち消した。

く

「何の用？」

雨も上がったころ、果南は浦の星に呼び出された。やめてくれと、自分の決意が鈍くなると思いながら、果南は部室へと向かう。そこには、髪をグシャグシャにし、制服を濡らした鞠莉がいた。

「いい加減、話を付けようと思って」

ならばこちらも話を付けようと、果南は部室へと足を延ばす。

すると、冷たい感触が脚に伝わる。目をやると、そこには大きな水たまりがあつた。鞠莉はあの雨の中、傘を差さずに来たのか……困惑する果南に目もやらず、鞠莉は口を開く。

「どうして言ってくれなかったの？ 思ってることちゃんと話して。果南が私のことを

思うように、私も果南のこと考えているんだから」

彼女の口ぶりからして、全てを知ったんだなと察する果南。彼女は何も言わず、鞠莉へと近づく。

「将来なんか今はどうでもいいの！ 留学？ まったく興味なかった。当たり前じゃない、果南が歌えなかったんだよ……放っておけるはずない!!」

振り向きざまに見た鞠莉の顔。目に涙を浮かべ、自分のこと案じていたその顔に、果南は酷い後悔を感じた。彼女にきつく当たるのは心が痛かった。でも、それが彼女ためになると信じていた。だが鞠莉は、自分より親友をとった。とつていた。

——パシンツ

視界が横へと向いている。鋭い音とともに左頬に広がっていく熱と痛み。自分の頬を叩かれたとわかるまで、数秒の時間を必要とした。

「私が、私が果南を思う気持ち、甘く見ないで!!」
「だったら……」

鞠莉の本音が聞こえてくると同時に、自分の想いもせり上がってくる。言うに言えなかった、彼女へのいくつもの言葉。後悔の言葉。

「だったら素直にそう言つてよ！ リベンジだからとか、負けられないとかじゃなく、ちやんと言つてよ!!」

強くぶつけたその言葉に鞠莉は、お互い様だと自分の頬を指さす。同じようにやつてと。

果南は腕を振り上げる。その瞬間、ある記憶が脳内を過る。それは、2人が初めて会った時の光景。

ホテルの敷地内に、ダイヤと共に忍び込んだ時。

鞠莉に見つかつてしまい、とっさに出た言葉。それは今も変わらない、あの言葉。

「ハグ……しよ?」

昔との姿が重なり合いながら、果南は両腕を広げた。それを見た鞠莉は大粒の涙を流しながら、彼女の胸に飛び込んだ。それは、ようやく2人のわだかまりが解消されたことを意味していた。2年という長い時間を、埋めるように彼女たちは泣き続けた。

2人の姿を遠くから見ていたダイヤは、納得したように静かに校門から出てくる。も

う彼女たちは大丈夫だろうと、そう確信をもって。

「ダイヤさんて、本当に2人が好きなんですね」

するとその姿を見ていたのか、千歌が嬉しそうに声をかける。

「それより、これから2人を頼みましたわよ。ああ見えて2人とも繊細ですから」

千歌に託し、自分はこの場から去ろうとする。自身の役目はここで終了だと。

「じゃあ、ダイヤさんもいてくれないと」

彼女からの誘いに戸惑いつつも、生徒会の仕事があるからと断ろうとする。しかし、

真意の見え隠れする顔を千歌は見抜いていた。

「それなら大丈夫です。鞠莉さんと果南ちゃんと……あと、7人もいるので」

千歌の視線につられてダイヤも向くと、銘板のところから6人が顔を覗かせていた。

するとルビィはダイヤの方へ歩み寄った。

「親愛なるお姉ちゃん、ようこそAquoursへ！」

新たにライブで使う衣装を、ダイヤに手渡した。

あの時、もうできないと諦めたスクールアイドル。それをもう一度できる喜びを噛み

しめ、彼女は微笑むのだった。

未熟DREAMER

9人となったAqoursの新曲。3年生が途中で制作をやめた曲。それが長い時間を経て、完成したのだ。

曲のサビとともに、背後で空へと立ち昇っていく花火。多くの観客が心を奪われていくように、一真もその光景に目を奪われてしまう。

「Aqoursか……」

「どうしたの？」

懐かし気にグループ名を声に出す果南に曜は問いかける。

「私たちのグループもAqoursって名前だったんだよ？」

「え、そうなの!？」

「そんな偶然が……」

口に手をあてて考え込む梨子。その後ろで首を縦に振るルビィ。偶然にしては、すごい確率なのではないかと、一眞も考え込む。

「私もそう思ってたんだけど……」

すると一人、離れたところで立っていた人物に視線が向けられる。それはスクールアイドルというものに蓋をし続けていた人物であった。

「千歌たちも、私も鞠莉も、多分乗せられたんだよ。……誰かさんに」

その間にも、ヤツは迫っていた。それは彼らにとって彼……眺一眞……にとって大きな試練と、出来事となるある脅威が。

第23話 純白の判決者

「はあ……」

何度目かのため息を吐き、一眞は砂浜へと腰を下ろす。

頭上から照り付けている日差しは、チリチリと肌を焼くような感覚を思わせ、気温と体温を上げる。体を冷却しようと、大量の汗が噴き出るといふ不快感。加えて耳に絶えず響くのは、セミの声以外にも、打ち付ける波の音だったり、それにはしゃぐ多くの声。そこには、見覚えのある人々もちらほらと……。

目の保養……なんて言ってられる場合ではないし、言いたくも思いたくもなかった。当初の目的から若干乖離しているのでは……なんてものが頭の大半を占めていたからだ。

さらに、一眞はそこまで精神面でも、体調面でも、それほど好調なんて言えるほどのコンディションではなかったからでもあった。

A q o u r s は9人となり新たなスタートを切れた。しかし一眞は自身はどうだったのか。答えはノーだ。彼は未だに自身の役割に悩んでいた。しかしダイヤに言われたこと、さらに“ここで何かを見つけない”という自分の執着が、この場に留めている。自分の弱みを見せたくないかった一眞は、“俺は大丈夫”という偽りの仮面を被り、今まで過ごしていたのだった。

「結局、遊んでばかりですわね……」

白い水着に身を包んだダイヤの、呆れたような声が横から聞こえてくる。

「朝4時に来たらマル以外……誰もいなかったぞ……」

「当たり前だよ。無理に決まってるじゃない」

ここまで何時間待たせたのか……なんて思いの籠った花丸の言葉を、善子はあつさり一蹴してしまう。ダイヤは自分で言っておいた故の不甲斐ない感情に見舞われているのだろう。顔を背け、海の家を探し始めた。

しかし一体全体、何故このような話になったのか。それは昨日の練習中にまで遡るととなる。

くく

遂に突入した夏休み。変わらず屋上で練習するAqoursに、鞠莉とダイヤは問いかけたのだった。

「Summer vacationと言えば？」

「やっぱり海だよな？」

「夏休みはパパが帰ってくるんだ！」

「マルはおばあちゃん家に」

「……夏コミッ！」

千歌、曜、花丸、そして黒いマントをはためかせた善子。彼女たちは夏休みに連想すること、やることを挙げていく。だが、どれもダイヤが納得するような回答ではなかったらしく、彼女は肩を震わせた。それは怒りだったのだろうか……。

「ブツブツ……!!!」
「ですわ!!!」

それでもスクールアイドルなのかと、ダイヤはご立腹の様子。しかし、このような言葉を使う人だったのかと、困惑が先に千歌たちを襲ったのは言うまでもない。一真もそ

の1人である。

ルビイが言うには、ラブライブが開催されるが正解だったようで部室の中では、ダイヤとルビイの姉妹コントも見ることができたのだった。それは今までのダイヤのイメージを根底から覆すようなものであるとも感じ取れた。

「でも、自分で机叩いて痛がってたこともあつたし……」

「放送入れっぱなしで話してたこともあつたよね？」

と千歌や曜は隣で哑然としている一真に説明する。「そんなことが……」と声を震わす一真の反応には目もくれず、ダイヤはホワイトボードに紙を貼った。

そこには遠泳10kmやランニンググ15kmなんてメニューが書かれてあつた。この練習メニューはμ'sのものらしいのだが、こんな無茶苦茶なメニューをこなせていたのだろうかと疑問に思っている一真の横では、千歌や花丸、善子などが唾を飲み込んでいた。やったら死ぬ。彼女たちの本能がそう告げていたのだろう。

「ま、何とかかなりそうね」

果南だけは違つたが。

「ざつすがたい……何でもないです」

「うん、よろしい」

自身を睨む果南の視線を感じた一真は、それ以上は何も言わなかつた。

「なんでこんなやる気なの……?」

目を疑うようなメニューに、根性論で押し通そうとするダイヤが不思議だったのか、曜が呟くとその訳を鞠莉が説明してくれた。

「多分、ずつと我慢してただけに今までの想いがシャイニーしたのかも」

2年もの間、蓋をし続け膨大に膨れ上がったそのスクールアイドルへ感情が爆発したのだと鞠莉は言っているのだろう。ある意味微笑ましいものなのかもしれないが、その方向性というか熱量がぶつ飛んでいる。

そんな中、千歌と曜は海の家を手伝うことになっていたのを思い出したのだ。さらには果南も。気合を入れて考えてきた練習ができないことにダイヤが苦言を漏らす中

「じゃあ、昼は全員で海の家手伝って、morning&eveningに練習すればいいんじゃない?」

熱気のある昼間ではなく、比較的涼しくなる時間帯に練習をするというものであった。それまでの時間は海の家の手伝いというもの。鞠莉の提案に、練習時間が短くなるという問題を見つけたダイヤであったが、

「じゃあ夏休みだし、うちで合宿にしない?」

と千歌が提案する。旅館である千歌の家であれば、一部屋は借りられるであろうというものであった。さらに、移動時間の短縮にもつながる。

そして明日の朝4時に集合とダイヤが言い、時間は現在に戻るわけである。

「はて、そのお店はどこですか？」

「現実を見るすら」

ダイヤは、目の前にある少々古びれた海の家をスルーしようとしたが、花丸の冷たい一言で現実を認識させられる。

対する隣へと視線を向けると、なんとも洒落な店内のようであり、そこにはたくさんのお客さんで溢れかえっているようだった。

「都会すら」

花丸は興味を引かれているようであり、ダイヤはダメだと肩を落としてしまう。

「都会の軍門に下るのデエスカ？」

すると海の方から鞠莉が全員に語りかける。その声質的にも何やら闘志を燃やして

いるようなのは明らかであった。

「私たちはラブライブの決勝を目指しているんでしょ？ あんなチャラチャラしたお店に負けるわけにはいかないわ！」

この言葉でダイヤにも完全に火がついてしまった。そして海の家売り上げを伸ばし救世主となるためにダイヤ指揮の元、手伝いが始まったわけなのだが……。

「曜、大丈夫か？」

「うん、大丈夫……だと思う」

一眞の問いにも歯切れ悪く答える曜。それもそのはず。料理を任せられた曜はオムソバのような“ヨキソバ”を作ったのだが、残りの2人、善子と鞠莉はなにやら怪しげなものを作っていたのだ。善子は黒いたこ焼きのような“堕天使の涙”。鞠莉に至っては鍋が紫色に光っていた。

売り上げについては千歌が友達に連絡したおかげで、一応なんとかなった。

そんな海の家の手伝いも少し慣れ始めた頃、空から魔法陣が現れた。

「え、なにあれ!？」

「本当に天界の使者ずらか？」

「フフフツ……ようやく、ヨハネの召喚に答えてくれたのね」

と千歌たちが口々に言うその魔法陣にはA q o u r sはおろか、ビーチにいた人々も目を見張っていた。

すると、空の魔法陣を囲むようにして複数の魔法陣が出現。まるで3Dプリンターのように何かの姿を描き出していく。それは金や黒で彩られた白い体をもつ所謂“竜人”といったようなフォルムであり、どこか神秘的であった。

もしかするとどこかから転送されてきたのだろうか。魔法陣から海の方へ落とされると、片膝をついたまま動くことはなかった。

「動かない……?」

「みたいだね」

びくともしないその巨体を不思議そうに見つめていると、善子が声を上げる。

「よくぞ現れた！ 我が墮天の眷属サルヴァトロン！」

「善子ちゃん、なにそれ？」

いつもの墮天使ポーズをとる善子にルビイは尋ねる。

「リトルデーモン4号にだけ教えてあげるわ。サルヴァトロンとは————「イタリア語で救世主って意味ね」

鞠莉が先に答えると、「なんで言っちゃうのよー!!」と善子は両手を振り上げながら声を上げている姿が目に入る。

「それよりももつとstraightな名前で行きましょう! ずばり、Galaxy dragon!」

鞠莉は今だ佇む竜人を指さす。しかし善子はそれに気に入らないように「サルヴァートルンよ!」と囁みつく。しかし鞠莉も負けずに「いいえ、Galaxy dragonよ!!」と張り合う。

「まず宇宙から来たかもわからないじゃない!」

「そんなこと言ったらHeavenから来たかどうかともわからないじゃない!!」

「2人ともおやめなさい」

「もう、鞠莉!」

「善子ちゃんやめるずら!」

2人は譲らず、自分の意見で張り合っており周りの制止の声も聞かなかつた。

すると遠くの竜人から、何やら優しい音楽が流され始めた。それを聞くと安心するようであり、2人は徐々に落ち着きを取り戻していった。

「Sorry、言い過ぎたわね」

「(っつち)そ……(づ)めん」

「どうやら2人とも仲直りできたようだね」

「じゃあさ、いつそのこと名前を合わせればいいんじゃないかね？」

一眞の提案に、善子と鞠莉は顔を見合わせる。

「ギヤラクシー……」

「ヴァトロ……」

「ギヤラクトロ……」

とりあえず、あの竜人の名はギヤラクトロで決定した。

しかしその何もせずに膝をつく姿、鞠莉と善子を止めた音楽。得体のしれない行動に、一眞は不安を募らせた瞳でギヤラクトロを見上げるのだった。

くく

その後の練習では果南以外はバテてしまっていた。有り余る体力を持った果南の方が凄いのかもしれないが、それを口に出す勇氣は一眞にはなかった。

さらに夕飯では、余った食材は自分たちで処理しろと言われたようで大量に売れ残った墮天使の涙とシャイ

煮を食べることとなった。だが、シャイ煮は予想以上に美味しく箸が止まらない。

「何が入ってるんだ、これ？」

「私が世界中から集めた special な食材を使った究極の料理なのデースー」

ちなみに値段は10万以上するらしい。金持ちの考えは理解できないと、果南は呆れる。

シャイ煮が美味しいのであればこれもと、ルビイは墮天使の涙を口にする。しかし、中には大量のタバスコが入っているらしく顔を真っ赤にして走り回ってしまうほどの辛さであるようだった。

「痛ててて……タバスコ入れすぎだろ……」

夜風に当たろうと、一眞は外に出る。すっかり暗くなった景色や海。しかしながら、

ギヤラクトロンのシルエットははつきりと見える。その後、自衛隊が安全な対策としてあの巨体にワイヤーを張り巡らせていった。

遠くに見えるその巨体は、何を思い、そして何のためにここに来たのだろうか。もし地球を狙ったものであるのなら、自分は止められるのだろうか……自分に問いかけてみるが“わからない”としか言えなかった。また、やるしかないという強迫観念がいつまでも彼の心の中に居続けていた。

「どうしたの?」

すると、背後から曜に声を掛けられる。咄嗟のことに「まあな」としか答えられなかったが。

「なにか……あつた?」

恐る恐る曜は、一真へとその言葉を投げかける。しかし、内心、彼が何かあると答えるとは思えなかったし、何より自分が恐れていた。言ってしまうと、それを聞いてしまうと、彼がどこかへ消えてくのではないかと。

「別に。ただ……色々あつたなって思ってただけ」

「そうだよな。千歌ちゃんがスクールアイドルはじめて、0から走り始めて、9人になつて……」

ここまで色々あったなど、お互いに笑い合う。だがまだこれからだと、改めて決意もする。そろそろ戻ろうと一眞は踵を返すが、曜の一声によって止められる。

「カズくんは……A q o u r s のマナージャーでいてくれるよね？」

A q o u r s を始めたのと同じ時期から、一眞の様子は変わりだした。スクールアイドルのマナージャーを始めたから……それ以上の何かを彼は隠していると、曜は感じていた。だからこそ、不安なのだ。暁一眞という人物が、どんどん遠くへ離れていくような気がして……。

「……うん、そのつもり。何言ってるんだよ」

一眞も一眞で苦い感情を押し殺し、笑顔で答える。

不幸なのか幸いなのか、2人の真意はどちら共に伝わることは無かった。

くく

翌日の早朝、朝の涼しい時間帯に練習をはじめていたAqours。基本の体力づくりとして道路を走っていた。無理のないペースで、その足を動かしている。

ギヤラクトロンが一番近くに見えるところまで走っていくと、突然、地響きが起きた。「え、なにになに!？」

いきなりのことに困惑する千歌たちとは別に、また怪獣なのかと辺りを見回す一真。すると、

「あ、あれっ!？」

ルビイの指さす方向に全員の視線が向けられる。それは昨日から活動を停止していたギヤラクトロンであった。

ギヤラクトロンは体内部の機械を唸らせると、突然その体を起き上がらせ、自衛隊が張ったワイヤーを簡単に引き剥がす。しかし、その竜人を思わせる体はしばらくそこに立ち尽くしていた。なにをするかわからないことを警戒した一真が声を上げる。

「とにかく離れよう!」

一眞の言葉に、皆が頷く。しかし、ギャラクトロンはこちらを確認すると、胸から赤い光を照射させてきた。

「曜ちゃんっ!!」

すると曜は千歌に突き飛ばされる。

「え……………」

しかしその数秒後、代わりに千歌の体がギャラクトロンの中へと吸い込まれてしまった。

「千歌ああああああ（ちやあああああん）!!!」

一眞や曜、梨子は叫ぶが、その声が届くことは無かった。

「(ハハ)…………(どハ)……………」

暗い中に青い光が点滅する内部へと閉じ込められた千歌は、小さく声を震わす。しかし答えるものにはここにはいない。

すると吸い込まれた千歌の体に、後方から伸びてきたワイヤーが絡まっていく。得体のしれないものが全身へと巻き付けられることに恐怖し声を上げるが、その勢いは止ま

ることは無い。

そして最後のワイヤーが耳へと差し込まれた時、千歌は意識を失ってしまうのだった。

『…………この世界の解析は完了した。各地で起きている紛争、差別、残虐さを理解した』
ギョラクトロンの拡声機能により拡散される声。それは地球の文明…………人間が抱えてしまっている問題であり、一眞たちは言葉を失ってしまう。そして何より…………

「どうして…………千歌ちゃんの声が」

「何言っているのよ！ 千歌ちゃん!!」

千歌の声で共有される声。しかし、いつもの千歌よりも冷徹な機械を思わせる声音であった。梨子の必死の叫びも届かず、白竜は直立し、自身の使命を言い放つ。

『この世界のため、争い全てを停止させる。別の世界でもそうしてきたように、全ての争いを止める。すなわち、この世界をリセットする。それが我が使命。我が正義』

「リセットって…………まさか…………!」

一眞の疑念は的中し、その赤く光る両目から光子型の熱戦が発射される。着弾地点にいくつもの魔法陣が浮かび上がる数秒後、巨大な爆発が起きた。

「そんな…………」

ギヤラクトロンの真意を一真同様に察したダイヤは声を震わす。

世界のリセット。即ち、全生命を滅ぼすということだ。

「あのロボット、もしかして別次元の存在が扱いきれなくなつてこつちの世界に t r a s h したつてこと？」

「そんな迷惑な」

鞠莉は爆風から身を守りながら推測する。それは果南が言うように、随分と迷惑な話であつた。

「あれ……一真くんは？」

梨子が辺りを見回すも、一真の姿が見当たらないのだった。いつもこのような時に突然消えてしまうことに未だ慣れない彼女たちは、彼を探そうとする。

「一真なら大丈夫でしょ！ いつもそうだったんだから」

「今回も大丈夫だなんて考えられないぞら！」

「でもルビイたちも、ずっとここに居るわけにはいかないよ！」

「そうですわね。一真さんを見つけたいところですが、今は……」

ダイヤたちは、破壊しながら街へと向かう白竜に視線を向ける。囚われた千歌をどうにかして助け出したいが、自分たちの力ではどうすることもできない状況に、唇を噛むことしかできなかつた。

街中へと破壊しながら歩みを進めるギャラクトロン。その白い巨体が近づいてきたことに興味を抱き、スマホを片手に撮影する人々。するとその人々へ顔を向け、光線を発射した。さらに立ち並ぶビル群にも熱線を発射。次々に煙を上げ、崩れていくビル。

「千歌……お前を必ず助けるっ!!」

ギャラクトロンへと走っていく一真はオーブリングを前方へ突き出す。

ウルトラマンオーブ スペシウムゼペリオンは、地面へ降り立つと同時に駆けだした。

頭部から延びる先に鍵爪のついた辮髪状のパーツ“ギャラクトロンシャフト”を引つ張り上げ、光線の照準を街から空へと逸らす。

そのまま顔を殴り上げようとしたところ、突如として胸のコアのような赤いパーツが光り輝く。その眩しさにオーブは一瞬目を覆う。

(なんだ……!?)

その光はオーブをスキャンしているようであった。放射された光が消えると、ギャラクトロンは興味を無くしたかのように向きを変え、再度街中へと歩みを進めた。それは変わらず「生命のリセット」という使命を遂行することである。オーブは、それを見て地面を蹴り上げる。

(これ以上はやらせない……!)

そしてギャラクトロンの進行を止めるようにオーブは立ちはだかる。すると、遠くから友人が必死の声でオーブへと懇願する。

「オーブ、その中には大事な友達がいるの!!」

「お願い!!」

走ってきたのだろう。肩で息をしながらの梨子と曜の必死に叫びにオーブは頷く。その想いは、オーブも一真緒であるから。

(どこにいるんだ、千歌……)

両目から放たれた光線は、ギャラクトロンの機械仕掛けの内部を透視していく。

すると先ほども光った中心のコアの内部に、閉じ込められていることがわかった。しかし、千歌の目は生気を吸い取られたような濁った目をしていた。

(……ッ!!)

瞬間、ロケットのような爆発力でギャラクトロンへと接近。そのコアをもぎ取ろうと

手を伸ばす。だが、ギャラクトロンも黙って見過ごすわけもなく、巨大な盾のような形の左腕、クロー状の右腕を使いブロックしてくる。

さらに超至近距離からの光線を左腕から発射。もろに食らったオーブは、後方のビルへと吹き飛ばされてしまった。

地面へ伏しているオーブには目もくれず、ギャラクトロンは高層ビルの方へと目を向ける。内部にいる複数の知的生命体を検知した。使命を果たすため、正義を執行するため、その生命体を焼き払うために双眼が赤く輝く。

(させるかああああああ!!)

顎を力強く殴ったオーブのおかげで再度その照準はズレる。暴れる巨体を持ち上げ、オーブも空へと上がるり、高速で飛翔する。人々の密集する街中から遠ざけようというのだ。

「暴走した正義と、自分を正義だと言い張る者……面白い闘いだ。さて、今度はあの力を使わずに勝てるのかな？」

「またもや遠くから戦いを見守るアオボシ。木の枝に座っていた彼は、もたれ掛かるようにして眩く。」

「どうして君はそこまでして地球人を守ろうとするんだ？ 別の星の住人なのに……」

凄まじい速度と勢いで地面へと着陸したオーブとギャラクトロン。押し出された勢いは留まることなく、土を巻き上げその巨体を滑走させた。オーブはその隙に懐に入り込み、右腕で攻撃を防いでパンチをお見舞いする。一步、二歩と後退するその胴体に渾身の飛びまわし蹴りを与えると、ギャラクトロンにダメージが入った。

白竜の双眼からまたもや光線が発射されるが、間一髪でこれを回避。宙返りで空へと飛びあがり、右腕を真上に、左腕を真横に伸ばす。

(スペリオン光線ッ！)

足止めにと瞬時に放ったスペリオン光線であったが、ギャラクトロンは足元に魔法陣を展開、即座に防御してみた。

(直接斬るのみ……)

青い光が、カラータイマーを中心にあふれ出す。

《ウルトラマンオーブ ハリケーンスラッシュ》

オーブスラッガーランスで斬りつけようとすることも、見切られているかのように避けられ、さらには右腕のクローで防がれてしまう。関節を狙って切り崩そうとするが、強力な足に蹴飛ばされる。

ギヤラクトロンの硬く、屈強な攻撃に手を出すことができなくなってしまう。

(避けるので手一杯なんて……)

一真は隙を作るために、槍の状態を一時的に解除させたオーブスラッガーショットを放つ。二方向から襲い掛るブーメランに魔法陣を展開することなく、防ぎきる。しかし前方にオーブの姿はいなかった。

(……)だ……)

上空から飛び掛かるオーブの手元へと戻ってきたブーメランを再構成。槍へと変化させ、レバーを3回引く。

『トライデントスラッシュ!!』

緑と青に発光した切っ先がその純白のボディを捉えたと思ったその時……。

(なっ……!?)

右腕のクローに、その攻撃すらも掴まれたのだった。計算してその行動を呼んだのだ

ろうか、その無表情な頭が赤と青の巨人と姿を捉える。

抜け出そうにも、強力な握力を発揮された右腕から槍を動かさなくなっていると、ギヤラクトロンシャフトがオーブの首を絞めたのだった。さらにオーブスラッガーランスは取り上げられ、どこかへ投げ捨てられる。

宙へと吊り上げられたオーブは、脱出しようともがくがその力は強く、とても逃げ出せるものではなかった。すると胸のカラータイマーが点滅を始めた。

(は……なせ……)

エネルギーが残り少なくなってきたからか、または首を絞められている苦しさからなのか、はたまたはその両方か……。力が抜け、意識が薄れかかってきていた。

左腕の盾のようなパーツが半回転。まるで剣のような形となり、ひかり始める。それをオーブに向けて突き刺すことなく

腹部に向けて突き刺したのだった。

そこから光が血のように溢れ出るオーブはぐったりと意識を失い、その姿を消滅させた。

第24話 黒き拳は正義を砕く

「どうして……こんなことに……」

オーブとギャラクトロンが戦いを繰り広げている場所に向かつていく8人。どこに
いるのかはテレビ中継ですぐに突き止めることができ、小原家の車でそこまで向かつて
いたのであった。逃げようとしたが、大事な友人が囚われているのだ。放っておけるは
ずもない。

静かな車内の中で、曜は小さく呟いた。もともと曜狙って放たれたはずの光線を、千
歌が庇って今のような状況になったのだ。曜の中には激しい後悔しか残っていない。

「曜ちゃん……」

梨子はそつと曜の肩に手を置き、彼女に言い聞かせるように話し始めた。

「今は何もできないけど……ギャラクトロンは確かに千歌ちゃんの声で話してた。って
ことは、まだ千歌ちゃんはあの中に居るし、助けられるってことなのかもしれない。悔
しいけど、オーブを信じよ？」

それは梨子自身にも言い聞かせるためのものだったのかも知れない。ほんのわずか

な希望が見えても、オーブに頼るしかないという無力さへの想いもあるが、それしかないのだ。

力なく「うん……」と首を振る曜を見た梨子の顔にも、少しだけ安堵の顔が見られた。「お嬢様、残念ですがここまでしか……」

前方の運転手から、そのような声が聞こえてきた。この先の山々に囲まれた場所2体は戦っているのだが、いくら命令でも車を走らせることは危険なのだ。

「わかったわ。みんな、ここからは走るわよ！」

車を降りた鞠莉たちは、自分たちの脚で向かっていくこととなった。

「What!?!」

しかし鞠莉たちが見たのは、腹を貫かれるオーブの姿であった。その衝撃的な光景に、善子は口を手で抑え、花丸とルビィは見たくないと目を瞑り互いに抱き合っていた。

『私は、私に与えられた唯一のコマンドを実行中だ。キミはこの星とは無関係な存在だ。邪魔をするな』

光が血のように溢れ出るオーブはぐったりと意識を失い、その姿を消滅させた。

「ギャラクトローン!!」

居ても立つても居られない曜は、独特の機械音を上げる竜人へと叫ぶ。すると声に反応し、巨体を8人のいる方向へと向けた。その話す機構が備わっていないような口を開くと、大好きな友人の声が耳に入ってくる。

『人間の文明から争いが無くならないのは、残酷な自然界を模倣しているからだ。この宇宙には有り余るほどのエネルギーが満ちている。別の生物からエネルギーを奪わずとも済むように、全てがデザインされている。だが、この星の生態系というのは、自分の命を長らえさせるために、他の命を奪い、星そのものを疲弊させ、低レベルの文明を良しとしている』

まるで全てを知っているかのように話すその姿は、人間の文明……だけでなく、地球が生み出した生態系というものを全てを批判しているのだった。

言葉を失う彼女たちに、ギャラクトロンは続ける。

『耳が痛いか？ だからそうやって都合の悪いことは無視する。だが、この星は君たちの都合で存在しているのではない』

「…………ツ!? くっ……………そおっ……………!!」

変身を解除された一眞は膝をつきながらも、自身の行動理念をを述べている白い判決者を睨み据えていた。

『よつて、この星の文明と、食物連鎖という間違った進化を選んだ生態系を…………』

『……………すべて、リセットする』

「人間だけじゃなく、自然すらも根絶やしにするというのですか……………!」

「そんなの、あなたの勝手じゃない!!」

地球のためにと、全てを一掃してしまおうとする結論の出し方に、ダイヤと果南は声を上げる。

「そんなのは……そんなのは！ あなたの考えでしかない!!」

2人に続くように声を上げたのは、意外にも花丸だった。

「それはあなたから見たら正しい正義なのかもしれない。でも、そこには……」

「心がない……」と消え入りそうな声で俯く花丸の手を、ルビィや善子がやさしく握る。

2人の温かさに気付くと、花丸は再度声を上げてギャラクトロンに訴えかける。

「自然は……奪い合っているんじゃない……支え合って生きてるっ!!」

「シマウマが増えてしまえば、草原が消えてしまいます」

花丸に続くように口を開いたのはダイヤであった。彼女も花丸の言いたいことを理解し、共にギャラクトロンに訴えようとしているのだ。

「だからライオンがシマウマの数を減らすのですわ!」

「そしてライオンが死ねば、その体は大地に帰り、そこからまた草が生える」

そしてシマウマが育っていく……。生態系というのは、決して争っているわけではない。バラバラではなく、互いに協力して生きていく道を選んだ。地球という星そのものが、1つの命として生きているのだと。

「そうよ……あなたの勝手な解釈でしかない。……それに正義とかなんとか言うんなら、この星の女の子をを拉致したりしないですよ!!」

乗じた勢いに任せ、果南はギャラクトロンへと千歌を返せと訴えかける。

しかしギヤラクトロンは黙りこみ、胸のコアを点滅させるだけで微動だにしなくなったのだ。

「千歌ちゃんを返してええええええええええ!!!」

そんな曜の叫びすらも、ギヤラクトロンは無言で受け流すのだった。

くく

「……」

一眞は腰のホルダーから、黒い戦士の描かれたカードを取り出した。ギヤラクトロンに敗北した今、最後の望みとして「あの形態^{サンダーブレスター}へとなるべきか思い悩んでいるのであった。前回のマガオロチとの対決では、ほぼ……いや、まったくもってその力を制御できてはいなかった。その膨れ上がった力に吞まれてしまうのだ。

「俺は……この力を、制御するなんて……」

——できない。そう言いかけたところで、一真に言わせれば“最悪のタイミング”で、とある言葉が思い起こされた。

——ネバーセイネバー……知ってますか？　できないなんて言わない……。

「……なんでこんな時に」

それでも変身に踏み切れない一真は、その憤りを地面へと拳をぶつけることで発散させようとした。

くくくくくくくくく

突然、その赤く光らせるコアから、鞠莉と善子のケンカを仲裁した時と同じメロデーが流れ始めたのだ。その奏でる音はやはり優しく、温かい音色であった。両腕を広げたギヤラクトロン。すると後頭部から延びたギヤラクトロンシャフトの先端は、宙へと引つ張られるようにして空へと向いた。

音楽とは似つかわしくない禍々しい赤い色を放射していきながら、その純白の体も浮

いていく。

「なにあれ……」

「なにか……やばそうな予感がする……」

「どうしよう……お姉ちゃん」

「千歌ちゃーん……!!!」

その音色は優しいものではなく、終わりゆく世界への子守歌のようにも聞こえ始めた。

「君たち!!」

後方から迷彩服を着た自衛隊の人々が走ってくるのが見えた。その後ろには軍用車もあることから、ここまで車を走らせてきたのだろう。男1人が囁たちに声をかけようとして車を降りて走ってきたのだ。

「ここは危険だから、早く避難するんだ!」

避難誘導に従いつつも、見える場所に移動していく8人。しかしその間にもギャラクトロンは強大なエネルギーをチャージしているように見えた。

「何をやる気だ……」

善子の感じた嫌な予感は、一真も同様に感じている。その恐ろしさと美しいさが混じった姿に、一真は言葉を失ってしまう。

炎のようなエネルギーが胸の背中から放出される。ギヤラクトロンを中心とし、まるで太陽のフレアのような明るさでコアへと集まる。その強力な光で、白い体は黒一色に染められる。白の体に塗りつぶされた本来の目的。ある一点……影からしか物事を見れなかったとしても、正義の名のもとに全てを焼き尽くすという結論しか出せない、ギヤラクトロンの本当の姿。

胸元から一直線に放たれた光線は、着弾地点に超巨大な魔法陣を展開。その後一瞬で山をも吹き飛ばし、周囲を焦土へと変えてしまった。ギヤラクトロン最大の技である恐ろしい正義の煌めき、“ギヤラクトロンスパーク”。爆発の勢いはすさまじく、爆風がこちらまで届き体を吹き飛ばした。

「ううああああ!?!」

瓦礫の中を転がった一真。あの攻撃を何発も撃たれたら、地球自体が取り返しのがつかなことになる。正義の名のもとに繰り返される姿を嫌でも見せつけられた一真は、いよいよ覚悟を決めるのだった。

「(一)の……やるしかねえええ!!!」

パラシュートが見えることから、パイロットは何とか脱出に成功したようであった。

その凶暴な戦い方を目にした8人には不安が渦巻いていた。もしかしたら……と、どうしても今のオーブを見ていると考えてしまう。

千歌を巻き添えにするのではないかと

パンチの衝撃で、空から地上へと落とされたギャラクトロンは地面に倒れこんでしまう。そこに飛び掛かった巨人は馬乗りになって頭を執拗に殴りつけ、最後には球を蹴飛ばすように大きく足を振った。その威力はすさまじく、ギャラクトロンの体が滑つていくほど。

「ウアア……」

腰を落として構えをとったオーブは白い巨体が起き上がると同時に走り出した。両腕を使って攻撃しようとした隙をまわし蹴りで潰し、右腕を避けてから側面へ手刀。

右腕に力を込めたパンチを繰り返した後、よろけた体に追い打ちのラッシュを浴びせた。

先ほどまでの苦戦が嘘のように、サンダーブレスターが押していく。ギャラクトロン

の攻撃の悉くがオーブに通じなくなっているのだった。

そして膝蹴りやタックルで、その巨体を後退させていく。だが、オーブの様子がおかしいのは彼女たちの目から見て明らかであった。

「ハ……ハハハハハハハハハハッ!!!」

笑っている。

今のオーブは自分が優位に立っている優越感からか、この死と隣り合わせの闘いに高揚感を得ているからなのか……あるいは、戦いそのものを楽しんでいるからなのか……その声帯を震わせ笑っていたのだった。

機械が駆動する音を高鳴らせ、ギャラクトロンの右腕が変形する。鋭い爪の上部に携えた砲塔からはビームを発射し、オーブへと襲い掛る。

さらに関節部から分離。その勢いで打撃を加えて怯ませると、遠隔操作で頭上からビームを照射していく。

威力、そして照射時間の長さに膝をついてしまう。だが、オーブは怒りの感情をその体に積もらせていった。

「ウウウウ………アアアアアア………!!」

両腕に赤黒いエネルギーを纏わせ、頭上で変わらず照射している右腕を掴む。ギシ

……ギシ……と内部の機械が壊れていく音。強力な腕力によって、ビームが出せなくなるほどフレームが歪む。

そして怒りを込めた一撃として、右腕を振りかぶる。豪速の鉄くずはギャラクトロンの胸元に命中し、盛大に煙を上げた。

隙に乗じて飛びついたオーブは、ギャラクトロシヤフトを力任せに引きちぎる。

それに連動して、千歌を操っていたと思われるコネクタも外された。

執拗に残骸を蹴り、怒りを発散させていくオーブ。目の前にあるものを手当たり次第に攻撃していく様は、怪獣と何ら変わらない。

「ハハハハハハハハ……」

「はやく……逃げなきや……」

千歌は混乱しながらも、身体に巻き付かれたケーブルから抜け出そうと必死に体をよじらせる。

数秒だけ、ほんの数秒だけ前を見た千歌の目に映っていたのは、腕を引き絞り強力な一撃を与えようとするオーブの姿であった。

「フウツ……ダアアアアアア!!!」

直後、強力な衝撃が伝わり、視界がグルツと回った。ギャラクトロンの内部で、千歌は悲鳴を上げる。

「……………?!? 千歌ちゃああああああああん!!!」

曜は見えていられず、張り裂けんばかりの声を上げてしまう。

目の前のオーブの残忍な姿に、他の皆も目を逸らしてしまう。

だが、オーブの攻撃は終わらない。倒れた頭を持ち上げると、再度地面に叩きつける。何度も、何度も叩きつけたことで、頭に生えている角が折れてしまった。

前身にエネルギーを走らせたオーブは、胸部を執拗に殴打し、踏みつけた。さらに口の部分へ手を入れると同時に、下へ引き裂いた。

それは、ただ痛めつけるだけ、ただ倒すだけ。そんな姿でしかなかった。今のオーブはただの怪物と同じ、恐怖の化身でしかない。敵が同じだけの、ただの獣。

「ねえ……………誰か、誰かオーブを止めてよ……………」

涙を流した曜は、小さく己の願いを漏らす。ここにいる誰もがそう思いながら、同時に誰もがどうすることのできない願い。

「無理だよ……………ルビイたちじゃ、何もできない……………」

「でもあれじゃ千歌が……………」

秘性は消え、酷くみすぼらしいものへと落ちぶれてしまった。

「アア……ウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

再び雄たけびを上げるオーブを前に、ギョラクトロンのコアが光りだした。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

あの音楽であつた。しかし、オーブの心はそのようなもので鎮静化できるほどのものではなく、無慈悲にも両腕に光と闇のエネルギーが集結していく。

十字から放たれた光線は、音楽を鳴らし続ける竜人の体を強大な爆発で包み込んだ。周囲を巻き込むほどの大爆発。燃える木々や焦土と化した大地を見たオーブは、ようやく我に返ると、静かにその姿を消していった。

木端微塵となつた残骸の片隅に、千歌は倒れていたのだった。

「……俺は……なんて……くそおおおおお!!!」

自分の未熟さ、やるせなさに酷く腹が立った一眞は、激しく地面に拳を叩きつけた。当たり前だ。守ろうとして戦いに出たはずが、いつしか命を奪うようになっていたのだから。闇を制御するどころか、いつのまにか呑まれていた。以前から何も変わっていない。

「千歌……」

自分が殺してしまったかもいけない。そんな罪悪感が彼の心を支配する。行きたくないと思いつつも、彼は足を動かしていた。

くく

爆発に巻き込まれた千歌だったが、発見した曜たちのおかげでなんとか病院へと搬送された。奇跡的に重傷は負っていなかったものの、未だ彼女は目覚めていない。

「病院側として手は尽くしました。あとは、本人にまかせるとしか」

「そうですか。ありがとうございます」

深々と医師に頭を下げるダイヤ。廊下では、誰もが意気消沈していた。

「大丈夫かな……千歌ちゃん」

「なによ、千歌ならあのくらい……ヘッチャラでしょ」

普段元気づけようとする善子も、今回ばかりは不安が残る。

誰も言おうとはしないが、この先にはラブライブも控えている。だが千歌の状態によれば、出場を見送ることだって考えられる。

だがそれでも口に出さなかったのは、それよりも千歌の安否を心配していたからだ。

「……っ!？」

ダイヤは近付いてきた足音の方向へと視線を向けた。そこにいたのは――

「ねえ千歌、あんたはここで諦めるような人じゃないでしょ?」

「そうだよ。ここでやめるような千歌ちゃんじゃない。でしょ?」

病室では、果南や曜が千歌へと語りかけていた。目覚めていなくとも、その言葉が届くと信じて。

すると病室をノックする音、直後に扉が開かれた。

「カズ……」

やつれ気味の一眞を見た果南はゆっくりと千歌の隣を譲る。

「うん、カズの方が千歌も声聞きたいだろうし……」

「悪い……」

ただでさえ静かな病室なのに、それでも消えてしまいそうな一眞の声。事情が事情とはいえ、普段からは想像がつかないような一眞の反応に、果南は息を呑んだ。

一眞は静かに、病室の床に膝を付ける。自分には座る資格もないのだと、そう思っているのだろうか。

「……俺は……オーブを許せない」

自己嫌悪ともとれるそれは、一眞以外には理解されず、果南もそうだと首を振る。しかし一眞が入ったと同時に来た他のメンバーたちは、言い淀んでしまう。確かに今回のオーブの動向は怪獣と大差なかった。しかしこれまでのオーブも嘘ではなかったからだ。

「私も……オーブが味方だと思ったのに……」

そのタイミングで、ガタッと椅子の倒れる音が響く。

「どうしてっ!!」

病室の中に響いた声に、全員の視線が集中する。その発言者は曜。彼女は大粒の涙を浮かべ、肩を震わせている。向いている方向には立ち上がった一真。傷心の彼には、その言葉の意味が嫌でも理解できてしまう。

「どうしてみんなが……千歌ちゃんが大変な時にいてくれなかったの!」

「曜……俺は……」

喉につつかえたかのように言葉が出てこない。いや、言いたくない。自分がオーブで、あのような惨劇を……そして千歌がこのようになってしまったのだと。

そんな現実から逃げてしまいたくなくなった。

最低だ。でもそうしたいと思うくらい、彼は現実から目を伏せたかったのだ。

パシッッ!

数秒後、肌が叩かれる鋭い音が長く残響する。

何が起こったのかわからなくなるほどの衝撃。一真の頬が微かに赤く腫れている。

心臓を縛られるような緊張に支配された。

振るわれた腕の向こうで、曜は涙を浮かべて激昂していた。

「どっか行ってよ……ここから消えてよ!!」

どう謝罪して良いかもわからない。まず許されるわけがない。視線を落としている一眞は何も言わず、おぼつかない足つきで病室を出ていつてしまった。

「どうしよ……私……」

一瞬の感情で出てしまった手や言葉……。すべての出来事の後悔が、まるで津波のよう押し寄せてくる。

曜の泣き声が聞こえてくるのは、必然とも言えた。

「俺は……もう……」

こちらでも後悔をかかえ、トボトボと行く当てのない道のりを歩いていく。曜の言ったことは正しかった。大変な時に彼女たちのところにいれなかった。加えて力に吞まれ、あの始末……。それなのにノコノコと病室に行くなんて、無神経にもほどがある。

——何が守るだ。

守るどころか傷つけているじゃないか。俺が守るだなんて、思い上がりも甚だしい。……アオボシの言っていたように力を求めていただけ。そしてこの結果。

可能であれば、自分で心臓を抉り出したい。そして——

後悔と自己嫌悪に潰されながら、彼は街の中に消えていくのだった。

第25話 忘れていたもの

「千歌、具合はどう？」

「もう、大袈裟だな果南ちゃんは大丈夫だった！」

みかん色の髪を揺らし、千歌は微笑んだ。あの後千歌はみるみるうちに回復し、次の検査で問題なければ即退院というほどの状態にまでなっていた。たまに外に出歩いては、他のメンバーに止められるという毎日を過ごしていた。

「他の皆は？」

「今日はオフにした。こんなことがあったし、あまり追い込まない方がいいかもってダイヤが。それにみんなも納得したし……」

しかし、彼女にはまだ言えていないことがあった。一眞のことだ。彼も彼でどこへ行ったか分からなくなってしまう連絡もつかない。曜もその件でだいぶ参ってしまった。ている。

今のAqoursは、辛うじて繋がりを保っている状態でしかなかったのだ。

「そっか……。早く私も復帰しなきゃね」

「千歌はしばらく安静だよ」

「なんで〜!!」

「さっき言ったでしょ? けが人なんだから」

「はいはい。わかりましたよ〜だ」

唇を尖らせた千歌は窓の外を見て、果南に尋ねた。

「今日も来てるの?」

「うん……。何度も聞かれて大変だったよ」

今日も来ている……。それはマスコミであった。世間では今、オーブに対しての批判が高まっている。徐々に膨れ上がったその疑心が、前回のギャラクトロンとの戦いで爆発したのだ。

怪物と同じく、オーブは人類の敵だと……。それをどう思っているのか、被害者として千歌にインタビューをしたいのだろう。スクールアイドルとしての面を持つ彼女は、大きな影響力になると。

「どうせ、千歌からオーブを批判するコメントを引き出したいんだよ」

果南の口調が、少し強くなる。それを察した千歌は彼女に声をかける。

「果南ちゃん、オーブのことが憎いの?」

「何言ってるの? 千歌がこんなになっただのはオーブのせいでしょ!? それこそ千歌はオーブが憎くないの?」

声を荒げてしまうのも無理はなかった。オーブが千歌を救出していれば、このようにベッドに横たわっている必要もなかったのだから。しかし、それをわかった上で千歌は彼が悪くないと言う。

「私ね……わかる気がするんだ。オーブの気持ち」

あの時……ギャラクトロンに捕まった時、千歌の意識はなかった。恐らく乗っ取られていたと、他の皆との話で決着がついていた。それはオーブも同じなのでは？ と。

「それにね、攻撃をされた時……意識が流れ込んでくるような気がしたんだ。悔しいとか“悲しい”とか……私が東京で味わったのと同じような気持ち……だから、オーブも私と……みんなと同じような気持ちだったんじゃないかなって」

最終的に、彼は負の感情に吞まれてしまったのではと千歌は感じていたのだった。

「あんまりそうこと外では言わないですよ？」

「なんで？ 私たちはずっとオーブに助けられてきたじゃん！ 果南ちゃんもそうでしょう!？」

「千歌は死にかけてたんだよ!？」

「でもほら、生きてるじゃん!!」

腕を広げ、元気だということをアピールする千歌。その姿に、果南はため息を吐いた。もう何言ってもだめだと諦めたのだ。

「はあ………あ、私そろそろお店あるから」

「わかった。またね」

病室のドアから青いポニーテールの姿が消えていくのを確認した千歌は、膝を抱え込んだ。

「カズくん、どうしちゃったのかな……」

千歌は気付いていた。彼がここに現れないのは、どこかに行ってしまったのだと。みんなは一真のことを話題に出そうとしないし、何しろ彼自身が病室に来ることがなかったのだから。

どこかへ消えてしまった彼の背中を探すように、彼女は曇り空を見つめていた。

く
く

また、ここに病院来てしまった。曜に拒絶されたその日から、一眞は亡霊の如く彷徨つていた。自分の過ちを悔い続けながら、行く当てもない道を。しかし、どうしても彼女の顔が頭をよぎる。みかん色の髪を揺らし、時に華麗に、時に力強く踊る彼女の姿が。

街頭のテレビで彼女のヘインタビュ어가うという報告を聞いたときは、涙があふれた。だが同時に、一眞オーブに対しての世間の声も突き付けられた。あのような惨事を引き起こした自分が悪いのは百も承知だ。しかし、それでも……彼の心は悲鳴を上げていた。

今の一眞の心は、まるでポロポロになり、欠けそうになつた剣のよう。あと少しの衝撃でポキッと折れてバラバラに砕け散るくらいには、彼の心は限界であつた。

だから、病院に来てしまう。千歌の口から放たれる言葉がどれほどの悪罵であろうとも、一眞はそれを受け入れなくてはならないと。ここに来た理由は、ただその言葉を聞くためではない。

病室のドアを開ける。ここまで恐る恐る入つた一眞を見て、多くの人は笑うだろう。しかし、彼にとつてはそれどころではなかつた。今にも吐きそうなのを必死で我慢し、冷や汗が背に走るのを意識しないように、呼吸が浅くなるのを歯を食いしばって耐え

る。

だが、

病室には誰もいない。ベッドにいるはずの千歌の姿も、そして他のAqoursの姿も。

「……は、あああ……」

少し安心したのかもしれない。彼は短く息を吐いた。

「……カズくん」

背後から呼ぶかけられた声を聞いた瞬間、一眞の背筋、肩は何かに貫かれたかのように震えた。

一眞の後ろには、簡素な私服を着た千歌が立っていたのだった。

「あ……」

「もう、こんな時まで何やってたの？ みんな心配してたんだよ？」

言葉がひねり出せない一眞に、千歌はいつもの調子で歩み寄ってくる。

「うん、どうしたの？」

「い、いや……」

「そうだ、ここで話すのもなんだし、外出しようよ！」

言い淀む一真へ、千歌はそのように提案する。

「今だつたら人もいないし、病院の敷地内を歩くだけだから、ね？」

「……わかった」

千歌のペースに乗せられ、渋々承諾するのだった。

肌にチリチリと刺してくるような太陽の光が妙に鬱陶しい。今日が雲一つない晴れとは、今の今まで気が付かなかつた。

「なんか久しぶりじゃない？ こうやって何もせずに歩くの」

「……そうだな」

何をやっているんだ！ 一真は心の中で自分にイラついていた。彼女とこうして肩を並べ歩く資格などないと思っっているながら、今こうして歩いているという事実。

己の心の弱さ故の行動……。そんな自分に嫌気がさしてくる。

「……なあ、千歌はどうも思わないのか？」

「何が？」

「お前がギャラクトロンに捕らわれたつてのに、俺は……」

おもむろに言葉を紡いだ一眞。しかしそこから先の言葉が出てこない。

「でも、カズくんには何かやらなきやいけないことがあつたんでしょ？ それなら仕方ないよ。あとね、そのことで曜ちゃんがつつごく悩んでたから、ちゃんと後で2人で話し合った方がいいよ」

千歌の屈託のない笑顔が、心に刺さる。そう言つて、人の在り方を否定しない千歌。だからこそ皆が彼女に惹かれていった。

けど、一眞にとつては地獄の苦しみだった。今ここで罵倒された方が、何倍も楽だつただらう。しかし、彼女はそうしなかつた。そうしなかつたどころか、友人との心配もしている。

いったいどこまで、お前は俺を苦しめるんだ……

「やあ、久しぶりだね」

瞬間的に現れたかのように、いつの間にか目の前には2人の人影があつた。

1人は、黒いスーツを着た青年。背丈は一眞と同じか、それより少し高いくらい。

もう一人は、綺麗なピンク髪の少女。無表情のようであり、その金色の目には嫌悪の表情が宿っている。

「お前……！」

「あなたは……えっと、アオボシさん！」

千歌へ手を振るアオボシ。何しに来たという一眞の問いに、彼は反論する。

「君の方こそ何しに来ているんだ？ 彼女と一緒に歩くなんて……よくそんなマネができたものだよ」

「黙れ……！」

彼への剣幕を見た千歌は、底知れぬ不安を覚える。一眞がここまでの表情を見せたことは一度もなかったからだ。

自然と彼の服の裾を掴んでしまう。

その光景を見て、アオボシの口角が上がる。

「A q o u r sとの絆は断たれても、彼女とはまだみたいだね。けど、それもお終いだ」
「何を言ってる……！」

「僕は……いや僕たちはオーブとA q o u r sとの間にはなにか硬い絆が生まれると思っただけ、それを壊そうとしてきた。けど、僕たちが手を出さずとも、君自身が断ち切ってくれた。力を求めたお前は見事闇に呑まれ、彼女を殺そうとした。そして絆は断た

れ、君は1人だ。加えて面白いことに地球人からも銃を向けられている……」

「ねえ、さつきから何を言ってるの!？」

千歌は一真へ問おうと肩を揺らす、無言のまま佇むだけだ。

「まあ、僕はそんなことどうでもいいんだ。ただ、君が打ちひしがれる姿を見たいだけ。3年前のようにね」

バット星人が善子を誘拐したことも、結果的には防げたザラブ星人のことも、そしてセゲル星人のことも……すべて彼が仕組んだことなのだろう。表向きは地球を侵略するという名目でありながら、その実はアオボシからの妨害……。

惑星侵略連合すらも使い、一真へ、そしてA q o u r sへと亀裂を入れるための策だったのだと。

「何を言っているんだ……お前は……」

震えている一真の声。膨大な情報量に、理解が追い付かない。理解しなくなかったのだ。

「けど、ここは復讐を果たしたい君に任せることにしよう。スピカ」

前へ一歩踏み出したピンク髪の少女。彼女は懐からダークリングを取り出した。

「今日こそ……やつと復讐を果たせる。私の兄を奪ったお前に……! ウルトラマン

オープン!!」

その言葉に驚愕した者が1人。千歌である。彼女はこの場で暴露された真実を受け止めきれないよう、一真に詰め寄る。

「そんなの嘘だよな? ……嘘でしょ? ねえ、何か言つてよ!!」

しかし一真は無言のまま。

呆れたように息を吐くアオボシは、これを見ろと空を指さす。

空に作られた巨大な穴から現れたのは、赤い凹凸が無数に生えた“尻尾”であった。見覚えのある一真は、それに目を凝らす。

「お前が切り落としたマガオロチの尻尾だ」

サンダーブレスターとなって戦った時、ヤツから切断し放り投げてしまったものだ。

「さあ、始めるんだスピカ」

頷きもしないスピカは、カードを取り出した。そこいはなにやら異形の怪獣の姿が描かれている。

ゼットン

パンドン

2体の怪獣を読み込んだダークリングが展開されるとスピカは赤く輝き、マガオロチの尻尾と同化した。

数秒後、巨大な轟音とまばゆい光が辺りを支配する。

黒い身体の胸部には怪しく光る発光体。長い突起の伸びた肩から脚部、そして側頭部にかけてはゴツゴツとした赤い体表に覆われており、頭部にはサメや深海魚を思わせる顔が付いていた。

合体魔王獣ゼツパンドン。それがスピカの変身した怪物の名前だ。

「千歌は早く逃げろ！」

そう言って一眞は走り出そうとした瞬間、千歌に引き留められてしまう。

「どういうことなの!?! 本当にカズくんが……」

千歌の目が見えない。どのような思いでその言葉を口に行っているのか、一眞にはわからなかった。ただ一言

「……………(めん)」

そう言って手を振りほだき、ゼツパンドンへと向かっていく。

「うおおおおおおおおおつっつっつ
!!!!!!!」

様々な思いが詰まった叫びと共に駆けながらオーブリングと前方へと突き出した。

スペシウムゼペリオンで地面へと降り立ったオーブは、数秒だけ後方を確認する。

そこには驚愕の表情を浮かべていた千歌が、自分を見上げていた。

——はやく逃げろ

それだけ伝えたオーブは、瞬時にゼツパンドンへと向きを変える。

鉛のように重い体を動かし、目の前で復讐に燃える少女へと距離を詰めていった。

側面に手刀を撃ち込み、まわし蹴りが頭を捉えるも、その攻撃がヤツに効いていないことは明らか。

(……………ッ!!)

強力なエネルギーを感じ取りながら、オーブはその姿をバーンマイトへとチェンジ。

その剛力でゼツパンドンの体に腕を回して、人々のいない場所へと移動させた。

(俺が、俺が君の兄に何をしたんだっ!?)

理解できない復讐心をぶつける彼女に、一眞は問いかける。

「なんで……なんであなたは何も覚えていないの！ 3年前……あなたもいたでしょ！！
私の兄が、オーブに殺された時!!!」

(……っ!?)

バーンマイトの攻撃を受け流しながら語ったのは、彼にとつては衝撃的だった。

3年前……彼が覚えているのは病院のベッドで目覚めた時からであり、それより前のことは知らない。そんな出来事も知らない。

彼女が言っているのは、恐らく一眞が覚えている事よりも前に起きたことだ。かといつてオーブがそんなことをすると思えない一眞は、彼女へ反論する。

(そんなはずはない……オーブがマガゼットンを倒したんだ。そんなオーブが、人を殺すなんて……)

「そんなことはどうでもいい……！ あなたは私を逃がし、その後死んでしまったと思っていた。でも、生きててくれた……。なのに……よりにもよって仇と一体化しているなんて！」

鋭い右腕の爪が、オーブの体を抉る。後退するオーブに口から放たれた火球が直撃。その巨体を地面に打ち付けてしまう。

「千歌ちゃんっ!!」

背後から曜の声が聞こえ、千歌は振り向くと、そこには8人全員が来ていた。オーブが現れたこと、そして病院から千歌がいなくなったために探しに来たのだろう。

「何やっているんですの!?! こんな危険を冒して……さっ、はやく避難しますわよ!!」
「ダイヤさん待つてくださいい! ……カズくんなんです」

涙をためた目で、千歌は逃げようとする全員を止めた。胸の前で握られていた手が、震えていたことに梨子は気が付く。

「一真さんが、なんなのですか?」

「……オーブなんです。あそこで怪物と戦っているウルトラマンは、カズくんなんです!!!」

千歌によって知らされた事実全員は言葉が出なかった。A q o u r s のマネージャーとしての彼が、先輩としての彼が、友人としての彼が……目の前で戦っているウルトラマンオーブだということに。

《ウルトラマンオーブ ハリケーンスラッシュ》

素早い身のこなしで空へと避けたオーブ。それを墜とそうと、頭の両端についた器官から紫の光線を発射する。

しかし宙返りでその光線を避けると、もう一度距離を縮め切り裂こうとオーブスラツガーランスを振るった。しかしゼツパンドンはその姿を消すと、また別の場所へ姿を現す。ゼツトンの瞬間移動だ。

以前にも攻略したことのある能力だが、今のオーブにはそれを破るだけの精神的余裕がなかった。そのため、高速移動で場所を捉え、刃を突き立てる。

しかしどれも空を切ることしかできなかった。

(オーブランサーシユート!!)

高威力の光線が放たれ、ゼツパンドンへと接近していくが

「ゼツパンドンシールド」

先ほどとまでは打って変わって冷静な声で発したスピカ。すると前面に展開された六角形のバリアが光線を防ぎきってしまう。

(このおとおおおおおおおおおおおおおおお!!!!)

防御を解除した隙に懐へと突撃し、ようやく刃が胸元へと突き刺さる。するとオーブは即座にレバーへと手を掛ける。

(ビツクバンスラスト!!)

内部から爆発するように光線を放っているが、その全てがゼツパンドンに吸収されてしまう。

さらに高熱で溶かしていくようにしてオーブスラッガーランスまでもが……。

「もういい……消えて」

口から放たれた雷撃がオーブの体力を奪っていく。胸のカラータイマーも点滅し、彼は膝をついてしまう。

最期の一撃にと、両端の器官から紫の光、口からは雷撃の青い光……とオーブを仕留めようとエネルギーをチャージする。

再度スペシウムゼペリオンにフュージョンアップしたオーブもエネルギーを貯める。スペリオン光線で相殺しようというのだ。

両者の大量のエネルギーが中心で衝突。しかしジリジリとオーブが押されていき、最終的に

「ウアアアアアアアアアアツ……!!!」

断末魔の後の大爆発でオーブの姿は完全に消えてしまったのだった。

「うぐつ……ぐぐつ……ああ……がはっ……ゴフッ……」

地面に倒れている一眞は全身に傷を作り、血を吐いている。着ている服もボロボロだ。それほどまでゼッパンドンの威力は凄まじかった。それは彼女の、スピカの復讐を果たすという決意の表れ。

——ぼやけている視界。遠くなる周囲の音、下がっていく体温。一眞はこの時、自分の死を予知した。このまま何もしなければ、自分は確実に死ぬのだと。

遠くから誰かが駆けてくる見える。その影は9つとなっているようだ。

目の前に立ち止まる影たちよりもずっと近い場所に、脚が見えた。

「このまま死ぬのもいいけど、それじゃ面白くない。君自身も可哀想だしね」

死に体となった彼を見下ろすアオボシは、まるで千歌たちに説明するようにして口を開いた。

「僕たちの種族は人間と同じ体、見た目、生体構造をしている。でもね……1つだけ違う

ものがある。それは同じ種族同士が触れ合うことで、生体エネルギーを分け与えることができるってものなんだ……。まあもつとも、同じ種族なんて僕と彼くらいしか生き残っていないだけだね」

そう言つて一眞の手に触れたアオボシ。数秒後、千歌たちは信じられないものを目にした。

徐々に一眞の傷が治癒していつていつたのだ。まるで時間が巻き戻るかのように、元からケガなど負つていなかったように……完璧に。

「おつとまいったな……。ここまで上手くいくとは、さすがウルトラマンと同化したアルデバ人だよ」

「ア、アルデバ……人……？」

恐る恐る同じ言葉を繰り返す千歌に、アオボシは笑う。

「そっか、君たちは知らないのか。そう、僕と彼……。『シリウス』はアルデバ人。すでに消滅したアルデバつて星の生き残りなのさ」

彼に治癒してもらつた感覚……。それはとても懐かしくものであった。

刹那、彼の声が聞こえ始める。

—— 僕と彼はアルデバ人。すでに消滅したアルデバって星の生き残りなのさ

まどろみの中で、開かなかった箱がようやくやく開くような感覚。靄のかかっていた景色が一気に晴れ渡っていく。

ノイズがかかった脳裏の映像も、鮮明に映し出され始めた。

(ああ……そっか……そうだった……)

一眞の意識は遠い……遠い……すでに失われた星での記憶に浸っていたのだった。

E p i s o d e 2 6 こしかたゝ過去ゝ

「大丈夫かつ!!」

煙の臭いが鼻をくすぐることになんとも思わないようになったのは、いつからだっただろうか。

倒れている人を抱え上げた数秒後に聞こえてくる爆発音と、人々の悲鳴。それに覆いかぶさるようにして鼓膜を振動する銃声の音と、勇ましい声。

極めつけは焼けた草花や人の臭い……。そんなのは日常茶飯事だ。俺は頭を振動させるような“怪獣”の音を背後に感じながら、避難所へと続く道の中で懸命に足を動かす。俺が逃げる為ではなく、抱えている人を預けに行くだけだ。

その後にはまたこの地獄に戻ってくる。

少しでも多くの人を助けるために。

「つたく、ミサイルばつか撃ちやがって……。ホントに怪獣かよ」

避難所に預けた後、再度怪獣と戦っている地へと戻ったが状況は劣勢であった。

目の前で猛威を振るう怪獣の全身に見られる突起物と口内からは、ミサイルやロケット弾を発射している。さらに口内のミサイルとは別に、火炎を吐いて辺り一面を炎の海へと変貌させているのだ。

特徴的なのは頭部に王冠のような角を生やしている点だ。

応戦する軍隊の銃弾が、ヤツの体をどうにか撃ちぬこうとしているがそれも叶わない。

悔しいが、救助隊である俺には戦う力はない。体術などはとある奴から習ってはいるけれど、目の前で火を吹き、全身からミサイルを飛ばすようなヤツには効かないだろう。

“誰も傷つかない”のが俺の理想だ。しかしこの現実を見ていくほど、それが遠くなっている気がする。

「……………!!?」

すると、どこからともなく悲鳴が聞こえた……………のような気がした。

悲鳴は単なる音ではなく、心から心への救難信号だと考えている俺はその勘を頼りにして、救助者を探す。

自身の勘と、視力を使って命いっぱい探すと、みかん色の髪の毛の少女が蹲っているのを発見した。

彼女を捉えた俺は、ミサイルが飛び交う中を縫うようにして走り、その少女の元へと向かう。

「おい、大丈夫か？ 立てるか？」

「お、お姉ちゃんが……」

涙を流している少女が指を指している方向には、多くの人々が地面に倒れていた。そのどれかが姉なのだろう。

しかし、もう生きているとは思えなかった。その倒れている人々のすべてが、黒く焼け焦げてしまっていたのだから。

「ごめん、君のお姉さんは……」

言いかけたところで、頭上から瓦礫が落ちてくるのが目に入った。俺は咄嗟に少女を庇うようにして抱きかかえる。

しかし、覚悟していたような衝撃が俺のもとに来ることは無かった。顔を上げると、そこには黒い服の裾をはためかせた俺と同じ、11、2歳くらいの少年が刀を振りかざ

した後だった。横に目を向けると、俺たちを押しつぶそうとした瓦礫が綺麗に斬られていた。その少年の名を呼ぶとともに礼を言った。

「リゲル、助かった」

剣を携えた男……少年は納刀すると、こちらに振り返り俺に説教を始めた。

「気を抜くな。お前ここが何処かわかっているのか?」

「俺たちの星だろ。十分に分かってる。行くぞ!」

「おい、そういう事じゃない!!」

少女を抱えて、俺とリゲルはミサイルの中を走っていく。

助けられなかった姉への想いに涙を流す少女の声が、爆発の音よりも大きく聞こえた。

く
く

それから数分後、ミサイル超獣ベロクロンは倒された。いや、とある融合にベロクロ

ン自身の体が耐えきることができなかったのだろう。動きを止めたベロクロンの口に、交戦していた軍の放たれたロケット弾が決め手となりその体を地面に伏せたのだった。

「……………やはり私の力に耐えきることができなかったか」

この星の軍隊が去ってから数分後であった。

ベロクロンの体から、1人の男が姿を現した。数秒後、ベロクロンの体は細かい粒子状の光となり、その巨体を消滅させた。彼の左手には、赤く光る輪のようなアイテムが握られている。

これが示すのはただ一つ。怪獣はこの男が呼び出した……………ということ。

「アルファルド様!!」

すると背後から男の名を呼ぶ者たちが走ってきた。

「本日もダメでしたか……………」

「そのようだ。このダークリングで召喚した怪獣でも、やはり一体化すると活動時間が大幅に減るようだ」

「アルファルド様の能力がそれ程までに強力……………ということなのでしょう」

部下の問いに鼻を鳴らすだけのアルファルド。この羨望の眼差しを向けられることに酔っているのだ。

ブロンドの髪をオールバックにし、サファイアブルーの瞳は、どこか生物としての生

気を感じさせな程冷ややかなものであった。しかし、彼の口元には無意識のうちに薄ら笑いを浮かべている。

180を易々と超える身長を包むのは皮で作られたシャツやズボン。そしてその上には、豪華な装飾がなされた毛皮のガウンを纏っている。だが一番目を引くのは、額に飾られたいぶし銀の宝冠だろう。これは彼がとある惑星で高貴な身分であったことを示していた。

アルファルド・レグルス

レグリオス星と呼ばれるここから数百光年離れた惑星に住む異星人である。そんな彼がなぜこの惑星——アルデバの大地に立っているのか。それは彼が“命が散る瞬間”というものにしか快楽を感じていない人物……というものが根底にあった。

彼はレグリオスという星の皇子として生を受けた。両親には惜しみなない愛情を受けて育ったし、周りの環境にも不満はなかった。しかし、しかしそれでも彼の心が満たされることは無かった。

アルファルドが自身の喜び……快楽を感じたのは、外のとある光景を見た時だった。簡単なものだった。生き物が生き物を食らう姿、襲い、傷つけ、命を散らす姿。それを見た時、アルファルドの中には大きな感情が生まれたのだった。

生物は死というものがあるのが自然の摂理で近づいたときに、または理不尽のもとに近付いてきたときに、どういった行動をとるのだろう……どういった感情を見せるのだろう……そのすべてが見えなくなった。

手始めに自分の星の昆虫ではじめ、次には小動物……と段階を上げていった。

ここで、レグリオス星人特有の能力について触れなければいけない。彼らの種族は所謂怪獣という存在と一体化することができる。

一体化すれば力は底上げされるため、通常のスペックの倍の力を引き出すことができるが、大体一体化した怪獣の体がもたず、命を落としてしまう事がほとんどなので、基本的にレグリオスの種族はこの力を使うことは無かった。

しかし、アルファルドはこの力を使い続けた。例えばそれが怪獣の命を奪うことになったとしても、その行為すらも命を散らすという瞬間に立ち会えるからだ。

一体化した怪獣……”レグリオス融合獣”と呼ばれる姿になり、その星に住まう害を加えない怪獣すらも手にかけるようになった彼。その後、彼は星全体へ……やがて宇宙の星々へと心を満たす行為は広がっていった。その頃の彼について行くような同胞もできた。そのほとんどが自分の考えとは一致しないような連中だったが、それでも心を満たせればそれでよかった。

そんな時だった。あの禍々しい光と出会ったのは。

宇宙で最も邪悪な心を持つ者のもとを巡り、持ち主の能力を増幅させる……といういわれを持つアイテムを手についたアルファルドは、それで宇宙規模の侵略……虐殺を開始したのだった。現地調達で時間がかかった自身の快樂のための方法も一段と楽になり、彼は一層心を闇に染めていったのだ。

「今回はここで撤退だ。あまり早く進行しすぎても面白くないだろう」

「もうですか……？ 随分と余裕ですね」

「余裕を持たなければ、いかなることも成し得ることはできない」

感情の起伏が感じられない。まるで文字の羅列を口に出しているかのようにして、アルファルドは自身の宇宙船へと戻っていく。彼はまた無意識のうちに口角が上がっていたが、誰一人それに気づくことは無かった。

アルデバの避難所についた俺たちは、束の間の平和に息を吐いた。

「シリウス」

すると俺の隣にリゲルが腰を下ろす。

「いつまでそうやって人を助ける？ この星は時期に終わる。なにをやっても無駄なんだよ」

「だとしても、俺は助けが必要な人たちには手を伸ばし続ける。そう決めてるんだ」

俺は先ほど助けたみかん色の髪の少女が、灰色の癖ツ毛の子、赤紫色の子とともに遊んでいる姿を目尻にリゲルへ伝えた。例え無駄だとしても、最期の時まで想いは変わらず、誰も傷つかない世界”という理想のためにやっていくと。

この惑星アルデバは、何年もの間侵略者からの攻撃を受け続けてきた。俺やリゲルの

両親も、その時の侵略によって命を落としてしまったらしい。俺たち2人はそんな両親の顔も覚えていないくらいだから、相当早かったんだろう。

リゲルは星の軍隊へ、俺は救助隊へ入り何とか生きてきた。けど、脅威はそれだけでは終わらない。突如として現れたレグリオス星人と名乗るやつらによって侵略者は倒され、今は奴らがアルデバの地上を蹂躪している。

「誰も傷つかないなんて不可能だ」

現実を見て受け止めているリゲルは厳しく言い放つ。俺の考えは甘いのだと、そしてその理想には限界があり、想いでどうこうできるものではないのだと。……リゲルの言っていることはきつと正しい。俺はつくづくそう感じる。だけど……

「理想を追いかけたらダメか？」

「ダメじゃない。けど……愚かだ」

愚か……彼から見れば俺はそう見えているのだろう。

「そっか。じゃあ俺はいつまでたってもお利口にはなれそうもないな」

「……………」

彼にそう言い残し、少女の元へ向かう。家族を失うなんてこの星だと珍しくはないが、それでも年齢が一桁の子どもには精神的ショックがデカすぎる。

「大丈夫？」

彼女の顔色は少しながら回復していた。目の前にいる同年代の2人の存在が大きいのだろう。すると、癬ツ毛の子がおもむろに口を開き始めた。それは、彼女の親から伝わった噂話らしい。

「あのね、あのね、パパから聞いた話なんだけど……宇宙には怪獣や宇宙人をやつつけてくれるような光の……うーんと……」ひかりの……きよじん” っていうのがいるらしいんだ！ わたしたちのところにも助けに来てくれるかな？」

「……あ、ああ。きつとな。助けてくれる。俺たちが本当に来てほしいと願った時にな」目をキラキラさせて語るその様には、この地獄のような惨状を覆してくれる希望のよくな存在だと思えた。俺はそのような話を聞いたことない。どうせならもつと早く知りたかったという微妙な感想も出てくるが、彼女の表情に顔をほころばせるだけで口には出さなかった。

「そんな夢みたいな話はやめろ」

横からリゲルの冷えた声が飛んできたため、俺は慌ててやめさせる。

「おい、そんなこと言うなよ。可哀想だろ」

「なにが可哀想だ。こういった希望的観測は、後々に悪い結果を招く。今のうちから諦めさせという何が悪い？」

「バカ、相手は子どもだぞ」

「関係ない。それに僕たちも子どもだ」

「いちいち突つかかるな。細かいことは良いだろホント……」

——だから同年代にも嫌われるんだ。

無意識に口が動き、その音を出してしまう。

「なんだと?」

やってしまった。俺は背に刺さる目線の気配を感じてため息を吐いてしまう。

「ちよつとこい」

「なんだよ。何も言っていないぞ?」

「黙ってついてこい」

俺は彼が何をしようとしているのか薄々察していた。なんせ、彼の両手には二振りの勘が握られていたのだから。

鋭い刃が宙を斬っていき俺へと接近する。だがそれをギリギリで躲すも、胸に衝撃を感じた瞬間に体が宙へと浮いた。

数秒後、背中に広がっていく痛みで肺の中の空気を出し切ってしまう。そこでようやく吹き飛ばされたのだと脳が理解する。

休む間もなく、彼の剣は俺の顔を捉えようと容赦なく振り下ろされる。剣の腹で防ぎ、その後も振るわれ続ける攻撃をどうにかして躲す。

刹那、目に捉えることのできない速度で首へと突き付けられた。

「知ってるか、争いは感情から始まる。憎い、守りたい……そういつたやつだ。でも、戦いの真つただ中じゃ邪魔になるだけ……これは何回も言ってるよな？」

リゲルは再度構える。実戦だったらここで死んでいるぞ。そう言っているのだ。剣の腕では……いや全般的な力で俺はリゲルに対抗できない。しかし無理だと諦める気もない。俺は学びたいんだ。リゲルから、「戦う」ということを。そしてその意味を。

「そう割り切りたいよ……俺もっ!!」

リゲルより先に動いたはずなのに、すでに目の前には頭を蹴ろうとする彼の右足。剣だけでなく、全てを使う。悔しいが、今の俺にはできない芸当だ。

鏢迫り合いを起こし、中心で火花が散る。

「もう何年もやってるのに、お前に追いついた気がしない」

「僕も成長してるからね。お前に追いつかれる時なんて、僕は終わりだ」

「煽ってるのかよ!」

力を入れた俺だったが、逆にリゲルは力に逆らわず後ろに下がった。その為前のめりになった俺の腹に、何発目かの足蹴りが食い込む。その力によって後方の岩場まで蹴飛ばされてしまった。

「はあ……はあ……強えよやっぱ……」

「だろ？」

いつかは追いつき、追い越したい。去っていくリゲルの背中を見送りながら俺はそう思っていた。同時に、癬ツ毛の少女の話も思い出す。

光の巨人。もしそんなやつがいたとしたら、おそらくリゲルのような奴だ。現実を見極め、感情に支配されることのないような戦士。俺とは正反対なんだろうな……と、素直に嫉妬してしまう。

力のない笑いが、俺の口から洩れた。

くく

この星の安息なんてものは長く続かない。外から轟音が響けば、それは怪獣たちが蹂躪しているという合図になる。僕は避難所白分の仕事を守るのために、刀を持って外へと飛び出した。

正直、この星を守るべき価値など僕には見出せてない。いくら抵抗しようが、その内滅びるのがわかっていい。だったら、侵略者の長について行った方がマシだ。それについてどういわれようと、正直どうでもいい。逆に興味があるくらいだ……。侵略とはどういふものか。

しかしその点では、理想を追い求めるシリウスが羨ましい。どんな状況でも希望を捨てない彼の在り方。それが愚かで歪でもね。

だが同時にアイツは現実を知らなすぎる。彼の発言に何度顔しかめたことか。……思いつくと顔に出そうだ。

どうせ今日も「誰かを助けるとか言つて」飛び出すのだろう。

目の前にはV時のような頭に光る赤いバイザー。きつね色のような鋼鉄の体。両腕をドリル、またはガンポッドを装備したロボット兵団が迫っていた。

先頭で兵団を率いているのも同じようなロボット。しかし、頭には王冠のようなフレームが裝飾されている。恐らく統率者だ。

さらに人サイズの兵士も迫ってきた。白と黒の体に赤く光るモノアイが、意思を持たない機械だということを表している。

リゲル以外の軍人は光線銃や実弾銃で交戦しているが、どうにも状況は悪くなる一方だ。一方的に蹂躪され、ガンポッドで撃ちぬかれ黒焦げになっていく。兵士の剣に貫かれ、地面に倒れている人々もいる。

「嫌な臭いだよ、まったく……」

腕で顔を覆い、リゲルは呟く。

「——ッ!!」

背後から襲い掛ってきた兵士“バリスレイダー”の気配を察知していたリゲルは素早く腰に吊り下げていた刀を振りぬく。一体倒したただけでは当然終わらない。アルデバに住む人々をただ抹殺するために集まってきたバリスレイダーを見据えたりゲルは、その腰を深く落とした。

——完全に不覚を取られた。

地面に膝をついたリゲルは、その状況を未だ受け入れることができなかった。バリスレイダーはそこまで戦闘力が高くないと、戦う中で気付き始めていた。しかし、何事にも例外……イレギュラーは存在する。頭部に王冠のような装飾が施されたバリスレイダーの存在に、リゲルは劣勢を強いられているのだった。

自身が負けるという……思ってもみなかった結果に、リゲルのそのプライドは大きく傷ついたので。

「くっ……っ、こんなやつに……」

悔しさから歯を食いしばることしかできない彼へと、無慈悲にも刃が振り下ろされようとしていた。

「やめろー！ー！！！！」

間一髪。シリウスの蹴りがアンドロイドの顔面へと入れられた。

「——ッ?!?!?!」

ごく僅かな間に与えられた攻撃を理解することなく、白と黒の体は地面へと吹き飛ん

だ。

「無事か?!」

血相を変えたシリウスはリゲルの安全を確認すると、未だ起き上がろうとするバリスレイダーを見据えた。

「これ、借りるぞー!」

「お、おい……無茶だ。やめろ!!」

痛みが残響する体で精一杯の声を出し、シリウスを止める。ここにきて友人の死体など見たくなかったからだ。

「無茶だとしても無理じゃないはずだ……!」

迫りくるアンドロイドに向かい、シリウスは友人の剣を持って構えた。慣れない実戦に剣先が震えているが、「もうやめた」なんてことは通用しない。ここからは『やるか』『やられるか』しかない。

「■■■■ー!」

靴底の熱を感じながら、シリウスはアンドロイドへと突進。刀を上段から振りかぶる。

しかしその単調ともいえる攻撃をあつさりと躲かれ、代わりにカウンターを受けてしまった。

「ガハッ……ッ！」

肺にある空気がすべて排出される。衝撃と激痛以外の感覚がすべてシャットアウトされる。しかし歯を食いしばり、兵士を睨んだシリウス。倒れそうになる体を必死にこらえ、渾身の力で剣を水平に動かす。

だがこれすらも剣で受け止められ、耳を傷めるような衝撃音が鳴り響いた。小さく舞った火花が、両者の顔を照らす。

一歩も力を抜けない罅迫り合いの中、シリウスは隙を作ろうと頭をフル回転。

(どうする……)

「くっ……うう……」

「!!」

例えここで斬り押しそうとしても、自分の力ではどうしようもないとシリウスは考えていた。もう一度カウンターを食らい、今度こそ本当に死ぬだろうと。死神……とでもいうべきなのだろうか。彼の背から冷や汗が伝っていく。

刹那、背後でいるリゲルの動きを思い出した彼は、相手の力に逆らわず、わざと地面に倒れこむ。さらに相手の股下を潜り抜け、背中を蹴飛ばして大きく距離を取った。

「?!?!」

理解できなかったのか、逆上したように迫ってくる攻撃をシリウスは紙一重で躲す。

「……なんだ……その動き……」

急に体の動きが良くなったシリウスに、リゲルは驚愕の表情を浮かべた。先ほどまでは初心者のように単調だった。なのに、鏑迫り合いの時から格段に素早さも威力も増し始めている。自分よりまだまだ下だと感じていたシリウスに、追いつかれ、追い越されそうな感覚……。

急激なまでの成長速度。

「そうか……お前は……」

リゲルは確信した。彼の秘められた力を……。シリウスは追い詰められれば追いつめられるほど強くなっていく。生き死にを決めるような、命のやり取りをしているようなこの状況であれば……尚更。

「……ッー」

兵士の剣に毛先が斬り落とされる。だがそれを恐れることなく突っ込んでいく。目の前の敵よりもはるか先を睨んでいるような瞳にバリスレイダーの姿が反射する。

がら空きとなった腹に蹴りを一発。迫る剣先を受け流してサマーソルトキックが機械の顎を捉える。開いた距離を即座に縮めるとともに、突き技を放とうと右腕を引き絞る。

「■■■■■■———!!!」

同じようにカウンター狙いで腕を引き絞ったアンドロイド。

「……………ッ!!!」

両者の剣は、ほぼ同時と言えるタイミングで突き出された。

しかし、頭を刺し穿ったのはリゲルの刀……。対するアンドロイドの剣は空気を貫き、静止している。

「……………」

緊張の糸が切れたのか、剣を引き抜くと同時にシリウスは座り込む。

するとボタンツとその重たそうな体が地面に倒れた。そこでようやく、バリスレイダーゼノが機能を停止したという事を理解できた。

「はあ……………はあ……………はあ……………大丈夫か、リゲル？」

息を切らしながらリゲルへ手を差し伸べる。しかし、彼は手を取ることなく立ち上がった。

リゲルが遠方を見ると、どうやら機械兵の進行も止んでいるようだった。彼は何も言わず、避難所の方へと足早に行ってしまう。

その真意にシリウスは気付くことは無かった。

バリスレイダーに負けたこと。そして負けた相手をあのシリウスが倒したこと。それはリゲルにとって、耐えがたい屈辱だったのだ。

これが、彼を闇へと誘う一因となったことを、この時は誰も知らなかった。

Episode 27 たぶるく狂るく

あれから数週間の時が立った。

その長いようできて短い期間の中で、シリウスとリゲルの溝は知らず知らずのうちに広がっていった。

闘いの中で初めて受けた挫折。そしてシリウスに追い越されたという屈辱……。その小さな闇は、時間が経つにつれてどんどん広がっていった。

「どうしてお前なんだ……?」

「ん、何がだ?」

リゲルの恨めしい声にも気付かず、シリウスはいつものように友と接する態度で聞いている。それが無意識に、リゲルの心の火に油を注いでいるとは知らずに。

「お前の力だ。まだ気づいてないようだから言っておくけど、お前は追い詰められればられる程強くなる……僕よりもね」

「それはないな」

「なに?」

シリウスは自身の力を聞かされても、喜ぶことも、鼻にかけることもせず、リゲルよ

り強くなるという可能性を否定した。

「だってさ、俺は感情を切り捨てられない。どこまで言っても、心を捨てることができないんだ。だから……」

感情に任せて動けば、戦場では隙が生まれる。以前からずつと言ってきた言葉をシリウスは心に抱え続けてきた。自分では割り切ることはできないと知りながら。

いつかは、心の弱さを突かれて死ぬだろうと、彼は言ったのだ。だからこそ心を捨てられるリゲルより強くなることは無いと……。

ほんとに、腹が立った。

力を持っているものが己を卑下する姿なんて、力がない者からしたら馬鹿にされていくようなものでしかない。

今日も今日とて、2人は訓練を始めていた。互いに打ち合わせる鉄の音。空気を切る音。互いの息遣いが響く。

しかし、シリウスはアオボシの動きがやけに鈍いことに、そして攻めてこないことに気が付いていた。剣を軽やかに避け、鏝迫り合いから首元まで刃を近づける。

「おい、らしくないじゃないか。お前が攻めてこないなんて」
「たまにはこういう事もあるんだよ。黙ってる」

シリウスがしやがみ込むと、頭があつた場所を足蹴りが捉えようと繰り出された。
「お前こそ、もつとできるだろ？ 力出せよ！」

「……の野郎ツ!!」

リゲルの力が増し、一気に押し切られてしまう。だが、それをも見越していたシリウスは剣を担ぐように体制を変えて、動きを阻害しないように受け流した。そのまま右の肘を後方へと撃ちだす。加えてまわし蹴り。

だが、反転した動きでリゲルも相殺していく。

一進一退の攻防、2人の状態はまさにそれであつた。

そして勝負はあっけなく終わった。何回目かの鏖迫り合いの後、リゲルの刃がシリウスの喉元を捉えたのだ。

「……やっぱりお前の方が強いよ」

肩をポンツと叩いたシリウスが立ち去っていく。

訓練の熱がまだ残るこの空間に一人取り残されたリゲルは、地面を蹴り上げた。

(あいつ……手エ抜きやがった……)

リゲルは気付いていた。彼は最後の最後で手を抜いていたということ。その気になれば自分を打ち倒せていた筈だ。しかし、彼はそれをしなかった。

シリウスなりの気遣い？

だとしたら余計なお世話だった。そこまでして勝ちたくはないと、そんな怒りが心を支配する。

「あいつ……実戦の中でどんどん成長している……」

この数週間でシリウスは救助の傍ら、送り込まれてくるアンドロイドやロボットとも戦っていたのだ。その成長速度は凄まじく、以前苦戦したアンドロイドを即座に倒してしまうほどに。

その事実気付いてしまったこの時が、シリウス 彼への大きな劣等感や嫉妬を抱いたときなのかもしれない。

途端にこの星のことなどどうでも良くなった。すると、これまで何のために、どうしてここまで戦ってきたのだという疑問が溢れてくる。守れなかった人々の光景も、焼かれた草花や地上の光景も。すべてが何だったのかと……。

脳裏に流れ込んでくる様々な自己矛盾や嫉妬、葛藤の果てにリゲルは……………

発狂した。

そして彼の心は闇へと堕ちたのだ。心に空いた穴が、どんどん大きく広がっていく感覚。
覚。

リゲルの口元に、歪んだ笑みが浮んだ。

くく

「頼む……目を覚ましておくれえ……」

「……………」

若い女性の手を握り、俺は自身の生体エネルギーをわけあたえた。アルデバ人が唯一持つ種族間の能力。しかし、女性は目を開けることなく、力尽きてしまった。その証拠に、握った手から力が抜けていくのを感じた。

「そんな……目を目を覚ましてくれえええええええ!!」

隣で見守っていた老人は、遂に泣き崩れてしまった。話を聞くとところによると、女性は老人の孫らしい。娘をを早々に失い、生き残った孫だけは……と頑張っていたのだが、レグリオスの襲撃に遭ってしまったとのことだ。

「…………」

救えなかった……。その歯がゆい思いで、握った拳に力が入る。いくら生体エネルギーをわけ与えることができ、怪我が治せるとしても、そこには限界がある。

そんなことは知っている、わかっている……。だけど……。そんな現実はあまりにも残酷過ぎた。

そんな無力感に襲われている中だった。

遠くの方から紛れもない恐怖の悲鳴が聞こえたのは。

俺は全速力で声の元へと向かう。声の反響からして避難所内であることは確かだ。しかし、その中で一体何があったというのだ。攻め込まれたことなんて、今の今まで一度もなかった。

とは言っても悲鳴の声は尋常じゃない恐怖に襲われているようだったしなにより、俺の心に響いたということが、緊急事態だということを俺自身に訴えかけているようだった。

「な、なんだ……これ……」

そこには声を上げたたであろう女性が、血を流して倒れている。1人だけではない。避難所に身を寄せていた多くの人たちが、何者かによって斬り伏せられているのだ。

「おい、しつかりしろ！ ……ダメか」

肩を叩いたり、呼吸を確認してみるが、誰も反応を示すこともなく、息を吹き返すこともなかった。

一体誰が……

すると、前方から刀を引きずって歩いてくる少年の影が目に入った。俺はその受け入れがたい事実にも、声を震わせる。

「嘘……だろう？ お前がやったのか、リゲル……？」

返り血を浴び、真っ赤に染まったリゲルが立っていた。その立ち姿に以前までの面影はなく、虚無を見つめるような彼の目には、底知れない闇が見えた気がした。

「なんで……なんでこんなことを……!?!」

「なんで……？」 この星には守るに値する価値も、やる意義も無くなったからさ」
変わり果てた彼の姿に、俺は言葉を失う。

「だから、僕はアルファルドに付いた。破壊するってのがどんなものか知りたくてね」
「……で、どうだったんだよ」

アルファルド、おそらくレグリオス星人だろう。彼が侵略側についてしまっていた、その事実があまりにもショックだったためにそれを紛らわしたいのか、彼の心を理解しようとしたのか、気が付けばリゲルに心情を訪ねていた。

「……最高だったよ。何にも縛られず思うがままに力を振るう……それがこれほどまで気持ちいいとはね。クククツ……」

「何が最高だよ、気持ちいいだよ!! いたずらに誰かの命を奪うなんて……」

でも同時に、俺には彼がどうしてここまで追い込まれていたのかがわかったような気がした。リゲルは、ずっと現実を見続け、自分を縛り付けていたのだ。それが壊れ、狂気に呑まれた。

「さて、僕にはまだやることがあるからね。君と悠長に話す時間は無いんだ」
「俺がみすみす行かせると思うか!」

リゲルを足止めしようと、俺は地面を蹴った。

しかし、目前で頭に強い衝撃が加えられる。何が起きたか分からず、俺はそのまま地面へと倒れてしまった。

「僕が何も対策をしないうでいると思った？ まったく、素直過ぎるんだよお前は……」

「リゲル、本当にこの先にあるのだな？」

「言ったでしょ。これは確かな情報だって」

第三者がリゲルとの会話を始めた。にしても随分と警戒している。寝返ったとしても未だ信用はされていないのだろう。

酷い頭痛と薄れていく意識の中、俺が最後に聞いた言葉で、俺の背筋は凍り付いた。

「——惑星破壊爆弾は、この先に保管されている」

くく

目が覚めると、急に肌寒い光景に襲われる。冷たい床に寝かされていたが、避難所ではなさそうだ。

目の前には、大きなモニターやらコンピューターなどのシステム類が並んでいた。恐

らく、ここはレグリオス星人の宇宙船の中だ。

「目が覚めたか……アルデバの住民」

俺の傍らにはリゲルと、豪勢な格好の男が立っていた。

その男の目には生きているとは感じられないような冷めた目をしている。

「彼はアルファルド・レグルス様だ。僕たちの星を侵略してきた……レグリオス星人の

長さ」

「お前が……」

何故……そう聞きたかった。どうしてこのアルデバを侵略……いや、蹂躪したのかを。しかし、何を聞こうと、彼からは納得するような答えは返ってこないだろう。彼には俺が感じるよな倫理も常識も通用しない。そう感じ取ったからだ。

「じゃあ、シリウスにも見てもらおうか。惑星の最期を」

「……は？」

唐突に言われたその言葉に、俺は困惑した。

「アルファルド様がくる前に、アルデバにきた侵略者の置き土産。知ってるよね？」

「惑星破壊爆弾……」

「その通り」

どうしても拒む舌を、俺はどうにかして動かした。

惑星破壊爆弾。その名の通り、惑星丸々一つを消し飛ばすほどの威力を持った爆弾だ。

とある侵略者が使おうと脅しをかけてきた品物。しかし結局使われる前にレグリオス星人の介入により未使用のまま、アルデバの人々が回収。嚴重に保管されていたのだ。リゲルが避難所を襲ったのは、この爆弾を入手するためもあるのだろう。

「やめろ……やめてくれ……」

モニターに映されるアルデバという星の全身。

俺の声は届くことなく、彼らは何やら爆弾の操作を始めている。それはおもちゃの弄るように軽々しく、そして愉快そうに。

「こんなド派手な散り方はなかなか見られませんよ」

「その点においては君に感謝しよう。……さあ見せてくれ！ この大きな命が散らされる瞬間を!!」

そうか、レグルスはこの一瞬でしか喜びを感じ得ないのか。俺は悟ると同時に、とてつもない恐怖を覚えた。彼……アルファルド・レグルスは話が通じる相手ではないと。

「……めろ」

『起爆まで5……4……3……2……1……』

アナウンス音が鳴り響くのも忘れ、俺は声を上げた。
「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!」

星の内部から光が漏れたかと思うと、即座に大爆発が宇宙に広がっていく。眩い光と衝撃波が船を襲う。光が収束していくと、そこには今までの星はなく、ただの漆黒が広がっていた。

「あ、ああ……こ、こんな……なんで……こんなことに……」

膝をつき、絶望する姿があまりにも面白かったのだろう。リゲルは口元を歪ませ、
「いいじゃないか。いつ終わるかわからない状態より、終わらせてやる方がマシだと思
うけど」

「………?!?」

横で話しかけるリゲルに、俺は拳を振るつた。

「ぶぎけるなっ！ お前がこんなことしなければ———」「しなければなんだ!? 勝つ
ていたとでも？ 理想を見るのもいい加減にしろ。お前のような理想ばかり見る奴な

んて気味が悪い」

「てめえーっ!!」

激情に駆られた俺はリゲルの脚をかけ転ばせると、その上に馬乗りになる。反撃してこないのが不思議だったが、そんなのはどうでもよかった。

彼の言葉が、とても痛かった。

あり得もしないような幻想を抱いて、理想を追いかけるその姿。それは、ただの道化と変わりないのかもしれない……そう思った……思ってしまったからだ。

「お前は破綻者だよ。助けられなかった奴らに後ろめたさを感じて、誰かを助けなければなんて考えてる歪な愚か者だ！」

「うるさいっ!!」

殴られ続けながらも、リゲルの言葉は止まらない。

「お前のような半端な正義が一番質が悪い。力も碌にない癖に、何でもかんでも救っちゃまうその在り方が。自覚がないってのが……一番最悪なんだよ。わかるか、シリウス!!」

助けられなかった人の顔、少女たちの顔……その全てが星の爆発と共に散った。もしかしたら、こんなことになるなら……助けなかった方が……

「黙れええええええええ!!」

俺は何発も、何発も、何発も何発も何発も……アイツの顔面を殴りつけた。彼の言葉を否定したくても、それができなかつたから。

「ハッ……アハッ、アハハハハハハッ!!」

殴られている中でも、リゲルは笑い続ける。口の中が切れて、血で赤く染まりながらも笑う彼にはもう、昔の“リゲル”という俺の友人が消え去ってしまった事を嫌でも理解させられる。

「ほら……やれよ……お前も僕と同じように闇に堕ちよう……」

そこで、俺は振り続けた拳を下ろした。途端に拳を振るう自分が怖くなったのだ。

「……………俺には……………できない……………」

力の抜けた俺の体が横へと倒れこむ。

残念そうな顔で、あるいは失望した顔でアルファルドと立ち上がったリゲルは俺を見下ろしていた。

「ごめん……………ごめんな……………」

星と共に散った人々に謝罪の言葉を声に流しながら、暗い牢獄へと引きずられていった。

く
く

俺はその後、看守の隙を突いて牢獄から逃げ出した。こんなところで死を迎えるよりもよっぽどいいと思ったからだ。

ここは囚人など捕ったこともなかったのだろう。あまりにも警備が緩すぎた。

(……コイツで逃げ出すしかない)

脱出用のポッドに乗り込み、巨大な宇宙船からなんとか離脱。しかし、俺の見込みは甘かった。船の機銃に撃たれ、コントロールを失ったポッドはとある惑星の重力に引かれて大気圏に突入する。

混濁する意識の中で見た星の表面は、アルデバとは比較にならないくらい青かった。

煙を上げるポッドから、ヨロヨロとした動きで出てきたシリウス。疲労や傷の痛みで、まともに歩くことすらできなかつた。

「……………」

数歩歩いただけで、身体は地面に倒れてしまった。肉体も限界だったのだ。

今の彼には不時着した惑星——地球の、それも日本の内浦という場所の自然も、潮の匂いもわからなかつた。ただただ疲れて、悲しくて……そんな感情しなかつた。

「あ、あの……………大丈夫ですか!？」

すると、倒れるシリウスを見ていたのだろうか、誰かが駆け寄ってくる。それは、以前彼がしていたことと同じように。

ピンクの髪を揺らした少女は、彼の意識がないことがわかると、誰かを呼ぶように走り出していった。

Episode 28 あかつき～暁～

シリウスが地球へと墜落する数年前、別の宇宙から来たオーブ。

彼が受けた指令……それは魔王獣の討伐。しかし、オーブが降り立った地球では闇、光、風、土、水、火の魔王獣が同時に……一斉に目覚めようとしていたのだった。オーブ一人に対し、同時に相手する魔王獣は6体……。

倒すにしても地球にも、地球の生命体にも多大なる被害を与えてしまう。そんな最悪な事態を恐れた彼は、事前に渡された“魔王獣をを倒すための力”であるウルトラフュージョンカードの力を解放。フュージョンアップという力を犠牲にすることにより、魔王獣を封印することに成功したのだった。

そして最後に、全ての力を併せ持つ大魔王獣の力に蓋をするように、勇者のフュージョンカードを封印に使用。

一時的に封印し、目覚めるタイミングを少しでもずらすことによって、被害を最小限にとどめようとする彼なりの守り方だったのだ。

しかし、大災害を引き起こすとされる魔王獣を地球に封じるといふ行為は、危険の種

を蒔くということ。守るべきはずの星に、脅威となる可能性を長く放置することになる。

その選択が正しかったのか、オーブは地球で魔王獣の復活を監視する傍ら、自問自答を繰り返すのだった。

くく

「……………んん……………」

その痛みが残る体で起き上がった。辺りを見回してみるのが自分には馴染みのないものばかりで、まるで異世界に来たような錯覚を覚えた。

彼は和室に寝かせていたのだ。布団をはぎ取ると、自分の体には包帯が巻かれており、誰かが傷の手当てをしてくれたのだとわかった。

自身の手を見つめると、自分が助かったのだという安堵と、“助かってしまった”と

いう後悔、もうあの星はないのだという悲しみが同時に襲い掛る。その見つめていた手で、シリウスは顔を覆った。止めようにも止められない涙が、目から溢れ出てくる。

様々な後悔の中で、彼は「今できること」として、自分一人しかいないその空間に謝罪することしかできなかった。

「ごめん……俺だけ……生き残るなんて……」

「……あ、あの……」

不意に声をかけられたシリウスは涙をぬぐい、声の方向へと頭を向ける。そこには襖から顔を覗かせる少女の姿。

「あ……」

目が合った瞬間、少女は無言のままいきなり廊下の方へと駆け出していった。それによつて訪れた再びの静寂。何が何だかわからないシリウスだったが、とりあえず逃げだそうと立ち上がる。

「ううっ……!?!」

四肢に力を入れると激痛が走る。墜落の時のダメージが体に残っているのだ。

「おい、あまり身体動かすなよ。傷口開いちまうだろ?」

襖をあけて、青年の声がシリウスを止める。

「……あなたが俺の傷の手当てを?」

「まあな。見たところ、2日でだいぶ良くなったみたいけど」

2日、それが自分が寝ていた時間だと理解する。この激痛でだいぶ良くなったとは、どこまで酷いケガだったのだろうか。加えて、アルデバ人特有の力も使えないというのはいささか不便だなと感じる。以前は怪我をすれば、すぐに治すことができていたからだ。

だが今となってはそれすらも不可能となってしまうた。不意に思い出してしまった事實は、彼の心をチクリと刺激する。

「どうした？」

「いや、なんでもない。それより、ここは何処なんだ？　なんで俺は……」

いつきに畳みかけようとしたところで、前方の青年は——待った、いつきにしゃべるなど彼を制し、一つ一つ順を追って説明してくれた。

「まず、2日前にお前が倒れてんのを珠冬が見つけて、なんとか内浦のオレの家に運んできたってところだな」

「内浦……？」

シリウスの問いに、——嘘だろ、と言いたいような表情と苦笑いを浮かべながら説明を続けてくれる。あとおそらく、先ほどのピンク髪の少女が珠冬というのだろう。

「沼津……もわからないよなこりゃ。その前に、お前はどこまで覚えているんだ」

その問いに、彼は黙る。自分は宇宙人だと言えるはずもないシリウスは口を噤んでしまふ。それを見かねた青年は——名前は何？ と聞いてきた。

「……シリウス。それが俺の名前だ」

なにかを納得するような表情をとった後、青年は手を出して自身の名前を言った。

「オレは暁和哉だ。よろしくな」

「……？」

手を差し伸べたことに疑問を浮かべる。——立て、ということなのだろうかと頭を悩ませる。

「こうやって手と手を握るんだ。誰かと初めて会った時にするんだ」

「そうなのか……」

そういうものなのかと、呑み込んだ彼は和哉の手を握る。途端に伝わってくる、彼の熱。がっしりとした力強さがありながらも、彼の優しさを感じた。

「さてと、あとは追々話していくとして……シリウス、お前腹減ってるだろ？」

そして和哉の言われるがまま、シリウスは居間へと連れていかれるのだった。

「どうだった？」

「……美味かった。ほんとうに……」

噛みしめるように、シリウスは感想を伝えた。

机の上に置かれていた料理の数々はシリウスの胃袋の中へと吸い込まれていった。彼は料理を一口口に入れた時、動きが止まったのだ。途端、雷に打たれたような衝撃。

食材を調理した料理というものは生まれてから碌に食べたことがなかった。なにせ食べ物も入手しづらかったし、“栄養を取るためだけ”を目的としたブロック状のものをよく口に入れていたのだから。そう言えばよく文句を言ってはリゲルに叱られていたことを思い出した。

そんな調子で温かい料理を無言のまま、ひたすら口に運んでいった。その調子を和哉はにこやかに見つめていたのだった。

「だろ？ オレと珠冬みふゆにかかればこんなもんよ!!」

和哉は満足そうに笑った。

「……兄さんも話してないで洗い物手伝ってよ」

すると台所から来た少女、珠冬はシリウスの顔を見ずに兄に声をかけた。

和哉の妹、あかつきみふゆ暁珠冬あかつきみふゆが自分を見つけてくれたのだと聞いたが、どうにも話そうとすると顔を背けられてしまうのだ。何かしてしまっただかと、これまでの行いを思い起こすが心当たりがない。よって話し掛け辛くなってしまったのだ。

「わるいわるい。シリウスはここで休んでくれ」

和哉が去った後、座っていられなくなったシリウスは、ふと飾られている写真に目をする。2人の兄妹が、父母と共に笑顔を浮かべた瞬間を映したものが多く置いてあった。恐らく、和哉と珠冬の幼少期のものだ。

「……………」

シリウスは無言のまま。写真を見つめていた。

くく

翌日、晴れた空の中内浦へと繰り出した3人。その美しい海や自然を見せられたシリウスは言葉に出せないような感動を覚えていた。

「すごいだろ！ この景色!! オレもお気に入りに入るんだ」

階段が何段も続く淡島神社を上っていった先に見えたその景色。青い海や、深い緑。その中に人が住んでいる街が形成されている。アルデバにいたころには見るこ

かったその美しきは、シリウスの心を大いに揺さぶった。

「ああ……ほんとうにすごい。それに……綺麗だ……」

知らず知らずのうちに、シリウスはその目から大粒の涙を流していた。

「おいおい、どうした、潮が目にも染みたか？」

「そんなところだよ……」

涙を拭きとったシリウスだったが、長い溜息の後に彼は小さく呟く。

「こんなきれいな場所が、宇宙にはまだあったんだな」

「なあ和哉、聞きたいんだが……親はどうしたんだ？」

シリウスが口を開いたのは、階段の途中に設けられたベンチに座ってからもの数秒後であった。

突然の問いに和哉は戸惑ったが、彼の真剣な眼差しに口元を緩め話し始めた。

「オレの両親は、数年前に死んじまったよ。事故……だったかな。幸い、蓄えはあったから何とか珠冬と一緒に生活してるけど」

「す、すまない。そんなことも知らずに聞いてしまった」

彼らも親を亡くしている。アルデバと同じようにも聞こえるが、このような平和な世

界では珍しいはずだ。そう感じたシリウスは即座に謝罪の言葉を述べるが、気にしていないと和哉は笑う。

そうして和哉は立ち上がり背伸びをする。そしてシリウスに向かって語りかけた。

「オレはさ……珠冬が幸せになつてくれればそれでいいんだ。今はそれがオレの夢なんだ」

海を見据えて語るその横顔を見たシリウス。それはとても美しい願いだと、彼は感じていたのだった。

くく

遠くに地球が見える宇宙空間。そこでレグリオス星人の船と、ウルトラマンオーブは激しい攻防を繰り広げていた。

対空砲の雨を交わしながら、エネルギーを丸鋸状にし撃ちだす。正確な狙いのおかげで対空砲の半数は壊すことができた。しかし、金色の色を輝かせ飛んできた円盤の攻撃

がオーブへと直撃。

無重力の中、何回も回転してしまう体をコントロール。体勢を整え、飛行で円盤へと突撃。円盤の機体下部から放たれる光弾を巧みに躲し幾度目かの光輪“オリジウムソーサー”を放つ。

これで決着はついた……と思った矢先、円盤はまるで王冠を付けた竜のような姿に変形。光輪を避けてオーブに襲い掛る。

オーブと宇宙竜の接触のするコンマ数秒、巨大な剣を取り出したオーブが金色の体を切り裂いた。衝撃により、船の方へと飛ばされる宇宙竜。そのままオーブはエネルギーを剣へと集約、虹色の奔流として撃ち出した。

金色の竜は木端微塵に、加えて“エネルギーの刃”で船を切り裂こうとする。しかし、艦体を切り裂くことは叶わず、ワームホールへ逃げられてしまった。

オーブは船の消えた方向へと目を向け、そのまま動くことは無かった。

く
く

俺が和哉と珠冬の兄妹に助けられてから数週間が経った。好意、しかし強引に、和哉

は俺を2人の家に住ませてくれた。

その間に彼らがいろいろ良くしてくれたおかげで、傷も治り、この地球、内浦のこともわかってきた。そして珠冬との間にも変化が。

「シリウス、何見てるの?」

「ああ。なんか動画を見つけてき」

俺が見ていたのは、とある動画だった。自分よりと年上の、所謂高校生だろうか。その数人組が歌を歌い、踊るといふもの。そこには胸の内から湧き上がる何かがあったのだ。俺は彼女に説明しようと、言葉を紡ぐ。

「なんていうかき、このステージに立つ人も、そしてそれを応援する人にも……なんだかすごい力を感じるんだよ。まるで会場全体が輝いているみたいに……」

俺は興奮気味になる気持ちを抑えながら自身の感想を口にするが、珠冬は目をぱちくりさせ話を聞いていただけだった。

「どうした?」

「ううん。ただ、シリウスがそこまで楽しそうにしているのが珍しいなって」

「あつ……そうかも」

俺はここで何かに夢中になる、心惹かれるという感情を始めて知った気がした。

「珠冬はどう思う、これ?」

「私には……うぐん……」

顎に手を乗せ、考える珠冬。しかし——よくわからないな、とだけ言い残すと用事があるみたいでその場をあとにする。

いつてらっしやいと声をかけるくらいには、俺もこの星に馴染んでいるのだった。

くく

「俺は、地球人じゃない……。それは知ってるんだろ？」

唐突な問いだった。俺はかねてから心のうちにあつたその疑問を、和哉へと伝えた。

「ああ、知ってた。そりゃあデカイ船があつたり、地球のことなんも知らないんだ。怪しむだろ」

何もなく普通に、ただ友達と話すように簡単に、和哉は言った。

淡島神社途中の休憩場所で、遠方を見据えた和哉にシリウスは返す。

「じゃあ……なんで……」ここまで俺に……」

疑問だったのだ。どうして俺なんかを助けたのか、所謂異星人だと知っていたのであれば、見て見ぬふりをしてほっとけばよかったものを。

「理由なんていらぬよ。オレは、オレも珠冬も、傷ついたお前を助けたかっただけだ」
その迷いなく語る横顔を見つめるシリウスの目は、何かを思い出すかのように細まっ
ていく。

「俺も……俺もここよりだいぶ遠い星に……アルデバにいた頃……そう思っていた」

「……誰かを助けたい？」

「……ああ。誰も傷つかない世界が、俺の理想だった。でも、言われたんだ。その理想は
夢物語だ。そして俺が誰かを助けるのは、助けられなかった人たちへの後ろめたさから
だった。……でも！俺は誰かを助けたい、それに理想だって求め続けたい
………………だけどそれは、間違いなのか？」

しばしの間の沈黙。

風が木々を鳴らしている音が、その場を支配する。

そこに再度、人の声が入る。和哉だ。

「それでも……それでもいいんじゃないか」

「え？」

彼の答えに、シリウスは疑問を抱く。何故だと。その理想を追いかけるだけの、罪悪感からくる、愚かで歪んだ生き方で？

「理由はどうあれ、お前は誰も傷ついてほしくないんだろ？ だから助けて、その理想を追いかける。確かに愚かだし、歪んでるっていう奴もいるかもしれない……」

けど、と彼は続ける。

「それってすごく美しいものだと思ふんだ。現実が非常だからこそ理想を求め続ける、形にしようと努力する。誰かを助ける？ いいんじゃないか！ 理想……夢や目標も、達成するために足掻いて足掻いて……足掻き続ける。オレはそういうの好きだな」

いつの間にか景色を見ている姿勢から、シリウスへと向き直っている和哉は笑顔を作って言う。

誰も傷つかない世界……そう願ったのは、そう願った根底にあったのは、アルデバの惨状からだだったのかもしれない。この戦いが終わって欲しいと、終わって平和に暮らしたいと……それが、どれだけいいだろうと憧れたのだから。その願いは……美しいものは……。

形にするのが難しく、険しい道だからこそ……足掻き続ける。

「お前はお前の信じた道を進めばいいんだよ。その過程や、根底に何があってもな」

肩を叩いた和哉の手はシリウスの心に熱を灯していた。

「ありがとう。なんだか軽くなった気がする」

「そうか、そりゃあよかったよ」

その帰り道、2人は並んで内浦の道を歩いていた。この地球でもう一度やり直そうとシリウスは決心する。

しかし運命というのは時に残酷なものであった。

巨大な地響きと揺れが、彼ら……街の人々を支配する。

「な、なんだこれ……!?」

「地震か……!?」

和哉やシリウスのほかにも、急に発生した異常に声を上げる。すると太陽の光が一瞬、鈍い青に輝く。そこから数秒後、テレポーターションのごとく、異形の巨大生物がその姿を現した。

地球のカミキリムシと、顔のない甲冑を模した生物だった。

黒と白の体、2本の角を生やした頭の中にはどす黒いクリムゾンレットに輝く結晶。そして胸部には青、はたまたは気色の悪い虹色に輝く発光体が2つ。

「なんだ……シリウス?」

和哉は隣にいる人物に顔を向ける。すると、あり得ないとも言いそうな表情で、その“元”となった生物の総称を口にした。

「……怪獣」

「まさか……アルファルド様が重傷を負うとはね」

アルファルド・レグルスから渡されたダークリングを片手に、リゲルは呟いた。

とある目的のため、太陽系第三惑星への侵攻を始めていたレグリオス星人たちだった

が、あいにくとでも言うのだろうか……魔王獣討伐に訪れていたオーブに防がれてしまった。そして船の当たり所が悪く、アルファルドが負傷。

代わりに、この星に眠ると言われる魔王獣の復活をリゲルに託したのだった。

「アレが魔王獣……単体でも尋常じゃない力を持っている。なら、それを統べる大魔王獣つてのは……どれほどの力なんだろうな」

ダークリングの放つ闇のエネルギーは、リゲルの秘めた狂気を加速させていた。

「どこだ！ 珠冬！ おい！！」

「珠冬！ 珠冬！！」

2人がかりで彼女を探しているが、街を蹂躪する怪獣、そして怪獣によって逃げ惑う人々の悲鳴や叫びが、その声をかき消す。

「シリウス、いたか？」

「だめだ見つからない……」

『pppppppppp……！！』

なんとという事だろうか。怪獣は頭から火球を放ち始めた。爆発により、暗くなっていた外は一瞬にして昼間並みの明るさに変わる。そして鼓膜を激しく振るわず破裂音。

「早く見つけないと！」

「そうだな」

早く見つけなければ、珠冬も炎に吞まれてしまう。そんな焦りで心臓の鼓動が早くなる。

「兄さーん！ シリウスー!!」

2人は呼ばれるがまま、その方向へと駆け出していく。

「おい、大丈夫か？」

「私は平気。ただ、この人の脚が挟まれちゃったみたいで」

珠冬の前には男性が倒れており、片足がコンクリートの瓦礫にはさまれていたのだ。

「和哉、やれるか!!」

「ああ!!」

すぐに助けようと瓦礫に手を掛けたシリウスと和哉。彼らは息を合わせて、その何トンもあるだろ瓦礫を数センチ持ち上げる。そのくらいの隙間ができれば、引きずり出すことも可能だ。

「……珠冬、出してあげろ」

彼女は男性を引っ張り、瓦礫から救出する。

「あ、ありがとうございます……!」

「歩けますか？　なら早く避難を」

それはあまりに突然で、理不尽な出来事だった。

『pppppppppp……』

光の魔王獣　マガゼットンの光は、シリウスたち3人に狙いをつけてしまったのだ。

「アイツ、俺たちを狙ってる……！」

限界が近づきつつある四肢に力を入れて、3人は走る。しかし、マガゼットンは追尾を辞めなかった。まるで何か執念を抱いているかのように。

『pppppppp……!!』

再度、マガゼットンは頭の前でエネルギーを貯め始めた。

必死の逃走虚しく、超高温度の火球が3人の背中を狙うように撃ちだされた。だが狙いがずれたのか、その攻撃はビルへと直撃。爆発で建物が全壊する。

「危ないッ……!!」

シリウスと珠冬は前へと押し出された。

「うっ……!?!」

「……………っ!？」

シリウスは横を見ると、珠冬が横たわっていた。しかし、和哉の姿が見えない。その瞬間、もしやという最悪の状況を連想させた。そんなはずはないと、彼は後ろへと顔を向ける。

「……………ッ!？」

声にならないほどの衝撃がシリウスを襲う。

おびただしい血の量と共に、和哉は瓦礫の下敷きになっていたのだ。それは先ほどの男性とは比較にならない。頭から下は瓦礫に挟まれ、よく見るとむき出しの鉄骨などに胸を貫かれていた。

「だ……………大丈夫……………か？」

「和哉っ!!」

引き寄せられるようにして和哉へと駆けよる。

「待ってる、今助ける……………上がれ……………上がれよっ……………頼む!!」

自分1人ではどうにもならないほどの大きさと重さがあった。貫かれたとはわかっていながらも、それを認めたくないというシリウスは必死に持ち上げようとするのだっ

た。

マガゼットンの影が近づいてくるその時、もう一方から光の球体がマガゼットンを弾き飛ばした。それは段々と人型の形をとって姿を現す。光の巨人、ウルトラマンオーブであった。

「なにやって……るんだ……？ はやく……オレを置いて……珠冬を連れて逃げろ……」

「何バカなことやってんだよ。俺が助けたいんだ！ 信じた道を行けっってお前が言ったんだぞ!!」

瓦礫をどうにかして持ち上げようとするが、やはり上がることは無い。棒を下に潜りこませ、てこの原理を使ってもだ。

「オレは……大丈夫だから」

「大丈夫なもんか……もう、誰も死なせたくない……これ以上、俺に関わったせいで……」

俺に関わった関わろうとした人を、もう目の前で失うことはしたくなかった。アルデバが消滅したときの無力感を、もう味わいたくはなかったのだ。

それに、宇宙人と知った上でもこんなにも温かく迎え入れてくれた彼を……ただの人として扱ってくれた彼を……ここで死なせるわけにはいかない。

「頼む!!」

シリウスの右腕を掴む、和哉の真つ赤に染まった手。周りは火の海だつて言うのに、彼の体温がやけに冷たかったのが、近づきつつある死というものを嫌でも意識させる。

「お前ら2人……だけでも生きるんだ。今は全員よりも、……生きれる可能性のある方を……取るんだ」

それは、誰もを助けたいと願うシリウスには酷な頼みだつた。

しかし和哉は視線をずらさず、シリウスを見つめている。

「ずっと……考えてたんだ……このまま、お前とずっと一緒に暮らせればいいなつて……でも、それを言うと、お前は残るだろ?」

和哉のそれは、シリウスが抱いたものと同じ願いだつたのかも知れない。親を亡くし、妹とともに育つていかなくはないけないという現実。彼自身、やりたいことも、関わりたくないこともあつただろう。しかし、そのすべてを諦めた。

平和な世だからこそ、彼は妹のために自分を捨てたのだ。

そこに現れたシリウスという存在は、和哉にとつて同等の付き合いができる人物になつていた。友人に、親友に……。

「俺も……お前と共に暮らしたいつて……」

「なら……今日から暁……の姓にしないと……」

「そう、だな……」

焦点のあつてない和哉の顔は、くしゃりと笑う。それを見たシリウスは手を握り涙を流した。和哉が欲したもの、シリウスが失ったもの。それは2人同士で補うことができたのかもしれないと。

完全に事切れてしまった和哉を見送ったシリウスは、そこら辺に落ちていたネームプレートに『暁カズマ』と名前を入れ服に付けた。シリウスという名を捨て、彼は和哉から名前を貰い、新たな名で生きていくことを決意したのだ。

「珠冬、起きろ。逃げるぞ」

起こした珠冬を連れて駆け出した。

「ねえ、ねえ兄さんは!？」

「……………和哉は……………ごめん……………」

「ねえ、どういうこと!? 教えてよ!!」

珠冬の疑問に涙を零しながら、シリウス……………カズマは詳しいことは答えることなく逃げていくのだった。

逃走の最中、カズマが後ろを振り向くとダークリングを持った人間を捉える。

「まさか……………!!」

「シリウス？」

珠冬が不思議そうに見つめてくるが、カズマは何でもないと一言、マガゼットンから逃げていくのだった。

(1話冒頭に続く)

くく

オーブがマガゼットンを倒した衝撃で、珠冬も瀕死の重傷を負ってしまった。それを見つけたリゲルは、口角を上げる。

彼女はこの街の人間だろう。怪獣に襲われた記憶というのをウルトラマンに変えてやれば、良い手駒になると考えたからだ。そうと決めたリゲルは、横たわる珠冬の体を持ち上げアルファルドの宇宙船へと戻っていく途中、

そこでリゲルは見つけてしまったのだ。

倒れていたカズマ……シリウスの姿を。

「……残念だよ。ここで君が死ぬなんて……」

それだけ言い残すと、彼は歩き出していった。

しかしカズマの肉体にはオーブが宿っていた。ダメージを受けた体を、オーブが修復していく。しかし、地球人とよく似た肉体構造でありながらアルデバ人という異星人の体は、オーブのただでさえ少なかつたエネルギーを消費。それによってオーブの意識は封印され、その一体化の副作用からなのか、肉体的負担で記憶を失ってしまったのだ。

珠冬は記憶を弄られ

「珠とは日本の言葉で真珠を意味するみたいだから……今日から君の名前はスピカだ」

「はい……私はアルファルド様の仰せのままに……」

アルファルドの傀儡となってしまうた。

それが3年前の真実。一眞の失われていた記憶の欠片。

「……………ツ……………ツ……………ツ」

波のように押し寄せてきた記憶の奔流。

その膨大な情報量に一眞は吐きそうになる。

「ようやく思い出せたようだね？ シリウス」

懐かしいその名前を、アオボシ……………リゲルは嬉しそうに、恨みを込めたようにその声を発した。

第29話 嘆きの星

「……………」

膝をつき、目の光が消えた一眞。彼の顔は白くなっている。それは死の淵からの生還というよりは、止め処のない記憶という莫大な情報が流れ込んできている影響が大きいだろう。

「その今にも吐きそうな最低な面構え……ようやく思いだしたね」

気味の悪いアオボシの笑いは、変わらず一眞を見下ろしていた。

「俺は……くっ、——はあ……はあ……」

記憶の奔流が、一眞の頭を鈍器で殴るような勢いと重さで襲い掛る。

まず何をどうすればいいのか、それすらもわからない。目の前にいるAoursも、アオボシも、彼の視界には入るがそんなことに構っている暇などなかった。

「あ、スピカちゃん!？」

不意に呼んだルビイの声に、花丸が反応した。それもそうだ。東京で出会った、Aoursが好きだと語った少女が、アオボシの横に立っていたのだから。

「なんで……」

あまりのことにルビィは言葉を失う。

「うーん、ここは撤退だ、スピカ」

「どうして、せっかくのチャンスなのに!？」

「君はアイドルの前で実行するのかい？ まあ、僕は構わないけど」

スピカは顔の向きを変えると、困惑と驚愕の表情で見つめるルビィや花丸と目が合っ
てしまう。

「……………わかった」

「では、僕らはここで。シリウス、また来るよ」

フツと笑ったアオボシは、何かの怪獣カードを使ってスピカと共に、瞬時にその姿を
消していくのだった。

しばらくの沈黙。一真とAqoursの中では異様ともいえる空気が流れていた。
それもそのはず。片やオーブの正体が一真であり、そんな彼は地球人ではないという事
実。片や、自身の記憶のふたが開けられ、様々な真実が表に出た状態。そんな中で普通
に会話しろというのがそもそも無理な話だ。

「か、カズ……………くん……………?」

千歌は恐る恐る、目の前で膝と腕をついて震えている少年に声をかける。

「……………っ!? あ、お……………俺は……………っ!?」

A q o u r s の面々に見つめられていることに耐えられなくなった一眞。彼はその場から逃げ出してしまった。

後ろから聞こえてくる、待つてほしいという意図の呼びかけも無視して。

一眞は四肢を振るって無限にも続くような道を走っていく。目には涙を浮かべ、後悔と罪悪感と嫌悪が混じった、最悪に濁った心を胸に抱えて。

——俺は今の今まで、忘れていたのだ。アルデバという故郷が無くなってしまったことも、そこで救うことのできなかつた人々への責任も、そして……………自分を救ってくれた和哉のことも……………敵の手に堕ち、自身を殺そうとする珠冬のことも……………。

俺はそれを忘れ、3年という月日をのうのうと過ごしてきたのだ。記憶がないと、言い訳を続けて……………。

「かあ……………あつ……………ああ……………!!」

息が切れそうになり、それでいて異様な声が漏れた。

途端、躓いて転んでしまう。俺は立ち上がるのことも、頭から転んだ痛さも忘れて、た

だ謝罪の言葉を述べた。今まで忘れてしまっていたことに、自分がぬるま湯の中で平和に生きていたことに……。

気付けば、和哉と珠冬が住んでいた家にその足は向かっていた。しかし、そこはすでに空き地になっており、売りに出されていた。

「そんな……」

俺は、“俺の中にいるオーブ”に向かつて声を上げた。周りからどう思われようと関係ない。その心の叫びは留まってはくれなかったのだ。

「どうして……どうして俺なんかを救ったんだよ……俺じゃなくて……和哉を……珠冬を……」

俺ではなく、あの2人を救ってくればよかったのだ。和哉たちに助けられなければ、そのまま消えていったであろう命。それが俺だ。

今更嘆こうが仕方ないとは頭では理解している。しかし心では……それを受け止めることができなかった。

「俺は……俺はどうすればいいんだ……」

その問いに答えてくれる者は、誰もいない。ただ、そこにはいつもの内浦の景色が広がっているだけだった。

くく

「……」

「頭の整理が、追いつかないよね」

千歌を病室に戻し、そこに集まった8人は先ほどまでの状況に言葉を失っていた。

切り出したはずの梨子の顔にも、未だ困惑の表情が強く残っている。

「まさかオーブが一真さんで……」

「加えて異星人……ですからね」

ルビイとダイヤの姉妹も彼の真実を受け入れられていないようだ。

誰にも知られず、たった1人で立ち向かった男。彼は1人悩み、傷つき、それを悟らせまいと弱さを隠していた。皆心のどこかで不自然さには気が付いていただろう。し

かし、そんなはずはないと思つて疑問に蓋をして。

でも、彼は千歌を傷つけてしまった。それは変わりようがない事実。

加えて異星から来た人物であるというそれに、彼女たちは彼に対してどのように対応したらいいかわからなくなつていた。

「それでも、カズくんはカズくんじゃないかな……」

ふと、重苦しい空気の中に千歌の声が響いていく。

「千歌ちゃん、それって……どういう……」

「変わらないんだよ。ウルトラマンだったとしても、宇宙人だったとしても、どのカズくんもカズくんなんだよ」

いくつもの面がある。しかし、どれほどの面を持つていたとしても、その根底にあるものは変わらない。ただの友人で、先輩で、後輩で、昔からの付き合いで、A q o u r s のマネージャーで……そうやって積み上げてきた彼がいなくなることは無いと。

例えそれが、異星人だったとしても。

「マルもそう思います。まだよくわからないけど、先輩は先輩で変わらないと思うすら。

それに……異星の人とでも仲良くなれるって、マルは知ってますから」

「変わらない……ですか。確かにそうかもしれないけどね」

「リトルデーモンに理解を示すのが、墮天使であるヨハネの務めよね」

「先輩は先輩……うん、そうだよね！」

「千歌ちゃん……」

千歌の言葉に沈みかけ、困惑していた空気は幾ばくかはマシになった。

（ ）

彼女たちが病室で話し合ってから数時間後、一真は淡島神社へと足を運んでいた。

オレンジに染まり、光を反射した海を見つめる。いつみてもこの光景は美しいと感じてしまう。しかし彼の考えがまとまるという訳でもなかった。

自分はA q o u r s ^あ中に居ていいのだろうか。ずっと考え続けてきたそれはさらに深く、さらに強く彼を苦しめた。千歌を傷つけたことは一生消えることは無い。オーブとバレた今ではもうどう思われているのかなんて考えたくない。

加えて“異星人”という彼女たちとは絶対に異なる種族。

——やはり俺は……

「ここにいたんだ」

背後からかけられた声に反応し、顔を向ける。

そこには私服姿の果南が立っていた。

彼女はいつもと変わらぬ面もちであったが彼女の内には、様々な感情が蠢いている事だろう。

「そうだったんだ……」

設けられたベンチに腰掛け、これまでのことを語った一真に果南はそう返した。想像もつかないような話のはずなのに、その声音はひどく落ち着いているように聞こえる。

「……オーブ、攻撃対象になっちゃったてね」

しばしの沈黙の後、果南は再度口を開く。オーブは人類の敵とみなされ、攻撃の対象になってしまったということを告げられた。

「俺も知ってたし、そうなるだろうなとは思ったよ。俺は……」

——千歌を傷つけたんだから。

「それは私も許せない」

「そう……だよな」

覚悟はしていたが面と向かつてはつきりと言われると、やはり心に来るなど一眞は苦笑いする。以前の病室で言った時よりも、一眞自分に向けて言われているからかもしれない。

オーブへの攻撃も、これ以上犠牲を出さないように。そう考えて決められたことだろう。誰も傷つかないようにと戦いながら、いつの間にか自分が“傷つける側”になっていたのだ。ウルトラマン……その名に聞いて呆れる。

「でもね」

果南の声に、一眞は再び顔を上げる。

「千歌に言われて気が付いた。オーブも……カズも同じなんだなって」

「え？」

「ずっと、みんなを守らなきゃとかそんなこと抱え込んでたんでしょ？」

果南の指摘に、一眞は見透かされたような感じがして口を噤んでしまう。それは否定ではなく、凶星だったから。

「ホントは言っただけじゃなかったって、みんな思ってる」

「……でもそれじゃ、みんなに危険が」

「今更でしょ。そんなこと」

そう言われてしまえば、一眞はまた黙るしかない。果南の言う通り、これまで彼女たちは怪獣に襲われるという出来事が多々あった。

でもそれは、一眞が近くにいるからではないのか。自分がいるから、狙われてしまう。「やっぱだ。俺といると……みんな不幸になる」

嫌になる程の自己嫌悪。過去の出来事を思い出した彼には、誰かという資格などないのではと思わせるほど……失ったものが大きかったのだ。

「バカだな。私たちは自分の意志でいるんだよ？ みんなカズのこと信じてる。例えばルトラマンでも、宇宙人でも、それは変わらない」

「……………え？」

間の抜けた声で発してしまった一眞。その数秒後、果南の胸元へと引き寄せられる。頭をなでる手は温かく、そして優しくかった。

「カズが誰であろうと、私も、みんなも、カズはカズだってわかってるから。だからそんなこと言わない」

「でも……………俺は……………」

ここから先の言葉が出てこない。何か言おうとすると、泣いてしまいそうな。そんな気がしたから。

「千歌を傷つけた。でも……………それよりも、カズはみんなを守ってくれた。本当に嬉し

かったよ。……………ありがとう」

そこで投げられる感謝の言葉。向き直った一眞は流れる涙を拭う。

「ゴメン。これまで黙ってて、みんなに心配させて…けど……」

「わかつてるよ」

一眞が伝えようとする言葉を、果南は皆まで言うなと発言を遮る。

「あとそれ、千歌や曜にも伝えてあげなよ？ 言葉で……………ちゃんとと言わないと伝わらない。私と鞠莉がそうだったようにね」

全ては伝わっている。そう思って果南と鞠莉はすれ違ってしまった。誰にももうそんな思いをさせたくない……………。そう思って果南は一眞に言ったのだろう。

「わかった……………ありがとう。ほんとに」

「ちゃんと話つけてきなよ？」

「ああ!!」

まだ、よくわからない。けど、光が見えたような気がした一眞はベンチから立ち上がると、階段を一目散に下っていった。

「はあ……………いつの間にあんな頼もしくなっちゃったんだか」

3年の付き合い。鞠莉やダイヤ、千歌と曜と比べたら短い付き合いかもしれぬ。し

かし、果南の目に映っていた一眞は今までの一眞とは違うと、そう感じさせるのだった。

（く）
「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……」

病院への道を走っていく一眞。果南の胸の内を聞き、勢いよく飛び出した。しかしそれでもまだモヤモヤとした気持ちが残っているのもまた事実だった。

自分はここで生きていいのだろうか。それだけが、ずっと頭の後ろで響いているようだった。果南は受け入れてくれると、そう言ってはくれたが……この心に突き刺さっている罪悪感は消えることは無いだろう。

「シリウス」

頭の考えをどうにかして振り払おうとした、その直前。

「シリウス」

聞き慣れた声が、一眞の脳内にこだまする。懐かしく、力強く、優しいその声。

「……え」

しっかりと辺りの景色を見ると、そこは白く塗りたくられた謎の空間に変わっていた。すると自分の目の前にはしっかりと地面に立った彼の姿。

黒い髪が風に揺れ、同じくらい黒い彼の瞳が、力強く一眞を見据えている。俺は驚きのあまり、フラフラした足つきで近づきながら、3年も忘れてしまった彼の名を呼ぶ声、まるで息のように零れた。

「……和哉。どうして……ここに」

その顔を一瞬悲しそうに滲ませると。再び穏やかな微笑を浮かべた。

「これはただの思い出。お前の記憶の欠片だ。多分、お前の中に居る誰かか、それに準じる力を見せてくれた奇跡さ」

「俺は……」

微笑を浮かべている友人は、一眞へとそっと近づく。

「もう、自分でもわかってるんだろ？」

「……ああ。俺は変えられない。この生き方を、この在り方を。でも、良いのかな……。俺は、また歩きだしても……」

過去の後悔は、一眞にずっとついて回る。それだけは確かだった。

「……………過去は変えられない。だけど、未来はどうなるかわからない」
続けて和哉はゆるぎない調子で、言葉を紡いでいく。

「いいんだよ。お前はお前の信じた道を行けば。それを見送ってくれる奴もいるんだろ？ だったらさ、そのまま進めよ、一真……………」

最後に、力強く背中を叩かれる衝撃。

気付くころには白く塗りたくれた謎の空間ではなく、内浦の夜道に戻っており、そこには一真一人しかいなかった。

「ああ。ありがとうな、和哉。俺がお前の……………生きた証だ」

自分以外誰もいないその道で、一真は呟くように礼を言うのと再度走り始めたのだ。た。

第30話 決意の聖剣

最初彼と出会った時は、ただの記憶喪失の男の子。そう思っていた。

でもいつからか、彼は何処か遠い目をしている。どこか遠いところを見ている。そんな風にも感じ始めていた。

輝きを見つけようと、スクールアイドルを始めた。するとわかったのだ。彼には彼だけの輝きがあるのでは……。正直、それを聞くのが怖かった。聞いてはいけない気がした。

そのせいで……彼を傷ついていたことがわからなかった。
だからこんどは——

ガラガラガラガラ

病室のドアが開く音がした。そこに入ってきたのは

「高海さくん、診察の時間ですよ」

白衣を羽織つてはいるものの、それが医者ではないことは明らかだった。

「あ、あなたは……!?!」

不気味な笑顔を顔に浮かべたアオボシがそこには立っていたのだ。

「血圧は……おっと上昇しているようだね。一体どういう事かな?」

いきなり千歌の左腕を掴み脈拍を図るようにすると、今度は顔を近づけて囁くように訴えかける。

「どうして世間に言わないんだ? オープは人類の敵だと。君のひと声があれば一発でアイツは孤立する。まあ、もうオープは攻撃対象らしいけどな」

喉をクククツと鳴らすアオボシ。しかし、千歌は否定する。オープは自身の力の大きさに苦しんでいるだけだと。一真であることを知ればなおさらそう思えてくる。

「ねえ、どうしてあなたはこうしてカズくんをそこまで憎むの?」

「……知りたいか?」

いつきに声を低くし彼女に問いかける。だが千歌は臆することなくアオボシを見つめていた。

「ま、知る前に君の命は無いけどね」

アオボシの手が千歌へと迫るその瞬間、青年の体はあらぬ方向に突き飛ばされた。

「千歌ちゃん、大丈夫!？」

「え、曜ちゃん……」

そこには曜が来てくれたのだ。

「なんか胸騒ぎがしてさ。さあ、早く逃げるよ!!」

千歌の手を引いて病室を後にする2人。廊下に出て出口へと真っ先に走っていく。

「……つたく、ここまで似てるヤツがいるなんてな。目障りなんだよ僕には……!!」

アルデバにいた時を思い出したのか、腹を立てたアオボシも2人を追うために病室を後にする。

「曜ちゃん、どこに逃げるの?」

「ごめん、それは考えてなかった!!」

病院のから出てきた千歌と曜。ここまでこれたのは、何故か巡回している人と会わなかったからだ。恐らくアオボシが何かしたに違いない。

彼への警戒を高めつつはエントランスまで辿り着いたときに、2人は驚愕の表情と共に足を止めてしまった。

「あれれ、どこかにお出かけですか?」

なんとアオボシが待ち伏せていたのだ。

「やっぱり怪獣カードの力は凄いね……」

右手でカードを弄りつつ、2人に歩み寄っていく。千歌を守るように曜が前に立つが、正直抵抗する手立てはない。

絶体絶命ともいえるこの状況だったそんな時

「……ッ!!」

横から飛び蹴りをもろに食らったアオボシは地面に転がる。

「カズくん!」

数時間ぶりに見る彼の後ろ姿に不安や疑念、そして安心を抱く2人。

「ハハハッ……遅かったね。あと少して2人ともあの世行きだったぞ?」

「話は後で、逃げるぞ」

アオボシの声を無視し、一真に連れられ千歌と曜は暗い夜道を駆けていった。

その姿を見送る形になったアオボシ。立ち上がり、服についた汚れを落とす。そんな彼の顔には不敵な笑みが浮かんでいた。

「良いのか?」

「良いの。今日はパパもママもいないからさ」

逃げてきた一真たちは、曜の家でお邪魔することになった。病院から一番近かったというのが理由だ。

「ごめん……………」

一安心した頃、千歌と曜に向かって一真は頭を下げた。

「俺…………俺はみんなに迷惑かけたし、これまで何も言わなかった。それに千歌も傷つけちゃって…………でも、俺はこれからもこの在り方を変えられそうには…………変えたくないんだ。だから、だからそれでも…………みんながいつて言うのならば、ずっと一緒に居たい……………」

それを聞いた2人は互いに顔を見合わずと、一真に向かってこう告げる。

「謝るのはこっちの方だよ」

「そう。カズくんと言わなきゃいけないこと、ずっと黙ってたし」

「……………」

まだぎこちない笑顔だったが、それは確かに一真に向けての言葉。最初に抱いた彼女たちの想いだった。

「ありがとう。私たちを守ってくれて」

その言葉に、またもや一真は涙を流してしまう。

「俺さ、みんなといていいのかな、一緒に輝きを見つけに行つていいのかな……」

拒否されるのが怖くて、拒絶されるのが怖くて、どうしても彼が口に出せなかつた言葉であつた。

「いいに決まつてるじゃん。同じ仲間なんだからさ」

「でも俺、異星人だし……」

「もう気にしないで決めての。これはA q o u r s全員で決めたことなんだから！」

「……………ッ」

「もう、カズくん泣いちゃつてさ」

「……………うるせえよ」

涙を拭くと、一真は2人に笑つて見せた。その笑顔は、曇りひとつない晴れやかなものであり、千歌と曜も笑い合つた。

「カズくん、前に言ったよね？ 一緒に悩むことはできるって。だからさ、今度こそ支えたいんだ。カズくんのこと。私ね、世界中の誰もがオーブの敵になつても、私は信じてるから」

千歌が寝る前に言った言葉を一眞は思い返していた。

夜も明けそうになってきた頃、一眞は外へと出ていた。答えらしいものが、ようやく見つかった気がする。誰も傷つかないという理想を追い求めるのは、辛く厳しいことだ。でも、最後の最後まで足掻いていく。それが和哉から教わったこと。自分の在り方。

そしてみんなは自分を受け入れてくれた。ウルトラマンとしての自分、アルデバ人としての自分、暁一眞としての自分。

ならもう迷うことは無い。自分はウルトラマンとして戦っていく。A q o u r s のマネージャーとして彼女たちを支えていく。ただそれだけだ。

「あれ、もう起きてたの?」

「曜……まあな」

すると起きてきた曜が家から出てきたようで、一眞の横に立つ。

「ねえ……」

「……ん?」

何か言いたげな曜は、一眞の方へ向きを変える。

「あのさ、ごめんね。あの時、叩いちちゃったりして。それに消えてとか言っちゃってさ」それはギャラクトロンを撃破した時、病院で曜に殴られたときのことだった。

「いいんだ。あれは俺が悪かったんだから。曜には別に悪いところなんてどこにもないよ」

「でも私酷いこと言っちゃったし……」

そこから会話が途切れてしまい微妙な空気が流れ始めてしまった。

「私もね、オーブを、カズくんを支えたい。辛かったり、苦しかったりしたら、私を……私たちを頼ってほしい。千歌ちゃんやみんなと同じ気持ちだから。カズくんもみんなを……なによりも自分を信じて」

手を握ってくれた曜の手が、想像より熱かったことに少し驚く。だけど曜の揺れるような瞳を見ると、それは彼女の強い思いだということが伝わる。

「わかった。ありがとうな、曜」

青黒い空がオレンジ色に染め上げられていく。

そんな時

静寂を打ち壊すかのような、雷のような騒音。空に開いた大きな空洞は赤と黒の雷を逆らせ、雲を作って渦を巻いていた。

「曜ちゃん!! カズくん!!」

2人の名を呼びながら家から飛び出てきた千歌。彼女にも空の空洞が目に入ったのだろう。曜と一眞、2人の肩を掴んで空を見上げる。

「千歌、曜」

2人の目をしっかりと見据えた一眞は決意として息を吸い込み彼女たちに語り掛けた。

「俺は戻ってくる。必ず……戻ってくるから」

「……うん」

「今度はちゃんと帰ってきて?」

無言、それでいてしっかりと頷くと一眞は走り出していった。その背中を、千歌と曜は見守り続ける。

赤い光柱が地面に激突したかと思うと、その姿を合体魔王獣 ゼツパンドンへと姿を変えた。そして明け方の空へ、轟くその咆哮を響かせたのだ。

「スピカ……いや、珠冬!」

一眞はゼツパンドンへと変化している少女の名を叫んだ。

「(こんど)そ……(こんど)そあなたを倒すッ!!」

何発もの殴打を頭や顎に浴びせる。

頭への確に打ち込み、加えて腹部や側面にも蹴りを放っていく。

「……………」

しかし効果が見られず、ゼツパンドンの強力な右腕がオーブの胸元に命中し地面へと倒れこんでしまう。

「グッ、ウウウウ……ウオオオオオオツッ!!」

闇の力に呑まれそうなのか、オーブは以前と同じように天に向けて吼える。

その力をフルに発揮し、ゼツパンドンの体を抱え上げた。遠くへ投げつけようとした瞬間、ゼツパンドンの火球がオーブへと襲い掛かる。

怯んだその隙に、左側面、そして頭を蹴り、殴るゼツパンドン。するとオーブは隣にある送電塔に目をやると、迷わずそれを引き抜いてしまう。武器にして殴りかかるつもりなのだ。

「いいよシリウス……キミの闇に惚れ惚れするねえ……」

遠くで戦いを見守るアオボシは、笑いと共に彼の戦いっぷりを称賛した。

その戦いを見守る千歌と曜。暴走しているのではという不安も確かにある。しかし、

だとしても彼ならば必ず克服してくれるという信頼があった。その為なのか、一步も逃げようとせず、オーブとゼツパンドンの勝負の行方を見守っている。

「カズくん……」

「信じてるから……」

送電塔で殴りつけるが、ゼツパンドンの強固な肌のせいで逆に塔そのものがバラバラに砕け散っていく。

「ラアアアアアア………ツツツ」

その後も、何度も何度も正面から頭を殴りつけていく。そのまま腹部に一発、さらに一発。

それすらも弾かれ、後方へと飛ばされたオーブ。彼はその場から受け身を取り膝立ちの状態へ起き上がると、両腕にエネルギーを貯めて交差させた。

「ゼットシウム………光オオオオオオオオ線ツツツツツ!!!」

「ゼツパンドンシールド」

マガオロチ、ギャラクトロンと言った強敵を破壊してきたゼットシウム光線でもそのシールドの前では無力であった。さらに紫色の破棄光線をオーブに向かって発射。避けることができず、その攻撃を食らってしまう。

だがオーブも諦めることなく起き上がると、再度構えを取って相手の出方を待つ。

それと同時に、オーブ出現の連絡を受けた自衛隊は彼を排除すべく戦闘機を発進させた。もう間もなく、戦闘機はオーブと接触する……そんな距離まで迫ってきていた。

『まずはオーブを攻撃する』

『了解』

「カズ……オーブ！ 私たち信じてるから！ 君がどんな姿でも、闇に吞まれそうになっても……!!」

「私を救ってくれた君のこと、ずつつつつと信じてるから……!!」

前方に立つ“彼”に向かって曜と千歌は投げかける。何度倒れても立ち上がる彼の姿を。どんな姿になろうと、誰かを守ろうとするその姿を信じていると。

2人の呼びかけに、オーブはゆっくりと背後を向いた。

(……………ツ!?)

刹那、戦闘機から放たれたミサイルがオーブに全弾直撃。戦闘機に気に向けた隙に、ゼッパンドンの口から火球が何発も放たれた。加えて紫の破壊光線。辺り一面をも破壊し、オーブを爆風が包み込む。

それでも千歌は、曜は、逃げようとはしなかった。

「アハハハハハハッ……お前はまた大切なものを守れなかったな、シリウス」
「終りね……」

アオボシもスピカも、どちらともにオーブの敗北を確信。さらなる追い打ちとして火球、光弾を乱れ撃っていく。

「さらばウルトラマン」

——しかし

煙が消えていくと、そこには黒い背中があった。

「……なに？」

オーブは千歌と曜を爆発から守っていたのだ。闇に吞まれず、自らの意志で、彼の大切なものを守ってみせたのだ。

「カズくん……」

「信じてたよ……」

彼女たちにオーブは無言で頷く。

オーブのインナースペース。そこで一眞は自身のホルダーから光が漏れていることに気が付く。

「これは……」

迷わず取り出したそれは、未だ虹色に輝いているカードだった。それは徐々に収まっていくと、一眞にも見覚えのある姿が描かれていたものであった。

そこに描かれていたのは、巨大な剣を携えるオーブの姿。そう、あの時^{3年前}見たものと寸分違わないで立ちで描かれていたのだ。

それを迷うことなく、オーブリングへと通す。

すると虹色の光が一気にオーブリングから解放され、一眞の視界を覆っていく。そして

「……………」

目の前が白一色に包まれる。それは和哉と対面した時と似ているが、少し違う。その理由は目の前に、青く光り輝くものが見えたからだ。一眞はその光を一直線に見据え、脚を踏み出した。

「おい、いいのか？　そこから先には途方もない脅威や、苦しみが待っているかもしれない
い……」

背後から声をかけられる。和哉のようにも、一眞のようにも、アオボシのようにも、そ
して……俺に力をくれた彼のようにも聞こえる。

ふと気が付くと、一眞の目には先ほどの空間とはまた別の景色が広がっていた。

そこは暗く、吹雪吹き荒ぶ荒野だ。体が動かなくなるほどの気温の低さ。来るものを
拒む異様な空気。

しかし一眞はそこから引き返すことも、その何度目かの残酷な真実に、諦めて膝をつ
くようなこともしなかった。

「お前は地球人じゃない。異星人であるという重みがいつかその身に降りかかる。ここ
で逃げておけばよかったと、消えておけばよかったと、自分自身を呪い続ける未来が来

るかもしれない」

そう。一眞はアルデバ人。地球人ではない。それゆえの心の摩擦が、種族間の溝が、違いが……浮き彫りになることもいつかはやってくる。

——けど

「みんなは俺を受け入れてくれたんだ。生まれが何処かなんて関係ない。只の“暁一眞”としての俺を……」

本来の自分と向き合った。たくさんの後悔はある。アイツリゲルの言った通り、俺は助けられなかった人々に後ろめたさを感じている。

けどそれだけじゃない。真実を打ち明けても認めてくれた人が、許してくれた人が、笑顔でいてくれた人がいた。

ならやっていける。守っていける。俺を俺と認めてくれる人がいる限り……戦っていける。今は……いや、ずっとそれだけでいい。この先に何が待っていても。

どれだけ愚かでも、歪だとしても、引き返すことなんてしない。

一步、脚を踏み出す。

途端、吹雪の勢いが増し始めた。顔に吹きつけられる雪、手足の先から冷えていく感覚。だが一眞は両足を地面に押し付け、腕で顔を覆い吹雪の中を進んでいく。

「自分を信じる勇気が……力になる……」

そんな言葉を無意識の中で口にする。自分を信じることができなかつた……それが焦りを生み、闇に吞まれた。けれど、彼女たちの言葉が一眞に勇気を与えた。だからこそもう一度、自分を信じようと思える。

自分を見失わず、信じ続けられる。

——力を望んでいる……アイツの言葉は正しい。

しかし、根底にあるのは誰かを……みんなを守りたいという願いからだ。アルデバにいた頃からそう願ひ、果たすことができず、いつの間にか忘れてしまったもの。

「例え最期に……この在り方を呪うことになつたとしても……」

「最期まで、俺はこの在り方を張り続ける……」

自分1人の力ではないからこそ、ここまで来られた。そしてこれからも……！

光を凝視していた彼には、もはや迷いなんてものは一部たりとも存在していなかった。

一眞は目の前にある青く巨大な輪の中心に手を伸ばす。

「これが……」

「——これが本当の俺だ!!」

伸ばした手には光り輝く聖剣が握られていた。それを躊躇うことなく、一眞は頭上へと掲げる。

眩い光が、再度一眞を包み込んだ。

『覚醒せよ!——オーブオリジン!!』

青い光の柱が立ち昇り、そこから巨人の姿が実体化する。赤と銀、そして黒の体を持つ姿。よく言えばシンプル、悪く言えば迫力不足。だがその立ち姿には、誰にも負けないという決意の光が見られた。

右手に持つ巨大な剣が天を指す。

「その姿は……!?!」

ゼッパンドンからオーブの姿を見たスピカ、そしてアオボシの驚愕。

「俺の名はオーブ……ウルトラマンオーブ!!」

声を高らかに、その名を名乗り上げて剣を振りかざす。虹色の輪がオーブの周りを取り囲んだ。

「千歌ちゃん……あれって……」

「うん……3年前の……光の巨人……」

3年前にマガゼットンを倒した光の巨人……。千歌たちの目の前に3年の時を経て、再び現れたのだった。

ウルトラマンオーブ オープオリジン

いくつものフュージョンアップで戦ってきたオーブの本来オリジンの姿。聖劍オーブカリバーで用いて、その数々の悪を打ち倒していく。

「いけーオーブ！」

「いっけー!!」

劍を携えて歩んでいくオーブ。吐き出された火球を聖劍オーブカリバーで斬る姿はまさしく勇者。2発、3発と斬り落とし、地面を蹴つて加速する。

「なんで……!?!」

今までの攻撃がいつも簡単に撃ち落とされたことに狼狽えるスピカ。その隙を突かれ、重く鋭利なオーブカリバーの攻撃が繰り返される。

攻撃が効いた証に、ゼツパンドンの声が漏れ、斬りつけた部分から火花が飛び散った。覚醒したからか、攻撃が効いたからなのか、動揺してしまい動きが単調になったその攻撃をよけ、柄頭を使って打撃を与える。

「スピカ……いいや珠冬！ 本当に和哉を殺したのが、ウルトラマンだと思っているのか!?!」

上段から斬りつけられた劍を腕で防ぐ彼女に、オーブは問いかける。

「何度も……何度も言わせないで!!! ……オーブが兄さんを殺したの!!? あなたも見て

「いたでしょ!？」

思い出したくもない過去を掘り返し、声を荒げるスピカ。対してオーブ^真は落ち着いた表情で、その記憶を否定する。

「いいや、それは違う。和哉が死んだのは……オーブのせいなんかじゃない。俺たちはマガゼットンに襲われて……そして……和哉が……俺たちを庇ってくれたんだ!」

涙が溢れそうになるのを必死にこらえ、一眞はゼツパンドンを見据える。

すると、スピカの脳内にノイズが走る。彼の言葉によって、上から塗られた色が剥げて落ちていくように、断片的な記憶が顔を覗かせる。

「ちがっ……!!? 違う……そんな……私の……うあああああああああ!!?!?!?」

右足から放たれた蹴りでゼツパンドンを後退させると、オーブカリバーの中心部[!]にあるホイールを回転。

土のエレメントを選びその力を解放させる。

「オーブブランドカリバーツ!!」

剣を地面に突き刺した場所から、二条の光線を撃ちだした。

「……!!? ゼツパンドンシールド……!」

これまでいくつもの光線を防いできた無敵の守り。しかし、弧を描いて地を這う光線の前に、遂に敗れた。巨大な爆発が起き、苦悶の音が響く。

(今は無理だとしても、必ずお前を救い出す!!)

『解き放て！ オープの力!!』

それでも今は倒さなくてはいけない。これ以上の被害が出る前に。

——必ず救い出すと、彼女と自分の心に誓って。

オーブカリバーの火、水、土、風のエレメントを全開放。そしてオーブ自身の持つ光と闇の力を掛け合わせた究極スプリムの技を発動させた。空に描かれた輪が二重、三重となって剣に収束する光景は、あのマガゼットンとの戦いを想起させる。

様々な思いを乗せた光線を、一眞は潰れんばかりの音量で叫んだ。

「オーブスプリム……カリバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

虹色の光線を浴びたゼツパンドンは、巨大な爆発と共に敗れ去ったのだった。

「予想外というか、幸いというか……まあいいさ。君の力の一部、僕が少しいただくよ」

ゼツパンドンが爆発した場所にアオボシは立つと、スピカからふんだくってきたであろうダークリングを翳す。彼がダークリングで採取していたのは土のエレメント。その残留した光だった。

ダークリングの中心で輝く黄色の光を見つめたアオボシは不敵に笑った。

くく

「カズくん……」

「ただいま」

彼の帰りを待っていた2人に、一真はそう答える。ただ一言。しかしそこにはたくさんの想いが詰まっていた。

「うん、おかえり！」

曜が笑顔でそう語りかけると、3人で笑い合う。すると、遠くから——おおーいと、呼びかける声が聞こえた。

「まったく心配しましたわよ。千歌さんはまた病院を抜け出して……」

「でも無事だったからいいじゃん？　ね、鞠莉」

「果南の言うとおりよ、まったくダイヤはお堅いんだから。名前に負けず、硬度10デー

ス!!」

「鞠莉さんっ!?!」

他のAqoursメンバーが駆けつけてくれたのだ。その相変わらずの賑やかさに、笑いがこぼれてしまう。しかし、一眞はケジメとしてみんなに声をかけた。

「俺、これからもみんなに迷惑かけるかもだけど、Aqoursのマナージャーとしてやっていきたい。だから……」

「わかっていますわ。さて、今日は練習をしますわよ!! 一眞さんも、マナージャーとしてのサポート、よろしくお願いしますわ!」

ダイヤを筆頭に、果南や鞠莉、花丸やルビィ、善子……そして梨子も言葉にはせずとも目で教えてくれた。変わらずにマナージャーでいて欲しいと。

そして後ろの千歌と曜も、首を縦に振る。

「……はい!!」

力強くそしてはつきりと、一眞は返事をした。

あれから数日。千歌も無事退院し、ラブライブに向けての練習を再開することができた。

一真は防波堤に座り海を眺める。そして、右手にはラムネの瓶を持っていた。

プシュツと炭酸が抜ける音共に、ビー玉が落ちる。

「……成功した」

以前……3年前にもラムネを飲んだ時は派手に失敗し、溢れ出てきたしまったことを思い出す。その時は和哉や珠冬に笑われた。しかしその後には和哉は

「まあまあ、次は成功するって!」

「ああ。次は成功したよ和哉……」

懐かしむように呟くと、ラムネを勢いよく飲んでいく。口を離し、ふうと一息。

頬を撫でる風、心地の良い波の音。その光景を見て、一真は天を仰ぐ。

(俺はこの星を守っていくよ。ここで命が続いていく限り……な)

一真を呼んだ声が、波の音共に聞こえた気がした。

第31話 センチメンタルヨーソロー

学生は休みを謳歌し、あるいは課題の多さに声を上げ、あるいは大会で歓喜の声を上げ、または悔しさの涙を流すこの夏。それはスクールアイドルも例外ではなく、大イベントの開催も秒読みになっていた。

ラブライブ

スクールアイドルの甲子園とも呼ばれる全国大会だ。Aqoursもその目的はラブライブで優勝し、浦の星を廃校から救うため……。その予備予選がついに始まるうとしている。

だがそんな中、梨子からあることが告げられた。

ピアノコンクールの出場だ。偶然にも、予備予選とコンクールの日程が重なってしまふという事態になってしまったわけだが、みんな……一眞を含めたAqoursのメンバーは梨子を送り出すことに決めたのだった。

弾くことができなかったピアノを、いままでのスクールアイドル活動を通じて梨子が何か答えを得たのなら、それを送り出す。そのことになんら反論はない。むしろ、彼女が再びピアノを弾こうと自らの意志で決めたのだからそれを止める理由など、どこにも

ない。

千歌が、ラブライブとコンクールのどちらかを選ばなければいけない梨子の背中を押したのだ。

「しっかりね」

「お互いに！」

沼津駅のホームで、千歌と梨子は互いに手を握り合い励まし合う。そこにはくつきりとは見えないながらも、強い信頼を感じとることができる。

「梨子ちゃん、頑張ルビィ！」

「東京に負けてはダメですわよ！」

東京に負けるとは何なのかはわからないが、ダイヤなりの激励なのだろうと一真はひとり納得していると時刻表を見た曜が、時間だと教えてくれた。

「チャオ、梨子」

「気を付けて」

「ファイトずら」

鞠莉や果南、花丸も別の地で輝こうとする彼女にエールを送る。

「頑張れよ」

「うん、一真くんも」

マネージャーとしてか、それともウルトラマンとしてか……おそらく両方だろう。互いに受け取った言葉に、どちらも笑い返す。

キャリアバックを引きながら改札を抜けてホームへと向かう梨子の姿に、千歌はもう一度

「梨子ちゃん、次は、次のステージは絶対みんなで歌おうね!」

次こそはみんなで。その約束を胸に、梨子は走っていく。東京へと向かう梨子には、不安な表情など微塵も見られなかった。

「さ、私たちも帰って練習しますわよ」

「これで予備予選には負けるわけにはいかなかったね」

「なんか気合が入りマース!」

ピアノが弾けなくなった過去と向きあおうとする梨子に感化されたのか、一層練習に熱が入るだろうと一真は確信すると同時にこちらにも気合が入る。

「ね、千歌ちゃん!」

しかし曜の言葉に帰ってくる声は無かった。

不思議に思つて曜が振り返つた目線の先……そこには改札の先を見据えて佇む、千歌の姿があるだけ。それを見た曜はただ友人の名前を呟く。それしかできなかつた。

「……？」

視界の端に捉えてしまった一真も疑問に感じたが、その時は別段気にはしていなかつた。

くく

「特・訓！ ですわっ!!」

部室にまたもや聞いたワードが響き渡つた。予備予選では負けることはできない。そんな熱意故の呼びかけなのだろうが、誰も相手にしない。またか……と呆れた目を送るだけとなつてしまつていたのだった。

「また……？」

「本当に好きずら」

目だけと思えば口にも出してしまった。ある意味冷たいその空間で、一眞は苦笑いをするしかない。

すると、パソコンで何かを調べていたルビイが突然声を上げ、それにつられた全員の視線が彼女へと向けられる。

「これって……Saint Snow」

画面には、以前東京であったSaint Snowのライブ映像が映し出されていた。た。

「先に行われた北海道予選をトップで通過したって……！」

「へえ、これが千歌たちが東京で会ったって言う」

興味ありげに呟いたのは果南だったが、映像に映されている圧倒的なパフォーマンスはここにいる全員の目を引いていた。おそらく……いや、絶対東京のライブの後に猛特訓をしたのだろう。

「頑張ってたんだな……」

「……うん」

一眞と千歌はどこか嬉し気であった。遠い地で、同じトコロを目指している事が、とても嬉しく、燃えたのだろう。そして、あわよくば同じステージで……

「気持ちはわかるけど、今は目の前のことに集中しない？」

「果南にしては随分堅実ね」

「誰かさんのおかげで、いろいろ勉強したからね」

釘をさす果南を鞠莉はからかってみる。しかし、果南も鞠莉へと軽口をたたいている。思い出したくもないことから、軽口にできるくらいの出来事……ぐらいにはなったようだ。すると、「では！ それを踏まえて……」とダイヤが何かを提案してくる。

「なんで……こうなるの!!」

それはプール清掃だった。いったい何を踏まえてプール清掃なのだろうか。全員（ダイヤを除く）でデッキブラシでプールを入念に掃除していく。とは言っても不満しかないのだが。

「文句を言っていないでしっかり磨くのですわ!」

「で、でも足元がヌルヌルして……」

「ずら……!!?」

脚を滑らせ、ルビィと花丸は盛大に転んでしまう。

「気を付けろよ」

ブラシをこすりながら一真は2人に声をかけた。

にしてもここまで清掃していなかったのかと不思議に思った一眞。しかし、以前のマガジャツパの騒動もこれに関与しているのだらうと、改めて魔王獣の脅威を感じていた。

「これで特訓になるの？」

千歌の指摘の通り、プールサイドのホワイトボードにご丁寧に“特訓”と書かれている。そうか、この滑る状況でいかにバランスをとれるかが特訓なのだなど一眞は呑み込もうとする。しかし結局——あれ、なら俺要らなくね？ となってしまうので深く考えないようにした。

「ダイヤがプール掃除の手配を忘れていただけね」

「忘れていたのは鞠莉さんでしょ!？」

「言ったよ？ 夏休みの間に何とかしろって」

「だから何とかしてるじゃないですか!？」

「へえ、何とかね?？」

——ちよつと待ってください、それって特訓と称して掃除してるだけじゃないですか! と声を上げそうになるが、鞠莉とダイヤの言い合いには割り込めそうにもない。

「生徒会長と理事長があんなので大丈夫なの?？」

「あたしもそう思う」

善子や果南の懸念の声が背後から聞こえてきたが、肯定も否定もしたくない微妙な感覚に駆られる。

「でも約束したもんね。生徒会長の仕事は手伝うって」

そういやしてたな〜と思いにふける間もなく、背後から曜の声。

「デツキブラシと言えば甲板磨き！ ……となればコレです!!」

曜はセーラー服……のもとになった海軍兵士の制服を着こなし、元気よく敬礼。まではよかったが、バランスを崩したようで勢いよく尻もちをついてしまう。

一体どこからその制服を持ってきたのか……なんて聞きたかったが

「その恰好はなんですかの!?! 遊んでいる場合ではない——」

ダイヤのお説教が聞こえてくる中、曜と千歌は笑い合う。

「……………」

笑い合っていたのだが……どうも、なにか壁があるような不安さを感じてしまう一眞だった。

どうにかこうにか、プールを掃除し終えることができた。青い床と残った水が空を映し出し、まるで空の上に立っているかのような……そんな綺麗さだった。

「そうだ、ここでダンス練習してみない？」

「Funny! 面白そう!!」

「滑って怪我しないでよ?」

果南の唐突な提案だったが、着替えたりして屋上に行く時間も惜しい。このような訳あつてかみんな乗り気だった。

が、ダイヤの言つた通り怪我だけには気を付けて欲しい。ここでやらかして出場できないとは笑えない。むしろ最悪だ。

それぞれの位置について、ポーズをとる。そこで千歌、および前方のプールサイドに腰掛けた一眞は違和感を覚える。

「……………ん?」

「……………あれ……………?」

「そつか、梨子ちゃんがいらないんだよね」

「そうなるよ、今の形はちよつと見栄えはよろしくないかもしれないかもしれませんがね」

ダンスを見てくれる果南、そしてダイヤがその違和感を言語化してくれた。そう、本来は梨子と千歌のダブルセンターとして想定されたフォーメーションだったが、今は梨

子がないことで見栄えが悪くなってしまったのだ。

「変えるすら？」

「それとも梨子のポジションに誰か代わりに入るか……」

「そうだな……だとすると……」

果南とともに一真も思考を巡らす。千歌とともにセンターに立つには、彼女とも付き合いが長くて即座に合わせられる人材が適任だろう……となると……

一真が続いて視線が1人、また1人と集まっていく。

「ん？ ……え？ ……ん？」

千歌も信頼の力強い眼差しを向けている。

「え……私っ!？」

曜はその向けた視線に驚きながら自身を指さすのだった。

「うああ……」

「まただ……」

千歌と曜、2人のパフォーマンスの練習を重点的に始めていったのだがどうしたものか、なかなか息が合わないのである。

「これで10回目ですわ……」

「曜ちゃんなら合うと思っただけだな」

回数を重ねてもなお合わない。パフォーマンスに不安と困惑がよぎる。

「私が悪いの。いつも同じところで遅れちゃって……」

「違うよ。私が曜ちゃんに歩幅合わせられなくて……」

一眞は2人の様子を見て疑問、懸念を抱いてしまう。千歌と曜……2人の間に見えない壁があるような、妙に気を使い合っているようなところが気がかりだったのだ。

くく

「何見てるずらか？」

「花丸？ いや、ただこの記事が気になってな」

コンビニでみかんアイスを啜る花丸が横で聞いてくる。一眞は携帯の画面を見せて、その記事の詳細を説明していく。それはどうも内浦の石碑が関係する記事だった。

「この石碑にお願いするとな、なんか友人と仲直りできるとか、友情が続くとか、自分を

助けてくれる人が現れるとか……いろんな言い伝えのある石碑があるんだってさ」

「それルビイも聞いたことあります！ 『想い石』ですよね？」

「それ、ここらじや有名な話すら」

どうやら内浦では長くから知られているようであり、ルビイも知っているようだった。

「みんな知ってるのか……でも俺はそういう話には聞かなかったけどな」

「一時期話題になっただけですからね。一真さんが知らなくても無理ないです」

「ん〜そうか……」

3年もいたのに知らなかったことにシヨックを受けた一真は唇を尖らせていると、レジの方から「墮天のD……」と善子の崩れ落ちる声が聞こえてくる……がそれよりも3人の話題はコンビニの外で練習を続けている千歌と曜に移る。

結局、練習時間中には合わせる事ができずに今もやっているのだ。

「2人でやつてもらった方が気兼ねなくていいと思っただけ……そろそろ見に行くかな」

そうして一真は店内に設けられた椅子から立ち、外へと向かう。どうやら外も日が落ちかけている。いくら何でも休憩させなければ、明日にも響く。

「どうだ？」

「カズくん……もうちょつとなんだけど、私が梨子ちゃんと練習してた時の歩幅で歩いてちやつて」

「成程な。でも、そろそろ休憩した方がいい。いくらなんでも続け過ぎだ」

「じゃあ、あと……1回。1回だけ、いいでしょ?」

手を合わせて懇願してくる千歌に、一眞はため息を吐いて1回だけと釘を刺して続行させる。こうなったら千歌は何言っても曲げないことを知っているからだ。

「千歌ちゃん、もう一度梨子ちゃんと練習したとおりにやってみて?」

曜の切り出してきた提案に、千歌は戸惑う。それは梨子と合わせるためのものであつて曜と合わせるものではない。だからこそ、今まで失敗してきたのだから。

「いいからいいから」

しかし曜は千歌を丸め込み、再び立ち位置につく。

一眞がカウントを数え始め2人が移動していく。……するとどうだろう。先ほどまでぶつかってしまっていた箇所が成功し、綺麗に並び立つことができたのだ。その姿に、後ろで見ていた1年生たちも喜びの声を上げる。

ようやくの成功に喜んでいると携帯の着信音が鳴り響く。千歌が電話に出ると、相手は梨子からだった。

「あ、ちよつと待つてみんなに代わるから」

千歌は自分の携帯を花丸に差し出す。

「あ……え、えくと……もすもす?」

『もしもし、花丸ちゃん?』

「未来ずら〜!」

さつき携帯見てただろという一眞のツツコミと共に善子も口をはさむが、梨子の呼びかけに

「別のリトルデーモンと代わります!」

ルビィに押し付けてしまう。出てやれよ、梨子が可哀想だろ……と一眞は内心思いながら見ている。代わったルビィも梨子の探るような“もしもし”にビビったのか「ピギイイイイイツツ!」と声を上げて木の裏に隠れてしまった。

「曜ちゃん、梨子ちゃんに話しておくこと、ない?」

「……うん」

曜が力なく答えるのと同時に、千歌の携帯からバッテリーの残量を知らせる警告音が鳴り響く。そのことに残念がっている千歌だったが、曜はそれとはまた別の悩みを感じていた。

「じゃあ曜ちゃん、私たちももう少しだけ頑張ろっか!」

「……うん、そうだね！」

梨子との電話によってやる気を出した千歌の呼びかけ……。

曜の持ったビニール袋に、みかんアイスが勢いよく落ちる音が響いた。

「曜、どうした？」

「え？」

帰り道、一真は曜に話しかけた。今日の一連のことが気がかりで仕方なかったのだ。こんなことはお節介であるとはわかっていながらも、2人の間にできた壁のようなものがどうしても気になってしまうのだ。

(俺もリゲルとのことを気にしてるから……ってことか)

「何か悩みがあるなら話聞く……って俺が言うのもだけど」

「……うんうん、何にもないよ。大丈夫！ カズくんも早く帰りな、じゃあね!!」

曜は手を振るとすぐさま走りだしていつてしまった。強引に丸められたような気もするが、あの調子の曜では話してくれないだろう。

「はあ……どうしたものか……」

「どうやらのお困りのようデスネ〜?」

背後からかけられた声になんとなく反応してしまう一真。しかし数秒後、その正体に驚愕する。

「ええ、これが結構……って鞠莉さん!?!」

「フフフツ、チャオ〜!」

生徒会室で仕事を片付けていた筈の3年生。そんな彼女も、曜のことを追いかけてきたのだそう。恐らく、似たような目的で。

「ここはマリーに任せて。Girls talkの方が本音で語り合えるつてもものよ?」

「ハハハツ、そうみたいですね。なら、ここは鞠莉さんに任せます」

「ええ」

鞠莉に任せた一真は踵を返そうとする。そこで自身のポケットが震えた。

「……ん? 電話か」

着信が来ているようで、一真はズボンのポケットから電話を取る。

「もしもし……ああ、どうした? ……ああ、気付いちやったか。……うん、実はそうなんだ」

く

「千歌ちゃんど？」

「はい！ 上手くいつてなかつたでしょ〜？」

展望台から海の景色を見ている曜に、鞠莉は問いかけた。昼間の練習、そして生徒会室で見た部の申請書で確信に変わったのだろう。千歌と曜の間に何かあると。

「大丈夫だよ、あの後上手くいった——」

「いいえ、ダンスではなく……千歌っちを梨子に梨子に取られてちよっぴり、嫉妬ファイヤ〜〜〜〜〜が燃え上がってたんじやないの？」

ズバリ単刀直入に鞠莉は問いかけた。今曜が抱いているその気持ちは嫉妬なのかと。しかし曜は誤魔化そうとしていくが、両頬を引っ張られてしまう。

「ここはぶつちやけトークをする場ですよ？」

鞠莉は設けられた椅子に座ると、優しい眼差しで続ける。

「話して？ 千歌っちや梨子、それにカズマにも話せないでしょ？」

「私ね、昔から千歌ちゃんと何かやりたいなあってずっと思ってたんだけど……」

曜が語ったのは、千歌と何かやりたかったということ。中学生の時も水泳部に入部した曜、やりたいことが見つからなかった千歌……となつて“一緒に何かをする”ことが出来ないもどかしさを感じていたということ。

「だから、千歌ちゃんが一緒にスクールアイドルやりたいって言ってくれた時は凄く嬉しくて……」

これでやっと一緒に何かできると思っていた。それでも梨子が入り、一真が入り……気付いたら10人となっていた。それで彼女は考えてしまったのだ。

「ちかちゃん……私と2人つきりは嫌なのかなって」

「Why、なぜ？」

彼女が抱いていたのは嫉妬などではなく、千歌は自身を嫌っているのではないかという不安だったのだ。

曜はもともと要領がいいと言われていた。さっきのダンスだって梨子に合わせずもう千歌のために、曜がその動きを真似たことよって成功したのだ。

そつなくこなせる自分とやるのは、やりにくいのではないかと。

「痛っ!？」

自身の気持ちに押しつぶされそうな曜の頭に、鞠莉はチョップをした。その後も、勝手に決めつけるなど頬を弄ってきたりする。

「千歌つちのことが大好きなら、本音でぶつかった方がいいよ」

それが、鞠莉ができるアドバイスだった。心を許した友人だからこそ、自身の気持ちを正直に包み隠さず伝えるべきだと。

「大好きな友達に本音を言わず、2年間を無駄にしてしまった私が言うんだから、間違いないありません」

鞠莉は自分の反省を活かして曜に言ったのだ。その暗い過去を笑いながら語る鞠莉に曜は元気づけられた。

「本音か……」

鞠莉と別れた帰り道に、曜はその言葉の意味を考えていた。本音……それを伝えるのは簡単なようでいて難しいもの。伝えることで嫌われないだろうか、拒絶されないだろうかという不安などが邪魔をし、なかなか言えなくなってしまうのだ。

「はあ……あれ、考えてたら変な道来ちゃった」

考えすぎた結果だろう。曜はいつもの帰り道からはずれた道を歩いていたのだ。「やつちやった……もう、早く帰らないと……って、あれ？」

視線を動かすと、道の片隅には石碑が置いてあった。文字が書かれているようだが、古いのか読めない。さらにその前には手紙やお供え品のようなものが置かれている。

「これって想い石……？」

友情にまつわる言い伝えがあるその石碑のことは曜も知っていた。しかし自身がその現物を目の前にしていることに、驚きが隠せなかつたのだ。

「私もお祈りすれば、千歌ちゃんと……ううん、ダメ！ 私がちゃんと本音を伝えなくちゃいけないんだから!!」

祈るべきかと悩んだ自分に言い聞かせるようにして、曜は走り去ってしまった。

曜が走り去った後、想い石から紫色の“邪気”ともいうべきエネルギーが怪しく立ち昇っていく姿は誰の目にも入ることは無かった。

第32話 友情に潜む鬼

翌日。熱い日射しが照り付ける中、曜は浦の星へと向かつていた。

昨日の鞠莉との会話で“本音をぶつける”とアドバイスを貰ったものの、それが実際にできるかどうかは本人が一番不安に感じていた。そのせいもあつてか、想い石のことは気に留めるどころか、すっかり忘れてしまっていた。

「おはよー！」

不安な表情を見せないように、いつもの調子で部室の扉を開けると曜以外の全員が揃っていた。

「曜ちゃん！ 見てみてコレ！」

嬉しさのあまり興奮しているのか、千歌は曜に右腕を見せる。するとそこにはオレンジ色のシユシユを付けていたのだ。“みんなへのお礼”として梨子が送ってきてくれたものだとか千歌は説明する。

「梨子ちゃんもこれ付けてコンクール出るって。はい、曜ちゃんのもあるよー！」

そこでまた彼女の不安が疼いてしまう。それと同時に、本音を言おうとしたその決心が揺らぐ。今言ってしまうと、コンディションに悪影響が出るのではないか。千歌との

間に今よりも大きく、厚い壁ができてしまうのではないか。……最後には、彼女が離れていってしまうのではないか。

それを思う曜は、何も言えなくなってしまった。

「そろそろ特訓始めますわよー!」

すると体育館の方からダイヤの声が聞こえてくる。それを聞いた全員が元氣よく部屋を後にしていく。梨子からもらったシユシユでより一層熱が入ったのだろう。

「曜ちゃんも着替え急いでね!」

千歌も部屋を出ていこうとするが、曜のひと声で足を止める。

「……………がんばろうね」

「うん!」

でも、それだけしか伝えることはできなかった。

「これってリストバンドか……」

練習が終わった後、部屋の中で一真は右腕に付けたリストバンドを見上げる。さすがに男子にシユシユというわけにもいかなかったのかリストバンドを作ってくれたのだ。赤や灰色、黒の色はオーブオリジンを想起させ、さらに真ん中には青い色のリング。お

そらくカラータイマーを模したデザインだ。

「梨子もなかなか凝ったもの作るよな〜」

眩くものの、贈り物など貰ったことがないに等しい一真からは嬉しさがにじみ出ていた。

(にしても、曜は心ここにあらずって感じか……)

今日の練習はあまり目立ったミスもなく踊り終えることができた。とはいえ、未だ安心感が無いというのも事実だ。鞠莉とは話したみたいだが、それでも未だに解決には向かっていなさそうだと感じる。

「一真さん、ちよつと……」

すると部室のドアから顔を出した花丸と呼ばれる。

「どうした、花丸？」

「至急見て欲しいものがあるぞら」

真剣……いや恐れているような花丸の表情に一真も息を呑み、花丸と共に図書室へと向かった。

「一真さん、これ見てください！」

図書室に向かうと、そこにはルビイや善子がパソコンの前に立っていた。そして眞が来るや否や、ルビイは彼を引つ張ってパソコンの前まで連れていく。パソコンを覗くと、何やら画面には古文書……太平風土記のデータが映し出されていた。

「これって……」

「昨日の想い石の話、覚えているずらか？」

「ああ、まあな」

昨日、動画で見ていた不思議な石のことだろう。石というよりは石碑に近いが。

「ずら丸、どうやら昨日調べてきたらしいのよ。その石のこと」

落ち着きつつも呆れた様子で善子は話しながら、首を横へと振る。

「あの石……どうやらとんでもないものを封じている石みたいすら」

——むかしむかし、ある所に硬い友情で結ばれた2人の武士がいた。その2人はいかなる戦でも生き残り、武勲を上げていたそうだ。

しかし、ある時に裏切りにあい2人の友情は引き裂かれることになってしまった。自身も裏切られ、処刑されることになった武士。

命を落とした後、彼は自分と親友のような関係を嫉妬し、友人との関係、人々の縁……人という個では生きられない生物の強みを断つ呪いを振りまく怨霊鬼となってしまう

たのだ。

だが絶大な力を持つ法師に封印され、その力で人々の願いを叶えるようになったという。

生前は勇猛な紅蓮の鎧をその身に纏った騎馬武将であることから呼ばれたその名は……

「……紅蓮騎」

想い石に秘められた秘密を読み解いた図書室の空気は、夏とは言えない程の異様な温度となり漂っていた。

「で、でも……今はその力を良いことに使ってるんだからいいじゃないっ！」

震えた声をどうにか誤魔化そうと善子は声を上げるが、残念ながらバレバレである。「ル、ルビイもここまでのもとは知りませんでした……」

「そうだな。でも今は大丈夫にしる、警戒はしとかなないと……」

アオボシ辺りが知ったら、間違いなく利用してくるだろうと一真は予測していた。

その時、暗雲が青い空を覆い隠した。昼間のはずなのに、まるで夜のように暗い。突然のことにキョロキョロと見回すルビィや善子。しかし花丸だけは違った。

「あ、あれ……見るすら……」

花丸が指を指す方向の窓から顔を出す。すると、赤い甲冑を身に纏い、黒の顔当ての上に光る瞳は青く輝いた巨人のような姿が内浦の地面を歩いてきた。否、正しくは歩いてはおらず、彷徨っていると言った方が正しい。実体のない臃気な前身は空気に溶けるよう……それはまさしく亡霊。

「なんだあれ……」

「多分、紅蓮騎すら」

目の前で不気味な唸り声を上げながら彷徨う武者の亡霊。どこかに視線を送るようになり振り向くと、その亡霊はすぐさま消えていく。すると気が付けば、空も数分前と同じように眩しい夏の日差しと青い空に戻っていた。

浦の星に残っていたAqoursのメンバー全員がその武者の姿を目撃しており、曜も例外ではなかった。

く

やばい……そう彼女の本能が叫ぶ。

(見間違いないじゃない……あの亡霊は間違はなく私を見てた……)

曜は先ほどの光景を思い出す。そこには曜に向かつて、青い瞳を向ける赤い甲冑姿の亡霊。間違はなく自分を見ていたという確信があった。

だからこそ、アレを確認せずにはいられなかった。

曜はバスに飛び乗って最寄りのバス停まで着くと、想い石の場所まで全力で駆けていく。

(どうか……どうか……)

別の祈りを胸の中で唱えながら走っていくが、その願いが叶うことは無かった。

「そ、そんな……」

想い石……それ自体が無いのだ。駆け寄って、四つん這いになりながら探すが、そこにはあの大きな石は何処にも無い。まるで元から存在しなかったように。

「なんで……そんな……」

「大した子だよ、君は」

震える声を漏らした曜は、その怪しげな声の方向に視線を向けた。

黒いスーツを纏った男が自分睨^睨んでいたのだ。

「あなた……」

アオボシは彼女の驚愕した顔が気に入ったのか、口角を上げる。

「眠っていた怨霊を目覚めさせるとはね……」

「私が……?」

空を見据えながら話すアオボシとは対照的に、曜は自分が呼び出したという事実^{事実}に動揺を隠せなかった。

「人生って、時には思いもよらないことが起こるんだ。君の心の中にある小さな闇が、あの怨霊を目覚めさせたんだ」

「違う……私はそんなこと——」 「望んでたんだろ、心のどこかで悲劇が起きることを。お前も闇を抱えている」

歩み寄ってくるアオボシに、曜はもしかしたらそうかも知れないと……認めそうになつてしまう。

「勝手なこと言つてんじゃねえよ」

しかし、それは新たな人物の介入で止められた。一真だ。

「誰の心にも闇はある……闇があるから光があるんだ。闇を抱えてない人間に、誰かを……みんなを照らすことはできない」

「……フンツ、まあいいさ。君も再び、現実には打ちのめされるだろうさ、シリウス」

それだけを残すと、アオボシは煙のように消えていくのだった。

「カズくん、どうしよう……私……」

やってしまったという後悔、自分の中に闇があつたという彼の指摘に声が震える。だが、一眞は気にしている様子はない。

「アイツ……良いこと言うんだな、あのなりで」

「……え？」

突然発せられた一眞の言葉に、曜は素っ頓狂な声で返してしまう。

「人生には思いもよらないこと起こるって。なら、曜が本当に望めば未来は変えられる。そういうことなんだと思う」

それは一眞自身が「彼」から教わったことでもあつた。

「それに、曜は2人と話しておかないと」

「2人……？」

曜は分からなかったみたいだが、一眞は悪戯を仕掛けた悪ガキのように笑っていた。

しかし突然、空が暗雲に包まれてしまう。つまり、あの亡霊が再び現れようとしているのだった。

「俺が紅蓮騎をどうにかする。その間に、曜は話し合つとけよ」

都合がいいのか悪いのか、曜の着信音が鳴り響く。すかさず確認すると、そこには梨子からの着信が表示されていた。曜は恐る恐る耳元へと近づける。

『曜ちゃん?』

「梨子ちゃん……どうしたの?」

そこで梨子は一真から練習のことを聞いたらしく、電話をかけてきたということであつた。

くく

沼津の地面を踏んで歩みを進めていく紅蓮騎。その姿はさつきまでとは違い、実態を持つているようだった。その武者はなにやら移動しているある者を狙っているようで、

下を見ながら探している。

「■■■■■■……！」

男女が混ざったような呻き声をあげ、左腰から刀を抜いた紅蓮鬼は道路に向かって振り下ろそうとした。

——しかし、それを2対の光のブーメランが牽制。

さらに数秒後、上空から赤い兜を狙った青く輝く右足が迫ってきた。

(やらせるかよっ……！)

ウルトラマンオーブ ハリケーンスラッシュの技“流星スラッシュキック”は赤い兜に見事命中。紅蓮騎を後退させることに成功した。

『お前には……誰も狙わせない。悲劇なんかも起こさせないッ!!』

オーブスラッガーランスを生成し、紅蓮鬼に向かって構える。対する武者も、刀をぎらつかせ上段へと構えた。かつては、そうやって戦の時も戦っていたのだろう。

両者はほぼ同時に地面を蹴り上げて突進。両者互いの刃が交わり、火花が散っていく。

『私のことは気にしないで、2人でやりやすい形にしてね』

「でも、もう……」

『無理に合わせちゃダメよ？ 曜ちゃんには曜ちゃんらしい動きがあるんだし』

曜の元気なさげな返しに梨子は何かを感じ取ったのだろう。しかし、曜はそうは思えなかつたらしく「そうかな……」と否定的に返してしまふ。

『千歌ちゃんも絶対そう思ってる』

「……そんなこと……ないよ」

千歌だと言えなかつた本音を曜は梨子へと吐露する。千歌の隣は梨子が合っている、千歌は梨子という方が嬉しそうだったし、なにより……梨子のために頑張ると言うっていたから、と。

それは千歌ではなく、梨子だからこそ話せるその本音だった。

梨子はただ、『そんなこと思っていたんだ』とだけ返す。その声はとても穏やかであったが、曜にはそう聞こえなかつたのかもしれない。曜は涙をぬぐい、携帯を耳から離す。次に来る言葉が、怖かったからだ。

『千歌ちゃん、前言ってたんだよ？』

梨子は、以前千歌が話していた“彼女の本音”を曜へと伝えていくのだった。

「■■■■■■■■■■ ツツツ!!」

幾度目かの刃の交差。オーブはランスを振るい、紅蓮鬼は刀を振るう。互いの刃には刃で答える。少しでも体を動かせば、刃が己の体を切り裂くような至近距離から後退。オーブスラッガーシユートを今一度放つ。しかし、紅蓮騎は2対の刃を回避、そして自身の刀で弾き飛ばした。

(この……小細工は効かないってか……!?)

空高くジャンプし、再度オーブスラッガーランスを生成。赤い甲冑の胸元に突き立てる。しかしそれすらも回避した紅蓮の武者。

自分は追撃を受けないように、身体を小さく丸め込ませ地面へと着地。回転の勢いを殺さずに向き直り、すかさずランスを振るった。だがその姿は見当たらない。

そこに放たれた虚を突いた一撃。脇腹に蹴りを入れられたのだ。気を抜いてしまい、底に力強い一撃が加わったことで地面へと倒れこむオーブ。

「■■■■■■■■ ツー！」

自身の腹に突き刺そうと逆手持ちした刀を振り上げてくるが、紙一重で躲すことに成

功。打撃を加えてその場を脱出した。

(刀より槍は間合いがある……なら！)

ランスの石突の近くを持って、まるでマントを振り回すかのように豪快に扱う。刀の間合いに入らず、それでいてランスでの攻撃を狙ったものだ。

しかし、その攻撃も虚しく紅蓮騎にランスを掴まれてしまい。遠くへと飛ばした。

さらには己の刀の刃を光らせる。明らかに挑発をしてきているのだ。

—— 剣を使えと。

(ンの野郎……その挑発、あえて乗ってやるよ！)

《覚醒せよ！ オーブオリジン!!》

オーブカリバーを使い、斬りかかっていくオーブオリジン。

飛び掛かってきた紅蓮騎の上段切りをギリギリで回避。オーブカリバーを飛ばされながらも、紅蓮騎の体に打撃を与えて隙を作っていく。

足を狙った水平切りを宙返りで避けるとともに、オーブカリバーを拾い上げ再度肉薄する。

「ハアアアアアアアッ!!!」

「■■■■■■■■■■ ツツ!!」

鏝迫り合いに持ち込み、両者は互いに睨み合った。

「曜ちゃんっ!」

梨子との通話を終えた曜に声をかけたのは……練習着に身を包んだ千歌であった。

「千歌ちゃん、どうして……?」

あまりのことに理解が追い付かない曜。それもそのはず、ここは沼津。そしてすぐ近くでは紅蓮鬼とオーブが戦っている中、千歌は来たのだから。

「練習しようと思って」

「練習……?」

オウム返しとなった曜に元気よく頷く千歌。さらに彼女は続ける。

「やっぱり、曜ちゃんは自分のステップでダンスしたほうが良い! 合わせるんじゃない、1から作り直したほうが良い!」

「——曜ちゃんと私の2人で!」

梨子との通話で聞かせてくれた、千歌の本心。

曜の誘いをいつも断っていたばかりで、ずっとそれが気になっていたこと。曜と同じように千歌もまた、同じような思いを抱えていたということ。

だからこそ、スクールアイドルだけは絶対に一緒にやると。絶対に曜とやり遂げると……彼女が誓っていたこと。

一緒にできなかった曜。誘いを断ってきてしまった千歌。その2人が共通のものとして出会ったもの。それがスクールアイドルなのだ。

「千歌ちゃん……汗かいてる」

「バス行っちゃった後だったし、美渡ねえも志満ねえも忙しいって言うし……」

「そこまですべて自分のもとに来てくれたのだ。それはなんで？」と聞く前に、千歌が自ら話してくれた。

「曜ちゃんなんか気にしてたっばいから、居ても立ってもいられなくなつて……へへ……」

自分を殴りたくなる。千歌がどのような気持ちでいたのかも知らず、自分は彼女に嫌われているんじゃないかと決めつけていたことに。千歌のことを少しでも疑つてしまった事に……。

「私……バカだ。バカ曜だ……」

「……え？」

そこで曜は、千歌へと今まで抱えていた胸の内を明かした。どう思ってしまったのか、これからはどうしたいのか……。

「それに……あの侍の怨霊を呼び覚ましたのは……私なんだ。私の中に小さな不安が、ちっちゃな闇が……あの怨霊を目覚めさせちゃった……怨霊が狙ってるのは多分……千歌ちゃん。私のせいなの……ほんとに……ごめんね……」

涙があふれていても、曜は千歌の目を見て全てを打ち明ける。話すことで小さな、小さな闇があることを自分も認識したかったから。そして千歌には正直に話しておきたかったから。

「私も……曜ちゃんのこと気付いてあげられなかった。だから、私もバカ千歌だね」

千歌は、街で凄まじい剣戟を繰り返している両者を見つめる。赤と青の光が尾を引いて時にはぶつかり合い、時には空を切る。

千歌は目を瞑り、自分の心に問いかけるようにして言葉を紡いだ。

「それに……もし私が曜ちゃんの立場でも、同じことしちやつてたと思う」

千歌は曜に振り向いて、手を伸ばした。

「だから止めよう？　一緒に」

少しだけ首をかしげる紅蓮騎に、曜は続ける。

「あなたが眠っていた場所に、たくさんのお供え品や手紙があつたでしょ？ 千歌ちゃんを傷つけようとしているのもあなただけけど、誰かの願いを叶えて祝福していたのもあなたなんだよ！ どっちの自分が良かったか、幸せだったか考えてみて……！」

その言葉を聞いた紅蓮騎は戸惑う。かつて裏切られて怨霊となった自分を頼り、そしてありがとうと感謝の言葉をくれた人々。それは想い石となつて封印されていた時でも、感謝された顔を、幸せそうな顔を忘れることは無かつた。

「■■■■……ッ!!」

だがそれでも、刀を振り下ろそうとする紅蓮騎に曜は呼びかける。

千歌は何も言わなかつた。隣にいる彼女を信じていたから。

「お願い……自分の気持ちに耳を傾けて！」

自身の気持ちの葛藤からなのか、苦しそうに咆哮を上げる。

「あなたならできるよ……できるからー!!」

曜の声を聞きとつた武者は、オーブの方へと向き直る。そして

刀を地面に突き刺した。

そして腕を広げた。——やってくれと、首を縦に振って。

（あなたは俺のあり得たかもしれない姿だ。だから……だからせめて……安らかに眠ってくれ……！）

『……オーブウオーターカリバー』

オーブカリバーの水のエレメントを解放。紅蓮騎を中心とし水柱が上がり、その体を包み込む。

「……ごめんね」

曜は自分の心の中にある小さな思いで復活させてしまった事を謝罪する。紅蓮騎は曜の方を少しだけ振り向く。何を感じたのか……それはおそらく、曜にしかわからない。

オーブカリバーで一閃するものの、痛みは感じさせない。静かに眠っていくような、洗い流されていくような……そんな優しい一撃。

紅蓮騎の消えていった静かな夕方の空には、虹がかかっていた。

来る予備予選当日。

客席でA q u o u r s の出番を待つ一真はふと、自身が右腕に付けたリストバンドに触れた。例え離れていても、その心はつながっている、常に一緒だと、そう思わせてくれる。

どうして千歌がスクールアイドルを始めようと思ったのか。今ならわかる気がする。彼女の“輝く”というのは1人だけではダメだったのだ。誰かと共に手を取り合い、みんなとともに輝くこと。

曜や梨子や……普通の皆が集まり、1人ではできない大きな輝きを作ること。歌い、そして踊り、学校や観客へと繋がっていき、輝き輪は広がっていく……。それが千歌がスクールアイドルの中で見つけた“輝き”というもの。

披露された曲のダンスが、歌が……遠き地の仲間を想う気持ち伝わってくる。

——
想いよひとつになれ

「まったく……なんだったんだあれ……」

A q o u r s のステージが始まる前、一真はとある出来事に疑問を抱いていた。それは控室に向かうA q o u r s メンバーを見送った後のこと。

「そうだ、カズくん。この前のこと」

「いいよ、別に。逆に俺が助けられちゃったしな。こっちこそありがとう」

曜が話すのは紅蓮騎との戦いのことだろう。あの後、想い石も元の場所に戻ったとの話だ。今も彼は、誰かの願いを叶えているに違いない。

「よしこれで話おわり！ 早く控室に行って準備しないと……うわっ!?!」

一眞は曜の突然の行動に仰天する。

なんと一眞の胸元に曜が飛び込んできたのだ。さらに両腕を一眞の体に回して。

「カズくん……ありがとう！ ……エへへ」

満面の笑みで言われたその時の情景を思い返すと、急に顔が熱くなる。しかし一眞はどうしてこんなにも顔が熱くなったのか、理由は分からなかった。

「いけない、いけない……他のスクールアイドルもチェックしとかないと」

まもなく始まるというアナウンスに、一眞はステージへと意識を向けた。しかしライブが始まってからも時より、その時のことを思い出しては顔を熱くしていたのだった。

第33話 再来の地

「一体何をやっておるのだ!」

船内に響く怒号。しかしバルタン星人は無言でテンペラー星人の動きを見ている。

「魔王獣を復活させるのに黒き王の力があると出ていったきり、進展も何も聞かされていないぞ! 加えてオーブも着々と力をつけていつてる……!!」

テンペラー星人の不満もごもつともだ。ベリアルのカードを手にしたアオボシはあの後から連絡を絶った。場を引つ掻くだけ引つ掻き、その後はどうなろうと知らない。そんな男である彼に不満の1つや2つも吐きたくなる。加えて地球を守っているオーブ。彼もサンダーブレスター、そしてオリジンと力をつけていつている。

このままでは、倒すのが面倒になるだけだ。

そんな船内をせわしく歩き不満を垂れ流す姿を見ても尚、バルタンの黄色く輝く目からは生物的な感情は見られずにただ怪しく輝いているだけだった。

「そうか……ならばお前が地球に向かえ」

ようやく発せられたその一言を聞いたテンペラー星人は己の脚を止めた。

「……良いのですか？」

「構わん。あの男に任せていても何も報告がない。地球の状態も至って正常……ということとは魔王獣は倒されたとみていいだろう。ここで待っていても時間の無駄だ」

「ならば私がオーブを倒し、この地球を侵略してやる……！」

「……期待しているぞ」

バルタンの無機質な声は、テンペラーの声の後に聞くにはひどく落ち着いているように聞こえた。

くく

蝉の声が嫌という程鳴り響く中、携帯の画面をまじまじと見つめ続けるのは曜とダイヤ果南の3人。他のAqoursメンバーたちも落ち着いてられず、携帯を見たり無暗に動いてみたり……。それもそのはず。何を隠そう、今日が予備予選の結果発表当日なのだから。

ここで落ちれば、廃校を防ぐ手立ても、0を1にすることもできない。それだけの大

きな意味が、この予備予選の結果に詰まっているのだ。

「ちよつと走つてくる!」

果南は結果はが発表されないもどかしさに耐えられず、身体を動かしてくると道路に駆けだそうとする。

「結果が出したら知らせるね〜!」

「いいよ!」

「じゃあ知らなくてもいいのか?」

しかし一眞の問いに足を止め、結局戻ってきてしまう。

花丸は落ち着かないとずっと食べているし、善子は簡易的な魔法陣を作り魔力を集めている。……道を通ったトラックの風でろうそくの火を消されてしまうが。

それは一眞も例外ではなく

「……………」

ずっと同じ道を行ったり来たりを繰り返していた。

「あ、来た!」

そして曜のひと声で全員が画面を凝視し、息を呑む。

「Aqoursのアですわよ、ア!」

しかし、最初に綴られていたグループの名は……

「イーゾーエクスプレス……」

嫌な風が頬を撫でる。

「嘘っ!?!」

「落ちた……」

しかしすぐにエントリー番号順だったことに気が付き、事なきを得る。

そして……

「Oh my God……Oh my God……Oh my God……
!!!!!!!」

「さあ、今朝捕れたばかりの魚だよ!」

部屋には、刺身の船盛りがドドンと置かれていた。

結果、A q o u r s はラブライブ予備予選を見事に突破。そのお祝いとして果南が持つてきてくれたようだ。

「なんでお祝いにお刺身?」

「干物じゃお祝いにならないかなって」

それ以外にもあるのでは? と千歌は言うが横にいる一真も苦笑いで果南を見ているため、同じことを思っているようだ。

「夏みかんとか!」

「パンとか!」

千歌と花丸は相変わらずである。それはひとまず最初の関門を突破できたことに、みんなが安堵している証拠だ。すると、ルビイがパソコンを持って慌てて部屋に入つてくると同時に「見てください!」と動画を全員に見せた。

「予備^あ予選^時のライブ映像か」

一真が言うように、それは『想いよひとつになれ』のライブ映像であった。問題はそこではなくPVの再生回数。それも158,372という数字を記録していた。

「私たちのPVが!」

「凄い再生数!」

千歌と曜はその再生数の多さに嬉しさを爆発させている。しかし、それだけではないとルビイ。

「コメントもたくさんついていて」

—— かわいい

—— 全国出てくるかもね

—— これはダークホース

読み上げたもの以外にも、A q o u r s を称賛するコメントがたくさんついていたのだ。

「暗黒面……」

「それはダークフォース……」

善子の本気が冗談かわからないものに一真は一応ツッコミを入れる。

「やっぱおいしいもの食べると、それをまた最初から——」「花丸、それ以上は言うな」

四次元空間を操る存在に怯える一真が花丸を黙らせている横で曜は笑顔で一言。

「よかった、今度は0じゃなくて」

確かにと一真。0にならなかつた。それは確かに予選突破したからというのものもある。

しかし、彼女たちが諦めずに輝こうとしたからこの結果になったのではないだろうか

……部室にいるみんなを見回しながら思いにふける。

すると、千歌の携帯の着信音が鳴り響く。その相手は……それもなんとなくわかる気がした。

『予選突破、おめでとう』

『ピアノの方は?』

『ちゃんと弾けたよ。探してた曲が……弾けた気がする』

スピーカー越しでも、梨子の想いが伝わってきた。別々の場所でそれぞれが向き合

い、そして想いが繋がったこと。そのことに一真も含めた誰もが喜んでい

「じゃあ次は9人で歌おうよ！ 全員で、ラブライブに!!」

今度は9人で、と曜。千歌の“輝く”ということはみんなで輝くということ。だからこそ曜は言っているのだ。

『ええ、9人で』

それは梨子も同じ想いだつたみたいだ。いや、ここにいる全員が同じ想いだ。その証拠に互いが笑い合っている。

「そして、ラブライブで有名になって浦の星を存続させるのですわ!」

「頑張ルビィ!」

廃校の阻止……そうだ、まだ大きな問題が残っている。だけど、この9人なら……と希望を抱ける。今のAqoursにはそれほどの力を感じるのだ。

「これは学校説明会も期待できそうだね?」

「学校説明会?」

果南口からでた言葉に、千歌はクエスチョンマークを浮かべる。しかし、そこで理事長である鞠莉が説明してくれた。

「うん、Septemberに行くことにしたの」

「きつと今回の予備予選で、学校名も知れ渡ったはず」

「そうね」

ダイヤも期待できると感じているようで、鞠莉はスマホを使って確認を始める。

「PVの閲覧数からすると、説明会参加希望の数も……」

しかしそこまでで鞠莉は言葉を失い、口を開けたまま固まる。

「Zero……」

「え？」

耳を疑うような数字。しかし変わりないと鞠莉は伝える。

「Zero……だね」

「そんな……」

「嘘……嘘でしょっ!?!」

鞠莉の告げた現在の結果に、ルビィやダイヤも動揺を隠せなかった。

「1人もいないってこと……?」

曜の言葉に、何度目かの厳しい現実を直視するしかない和一眞は壁にもたれ掛かるのだった。

「はあ……」

場所は変わり果南のダイビングショップ。かき氷を突きながら、先ほどの結果を思い返す。

「また0かあ……」

「入学希望となると、別なのかな……」

「でもあれだけPVは再生されてるんだよ？ それに帰りだつて……」

千歌と曜、そして一真は予備予選の帰りを思い出す。果南がサインを求められ、曜が写真を一緒に撮り、ルビイも写真を求められた。ダイヤさんがなぜかどちら様扱いだったのが気になるが……それでもAqoursは大勢に知れ渡っていると確認するには十分な出来事だった。

「でも、sはこの時期には廃校を阻止してたんだよね」

曜が言っている通り、当時の音ノ木坂は、夏休み前にはほぼ廃校を回避していたと言っても過言ではなかった。

「PVが見られたとしても——」「カズくん、行儀悪いよ」

スプーンストローを口に咥えたままの一真を曜が叱ると、彼は咥えたスプーンストローを取る。

「……」でやっていくのは難しいのかもな」

「私もカズと同意見かな」

すると、海から上がってきた果南がテラスに加わると同時に、ダイビングスーツを脱いだ。別に知れた仲だから遠慮は無いという事だが、一真は顔を背ける。果南のこともあるが、隣にいる曜が睨んでいるからというのもある。とうるかそつちの方が怖い。

「東京みたいにはつといても人が集まるところじゃないんだよ、ここは」

「でも、それを言い訳にしちゃダメだと思う」

人が集まらないからとか、東京とは違うからとか、それで諦める理由にはならないと千歌は言う。

するとかき氷をいき食いし、もう少し一人で考えると行って千歌は駆け出した。その後どうなったかは言うまでもない。

「スクールアイドルの違いって……なんだろうな」

一真は部屋でベッドに横になり考えていた。

普通の人々が集まって、大きな輝きを生む。わかつてはいるが、これまでのスクール

アイドル……特にμ sやA—RISEはどうしてそこまで大きくなったのだろうか、何が違うのか……よくわからなかった。しかし、それが技術面のことではないと……ぼんやりとはわかるが。

「カズくん、東京に行くよ!!」

「うわあ!?! ……いてて、東京?」

「うん!」

勢いよく開けられた襖と千歌の大声にびっくりした一真はベッドから転げ落ちるが、それよりも後に発せられた言葉の方が一真に大きなインパクトを残した。

μ sとAqoursの違い、どうして音ノ木坂を救えたのか、何が凄かったのか……この目で確かめ、考えたいと千歌はみんなにも伝えたそうだ。

「そういうことね。俺も行きたい。行って知りたい」

東京。あの時……スクールアイドルという現実には、マガオロチに、己の力の無さ、そして闇に負けた地。覚悟として、はじめとして一真も行きたいと千歌の提案に了承したのだった。

くく

「みなさん、心をしつかり！ 負けてはなりませんわ！ 東京に呑まれないよう——

——「ダイヤさん大丈夫だよ、襲つてきたりしないから」

ダイヤの警戒心に千歌は声をかけて落ち着かせようとする。しかし

「あなたはわかつていないのですわ！」

また何やら捲し立てている。いったい、彼女に何があつたというのか。

「お姉ちゃん、小さいころ東京で迷子になつたらしくて……」

「慣れてないとそういう事もあるよな……だけど負けるってなんだよ？」

一真もルビイの話に頷き、疑問も抱きながら答える。

「トラウシだね」

「トラウマね」

恐ろしくはやい善子訂正。それはさておき、曜は梨子を探しているがその姿が見当たらないという。待ち合わせ場所はあつてしていると千歌は不思議がつている。するとコインロッカーに紙袋を押し込めている梨子の姿を発見した千歌が声をかけるが、どうも梨

子はバツの悪い顔をしている。

「なに入れてるの?」

「えええくと、お土産とか、お土産とか、お土産とか……」

最後の方もろ声が震えていて怪しかったが、千歌はお土産の言葉を聞いた瞬間構わず駆け寄っていく。すると梨子は袋を落としてしまった。

いつもの梨子からは想像がつかないようなトンデモ悲鳴を上げる。

「なに……わあ、見えないよ!?!」

「どうした梨子……ん、カベ——」 「なんでもないから!!」

屈んで調べようとした千歌の目を塞ぎ、近づいた一眞を止める梨子。

「あ、はい……」

何かを察した一眞は大人しく下がるのだった。

「とは言っても、まずどこに行く?」

ロッカーにしまったようで全員の準備が整ったところで、次はどこに行くのかという話題に移る。μ'sの関わった地とはいえ、具体的な事は挙がっていなかった。

「Tower、Tree、Hills?」

「遊びに来たんじゃありませんわ」

確かにダイヤの言う通りだが、迷うのが……なんていえば絞められるだろうと一眞は口に出すのを堪えた。

「まずは神社。実はね、ある人に話聞きたくてすつごく調べたんだ」

どうやら千歌は考えありのようで、神田明神に行く提案した。

「ある人、誰ずら？」

「それは会ってのお楽しみ。でも話を聞くにはうつつつけの人だよ」

梨子の手の跡が残る千歌が妙に怖い。花丸と共に一眞はも若干体を引いてしまう。そんな中、ダイヤとルビイは何かを期待をしているようで、誰よりも急ぎ足で神社へと向かった。

「お久しぶりです」

階段を上った先、そこにはSaint Snowの2人が立っていた。

同じスクールアイドルとしては、うつつつけの人物かもしれない。

「な〜んだ〜」

しかしダイヤとルビイは期待していた人とは違ったみたいで2人揃ってへたり込んでしまう。

「誰だと思ってたの？」

鞠莉の疑問に一真も苦笑いを浮かべるしかない一真だったが、急に空が気になった。「ん、どうしたの?」

「いや別に……ただの勘違いならいいけど」

曜の心配に、一真は首を横に振りながらも空を見上げる。何か来るような、そんな気がしたのだった。

「なんかすごいところですね……」

千歌が言うのも無理はない。移動した先はUTX学院。あのMusとともにスクールアイドルの人気の火付け役となったARRISEが所属していた学校であり、そのカフェスペースなのだから。しかし現在は一般開放もされているといった話を聞いた気がする。

「予備予選突破おめでとうございます」

「Coolなパフォーマンスだったね」

梨子と鞠莉の賞賛よりも、AoursのPVの方が勝っていると聖良は言う。

「でも、決勝では勝ちますけどね」

聖良の宣言は、とても強いものであると感じた。生半可な実力、努力では言えない程

の……。

「私と理亜は、A—RISEを見てスクールアイドルを始めようと思いました。ですから私たちも考えたことはあります。A—RISEとμsの何が違うのか、何が凄いのか」

答えは出たかという千歌の問いに、聖良はいいえと首を振る。だから、ただ勝つしかない。勝って追いついて同じ景色を見るしかない……それが彼女たちが出した答えなのだ。

「……勝ちたいですか？」

千歌はその答えに納得できなかったのだろう。ただ純粹に、勝ちたいかと問う。それには問われた2人も、加えて一眞さえも目を見張る。

「姉様、この子バカ？」

理亜の問いには答えず、聖良はさらに問い返す。勝ちたくなければ何故ライブに出るのかと。

「それは……」

「A—RISEやμsは何故ライブに出場したのです？」

しかし、千歌は答えることはできなかった。

—— 廃校を阻止するため？

—— もう阻止していた筈だ。それにA—R—I—S—Eは関係ない。

—— 勝ちたいから？

—— 強さだけなのだろうか。それもきつと違うと思う。

—— じゃあ、何故？

「そろそろ、今年の決勝大会が発表になります」

考えても答えが見つからない千歌だったが、聖良のひと声で我に返る。

「見に行きませんか？　ここで発表するのが恒例になっているの」

聖良に誘われ、UTXの街頭モニターへと足を運ぶ。

そこにはラブライブ決勝、その開催場所の名前が出ていた。

“アキバドーム”

かつてμ'sがスクールアイドルのすばらしさを伝えたことにより、開催が決定されたステージ。スクールアイドルが大きく羽ばたいていった故の会場。

「本当に、あの会場でやるんだ……」

果南は未だ信じられないようだと言った。だがそれは千歌も同じだった。

「ちよつと、想像できないな……」

以前の東京でのライブに来たときは興奮を感じていた。しかし今は、それが途方もない夢のような話に思える。それは、先ほどの話が胸に残っているからなのかもしれない。

梨子が見回すと千歌だけでなく、一眞を含めた全員が不安のそうな面持ちで見上げていた。

「ねえ、音ノ木坂行ってみない？」

梨子の突然の提案に是認が疑問符を浮かべる。

「いいのか？」

一眞は問いかける。以前東京に来た時も千歌が提案したが、梨子は行きたがらなかったからだ。

「うん、前は私の我儘で迷惑かけちゃったし」

しかしそれは、申し訳なさや罪悪感から渋々行こうと提案したわけではなないということが伝わってくる。

「それに……ピアノ、ちゃんと弾けたからかな」

それがピアノ、そして過去という壁を乗り越えたから言えるのだと千歌は感じ取るこ

とができた。

く

階段を上った先、優しい風が吹きつける音ノ木坂の前にA q o u r sは立っていた。

「ここが、μ sのいた……」

「この学校を……守った……」

「ラブライブに出て……」

「奇跡を成し遂げた……」

憧れた人々が、奇跡を成し遂げた地。その雰囲気は一真にも伝わる。自分の体に鳥肌が立っていくのが、感動で目が開いていくのがわかる。

「あの……」

横からの呼びかけ。それに反応し、全員がほぼ同じタイミングで振り向く。傍から見たら、それは少々気味が悪いかもしれない。するとそこには音ノ木坂の制服を着た生徒が1人、立っていた。

「なにか?」

「……すみません、ちょっと見学してただけで」

「迷惑でしたらすぐに——」「もしかして、スクールアイドルの方ですか?」

「あ、はい。μ'sのこと知りたくて来てみたんですけど」

一真が謝るより先に言い出したということは、おそらくスクールアイドルの人々が来ているのだろうと推測してみると、女子生徒は微笑みながら「そういう人、多いですよ」と。やはり初めてのことではないようだ。

「でも残念ですけど、ここには……何も残ってなくて」

女子生徒が伝えたのはμ'sは音ノ木坂（おのきのさか）に何も残していかなかったということ。自分達のものも、優勝の記念品も、記録も。

モノなんかなくても心は繋がっているから。

「……それでいいだよって」

すると彼女たちの前を小さな女の子が走りきっていく。そして元気よくジャンプ

すると、手すりを伝って滑っていった。

その光景を見た千歌は、何かを得たように微笑むと、音ノ木坂の方へと頭を下げる。ここに来て得るものが、そしてヒントをくれたからだろう。

最後には、全員で頭を下げ「ありがとうございました」と言葉に出して。

くく

再び戻ってきた東京駅。音ノ木坂で得たヒントを胸に、みんなはホームへと向かおうとする。

しかし数秒後、巨大な地響きが駅構内を支配する。その原因が外であるということがわかったのは、駅へと大勢の人々が入ってくる姿を目撃してからだった。

「これは……」

「怪獣……?」

果南の言葉に、自分の気がかりが的中してしまった事に毒づきながら外へと駆け出す。

「フハハハハハッ！ さあ出てこい、ウルトラマンオーブ！！ 出なければ街を破壊し尽くす!!!」

街に立つ青い体の宇宙人。テンペラー星人は腕のハサミから火炎を撃ちだしていき、街を破壊していく。

「カズくん!」

一真が振り向くと、後ろには千歌たちが立っていた。言葉にしないが、その眼からは心配と背中を押す力強い意志が伝わってくる。

「……………行ってくる」

人気のない場所まで走っていくと、一真はオーブリングを空へと掲げた。

《ウルトラマンオーブ バーンマイト》

土煙を巻き上げながらオーブは着地する。

「来たか、ウルトラマンオーブ……」

（これ以上……………ここは破壊せない……………!）

腰を落とした構えを取り、両者は肉薄。力強い両腕のハサミ“クロウハンド”の攻撃

をこちらも腕で防ぎながら隙を探す。

「…………ウオツ…………ラアアア！」

腕にめり込むほどの力を入れられるが、側面に蹴りを一発。後退していくテンペラーへすかさず地面を蹴ってブースト。勢いをつけた右腕に炎のエネルギーを収束。

腕をクロスして防いだテンペラーと、蹴りだした勢いをすべて右腕に集中させるオーブの拮抗。

「フンツ…………！」

が、テンペラーが防ぎ切ったようでその赤い右腕が後ろへと戻されてしまう。彼の顔側面に迫りくる青いハサミ。このまま避けなければ頭をえぐり取っていくだろう。

「…………グ、アアアアアア！」

宙に浮いた足を、地面へと突き刺す勢いで無理やり踏み出す。クロウハンドを避け、側面に右の拳を打ち付けるとともに技名を叫ぶ。

「ストビューム…………カウンタアアアアアアアア!!!」

燃え尽きるほどの高温と爆発がテンペラー星人を襲い、後方へと吹き飛ばす。

「ハア…………ハア…………ハア…………」

一時的に大量のエネルギーを消費したため、息を切れ切れにしながら煙を見つめているオーブ。

爆炎が収まると、腹部を抑えた青い体は尚立ち上がる。

「ほお……なかなかやるではないか」

スツと立ち上がったテンペラー星人は自分は無傷だと両腕を広げる。

（んだと……？）

あの至近距離で強力な技を浴びせたはずなのに、当の本人はダメージを追っているように思えない。

「では、ここから行くぞ！」

テンペラー星人の雰囲気が変わり、重苦しい空気で潰されそうになる。となると、さっきのは様子見だったというのか。それを考える時間がないほど頭上にヤツの腕が振り下ろされていた。

（グツ!? ウウツ……ア、アアア……）

攻撃を避けていくが、すんでのところ躲していくが遂にそのハサミに首を挟まれてしまう。

《ウルトラマンオーブ サンダーブレスター》

サンダーブレスターの怪力で腕を振りほどくと、腹部に何発も砲弾のような力強い拳を打ち付けていく。

「ゼットシウム……光オオオオオ線!!!」

距離をあけ、光と闇の光子熱線を発射させるが背中の黄金マントで防がれてしまい、黒煙が両者の姿を見えなくする。

すると背中のマントを翼として飛行し、オーブの体に突撃。

「ガハッ……!!」

テンペラーは低空飛行でオーブをビルに押し付ける。スピードがついた巨大な肉体がぶつかり、貫通していくことで何棟ものビルが瓦礫と化していく。

『ハリケーンストラッシュ』

速さではサンダーブレスターでは食らいについてはいけないと即座に形態を変え、テンペラーの頭を踏み台に空へと飛びあがる。

「頭を踏みつけおって……!!」

激昂したテンペラーはクロウハンドから電撃を鞭状に変化させオーブへと放つ。オーブスラッガーランスで弾いていくが、疲労とダメージがあるためか隙が生まれていく。終いにはその電撃が体に直撃。なす術無く痺れた体は地面へと墜落。

「ほらどうした！ そんな……ものかつ！」

「ガアアアツ!? ウアアア……!?」

感覚を完全には取り戻せていない故に地面を転がり、何とか鞭状の電撃を避けていくが徐々に避ける回数より当たる回数が増えていく。

(まだ……まだだ……)

オーブは立ち上がり構えるが、もう力が残っていないのは明白でありカラータイマーの点滅と共にフュージョンアツプは解除。オーブオリジンにその姿を変えてしまう。

「その体で何ができるといふのだ？」

勝ち誇ったようにテンペラー星人は笑い声を轟かせ、オーブを見下す。

(それでも……俺が、ここを、この輝きを守らないといけないんだ……い！)

一眞は地面を這いつくばりながらも、テンペラー星人から目を背けることはしなかった。最後まであきらめらるつもりはないと、その顔を下げることとはしなかった。

A q o u r s の面々も、傷ついても尚立ち上がるうとしている彼の姿を見つめる。何もできないが、せめてここで見守ることならと。

「これで最後だ！ ウルトラ兄弟必殺光線!!」

両腕のクロウハンドを合わせて強力なオレンジ色の光線を発射した。これはテンペラー星の科学を集結して編み出した、ウルトラ戦士のみに対して絶大なダメージを与え

るとされる光線であつた。

—— まずい!!

痺れた四肢をどうにかして動かそうとするが、先ほどのダメージが体を蝕んで言うことを聞かない。

オーブの体に直撃——

する直前、空から迫ってきた虹色の光線が相殺したのだ。

「なに……!!?」

それはテンペラー星人はおろか、オーブや東京の人々も驚きに包まれる。

急降下で風を切る音、そして何か燃える音が聞こえてくる。それは高速で全身のパ

ワーを右足に集中させ、強烈な飛び蹴りを撃ち込む故の音だ。

太陽を逆光にした影が次第に大きくなっていく。燃える右足のほかに特徴的なのは、黄色く輝く双眼と頭に生える2本の角。

それはまるでオーブのバーンマイトのような……。

「———シューアツ!!」

強大な衝撃がテンペラー星人の頭部を襲い、地面に倒れ伏す。

攻撃を与えた影はさらに空中で捻りを加え地面へと着地。

銀の身体に入る赤いライン。そして方と胸を覆う水色のアーマー。そして右腕には、先端の水晶が輝く黒い手甲。

「あ、あなたは……?」

「き、貴様は……!?!」

オーブの前に立つ2本角の巨人は、目の前の星人に構えるとともに言い放つ。

「———オレはタイガ。ウルトラマンタイガだ!!」

第34話 勇者と輝き

テンペラー星人とオーブの戦いが始まる数刻前、“この宇宙”へ修行に来たタイガたちトライスクワッド。様々な場所で侵略者を打ち倒していくうちに、タイガは逃走する宇宙人を撃破。そんな時、地球の危機を察知し、彼は2度目となる地球訪問を果たすのだった。

「オレはタイガ。ウルトラマンタイガだ!!」

突如として現れたもう1人のウルトラマン。そんな突然の出来事で静まり返った首都東京で、タイガの力強い声が地面を震わせた。

「あれもウルトラマン、なのかな……?」

「わからないけど、敵対してるようには見えないわね」

ルビィや善子のように、未だわからない巨人の姿に困惑している人も中にはいた。だがその姿から、彼もオーブと同じなのではないかと、希望を捨てず見守る。

「ウルトラマンが増えようと、私が倒してくれる!!」

テンペラー星人は右腕をタイガの方へと向け、明確な敵意を露わにした。

「シユアツ!」

構えたタイガは一直線に走り出し、勢いを乗せた飛び蹴りをお見舞いする。テンペラーからの反撃を確実に往なしていき、顔や胸部に攻撃を繰り返す。絶え間ない攻撃を躲しての殴打の連発。再度飛び上がって、数度体を捻ってから繰り返される飛び蹴り。

軽快な動きから繰り返り出される確実な攻撃。そこにはいくつもの戦いを潜り抜けてきた“光の勇者”の姿があつた。

(す、すごい……あれがウルトラマンの戦い方……)

ウルトラマンとなつてから初めて見るウルトラの先輩の戦い方に、一眞は体に走る痛みを忘れてしまう。

回し蹴りを受けたテンペラー星人は後退すると、クロウハンドからロケット弾を放射状に撃ちだした。

「……ハアツ!」

瞬時に手先から光弾を広範囲に放ち、ロケット弾を相殺。空に展開される数多の爆発。しかしその隙にタイガ目掛け迫ってくるのは火炎弾。そう、この攻撃事態が隙を作る囷だったのだ。

「あ、危ない……」

「ハンドビーム！」

タイガはいち早く気付き、両手を合わせて放つくさび型の破壊光線で応戦した。

威力はすさまじく押し負けそうになるも、身体中から集めたエネルギーで光線の威力を底上げし徐々に火炎弾を打ち消していく。

そしてすべての火炎弾を打ち消すことでダメージを負わせることに成功。爆炎で吹き飛ばす衝撃が伝わる。

するとオーブに駆け寄って肩を貸したタイガは驚愕した。

「なんでオーブがここに!？」

向こうは知っているようだが、こちらは全くの他人。その驚きが何なのか、一真には全く分からなかった。

「いや……別の世界のオーブだな。まだ戦えるか？」

「……ッ、はい！」

「よし、行くぞ！」

何かに納得したタイガに問われたオーブが返す。

そして互いに頷き、並び立つオーブとタイガ。2人のウルトラ戦士はテンペラー星人に再度向かっていく。

攻撃を避けながら、オーブカリバーで水平切りからの勢いをつけた斬り下ろし。タイガも側面へ回り込んで手刀。

タイガとオーブ、即席でありながらも抜群のコンビネーション。

それはタイガがオーブ自分の動きを阻害しないように立ち回っているからだ。一貫は感じていた。恐らく彼はこれまででも、強大な敵と対峙した時には仲間と力を合わせ共に戦ってきたのだろうとそう思わせてくれる。

タイガはテンペラーの右腕を掴むと、全身に力をかき集めて投げ飛ばす。

「ヤツのマントを破壊するんだ！」

「はいー！」

タイガの言葉に、オーブは即座にオーブカリバーを構える。

「オーブウインド……カリバー!!」

風のエレメントの力を解放させると、オーブカリバーの刀身が緑色の風に包まれる。頭上で振るい、より大きな風……さながら竜巻を発生させ、テンペラー星人へと撃ちだす。

地面を挟りながら吹きつけるその新緑の烈風は、青い巨体を包み込み天高く舞い上げた。

《スペシウムゼペリオン》

(喰らえええええ!!)

隙のできた今がチャンスだと即座にフュージョンアップしたオーブはスペリオン光線で、背中のマントを破壊した。これで光線を防ぐことも、そして飛ぶこともできないだろう。

刹那、墜落して上がった土煙の中から雷撃の鞭が2人を襲う。

「ウアアアアア……!?!」

「ガアアアアア……」

ビルを巻き込み倒れ伏す2体の前に、テンペラー星人は姿を現す。姿は変わってないものの、そこにはあふれんばかりの執念と憤怒を滾らせていた。

「このお……ウルトラマンどもがああ……」

当た腕で鞭を振るいもう片方から火炎弾。さらには頭部から毒ガスを噴出。怒り狂った暴虐の舞に2体のウルトラマンはさらなるダメージを受けてしまう。

「テンペラー星人……なんて強さだ」

タイガの父親、そして兄弟子との交戦の歴史があるテンペラー星人。その何百、何万年もの間戦い続けてきた種族の強さは噂に聞く通りだった。

だがそれでも、それでも2人は立ち上がる。

「でも退くつもりはない……だろ？」

タイガは隣で立ち上がるオーブに問いかける。

「はい。それが、ウルトラマンですから」

やっぱり、彼も同じだ。違う世界のウルトラマン……まったくの別人、全くの他人だとしても、その根底にあるもの……誰かを、何かを守りたいとする心は同じなのだ。タイガは確信する。

「オーブ……俺の力だ、受け取れ」

「……え？」

タイガの腕から発せられた赤い光は、オーブのカラータイマーへと向かう。点滅が収まり、赤い点滅は青き輝きに回復すると同時に、オーブリングが輝いていた。

「これって……タイガさんの？」

一真の問いにタイガは無言で頷く。それは、タイガのウルトラフュージョンカードだったのだ。そして彼のカードと共鳴するように、とあるカードが光る。

「これってもしかして……」

「ああ、オレと親父の光だ。今のお前なら使えるはずだ」

ウルトラマンタロウ

ウルトラマンタイガ

フュージョンアツプ

ウルトラマンオーブ ストリウムマイト

頭部に輝く2本の角はタイガのウルトラホーンに近くなり、赤と銀で構成された体、そして蒼銀に輝く胸アーマー。目元もタロウやタイガのような悪を許さない鋭い目つき。

親子の力をその身に宿す勇者の炎。それがウルトラマンオーブ ストリウムマイトなのだ。

「これがタイガさんとタロウさんの力……」

内側から燃えるような……燃えるでは生易しいまさに爆発しそうな感覚。しかしそれが不思議と不快感がなく、むしろ心地いい。そして湧き出てくる勇気が、この体を動かす原動力になる。

「オーブ、こんどこそ一緒にアイツを倒すぞ！」

「はいッ!!」

「シユアッ!!」

シンクロしあつた2人の掛け声とともに地面を蹴りだす。

「何度姿が変わろうが同じこと……オアアッ!」

同時に放たれた拳の殴打に、なす術無く吹き飛ばされる。ふらついた姿勢を立て直そうとしたところに叩きこまれる、炎を宿した2つの回し蹴り。四方八方から高速で攻撃されるテンペラー星人になす術はなかつた。

『ウルトラマンタイガ フォトンアース』

直後、大地と天空の力を宿す金色の鎧を身に纏つた勇者の、さながら重機関車の如く放たれた鉄拳がテンペラーの頭部を抉る。そして続けざまに放たれるドロップキックを受けて、その体を地面へとめり込ませる。

「この……ウルトラ兄弟必殺光線!!」

「オーラム……ストリウウウウウウム!!」

地面に力を入れて放つた金色の奔流は、テンペラー星人の光線を難なく押し切り本体へと衝突。大爆発を起こす。

「まだ……まだだ！ まだ終わらん!!」

「スワローバレット!」

「スワロマイトバレット!!」

十字に組んで放つ金色の連射弾と、燃えるような連射弾の雨がテンペラー星人に大きな隙を作った。

「決めるぞ、オーブ!」

「はい、行きましようツ!!」

通常携帯に戻り、エネルギーと貯めるタイガの体が虹色に輝くと左腕を上、右腕を下に支えとしたポーズで、右手の甲を向けた光線を放つ。

さらにオーブも虹色に輝くと同時に全身から迸る炎を左腕に集約。右腕を上、左腕を下に支えとした構えはタロウのストリウ光線を彷彿とさせるが、その違いは左手の甲を相手に向けている事だ。

「ストリウム……ブラスタアアアアアアアアア!!」

「ブラストリウム……光オオオオオオオオオオ線ツ!!」

虹色の光線と炎を纏った虹色の光子熱線はテンペラー星人へと直撃。強大な爆発と共に、2人のウルトラ戦士と苛烈な戦いを繰り広げた極悪宇宙人は遂に敗れ去ったのだった。

変身を解いた一眞は屋上でタイガの姿を見上げる。

「お前がオーブに変身しているのか」

「……ッ?!? はい！ 俺は暁一眞です!!」

先輩のウルトラマンと対面したことはこれが初めてである一眞は、背筋を伸ばし声を張った。そこには緊張しているという彼の内面が色濃く出ていた。

「一眞か。お前がいれば、この地球も安心だな。だが、この星にはなにかとんでもないことが起きようとしている。気を付けろよ」

「はい！ この星は俺が絶対……」

「ハハッ、気負うのもいいが、お前にも仲間がいるはずだ。ともに助け合う仲間がな」

タイガは一眞の気負いしてしまう性格を見破ったのだろうか、それとも過去の自分の経験なのだろうか。不思議な雰囲気のある彼の言葉は、心に刻み込まれていく。仲間と助け合え……と。

「仲間を守って、必ず勝つんだ……ってこれはゼロからの受け売りなんだけだな」

「またもハハッと笑うタイガにはまるで少年のようなあどけなさも残っている。それでも、一眞はもう一度声を大にして頷いた。」

「オレも他の場所で戦っている仲間と合流しないとな。ここはお前たちに任せた」

「はいっ!!」

そして満足そうに頷くと、タイガは空高く飛び去っていく。

太陽の光が彼の姿を照らす。その姿はさながら赤い星のよう。それは決して一人だけの光ではないと言わんばかりに、眩しく輝いていた。

くく

沼津に向かう電車で揺られる中、夕日を窓から夕陽を見つめる一真。東京に行つたはいいが、*μ* s の何が凄いのか、どこが違うのか……それは結局、はつきりとはわからなかった。それと同時に、あることも。

「もしかして〜」

「さっきのウルトラマンのこと？」

曜や梨子はお見通しだったみたいだ。

「そうだけど、なんでわかるんだよ？」

「勘……かな」

あやふやな答えに気が抜けそうになる。しかし気付いたところには、どうしてそんなことを考えていたのか、2人に話し始めていた。

「初めてだったんだ。オーブ以外のウルトラマンにあったのは。それで一緒に戦て……」

「なにかわかったの？」

梨子は見透かしたような優しい口調で問いかける。

「うん。やつぱり、同じなんだなって。平和だったり、誰かを守りたいって想いは、同じなんだなって。戦ってる時もずっと、ずっと伝わってきたんだ。なら、力を貸してくれるウルトラマンたちも同じ気持ちだって……そう思える」

一真は腰に付けたホルダーを優しく撫でる。

「だからさ……俺もウルトラの先輩たちに恥じないように、みんなを守っていきたくって改めて思ったよ」

一真が笑顔で語るその答えには、今までのような1人で気負おうとするような焦りは

感じられなかった。仲間と共に、一真もまた戦っていくのだと。

「海見ていかない？ みんなで！」

そんな時だった。千歌が突然提案してきたのは。

夏だというのに、海の方から吹きつける風が心地いい。さらに内浦の海とはまた違った景色がそこには広がっていた。ルビィや花丸も感動に声を上げている。

「——私ね、わかった気がする。μ sの何が凄かったのか」

千歌はおもむろに口を開く。

「多分ね、比べたらダメなんだよ。追いかけてちゃダメなんだよ……μ sも、ラブライブも、輝きも」

「どういうこと？」

「さっぱりわかりませんわ」

千歌のたどりに着いた答えに、善子やダイヤは疑問符を浮かべる。一真だって、わかりそうで何かが引つ掛かっている状態だった。

「私は、なんとなくわかる」

「一番になりたいとか、誰かに勝ちたいとか……そうじゃなかったんじゃないかな」

果南に続け、梨子も。

ああ、なるほど……と一真も千歌たちの姿を見て、ようやく答えにたどり着く。

誰かの背中を追うだけでも、誰かと競争し合う事だけでも、頂点に立つことでもない。ただただ……彼女たちは——

「μ、sの凄いとところつて、きつと何もないとところを、何もない場所を……思いつきり走ったことだと思ふ。みんなの夢を叶えるために」

自由に、まっつすぐに……だから飛べたのだと。

「μ、sみたいに輝くつてことは、μ、sの背中を追いかけることじゃない。自由に走ることなんじゃないかな？」

千歌の答えを得たその微笑みに、他のA q o u r sメンバーも笑みを浮かべる。

「全身全霊、なんにも囚われずに。自分達の気持ちに従つて……い！」

自由に、自分たちで決めて、自分たちの脚で走つていく。女神たちから教わつた輝くということ。

「自由に走つたらバラバラになつちやわわない？」

「どこに向かつて走るの？」

「私は0を1にしたい！ あの時のままで終わりたいくない!!」

善子、そして梨子の問いに千歌は答えた。初めからずっと0だった。それを1にする

「ために、今ここから再び走り出していくのだと。」

「それが今、むかいたいところ!!」

円陣を組むAqours。しかし今度は手を重ねるだけではない。人差し指と親指を開いた形を全員で繋げていく。全員で繋げた0を1にするという目標のための、新たな始まり。

「ゼロからイチへ！ 今、全力で輝こう!!」

「Aqours——!!!」

「——サンシャイン
!!!!!!!」

新たな羽ばたき……その始まりの声が、海辺にこだました。

第35話 光は青空へ

「今のところの移動は、もう少し早く」

「善子ちゃんは——」「ヨハネッ！」……フフツ、さらに気持ち急いで！」

「承知、空間移動使います」

地区予選まであと幾日と迫ってきた。屋上でのAqoursの練習にも断然気合が入っている。

ダンス指導の果南も改良点をかなり厳しく突き、皆がその答える。それほどまでに、みんなが本気で向き合っているのだ。

そして休憩の言葉が聞こえるや否や、まるで崩れ落ちるように座り込む。

「水、飲んでけよ」

そう言つて一真はペットボトルを渡していく。ステージに上がるのは彼女たちだが、それ以外の自分にできることをやっつてるのだ。

内浦の海を眺める果南とダイヤそして鞠莉の後ろに、黒いローブを着た善子が横たわる。

「黒い服は止めた方がいいとあれほど……」

「黒は墮天使のアイデンティティ、黒が無くては……生きていけない……」
「死にそうですが？」

ダイヤの忠告を無視してもなお、ローブを着続けるその姿、その心意気にはさすがのダイヤも若干呆れ気味であった。

「だったら水は飲んどけ……!」

通り際に一眞は善子の額にペットボトルを置く。

「はい……」

突然のことにびつくりした善子も、素直に聞き入れてくれたようだ。後ろの3年生は笑っていたが。

「私、夏好きだな。なんか熱くなれる」

「私も!」

ペットボトル越しの太陽は水に溶けたように揺らいでいる。それを見た千歌はそんな言葉を発する。続いて曜。心が燃えるような気持になった千歌は、練習を再開しようと声を上げるが、オーバーワークはも禁物だとダイヤ（果南が言っていたのだが）に止められてしまう。

「これから一番暑い時間だしな。じゃあ、みんなは涼んでくれよ。今日は俺が買って

くる」

「いいの？」

「ああ。毎回善子が負けっぱなしだからな」

「ヨハネ！ それに毎回じゃないわよ!!」

「ほんとずら〜？」

一真は果南の問いに答え、ついでに善子がここのところ連敗記録を更新し続けていることを告げる。それはみんな知っていることなのだが、善子は自分のチヨキが見破られてないと思っているらしい。

「1, 158円です」

「誰か高いやつ買ってやがる……」

一番熱い時間帯は、アイスを食べながら図書室で涼んでいた。もちろん、扇風機も回しているのだが……

「ずら〜」

「ピギィ〜」

「ヨハ〜」

「全然こつちに風来ないんだけど……」

梨子の言うように、扇風機の真ん前に陣取っているためか風が来ない。

「教室に冷房でもついてたらな〜」

「統合の話があるのに、付くわけないでしょ?」

曜のぼやきも梨子に一蹴されてしまう。付くことは絶望的だった。

「カズはどうなの? 暑いとか寒いとか……」

ウルトラマンで宇宙人でもある一真は、暑さや寒さは大丈夫なのかというのが果南の質問の意味だろう。昔からの付き合いだから暑さ寒さを感じることを知ってはいるが、改めて疑問に思ったのかもしれない。

「変わらないよ。暑いのも寒いのも人間と同じ。あ、でも……ウルトラマンになってる時はちよつと違うかも」

「へえ〜、そんなもんなんだ」

「そんなもんだよ〜」

すると今まで机に突っ伏していた千歌が顔を上げ、鞠莉に尋ねる。それは学校説明会の参加者の数についてだ。すると鞠莉はカウンターを軽々と乗り越えていく。

「鞠莉さん! はしたないですわよ!!」

ダイヤの注意には耳を貸さず、鞠莉は起動させたパソコンのディスプレイに目を向ける。

「今のところ……」

鞠莉の言葉に前かがみになっていく千歌。そして……表示されていた数は

「……ゼロ〇」

まだだめかと、千歌は机に伏す。

「そんなに魅力ないかな……？ 少しくらい来てくれてもいいのに……」

千歌の消えいってしまいそうな声に、一真も「そうだな……」と声をかける。すると突然聞こえてきたドアの開閉の音に、全員に視線が向けられる。

「あれ……？」

そこには私服姿のよしみ、いつき、むつが不思議そうな目でこちらを見ていたのだ。すると千歌の「どうしたの？」という声。

「図書室に本返しに……」

「もしかして今日も練習？」

「もう地区予選だし」

「この暑さだよ？」

「そうだけど、毎日だから慣れちゃった」

暑い夏休みの中、毎日練習をしているという千歌の言葉に、3人は息を呑む。さらにその暑さにも慣れてしまったというのだから、驚かないのも無理はない。スクールアイドルの厳しき、そして頑張りを改めて感じていたようだった。

「そろそろ始めるよー!」

果南の声に千歌は「またね」とだけ言い残し、その場を後にした。

くく

「あれは……」

練習終り、夕日もまぶしくなってきたころだ。一応戸締りの確認をして戻ってきた一真だったが、プールに入っている果南と善子と鞠莉の姿が見える。それ以外はプールサイドにいるようで、どうやら千歌とむつたちが何やら話をしていた。

「こりゃあ、お邪魔かな……」

そう言つて一真は校庭の方へと歩いていった。

そんな時、二足歩行の生命体が一眞の前に姿を現したのだった。青白い体の所々に向こう側の景色が透けて見えるため、これが実態なのではないと容易に想像できた。

セミに似た顔、ザリガニを思わせる大きなハサミ状の両手が一眞の直感を刺激した。彼は宇宙人だと。

「私はバルタン。この星を求める者だ」

幻影は攻撃をする気が無いとアピールするためか、腕を下ろして話し始める。夕日に照らされた校庭に、彼のバリトンボイスが響き渡る。

「我々は、地球人の醜さを見た。それは我々のようにいずれ辿るであろう破滅の歴史だ。私はそれを防ぐため、地球人たちからこの星を頂くことにした」

地球を貰う。彼のはつきりとしたその宣言に一眞は警戒する。

「ハッ、どうして俺にそんなことを……?」

「君なのだろう、ウルトラマンオーブ」

「……ッ!?!」

バレている。そんな動揺を悟られまいと一眞は平静を保とうと必死だ。

「只のあいさつき。地球ではこのようにしてあいさつするのだろうか?」

「これから侵略しますってか? ふざけるなよ……」

一眞はバルタンの幻影を睨みつける。それは怒りもあるが、一番は彼が何を考えているのかがわからないという底知れない恐怖があったからだ。

「フッフッフ……こうしている間にも私は地球侵略の準備を整えつつある。君は指をくわえながら待っているといい」

それだけを言い残したバルタンの幻影は即座に消えていった。

止めなければ、しかしどこへ向かえばいい……そんな焦燥感と無力感が一眞を襲う。それに……

(どこを探せば……)

無暗には行くことはできない。地球、あるいは宇宙かもしれない。しかしそんなことをすれば、守りが無くなり、攻め込まれることも考えられる。

(なら、攻め込まれるまで待つてろと言うのか……)

自然と拳が入っていく中、背後から声が出た。

「——月だ」

「なに？」

「月にいるんだよ。そこで怪獣を呼び出している。惑星侵略連合が持ち込んだ怪獣だね」

その黒いスーツ。背筋を撫でるような不快感と、安心感の混ざった妙な感覚。それは

リゲル……ここでの名はアオボシ。その人だった。

「お前、何しに来たんだ？」

「いや別に。ただ、君にちよつとヒントをやるうかと思つて」

「……お前がか？」

一眞は自ら歩み寄つてきたアオボシに疑問の目を向ける。昔はどうあれ、今の彼と自分の道は違えてしまったのだ。それに、彼も大魔王獣を復活させていた張本人。疑わないう方がおかしい。

「僕だつてアイツが気に入らない。それに僕はあくまでアルフアルド様に仕えてる身だ。協力関係とは言えど、邪魔なやつは消えてもらつた方が都合がいい」

それにと、アオボシは一眞の周りをグルグルと歩き回りながら続ける。

「彼は生命の概念を知らなければ、感情もないんだ。そんな奴らに侵略されるのは実気分が悪い。だからこうやつてお前にヒントをやるんだ。……安心してくれ、地球を離れている間に攻撃なんてする気はないからね。僕は……」

そこまで言うのと、彼は一眞の方へと詰め寄つて顔を近づける。

「お前と全力で戦いたいだけだから」

あまりの不快感に、アオボシを突き飛ばす一眞。だが、ここまで言つて嘘を教えるよいうな彼でもないだろう。それに今は目前に迫る侵略を止めるのが先決だ。

「月のどこだ？」

「うーん、それはわからないな。アイツ、今は侵略連合の宇宙船にはいないからね」

申し訳なき0で語るアオボシに一眞はため息を吐く。

「じゃあ、攻め込むときはいつだとか聞いているか？」

その問いに「ああ、それなら！」と明かげにリアクションを取った彼は、一眞へと耳打ちをする。

「お前……それって……!?!」

彼の言った日……それは……

「そっか、その日って君たちの——」

「……」

帰りのバスの中では、一眞は黙り込んでいた。バルタン星人が地球への侵攻を開始する日……それはラブライブ地区予選その日だったのだ。よりにもよって大事な日に不幸なことだ。しかし宇宙人もこっちの都合を聞きゃくれないことくらいは、十分承知している。

「なに考えてるの？」

「……っ曜ッ!?!」

すると自身の視界に曜が映りこむ。彼女がのぞき込んできた、と言った方がいいかもしれない。だが一眞はなんていえないか言葉を詰まらせる。

当日は宇宙人からみんなを守るためにライブは見れない……なんて正直に言ってしまう、彼女たちに心配をかけてしまう。地区予選という中で、ただでさえ気が張り詰めているというのに。

「……んんっ!?!」

すると突然、曜は一眞の口角を指であげる。そんな状況に曜は笑顔で、対する一眞は目をぼちくりさせている。

「なんかわかっちゃった。カズくんが隠してること」

「……」

「また戦いに行くんでしょ。みんなを守るために……って。私は……ううん、私たちは止めないよ。だから、約束。絶対に勝って、帰ってくるって!」

彼女の言葉、そして笑顔に、緊張のような凍った感覚が徐々に溶かされていく。

仲間と共に進むと、決めたばかりではないか。みんなが背中を押してくれるのならば、いつものように打ち倒して、みんなのもとに帰る。ただそれだけのこと。

「ああ、約束……だ」

一眞の約束に曜はもう一度笑顔を見せてくれた。

くく

「これが来るべき、聖戦の地」

「名古——」「それ以上は言わないで!」

一眞の指摘を遮る善子に彼は苦笑いを浮かべながら、周りを見渡す。ラブライブ地区予選の会場はこの名古屋駅の近くだ。

(今のところ異常はない……か)

同時に、一眞はバルタンの侵攻に目を光らせる。彼女たちの輝きを守るためにも、気は抜けない。

「待ち合わせ場所は……」

「今来たのがこつちだったよね?」

「そう。で、えくと……」

はじめての場所であるため、携帯のナビを見ながら待ち合わせ場所を探す。一眞も探そうとしているが、彼も苦戦している。

「むつちゃんた達来てないね」

「多分ここであつてははずなんだけど……」

何とか着くことはできたものの、むつ達の姿が見えない。待ち合わせ場所だと指定されたところに確かにいると、千歌と曜が話していると

「千歌ー!!」

友人を呼ぶ声と共に、むつ達も合流する。どうやら道中で迷つてしまったらしい。加えて「他の皆は？」と曜が訪ねると、3人は表情を曇らせてしまう。応援には言つても夏休みだし、個々に予定があるだろう。確かに寂しいことには変わりはないが。

しかし、彼女たちが表情が一変。明るくなるとゾロゾロと足音が聞こえてきた。それも大勢の。

「みんなー、準備はいいー!!」

『イエーイ!!』

「「全員で参加するって!」」

なんと、浦の星全員で応援に来てくれたのだ。みんなの手には、青く光るサイリウム

が握られている。

「びつくりした？」

「うん！ この全員でステージで歌ったら、絶対キラキラする！ 学校の魅力も伝わる

よー！」

「ごめんなさい！」

喜びの声が聞こえてくる中、申し訳ないと梨子が頭を下げる。

「調べたら、歌えるの事前にエントリーしたメンバーに限るって決まりがあるの」

梨子が申し訳ないと思いつつながら発したそれは、ライブ上のルールであった。さらにはステージに近付くのも禁止とのことだ。マネージャーである自分が把握しきれていなかったことに責任を感じる。

「ごめんね、むっちゃん」

千歌も良く調べもせずには承してしまった事への責任か、むつに謝罪する。しかし、それでも浦の星たちの生徒の想いは変わることは無かった。

「じゃあ私たちは、客席から宇宙一の応援して見せるから！」

「浦の星魂、見せてあげるよ！」

「だから宇宙一の歌、聴かせてよね！」

浦の星とAqours、その想いは一つとなっていたのだ。

「不思議だな……。内浦に引越してきたときは、こんな未来が来るなんて、思ってもみなかった」

本番を間近に控え今、学年別に分かれて準備を行っている。それぞれで語りたいたいこと、共有したいことがあるはずだ。

それはアリーナ入り口前に集まる、千歌や曜、梨子……そして一真も例外ではなかった。

「千歌ちゃんがいたからだね」

「それだけじゃないよ。ラブライブがあつたから、μ'sがいたから、スクールアイドルがいたから……曜ちゃんや梨子ちゃん、カズくんがいたから」

これからも色々なことがあると、千歌は言った。

それは嬉しいことばかりではない。辛くて、大変なこともあると。

「でも私、それを楽しみたい！ 全部を楽しんで、みんなと進んでいきたい!! それが好きって、”輝く”ってことだと思う」

自分の憧れたもの、それを生んだもの。そして、彼女がなったもの。その全ての輝きが、このような未来を、今を作ってくれた。そして、1人ではできない……仲間と一緒

ににいるということが、彼女の輝くということ。

この先起きるであろう困難も、喜びも……その全てを受け入れ進んでいくことが輝きなのだと。

「そうね」

千歌の背後から、よく聞き慣れた声が聞こえてきた。

果南、ダイヤ、鞠莉、花丸、ルビィ、善子。ここにA q o u r s 9人が揃う。

「俺も……こんな未来が来るなんて予想してなかった」

一真は全員の顔を見て、その口を開く。

「ようやく、輝くつてこの意味を知れたんだと思う。それに、こんな俺を受け入れてくれたみんなに、本当に感謝してる」

一真自身も、彼女たちと同じように成長した。でもそれは、みんなの存在があったからこそだと頭を下げ、彼女たちに背を向ける。

「みんなの想いは、努力は必ず届く。俺はそう信じてる。みんなの輝き……それをぶつけてい」

「行くの？」

曜の問いに一真は頷く。

「これは俺のやるべき……ううん、俺のやりたいことなんだ。輝いて、輝きを守りたいっていう……俺のやりたいことなんだ」

「……行くよっ!」

A q o u r s と一眞。輝くために、輝きを守るために……それぞれの一步を踏み出した。

「イチ!」

「ニ!」

「サン!」

「ヨン!」

「ゴ!」

「ロク!」

「ナナ!」

「ハチ!」

「キュウー！」

A q o u r s ……そして浦の星の生徒全員の声が聞こえた気がした一真も、ふと口にする。

「……ジュウ」

「今、全力で輝こう！ ゼロからイチへ！ A q o u r s ……!!」

それぞれの今へと向かうため、A q o u r はイチの形にした手を、一真は光り輝く聖剣を空へと掲げた。

『サンシャイーンーン!!!』

「オーオーブ!!」

第36話 未来への切符 光る星（ORB）

A q o u r s がラブライブ地区予選に臨んでいるころ、同じく名古屋の空。

青く塗られたキャンバスのような空を、風を切つて飛翔する光があった。

「……………」

ウルトラマンオーブ オーブオリジンは彼女たちの輝きを守るため、音速の壁を越える。向かうはバルタン星人がいるとされる地球唯一の衛星、月。

前方を見据え、徐々に青い空が濃紺にそして黒へと変わっていく中、自分に近づいてくる紫色の光が1つ。否、いくつもの光が分裂し、まるで雨のように自分に降り注いでくるのだ。

（……………危ねっ！）

勘に近いその警告を信じ、体を捻り回避。

——コンマ数秒で光が横切る。その時理解した。自身が目にしていたのは、白

い羽であつたということに。

(まずいつー!)

降下……いや、発射されたその羽に向かいオリジウムソーサーを放つ。光輪と羽が接触すると、大爆発が起きたのだ。もしこのまま見過ごしていれば、街に被害が及んでいただろう。

上空へと目を凝らすオーブ。空を滑空するそのシルエットには見覚えがあつた。

「マガバツサー……いや違うー!」

確かに形はマガバツサーと瓜二つだ。しかしそれでも異なるのは、体を染め上げている色だ。羽毛は白く、羽の先端が赤い。

巨翼を飛ばたかせる悪魔のような怪獣グエバツサーは、まるでエサを狙つて急降下する猛禽類のごとく、オーブへと急速接近する。

(なるほど、コイツがバルタンの用意していた怪獣つてことか!!)

目で捉えるよりも本能が自動的にその身をよじらせ回避。すかさず首元にかかと落としを食らわせ、怯んだ体を蹴り上げる。

「■■■■■■■■ー!!」

(この……暴れんな!)

翼を動かして藻掻く怪鳥の脚を掴んで回転。遠心力を使って遠方へ放り投げた。

「■■■■ー!!」

しかしそれが悪手だったか、グエバツサーは空を高速で舞い、オーブを翻弄する。

(だけどー!)

ジェット噴射のような推進力でオーブもグエバツサーを背に迫つてき、オリジウムソーサーを放つ。

起爆性のある羽を発射されれば、減速しながら急上昇。日本上空で、怪鳥対巨人の熾烈なドツグファイトが展開されていた。

(なっ、これは竜巻っ……!!? ウアアアアアアアアッ!!)

しかし数秒後、翼から発生させた竜巻にオーブは呑まれ、身動きが取れなくなる。さらに竜巻で吹き飛ばされれば、今度は怪鳥の猛攻での追い打ちが待っていた。

(アイツ……また竜巻を……?)

トドメのつもりか、マガバツサーは大きな竜巻を発生させようと二対の巨大な翼を羽ばたかせる。

(一瞬の隙を突くしかない……!)

カラータイマが光を発する。

竜巻が放たれる直前に放った、2発のスペリオンスラッシュはグエバツサーの目前で

互いにぶつかり合い爆発。グエバツサーは煙でオーブの姿を見失ってしまう。

——刹那、紫のラインを輝かせたスペシウムゼペリオンが背後へと回り込む。

残像を残し、両腕に輝く光輪を生成して。

「喰らえ！ ダブルスペリオン光輪ツ!!」

「■■■■■■■■■■ ツッーーー!!?!?!」

振り向かれるよりも素早く放たれた2つの光輪は巨翼を切り裂いた。さらにエネルギーをチャージしたオーブは腕を十字に組んで光子熱線を発射した。

「スペリオン光線ツ!!」

見事グエバツサーに命中し、白色の怪鳥は爆発に包まれた。

「……つたく、序盤から本気出させんな」

グエバツサーの爆発を確認したオーブは宇宙へと再度飛び立つために、推力を足元に集中させた。

「今日ではみなさんに伝えたいことがあります！ それは、私たちの学校のこと！ 街のことです！」

その頃、ステージ上で千歌たちAqoursが語ったのは、街のこと、学校のこと、そしてスクールアイドルAqoursのこと……輝くということ……。

奇跡のような出会いから始まった彼女たちの物語。

くく

着地と共に舞い上がった月の砂レゴリス。オーブは漆黒のような空に瞬く星々に見守られているようだった。

「君から乗り込んでくるとは」

「……ああ。それに、アンタの送ってきた怪獣とやらも倒して来た……！」

顔を上げたオーブは、目の前に佇むバルタン星人を見据えて構える。

「フッフ、ハハハハッ！ 私が1体きりで地球に攻め込むとも思っていたのか？」

「なに……？」

笑っているフリ……なのだろうか。本心からこれが面白いと思っているのかと、疑問

に思うくらいには不自然な笑い方だった。そして彼の発した言葉に、オーブは警戒心を強めていく。

「君は実に単純だ。私が攻め込むと言えば、君は止めに来るだろう」

（成程……、誘い出す気だったのか。あの場にアオボシがいてもいなくても、俺はここに来るとわかっていた……ってことか）

アオボシはこのことを知っていたのだろうか。仮に知っても言わないだろうし、本当に知らなくても、彼にとつてはどちらも“おいしい”と感じている事だろう。そう思うと、彼の捻くれた性格に腹が立つ。

「グエバツサーも所詮は囃。君を呼ぶためのエサに過ぎない。あまり役には立たなかつたようだが」

「お前……」

自身が扱う怪獣までも結局は道具扱いなのか……。その冷徹な性格に、全身の熱が奪われそうになる。

「予定通り、ここで君を倒させてもらおう」

バルタンが右腕を上げると、赤紫の光柱が3本立つ。そこから現れたのは、彼の扱う怪獣たち。

どれも見覚えがある怪獣ばかりだ。しかしやはり、頭部に輝くクリスタルがない。

「さあ行け！ オープを殺せ!!」
グランドキング マジヤツパ キングパンドン
 超合体怪獣、水異怪獣、双頭怪獣はオーブ目掛けて突進を開始する。

「ウオオオオオッ!」

キングパンドンの前腕を受け止め、肘打ちで反撃。マジヤツパに近付かれる前にスペリオンスラッシュで攻撃。グランドキングの左右から襲い掛る鉤爪を1度目は躲し、2度目は両腕をクロスして受け止める。

「グッ、ウウウウウ……」

想像以上のパワーと重さに圧倒され、片膝をついてしまう。

だが、一瞬の隙に装甲で包まれた腹部を蹴り上げた勢いで空中へと脱出。宙返りで再び着地した。頭部からの破壊光線“グランレーザー”が目前に迫ってくるが、鏡上に加えたスペリオンシールドで反射。マジヤツパ、キングパンドン、そして発射したグラドキングへとダメージを与える。

「■■■■ ツー……?!」

怪獣の唸り声が聞こえ、すぐさまこちらに向かってくる3体の怪獣。オーブも月面を蹴り上げ、突撃。その光は前方を貫く炎のうねりとなって、怪獣たちを蹴散らした。

振り返りながら構えを取った2本角のオーブは両腕で巨大な火球を作り出し、グラドキングへ撃ちだす。

「ストビューム……バースト！」

悔しいがこれで倒せるとは思っていない。しかし、それでも多少の足止めくらいには……と攻撃したのだ。

（今だ……！）

火球を撃ちだすと同時に走り出したオーブは、キングパンドンの撃ちだした何発もの火球“双頭撃炎弾”を両腕に纏わせたエネルギーの手刀で撃ち落していく。

撃ち落された火球が月面で激しく爆発する。

徐々に近づいてくるマジヤツパの存在に気付くと、両腕の手刀状のエネルギーを素早く振りぬいた。

「ストビュームスラッシュャー!!」

放たれた2つの刃。1つはマジヤツパに、もう1つはキングパンドンに命中し、小規模の爆発を引き起こす。

激昂し、長い鼻吻の先から高圧水流を噴き出すマジヤツパの攻撃を避けながら接近。何重にも残像が見えるほどの殴打の舞を食らわせ、炎を纏ったまわし蹴りがマジヤツパの頭を捉える。

「……決めるぞ」

攻撃を躲し、炎を纏った拳を解放させるストビュームカウンター。体全体に光を滾ら

せ、マジヤツパに体当たりすると同時に己を爆発させる。

「ストビューム……ダイナマイト!!」

「■■■■■■——!!」

マジヤツパの断末魔さえも爆発に吞まれ、一面に煙が上がる。

煙の中から身を翻してオーブスラツガーシヨットでグランドキングを攻撃したハリケーンスラツシュ。

身軽さを活かした突進で肉薄。生成したオーブスラツガランスを手にしグランドキングに突き出す。

「オーブランサーシユート!」

青の光線がグランドキングへ向けて放たれたがダメージが通っている様子はなく、逆にグランドキングの口から撃ちだされた光線“グランビーム”がオーブにダメージを与える。

(がああっ……!?)

意識が吹き飛びそうになる痛みに歯を食いしばって耐える。

(……っ!? このおおお!!)

続けて迫ってくる2色の破壊光線“ダブルレイ・インパクト”を台風の如く旋回させたオーブスラツガーランスで受け止めた。着弾するや否や、すさまじい爆発が周囲に巻

き起こる。

「ハ……アアア！」

そして破壊光線をグランドキングへとぶつけた。

さらに高速でキングパンドンに攻め入り、エメラルド色に輝く刀身を突き立てる。

腕の攻撃を受け止めて側面を蹴り怯ませ、畳みかけるようにオーブスラツガーランスが光を発する。

「トライデント……スラツシユ!!」

幾多にも及ぶ斬撃がキングパンドンの体を包んでいくと、爆発共にその体を月面に伏した。

「コイツでも喰らいやがれ！」

グランドキングに向き直ったオーブ。彼はウルトラ念力で宙に固定させたスラツガーランスを足蹴りで射出。ミサイルのように月面を疾走し、グランドキングの装甲に着弾。

しかし、邪魔だと言わんばかりに刺さったそれを叩き落とすグランドキングは全身から雷撃。さらに尻尾からすらもビームが放たれている。咄嗟にバク転や宙返りで攻撃を回避していくオーブ。

その中で彼の瞳は捉えていた。装甲に覆われた体の中に見える、黒く焼かれた部分を。恐らく、最初の光線を反射した時に受けた部分だ。

(あれを起点にして……装甲を弱らせることができれば……！)

オーブはサンダーブレスタ―へと姿を変え、迫りくる攻撃をゼットシウム光輪で撃ち落として防いでいく。

「コイツは初見せだ、存分に喰らっていけっ！」

迸る赤黒い稲妻と、全てを凍らせるような冷気を纏った右腕を引き絞る。そして解放させると同時に右腕を縦に突き出す。

「デスシウムフロストツ!!」

稲妻を纏って螺旋状に放たれる冷凍光線。しかしそれは遠くから見たら、ただの光子熱線と変わらないようにも感じられる。

グラウンドキングは尚も効かないと立っているが、ピキツ……と音が聞こえる。

黒く装甲が焼けた部分の内部から、氷がまるで内側から突き出る刃のようにして現れたのだ。しかもそれは1か所だけでなく体全体から。

デスシウムフロストはただの冷凍光線ではない。光線を受けた相手の内側から蝕むようにして氷が突き出てくるという性質を持っているのだ。

本来のグランドキングでは耐えられたかもしれない……。しかし自分の光線を受けて、一部の装甲が弱くなった部分が突破口となってしまうていたのだった。

突き出した氷は月面にも刺さる。これは一種の拘束技としても機能する。だが、グランドキングは力づくでその拘束を解こうと藻掻く。実際、すでに破られてしまっただ。

「まだまだ……！」

ストリウムマイトにフュージョンアップしたオーブは、全身にエネルギーを貯める。体に循環する光のエネルギーを、爆発力のある光線にするために。

虹色に光った全身を解放させるように、腕を水平に開く。その姿はまるで無防備。だがこれこそが……光線を発射するための構え。

「ツインダイナマイトオオオ……ブラスタター!!」

全身から放たれた虹色の人型光線。圧倒的な熱量を誇るそれは、グランドキングの冷寒たる装甲に激突。

その急な何百、何千もある温度差が装甲にヒビを入れた。

『解き放て！ オープの力!!』

一気に駆け抜け、グランドキングとの距離を縮めていくオーブオリジンはオーブスプリームカリバーを発動。しかし光線を放つのではなく、全エネルギーをオーブカリバーの刀身に集約させる。

「これで……最後だ……!」

光り輝くその剣を、グランドキングに向けて斬りかかる。

「グウツ……オオオツ……」

それでも、装甲はまだ強固だ。しかし、これが最後のチャンス。これを逃してしまえばもう後がない。ゼロ距離からの光線で、この体は消滅するのは確実だ。

(負けるわけには……行かないんだ!)

今もステージで輝く彼女たちの姿。そして、会場を後にする直前に見た全員の姿が、顔が頭によぎる。

(約束だからな……勝って、帰るって……！)

背中を押されるようなその感覚に、オーブは声を上げる。

「ウツ……ウオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!」

装甲が分断される金属音、鈍く重い衝撃が伝わる。

肩から脇腹へと達する斜めに切り口から、虹色の光が漏れだす。オーブは斬る瞬間に、スプリームカリバーを発動。一撃に圧縮された光の斬撃“オーブスプリームカリバー オリジウムブレイク”が、グラントキングの体を爆発の炎で包み込んだのだ。

「ハア……ハア……ハア……」

3体の怪物を打ち倒したオーブだったが、多くのエネルギーを使い疲労が限界点に達してしまっているのは致し方ないことだった。

「……」

肩で息をするオーブの背後に迫る、あの影を残して……。

「これが……」

その頃、地球にいたアオボシはそこから飛び立つオーブを見て、吸い寄せられるようにライブ会場に足を運んでいた。

ステージを見下ろした彼は呟く。今は行方が知れないスピカが、過去にちよくちよくいなくなることがあった。理由などはどうでもよかったが、必然的に気付いてしまった。それがこれだ。

目の前に映るのは、キラキラと光り輝くステージに立つ9人の少女たち。

ラブライブ、そして輝きという未来の海へと続くための切符。

9人だけじゃない、客席にいる人々共に輝こうとする姿。

それがアオボシにはたまらなく不思議だった。どうしてそこまでして……

「こんなものを……どうして守ろうとするんだ？ シリウス」

ライブの熱気にかき消される彼の声に、答える者はいなかった。

「ウアアア……!?!」

地面に倒れこむオーブ。彼は再び立ち上がろうとしても全身の力が入らず、膝から崩れ落ちる。

「君もそろそろ限界ではないかね」

幾多にも分身を作り出しオーブを囲むバルタン星人。宇宙忍者とも呼ばれる奴の特殊能力は、着々とオーブを追い詰めていった。

分身で翻弄され、背後を白色の破壊光線を撃ちこまれ、月面に何度も体を叩きつけられる。

「……」

不幸か幸いか、身体に走る激痛が薄れかける一眞の意識を繋ぎとめる。

「何故だ。やはり理解できない。オーブ、君はどうしてあの下等な種族を守る？ 自分の都合のいいように解釈し、恩を忘れて牙をむく……身勝手に傲慢な種族を」

「……るせえ」

不意に飛ばされたその言葉に、バルタンは歩みを止める。

「うるせえ、つってんだよ……。何故？ はっ、そんなの俺が守りたいからに決まってるだろ」

一眞の追い求める理想と同じくらいに、ただみんなを“守りたい”。それだけの……やりたいたいこと。

「……この力で、みんなを守る。これが俺の輝くってことなんだよ!!」

オーブは拳をバルタンに撃ち当てる。分身が迫ってくる中彼は飛び上がり、身体を回転させるとともに両腕から針状の光線を発射。

分身が打ち消され、本体だけが残る。オーブはすかさず突進。馬乗りとなって手刀を繰り出す。

洗練などされていない、泥臭い戦い。馬乗りを脱出されても、脚を掴み逃走を許さない。頭を蹴られ、苦悶の声を漏らしながらも立ち向かっていく。

「ハ、アアアッ!」

腕から放たれた半月状の光線。“オーブブルーメラン”が赤色の冷凍光線と衝突。水となつたそれは月面で砕け散る。

一瞬の隙で素早く回転、赤く点滅するカラータイマーの前で両手で円を作りエネルギーをチャージ、十字に組んで放つ青い熱線がバルタン星人の体を貫通。

意識を失い、動かなくなつたバルタンは直立のまま後ろへ倒れこみ、巨大な爆発を起こした。

(はあ……はあ……はあ……俺は……約束を……)

亡骸すらも爆発で消え去った月にいるオーブ。

飛び上がるうにも徐々に体が重くなっていくその感覚は、もう一眞自身の意志ではどうにもならない。今日にしているのは、ゆっくりと近づいてくる月面。

そして、外から暗くなっていくように………

プツンツ！ と

千歌を照らす光はまるで太陽。新たな輝き、先の景色へと向かうために千歌は光を掴

み取ろうと手を伸ばす。

「みんな一緒に輝こう!!」

まだ見ぬ輝いた未来へと向かうため、千歌は青く染まるさながら大海原のような会場を自由に駆け抜けていった。

彼女たちがゼロから作り上げたものってなんなのだろう。

形のないものを追いかけて……迷って、怖くて、泣いた。

そんなゼロから逃げ出したい……と。

だけど……何も無いはずなのに。

いつも心に灯っているその光。

あの9人でしか出来ないことが、必ずあると信じさせてくれる光。

……彼女たちAqoursは、そこから生まれた。

「叶えてみせるよ、私達の物語を！ この輝きで!!」

君の心は

輝いてるかい？

STAGE 2 闇夜を照らす輝き

第37話 次なる輝きへ

——夢をみた。

目の前で輝く何かへ、一生懸命に手を伸ばす。

けどそれは、自分が見ているよりもはるか遠くにあるのか、それとも遠ざかっているのか……どう頑張っても掴めそうになかった。

手を伸ばし光を追いかけていく……その瞬間——

足元が消えたように、その体は下へ……下へ……落ちていく。終わりのない穴の底へ

と——

〃
〃

夏の暑さがいまだ鬱陶しいほどに残っている頃。右には青い海。左には緑豊かな自然……。日射しがアスファルトを熱したフライパンの如く加熱しているという、なんとも夏には定番の光景である内浦に“彼”の悲鳴にも似た声が響き渡る。

「だあああああああああつっつ!!」

常人にはもはや風と一体化したように見えているであろうソレは、浦の星までの道を直行していた。

流れている大量の汗など今はどうでも良い。ただ、自分の犯してしまった過ちを精一杯悔いながら、脚に力を入れている。

「寝坊だあああああああつっ!!」

暁一眞。今は意識のないウルトラマ^{!!?!?!?!}とオーブと一体化しているアルデバ人であり浦の星の学生。

月での戦いの後なんとか帰還した彼だったが、戦いのダメージや疲労は尋常ではなく、ここ最近まで残留し続けていたのだ。

残りの夏休みの期間は回復に専念していた彼だった。しかし今日、寝坊したのだ。新学期の始業式当日に。

生活習慣が完全に狂っていた。幸い、始業まではまだ時間がある。とはいっても普通に歩いていたら到底間に合わない。

息を整えながら、一眞は2人に告げる。

これからは1人で起きると千歌は宣言したのだが、結果は今をみれば察しの通りということだ。

さらに、ステージ上では理事長らしからぬ進行でスピーチを続ける鞠莉へ、ダイヤが舞台袖から指示を出している。小声のつもりだが、がつつり聞こえているの内緒だ。

「浦の星の生徒らしい節度を持って……」

「雪像を持つ？」

「節・度おー!!」

ダイヤの声が体育館に響くが、いつものことなのか3年生は苦笑いですんでいる。

「にしても、惜しかったよな〜」

「もう少しで全国大会だったもんね」

「……過ぎたことを言っても仕方ないわよ？」

一眞のぼやきに曜と梨子は反応する。そう、Aqoursは地区予選で惜しくも敗退。全国への道は絶たれてしまったのだ。仕方ない、と梨子も言っているが、彼女の

言葉には捨てきれない悔しさを感じる。

「それにさ、なんだよ？ 参加賞が二色ボールペンって。もつとこう……あるだろ……」

「一真くん、気にしてるのそこ？」

一真はそれに加え、大会の参加賞にも不満を抱いているようだ。学生という面から見れば確かに必要なものではあるが……。

「じゃあアレか？ 全国大会の参加賞は三色にでもなるのか？」

「それもちよつと……」

「シヤラアアアアアアアアアアアアアアアアプ!!」

たちまち参加賞の話題に移行する3人を見かねて注意する。鞠莉の特大声量をマイクが拾ったせいか、ハウリングが発生。体育館にいる誰もが耳を塞ぐ。

「確かに、全国大会に進めなかったのは残念でしたが……」

「でもゼロをイチにすることはできた。ここにいるみなさんの力ですわ」

あの会場での輝きは、悔しくも届かない面もあった。しかしそれでも、小さな一歩はあったと2人は言う。そのことに皆は胸を張っていた。

そして今では入学希望者は0から1、1から10になった。

さらに

「本日、発表になりました。次のラブライブが！ 同じように決勝はアキバDome！」
鞠莉の発表に、果南やルビィといったAqoursメンバーは勿論のこと、浦の星の生徒全員の心を躍らせた。

そして同時に、体育館に駆けこんできた彼女の影が。

「To Late！」

「大遅刻ですわよ」

「次のラブライブ……」

肩で息をするほど疲れている千歌だったが、それでも彼女は言葉を紡ごうと口を動かす。

「千歌ちゃん！」

「どうする？」

「聞くまでもないと無いと思うけど！」

千歌がこの時に何と言うか、一真たちにはわかりきっていた。だからこそ、改めて彼女に問う。

「出よう、ラブライブ！ そして……そして！ イチをジュウにしてジュウをヒャクにして、学校を救ったら！」

『そしたら!?!』

全校生徒が問いかける。ここにいるみんなが、彼女の答えを待っている。

「そうしてたら、私たちだけの輝きが見つかると思う。きつと——!」

『——輝ける!!』

「1、2、3、4……」

「んんっ……、う、うああ……!?!」

日が海を照らしつける夕刻。なんとも苦しそうな声が屋上で響いている。

「善子ちゃん、相変わらず体硬いね。ちゃんとストレッチやってる?」

「……ンンンヨハネエ〜!!」

善子の前屈を果南が押しているという図はさほど珍しくもない。しかし、何も知らぬ人が見たらあらぬ誤解を受けるだろうと、一眞は震える腕の痛みに耐えながら考えていた。

「痛たたたたた?!?!?」

限界以上に果南が押し込んでいるようで、善子の悲鳴はさつきよりも増して大きくなる。限界を超えたそれはもはや伸びすぎてキレるんじゃないかというくらいの痛みを伴う。だがこれも彼女のためだ。ここは痛みに耐えてもらうしかない。

「花丸ちゃんは随分曲がるようになったよね?」

「毎日、家でもやってるすら」

ルビイの言うように、花丸も随分と体が柔らかくなった。家でも欠かさずやっている努力の賜物だろう。さらには、腕立てもしているとのことだが……

「イ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~」

とは言ったものの、腕を曲げたままで止まっている。

「~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~」

伸ばすことは叶わず、そのまま伏してしまう。賞賛するルビイや鞠莉だったが、そこに善子の真つ当なツツコミが響く。

「まあ……頑張つて……な……」

いつもの光景を目尻に声まで絶え絶えな一真。彼も腕立てをしているのだった。

「ほら、カズもさぼつてないで腕立て終わらせちゃつて?」

「なんで……俺も……腕立て……なんか……を……」

「カズもウルトラマンなんだから鍛えておかないと。また寝込むことになるよ?」

「それも……そうだけ……さ……」

「これからの戦いのためにも、カズも鍛えなくちゃね」と果南が提案してきのだ。鍛えておいて損は無いと言うが……メニューがひたすらにキツイ。一真もすでに、大量の汗をかいている。

「だはっ……終わつた……」

「ほら、まだ腹筋も残つてるよ」

「ええ!! 俺をどうする気なんだ……ウルトラマツスルなんか望んでないんだけど?!」

「でも、目のつり上がったオーブはなんか筋肉質ですよね?」

ルビイの指摘に、狼狽える一真。オーブのことでも気兼ねなく話せるようになったのも、正体を明かした故の結果かもしれない。

「ルビイちゃん?! それはほら……別と言うか何と言うか……」

「あれ、回数増やされたいのかな〜？」

「すぐやります！ やらせていただきます!!」

鉛にでもなったかのような腕の重さを感じている一真だったが、彼の筋トレはまだまだ終わらないようだ。

「それで、次のラブライブっていつなの？」

「多分、来年の春だと思うけど……」

そんな曜の唐突な問いに梨子が答えていると、ダイヤがその前にやるべきことがあると指摘する。

「入学希望者を増やすのでしょうか？」

「学校説明会」

「Of course! すでに告知済みだよ」

「せっかくの機会です。そこに集まる見学者たちにライブを披露して、この学校の魅力を伝えるのですわ!」

理事長と生徒会長は、着々と事を進めているようだ。彼女たちの働きには感心してしまふと同時に、ここがどれほど好きなのかを再認識させられる。

「それいい! それ凄くいいと思う!」

千歌が賛成するように、みんな同じ気持ちだったようだ。浦の星の生徒として、スクールアイドルAqoursとして学校の魅力を伝えようと。

そんな中着信が来たことを知らせるバイブレーションの音が、みんなの笑い声に交じっていたことは一真ですら気付かなかった。

くく

「そっか、秋になると終バス早くなっちゃうんだね」

ここにきてある問題が曜の口から出された。バスの運用時間の変更に伴って、練習時間の確保が難しくなるという点だ。それに日が暮れるのも早くなるため、屋上で長時間は練習できないとルビィは言う。

説明会まであまり時間が無いとダイヤ。そして

「練習時間は、本気で考えないと」

「あと2時間早く集合しよっか」

果南の提案に無言で通す。それ以外の具体的な解決案を出したいが出てこない……
そういった意味での無言ではあったが。

「じゃあ決まりね！」

「早すぎるわよっ！」

無理だと善子は反対する。さらに、善子はもつと早く帰ってきて欲しいと母親に言われていることを梨子にバラされる。なんでも、梨子の母親と善子の母親は前回のライブで色々話したらしい。

「なんか、部屋にも入れてくれないって」

「だ、だからヨハネは墮天使であって母親はあくまで仮の同居人というか……」

「あの人」とかではなく、「母親」と言つてるところが善子らしいな一眞は感じていと千歌がある疑問をぶつけた。

「お母さんってどんな人なの？」

「学校の先生なんだって。それに善子ちゃん幼稚園まで哺乳瓶離さな——」

「うにやああああああああつ!？」

これ以上は言わないでくれと、善子は声でかき消そうとしたその姿が面白く、たちまち笑いが起こる。

「まって、沼津からこつちに来るバスは遅くまであるのかな？」

内浦から沼津は終わっていてもその逆はどうだと、梨子が聞く。

「仕事帰りの人がいるからな……こつちよりはある」

そんな情報を一真は口にする。これも企業等が沼津の方に集中していたりするからだ。

「そうだ、向こうで練習すればいいんだ！」

「それなら時間も確保できるぞら」

「ルビィ賛成！」

「そうだね、鞠莉は？」

「えっ……No problem！」

練習時間の短縮という危機を乗り越えられそうなのに、鞠莉の反応が妙に鈍い。そんな違和感を覚える果南。

一真はそんな果南に目を向けるが、あまり干渉するものではないと口には出さなかった。彼女たちにしかわからないものがあるのだから、それに不用意に接触しようとするのは彼女たちにも悪いだろう。

「ん〜と……あと必要なのは……」

木の枝に体を預けているアオボシは、ダークリングの内側で浮かぶエレメントを見つめる。

紅蓮騎を倒した水のエレメント。ゼツパンドンに撃ちだした土のエレメント。そしてテンペラー星人に放たれた風のエレメント。

オーブが使ったそのエレメントの残り香をアオボシは回収していった。どうやらそこには、彼の極めて個人的な計画が見え隠れしているように感じる。

「火のエレメント……。残りの光と闇は僕自身でどうにかできるし……。なら、また僕が喉けるか」

そうと決めたアオボシは、懐から出したカードを見つめ始めたその時だった。

「——ん？」

突然、謎の光に包まれたアオボシ。

光が消えていくとそこは内浦の景色ではなく、機械然とした冷たさの漂う場所に変わっていた。そこで彼は察する。

——ああ、呼ばれたわけか

「来やがったか……。ヒョロガキッ！」

すぐさま聞こえる耳を劈くような声に彼は顔を歪ませる。

おそらくアオボシよりも少し年上くらいの少年。金赤の短髪に緑に輝く瞳、日焼けした筋肉質の肌を上半身はベストのような赤い布一枚が覆い、下半身はぴっちりした皮のズボンとサンダルといった、いかにも脳筋と呼べそうな恰好だった。

「久しぶりにテメエ顔を見たが、やっぱり気に食わねえ。……オレと勝負しよう」

「やめてくれ。そう言つて君は只戦いたいだけだろう。この単細胞くんが」

「違えよ。違うんだよ！　こういうのはどれだけオレを熱くさせるか……ただそれだけなんだよっ！」

彼はなりふり構わず拳をアオボシに向けて突き出す。しかし、殴りかかった男の拳がアオボシの顔に到達することは無かった。

「ここで暴れないのプロキオ。船が粉々になるじゃない」

そう言つて艶やかな声と共に少年「プロキオ」を止めた女性。

彼と比べたらポツキリ折れてしまいそうなほど差のある体の細さ。しかし、それは只細いだけではなくメリハリのある豊満な肉体であり、輝くような褐色の肌を隠すドレスからでも見て取れる。また黒く腰まで伸びた長髪やサークレットで輝く紫の宝珠……。

その姿はまさしく妖艶などでもいふべきものであった。

「これはこれはヴィルゴ様、助けていただき感謝します」

妙に芝居がかったのが気に食わなかったのか、ヴィルゴと呼ばれた女性はアオボシに嫌悪の表情を浮かべる。

「別に、私はあんたなんか助けたくないわ。でも、ここでみすばらしい姿になれるのも困るの」

「へっ、まったく訳の分からないことを言う女だぜ。まあ、今回は大人しく退いてやるよ」

——それと、とプロキオはアオボシに向けて告げる。

「アルファルド様と呼んでる」

「どうだ、地球の様子は？」

相変わらず冷やややかなトーンで話すアルファルド。アオボシを見つめるその眼も、虚空を見つめているかのように表情が読み取れなかった。3年前から年を取っていないかのようなその変わりの無さは、もはや彼の寿命が止まっているかのようなのだ。

「ええ、順調です。目覚めるのにはもう少し時間が必要みたいですが」

「そうか。なら、……光の巨人とやらはどうした？」

一層彼の声が低くなり、漂う空気も冷たくなる。

「みたところ、惑星侵略連合もはや機能していないようだが」

「……」

「まあ、所詮はその程度だったという訳か」

「……ツ、アルファルド様！ 次はオレの出番なんじゃないか？ コイツに任せておくと、ロクなことにならないそうだしな！」

プロキオは自分を地球に派遣しろと言ってきた。まったくズケズケとことを言う奴で腹が立つアオボシ。

「そう言っただけは戦いたいだけでしょ？」

「それ以外に何があるんだ？」

ヴィルゴの横槍を一蹴する。彼は端から戦闘のことにしか興味がない。しかし「それ」だけでいくつもの星を滅ぼしてきたのは事実だ。

「地球人を奴隷にするとか？ よく働きそうじゃない、あの種族は」

ヴィルゴもヴィルゴでその妖艶な体の中にあるものは、ドス黒く染め上がったエゴの塊だ。己の快楽のために、多くの人の人生を滅茶苦茶にするのも厭わない。

「それに、お前のつれてたピンクのチビはどこ行ったんだ？」

「ああ、せめてもの——」「スピカはやられたよ」

アオボシはそれ以上聞きたくなかったのか、言わせたくないのか彼女の言葉を

遮った。

「そう。……まあ、よく働く子だっただけに残念ね」

ホントに残念には思っていないだろ、とアオボシは心の中で愚痴をこぼす。

「もういい。もうしばらくはリゲルに任せよう。だが、私が待てないと判断した場合は……」

首にナイフを突く付けられているような緊張。その眼光がアオボシに刺さる。

「……ええ、お好きなように」

——全く、居心地の悪い場所だ。

アオボシは数刻前までいた内浦の地を懐かしんだ。

くく

「はあく」

「千歌、また寝てないのか？」

「練習場所探したら、夜更かししちゃって……」

「遅刻しても知らないからな」

「そこは……頑張る」

「大丈夫かよ……」

千歌を心配する一真に、いたずらな笑みを浮かべた曜は昨日の話を持ってくる。

「カズくんだって昨日遅刻ギリギリだったじゃん？」

「うっ……反論できない」

翌日、浦の星の部室。そこでは沼津での練習場所を何処にしようか、そんな相談が行われていた。

善子は花丸の家が寺なら、そこに大広間は無いのかと尋ねる。

「うちのお寺でほんとうに良いずらか？」

やけの誇張した彼女の言い方に、善子とルビイは怯える。

「あと、家は遠いから無理ずら」

「なら、善子ちゃんの家の方は？」

そんなスペースは無いとこれまた却下。その前に、誰かの家で練習させてもらおうというのは良くないだろう。

「あれ、そう言えばダイヤさんたちは？」

曜の指摘で部屋を見回すが、確かに3年生の姿が見えなくなっていた。

「さっきまでいたのに……」

「鞠莉さんは電話かかって来てたみたいだけど……」

（杞憂ならいいんだけど……）

ルビイの情報に、一真は底知れない不安を感じていた。

第38話 太陽は道を照らす

それはあまりにも突然のことだった。

彼女の言葉に、その場にいる誰もが言葉を失う。予想することもできなかったそれは、今までの積み上げてきたものを……そして、これからの道行きを断つには十分すぎるほどの言葉だったのだから。

ことの始まり……いや、すでに手遅れだったのかもしれないそれがわかったのは、放課後。

その日は遂に、曜が沼津での練習場所を確保したとのことで見に行ったのだった。

「ひろーい！」

千歌が言うように、そのスタジオは9人ではもつたないくらい幅広いの広さがあった。まさにダンススレツスンにうってつけの場所。

「このカーテンを開けると鏡もありますし！」

「いざ、鏡面世界へ！」

「やめるすら」

1年生もその大型鏡に興奮している。いつもの善子を諫める花丸には、どこことなく圧を感じるが……。しかしこの大型鏡であれば自分でフォームを確認して、修正することも可能だ。

「パパの知り合いが借りてる場所なんだけど、しばらく使わないからって」

曜の話で、父親の人脈の広さを実感する。これほどの施設を借りているんだ。只ものじゃないはずだ。

「さすが船長」

「関係なくないか、それ……!?!」

「それに、ここならお店のたくさんあるし！」

「聞いちゃねえ……」

俺たちが話している間も3年生は会話に参加していなかったな……と、思い返してみれば違和感の塊だった。

「とりあえず、店の話は後にしよう」

「うん、それじゃあみんな一度、フォーメーション確認してみない？」

曜の提案にみんなが賛成していた。これからだぞと意気込んでいる中、それを伝えられたの

だった。

「その前に……話があるんだ」

果南にしては歯切れが悪かった。それでも、あんなことを言われるなんて夢にも思わなかったのだから。

「実は、学校説明会は……中止になるの」

鞠莉の発したそれで言葉を失うのは実に簡単だった。

「浦の星は正式に来年度の募集を辞める」

一眞を含め、誰もがその言葉の意味を捉えきけることは無かった。訊き返した梨子に、果南は事実をありのまま告げる。だが「はいそうですか」と納得できるわけがない。善子や花丸、ルビィは異議を唱える。

「いきなり過ぎない！」

「そうずら。まだ2学期始まったばかりで……」

「生徒からそうかもかもしれませんが、学校側から2年前から統合を模索していたのですわ」
2年も前から……。これでもよく延ばし続けた方だと人は言うだろう。しかし、しかしAquoursにとってはいきなり過ぎるのだ。まだ、はじまったばかり。駆け出したばかりなのだ。

「鞠莉が頑張つて、お父さんを説得して今まで先延ばししていたの」

「でも、入学希望者は増えてるんですよ？ 今は0だったのが10になって……」

「これから、もっともつと増えるって……」

確かに、曜とルビィと同じ気持ちを抱えた鞠莉は言った。けれど、それだけでは決定を覆すには至らなかった、と。

すると、千歌は鞠莉の方へと詰め寄りとある質問を投げかける。

「鞠莉ちゃん、どこ？」

「千歌うち……？」

「私が話すっ！」

スタジオを抜け出していく千歌を、梨子や曜が止める。父親がいるのはアメリカだと。そこまでどうやって行くのだと。

「美渡ねえや志満ねえやお母さん……あとお小遣い前借しまくって、しまくって……ア

メリカ行つて……もう少だけ待つてほしいつて話す」

それはあまりにも無茶だということは、一眞にもわかつていた。だが、千歌はそれでもできると虚勢を張つて見えるように見えた。ここで諦めてしまえば、全てが無に帰すと……。

「こうなつたら、私の能力で……」

励まそうとする善子ですら、いつものようにはいかず、ただ虚しく響くだけ。

「……なら、俺が」

「カズくんっ!」

「無茶よっ!」

「無茶だとしても、やるしかない。俺が飛んでけばすぐに着く。それに、みんなを乗せて行くことだつて……」

一眞は懐からオーブカリバーを抜こうとする。だが柄に手を掛けるだけで、引き抜けなかった。

「くっ……」

「説得できると思う?」

梨子の言う通り、彼もまたできるとは思えなかったのだ。地球人で無い一眞ですら、この星の理不尽さを知っている。仮に10人の高校生が説得に言ったところで、子ども

の意見などに耳を貸してくれることは無いだろう。只行つても追い返されるのがオチだ。

「わかつてるよ。わかつてんだよ……だけどここで、こんなところで諦めるなんて……チャンスすらないなんて……そんなの……」

“ 奇跡を起こす ” という挑戦をする権利さえも剥奪されるというのは、あまりに惨めで、無力で、悔しいだろう。

「鞠莉はさ、この学校が大好きで、この場所が大好きで……留学より、自分の将来より、この学校を優先してきた」

「今までどれだけ学校を存続させようとしてきたか。私たちの知らないところで、理事長として頑張ってきたか……」

彼女を一番身近で見ても、何もかもわかるようになっていた彼女たちの方が、何倍も力になりたいと思っている。けど、それは叶わない。

「その鞠莉がもうどうしようもないって言うんだよ？」
「でも、でも……」

千歌が何かを言おうとする前に、鞠莉が出てくる。
「千歌っち、ごめんね」

鞠莉の精一杯の笑顔が逆に心に突き刺さる。

「……っ、違う、そんなんじゃない……。そんなんじゃない……」

千歌はそれ以上、何も言うことは無かった。

もうここで呆れめるしかないのかと。もしこれが定められた運命、決まっていた道筋というのであれば、それはどれほど理不尽で、どれほど最悪なものだろうか、一眞は拳を握りしめる。

練習する気になどなれるはずもなく、その日は解散となった。

くく

翌日、鞠莉は全校集会で説明会の中止、そして統廃合となることを伝えたのだった。

その衝撃は計り知れなく、あちこちで声が聞こえる。そのやりきれなさに、ため息を吐くことしかできない。当然、校舎内に貼られたポスターもすべて撤去されることとなった。

「どうにもできない……くそっ」

帰り際、一眞は自分を納得させるように呟くが、どうしても未練が残る。“こればっ

かりはどうしようもない”という現実はどうしても受け入れがたいものだ。

「俺は……俺達は一体、どうすればいいんでしようか？」

オーブオリジンのカードを見つめ、一体化している“彼”に問いかける。だが当然、一眞の問いに答えてはくれない。何か答えを出してくれると期待していた訳ではない。だけど、だけど自分の気持ちをし少しだけ“彼”に話すことで整理したかったのかもしれない。

「あれは……」

すると一眞の視線は、夕刻の太陽を反射し煌めいている海と、その光景を砂浜で座って見つめている千歌の姿を捉えた。

「……………はあ……………」

声をかけようとも思ったが、ここは誰も考える時間が必要なかもしれない。そう思った一眞は、静かにその場を退いた。

「はあ……………はあ……………はあ……………」

早朝、一眞はグラウンドをひたすらに走る。体を鍛えるというのもあるが、なんとなくここに来るべきだと体が動いたからというのもある。

「一真くんも来てたんだね」

呼びかけられた方向に目を向ける。するとそこには梨子をはじめとしたAqoursのメンバーが揃っていたのだ。

「カズくん、おはヨーソロー!」

「やっぱり、来たんだな……みんな」

「うん。〃 怪獣〃 が出そうな気がしたから」

みんなの想いは1つだったということを再確認していると

「ガオーーーーー!!」

小さな普通怪獣の叫びは、その広い校庭に響き渡る。しかし彼女の叫びは校庭で収まることはないだろう。

「起こしてみせる、キセキを! それまで泣かない! 泣くもんかつ!!」

ここまで理不尽に打ちのめされてきた。しかし千歌は諦めない。今はどうするかわからなかったとしても、いくら無謀だったとしても……キセキを起こしてみせると。

「来たな、普通怪獣」

「え、カズくん……みんなも……どうして?」

一眞の呼びかけに反応した千歌は、ここに集まる全員に困惑する。

「以心伝心すら」

「聞こえたぞ、闇の囁きが」

言葉にせずともみんなが通じ合っている。それは何故か……

「なんか、よくわからないけどね」

「そう？ 私はわかるよ。きつと……」

果南の言葉を千歌繋いでいく。それはきつと——

「きつと……諦めたくないんだよ……諦めたくないんだよ！」

諦めたくない。……まだ、終わりにじゃない。

「鞠莉ちゃん頑張ったのはわかる。でも……私も、みんなも、まだ何もしてない！」

何もできていない。だから千歌は語る。

「無駄かもしれない……。けど最後まで頑張りたい。足掻きたい！ ほんの少し見えた

輝きを探したい……見つけたい!!」

例えこのまま進んで無駄に終わることになっても、足掻きに足掻いた末……。その先
の先で掴みとれる輝きを見つけるために……。彼女たちは駆けていくことだろう。

「諦めが悪いからね。千歌は昔から」

「それは果南さんも同じですわ」

「お姉ちゃんも！」

やはりA q o u r sの想いは1つだと、千歌の笑みには今までの暗い雰囲気は存在しなかった。そして千歌の呼びかけに答えていく一同。

「いいんじゃない。足掻くだけ足掻きまくろうよ」

「そうね、やるからには……キセキを！」

足掻きに足掻いて、その果てにキセキを起こそうと決意する10人。彼女らの決意だと言わんばかりに、山間から太陽が昇り、内浦に光が差し込んでいく。

すると千歌が鉄棒で回り始めると同時に、一眞の視界を塞ぐ果南。

「え、なんだよ!？」

「いいから!？」

「起こそうキセキを! 足掻こう精一杯ツ!! 全身全霊、最後の最後まで——!？」

太陽の光を受け、ここにもう一度言い放った。ここら先もどうなるかわからない……。だが、それでも——

「——輝こう!!」

彼女たちの想いはまっすぐに、青空へと飛び立っていくのだった。

く

「へえ……新たな輝きつてことかな。それじゃあ僕のためにも、ちよつとはキセキとやらを起こしてくれよ、シリウス」

遠くから見ていたアオボシはダークリングを取り出し、カードをリードさせた。

《アリブンタ》

召喚されたアリブンタは地面を潜り、ものすごいスピードで地中を潜行していく。その地響きと揺れは、すぐに彼女たちにも知れ渡る。

「え、なに!？」

「も、もしかしてヨハネの魔力が暴走を!？」

「そんなわけないぞら!」

あまりにも色々なことが起き過ぎて、みんなも若干の慣れがあるようだ。それが逆に危険なのだが。

「あ、あれを見てください!」

ダイヤが指を指した方向に視線を向ける。すると一台の車が、蟻地獄のような巨大な

砂の渦巻に巻き込まれてしまったのだ。その後、アリブンタは地中から姿を現す。

「か、怪獣っ!？」

「チツ、怪獣じゃない。『超獣』だ」

曜のその叫びを聞いたアオボシは、舌打ちしながら訂正する。

「普通怪獣だけでいいってのに……」

「今そんなこと言う!？」

一眞の発言に突っかかる千歌だが、ダイヤの呼びかけにより避難していく。

「俺がやります!」

「一眞さん、お願いしますわ!」

「はい!」

ダイヤの言葉に背中を押され、一眞は人気のない場所まで走る。そして、今度こそオーブカリバーを天高く突きあげるのだった。

青い光の柱は、まるで天と地を繋ぐようにして現れて人の姿をとると、オーブオリジンへと姿を変える。アリブンタと対峙し、聖剣を構える際に発した光芒は、彼自身を囲みこんだ。

「そうだ、わかってるじゃないかシリウス」

その姿を見て、アオボシは狙い通りだと口元が緩んだ。

その笑みが合図になったかのように、同時に片足へと力を伝えた2体は中心あたりで激しく火花を散らす。

アリブンタの強力で鋭い両腕のハサミ。そして抜群の切れ味を誇るオーブカリバー。どちらも譲らぬ威力でぶつかり合う。

「■■■■ ツー!!」

連続して迫る攻撃を、オーブカリバーを使つて的確に防いでいく。時には弾き、時には中心部で受け止めて押し返す。柄頭で打撃を与えてからの連続斬り。次第に大きくなる隙を体術で埋める。

「ハアアアアア……」

ハサミから撃ちだされた高火力の火炎放射を聖剣で防ぎながら、開いた距離を詰めていく。

「オリヤアアアアー!!」

打撃で顎を捉えてからの振り上げ斬りが、見る者に恐怖を与えるその頭を捉えた。

地面を揺らす轟音とともに伏せるアリブンタ。

「ウオオオオ……」

伏した体に向かい飛び掛かった巨人は、手刀や殴打を首元に食らわせる。

「■■■■■■■■■■ ツッー！」

すると、大蟻超獣の名の通りである鋭い顎から噴出した煙状の酸がオーブを襲った。

（うっ、目、目が……）

酸の激痛に襲われる中、アリブンタが地中へと潜り込んだ。

（く、くそっ……このためか）

酸で目くらまし、そしてわずかな隙に地中へと潜り込む。アリブンタの厄介なところである。

「ちよつと、そんなの卑怯じゃない！」

善子も非難するが、当然アリブンタには卑怯と思う心も、慈悲なんてものもない。ヤツはかつて、こことは別の地球の侵略を目論んだ異次元人が製造、使役した怪獣を超える力を持つ改造生物。感情なんてものは無いのだ。加えてダークリングで呼び出されたということが、さらに拍車をかける。

（どっだ……）

地中にいる、そして猛スピードで進んでいるという状況下ではオーブはヤツの姿を捉えることができない。

「……ッ!!」

突如背後から飛び出したアリブンはオーブに飛び掛かりさっきの仕返しと言わんばかりにハサミで攻撃を与え、さらに火炎放射を浴びせた。

「オアアアアッ……グ、クッ……ッ」

地面に倒れたオーブに、先ほどの応酬とも言える攻撃を与え続けていく。

オーブが反撃するも再度地面に潜り、隙を突いて足元を狙って転倒させると同時に鋭いハサミの斬撃。

「ッ!? グハッ……」

地中に潜られては死角からの不意打ち。その繰り返しではあるが、実に凶悪な手段であった。このままではこちらの体がもたない。

「罅が明かねえ……」

だが死角とは言っても、アリブンはオーブに攻撃が当たる範囲内でしか動かないはず……。一眞はそう考え、切っ先が黄色に輝くオーブカリバーを握ると地面に突き刺した。

(来い……)

チャンスは一瞬。オーブは全神経を集中させる。

「■■■■■■■■■■ ツーラー!!」

現れたのはオーブの左斜め後ろ。

(そこだ……オーブグラウンドカリバアアアッ！)

あらかじめ発動させ、その機を伺っていたオーブ。地上へと出てきた気配を察知すると同時に放たれた地を這う光線は、アリブンタへと直撃する。

「当たった!」

その戦いを見ていた千歌も喜びに声を上げる。

「もう一発! オーブウインドカリバー!」

斬り上げる同時に発動させた暴風は、超獣の体を包み込み空へと吹き飛ばした。

浮力を失い、重力に引かれた体は駿河湾へと真つ逆さまに墜落。巨大な水柱が昇つていく。

「そうだ! そのまま火のエレメントを使い!!」

待ちくたびれていたアオボシだったが、ようやくお目当てのものを使ってくれるかと表情を明るくする。

——しかし

オーブはカラータイマーから光を発したのだ。それはつまり——

《ウルトラマンオーブ ストリウムマイト》

紅蓮を纏った一閃が、アリブンタの腹部へとめり込み、吹き飛ばした。

「……………は？」

予想外の出来事に、アオボシは目を丸く開いてしまう。困惑は失望となり、やがては怒りとなって彼の内から外へと発される。

「オイ……………おま……………お前え！ 何やってるんだよ！ なんでそのまま火のエレメントを使わないんだああオイツ!?」

アオボシの声など届くはずもなく、2本角のオーブは素早く立ち回る。攻撃を受け止めると同時に腕や腹に殴打。さらに蹴り上げから、空気を切り裂く勢いのまわし蹴り。

アリブンタの後退で空高くまで上がり、太陽の光を反射する水飛沫。

「ウルトラフリーザー!」

それを瞬時に冷凍。氷の針となってアリブンタを牽制する。

「■■■■、■■■■ツーーー!」

負けじと火炎放射で対抗するが、オーブも燃やした拳で対抗。そのまま打ち勝つと同時に空へとジャンプ。二重三重と捻りを加えたキックが顔面へと直撃し、フラフラとおぼつかない足取りになった。

「なんでだよオイツ! なんなんだよっ?! 僕の計画通りに動けよコノヤロオオオオ!!!」

頭に血が上ったアオボシは叫び続ける。

「コイツで……終わりで! ブラストリウム……光線ツ!!」

放たれた炎の奔流がアリブンタという超獣の肉体を完全に破壊せしめたのだった。

「ウアアアああああああああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

想定外の事態に陥ったアオボシは頭を掻きむしりながら発狂し、その場に崩れ落ちる。

「これが……僕とお前の差なのか……シリウス……?」

……彼の問いに、答える者などいない。

太陽の光を背に立つオーブは浦の星、そしてA q o u r sの面々を見つめる。

足掻いて足掻きまくる……。そしてキセキを起こすと誓い合った彼女たちならば……。

こちらに向かって笑いかける千歌たちへ頷いたオーブは青い空へと飛翔していく。

——まるで風に乗ってどこまでも飛んでいく、紙飛行機のように。

第39話 宝石と真珠

——あれはいつの話だったか……。それはまるで夢幻のよう……。

——彼が見ていたそれを、私はただのぞき込んだだけ。その時はよくわからないなどと口にしていたが、今思えばそれがキツカケだったのかもしれない。

——当時の記憶を封じられ、得体のしれないものを頭に詰め込まれたような感覚の中、私は地球に戻った。

——いくら自分の記憶が封じられていても、私は何度だって好きになる。

——私はあの時、体育館での輝きを見た時に、それを感じ取っていたのかもしれない。でも、頭に詰められた“何か”が邪魔をする。

——地球人の私、侵略者としての私。時折、どちらが本当の自分かわからなくな

るほどだった。

——スクールアイドルを見ていたいと思いつつも、私は地球に牙を突き立てる。偽りの記憶と、偽りの憎悪を迸らせながら、彼に向かって禍々しいリングを取り出す。

——本当は嫌だと藻掻きながらも、気付けば彼が倒れている。

——思ってもないことを彼に投げかけてしまえば、戸惑いと悲しみの表情が、私の心突き刺していく。

——しかしある戦いの中で、彼の言葉が偽りの記憶を剥ぎ取ってくれた。そして……

「——オーブスプリム……カリバアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

シリウスの放った一撃が私に直撃するとともに、視界が暗転する。そして、私の頭に

纏わりついていた”何か”も、目覚めたころには消え去っていた。

——
けど

「もう、許してくれないよね……」

久しぶりに発した言葉は、そんな諦めと後悔を含んだものでしかなかった。

くく

「はい、今日の練習はここまで！」

足掻くと決めたあの日から、すでに数日が経とうとしている。説明会の件は鞠莉がどうにかして説得を行っているようだが、向こうから返事がないとのこと。しかし、諦めの表情は見えなかったのも確かだ。それでも折れずに、鞠莉も説得を続けると言っていた。

「疲れた〜」

「千歌ちゃん、お疲れ〜」

早速使わせてもらっている沼津のスタジオ。千歌は終了の合図と同時に横になり、曜が水を持って労っている。

「こいつで……ラストツ！ はあ……はあ……はあ……はあ……痛い、腹筋痛い……」

一真もトレーニングを終えたようで、額には大量の汗がにじんでいる。

「カズくんもお疲れ。はい水！」

「……悪い、本当は俺がやんなきゃなのに」

「いいの、いいの。今日は私がダンスを見る側だったから」

曜はまぶしい笑顔とともに敬礼のポーズを見る側だったから。ダンスレッスンでは、ローテでカウントを刻んだり動きを見たりしているのだ。

すると曜はすかさず一真の横に座り、ある頼み事をしてきた。心なしか、言葉の歯切れが悪い。

「次の休日さ、衣装の生地を買いに行きたいんだけどカズくん……」

「いいよ。荷物持ちなら任せてくれ！」

曜の誘いをちゃっかりと受け入れた一真。だが一真に、彼女の真意が伝わっているかと聞かれると怪しい。曜も不満そうな顔を見せるが、一真にその訳を話すことは無いだ

ろう。

そんな彼ら以外のメンバーも、個々にストレッチや水分補給などを欠かさずに行っている。しかし、1人だけ上の空になっている人物がいた。

「どうしたの、ルビイちゃん？」

花丸は考え事をしているルビイへと声をかける。しかし次に返ってきたのは、彼女本人の声ではなかった。

「リトルデーモンの囁き、このヨハネが受け取った……ズバリ——」

しかし善子が全貌を言い渡す前に、ツインテールに結った赤い髪が揺れる。

「……スピカちゃん、どうしてるのかなって」

「話聞きなさい！」

「あつ、東京で会った子ずらね」

「ズラ丸も無視しないでよ！」

仮に同じような対応を受けたことがあるとはいえ、どちらにもスルーされてしまう痛みは慣れないのか、声を震わす善子。

「だって善子ちゃんはスピカちゃんと会ってないすら」

「だからヨハネ！　って誰の話よ、それ？」

以前、東京のライブと呼ばれたときに出会った少女。ルビィや花丸のこと……スクールアイドルを知っているピンク髪の少女だと花丸は説明する。

「ピンクの髪の毛……？ それって!？」

善子の記憶は、数か月前の出来事にアクセスしていた。ゼツパンドンにオーブが破れ、一眞の正体がバレた日。その現場には、ピンク髪の子がいて、ルビィや花丸が動揺していたことを思い出す。

「見た感じ、あまり友好的とは思えなかったんだけど？」

善子が見たのは、男と共にいるスピカの姿だけ。見たからに一眞を襲おうとしているようだった。それに加え、善子は過去に宇宙人に誘拐された過去がある。そう思えば、彼女の言い分も仕方ないのかもしれない。

「善子ちゃんよりも友好的すら」

「それどういう事よー!？」

花丸と善子はいつも調子だったが、ルビィは気になるようだ。同じスクールアイドルを愛するものとして、彼女の“好き”本物だった。では、何故あのようなことをしていたのか……。まったくの謎なのだ。

怒涛の日々の中で薄れていたのかもしれないが、一度思い出すと沼にはまったかのよう疑問の穴に落ちていく。

「ルビィ、それに花丸さんも善子さんも、早く着替えて身体を冷やさないように」
ダイヤの声で、我に返るルビィだったが彼女への心配、そして疑問は喉につつかえた魚の骨のように残留し続けるのだった。

休日、久しぶりのオフである今日。花丸や善子が気晴らしにと3人で出かけた公園で、その再会は果たされることになるのだった。

「ルビィちゃん、どうしたずら〜？」

ふと、ルビィが立ち止まったのだ。その瞳はまっすぐに何かを見つめていると同時に、彼女の息を呑む音が聞こえた。

「……あれ」

「あれ？ なによ……つてちよつと!?!」

するとルビィは脇目もふらずに一直線に走りだしたのだ。あまりの唐突さに、花丸と善子は彼女と距離が離れていってしまふ。

「ルビィちゃん、待つずら〜！」

「どこに向かつてんのか教えなさいよつ!?!」

そんな2人の声すら届かないのか、ルビィは四肢に力を入れる。そして目的の場所ま

で着くと肩で息をするよりも”そこに座る人物”に手を伸ばした。

「ルビイちゃん！」

「その子って……」

以前に聞いていた容姿と一致したことに息を呑む善子。自分と同じくらいの背丈に、ピンク色の髪……。ルビイの差し伸べた手に困惑しているのか、目を見開くことで彼女の綺麗な金色の瞳に自分の顔が反射する。

「久しぶりに会えたね……スピカちゃん」

安堵と嬉しみに口元が緩んでいくと同時に、そのエメラルドグリーン色の瞳に涙が溜まる。

「あなたは……黒澤ルビイ、さん……?」

しかし不思議なことに、彼女は以前会った時よりも幾分か弱々しくなっているようだ。まるで、動物におっかなびつくり触れようとしているみたいに。

「どういうことよ。前に見たよりずいぶん弱々しいじゃない」

「マルにもわからないぞら……」

一瞬だけしか見ていない善子ですら、その変わりように首をかしげてしまうのだった。

「どう、落ち着いたかな？」

公園に設けられたベンチに腰掛けたスピカに、ルビイはそつと尋ねる。彼女は、何も言わずとも首を縦にコクつと振る。さらにルビイが渡した飲み物を両手で持つて口へと運ぶ。

花丸と善子も隣で座つて2人の様子をうかがっている。

「どうして……」

スピカの発した言葉に、ルビイは聞き返す。すると、彼女はポツリポツリとはあるが言葉を紡いでいく。

「どうして私なんかに、構うの？ 私は……怪獣を召喚して……みんなを襲つて……シリウスにもひどいことして……私なんか……」

自身のやってきた過ちに涙を流す姿には、善子や花丸も声をかけようと傍に寄つていった。

「……本当に悪い人なら、泣いたりしないんじゃないかな」

スピカはルビイの方へ顔を向ける。

「ルビイは、怪獣とかウルトラマンとか……あまりよくわからないんだ。かず……その、ウルトラマンが守ってくれてるってことぐらい」

握った両手を見つめながらルビイは自分の想いを伝える。

怪獣やウルトラマン……。スピカが捉えている意味と、ルビイが捉えている意味では異なるものだ。それをルビイがどうこう言えるものでもないというのは、彼女が一番理解している。

しかし、彼女とスピカを繋げるものが存在する。

「でも、スピカちゃんがスクールアイドルが大好きってことは、最初に会った時からずっと伝わってきてたんだ」

ルビイはスピカの冷たい手を握る。

スクールアイドル。届ける側と受け取る側で立場は違えど、その想いは同じ。

「ルビイはただの……。スクールアイドルが大好きな友達として、スピカちゃんとお話したいな」

彼女の言葉はスピカの心を優しく包み込み、溶かしていく。そしてスピカも、握られた手の上からさらに手を重ねた。

そして4人の仲は急速に深まっていく。互いの好きなもの、互いの短所、今までのこと……。彼女たちはありつたけの言葉を交わしていく。話していくと、スピカとルビイが同い年だということもわかってきた。

「ね、ねえ、ルビィ」

「どうしたの？」

「あ、あのね……私、会いたい人がいるの……」

ふと、スピカはぼつが悪そうな顔で尋ねた。それは彼女が初めて会った宇宙人。かつて怪獣で襲ってしまった男の名だった。

「誰のこと？」

しかし今は別の名であることから、ルビィや花丸、善子は首を傾げる。

「ええ!? だから、ほら、A q o u r s のマネージャーの」

「あ、一真さんのことだね」

一真……はて、いつからその名前の替えたのだろうかとスピカは頭を巡らせるが、彼女にはわからないだろう。彼が名前を変えたということも、記憶を失っていたことも。

「そ、そうよ。それで……かずま? に会いたいんだけど、頼めるかな?」

—— わかったと言いかけた瞬間

「あらあら、随分と楽しそうにしてるじゃない、スピカ?」

大人の女性の声が背後から聞こえ、スピカは背筋を震わせる。その豪勢なドレス姿

は、まるでモデルが撮影現場から逃げ出して来たかのような異質感を放っていた。

「あなたは……!?!」

会いたくもなかった人物の出現に、彼女は声を震わす。

「えっと、スピカちゃんの知り合——」「っ、逃げて!」

ルビイの声よりも早く、スピカは彼女たちに警鐘を鳴らした。しかし、突然のことで戸惑ってしまうのも無理はない。脚を動かすことができないルビイたち。

「どういたのよ、いきなり……」

「今は話てる暇はないの! はやく!?!」

スピカの剣幕に押される善子。そこで彼女の勘が囁いた。これは本当に逃げなくてはいけないものだ。

「ならスピカちゃんも一緒に逃げるすら!」

どうにかして一緒に逃げられないかと聞くが、彼女は答えない。

「随分と友達思いな子たちね。私感動しちゃったわ」

いかにもわざとらしい言い分だ。証拠に彼女の口元には笑みが浮かんでいる。

「それに、今の私は襲いに来たわけじゃないの。ただ聞きたいのよ。あなたがこちら側に戻るかどうかをね」

「こちら側……。その言葉でスピカは悟る。ああ、連れ戻しに来たのだなど。しかし、

ヴィルゴに至ってそんな慈悲深くあるはずもないだろう。さしずめ、心を抜き取って案山子のように永遠に働かせる気だ。ならば、アオボシが来たほうがまだマシだった。

「私は……」

「どうする？　今戻ると言えばそれなりの罰で済むけど？　なんならお友達を消し飛ばしちゃう？」

ヴィルゴの視線がルビイたちに向けられる。まずい。彼女は誰かを甚振るためなら手段など選ばない。

「私は……」

「ん？」

しかしルビイたちは、私を侵略者としてではなく、ただの同年代の女の子として見てくれた。ルビイも花丸も善子も、私をただの友達として……。

なら、私のすべきことは決まっているんじゃないのだろうか。私を助けてくれた、彼らのように……。

「私は、あなた達のもとになんか行かない！　ここで、この地球で生きていくの!!」
言い放ったスピカは、ルビイたちの手を引いて走り出した。

「逃げようっ！」

段々と小さくなっていく4つの背中を見たヴィルゴは舌打ちをする。

「そう。逃げるのであれば、それなりの罰は覚悟するのね……」

まるで幻術のように姿を消していく彼女の手には、ダークリングが握られていた。

く

「ちよつと、何なのよあの人!? 説明しなさいってば!」

走りながらも状況が掴めない善子は説明を要求する。

「マルたちにも教えて欲しいぞら!」

「あれは……地球に眠る怪物を求めに来た男の部下よ」

「地球に眠る……怪物?」

スピカの発した言葉、それはルビイには想像もつかなかった。今までずっと住んできたこの星に、いったい何が眠っているのだというのか。その漠然と佇むような気配に、ルビイは時季外れの寒気を感じた。

「そしてあの女はただ自分の欲を満たすだけに、不幸をばら撒く存在……」

「だったら、一眞を呼ぶべきよ!」

善子の方へ顔を向けようとした瞬間

「そうね、オーブでも呼びましょうか」

いつまだ立っても耳に纏わりつく声が、再び鼓膜を振動させる。

「な、なんで……」

「このくらい簡単なことよ、私にとつては」

待ち構えていたかのように、目の前に立つヴィルゴ。彼女は笑みを浮かべたまま、
ダークリングに解呪のカードを通した。

《レッドキング》

ダークリングから発せられた闇の波動は、そのままルビィへと向かっていく。

「ルビィちゃん!!」

「——ッ!?!」

しかし、その波動がルビィに当たることは無く、気付けば突き飛ばされて地面に尻もちをついていた。

「ア……アア……」

目線を上にあげると、目の前には影が1つ。そう、スピカが盾となって代わりに受けたのだ。

波動を受けたスピカは膝をつき、虚空を見つめる。

「アハッ、アハハハッ、予想通りよ！ あなたの友達想いなトコロ、本当に好きだわ！ 倒した相手が、彼女だなんて、オーブはどう思うかしら。逆に彼女がオーブを殺したと知ったら……ああ、たまらないわっ!!」

顔を赤く染め、瞳を潤ませているヴィルゴ。彼女はこれから起きるであろう不幸を楽しんでいるのだ。

「さあ、存分に暴れるのよっ!!」

もう一枚カードをリードし、黒く染まった羽根状のパーツが開かれた。

《キングジョー》

波動は黒煙へと変わり、スピカの体を包み込む。そして沼津上空で怪獣へと変貌、街へとその巨体が降り立った。

《レッキングジョー》

剛力を思わせるその四肢。しかしそこに生物感などなく、腕や脚の付け根には機械の突起物、そして胸部はは怪しく発光している。さらに、身体中のいたるところから蒸気が噴き出している。さしあたり、強引にサイボーグ化された生物ともいえる外見だ。

その不気味な稼働音が静かだった街に響き、人々の不安を煽る。

「そ、そんな……スピカちゃん……」

花丸と善子、そして2人に支えてもらっているルビイは瞳と体を震わせている。新たにできた友人が、禍々しい光から自分たちを庇って怪獣となったのだから無理もない。

ルビイが小さく眩いた声に反応したように、その怪獣の瞳が輝く。

友人の変貌した合体怪獣は、機械的、生物的な声を合わせた歪な咆哮を街中に轟かせるのだった。

第40話 スターズインページョン

「たくさん買ったな……」

「そうだね、でも衣装を作るとすぐになくなっちゃうんだ」

大量の荷物を両手で持った一真と、後ろに手を組んで彼の少し前を進む曜。以前曜が誘った生地集めも、そろそろ終わりを迎えようとしていた。

今朝の集合も、そんなに早い時間帯でもなかったためか何事もなくスタートした。

「さあ、制服の生地を求めて全速前進、ヨーソロー！」

曜はなんだか張り切ってたなと一真は感じていたスタートではあったが、特に気にしていないのが一真だ。

衣装の生地……。大体は想像出来ると言っても、一真には未だよくわからないものだ。だからこそ曜と共に見て回るその知らなかった世界は、彼にとって新鮮な経験になつていた。

「どつちの色がいいと思う？」

「俺に聞かないでくれ……」

「ええ、たまにはカズくんの見聞も欲しいんだけどな。ね、一回だけ！」

曜の願いに渋々承諾する一真だったが、このやりとりはこの後数回は繰り返すことになった。

「ね、もう一回だけ！」

「いや、さつきも一回って言っちゃたよね!？」

そうして、まだ早い時間帯ではあるが生地集めは終わろうとしているのだ。今は、公園の近くをゆっくり歩いている。これもまた曜の誘いだつたりする。

「ねえ、ホントに大丈夫？ 買ったのは私だし半分持つよ？」

「いいって、俺は荷物持ちなんだからこれぐらいはやらなきゃ」

一真は笑顔で答えるのが、逆に罪悪感を増させる。加えて彼は荷物持ちという役割故に呼ばれているのだと本気で思っているみたいだ。

「もう、聞き訳がないな……らっ！」

曜は、一真の手から荷物を取った。

「ちよつと……曜、待て！」

「へへ、荷物持ちとして役割を全うしたいなら、私を捕まえてね！」

いつもの敬礼をポーズをした彼女はすぐさま走り出した。さすがは運動部。彼女の

瞬発力、ここでのスタートダッシュは凄まじいものだ。

「あははは、ほら、こっち」

「ちよつと、荷物があつて走り難いんだって……!」

ひとしきり追いかけた2人は、近くのベンチに座つて休んでいた。

「はあく、やつぱり走るのつていいね!」

「いつも走つてるだろ……それに今の、なんか果南みたいだな」

「言われてみれば……そうかも!」

そこでまた面白くなって、自然と笑みが零れる2人。

さらにしばらくの沈黙の後、おもむろに口を開いたのは曜だった。隣に座る彼の顔を見ようとはしなかったが、その声の調子は先ほどとは真逆であつたため、いつになく真剣な話であることが伺える。

「何か……あつた?」

「え、どうしたの急に」

一真には曜の質問の意味がわからず聞き返してしまふ。曜も曜でどう伝えるべきか悩んでいるらしく、「うゝん」と言葉を詰まらせた後に、改めて言葉を発する。

「練習中つて言うか……カズくんが鍛えてる姿を見てるとき、なんか焦つてるように見

えるんだよね」

「そりゃあ、あれだけのセット数だから——」「そうじゃなくて」

珍しく発する曜の圧に一眞は押されてしまう。頼ってほしいと言われたことを思い出した彼は「ごめん」と謝り、彼女が感じたものの正体、そして理由を語る。

「前に月で戦った時、俺思ってたんだ。自分の知らないところで、自分の知らない脅威が、この星に牙をむいているんじゃないかって……」

彼はこれまでに地球を狙う異星人と拳を交えてきた。そこで彼は思ったのだ。この星を狙っているのは、アオボシたちだけではないこと。そしてまだ見ぬ脅威がこの広い宇宙に蔓延っているということ。

「だから、怖い……のかも知れない。どんなに頑張っても限界があるってことは、俺自身が一番わかっている。でもそれを認めたら、本当に守りたいものも守れないんじゃないかって……」

その恐怖心と不安が、一眞の鍛錬に打ち込む理由なのだった。果南に提案されたトレーニング。しかしその果南に小言を言っていた一眞は、彼女が示した以上のセット数を隠れて行っている。

自分が受け入れたその結果だとしても、中に刻まれている意志まで完璧になるわけではないのだから。

「……難しい問題だね。悔しいけど、私が聞いてどうこう言える問題でもないかな」

言葉通り、曜は悔しそうにスカートの裾を強く握る。彼の言葉はスケールが大きすぎる。守る側と守られる側という立場の違いが、彼にかける言葉を滲ませる。

「でも……」

それでも今、彼女がただ感じたことを伝えるのが、一番いいのではないだろうか。

「私ね、安心しちやったかも」

「……安心?」

「うん。なんか、カズくんがどんどん遠い存在になっていってる気がしたんだけど、やっぱり違った」

横へ顔を向けるとさつき真剣な表情ではなく、どことなく澄んだ雰囲気纏っているように思えた。

「その怖いって気持ちがあれば、カズくんはもっと強くなっていけると思う」

怖いと思うことが力に……? 一眞は首を傾げる。

「力に溺れてないって感じかな。カズくんほどの力をもつてたら、誰でも満足しちゃおうと思う。でもさ、〃守れないかもって……!〃って不安で怖い気持ちがあるなら……何度でも立ち上がれるし、限界だつて越えていくと思う」

力に溺れず、不安や恐怖と言った実に普通の、生物的な感情があるからこそ自分はま

だまだ強くなれる。今はまだ、そういったマイナスの面が自分中に蔓延ってはいるが、それがいつか自分の力となる日を信じて共に歩んでいく。

人が誰しも、光と闇を抱えているように……。

そんな曜の晴れやかな表情と共に発せられた言葉を聞いた一真は、思わず笑みをを零してしまう。

「そこで笑う!? 私、結構真剣に言ったんだけど?」

頬を膨らませて怒る彼女に謝罪する一真。

「違うんだ。曜の言葉が、俺の考えている不安を簡単に吹き飛ばしたのが凄くてさ」
自分でうだうだ考えていた時よりも、何倍も早く頭がクリアになった。

「そ、そう……? なら、いいんだけどさ……」

隣で何かを誤魔化すように天を仰ぐ彼女を見つめ、再度頬を緩ましている。

だが、そこ近づく足音が一つ。さらに、その鬱陶しいほどデカい声は公園を揺らしているようだった。

「へえ、オマエがオーブってヤツか! 見た感じあのヒョロガキと変わんねえな!」

この場には似つかわしくない……今の時代とは遠くかけ離れた姿の男の姿がそこにはあった。ゲームに出てくる、拳闘士と呼ばれるキャラクターが身に付けていそうな衣装だ。

金赤の短髪が太陽に照らされ煌めき、睨んでいる緑の瞳だけでこちらを刺してきそうだ。日焼けした筋肉質の肌も照らされ、それはまるで全身が燃えているようにも感じられる。

「オレはオマエと戦いたくてうずうずしてんだ！ リゲルがどうこう言おうと関係ねえ！！」

「一方的にもの言いやがって……お前は何しに来たんだ!？」

立ち上がった一真は盾になるようにして曜の前に立つ。今彼が抱いているのは言葉からもわかるように、一真たちにはとても友好的ではないことを示している。加えて一真たちを見据えるその瞳は、まるで飢えた獣のように獰猛で、凶悪で……そして危険だった。

そして口角を上げた彼は腰を落として構えをとる。体が燃え上がっているかのようなその姿で、男は口を開く。

「何って、オマエと戦いたいだけさ！ 力の強いものだけが生き残る……これだけで熱くなるなんてモノはねえだ……ろおっ！」

彼がロケットの如く飛び出し、瞬きをした後には――

――下から抉ってくるような彼の拳が一眞の腹に食い込んでいた。

「がつ……!?!」

食い込んだ場所から放たれたパワーが、一眞の体を引つ張るかのように後方へと運んでいく。大量の土煙を発生させながら一眞は地面を二転、三転とする。……転がるなんて生易しい表現ではないが。

「カズくん?!」

曜はたまらず彼の名を叫ぶ。地面に伏した一眞はどうにかして起き上がるが、先ほどの衝撃と痛み、そして多くの酸素が抜けていったために顔を歪めていた。

「……なんだ……お前……?」

彼の纏っている物からすでに怪しかったが、先の攻撃で確信が持てた。彼も地球の生物ではない。

「今のを耐えるとは、さつすがはオーブだ。まあ、今のはほんのあいさつ代わりだがな。オレはプロキオ。アルファルド様に仕える者だ」

アルファルド……。リゲルが仕え、そしてアルデバを消滅させた男。氷のように冷徹で、心に穴の開いた男。

「面倒くさいのがまた増えやがった……」

彼以外にも仕えている者がいるのは承知済みだが、これほどの力を持った存在がいるとなると話は別だ。

「ゴチャゴチャ言ってるじゃねえ!!」

すぐさま地面を蹴ったプロキオの風を切り裂く剛腕が一真へと迫る。間一髪でその拳を躲すことに成功。こちらにも反撃に出るが、こちらの攻撃は見えていると言わんばかりに軽々と躲していく。

「話が早えのは良いことだが……」

片腕を掴まれ、視界がグルッと回転すると同時に“地面に立っている”という感覚が消失する。

「そんな甘つちよろい攻撃じゃ、オレには当たらねえ!!」

一瞬何が起こったかわからなかったが、迫りくる地面に気付くと腕をバネのように使って体制を立て直す。相手も待つてくれるはずもなく、何発もの拳撃が一真に迫りくる。腕を用いたブロックも多用するが、こちらの腕が持たなくなるのは確実だ。

「……の野郎っ!」

瞬時にブーストされた左腕を振るうと同時に、右足で蹴り上げる。相手の反撃を見越して、次の一手を打つ。

(力を……貸してくださいっ！)

自身の内で眠る彼に念じると、体が軽くなっていく。加えて先よりも攻撃の見切りやすくなった。

一真が先ほどまでいた空間を、赤く燃え上がらせたようなプロキオの拳が突き抜ける。横へとステップしていた一真の肘が顎を捉え、彼の頭が強引に曲げられる。

「へへ、楽しいなあああ!! ええ、オオオオオオブ!!?」

口に溜まった血を吐き出しながら、再度の突撃。

一真の視界から消え、真下からの足蹴りのラッシュが彼を襲った。

「ぐはっ……ごほっごほっ……」

全身に傷を負った一真は、膝をついて咳き込んでいる。だが、依然としてプロキオはピンピンしているようで彼に歩み寄ってきている。このまま命を奪う気なのだろう。

「楽しかったが、まだオレには及ばないみたいだな。もつと熱くさせてくれると思ったのに残念だよ」

曜の叫ぶ声が聞こえた直後、2人の間に人影が乱入してきた。

「ずいぶんと楽しそうなことをしているじゃないか?」

「お前……なんで……」

「てめえ……」

一真には振り返らず、アオボシはプロキオを直視している。

「手を出すな……そう言ったはずだけど？」

「はっ、誰がヒヨロガキの言葉なんか聞くかよ。それに、アルファルド様の許可だってあるぜ？」

「はあ……？」

「どうやら、内部でも上手くいつてなような感じを連想させる。さらにプロキオは続けてヴィルゴと名乗る者が提案したことらしい。」

「アイツのことだ。なにか面倒な計画でもやってんだろ。……つたく、オレは冷めたし帰る」

すると、遠くの方で地響きが起きる。何か巨大なものが降り立ったかのようだ。

「カズくん、街の方に怪物が!？」

「なに……!？」

曜の言葉はアオボシにも予想外だった見たいで、一真とリアクションがシンクロしてしまう。

「あれはレッドキング……いやキングジョー……どういうことだ？」

アオボシは事情を把握していそうなプロキオを睨むが、彼は1つだけ告げた。

「オマエ、ダークリング持つてるのか？」

しまったと言わんばかりにアオボシは探るが、そこにダークリングは存在しなかった。

「成程ね……僕から盗んだってワケか……」

「へッ、そういうことだ。ヴィルゴはオーブの知り合いでも怪獣にしたんだろうさ」

彼から告げられたことの衝撃に目を見開く。まさか、A q o u r sの誰かが怪獣にでもされたというのだろうか。一眞はすぐさま立ち上がろうとするが、未だに傷が痛んで上手く立ち上がれない。

「カズくん、大丈夫！」

「ありがとう、曜」

すかさず曜が肩を貸してくれたおかげで、何とか立ち上がることができた。

加えてプロキオはやる気が削がれたようで踵を返すが、立ち止まって一眞へと一言だけ言い残す。

「オーブ、また勝負をしに戻ってきてやる。必ずだ！」

背を向けたままでも、こちらに向かってくる圧に気圧されそうになる。それだけ伝えた彼の姿はアオボシと同じく、闇に包まれるようにして姿を消していくのだった。

「言っとくけど、今回は僕が召喚した怪獣じゃないからね」

何か言われると思ったのだろう。アオボシは腕を組んだままそう伝えてくる。

「そんなことはどうでも良い。今は、あの怪獣を止めないと……」

「でもカズくん、あの怪獣つてもしかしたら……」

曜もさっきの話を聞いていた。ならば、あの怪獣がA q o u r sの誰かという可能性もあり得ることはないということだ。

「大丈夫、今度こそ救い出してみせる！ ああ、あと……」

一眞はアオボシに触れると、何かを念じるようにして目を閉じる。同じ種族同士が触れ合うことで、生体エネルギーを送ることができるようになり、逆に奪うことも可能なのだ。一眞のケガは全快とは言えないが、ある程度は治癒することができた。

「よし……サンキューな」

「お前が勝手に奪っただけだろ……」

少し青白くなった顔のアオボシが睨むが、一眞は気にせず曜に「行つてくると」とだけ伝えてオーブリングを空に掲げた。

光となった彼は、街を破壊している怪獣へと向かっていく。そして赤き形態バーンマイトへと変化させ、何度も捻りを加えたキックを食らわしていた。

公園に残された曜とアオボシの中には、実に嫌な空気が流れている。それもそのは

ず。以前一眞の正体を知った日、そして千歌の病室に彼が襲いに来た時と彼の悪行を目にしているのだから。

「彼の近くまで——」「私があなたのいう事を信じると思うの?」

「まあ、信じてくれないとは薄々わかってたよ。さつきからおもいつきり睨んでるしね」
「……でも、僕はあの近くにいるであろう、怪獣を生み出した人物と立ち会わなきゃいけない。それあの怪獣の近くには A q o u r s のメンバーもいるみたいだよ……えつと……あれは1年生の3人かな?」

話を聞いていると彼の企みが見え隠れするし、イラつともさせられる。現に彼は両手を双眼鏡みたいにして遠くを覗いている。言っていることがホントかどうかからないが、万が一もあるかもしれない。そう心配した曜は、彼について行くことを渋々了承するのだった。

第41話 狂暴城壁

「ウオオオラアアッ！」

捻りを加えて威力を増した蹴りが、レッキングジョーの頭部へと吸い込まれるように衝突する。まさしくダイナマイト級の威力により、機械仕掛けの怪獣は大きく後退した。

「■■■■ッーッー!!!」

目の前に降り立つた2本角の巨人を脅威と認識、そして倒すための意思表示なのか機械音にも似た咆哮を上げる。

機械と融合したかのようなその独特のフォルムと咆哮に気圧されそうになるオーブだが、自身を鼓舞するかのように自身の拳で胸を叩き構えをとった。そして淀んだ重い空気が支配していく中で、暫くの睨み合いの後両者が激突。

両者の凄まじい衝突によって、砂埃や道路の破片が舞い上がっていく。

「グウ……オオツ……！」

バーンマイトですら押されそうなその力強さに、オーブ^真は歯を食いしばって腰を入れて四肢に力を入れる。対するヤツは、合体元の2体の力強さを遺憾なく發揮して彼の体

を押していく。耐えようとして踏ん張るオーブの足元が抉れていくのがその証拠だろう。

「ウ、オオオ……」

易々と抑え込みそうなレッキングジョーに、オーブは声を上げて耐える。しかしその声がかすれ気味になっていくのが、彼の限界をうかがわせる。

「ク……又ウアアアアアッ!!」

そこでオーブは体から炎を放ってヤツの力を一瞬だけ弱らせると即座に腕を振り上げて脱し、側面を蹴り上げた。さらに剛腕から振るわれた攻撃を防ぎつつ、胸元にストビュームカウンターを放つ。

拳と共に放たれた衝撃波と炎の攻撃は、レッキングジョーとの距離を作ることに成功した。

(いったい誰が……誰が怪物にされたんだ……)

A q o u r s の誰かかもしれないことと以前の失敗があることから、彼は慎重にならざるを得なかった。しかし躊躇すればこちらがやられるのも、先のぶつかり合いで理解してしまう。歯痒さと不安を抱えながら、オーブは大砲玉にも似たその攻撃を回避していくのだった。

「ルビィちゃん、花丸ちゃん、善子ちゃん!!」

遠くからでもよく聞こえるその声に1年生3人は反応し、振り向く。そこには、私服姿で走ってくる渡辺曜の姿があった。

「曜ちゃん……」

その沈んだ声に、隣にいる花丸や善子は心配そうに肩に手を置く。

「大丈夫!」

曜は立ち止まるとすぐさま安否を確認した。怪獣の現れた現場近くに居れば心配するのも当然だ。

「マルたちは大丈夫です……」

力なく花丸も己の無事を伝えるが、その反応に曜は勘付いたのか「どうしたの」と問いかける。

「私たちの友達が……怪獣にされたのよ」

善子は苦しうに先ほど起こったことを伝えた。スピカという少女が怪獣になったという出来事を。

「おい、どういうことだ?」

すると、善子の話割って入ってきたのはなんとアオボシだったのだ。彼には珍しく余裕よりも動揺の感情が勝っている。

「アンタ、どうして曜と一緒にいるのよ!？」

善子の剣幕を面倒に感じながら首を振るアオボシ。曜はこれ以上ややこしくならな
いように「今は聞かないで」とだけ言っておいた。

「それより、スピカが怪獣にされたつてことはホントなのか?」

彼は詰め寄つて話を聞き出そうとする。その問いに答えたのはルビイ。

「ルビイを守つて……スピカちゃんは……」

今でもその状況を思い出そうとすると、自分の無力さに涙が出てしまう。曜はルビイ
を抱き寄せて背中をさすっている。

「あの女狐……余計なことしやがつて……」

アオボシは呟くと、すぐさま歩を進めた。

「どこに行く気よ!」

善子の怒りの籠つた呼びかけに、アオボシは振り向いて答える。今戦っているオーブ
に手を出すなという忠告が彼女からは伝わってくる。

「別にシリウスに手を出そうつてわけじゃない。それに今は手段がないしね。……この
出来事的首謀者にでも話をつけて来ようと思つて。あ、それと僕が言うのもなだけで
……もう少し離れてた方がいい。ここもじきに危なくなる」

そして彼は走っていく。目にした回数は少ないながらも、アオボシという青年からは

想像もできない光景を囁きたちは目にしていた。

「ハアアアアッ！」

「■■■■ツツ!!」

拳と拳がぶつかり合い、彼らを中心とした衝撃波が街を襲う。レッキングジョーの力に吹き飛ばされたオーブはビルを破壊してしまう。1棟、2棟と己の体が突き抜けていくがその勢いが衰えることは無かった。地面を転がり、背中が道路を抉つてようやく止まるころには彼のカラータイマーも既に点滅を始めていた。

（くそ、アイツとの戦闘のダメージが……）

合体獣の力強さもそうだが、さっきのプロキオとの戦闘も要因の1つだった。アオボシからもらった生体エネルギーも、一応の応急処置レベルだ。このようなコンデイションで、相手の強さを見誤って戦闘に立った自分に悪態をつきつつ、ビリビリと痛む全身を無視して立ち上がる。

あらゆる状況が悪い方向に重なってしまったが故に、次第に戦況は劣勢に傾いていく。腕の攻撃を受けてしまい膝をつけば、今度は屈強な脚力、そして機械仕掛けの生体構造を無視した出力から繰り出される蹴りが腹部や頭部に襲い掛る。ただでさえ威力の高い殴打のラッシュも、そう何発も受けていいものではなかった。

「趣味がいいとは言えないな……」

「……何の用？」

「別に？　ただ、君の嫌がらせは僕にも都合が悪くてね」

アオボシはヴィルゴを睨みながら詰め寄っていく。対する彼女も先ほどの笑顔は顔から消え失せている。今あるのは彼に対する嫌悪だろう。

「……何故スピカなんだ？」

「偶然よ偶然。オーブ知り合いでも怪獣にしてやるつもりだったのに、あの子が庇ったのよ」

「そうか？　それは結果的にそうなっただけだろ。どの道彼女を怪獣にするつもりだったのは見え見えなんだよ。君のその隠しきれない性癖と同じだ」

「……アナタ、随分とあの子のこと気にかけるのね。もしかして“せめてもの”……なんて思ってるのかしら」

彼女の投げかけた言葉に、アオボシは沈黙する。2人の相向かう先では、レッキングジョーの一方的な攻撃が行われており、いずれはこちらにも瓦礫が降ってくるだろう。だが今は気にしている暇などない。今はチャンスを待つだけ。彼女に何を言われようと……適当に返せばいい。

「そんな……ただ僕にも素直なパートナーが欲しかっただけさ」

「その割には随分気にかけているじゃない？ 3年間もあつたのに、私たちの侵略には連れ出さない。まるで、過保護な動物だわ。そのくせして地球には連れ出す。これがどういう事かわかつてるの？」

「地球は彼女の故郷だ。侵略でもなんでも、よく知っている人間がやるべきだろ？ それに、彼女は死にかけてたんだ。多少の手当では駒だとしても必要な処置だと思うけどね」

——そろそろか……

チラツと横目で確認すると存分に暴れまわっているレッキングジョーによつて投擲された瓦礫の雨が付近へと落下してきた。

——瓦礫の落下にともなつて砂塵が舞つた。ヴィルゴは腕で防ぎながら視線を先へと向ける。

そこに広がっていたのは、レッキングジョーがオーブに馬乗りになり拳を打ち付けている姿だった。さらにはその両腕で頭を掴み上げているではないか。

もがき苦しむオーブだが、その力故振りほどくことができない。

——
勝った。

そう確信すると同時に、自身の左手に違和感を感じた。指一本一本に感じるはずの、掴む感覚がないのだ。慌てて左腕を上げてみれば——

——
無いのだ。

——
確かに持っていたダークリングが。

「アハッ、アハハハハハ！ 返してもらったよ……ダークリング」

気持ちの悪い笑い声にイラつかせられ、横を見てみればアオボシがダークリングを取り返していたのだった。

「どういうつもり？」

「まだ地球の手出しは僕に任されているはずだ。手を出さなつて言つてんだよ、僕は」

「あつそ……好きにして頂戴。私が手を出さなくてもオーブはもう無理みたいだしね」

アオボシの警告そして態度にウンザリ、そして自分のオモチャが上手く機能してない

のが気に入らなかつたのか、彼女も踵を返していく。

「まったく、レグリオス星人つてのは飽き性だな。……その部分はA q o u r sを見習ってほしいね！」

レッキングジョーに苦戦するオーブをみて口元を緩ませながらアオボシもまた、ダークリングを構えるのだった。

一方的に振るわれる拳にオーブは悶える。体の中の空気が抜けるだけで、空気をうまく吸うことができない。抵抗しようにも、腕に力が入らない。

(けど……諦めて……たまるか……！)

この合体獣が変異させられたものならば、その中に居る誰かを助け出さなければならぬ。最後まで足掻くと決めた彼女たちの背中を見た者ならば、彼女たちを支えるマナージャーなのであれば――

己も最後まで諦める訳にはいかない。この猛攻に、どうにかして反撃のチャンスを感じ開けなければ……

(今のエネルギーでやれば最悪……でもコイツしかねえ！)

身体から熱を発する。内側からせり出てくるような炎の衝撃。限界まで貯めて……それを解放させる。

「ストビュームダイナマイト……!!」

全身から発した爆発がレッキングジョーを吹き飛ばす。ダメージにならなくても、吹き飛ばせるだけで十分だ。

「ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……」

距離をとることに成功したが、内心かなりキツイ。気を抜いたらすぐに変身が解除されそうだ。

カラータイマーの点滅も激しくなっている。ここで勝負をつけたいところだ。

すると

三日月状の光線が頭を掠めて、目の前の合体獣へ飛んでいく。衝突すれば身体を青い電流が体を駆け抜けていく。

「……ッ!」

オーブは背後の存在に気が付くと息を呑んだ。白い体に黒の斑点のような模様が浮かんでいる。それでいて胸から腹は、まるでゴツゴツとした岩石のような肌。鼻部や頭部の両端には三日月状の角が光っていた。

「よお、楽しそうだな。僕も混ぜてくれよ」

「お前……」

その怪獣の中から聞こえてきたのはあのアオボシの声だった。まさかこの機に及んで、2体を相手にしなければいけないのか……そんな焦りがオーブを駆け巡る。

「ハハハハッ……」

長い尻尾を振り回し、こちらに向かってまるで槍のように突き出した。

(この……ッ！)

数秒後に来るであろう衝撃に備えようと構えるが、彼の警戒は杞憂に終わる。

そのまま突き出していく尻尾は、レッキングジョーの足元を払い転倒させる。するとヤツのヘイトはオーブではなく怪獣に向けられたようで、怒声のような咆哮と共に駆けだしていく。

だがその攻撃が振るわれることはなく、レッキングジョーの体には先の尻尾が巻きつけられる。そして尻尾から放つ電撃を受けて、合体獣は体を痙攣させた後地面に倒れこんだ。

「お前、何してんだっ!?!」

倒れこんだことを確認し、尻尾を離れた怪獣。そこにオーブが向かっていく。だが、彼は冷静な声で言い放つ。

「大丈夫、短時間とはいえ眠らせただけさ。どうした、お前も時間ないみたいだけどどう

する？ やるのか？」

「何が言いたいんだ」

「撤退しようって言うってんだよこの馬鹿。彼女たちの話も聞いた方がいいだろうしね」

「……そうかもな」

怪獣が頭を向けた方向にはルビたち1年、そして曜の姿があったのだ。彼の言いなりになるのも癪だが、胸のカラータイマーも鳴っているのも事実。彼も攻撃する意思がないと思えたオーブは変身を解除。巨大な体が光の粒子として街に霧散していくのだった。

「大丈夫?!」

変身を解除すると、すぐさま曜たちが駆け寄ってくる。「大丈夫だ」と返した一真だったが、瓦礫でできた壁に手をつけてしまう。息も切れ切れなので、その言葉が嘘であることはすぐさまバレた。

「大丈夫じゃないときぐらい、大丈夫じゃないって言いなさいよね……って言っても聞かないわよね」

「悪い、つい癖で」

やれやれと首を振る善子に苦笑いで謝る一真。しかし時間が無い。一真是すぐさま

本題に入ろうと口を開いた。

「アイツから聞いたよ。話があるんだろ？」

「う、うん。それが、あの怪獣の正体……」

「知ってるのか!?! あの怪獣は、誰が変異させられたものなのか……」

曜も知ってるみたいだが、伝えるべきは自分ではないと思っただのか1年生の面子へと申し訳なさそうに目を向けた。

「あの怪獣は——」「花丸ちゃん」

花丸が伝えようとしたのを止めたのは誰でもないルビイだった。今でも脳裏に焼き付いている衝撃的な光景を彼女はありのまま伝えた。

「一眞さんはスピカちゃんのこと、知ってますか？」

予想だにしない名前が出てきたことに一眞は驚きながらも「知っている」と伝えた後に、彼女との慣れ始めも、本当の名前も……彼の知るすべてを伝えた。

「スピカ……じゃなかった珠冬って、地球人だったのね」

「今まで教えてなかったのは悪かった。でも、なんでルビイたちと……?」

一眞の疑問はそこだ。彼の目線からは、どちらにも接点が無いように思えたのだ。一眞への精神的な攻撃かとも考えたが、それができれば既にやっていただろう。

「珠冬ちゃんも、スクールアイドルが好きって言ってたから」

今度はルビィが彼女との慣れ始め、そして今に至るすべてを話してくれた。そして……自分を庇って、怪獣にされてしまった事も。

「だから珠冬ちゃんもが怪獣になったのは……ルビィのせいなんです」

彼女の悲痛な叫びには誰もが黙るしかなかった。仕方ないともわかっている。だが、それでもあの時何かできていたのではないか、彼女を守る手段があったのではないかと……ルビィは涙を流していた。

「あいつ……やっぱスクールアイドル好きだったんじゃないか……」

そんな中、一眞はいつかの光景を懐かしむように呟く。

「ルビィが悪いんじゃない。って言っても、気休めにもならないかもしれないけど……」
優しく話しかける一眞に、曜は何かを察する。

「過去は無理だけど、未来は変えられる……ってやつ？」

「曜にはわかっちゃうか。うん、そう。今度こそ珠冬を助けよう」

ルビィや花丸、善子の目を見ながら一眞は呼びかけた。彼の目は、まだ諦めてなどい
なかつたのだ。

「……どうやってだ？」

割り込む声が一つ。声の方向にはアオボシが座っていたのだ。

「あの合体獣は相当な力だ。シリウスだって実質負けているようなもんだ。何か策でも

あるのかい？」

横目でこちらを見ながら問いかける。確かにあの合体獣は強い。小細工なしの純粋な身体能力……屈強な筋肉と限界を易々と超える機械の力。アオボシの介入が無ければ負けていたのも事実だった。それを身をもって知っている一真。だがしかし、彼は悩むことなく答える。

「みんなで」

「……は？」

「確かに強い。俺も戦って嫌という程叩きこまれたからね。だけど、さつきは俺だけだった。だから今度は、みんなで戦うんだ」

一真の後ろに立つルビイたちも困惑の表情が浮かんでいる。自分たちにはアレを止める力などないのだと。

「俺が時間を稼ぐ。だからルビイたちは、あの中に居る珠冬に声を届けるんだ」

「ルビイたちが……？」

方法を教えてもらっても、ルビイたちは不安げな表情のままだ。暴れる様子を自身の目で見たのだから信じきれないだろう。

「スクールアイドルとして、ファンに声を届ける。ルビイのスクールアイドルとしての想いは、そのくらいじゃないだろ？」

「わかりました。ルビィ、珠冬ちゃんに声を届けます。またスクールアイドルの話した
いからー!」

「マルもやるぞら!」

「ルビィもずら丸も本気で言ってるの!」

「善子ちゃんはやらないぞらか?」

「誰もやらないなんて言ってるわよ!? クククツ……彼女もリトルデーモンの1人。
それを救うのが墮天使ヨハネの務め!!」

彼の言葉に、ルビィも覚悟を決めたようだ。彼女の決意に花丸も、善子も声を上げる。

「私も応援するねっ!」

曜も彼女たちについて行くと敬礼のポーズで答える。

「君たちは正気か!? アレはもはやスピカの意識なんてないも同じだ。それでも声が届
くと本気で思ってるのか!」

アオボシは彼女たちの決意を否定する。アレには彼女の意識など残っていない、ただ
本能で動き、暴走する怪物でしかない。それに声など届かないと。

「できんや!」

一真は確信したように言い返す。ただ一言。一言だけをアオボシに投げたのだった。
理屈などどうでもいい。彼女たちに秘められた力を、紡がれた絆を信じるのみだと。

「はあ……勝手にしなよ」

アオボシはため息を吐き、その場から去っていく。

「あいつは現実的だよ、ホント……」

一眞は相変わらずだなど頬を緩ませる。彼とアオボシ。敵対しているはずの2人なのに、妙な信頼感を感じさせてくれる。

「よし、じゃあみんな……珠冬を助け出そう！」

風が吹き始める。あの重く淀んだ空気が運ばれて、温かい風が背中を押してくれる。

一眞の握るオーブリングが、彼女らを決意を読み取ったかのように光り輝いた気がした。

第42話 ハジマリの呼び声

ビクンツ、ビクンツと体を痙攣させているレッキングジョー。

それは先の電撃で痺れているからではない。寧ろその逆であり、今まさに目覚めようとしているのだ。眠ってしまった体を、強引に起動させようと内部の器官が促している。

「そろそろか……」

目覚めの予兆であることを感じ取った一真が呟く。人として1回、ウルトラマンとして1回。計2回の戦闘の疲労、そしてダメージは尋常ではなかったがそうも言っではいられない。以前に、“必ず救う”と誓ったのだから。それにこのくらいの疲労と痛みの方が、逆にやる気が湧くというものだ。

「本当にやるのかい……？」アレはもう暴走列車のようなものだけど」

後ろから歩いてきたアオボシが隣に立つ。彼も一真と同じく、前方の合体獣に目を向けている。一真とアオボシの2人は、互いに目を合わせることなく会話を続ける。

「やるさ。何度聞いてもそれは変わらないよ」

「そうかい……」

敵対しているはずなのにそこには憎悪や執念、野望と言った黒い感情が見えてこなかった。まるであの時に戻ったかのようだ。

「お前が何を企んでいるのかは知らない。でも、俺たちの邪魔はさせない……」

しかし、これから始まることを知っているアオボシが不確定要素であることは変わらない。ここで一眞を、或いはルビイたちを妨害してくるとも考えられるからだ。一眞は彼を“敵”として睨みつける。助けてもらったとしても、彼は侵略者の一人であることに依然変わりのないのだから。

「君がどう思おうが勝手だよ。でもね、ここで1つ提案したいんだ」

「……何をだ？」

「合体獣……アイツの力は強大だ。時間を稼ぐったって流石の君でもそう長くはもたないだろう。……1人じゃね」

含みを持つその言い方に一眞はさらに目を細める。対して彼のリアクションが予想外だったのか、アオボシはため息を吐きつつ口角の下がったその口を再度開いた。

「……僕も力を貸すよ」

一眞は耳を疑った。なんとアオボシが共闘を申し出たのだ。オーブを倒すための合体獣を、時間稼ぎのために共に止めると。

「言わなくてもわかるよ。何故なんだ」って？ 僕もね、アレを召喚した奴が気に食わないからちよつとした嫌がらせだよ。君が倒されるのを確信してやがったから、ぜひ倒してもらおうってね。それを知った彼女の、悔しさに自身の美貌も忘れて歯を鳴らす姿が見たいんだよ僕は」

彼の悪趣味な共闘理由を聞いた一眞は黙り込んだ。いつからこんな性格になったのだろうか……と。以前の彼とはかけ離れ過ぎている、そう改めて感じたからだ。

(……違うか)

変わらなければやっていけなかった……といったほうが良いのかもしれない。しかしそれを確かめることもしなければ詮索することもない。寧ろするつもりもなど微塵もなかった。

「お前の悪趣味な理由については何も言わないでおく。今はどんな手でも借りたいしな……だけど、妙な動きをしたらお前を——」
「わかってる。そう何度も言うな」

アオボシは若干めんどくさそうに対応するが、一眞にとつては大事なことだった。これは一眞だけの戦いではないのだから。しかしもう話している時間もなさそうだ。レッキングジョー遂に体を起き上がらせ、幾度目かの咆哮を唸らせている。意を決した2人は己の左手に、リングを握る。

「足手まといにはなるなよー」

「ふん、そつちこそ……!」

——一真とアオボシ。

——光と闇に身を置いた者。

——守る者……そして攻勢をなさんとする者。

——背を向けて歩みを進める彼らが今、互いの目的のためにそれぞれのリングを掲げる……。

《left》ゾフィー 《left》ゴモラ

《left》ウルトラマンベリアル 《left》エレキング

《left》フュージョンアップ 《left》超合体

《left》ウルトラマンオーブ

サンダープレスター 《left》サンダーゴモラ

光に包まれ現れた巨人と怪獣が地面へ着地。2体分の衝撃が地面を沈ませ、街が揺れる。そして大量の瓦礫を宙へと舞い上がらせた。

「ハアア……!」

「■■■■……!」

光の巨人と怪獣が並び立つ。

その光景は“命を奪う存在”として見られてきたものと、それを阻止するものとして

の認識が根付いてしまっているこの地球では異様ともいえる。

「■■■■ウウウ……■■■■アアアア!!」

2体を目にしたレッキングジョーはタガのはずれた本能に振り回されるかのように暴れた後、沼津の大地を蹴りだして突進。

「行くぞー!」

「僕に命令しないでくれるか」

それに合わせてオーブ、サンダーゴモラも駆け出す。

衝突するや否や、オーブの右ストレートが開幕早々顎へと決まり、サンダーゴモラのタツクルが胸元へと激突する。至近距離で光弾の乱射。さらにオーブのまわし蹴りが胴体を捉える。先ほど戦いよりも、今は有利に立ち回っていた。

「始まったぞら!」

その凄まじい戦闘音と咆哮で、彼女が目覚めたとわかる。屋上へと続く階段で待機していた花丸の声に、ルビイもその心に灯をともし。怖いし逃げたい。しかし同時に、彼女を救いたいという想いも同じくらいに大きく膨れ上がっている。

(ルビイのスクールアイドルとしての想い……必ず届けるから)

ルビイは一度目を瞑って呼吸を整える。そして目を開いて一言。

「行こう！」

今のルビィには、先ほどまでであった不安げな表情は一切なかった。

「ハアアアア……!!」

合体獣の蹴りと光と闇を纏った脚部が同時にぶつかり、衝撃が街へと拡散する。迫りくる両腕を受け止め、掌部で押し返す。スイツチするように、白地に黒い模様の長い尻尾が機械仕掛けの体を捉えて火花を散らす。頭部の角へ雷を貯め、当たる瞬間にスパーク。青い電撃が体を駆け巡っていく。

「■■■■ウウウウウウ………」

強烈な攻撃で苦悶の声を上げる合体獣。だがすぐさま怒りの拳ともいえる剛腕が、銃弾の如く撃ちだされた。

「サンダークロスガード！」

避けれないと判断したオーブは両腕を交差させて構える。光と闇のエネルギーを腕に集中させることで己の腕を防壁とする技だ。

重機で迫られたかのような衝撃。そして腕を襲う痛みに歯を食いしばる。

（くっ……う、うう……お、おおお……！）

拮抗する2体の後ろから、サンダーゴモラの放った三日月状の雷撃が責め立てるヤツ

の側面を直撃。弱まった瞬間にオーブは衝撃を反転。合体獣を押し戻す。

「このまま押しとどめるぞ！」

「僕には命令するなと……！」

口ではそう言うものの、2人は同時にレッキングジョーへと走り出す。

右腕をオーブが、左腕をサンダーゴモラが掴んで動きを止める。彼女たちの声を届けるために。

「珠冬ちゃんー！」

屋上で見たルビィは張り裂けんばかりの音量で、彼女の名を呼ぶ。

「ルビィ……嬉しかったの。初めて会った時に、ファンだつて言ってくれたの！」

東京で初めて会った時のことだ。憧れのスクールアイドルになったとはいえ、まだまだ不安だったあの時……。だが、彼女はファンだと言ってくれた。その場しのぎだったとは思わない。それは先ほどの会話でもわかったことだから。

「ルビィたちのもつと……もつと、もつとすぐくなつたA q o u r sのライブ……珠冬ちゃんにまだ見せてない!!」

見せていない……。現実を知り壁にぶつかったあの時。それは今だつてそうだ。現実という波が、彼女たちの輝きを消し去ろうと迫ってきている。

だがその中で、磨き上げていった自分たちのパフォーマンスを珠冬には見せていないと。もっと輝けるであろう自分たちの未来の姿を。

「マルも……!」

「ヨハネも……!」

その想いは2人も同じだった。

くく

「この……!」

「さつきよりも……力が……」

ルビイの呼びかけを聞きたくないと言った怪獣の力が拒否しているかのように、レッキングジョーの力が強まっていく。2人がかりでも抑えられなくなりそうなほどに。

「もうちよつと痛い目を見たいようだね……!」

サンダーゴモラは体中から電気を発する。それは腕を伝ってレッキングジョーへと流れ込む。

「■■■■ツ！」

だが左腕を振るわれてしまい、サンダーゴモラはビルへと投げ飛ばされる。

尚も腕を離さないオーブの脇腹には何発も何発も、殴打が繰り返される。だが彼は耐える。歯を食いしばり耐える。それは彼女たちの声が届くと信じているから。彼女が答えてくれると信じているから。

瞬時に左腕を捕まえて抱え込む。今ある彼のエネルギーを全身から掻き集めて腕へと集中させる。

「ウ、ウオオオオオオオオ……!!!」

身体を駆け巡るエネルギーが、体の外へと漏れ出し眩い光を発する。さらにその鋭い目からも、まるで雷のような黒と赤の眼光が伸びる。

それでもレッキングジョーの力は強大だった。腕には相当な重みを感じているはずなのに、彼一人を易々と投げ飛ばしたのだ。バランスを失ってビルへと突っ込むオーブだったが、すぐさま瓦礫の中から飛び出す。それはいつかの暴走状態にも見える。しかしこれは彼が暴走手前のギリギリまで力を行使している故の状態であった。

(間に合わねえ……)

そう判断したオーブは右腕に光を纏わせ、地面に拳を打ち付ける。

「デスシウムフロストオ！」

氷の爪が、地面から生えるようにして走っていく。それはレッキングジョーの足元まで行くと下半身を凍らすとともに、地面へと氷の爪が突き刺さり拘束。動きを止めたのだった。加えてあることをするため、オーブはその状態をキープし続ける。

目の前で合体獣が暴れる中でも、ルビイは呼びかけることを辞めなかった。この時の彼女は、不思議と恐怖は感じていなかった。彼女に想いを伝えるその一心だ。

「ルビイ……まだ珠冬ちゃんとスクールアイドルのお話全然できてない！」

「マルも……！ 珠冬ちゃんに読んでほしい本がたくさんあるぞら！」

「珠冬、あんたもヨハネのリトルデーモンなのよ！ これつきり怪獣のままなんて、天使が許してもこの墮天使ヨハネが許さないんだから!!」

彼女たちのそれは、ただの日常をとともに送りたいという願いだ。ただの友達として、これから来るであろう道を一緒に歩もうとする呼び声。

「■■■■■■……■■■■■■、■■■■■■アアアア!!」

デスシウムフロストの拘束を抜け出し、ルビイたちのいるビルへと歩みを進めていく。もうこれ以上この声を聞かないとするために、耳障りなノイズを排除するがごとく腕を振り上げた。

「いい加減に……」

それを見て咄嗟に姿勢を低くしたオーブは、まるでロケットのような加速力でレッキングジョーへ突進。眼光を迸らせ、右の拳には黒と赤のエネルギを纏わせた閃光のような一撃が彼の怒声と共に放たれる……。

「いい加減にしろこのバカ野郎があああああつ!!」

その怒りの拳は、瞬間的とはいえ今までの力を軽く凌駕していた。その攻撃が頭を捉えるや否や、その巨体はいとも簡単に地面へと転がる。その衝撃は道路を、そしてわずかに立ち並ぶだけとなったビルの残骸をも破壊する。

「聞こえねえのか……お前を信じ、お前を呼び起こそうとする声が……珠冬と共に歩もうとする友達が声が……」

さっきの激情から打って変わって、冷静な声で語りかけるオーブ。

すると……

「私も……」

亡骸のように横たわった体から声が聞こえてくる。だがそれは小さく、何かと混じり合っているようで上手く聞き取れない。しかしオーブやルビイたちは何も言わずその

声に耳を傾ける。彼女の声を聞きとるために。

「私も……ルビイたちと……もつといたい……みんなと、みんなとたくさんの話をした
い……!! A q o u r s のステージが見たい!!」

その声は間違いなく珠冬の声だった。そのことにルビイたちは安心と、彼女に届いたことへの嬉しさに涙を浮かべる。オーブも彼女の想いを聞き静かに頷く。

しかし中に居る彼女の意志とは裏腹に、その巨体は起き上がると同時にまたもや暴れ始める。それは珠冬の意志など関係なく、ダークリングで合体させられた2体の意識やヴィルゴの残したオーブを倒せという命令が勝手に肉体を動かしているのだった。

これに至っては無情にも珠冬にはどうすることもできない。合体獣が動くさまを、破壊する様をただ内部から見ていることしかできないのだ。

しかしすでに、オーブは突破口を見つけていた。

「おい、ここを任せるぞー!」

「だから僕に命令を……つてどこに行くんだ!」

起き上がった姿を見つめながらアオボシに後を託すと、走りながら体を光へと変換。そのままの体中へと入り込んでいくのだった。

「オーブが……!?!」

「大丈夫、オーブなら……!」

その咄嗟の行動を見ていた善子は声を上げるがルビイは動じず、怪獣同士がぶつかり合う光景を見つめていた。

この場を託されたサンダーゴモラが肉薄し、尻尾を巧みに扱う。鞭のように振るって胴体や脚を叩いたり、身体全体に巻き付けて雷撃を与える。しかし尻尾を掴まれ、ジャイアントスイングの要領で大きく飛ばされてしまう。

「舐めたマネしてくるね……ほんと」

この合体獣を生んだ存在を思いながら、身体を丸めてまるでタイヤのように回転。勢いをつけて尻尾を振り下ろした。ダメージは通ったものの、こちらもそろそろ限界だ。よく持ちこたえたなど内心オーブを称賛してしまえそうだ。

そんな2体の合体獣の譲らぬ攻防が続いていると、金色の機械が混じった体から光が飛び出した。それが先ほど飛び込んだオーブだというのは、街に響くカラータイマーの点滅音から推測することができた。

手に何かを持っているオーブはそれをゆっくりとルビイたちのいる屋上へと下ろした。巨大な掌が遠ざかっていくと、そこには少女が横たわっていた。まさしくそれは全員で助け出そうとした存在そのもの……。

「珠冬ちゃん!!」

目に入ればすぐさまルビイたちが駆け寄っていく。今はまだ目覚めそうにもないが、奇跡的に外傷もなければ、呼吸をしていないなんてこともなかった。

「上手くやったじゃないか……」

横に並んだ合体獣からそのような声が聞こえた。

「みんなの力が無きや不可能だったよ」

オーブが拘束した時、彼は透視を使い珠冬が体のどこにいるのかを探していたのだ。

しかし完全に一体化していたせいなのか、姿を見つけることができなかった。それがルビイたちの呼び声、そして彼女自身の意思が表面化したおかげで姿を捉えることに成功。内部に入り込んで珠冬と一時的に一体化。脱出と同時に一体化を解除することで彼女を救い出すことに成功したのだった。

「流石はオーブだ」

「黙れ」

おちよくるかのように言ってくるアオボシを横目に、目の前の存在に警戒する。すると中身の核を失っても尚動き続けようとしているのだ。その命令への忠実さは逆に褒めたくなる。

「中身を失ってもまだ動くか……」

「まったく、面倒な代物を残していったもんだよ」

「けど、これで遠慮なく全力で行ける……!」

ダツシユで威力をブースト、右腕を引き絞ったオーブ。放たれた黒い拳の威力は、合体獣を大きく吹き飛ばす。

追い打ちをかけるように、全身に雷を迸らせたラリアットが直撃する。高速回転で威力を底上げかつ連続的な攻撃に相手は意識を朦朧とさせる。

「これでトドメか？」

「ああー!」

既に見越していたサンダー^アゴモラ^オは頭部の角から強力な振動波を発生させる。雷撃を上乗せし、鼻先の角からビーム状に発射。オーブのゼットシウム光線と交わり強大な威力となつて胸元を貫通。

腕や脚を伸ばした姿勢で倒れ込むと同時に、街を揺らすほどの大爆発を引き起こした。

くく

「珠冬ちゃん……?」

もう二度と聞くことが無いと思えた友人の声が耳に響く。ゆつくりと瞼を持ち上げると、光が差し込んできた強烈な光を感じ慌てて目を閉じる。数時間とはいえ闇の中に居たからだろうか。おそろおそろ、もう一度目を開けるとそこには、赤髪をツインテールした少女が心配そうに自分を見ていた。

「わ、私……」

まだ感覚が戻りきっていない上半身を起き上がらせれば、すぐさまルビイの抱きついてきた衝撃が伝わる。と、同時に彼女の体温がジワリと自分を温めてくれる。

加えて、彼女が泣いているのも伝わってくる。ルビイの体がわずかに震えていたのがわかったからだ。

「よかった……」

涙で振るえたルビイの安堵に、珠冬も無意識のうちに目に涙をためていた。自分が生きてたこと、そして友人に触れていられることが嬉しかったのだ。

「私ね……ルビイや花丸、善子ともっと話したい。だから……」

その後が続く言葉を、その3人も一真や曜もわかっている。あとは彼女が言葉にするだけだ。

「私と、友達でいてくれる……?」

珠冬の手を握るのはルビイだけでなく、花丸や善子もだ。そして溢れんばかりの笑顔

で、3人は歓迎の意を示していた。

「うん！」

さらにその後、一真と珠冬は会話を続ける。3年ぶりである“シリウス”と“珠冬”としての会話。話したいことも、謝りたいことも……ここだけでは語りつくせないくらい、たくさんのこと……。

「ごめんなさい！ 私、シリウスに色々酷いことしちゃったし、言っちゃったから……」
「別に気にしてない。俺もルビイたちと同じように、珠冬を助けられてよかった。だから、その話チャラってことで」

笑って済ました一真に少し不満そうに頬を膨らませるが、別の話題が彼女の頭を過る。

「そう言えば名前、一真に変えたんだっけ？」

「……うん。あ、でも明確にシリウスと区別してるわけじゃないし、呼び方でもどっちでもいいよ」

「ううん、私も一真って呼ぶことにする。みんなと同じ呼び方の方がなんかいいし」

苦笑いを浮かべるも、肩を叩かれた感覚に一真は反応する。

「どうした、曜？」

「ねえ、私なんか忘れてると思うてるんだけどなかなか思い出せなくて……カズくんな

ら覚えてるかなって聞いたんだけど……」

曜のそれに一真は戦闘で疲弊した頭を回転させる。今から今日の出来事を遡っていき、何故ここにいるのか……その訳を思い出す。

「やっべ、衣装の生地!？」

「あぁー!?! どうしよう!?!」

「ダツシュで取りに行くぞ!」

珠冬たちに軽く挨拶してから、一真と曜は生地を置きっぱなしにした場所へと大急ぎで走っていく。

今日現れたプロキオ。そして珠冬を怪獣にした存在、そしてアオボシ……。まだ脅威が消え去ったわけではない。寧ろ明確な敵が増えたとも言っている。しかし今は、今だけはこの喜びと焦りに身を任せるのもいいだろう……。

くく

数日後、予想だにしないことが浦の星で起こった。

「よろしくね！ 珠冬ちゃん!!」

「うん！ ルビイも、改めてよろしく」

なんと珠冬が浦の星の生徒になり、尚且つスクールアイドル部のマネージャーとして入部したのだ。入学手続きなどは鞠莉が簡単に承認してくれたらしい。トップの人間が事情を知る者となれば楽であると思わせられる。

みんなの珠冬に関する印象も悪くないようだし、すぐに馴染んでくれるだろう。千歌は既に珠冬の頭を撫でている。

新たな出会いが紡がれていきこうして新たな道、新たな世界がハジマっていくのだと……一眞はルビイたちを見て感じていたのだった。

第43話 波風の序曲

某日、A国領域内のある島に台風が発生した。

台風が起ることなど、自然界では断じて不思議なことではない。しかし妙なのは、短時間のうちに発生してそれがまた短時間うちに消える……ということだった。さらにその台風の力は強大で巨大な船が巻き上げられ、気付けば山の中に落ちていた……なんてこともあるのだから。

その出来事は既に世界中でも起きていた。謎の台風の被害が報道されるたびに、人知を超えた自然の猛威の前には、人々は無力であると言われているように感じられた。

突如突如発生した自然の猛威の中で、赤い目のような器官が鈍く輝いていることには誰も気が付いてはいなかった。

不安げな表情のまま、理事長室の前で待つスクールアイドル部の10人。中では鞠莉が父親に、廃校をどうにかして防ぐことはできないのかと交渉しているのだ。千歌が「きつとなんとかなるよね」と言っていたが、それは不安な自分にも言い聞かせているようにも感じられる。

「今は……鞠莉を信じるしかない」

その張り詰めた空気では、一真もその一言で精一杯だった。後は、その異常なまでに静かな廊下の中で彼女が出てくるまで待つしかないのだ。最悪な想像はせず、かといって過度な期待もしないように……。

たった数分のことなのに、もう何時間も経っているようにも感じられる。

「鞠莉さん……」

「どうだった？」

ようやく鞠莉が出てくれば、すぐさまダイヤと果南が近づく。それほど心配なのだ。それはここにいるみんなも同じ。

「残念だけど、反対意見があっても生徒がいらないんじゃないかって……」

やっぱりか……と、考えてしまった最悪のシナリオ。いくら言っても、生徒がこの学校にいないという現状が物語っている。だから鞠莉は問いかけた。希望者が増えれば考え直すかどうかを。何人、何人集めれば学校を続けてくれるのかを。

「それで？」

「……100人」

曜の問いに、鞠莉は真剣な面持ちで答える。今年の終わりまでに、少なくとも100人の入学希望者が集まれば統廃合の話を取りやめると。

「100人って、今はまだ10人しかないのですよ？」

「それを年末までに100人……」

ダイヤも梨子も、その難題に声を震わす。今は10人、それを年末までに100人。もう半年もない状況でそれはほぼ不可能だと言っているようなものだ。

「でも、可能性は繋がった」

その中で、日陰に太陽が差し込むかのような声が響く。

千歌は明るく、可能性というA q o u r sの進む道が繋がったと言ったのだ。

「終りじゃない。可能か不可能か、今はどうでも良い。だってやるしかないんだから！」

「まあ、それもそうか」

「足掻くって決めたもんな……みんなで」

今あるソレは、暗闇で示された1本の綱のようなごく僅かな可能性でしかない。でも進める。まだ断たれた訳じゃない。渡って行ける。今のA q o u r sには、その力があるのだから。

「可能性がある限り、信じよう！ 学校説明会も、ラブライブも頑張つて集めよう1000人!!」

「ゼロからイチへ！」

「イチからジュウへ!!」

「ジュウから……ヒャクへ!!!」

ラブライブを勝ち進み、1000人の入学希望者を集めて廃校を阻止するためのAqoursの活動が……今始まるのだ。

くく

「とは言つたものの……」

「いきなり……?」

「言い走り出したのによ……」

練集合間の休憩中、千歌のつぶやきに呆れそうな曜と一真。それもなぜかと言えば予

「備予選の開催日に関係があるみたいだ。」

「だって予備予選がこんなにも早くあると思っただけだもん……」

「出場グループが多いですからね」

「この地区の予選は来月初め。場所は特設ステージ」

「有象の魑魅魍魎が集う宴！」

出場グループの多さ故に、早い段階から予備予選を始めるライブ。しかし、何故千歌がそのことをぼやくのかが謎で珠冬は尋ねる。

「でも千歌さん、早いとなにか不都合なことがあるんですか？」

「マルも気になるすら」

「歌詞を作らなきゃいけないからでしょ？」

言い淀む千歌の様子に、訳を察した梨子が代わりに答えてくれた。ライブへ出場には未発表の曲のみという規定上、作詞している千歌は早く作らなければいけない。さらに学校説明会もあるためもう1曲分、つまり2曲分の歌詞が必要なのだ。

「わたしばかりズルい！ 梨子ちゃんだって二曲作るの大変だって……！」

「それを言ったら曜ちゃんもでしょ……？」

「9人分だからね」

今回は互いに負担が増えてしまう。それもまた運命のイタズラ……というやつなの

だろうか。

「厳しいよ、ラブライブ……」

「それを乗り越えたものが、頂からの景色を見ることができるとはすわ」

「……やっぱりレベルの高い戦いだよな、ラブライブ」

作詞や作曲、そして衣装……加えてダンスのステップやフォーメーションまで自分たちで作りを鍛え上げていく。そうしたいいくつもの難関を突破したものが覇を競い合う。ラブライブ、そしてスクールアイドルというものの厳しさに一真は舌を巻く。彼女たちの取り組んでいることは、自分がやっている事より何倍も高度なことに思えたからだ。「で、歌詞は進んでいるの?」

横を見れば梨子が尋ねていた。いつもの穏やかな様子ではなく声が低い。当然進んでいるのでしょうか? という圧を感じる。

「いや〜そりゃ〜急がなきゃ? だから……」

その反応で一真はなんとなく察してしまいが、あえて口に出すことはしなかった。

「ここに歌詞ノートがあるぞら」

しかし書いてあったのは歌詞ではなく、梨子の絵だ。ページをめくるたびに表情豊かな彼女が描かれている。

「そっくり」

「こんな表情するの……?」

「実はするんだよ珠冬ちゃん。実は昨日、夜の2時までかかって……」

ページをめくっていきノートを閉じれば、そこには描かれた絵そっくりの梨子の顔があった。早く歌詞を書いてくれ。梨子は己の態度だけで千歌へと伝える。それも千歌はわかっているのだが……

己の持ったシャープペンは、ノートを滑らず止まっているのだった。いいフレーズが頭に浮かんでこず机に伏せる千歌。唸っている声を耳にしながら果南はパソコンを操作しながら言った。

「でも、このまま全部千歌たちに任せっきりってのもね」

「じゃあ果南、久しぶりに作詞やってみる?」

「い、いいや私は……今はちよつと……」

「前は作ってたじゃない」

「それ言えば、鞠莉だって曲作りしてたでしょ?」

果南と鞠莉の話はおそらくも何も、先代Aqoursの頃の話だろう。そのやり取りを聞いたことで、もう一つの疑問が湧いて出てくる。衣装は誰が作っていたのか? と

いうやつだ。

「まあ私と……」

ダイヤの視線は向かい合って座る赤髪の少女に向けられた。

それにつられて梨子たちも視線をむけ、納得する曜。それも彼女が裁縫を得意としていることを知っていたからだ。それを裏付けるかのように花丸が取り出したのはハンドバック。動物や植物の可愛らしい刺繍もほどこされていることから、彼女の技量の高さが伺える。

「じゃあ、2手にわかれてやってみない？」

鞠莉の提案はこう。2年生組が学校説明会用の曲を作り、他の7人がラブライブ用の曲を作るというものだ。これであれば負担が集中してしまう事もないため、1曲に時間がとれる。

「でも、いきなりラブライブ用の曲なんて……」

「だからみんなで協力してやるの」

いきなりラブライブ用という大事なモノを任せられたとなれば、ルビィでなくとも不安になる。しかし不安ならばこそ、みんなで作り上げようと鞠莉は提案したのだ。

「二度ステージに立っているんだし、千歌っち達よりいい曲ができるかもよ？」

「かも」ではなく作るのですわ。スクールアイドルの先輩として」

「おお、言うね〜！」

その呼びかけにダイヤや果南の心にも火がついたみたいだ。その様子をみた千歌も、今までになかったその試みに心を躍らしている。

「面白そうだ。やってみようぜ！」

掌に拳をうちつける一真も相当乗り気なようだ。勝手に話が進んで決定までしたことに、梨子と曜は顔を見合わずが誰も気付いていなかった。

2年生組は千歌の家で作業をするとのことと別れた。ともあれば、こちらもどこで作業をするかなのだが……。

「やっぱり部屋かな？」

「それだと代わり映えしないんじゃない？」

「どうしよつか……お店はやめといたほうが良いと思うし」

「それもそうですわね。では千歌さんたちと同じように、誰かの家にするとか？」

珠冬やダイヤが意見を出していく。すると果南が出したのは鞠莉の家だった。ここから近いし何より広いという話だ。大人数で行っても問題ないのであればこちらも助かる。

しかし1年生、特に花丸や善子は鞠莉のお金持ちという面に目を付けているようだ。予想すらできない鞠莉の家という存在に息を呑む。

「私はNo problemだけど、4人は大丈夫なの？」

鞠莉の問いに素早く手を上げる4人。目がいつも以上に輝いていたのは気のせいだろうか。

「賛成すら！」

「右に同じ」

「私もです」

「ヨハネの名に懸けて」

そうして鞠莉の家に行くことに決定したわけだが。

「でっかい……」

珠冬は知らなかった世界を目にして驚きを通り越した何かになっているし、善子は闇が晴れていくと言ううでその場所に興奮しているみたいだ。その姿を見て3年生組も在りし日のことを思い出していた。

——曲作りをしに来たはずなのに、今や1年生はお菓子やお茶に夢中になってい

る。その有様を見て、唯一の良心？ 珠冬が3人に注意する。

「ちよつと2人とも、ここには曲作りをしに——」 「珠冬ちゃんも食べるぞら」

しかし言い終わる前に彼女の口に放り込まれたマカロンの前には、珠冬も敗北を喫するのだった。

「私たち、何しに来たんでしたっけ……」

なんてダイヤが言う頃には、まるで遊びに来たかのようにくつろいでしまい本来の目的がすっかり頭から抜け落ちていた。

「やつぱり、鞠莉さんの家では全く作業にはなりませんわ！」

「あつちがいいぞら」

「もつとポップコーン食べたかったのに！」

作業すらしなかったため、ダイヤとルビイの家に移動してきたわけだがここでは花丸と善子が拗ねてしまっていた。気持ちもわからなくはないがと珠冬もフオローする。

「でもほら、やつぱり曲作らなきゃいけないし——」 「珠冬だつて気に入ってたじゃない」 「そうだけど……！」

正直、もう少し食べたかったというのはあるため珠冬も強く出られない。しかしダイヤのひと声が、花丸と善子をなんとか作業に戻す。そしてここからはダイヤの進行で事

が進み始める。

「では、まず詞のコンセプトから」

ラブライブ予備予選を突破するための曲……まず“詞”はどういったテーマでやっていけばいいかをダイヤが募る。すると花丸がすぐさま手を挙げた。

「ずばり“無”ずらー！」

意味を読み解けず、首を傾げる一同。果南もわからずそつくりそのまま返してしま

う。
「そうずら。すなわち“無”というのは全てが無いのではなく、“無”という状態があるという事ずら」

「は？」

「What, s?」

ダイヤも鞠莉もそのような概念に疑問符を並べる。しかし善子だけは違った。

「なにそれ……かつこいいい！」

「善子さん、その“無”があるということこそ、私たちが到達できる究極の境地ずら」

「“無”つまり漆黒の闇、そこから出づる力……」

「……“無”が闇？」

そうやって腕を交差する2人。理解しあっているように見えて微妙にできていない。

加えて珠冬はもつとわかり難くなったのか、目を細めて首を傾げている。

「それでラブライブに勝てるんですの?」

「テーマが難しすぎるよ」

そんな2人に対し、ダイヤや果南は批判的だ。

ライブでは5分あるかないかの短時間で相手へと届けなければならぬ。だから難解なものでは相手に理解する時間もないし、理解されなければ響くこともない。まず概念的すぎて歌詞にも辛いだろう。

理解できない彼女らを不幸だと嘆く2人の後ろで、鞠莉がアイディアがあると自身のスマートフォンを取り出し、スピーカーにセットした。端末の中には、自分の作った曲が入っているのだそうだ。自作の曲を聞いてもらうという2年ぶりの感覚に心はずませながら鞠莉は再生ボタンをタップする。

スピーカーを震わせ流れてくるのは、ヘヴィメタルと呼ばれる音楽形態の1つ酷似したものだ。ギターやドラムのメロディはが体にズシンと来るようであり、留まるだけではなく開放的にさせてくれる。端的に言えば体を動かしたくなる。

「なんかいいね、身体を動かしたくなるっていうか」

「まあ、今までやってこなかったジャンルではありますわね」

果南やダイヤは賛同的だった。これもまたA q o u r s に吹く新たな風になるので

はないかと。しかしこの曲は途中で止められてしまう。目をやれば、1年生4人が床に倒れているではないか。おそらくこの手の音楽は聞いたことが無く、驚いたのだろう。

「ルビィ……こういうの苦手」

「耳がキーンしてる」

「私も……キーンって……」

「単なる騒音すら」

パタリと倒れ込んだ4人の姿に、鞠莉たちは啞然とするのだった。

その頃、千歌たちも作詞をしてるのだがどうも浮かびそうになく、頭を悩ます千歌の姿があるだけでこちらも順調に進んでいるとは言い辛かった。

「うーん、〃輝き〃ってことがキーワードだとは思っただけどね……」

「〃輝き〃ね……」

「思いつかねえ……」

追い求める〃輝き〃、それこそをテーマに歌詞を作りたいとは言っているものの、良いフレーズが浮かばない。千歌と同じく、梨子や一真も悪戦苦闘している。

「はやくしないと果南ちゃんたちに先越されちゃうよね……」

競争しているわけではないが、どうしても向こうが気になってしまうのだ。

「焦っても仕方ないしな……ん？」

そう言つて後頭部を搔く一眞。すると、メールの受信音に全員の意識が向く。ルビィから千歌の携帯に送られてきたもののようなのだ。

『すぐに来て』つて」

「それだけ？」

「うん、書いてあるのはそれだけみたい」

一言だけ書かれた内容。もしかしたら本当に完成してしまつたのではないかと、千歌たちは場所を電話で聞いて急ぐのだった。

「みなさん、ちよつと大変なんです！」

「大変つて……どうしたの？」

「これは見てもらった方が早いです！ 曜さん、はやく！」

「あああ、珠冬ちゃん引つ張らなくても大丈夫……」

すぐさま駆け付けければ、珠冬が慌てた様子で待つていた。なにか緊急事態なのだろうか。手を引つ張られながらも階段を上がり、そして目に入ったのは……

「それではラブライブは突破できません！」

「その曲なら突破できるというの!？」

「花丸の作詞よりはマシデース！」

1年と3年の対立であった。A q o u r sにはあの曲はあわないとルビイは反対する。だが鞠莉は新たなチャレンジが必要だと力説する。

「さらにそこにお琴を！」

「そして無の境地すら！」

意見の渋滞、ぶつかり合いでもう何もかも無茶苦茶になりそうだ。その状況を見た千歌たちには介入の余地がないように見えて、とりあえず苦笑いを浮かべるしかなかつた。

「こりゃ大変だ……」

一眞の呟きは、意見のぶつかり合うこの場所では響くことなく消えてしまう。

第44話 波風メロディー

「曲作りはできそうにない……か」

「はい。趣味が違い過ぎて……」

黒澤家の家に呼ばれた一真たち。彼らはダイヤヤルビイ、珠冬から状況を聞いたのだった。そして出された結論というのが、曲作りどころではないということ。1年、3年の趣味趣向がかけ離れ過ぎていると。

「そっか……」

千歌と曜は良いアイディアだと思ったが故、一層残念だと表情が訴えている。さらに梨子はもう少し話し合ってみるのはどうかと投げかける。

「散々話し合いましたわ」

「思ったより好みバラバラみたいなんです」

話し合ったからこそ好みの違いが浮き彫りになり、こじれてしまった。話し合いが逆効果になってしまったようだ。

「バラバラねえ……」

「そう言われてみれば1年生と3年生って全然タイプが違うもんね」

「でもそれを言い訳にしてたらいつまで経ってもまとまらないわ」

「……その通りですわね。私たちは決定的にコミュニケーションが不足しているのかもしれない」

そう言われてみればと、曜が言ったのは1年と3年があまり話していないという欠点だった。2年生が比較的2学年と接しているためか、その両学年を繋げる役割になっていたのかもしれない。それがいなくなった今、向き合わなければいけなくなったということだろう。

「私に至っては新参者ですし……」

珠冬も苦笑いで目線を逸らしている。

「となれば……」

するとダイヤは何かを思いついたらしく、ルビィと珠冬を連れて中へと戻っていった。

「大丈夫かな……」

「まあ、どうにかなるだろう」

雲行きが怪しくてたまらない感じだが、ここは当事者である彼女たちに任せるべきだろう。話を聞く限り、いずれぶち当たる問題でもある。そのようなことを一真が3人に伝え、帰って歌詞の作りを再開するのだった。

『仲良くなる……?』

「そうですね。まずはそこからです」

「曲作りは信頼関係が大事だし」

1年と3年の中を深めることから始めよう。それがダイヤの提案だった。確かにより深くお互いを知れば、何が好きであるかぐらいはわかるようになるだろう。だが具体的には何をすればいいのか。そんな疑問を花丸は挙げる。

「任せて!」

果南が立ち上がる。どんな案かと善子が聞けば――

「一緒に遊ぶこと!!」

学校のグラウンドに移動して始めたのはドッチボールだった。意気揚々と投げた果南のボールは花丸と善子の間をすり抜けていく。あまりの速さに髪が靡くほどの風が生じたのは、気のせいだと思いたい。

「なにこれ……?」

「ずら……」

「ちよ、ちよつと2人とも来るよ」

内野に居るのは先の2人と珠冬を入れた3人だ。当初、珠冬は遠慮したのだが「2人も3人も一緒」と果南。

「行くよ！ 鞠莉シャイニング……トルネード！」

大きく振りかぶる鞠莉。これは渾身の一投が繰り出されるに違いない。その姿を前にどうすればいいかわからない花丸の前へ善子が飛び出すと、彼女は詠唱を始めた。風を切り飛んでくるボールに対し、善子は技名と共に腕を広げる。だが光の巨人のように障壁が展開されるわけでもなく、ボールは顔面に衝突。

跳ね上がったボールは面白いことに花丸、珠冬、ルビィの順で頭へと当たっていく。パワーに押された1年生は、あっけなくやられてしまったのだった。

「やっぱりここが一番落ち着くぞら」

場所を移動し、今度は図書室だ。読書家でもある花丸の提案だ。

「光で穢された心が……闇に浄化されていきます！」

善子も花丸の意見に同意のようだ。しかし彼女の顔に刻まれたボールの跡に、3人は思わず笑ってしまう。

「何よ、聖痕よ！ ステイグマよ!! 珠冬、笑ってないで助けなさいよ！ 闇の力的なものがあるんじゃないの!？」

恥ずかしさゆえに、珠冬へと話を振る善子。

「ごめん、今の私には無いみたい。つてか私の場合本当に闇の力よね……」

「いいじゃない。かつこいい」

「そんなものじゃないわよ、アレは……もれなく変な紳士が付いてくるし……」

「それはこのヨハネも遠慮するわ」

賑やかに話を展開する席の後ろでは、3年生も本を広げているが……あまり楽しくなさそうさ。

「退屈」

「そうだよ、海行こうよ、海」

さっきのドツチボールでもそうだったが、鞠莉や果南は体を動かしていく方を好むのは容易に想像できる。

そんな鞠莉と果南のために読書の楽しみ方を花丸は教えていたのだが、2人は長話が苦手なようで気がつけば臉を閉じて夢の中だ。2人を良く知っているダイヤですらも、これにはため息を吐くしかなかった。

くく

また場所は変わりバスの中。先ほどから見えてきた両学年の違いを、ダイヤは推測しだした。

「なんとなく見えてきましたわ」

視線を左にやれば「絶好のダイビング日和だね」また一緒に together ましよ！」と青と金の髪が揺れながら窓の外を見ている……

「アウトドア派な3年生と……」

さらに右に視線をやれば、「新たなリトルデーモンをここに召喚せしめん」と独り言のようなことを言いながら、隣では本に目をやる……

「インドアな1年生にわかれて……というわけですね」

全くの正反対ともいえる両者を後ろから見ると、ダイヤに、ルビィは不安げに尋ねる。これでは仲を深めることもできそうにない。

「他に手があればいいんですけど……」

珠冬も同じ気持ちのようだ。すると、聞かれた彼女は「こうなれば仕方ありません。互いの姿を、さらけ出すしかありませんわ！」と言い放った。次に一行が向かった場所というのは——

「まさかの銭湯ですか……」

温泉に浸かった珠冬の声が良く響く。裸の付き合い……というやつなのだろう。湧き出る音が鼓膜を震わす。

「その通りですわ、珠冬さん」

「え、まさか裸の付き合い……ですか？」

首を縦に振るダイヤに、まさかの心を読まれたような気がして珠冬はドキツツとする。

「安直ずら」

「お黙りなさい。古来から日本には共に風呂に入り、コミュニケーションを図って物事を円滑に進める文化があつたのですわ」

とは言うものの、この時間からお風呂とはいかがなものかと果南は不満げだった。さらに善子も未だ脱衣室からこちらに来ていない。彼女曰く、「墮天使が人前で肌を晒すわけにはいかない」ということなのだそう。それではここに来た意味がないではないかと珠冬。

「暗黒ミルク風呂というのがあらずら」

隣にある白の一面の風呂にむかって「白黒どっちやねん！」とツツコまざるにはいられなかつた一同。

しかし、鞠莉と果南は我慢の限界のようだ。結局、ただ体を温めただけ……。すると

空から水が一滴、一滴……と落ちてきたのだ。外へ出てみれば、さっきの青い空から一変。暗い灰色へ変わり雨が降りだしていた。

予想外の天気と同じように、どうも晴れやかな気分にはなれなかった。なぜもなにも、曲づくりどころか、仲が深まったという印象もないのだから。

「あちらを立てればこちらが立たず……」

「より違いがはつきりしただけかもね」

ダイヤと果南は残念そうに呟く。空を見てみれば、雨がより強くなっているみたいだった。しかし誰も傘を持ってきてはいなかった。

「困りまったね」

「どうするのよ……さっきのところ戻る？」

「それもちよつとな……」

「どうしよ、結局何も進んでない……」

銭湯に戻るわけにもいかず、さらに何も進んでいないという焦り。7人は途方に暮れてしまう。すると、花丸がぼそりと

「近くに知り合いのお寺があるにはあるずらが……」

あまり勧めたくはなさそうな感じだったが、背は腹にかえられないという奴だ。とりあえず雨宿りができる場所ということ以案内してもらおうことになったが……

「入っていいはずら」

「えええ!？」

「いいの？」

門を開ける音がやけに古かったように聞こえた。それも相まって少し不安そうな人がチラホラ見受けられる。

「知り合いに電話したら、自由に使っていていいって」

「自由にね……」

珠冬は背伸びをするようにして、寺の敷地内を視線に収める。一言で言えば、正直ちよつと怖い。

「お寺の方は、どちらにいらつしやるんですの？」

「ここに住んでいるわけじゃないから……」

ダイヤの問いに、花丸はどこからともなく取り出した懐中電灯を顔の下から照らす。

「いないはずら」

「「ヒイツ!？」」

今この寺には、ここにいる7人だけしかいないということだ。そのことにビビったか、背に隠れる赤と青い髪が揺れる。

「となればここで雨宿りしていくしかありませんわね」

「雨もまだ止みそうにないもんね」

そうしてお寺の中に入ったわけなのだが

「電気は？」

「ないすら」

「Really?」

「ほんとに古いお寺なんだね」

電気という文明の利器がないため中は真つ暗だった。蠟燭に火が灯され、少しだけ見えるようになった内部で、珠冬は歩き回っている。

対する果南は強がっているように見えながらも、藻の音が聞こえれば柱やダイヤに抱き着いたり……。結構怖がりみたいだ。

「曲作りでもする？」

「でも、また喧嘩になっちゃわない？」

「歌詞は出来ているんですの？」

尋ねてくるダイヤに、花丸は善子が歌詞を書いていたと伝える。賞賛の声が聞こえてくる中、照れ隠しをする彼女の後ろでは全員が善子の書いたノートに目を通していた。

「えっと……裏離聖騎士団？」

「裏離聖騎士団！」
りゆうせいしだん

「ではこの黒く塗りつぶされているところは？」

「ブラックブランク！」

「ええ……」

しかし、当て字が多すぎて読めない。善子だけにしか理解できないのでは、歌詞として機能するのか微妙なトコロである。

そしてノートに虫がついていたり、火が消えたりして大騒ぎになるのはここから数秒後のことであつた。

くく

お寺の中で大騒ぎしている頃……。

「雨降るなんて言つてなかつただけどなく」

休憩がてら、外を眺めていた曜が呟いた。こちらでもこの大雨には思うところがあるみたいだ。

「天気はずれるなんてよくあることだしな……ん？」

一眞は携帯に目を通してながら口を開くと、あるページで指が止まる。それは太平洋上に台風が突如発生したという記事だった。最近よく目にしていたものだったが、あまりに発生が不自然かつ突発的過ぎた。さらに9月ごろの台風というのは、南海上から放物線を描くように日本付近を通るらしい。しかし今発生しているのは一直線に日本こちらに向かつてきている。加えて勢力も並外れたものだという報告も上がっていらしい。

「風も強くなってきたわね」

梨子も不安そうに曜の隣で空を見上げる。どうも記事を目にしてしまったことからか、胸に生じた不安が消えない。それもかつて、禍々しい翼を持った存在がいたせいだろう。かといって、ただの自然だった場合にはこちらが介入するわけにもいかない。

「……はあ」

胸に響く不安が杞憂であればいいと感じながら、一眞は立ち上がる。そうすれば「どうしたの？」と声が聞こえてくるが、曲作りに集中してもらってる身だ。今回は黙つていようと誤魔化す。

「う〜ん……ちよつとな」

そう言つて一眞は裏口の方から出ていくと、打ち付けてくる雨に向かつてオーブリングを突きあげた。

身体に当たってくる雨や風に苦しみながら、オーブは薄暗い空を飛翔する。まだ日本は雨が降っているレベルだが、迫っている台風が上陸すれば甚大な被害になることだつて考えられる。もしそれが自然ではなく、より恐ろしい存在なのであればここで食い止める必要はない。

(あれか……)

すると、空中で制止したオーブへ台風から一閃の光が迫りくるのではないか。すぐさま身体を反らせて回避する。どうも嫌な予感も当たったらしい。

(マジもんかよ……)

オーブのとある技の名が、雷の音と同時に発せられた。

「シャットダウンプロテクト……！」

そして前方に右手を翳しながらオーブは念じる。

このまま台風に突っ込んででもいたずらに体力を消耗するだけ。であれば中に居る何かを捉え、台風から切り離せばいいのだ。ウルトラ念力を併用しながら、シャボン玉のような球体を作り出すイメージで怪獣を隔離する。そして台風の中から……

(引きずり出す！)

遠すぎて怪獣の姿はまでは捉えられないが、出てきた球体と台風が弱まっているのは確認できた。

しかし隔離のための膜は作りが脆かったらしい。すぐさま壊され、破壊光線がオーブに迫りくる。

(なっ……!!? こんのおおおお!!)

迫りくる一筋の光を躲し、高速で飛翔。撃ってきたヤツへと体当たりを仕掛ける。両者共に無人島へと落下。数秒後、巻き上がった土や泥の中から紫と赤の体表が出てくるのが見えた。

(くそ、なんなんだ……台風の正体は……)

あまりに突然のことで無我夢中だったため、怪獣の正体を見ていなかったのだ。すると地面を震わせ、対立する方向にできたクレーターから遅れて起き上がる。頭部の傘が目を引く姿はまるでクラゲのようだ。加えて両手には触手、そして見る者を威嚇するような巨大な2つの目が赤く輝いている。

台風怪獣バリケーン、それが怪獣の名だ。

姿を視認すればすぐさま仕掛けるオーブ。迫りくる腕の触手の攻撃を避け、殴打を一

発撃ちこむ。側面に蹴りを入れれば痛みで隙ができ、懐へと踏み込んでさらに腕を引き絞る。

「ハアッ！」

下から打ち上げるような拳がバリケーンへと決まる。

(こつちも時間が無いんだ。すぐに終わらせる)

触手を腕で防ぎつつ、拳や手刀の連打で攻め込んでいく。トドメと言わんばかりのドロップキックがバリケーンを後退させた。

バリケーンも怒りに腕を振り上げながら頭部から破壊光線を乱射する。

(んおっ……！)

側転などで素早く回避するがそれでも間に合わない。そう判断したオーブは素早くシールドを展開、光線を防いでいく。

しかし

(……っ！)

自身の直感が何かやばいと頭の後ろをゾワリと立つような感覚……。すぐさまその場所から離れば、一瞬の閃光の後に地面が爆発する。

(ちっ……手強い奴だ……)

キュルキュルと不快な鳴き声を響かせながら迫ってくるバリケーンに向かって、オー

ブはスペリオン光線を放つ。だがそれを自分の口で吸収したのだ。
(なっ……！)

吸収されるのであれば光線は使えない。撃つだけ無駄に体力を消費し、そしてヤツの力へと変換されるだけだからだ。

(許容量を超えられればいいが……最悪俺の方が先に倒れる可能性もある……！)

ヤツの吸収できる量以上の光線を与えるという方法もある。しかしそれは不確定過ぎて危険だ。許容量を超える前に、先にこちらがエネルギーを使い果たしてしまう可能性もあるのだから。

だが敵は待つてくれない。突進してきたバリケーンは口からガス攻撃で目を眩ませると、脚を体に絡ませてきたのだ。身動きが取れないオーブに向かって脚部から電流を流しこんでくる。痺れと痛みに襲われ地面へと倒れこむ。さすれば待つているのはバリケーンの猛攻、それだけだ。

(ううっ……ああ……があっ……!?)

鞭のような打撃が全身を襲い苦痛で地に伏せる。さらにはその長い触手で首を絞められてしまい絶体絶命のピンチに陥ってしまう。

(……両手も縛つとくべきだったな！)

しかし、オーブは寸でのところでスペリオン光輪を生成し触手を切断。見事抜け出す

ことに成功したのだ。

(やってくれたな……ならこっちもハリケーン風でぶっ飛ばす!)

首に巻き付いている触手を取り払うと、カラータイマーから光が溢れだした。

《ウルトラマンオーブ ハリケーンスラッシュ》

赤と青の戦士へとフュージョンアップしたオーブ。

斬られたことへの怒りなのか、頭の傘を回転させ暴風を巻き起こすバリケーンに対抗し、自身の体を回転させ相殺するオーブ。間髪入れず迫りくる破壊光線の乱舞。しかし、呼び出したオーブスラッガーショットを巧みに扱い撃ち落とす。

(喰ウらえッ!)

そして体を大きくよじりながら投擲された威力を増した光の刃が、バリケーンを切り裂き火花を散らした。

すると勝てないと判断したのか、足からジェット気流を噴射して飛行を始めたのだ。

(逃がすかよ!)

追いかけるように空へと飛翔するオーブ。逃げるまでの時間稼ぎか、さつきよりも傘の回転を速くし風を起こすバリケーン。さらに破壊光線も同時に放ってきたのだ。

迫りくる暴風と光線の混じり合った奔流。だがオーブもここで逃がすわけにはいかない。光刃を回転させ、バリケーンのような傘みたく頭上に展開。強引に推し進めていく。

(ぐっ……うおお……)

風、光線の威力を上げられ前へと進まなくなっていくのを感じたオーブは、オーブスラッガーランスを生成しまるでドリルのように体ごと回転させる。青と赤の光に包まれた錐は嵐を穿ち突き進んでいく。

(ヤツに飛び込み……コイツを——)

迫りくるソレに怯えるバリケーンはさらに威力を上げるが、彼の勢いは止まらない。

人間は自然の猛威と戦うことはできない。台風が来れば人々は通り過ぎることを待つしかないのだ。しかしウルトラマンになっているときは台風とも戦えるし——

——ブチ込む……!!)

——勝つこともできる。

ピックバンズラストを発動させながら突き進んだオーブは、遂にバリケーンの体を突き破ったのだ。

爆発とともに暴風雨もかき消される。すると辺り一帯には、さつきまで激戦が嘘だったかのような静寂さだけが残っていた。日本はまだ雨が降っているかもしれないが、時機に止むことだろう。静かになった海を見つめたオーブもすぐさま戻っていく。

「自然の猛威だと思われていた」突如現れすぐさま消える巨大台風“は、この日を最後に観測されることはなくなった。

くく

「いったい私たちがどうなるの……」

善子の呟きはもつともだ。結局、それぞれの違いがより明確になっただけ。このままでは曲などできるはずもない。

「そんなに違うのかな……ルビイたち……」

「違うことがいけない……そんなことないと思うんだけどな」

ルビイよりも小さな声で呟いたはずの珠冬の声。しかし、静かすぎて逆に響いてし

まったようだ。

「珠冬ちゃん、それってどういう……」

「ああ、いや、ただ別に私は……」

「良いよ、言ってみなつて」

果南に促されるまま、珠冬は口を開く。

「それぞれが輝ける場所……A q o u r sを見た時に思ったのがそれなんです。みんな違うけど、それが逆に輝いてるつて言うか。……A q o u r sつて“違うからなんだ”って感じがするんですね。第一、宇宙人がマネージャーやつて——ヒヤッ!」

珠冬の悲鳴。それは天井から水の粒が垂れてきたからだだった。それはダイヤとルビーに当たり、冷たさに声を上げてしまう。

「雨漏りすら」

「どうするの?」

「どうするつて……」

「こつちにお皿あつた」

果南が持つてきてくれたお皿を敷くことで一件落着……とはいかず、至る所から雨漏りしてきたのだ。お茶碗やお皿、桶、湯飲み……さまざまなものを置いていく。

そしてしばらく様子を見る7人。外で打ち付ける水の音よりも、器の底に水滴が当た

る音がその場に残響し、耳に残る。高い音、低い音、さらにもっと低い音……器を置いた分だけ、数多の音が鳴り響く。それは一見バラバラで、かみ合っていないように感じる。でも……だからこそ、それが調和となり旋律を形作っているように聞こえた。それは、今も視線がバラバラの彼女たちのようではないか。

「テンポも音色も大きさま」

「全部違ってバラバラだけど」

「二つ一つが重なって」

「二つ一つが調和して」

「ひとつの曲になっていく」

「マルたちもずら」

言葉を紡ぎ合わせた彼女たちは、ともに肩を組み合う。「ほら、珠冬も」と善子に強引に引き入れられが、逆にそれが嬉しかった。全員で顔を見合わせると、自然と笑みが零れ落ちる。あとは、奏でられた音の中で見えたものを曲にするだけだ。

「よし、今夜はここで合宿ずらー!」

『えええー!?!』

鞠莉が提案したことへの叫びが、どこか楽しそうに聞こえたのも気のせいではないだろう。外では雨が止み、月明かりが辺りを照らしていた。

翌朝、紫色の空を太陽が照らし始める。その光景を千歌は家の屋根に座り眺めていた。

「千歌あー！」

すると、果南の声が背後から聞こえてきた。振り向けばそこには7人の姿。

「曲は出来たー?」

曜が尋ねれば、誇らしげにノートを見せる彼女たち。それを見てまたやる気が漲ってくる。2曲分もあるのだから、なんて言っているがそれは嬉しさ故の言葉だったのかも
しれない。

やる気に満ち溢れたみんなの声が内浦の空に響く。

着信とともに迫りくる、新たな課題とともに……

第45話 何をとるか、何を選ぶか

1人の驚きの声が静かな朝に響く。

「今度はなに？」

「いい知らせではなさそうですわね」

携帯を耳から離れた鞠莉の反応からして、あまりいい話ではなかったというのは明らかだ。

「実は学校説明会が一週間延期になるって……」

その知らせに9人が息を呑む。なんでも、雨の影響で道路の復旧に時間がかかるからなのだそうだ。

（こんなところでアイツの影響か……）

一眞の手に力が入る。そもそも話に出た雨……その原因というのが昨晚倒した台風怪獣の仕業だというのだから仕方がない。しかし、このような形でこちらに被害が出てくるとは思っていなかった……その歯痒さ故だ。

「でもよりによって……」

そう……よりにもよって何故このタイミングなのだろうか。一難去つてまた一難

……困難や課題は休まることを知らないようだ。

するとみかん色の少女は、屋根伝いに歩いていき「どうしたの？ もつといいパフォーマンスになるように頑張ればいいじゃん」とみんなを励ます。しかしそういう意味ではない。彼女にはわかっていなかったのだ。

「千歌さん、そうじゃないんですってば」

「え？」

「たはあ……」

「問題です。ラブライブ予備予選が行われるのはいつでしょうか？」

見かねた曜が彼女に問題を出す。千歌も難なく「学校説明会の次の日曜でしょ？」と返す。すると曜とスイッチするようにして今度は梨子が問う。「その学校説明会が一週間延期したらどうなる？」と。

「そんなの簡単だよ……え、うわああああ!？」

その事実気付いてしまった千歌はたちまちバランスを崩し、屋根から落下したのだ。

しかし、美渡さんとしいたけがクツションになったことで何事もありません。後が怖い、彼女はそれどころではなかった。学校説明会と予備予選、それが開かれるのは――

「同じ日曜だ!!」

そのことによりやく気付いたからだ。

くく

「んで、どうするんだ?」

学校の体育館、それもステージの上で相談する11人の生徒の姿がそこにはあった。説明会と予備予選、どちらもA q o u r sにとつては大切なステージだ。学校を存続させるためには、どちらが欠けてもいけない。しかし開催日が同日であることがネックだ。2つの場所に同時に居れる訳でもない。だからこそ、こうやって相談しているのだから……。

「まずはどこで行われるか見てみよう。解決策はその後で」

そう言つて果南が持つてきた地図を広げれば、彼女が予備予選が行われる会場を示してくれた。

「山の中じゃない」

「今回はここで特設ステージを作って、行われることになったのですわ」
「それで学校は？」

しかし学校までの道には、バスも電車も通っていないと果南が言う。では乗り継いでいくのはどうか？ という案も、複雑すぎて難しいと……。

「はあ……到底間に合いませーん」

悔しいが鞠莉の言う通りかもしれない。乗り継いだとしても時間がかかるし、なにより本数が少ない。待っている間に時間になってしまう事もあり得なくは無いのだ。

「空でも飛ばなきや無理すらね……」

花丸の言うように、道なりに進むよりも空を飛んで一直線に行くことさえできればこの問題は解決なのだが、ここにはそんなものなど持ち合わせていない。

「クククツ……ならばこの墮天使の……翼で！」

「おおー、その手があった」

「いい案ですね、ヨハネ様」

「墮天使ヨハネの翼で会場入りずら」

「嘘よ、嘘！ 常識で考えなさい!!」

いつもの調子である善子を一年生3人が茶化していると、「そうだよ！」と千歌が声を上げる。

「なにがだよ?」

「だから、空だつてカズくん!」

「は?」

千歌が言うのは、ヘリに乗って空を飛び移動すればいいではということだったのだ。鞠莉の家ならば自家用のヘリを保有していると聞いたので、実現できなくはない話だ。

「ヘリに……乗るんですか?」

「何よ珠冬、怖いのか?」

「べ、別に高いところが怖いだなんて一言も言っていないんだけど!」

「そこまでは言っていないわよ……」

目を輝かせている人が数人。そして空を飛ぶことを不安視している人物もいるようだった。

「いやでも、ゼツパンドンの時は?」

怪獣にしろウルトラマンにしろ変身した時……特に最初はまるで高い所にいるように見えるものだ。怪獣の高さとなれば、まるで空を飛んでいるように見えるだろう。一眞はそのことを聞いたのだった。

「その時は大丈夫だったの! ってかよく覚えてない」

彼女には申し訳ないが、それしかないのだと内心謝罪しながら千歌は頼み込む。

「Oh、流石千歌っちその手がありましたか！ 早速へりを手配して……と言えるところ？」

「……ダメなの？」

「Of course！ パパには自力で入学希望者を100人集めると言ったのよ！
今更力貸してなんて言えませーん!!」

却下されると同時に、今後は小原家の支援は無しとして考えろと言われてしまった。自力でどうこうしなくちゃいけないのはそうだが、こればかりは少しへこむ。周りの先輩や後輩が落ち込んでいるのは別の意味かもしれないが。

「よくないけど、よかった……」

ならば海はどうかと提案するが、果南の家は仕事で使うから無理、曜の父親の船……
というのものなしだ。

「じゃあ、やつぱり空……あつ！」

千歌の視線はこの集団唯一の男子に向けられた。そうなれば自然と彼も察したようで、自分を指さしながら「……俺？」と聞いてくる。

「そうだよ！ ウルトラマンの力、お借——「ダメだ」ええ!?!」

「前は頭に血が上ってやりかけたけど……そんなことしてみろ、一大騒ぎだ。それにA
oursとオーブに接点があると勘付かれるのも面倒だしな」

「そう言ってなんとか諦めてもらった。彼女たち以外に正体がバレれば、何が来るかわからない。そうすればラブライブや廃校阻止といったことができなくなる可能性もある。それを危惧してのことだった。」

「現実的に考えて、説明会とラブライブ予選……2つのステージを間に合わせる方法は……1つだけ」

その方法というのは、トップバッターを引き当てるといったことだった。最初に歌うことができれば、バスに乗り込んで浦の星にもギリギリで間に合うと。

「ダイヤさん、ですがその方法って……」

「ええ」

珠冬や一真は方法を知っているからか、不安そうな視線を向ける。その方法というのは……

「抽選ですわー！」

ホールに集められたのは、予備予選に参加するスクールアイドルたちだった。ここではくじ引きによって発表する順番を決めていくのだ。

「抽選つつたつて、誰が行くんだ？」

「ここはやっぱりリーダーが……」

やはりというように千歌に抜擢される。しかし梨子が携帯を取り出して見せたのは

星座占い、そこには『超凶』という今日の運勢だった。

「自信無くなってきた……!」

「なら曜が行けばいいんじゃないやね? 最初から参加してたってことで」

「え、私!」

「それがいいなら、運も良さそうなら」

次に指名された曜だが、彼女も少し不安なのか本当に良いのかと確認してくる。

一真も彼女を信頼し、大丈夫だと背中を押そうとしたところで「待って」と声を上げる者がいた。

「悪は最大のピンチ……墮天使からのレジエンドアイドル! このヨハネが行きまーす!!」

そこで手を挙げたのはまさかの善子。しかし、当然……というのは可哀想だが周りからはストツプをかけられてしまう。

「ないなら」

「ぶつぶーですわ」

「それ、冗談だよね。笑えないけど」

「ああ、笑えない」

「どうしてよぉ〜!!」

千歌が改めてその訳を言った。「じゃんけん負けてばっか」だと。さらに、1年生の証言から彼女の不幸エピソードの数々がでてくる。

「マルたちがいつもハッピーなのは善子ちゃんのおかげすら」

不運を吸い取ってくれているということだろう。もしそうなのであれば、彼女には悪いが感謝するしかない。

「不幸じゃない! 善子言うな! 普段は運を貯めてるのよ!!」

さらに「見てなさい、いざという時の私の力を」と自信満々なのが伝わってくる。ここまでされては流石に、ダメだと一蹴することもできない。果南もダイヤに相談している。すると、ダイヤは善子の方へと歩み寄る。そして言ったのだ。「この場でわたくしとじゃんけんをしましょう」と。

「勝てば善子が引けるってことだな」

「そういうことです。ちなみに今日のわたくしの運勢は超吉ですわ!」

「うくん、なんとも言えません……」

「ダイヤさんも見てたんだ……」

ダイヤの運勢はどうあれ、善子は勝負を呑んだ。そして勝ったのは……

「墮天使ルシファーよ、そして数多のリトルデーモンたちよ……ヨハネの福音、全魔力をここに召喚せり……ヨハネ、墮天!!」

勝利を収めた善子。そして、彼女の引いたラブライブ予選の順番、本当の勝負ともいえるその結果は——

（ ）

（なんだ……この怪獣はッ!?!）

沼津から遠く離れた海辺の街を猛進し暴れている怪獣に向かって、オーブオリジンは夜空の下聖剣を振るう。

事の始まりは数十分前。食い入るほどでもないし、“あること”への気晴らしだったのかもしれないが、地球に帰還した火星無人探査機のニュースを見ていた千歌と一真。

別段、何か珍しいという訳でもなかったのが突然、何かが肥大化していく様子が映ってしまったのだ。すぐさまオーブへと変身した一真が現場に向かう頃には、その“何か

“は数十メートルへと巨大化していたのだった。

街や人々を襲うその姿は両眼が飛び出しており、体はヌメヌメした粘液で覆われ、背中にはイボがある。一言で言えば巨大なナメクジだ。

加えて、両目から放たれる光線を受けてしまった者を見たが、動きを完全に停止し硬直しているようだ。これ以上被害を増やすわけにはいかないと、地上に降りたオーブは剣を突き立てるのだった……

(攻撃がうまく通らねえ……！)

おそらく体表を覆った粘液のせいだろうか。勢いを殺され刃が上手く通らないのだ。そして狼狽えていれば、向こうからの力強い体当たりがオーブを地面に倒れさせる。

「ほんとに……なんなんだよッ!」

別のことに気を取られているためなのか、強めの口調で毒づくと同時にそれまた八つ当たりの如く巨体を蹴り飛ばした。

(くそっ……なにやってんだ……)

今の自分がいつもの通りじゃないことくらいわかっている。それでも――

――どっちも大切だもん

(……………ッ!? おああっ!?)

不意を突かれたオーブの衝撃が、海水を舞い上がらせた。その巨大な水飛沫の一部が、怪獣の皮膚に当たる。すると当の怪獣は苦悶の声をあげているではないか。皮膚を見やれば、その海水の当たった部分が煙を上げて溶け始めていた。

(もし、コイツが見た目通りナメクジと同じなら……)

自分の立つ場所と目の前の怪獣……双方に目をやった彼はオーブカリバーを振るい、水のエレメントを解放させる。

「オーブウォーターカリバー!」

切っ先から放たれた液体は、まるで巨大な鞭のような形を作る。頭上で何回か振り回し、怪獣へと飛ばす。そして怪獣の体を拘束。水というのは変幻自在の存在。時には相手を縛り上げるロープのような形状を作り上げることにも可能になる。

怪獣を縛り上げ、その巨体を海へと投げ入れた。

すると狙い通り。96.6%ほどの水と約3.4%の塩分を含んだ海水に沈んだ火星からの贈り物は、徐々に溶解していくのだった。

「なんだ……電話か？　もしもし……？」

巨大なメクジを倒し十千万に戻ってくると、急に携帯が振動したのだ。すぐさま耳へやると、いつもの雰囲気よりも落ち着いた……というよりも暗いと言った風な彼女の声が聞こえてきた。

『もしもし、大丈夫だった？』

「うん、まあまあ……かな」

『そっか……やっぱり、さっきのこと？』

「それはお前もだろ、曜」

それは十中八九、抽選会の結果だ。A q o u r s の順番は24番目……最初どころではなく真ん中だ。善子を責めたくはない。それに、これは結局……誰がやっても同じ結果になっていたのではないかと感じてしまう。こればかりはしょうがない。

しかし、この順番だと説明会とラブライブ……そのどちらかしか取れない。その選択を突き付けられたが無論、誰も選ぶことはできなかった。理由は簡単「どっちも大切」だから。

『予選も学校説明会も、どっちも大切。千歌ちゃんの言う通りだよ』

「でも、選ばなきゃいけない……」

『うん。私も千歌ちゃんたちと一緒にラブライブに出て輝きたいって思ってるよ。けど……』

「それができたのは学校のおかげでもある」

『うん……』

確かにラブライブに出場したいという思いも本物だ。しかし出ようとしたのは、一体何のためなのかと考えた時、行きつく先は……廃校の阻止。

「すべてが関わって、輝きに繋がっている……それは浦の星もってことなんだと思う。だから……」

『やっぱり、選べない……よね?』

「ああ……選べそうにない」

しかし、どうしても選べないという結論に帰化してしまうのだった。

「……うん、じゃあな。」

電話を切った時に頬を掠めたその風は……妙に冷たかった。

第46話 舞い踊る者、輝きの問い掛け

「二つに分ける？」

「うん、5人と4人にわかれてライブと説明会両方で歌う。それしかないんじゃないかな？」

不思議なほど静かなその部室で、千歌の出した唯一ともいえる提案。どちらも選べないなら二手に分かれて歌えばいいじゃないか……ということ。しかしその案を伝える千歌にも自信が無さげだったのは、気のせいではない。

周りの反応も、あまり好意的なものではなかった。

「それでA q o u r sと言えるの？」

「5人で予選を突破できるのかわからないデース」

善子や鞠莉が言うことももつともだ。今は9人が揃ってA q o u r sとなっている。しかし、同じ目的のために奔走する存在が4人や5人になつたら、それはA q o u r sという存在になり切れないのではないかということだ。さらに、少人数で突破できるほどライブが甘くないというのも、彼女たちが一番よくわかっている。

「嫌なのはわかるけど、他に何か方法はあるの？」

誰も嫌なはずだ。問いかけた梨子だってそうだ。しかし、今の状況で最善の策……というのはいかれない。それが嫌でもわかってしまうからこそ、彼女の問いに口を開くものは誰もいなかったのだ。

「これでよかったのかな……」

「良いのか悪いのか……で聞かれれば良い、だと思っ」

「うん、これが最善の策だもの。私たちにキセキは起こせない……。この前の予選の時も、学校の統廃合の時も」

夕日が後ろから差ししてくる中、柵に腰掛けた2年生の4人は呟く。どちらも取りたいから選んだ最善の策であることはわかっている。それに、簡単にキセキを起こせるものではない。できたら、それはキセキとは呼べない。

「ほんとは……」

一眞の言葉に視線を向ける曜と梨子だったが、不思議と彼の目が見えないように感じていた。

「俺は力を使いたい。だけど……抜けないんだよ」

オーブカリバーを引き抜けない……ということだ。柄を握っても、頭上に掲げること

ができないのだ。まるで拒否されているかのよう。それは中にいる彼からの警告なのかもしれない。私利私欲のために力を行使するなど。あくまでこれは、迫りくる脅威を退けるための力というふうだ。

「あまりに自分勝手だから、俺怒られちゃったのかもな……」
「……だからこそよ」

この場にいる全員を励ますように、或いは自分に言い聞かせるようにして、背を向けていた夕日に向き直り梨子は言う。

「その中で一番良いと思える方法で頑張る。それが私たちじゃないかな？」

「そう……だね」

「今を受け入れて、その中で足掻くってことか」

「うん」

背後の柵を飛び越えた梨子に向き直る。ここまで言葉を発しなかった千歌も、彼女の言葉によりやく口を開いた。

A q o u r s というのはいつもそうだ。降りかかる現実を受け止め、それを知った上で前へと進む。ゼロからイチへ踏み出してきた。互いに異なる個性の中で、それを受け入れてどうしたいかを模索してきた。キセキを起こせない中と知りながらも、その中で最善の策を講じた。それが A q o u r s なのだ。

「そうだよ、みかんだよ！」

突然、千歌は興奮気味にみかんを指した。誰も訳が分からずに首を傾げる。一真も「みかん？ みかんがなんだよ!？」おい、ちよつと千歌さん!？」と声をかけるが、視界や心が晴れた千歌には届いていかなかったようだ。

だが、彼女には見えていたのかもしれない。進むべき道……というものが。

くく

当日。浦の星では多くの生徒が学校説明会に精を出していた。ということであれば、ラブライブの予選へは応援に行くことができないうことになってしまふのだが。

「……」

「一真くんが心配してどうするのよ〜」

「それはわかつてるんですけど……」

客席で見守る一真は、そう志満へと告げながら力の無い笑みを浮かべる。こちらでは2年生3人とルビィ、ダイヤの5人が予選に出ることになっている。他の4人と珠冬は

学校説明会だ。

それに加えてここには浦の星の生徒もいない。その孤立したような空気でパフォーマンスできるのか、そんな不安も感じてしまうのだ。

「辛気臭いな！ マネージャーだったらもつと堂々としてろって！」

「痛い、痛いっす美渡さん！ ギブ！ ギブ〜!!」

美渡にヘッドロックをかまされた一真がそう言っただけの腕を叩く、という光景を志満は微笑ましそうに見つめていた。

すると会場が暗くなり、アナウンスが入る。即ち、Aqoursのステージだ。ステージに明かりが灯ると、そこには位置についたAqoursの姿。そして嫌な程静かな間と、まばらな拍手が会場に溶けて消えていく。

5人のステージはここまで広く寂しいものだったかと思わせるくらいもので、それはステージにいる彼女たちが一番感じているだろう。

「千歌……」

呟くような一真の声など当然聞こえない。

すると

「勘違いしないよーに！」

「やつぱり私たちは1つじやなきやね！」

そこに現れた学校説明会に行ったはずの4人の姿が。そして

「ここにいたんだ、一真」

「珠冬、なんで……」

「サプライズってやつ。やつぱり、A q o u r s は9人じやなきやー！」

そう言つて珠冬も悪戯つぽく笑う。

ステージに集まる9つの光……否、焰。小さなものでも、それが1つに集まればすべてを凌駕するほどの瞬きを見せる。

—— MY 舞 ☆ T O N I G H T ——

1年生と3年生が雨の中、作り上げたその楽曲。和やロック、そして無と叫びた一見バラバラなように見える要素でも、それが1つにまとまり美しい旋律を組み上げている。足元が見えないような不安な状況だったとしても、諦めていなければ道を示してくれる。だからこそ恐れず踏み込んでいけるのだと伝えている。

9つの色に舞う炎が1つになったとき、観客席から送られたのは先ほどのまばらな拍

手など比べものにならない程の、会場を揺らす大きな声援や拍手だった。

「さあ行くよ！」

「ここからが勝負よ！」

パフォーマンスが終わるなり、千歌に続き梨子、そして曜と駆け出していく。

「ほら、珠冬も衣装持っていくぞ！ 志満さん、美渡さんここは頼みます!!」

即座に衣装を持った一真と珠冬。外へ出ると、ダイヤや善子たちの声が聞こえてきた。

「もしかして」

「説明会に間に合わせるつもり!？」

説明会ではなく、ラブライブをとったAqours。しかし諦めるなんてできないのだから、説明会も間に合わせる。それが千歌たちのとった策だ。

会場の近くにあるみかん畑を突っ切ることができれば学校まで最短距離だ。さらに嬉しいことに、クラスメイトのよしみがみかん畑の所有者というのだから既に許可はとってある。

「やっぱり、9人なら……」

「ああ、そういうことだ」

珠冬の言いたいことをすで見抜いていた一眞は笑って見せる。

1人ではなくみんながいる。だからこそキセキが生まれるのだ。疲れた花丸の背中を押すのはルビィや善子、そして珠冬というように、互いを助け合う姿も見られた。

「これが……A q o u r s……A q o u r sなんだ」

一眞は口からそう零れてしまった。

そしてみかん畑に着き、そこで待っていたのは

「お嬢ちゃんたち、乗ってくかい？」

同じ2年生である茶髪で、デコ出しと白いカチューシャが特徴のむつと、右の髪をくくった茶髪の短サイドテールのよしみであった。彼女らが待っていた理由は、近くにあるみかん運搬用のモノレールだ。以前4人で話していた時に千歌が思いついたのは、これを使って一気に駆け抜けるということだったのだ。

「みんな乗った？」

「全速前進、ヨーソロー！」

9人と珠冬を乗せたモノレールが動き出す。動き出したが……

「冗談は善子さんずら」

「……ヨハネ」

安全設計だからとても遅い。逆に間に合わないじゃないか……という程に。だからなのか、落ち着きのない果南はスピードを出そうとレバーを引き続けた。限界のその先まで引き続けたレバーがどうなるのかと聞かれれば当然……

「え、ちよつとさつき嫌な音しましたよ……」

「言わないでよ、聞こえないふりしてたのに!？」

珠冬と善子の声が聞こえた後、果南が振り向く。左手に折れたレバーを持つてだ。

「……取れつちやつた」

ブレーキが壊れたモノレールは、坂をジェットコースター並みのスピードで駆け抜けていく。その姿が豆粒のように小さくなっても10人の悲鳴はこちらまで届いてきた。

「さて……俺も」

「一真くんは乗らなくてよかったの?」

「大丈夫だって、マネージャーの底力舐めんなよ?」

むつにそう返した一真は道を通って浦の星に向かう。もちろん、超人的な脚力を行使して。

「時間は……ギリギリだな……」

疾走しながら腕時計に目を通す一眞。説明会の衣装は学校にあるし、一眞がいなくても珠冬が、そして学校の皆が何とかしてくれるだろう。そして千歌たちはモノレールからまた走らなくてはいけない。でも、彼女たちならと一眞は信じている。

キセキを起こそうと、ずっと向きあい続けてきた少女たちの姿をずっと見てきたのだから。

「けど……」

先に浦の星へと到着した一眞は天を仰ぐ。そこには眩しいほどに綺麗な虹がかかっていた。それは、今を変えたいと全力で駆け抜ける彼女たちの道筋のよう……。

それを見てしまえば、彼も思わずにはいられない。

——君のこころは輝いているかい？——

未来を変えていきたいと、がむしやらに走り始めていけば、その中で数多の人々と出会っていくことが自分自身を、そして周囲に変化を及ぼしてくれる……。

だから既に、未来が変わり始めているのだと叫べるのだと伝えてくれるような気がし

た。

まだ始まったばかりの道なのかもしれない。しかし彼女たちは同じ方向を見て突き進んでいくことだろう。

「っ、なんだ……？」

太陽を見上げる9人の姿に共鳴しているかのように、オーブリングが一瞬だけ輝く。しかし、その輝きの理由が判明するのはまだまだ先の話だ。

第47話　ダイヤさんは呼ばれない

「……っはよ〜！　先行ってるねー！」

何やら外から声がする。

それに気が付いた一眞は、未だ眠気の残る目をこすりながら、おぼつかない足取りで部屋を出る。そして外を見渡せば、すでに制服へと着替えた千歌が立っていたのだった。

なにやら隣梨の住人とのあいさつを済ませた直後のようで、足踏みしながらしいたけや美渡、志満にも挨拶を済ませていた。そしてこちらにも気付き、勢いよく手を振つてくる。

「おはよ〜カズくん！　わたし先に行ってるね!!」

みかん色の髪が小さくなっていく後ろ姿を見ながら、眠気で反応の遅れている一眞は小さく「いつてら〜」の声と共に手を振る。そして覚醒しかけてきた頭で、その光景を思い返した一眞は独り言を呟いた。

「今日は雨か……？（かしら？）」「

どうやら志満も同じことを考えているみたいだった。

2人の予想通り、空からは水の粒が絶え間なく降りつけてくる。しかし気にすることなく、部室の窓を拭く千歌。そんな彼女が、いつになく上機嫌だと感じていたのは一真だけではなかったらしい。

「ずいぶん機嫌がいいですね……」

「こんな時に……」

「もしかして忘れているのかも……」

こんな時に上機嫌な千歌へと、そんな思いを抱くダイヤたち。今日送られてくるもの、ことを思えば上機嫌にはなれないだろう。それはここにいる誰もがそうだった。

「ねえ千歌ちゃん、今日が何の日か覚えてる？」

曜の問いに、千歌は迷うことなく答える。「ラブライブ予備予選の結果が出る日ですよ。」と。

「バッチリ覚えてました……!」

「ずら……」

逆に覚えている……ということだからこそ、一同に驚かれているのが、千歌らしいと言えばらしい。しかし覚えていても尚、その態度であることをルビィは不思議がる。「緊張しないの?」と彼女が聞いたのはそのためだ。

「だってあんなにうまくいって、あんなに素敵な歌が歌えたんだもん。絶対突破してる」彼女は迷いなく言い切った。自分達の納得のいくパフォーマンスをやりきることができたのだ。それならばA q o u r s が突破できていないはずはないと。さらに聖良さんにも言われたらしい。「見たところ、トップ通過している」と。

「だから昨日あんなに声上げてたのかよ……」

一真は昨日、隣から聞こえてきた声の理由を聞いて1人納得する。とは言え、いつの間にも情報交換するほどの仲になっていたのが驚きではあったが、同じスクールアイドルでもあるし不思議ではないだろう。

すると、待ちに待ったメールの受信音がパソコンのスピーカーから発せられる。

開いてみれば、そこには『Love Live! 予備予選結果発表』の文字。千歌を

除く10人はモニターに釘付けだ。

「緊張するぞら〜」

ルビイは意を決した「いきます」の声を共にクリックした。

そしてクリック後、1番に表示されていたのは『Entry No. 24 Aquours 予選突破』と言う文字と、エントリーの際に送ったグループの写真。

「もしかしてこれ、トップってこと?」

「ね?」

千歌、そして聖良の言葉通り予選通過。それもトップでだ。その喜びはすぐさまみんなへと伝達、そして体を動かした。花丸は果南に抱き着き、鞠莉と善子はハイタッチと墮天使のポーズ。以前の仲を深めたこと……それが現れているのだった。

そんな姿を戸惑いながら見ている人物が1人。

「ダイヤさんも!」

差し出された千歌の手を見て、彼女は困惑しながらも同じように右手を出した。

掌と掌があたる破裂音のような音が、部室の中で拡散するのだった。

く

「とは言ったものの……」

「うっ……デジャヴ！」

「また!？」

机に突っ伏す千歌の言葉に、一真と曜は不安げな声を上げてしまう。この切り出し方だとまた何かがやってくるような予感がするからだ。

梨子の「今度はなに？」という問いに、千歌は答えていく。どうやら………資金が尽きたらしい。

説明会とライブライブ、2つのライブがあったため衣装費やら何やらでもうすつからかん……なのだそうだ。「この前千円ずつ入れたのに……」と果南の不満の声を漏らす。

「このままだと予算が無くなって……」

花丸が想像したのは、予算が無くなったまま仮に決勝に行けたとしても移動がスワンポートになるのでは? というものだった。

「沈むわい!」

「それは……嫌だな」

善子と珠冬の声が聞こえる中、梨子は確認のためと貯金箱を手に取り蓋を取る。中から出てきたのは……

「Wow〜！ 綺麗な5円デース！」

それだけだった。ルビィや果南がその事実には驚愕しているのも不思議じゃない。実際一真も驚きで口がふさがらないのだから。

「ご縁がありますように」

「So happy〜！」

「言ってる場合か！」

「掛けてる場合じゃないですってば、曜さん」

あまりに能天気な曜や鞠莉に善子はツツコみ、珠冬も注意している。そんなワイワイとしたところを見ているダイヤ。彼女が気になったのか千歌が尋ねると、「果南さんも鞠莉さんも、随分みなさんと打ち解けたと思ひまして」そんな風に答えてくれる。

「果南ちゃんはどう思うずら？」

そんな中、花丸が果南に意見を求める声が聞こえてきた。

「果南……ちゃん？」

今までとは異なった敬称で彼女が呼ばれていたことに、ダイヤは首を傾げるのだっ

た。

場所は変わつて淡島。そこで千歌が行つていたのは他でもない

「何卒5円を5倍、10倍、いや100倍に！」

神頼みだった。両手をこすり合わせ、一生懸命にお祈りしている姿を見守っている。すると曜は「100倍は500円だよ」と声をかける。500円では無理があるな……そう一眞は腕を組みながら考えていた。

「てか、神頼みするくらいなら……」

梨子の視線につられ、全員が“彼女”へと向ける。

『鞠莉ちゃん！』

しかし

「小原家の力は借りられまっせーん！」

「ですよね〜」

以前も言つていたように、今更言える訳もないだろうということだ。自分達の力でなんとかしなくてはいけない。

しかし何とかしたことがあるからなのか、はたまたはただの“フリ”だったのか、そ

の反応に笑いが起こる。

「鞠莉……ちゃん……？」

しかし、ダイヤは違った。その異なった敬称がまた聞こえてきたことに、彼女は再度首を傾げてしまうのだった。

くく

「バイト……!？」

翌日は沼津のスタジオでの練習となった。その休憩時間、2年生の4人は外のに設けられたベンチに座って求人誌に目を通していた。お金が無ければどうしようもない。考えた末に行きついたのが、バイトするしかないというものだったのだ。

「しようがないわよ……」

「ああ、こればかりはしょうがねえ」

それしかないかと、4人は同じタイミングでため息を吐くとともに俯いてしまう。すると、「今度はなんですの？」と妙にソワソワしているダイヤがこちらに問いかけてきた。

「あ、はい……」

「お腹痛いんですか？」

「違います！……いい、いえ、何か見てらしたような……」

余計なお世話だと千歌の心配に声を荒げたダイヤだったが、何か思い出したかのよう
に急に言葉を弱める。

「はい、内浦でバイト探してて、コンビニか新聞配達かなって」

曜の説明を聞き、ダイヤは即座に彼女の隣へと座った。そのおかげで一真は追い出さ
れるような形になってしまったが……。だがそんなことは気にせず、当の彼女は「沼津
の方がいいかもしれませんね」とアドバイスをくれる。

確かに沼津の方が都会だけあって、アルバイトの数は多いだろう。曜も沼津のバイト
が書かれたページを開き、どのようなものが載っているか挙げていく。カフェや花屋、
変わったところでは写真撮影などがあるそうだ。

そのバイトの数々に心躍らせ、千歌は「面白そう」という理由で沼津でのバイトを決
めようとしたが、それは彼女によって止められてしまう。

「ぶつぶですわ！ 安直すぎですわ！ バイトはそう簡単ではありません!! 大抵土
日含む週4日からのシフトですので9人揃って練習と言うのも難しくなります!」

ダイヤの剣幕に押され気味の4人ではあったが、確かにライブのための資金集めで練

習できなくなるといふのは本末転倒かもしれない。

一真がそうこう考えている傍ら、ダイヤは「やってしまった」と言わんばかりの表情を見せる。しかし千歌たちが気付くことは無かった。むしろ逆に彼女の意見を受け止め、どうすべきかを再度考え直すべくダイヤへと尋ねる。

「なにかあります、ダイヤさん？」

「え、えくと……」

くく

「フリマか〜」

「これならあまり時間も取られず、お金も集まりますわ！」

彼女が出した案というのは、フリーマーケット。古くなつた生活用品を出すことが多く、幼児服など短期間しか身につけられなかつたものを出すことだつてある。さらには珍しい掘り出し物が置いてあつたりする事もあるため、意外と侮れないのがこのフリマ

なのだ。

それが丁度沼津で開かれることになっていたのも幸いだった。それ故なのか、案を出したダイヤを称賛する声があちこちから聞こえてくる。善子も善子で彼女へ墮天使の羽根を授けていた。よくやった……という事なのだろう。

「フ、フフフツ……」

「ダイヤ……?」

「羽根はつけるんですね……」

しかし、その後羽を付けてひとり笑っている姿は不気味だったが本人は気付いていないだろう。

「え、なに……なにかあったの?」

明らかにいつものダイヤとは異なったので、たまらず一眞は近くにいた珠冬に尋ねる。

「そんなの私が知ってるわけないでしょ……!?」

予測していた言葉がそのまま返ってきた。ならば仕方ないと一眞は向き直る。そこには半分に切られたみかんの被りものを着た千歌の姿があった。美渡の会社で使わなくなったものを借りてきたと言うが、一体何のために使うやつだったのだろうか……。そんな考えを巡らしている暇もなく、ぬいぐるみを買おうとする少女が来た。

「これ、いくらですか？」

ペンギンのぬいぐるみを抱えて尋ねてきた。

「どうしようかな……」

「値段考えてなかったなそういや」

「でも、これしかないけど……」

そう言つてポケットから取り出したのは5円玉。つくづく5円に愛されているみたいだ。

「え〜と……」

「千歌、こりゃ流石に……」

しかし少女は下から彼女たちをウルウルとした目で見つめてくる。所謂上目遣いというものだ。

「……」

千歌と一真は互いに見合わず。「どうする？」と。そして……

「ありがとう!!」

「まいどあり〜!!」

結局、5円で売ってしまったのだった。しかし、少女が嬉しそうだったからそれでもいいかと思ってしまう。

「よかったね、倍だよ！」

「弁天様のおかげだね」

そんな声が聞こえてくるがダイヤは「ちゃんとなさい」と両者を注意する。活動資金なのだから稼がなくてはいけない。その為には心を鬼にするべきだと。

ダイヤは言った通り、一步も引かない姿勢を見せフリマに臨んでいくのだった。あまりに強気になりすぎてお客に指を指してしまったのはなんとも言えないが。

「いろんなのが出てるんだな〜」

客の数が少なくなった頃、一眞は辺りを回ってみることにした。なにか珍しいものは置いてないかと、ちよつとした冒険心が働いたのかもしれない。とはいっても買うつもりはなかったが……。

「ん、なんだ……？ アクセサリーも売ってんのか」

遠目から彼が見たのは、青い宝石のようなものはめられたネックレスやピアス、イヤリングが売られている光景だった。ものがものだけに多くの女性はその場にはおり、

つけていると痩せるなんて声までも聞こえてきた。しかし、さすがにそんな訳ないだろうと一眞は一蹴し離れていくのだった。

「アヒルボート決定ずら……」

そろばんをうち終わった花丸の沈んだ声が聞こえた。売り上げが低かったため本当にどうにかしなければいけないのだが、話題はダイヤのことへとたちまち移ってしまふ。

「何者にも屈しない迫力だったわね」

「さつすがダイヤさん」

「だよね」

褒められているのだが、当の本人は肩を落としている。売り上げのことなのだろうか、はたまたは別の……

「それに引き換え、鞠莉はそんなの持つてくるし……」

果南の声につられて鞠莉の方へと視線を移せば、そこには自分を模した象のようなも

のを彼女は軽トラに積み込もうとしていた。売れなかったので持つて帰るのだ。美渡も売るとは思っていなかったようで、呆れ全開の声が聞こえる。

「これ、ホテルにあつたような……」

「見た目より軽いな……それ」

その像を見ていた珠冬の、朝から思っていた疑問の声、そして軽々と持ち上げているさまを見た一眞の声が聞こえてくるが、それよりも鞠莉は善子のことを引き合いに出す。

「それを言ったら善子だって売り上げ *nothing* デース！」

善子を持つているのは黒い羽根の入った段ボール箱。しかし中身が減っているようには思えなかった。

「……ヨハネよ」

すると風が羽根を舞い上げてしまう。その光景を見て「まるで傷ついた私の心を癒してくれているかのよう……」なんて思いに耽る善子。しかし「バカなこと言つてないで急いで拾いな！」という美渡の怒声に背中を押され、全員で拾うことになってしまう。

「……鞠莉さん」

「どうしたの、一眞？」

気になりすぎた一眞は遂に鞠莉へと問いかけてしまう。理由は簡単。近くで首を垂

れている生徒会長のことである。

「ダイヤさん、なにかありました？　なんか、いつもと調子が違って見えたから……」
「ナニナニ、一眞はダイヤのこと気になってるの？」

鞠莉はすぐさま身体を押し付け、ジト目で聞いてくる。これは彼女がよくからかう時にしてくるやつだ。

「いや、違いますって！　ただ気になっただけです。それ以上でも以下でもないですよ。てかなんでそうなるんですか……!?!」

「それもそれでダイヤが傷つくと思うけど？」

「ええ……」

一眞の反応を楽しんだのか、「It's a joke!」と笑って見せる。そして先よりは真剣な面持ちになる。

「ダイヤのことは、マリーと果南に任せておきなさい！」

そう言われてしまったのであれば、幼馴染である彼女たちに任せるのが適任だろう。そう判断した一眞は鞠莉たちに後を託すのだった。

くく

巨大なプールからイルカが飛び上がるさまを見ていたのは、小さな園児だけではなかった。千歌のほかに1年組も混じって見惚れているのだ。

「えつとくじゃあ、仕事いい？」

何処からか曜の声が聞こえてきたため千歌は周りを見渡すが、当然曜の姿はなかった。

「曜ちゃん、どこ？」

「ここだよー！」

水族館のマスコットキャラに扮した曜が手を振る。

「にしても慣れてんなー」

「前にもバイトしたことがあるからね」

感心した一真は、園児の邪魔にならない程度に目の前のマスコットをのぞき込んでいた。

今日は水族館でイベントがあるからと、1日だけのアルバイトを頼まれたのだ。これも曜からの紹介であるため、彼女には感謝しなくてはいけない。

ここからは数人にわかれてそれぞれに割り振られた仕事をこなしていく。

売店ではダイヤのほかに、千歌や花丸、珠冬が担当していた。

「うどん、もう一丁!」

「まるは麵苦手ずら」

「まあまあ、そんなこと言わないで……」

「ほら、のんびりしている暇はありませんわよ!」

ダイヤの喝に3人の間の抜けた返事が返ってくる。しかし、その後ろでダイヤは思い出したかのように目を見開く。そしてソロソロと千歌の方に寄っていき……

「ち、千歌さん……? き、今日はいい天気ですわね」

他愛もない話題を振ってきた。しかしあまりに突然、さらにダイヤらしくないそれに千歌は固まる。

「花丸さん、うどんはお嫌い?」

花丸にも振るが、彼女も同じように固まってしまふ。加えて怯えているように見えたのは気のせいではないだろう。

「珠冬さんは、なにか好きな食べ物はありますか?」

「……までくれば珠冬も同じ反応だった。」

「なに？ なにかあった？」

「……あつたずら？」

「わからないずら。けどあれは多分……」

その不自然なほどの話題と、ダイヤの笑顔……。

「え……もしかして……」

そこから導き出されてしまったものに珠冬は声を震わせた。そして3人の声が綺麗に重なってしまったのだった。

「「すっごい怒ってるずらあああ〜!?」」

さらに屋外のステージを掃除していれば、梨子とルビイがアシカの餌を持ってきた。しかし餌を持っていることでアシカが近づいてきてしまい、2人はパニックで逃げてしまふ。それを何とかダイヤが笛を使ってプールへと戻すことで事なきを得た。しかし「ダメですわ……。こんなことしていたらまた硬いと思われて……」

本人は何故か落ち込んでいた。そんな彼女の姿を梨子は捉えていたが真意は不明のまま。

今度は園児たちの相手をしている曜、善子、一眞の元へと向かったダイヤ。

「はい、風船どうぞ」

ダイヤの目の前では風船をあげたり、おなじみの「ヨハネ降臨！」で園児たちを楽しませていた姿があった。

「僕はウルトラマンだぞ！」

「ぼくも!!」

そう言っつて善子を怪獣にでも見立てているのか、腕を十字に組んだ園児の姿もあった。しかし善子も「この墮天使ヨハネにその程度の攻撃など……」とか言っつて一緒に遊んでいるので問題はなさそうだ。

「みんなのヒーローだね」

園児たちの姿を見つめていた一眞に、曜は話しかけた。

「やめろよ、なんか妙に照れ臭いし……」

自分がこのように、憧れの姿として子どもたちから見られているのかと思うと、とても恥ずかしく感じてしまう。

「いいじゃん、どうしようもなくなった時に助けてくれる、光の巨人さん！」

そう言つて肩を叩かれるも、彼は動かなかつた。それは園児たちの様子、そして曜の言葉がはるか昔、母星で光の巨人のことを話していた少女のことを思い出させたからだつた。

「カズくん？」

「……あ？ ううん、大丈夫、大丈夫。もう少し風船配るよ！」

そう言つて一眞は風船をいくつか手に取つて、園児の方へと出向いていく。

「よ、曜……ちゃん」

そんな中、ダイヤは曜に呼びかけた。今まであまり使つたことのない敬称を付けて。その為かほぼ聞こえなかつたみたいだが。

「ダイヤさん、何か言いました？」

「いえ、その……」

「ダイヤさんも配りますか？」

そう言つて風船を差し出す曜。風船を手に取る前に、ダイヤは彼女のことをこう呼んだ。「曜ちゃん」と。

その衝撃でうっかり手を離してしまつた風船は天井へと向かつていく。

「善子ちゃん、一眞くんもおアルバイト頑張りますよ〜！」

そのままスキップで横切っていくダイヤを見送る善子と一真。その表情は凍り付いたかのように固まってしまった。そして目線だけがダイヤを追っていく。

「……ヨハネよ」

「そこ!？」

「違った?」

「いや、それよりも!」と一真。そして3人は集まり、さっきの違和感を確認しあう。明らかにいつもと違うダイヤであることが逆に怖いのだ。

「今の背筋に冷たいものが走る違和感……」

「わかる……」

「天界からの使者によってもう一つの世界が現出したかのような」

「なんだそれ……」

後半の例えはよくわからない。しかし感じたものは一緒らしい。

「お姉ちゃんが変?」

「なんかすごい怒っていたような……」

「悩んでいたような……」

人が少なくなってきたタイミングで8人は集まり、ルビイに相談する。妹であれば何

か知っていると思つたが、どうやら彼女にもわからないようだ。

「あれは、闇に染まりし者の微笑み……」

「かどうかはわからないけど」

「じゃあ、誰かがダイヤさんに成りすましている……う？」

あられもない方向へと話が展開していきそうな予感がし始めたため、口を出さないようにしてきた果南と鞠莉も、動かざるを得なくなつてしまった。

「ダイヤ……ちゃん？」

今までの事情を説明してくれた果南と鞠莉。千歌が聞いたまま返すと、2人は困り気味ながらも首を縦に振る。

「みんなともう少し距離を近づきたい……つてことなんだと思うけど……」

そこまで聞ければ、一同は成程だと納得する。会話の振り、頼りにされ過ぎること、そして名前の呼び方……ダイヤは彼女なりに距離を縮めようと努力していたのだ。

「じゃあ、あの笑顔は怒っているわけじゃなかったはずら？」

「悪いことしちゃったかも……」

花丸は安堵し、珠冬は申し訳なさそうに呟く。

「でも、可愛いところあるんですねダイヤさん」

意外な一面だと梨子はそう口にする。しかしなぜ言わなかったのだろうと曜は不思議に思う。それは果南も同じみたいだ。

「つつてもなかなか言い出せねえよ、こういうのって」

「でも、ダイヤは昔かつらそうなの。小学校の頃も、私たち以外はなかなか気づかなくって……」

「真面目でちゃんとしてて、頭がよくてお嬢様で……頼りがいはあるけど、どこか雲の上の存在で……」

「みんなそう思うから、ダイヤもそう振舞わなきゃってどんどん距離をとって……」

昔も現在の生徒会長のようにみんなの先頭に立ち、率先して何かをやってきたのだろう。みんなの前に立つ姿と言うのは、どこか大きく見えるものだ。そして自分とはどこか遠いものなのではないかと錯覚させる。前に立ち、頼りにされているから、ダイヤもそうあらねばと受け止めてしまう。

「本当は、すごい寂しがり屋なのよね」

すると、遠くから「すいませーん」と声が聞こえてきた。スタッフを呼んでいる男性

……若い青年のようだ。

「オレがいこう」

そう言つて一眞が立ち上がり、男の方へと向かう。

「……」

「どうしたの、曜？」

そんな遠ざかつていく彼の後ろ姿を見ていた曜を、不思議に思った善子は声をかける。

「ううん、ちょっと気になって……」

気のせいかもしれないが、彼に違和感を感じていたのだ。さらに、立ち上がる前にも何かしていたようだが、視界の端に入っただけで細かくは見えていなかった。

「えつと……トイレならここを曲がって〜」

一眞は場所を訪ねてきた男性を案内していた。口で説明するよりも、付いてきてもらった方が確実だと思つたからだ。

「クククツ……バカだな」

「はい？」

背後から聞こえてきたその声に一眞は足を止める。聞き間違いかかと、一眞は再度尋ねるように振り向けば――

発砲音と共に、左胸……心臓の付近に何かを着弾した。

「な――あつ――」

何もわからないまま、一眞は地面に倒れこむ。

「ヒ、ヒヒヒ……オレガ、オレガオーブヲオシタ……コレデアトハ……エネルギーヲコノシセツカラモラウダケ……」

横たわった彼を確認しながら地球人の青年は、昆虫のような巨大な複眼と金色の服、透明な上着が特徴の宇宙人へとその姿を変えた。

そして一眞が動かないことを確認すれば、すぐさま踵を返す。この水族館で何かをす

るために……。

第48話 赤の守り、紅の刃

一真が人型の強襲者に襲われてしまった頃、水族館のショースタジアムではちよつとしたトラブルが発生していた。

その音はAquoursとの仲が深まらないと落ち込んでしまい、海を見つめていたダイヤの下にも届くくらいには大きかった。

「どうやらそれは、水族館に来た園児たちがはしゃいでいるが故の声だったようだ。滅多に来ることはないし、来てみれば自分の知らない生物たちが近くにいる……。そんなある意味非日常的なその体験が、子どもたちを刺激しているのだろう。引率の先生の「待ちなさいーい！」という声も聞かず飛び出していくそれには、園児故のパワフルさと危なさが併存していた。

「もお、みんなー！ ちゃんとしてよおーー!!」

1人の園児が皆に呼びかけているが、誰の耳にも入っていないようだ。気にもせず自

分のしたいこと、目についたものへと飛び込んでいく。好奇心に溢れているのは良いが、小さいその身に何が起こるのか想像がつかない。なにかがあつては遅いのだ。

駆け付けたダイヤの目線の先にいた、注意をしようにも聞いてくれない園児の姿。そんな彼女の姿が、かつての自分と重なっていく。

「わあ!? なにこれっ!?!」

ダイヤとはまた別に、スタジアムにいた千歌たちも横をすり抜けて行ったり、目の前ではしゃいでいる園児たちの姿を見て固まってしまう。来てみれば、縦横無尽に子どもたちが駆け回っている光景が目のあるのだから無理もない。

「こらだめよ」

梨子は走り回る子どもに注意を促したりもしているが、ほとんどが聞いていないみいだ。

「ダメだ、全然言う事聞いてくれない……」

ルビイの震える声も、その喧噪に打ち消されてしまいそうになるくらいだ。收拾がつかなくなってしまう前にどうにかしなくては……と言いたいところだが、既につかいないと言われてしまうくらいには大混乱となっている。

すると、1人の園児が善子の衣装に触れる。グラデーシヨンの綺麗な羽根というのは、園児にとって珍しいものだったのだろう。しかし善子はたまらず「こらっ！」と声を張り上げてしまう。

それがまずかった。小さな子が善子くらいの歳の子に声を張り上げられれば、一体どうなるか……。上げた本人でもある善子ですらも「やってしまった……」と一瞬とはいえ先の感情の変化を後悔していた。

「なーかした、なーかした〜」

横でジト目ながらも弄ってくる花丸に、善子も軽いパニックに陥る。

「どーしょ……」

「収拾がつかないよ」

あるものは泣き、あるものは関係ないと走り回る。果南と鞠莉すらも、この状況にはお手上げだった。

「ちゃんとしてよお……」

自分の声はもう届かないというのは、年若な彼女にもわかつている事だろう。しかし、先頭に立つものとしては止めなければならない。ちゃんとしなくては……そう思っ

いた彼女の心が音を立てて簡単に折れてしまう直前——

スタジアム全体を、そしてなによりここにいる全員の鼓膜を……たつた一つの笛の音が震わせたのだ。

そして視線は自然と中央のステージに集まっていく。

「さあ、みんなスタジアムに集まれえー!!」

みんなから一番目立つ位置であろう、飛び込み台の上に立ったダイヤ。彼女の呼びかけに園児たちは一目散に集まっていく。

「園児の皆、走ったり大声を出すのは他の人の迷惑になるから、ぶつぶーですわ。みんな、ちゃんとしましょうね」

ダイヤの注意を素直に聞き入れ、元氣よく返事してくれる園児たち。さらに、園児たちを退屈させまいとステージ上で舞を披露する。その途中でウイंकするダイヤ。それは彼女と同じよう、皆を統率しようとした園児に向けてのものだろう。園児にとつてはダイヤの姿が憧れを抱く大きな姿に見えたに違いない。

そのまま丸く収まり、1日が終わるだろうとなった時……。

「動クナ！」

そんなしやがれたような妙な声と共に、銃弾を発射する音が聞こえた。

「なんですの!?!」

一瞬にして緊迫した空気が場を支配する。そして現れたのは、昆虫のような巨大な複眼と金色の服、透明な上着……そう、一眞を撃った張本人でもあるシャプレー星人だ。

「一体、どういうつもりですの……?」

恐る恐る、ダイヤは目の前の星人に問う。何故ここを襲ったのか。立て籠もりでもして、身代金を要求する……訳でもなさそうだ。

「鞠莉、どうする……?」

「ここはあのAlienの言う通りにすべきよ。下手に動いたら、ダイヤや園児たちが危険……」

そうは言っても、親友に銃口が向けられている光景を目にしながらも助けに行けないというのは辛いものだ。黙って見過ごしたくない鞠莉は唇を噛んでいた。

「オレガ求メテイルノハ、コレダ」

そう言って取り出したのは片手で持てるくらいの大さきの石……鉱石と言ったほうが良いかもしれない。そんな代物だった。

「コイツハ、ヤセルトニウムダ」

それが手に持った青く光る鉱石の名のようだ。さらにシャプレー星人は説明を続ける。

「マツタク……アクセサリーニシテ広メテモ、時間ガカカリ過ギルカラナ。ンデ思イツイタワケヨ。生体エネルギー豊富ナ子ドモヲ使エバイイツテナ」

ヤセルトニウムには、人間から生体エネルギーを吸い取って母体石に移すことが可能という特性がある。彼の考えていることは最短で、最速でエネルギーを集めようという事。だからこそ、生体エネルギー豊富で、尚且つ多くの人数がいるここを狙ったのだらう。

加えて、オーブの抹殺も含めていたのかもしれないが……。

「今日カラココハオレノ人間牧場ダ。ホラ、サツサトコツチニ来イ！」

「ウ、ウルトラマンが助けに来てくれるもん！」

園児の中の一人が恐怖しながら声を上げる。すると追従するように「そうだそうだ」という声が生体エネルギーの中から上がるが、シャプレー星人は笑いながらその言葉を否定する。

「ハハハハハッ、無理ダナ。ウルトラマンハ助けニ来ナイ。何故ナラオレガ始末シタカ

ラサ!!」

誇らしげに語るその姿に、ダイヤたち A q o u r s は園児たちとは違う意味で驚愕する。ウルトラマンの始末……それは即ち“一眞の死”であるからだ。そう言えば彼の姿を見ていないと思えば返せば、全身に寒気がまとわりついてくるのがよくわかる。

「来る! 絶対に来てくれる!!」

しかし、園児たちに彼の言葉は通じなかった。ウルトラマンは来ない。そう言われても尚、彼らは信じているのだ。ピンチになれば駆けつけてくれる……光の戦士の存在を。

「ウツセエガキダ……丁度いい、ヨク見トケ。オ前ヲ見セシメシテヤル」

シャプレー星人の銃口は、園児に向けられる。今の状況がどういふことか、そして自分に迫る運命が何なのか、園児なりにも理解していたのだろう。目は見開いて歯を鳴らし、脚が震え体は動かない。

だがそんな小さな体の前に、水色と白のストライプが重なる。

「おい、ソコヲドケ」

「いいえ、退きません」

黒い長髪を揺らし、青緑の瞳で目の前の星人を睨む。彼女の行動に果南や鞠莉は飛び出そうとする。しかしダイヤ自身に、それを止められたのだった。何も言わず、ただ首を横に振るだけで。

「へッ、才前ゴトキに何ガデキル、ウウン？」

「わかりません……。わたくしには彼のように戦う力を持つてはいませんから」

なら退いてろとシャプレー星人は言いかけるが、ダイヤの「ですが！」という声に止められる。

「それが、守らない」という理由にはなりませんわ」

「知ルカ、早く退ケツツテンダヨツ!!」

しかしダイヤは屈せず、しっかりと立つように足を広げ尚もこのような言葉で言い返した。

「いいえ！ わたくしはここから一步も退きません！」

「ソウカ、ジャアオマエガ最初ダ。オ友達ニモ看取つてモラエ!!」

激昂したシャプレー星人は光線銃の引き金を引いた。すれば同じくらいのタイミングで、果南や鞠莉の声が聞こえる。「ごめんなさい」と彼女は2人に、そして千歌たちへ心の中で謝罪を述べた。

——しかし、数秒後に来るであろう衝撃や激痛といったものが、彼女を襲うことは無かった。

恐る恐る臉を持ち上げれば、ドーム状の透明な膜が宇宙人を覆っていたのだ。

「てめえ如きがダイヤさんたちに手え出してんじゃねえぞ!!」

そんな声が聞こえてきた気がすれば、上空からシャプレー星人目掛けて小惑星の如き光が衝突した。

星人を吹き飛ばし、彼の立っていた場所に光が降り立つ。すると、赤と紫の光が徐々に収まっていく。それは人型の形となり……

「あっ!?!」

その後ろ姿を視線に捉えた園児は、彼が誰なのか理解すると思わず歓喜の声を上げる。

「「ウルトラマン!!」」

「か？……ウルトラマン……!?!」

園児たちと共に、目の前に立つ戦士の名を口にするダイヤ。そして彼が無事だったことに安堵し、口元をほころばせる。

オーブ スペシウムゼペリオンは頭だけをこちらに向ける。光り輝く双眸がダイヤの目と合えば、彼は静かに頷いた。ダイヤはすぐさま園児や保育士たちとともにその場を離れていく。

「ナ、何故ダ!? オ前は、オレガ確実ニ撃ツタハズ……」

シャプレー星人は状況を飲み込むことができな……いや拒否していた。自分が撃つたはず、案山子同然となった彼の横たわった姿も見た。なのに、今ここでウルトラマンとして立っている。その紛れもない事実には彼は狼狽える。

(………つっても、俺もよく覚えてるわけじゃないんだけどな)

不思議なことに、一真自身も生きていたことが驚きだった。

撃たれて気を失い、数分後に起き上がった。

不思議に思いつつ、撃たれたはずの胸元に手を当てる。その違和感に気付き、胸元につけられたポケットに手を入れてみた。そこにあったのは、ウルトラマンのフュージョンカードだ。

「カードが防いでくれた……つてことか?」

事実、それしかないだろうと自分に言い聞かせる。しかし、自分がこれを入れた覚えはない。まず、入れようとすら思わないだろう。

(そういえば……)

一真はあることを思い出していた。それはダイヤのことを果南や鞠莉から聞いた場面、そして男性を案内する場面だ。しかし、その間の部分だけが少し曖昧なのだ。まるで、誰かに体を貸していたかのように……。

「コノ、ナラモウ一度撃ち殺スマデダアアアア!」

光線銃から弾が撃ち出される前に、オーブの身体が紫色に輝く。目にもとまらぬスピードで突撃。撃つ暇も与えられず、気付けば拳で吹き飛ばされていた。

(もう撃たれんのは懲り懲りだからな)

オーブの体が赤く輝き、怪力で光線銃を破壊する。激昂の声を上げてこちらに向かってくるシャプレー星人を見据え、オーブは構える。

顔を狙ってきた右腕を絡ませ、逆にこちらの攻撃を与える。腹部への蹴り、首元への肘打ち。そして渾身のアツパーカット。しかし背中から落ちてもすぐさま起き上がる。オーブは迫りくる拳の乱舞を往なしていき、反撃の機会を伺う。鞭のようになつた蹴りが迫ってくれば、前転で躲す。

(背中がガラ空きだ！)

オーブは飛び上がり、2連撃の蹴りが背部に決まればシャプレー星人はその衝撃にっんのめる。

「コノ……ウルトラマンガアアア!!」

空高く飛び上がったシャプレー星人と同じように、オーブも飛んだ。次第に近づいていく両者……。そして手刀どうしが一瞬にして交わり着地。両者ともに、振りぬいた姿勢から動くことがない。

「……グッ、アア……アア……」

しばしの沈黙の後、シャプレー星人の体が地面へと倒れ伏したのだった。

シャプレー星人が倒れたことで、緊張の糸がほぐれた。オーブはそのまま消え去ろう

としたが、ウルトラマンを見た園児たちが一斉に走ってきて彼の周りに集まった。

「ウルトラマンだー!!」

「握手して〜!」

「大きくなったらオーブさんみたいになる〜!!」

色々と声をかけられるが、彼が喋ることは無かった。

（喋ったら……ダメだよな……でもいいのか……うん……）

なんとなく喋らないほうが良いかなと、彼は内心悩んでいたからだ。そして出した結

論は……

「シユ、シユワア……」

とだけ。後は首を振ったり握手をしたりするくらいのも、ボディランゲージでなんとか意思表示をする。

後ろで苦笑しているAqoursの視線がチクチクしているが、今は気にしないでおこらう。

「バカメ! マダ終ワツテナイゾ!!」

そんなシャプレー星人の声が空気を引き締める。満身創痕ながらも、彼はヤセルトニ

ウムを取り出した。

「オレガダメナラ、コイツニヤツテ貰ウゼ。コノ石ニ溜メ込ンダエネルギーデ……出デヨ、ベムラアアア!!」

天に向けて突き出したヤセルトニウムがスパーク。地響きと共に降り立ったのは全身に鱗と鋭い棘が生え、小さな前肢と長い尾を持った怪獣だった。しかしヤセルトニウムに強化されているのか、鉱石のように青くなつた背びれと、頭に生えた2本の角が特徴だった。

「早く逃げましょう!」

園児たちを先導するダイヤと一瞬だけ目が合うと、互いに頷きあつた。それぞれの役割を果たし合おうという決意の表れなのかもしれない。

すぐさまオーブは屋外へと出ていき、右の拳を突き出して巨大化していく。

目につくものを全てを破壊していくベムラーにすぐさま飛び掛かるオーブ。開幕一番に脳天へと手刀を打ち込み、さらに首筋には両腕で放つた。

そして生まれた隙にはすかさず、跳び蹴りを食らわして距離を離す。

「■■■■ ツー」

首を振って迫ってきた巨体を抑え込もうと両手で受け止めるも、ベムラーの角が発光。伝達してきたように口から光が漏れだす。刹那、青い口から吐かれた“ハイパーペイル熱線”が至近距離のオーブに襲い掛る。

抵抗してくる首の力をどうにかねじ伏せ、光線が当たらないように回避。狙いを外した熱線の威力で地面から破片が飛び散り、周囲に降り注いだ。

(当たったらマズいけど、無暗に避けるわけにもいかねえ……)

避けるのに越したことは無いが、それだけでは周りにも被害が及んでしまう。避難したとはいえ、近くには人もいるのだから気は抜けない。彼は先の熱線でドロドロに溶けた地面を見下ろし、すぐさま駆け出した。

「■■■■、■■■■アアア!!!」

まるで悪魔のような風貌に向けて2連撃で足を振るう。1連撃目は避けられるが、2連目は頭部を捉えることに成功した。さらに首元へと飛び掛かり、共に回ることで平衡感覚を狂わせる。そしてすれ違いざまに放った渾身の蹴りが再度ベムラーに隙を生んだ。

(これで……終わりだ!)

トドメをさすために、オーブは十字に腕を組んだ。

(スペリオン……光線っ!!)

だがあろうことか、放たれた光線はベムラーの角に吸収されてしまったのだ。すぐさま角から伝達していけば、威力が上乘せされたハイパーペイル熱線が無防備のオーブに衝突した。

軽々と宙に飛ばされ、地面に倒れこんだオーブのカラータイマーは遂に点滅を始める。

（まさか……光線は全て吸収ってか……？ あんの野郎、厄介なモノ呼びやがって）

呼び出した暗黒星人に毒づくオーブ。光線を吸収してする……というのは、以前に戦った台風怪獣に通ずるものを感じていた。

「がんばれー」

「がんばってー」

すると、彼の強化された聴力がある声を捉えたのだった。視線を向ければ、先ほどの園児たちがウルトラマンに向かって声を届けている。そこにはダイヤをはじめとした Aquours の面々もいた。

（みんなのヒーロー……ね）

どんなに絶望的でも、必ず立ち上がり人々を守る……そんな背中を見せる者がいる。だからこそどんな状況でも彼ら、彼女らは強くいられる。信じてくれる。その声が、力に、光になる。

(光の巨人が……いつまでも倒れてるわけにはいかないよなっ！)

ベムラーから放たれた3度目の熱戦がオーブを直撃。しかし、爆発が起きることは無かった。

「ク、ググウウオオオ……」

何故ならそこには、オーブカリバーで熱線を防ぎ続けているオーブオリジンの姿があったからだ。

簡単に体を浮かすほどの威力を持つ熱線に押されそうになるも、腰や足に力を入れて踏みとどまるオーブ。

「ウ……オオ……！」

そして遂に熱線を退けたオーブがベムラーへと踏み込んでいく。

瞬時に振り下ろし、再度斬り上げる。その閃光のようなV字斬りがベムラーの角を斬り落とした。悶絶の声を上げるベムラーから離れたオーブは聖剣を構えた。

(今度こそ……トドメだっ！)

オーブカリバーに内包されている4属性の1つ。火のエレメントを選択。目の前で日輪の如く描いた炎をベムラーに向けて飛ばすと、高速回転で火の玉となりヤツを拘束。

「オーブフレイム……カリバアアアア!!」

己の声と共に、天から地へと振り下ろされた紅の縦斬りが、悪魔の如く凶悪なその姿を爆発させるのだった。

戦いの後、様々な声を上げる園児たちを見下ろすオーブ。彼はただただ静かに首を振り、空へと飛翔していくのだった。

くく

「結局、わたくしは、〃わたくし〃でしかないのですわね……」

全てが終わった後、ダイヤは一人そう呟いた。試行錯誤しながらも、やはり先頭に立つものとして様々な念を抱かれ、ぎゅつと仲が深まることは無いのかと……。〃ダイヤさん〃でしかないのかと。

「ダイヤさん！」

そう考えていると、やはりその敬称で近づいてくるものが一人。もう見ずとも、その声で誰なのかわかってしまうのだが。

「一真さん。皆さんからは逃げてきたんですの？」

「あ、いや……そんなところですよ……」

一真はあの後、心配したとかその他諸々でみんなに説教されていたのだ。彼女らのジト目は心臓にあまりよくないと先の一件で分かった。

「それよりも、今日は本当にすみませんでした。それと……ありがとうございました！」
真面目な口調になった一真は、そう言ってすぐさま頭を上げた。向けられた本人は「いい、いきなりなんですの？」と困惑している。

「今日のアレは、ダイヤさんがいたから俺も間に合いました。俺はただ戦う事しかできなかつた……ダイヤさんが守ってくれていたからこそなんです。ヒーローは俺なんかじゃなくて、ダイヤさんですよ」

ダイヤは言葉を失う。あの星人に向かって自分は力が無いと言ったのに、彼にはヒーローだと言われた。そのことで混乱しているのかもしれない。

「それに……」

「ダイヤさん」には「ダイヤさん」でいて欲しいと思います」

一眞の次に聞こえてきたのは千歌の声だった。

「確かに、果南ちゃんや鞠莉ちゃんと違ってふざけたり、冗談言ったりできないなっというところもあるけど……。でも、ダイヤさんはいざとなった時頼りになって、私たちがだらけているときは叱ってくれる。ちゃんとしてるんです」

ダイヤだからこそできることも、してくれることもある。別に「ダイヤさん」であるということとは、仲が深まっていないという事ではない。「ダイヤさん」であるからこそ、みんなとの関係も強く結びついている。信頼している。

「だから……みんな安心できるし、そんなダイヤさんが大好きです」

千歌が「ね!」と呼びかければ、全員が笑顔で頷く。もう既に、ダイヤちゃんと呼ばれる以上の関係になっていたのだ。

「だからこれからまずと、「ダイヤさん」でいてください。よろしくお願いします!!」

千歌の……A q p u r s の言葉に、彼女の瞳からこぼれ出た雫。それをどうにか落ち

着けて、彼女は振り向きながら答える。

「わたくしはどっちでもいいんですのよ……別に」

そう言って右のほくろの辺りを掻く。それが何を意味するのか……それは果南と鞠莉の2人のみぞ知る……ということなのだろう。

ありがとうと、改めてよろしくと言う意味を込め、千歌の掛け声の後に――

『ダイヤちゃん』

そう呼べば、彼女は嬉しそうに微笑んでくれた。

「ク、クソ……ナンデダ……オレガ負ケルナンテ……」

暗い夜道をおぼつかない足取りで歩くシヤプレー星人。彼は今度こそと、右手に持ったヤセルトニウムを見つめる。

「いいえ、あなたには“次”なんてもの、存在するわけないでしょ？」

闇夜に紛れ込むかのようなドレスと、月明かりが照らし、光沢を見せる肌。

「キ、貴様ハ——アツ——アア——」

その言葉を最後に、シヤプレー星人は息絶えることになった。

「ふーん、これがヤセルトニウムねえ……随分と使えそうな代物ね」

「そうかい、それはよかった」

ヤセルトニウムを見つめる女……ヴィルゴの横に立ったのはアオボシ。彼もまた左手にダークリングを持っていた。

「……なに？」

前回の“いやがらせ”のせいか、彼女の嫌悪は以前よりも膨れ上がっているようだ。

明らかに嫌悪する声だったのだから。

「ダークリング、君に譲ろうと思ってる？」

「どういう風の吹き回しかしら、私から奪っておいて今度は譲る？ 頭を見てもらった

ほうが良いんじゃない？」

「君も同じようなモノだろ？」とつけ、アオボシはリング内に集まった4つのエレメント、その残り香とともにリングの羽根を展開した。すると空間が捻じれていく、そして1つの点に集まっていけばとあるアイテムが生まれた。それはまるで小型化した――

「それがあるからもういらぬ……ってこと？」

「ああ、そうなるね。これで君も存分に楽しめるんじゃないか？」

彼の言葉には何も返さず、ダークリングだけをぶんどっていったヴィルゴはそのまま闇へと消えた。

「ありがとうな、君の働きは最後のエレメントを使わせたことだ」

既に亡骸となったシャプレー星人“だったもの”に話しかけるアオボシ。

「さあ、ようやくだ。これで君と対等に戦えるよ、シリウス……」

手に持ったソレを月に翳す彼は、これからのことに興奮を隠しきれないよう……。獣

じみた邪悪な笑いが、辺りに響いていた。

第49話 彼女らが巡り合う時

「また雨が強くなってきたね」

窓の外に目を向けたルビィの眩きに、一同は視線を移す。彼女の言う通り、空は暗く淀んでいた。その光景が目に入ってしまったえば、件の空と同じように気分が落ち込んでしまふのは仕方ないと言えよう。

「夜になるにつれて強くなるって言うし……」

ホワイトボードを前にした梨子の言葉に「無理して続けない方がよさそうですね」とダイヤは提案する。確かに強くなってからでは色々と不便も生じるだろう。

「もうすぐ地区予選なのにく」

「入学希望者も50人超えてきたんでしょ」

地区予選の前に、練習を早く切り上げるのは不本意だと千歌。さらに曜も、もう一つの目標である入学希望者が遂に半分を超えたことを知らせる。頑張りたくなる気持ちもわかるのだが、と果南は練習に熱の入る2人を諫める。

「安全第一、今日のところは終わりにしよう？」

「はいこれ」

すると鞠莉が手渡してきたのはカイロだった。そこまで寒くもないのになぜ、と果南は尋ねる。

「待てば海路の日和あり」って言うしね」

「ハハ……かいろだけにつてか……はは……」

今は思うようにいなくなるとも、じつと待てばそのうちチャンスがめぐってくる。だから辛抱強く待てという意味だ。だがそんなことよりも鞠莉のジョークに一同は固まり、果南は手に持ったカイロを落としてしまうのだった。

「果南ちゃんと梨子ちゃんはそのうちの車ね、曜ちゃんも乗ってかない？」

「いいの」

今回はバスではなく、それぞれの車でという事になった。そして善子はどうすると千歌は聞いたのだが……

「嵐は堕天使の魂を揺さぶる……秘めた力がこの羽根に宿——」

「ふざけてる場合じゃないよー」

そんな言葉を残し、千歌も車に乗りこむ。

「ま、まあ、気を付けて……な」

せめてもの……という事で一眞は声をかけた。しかし善子は「この近辺に家はあるので大丈夫です（意識）」とのこと、加えてルビィも「すぐそこだもんね」と心配している様子はなさそうなので、大丈夫だろう。

「善子、あんまり身体冷やさないようにね！」

「んなのわかつてるわよ！ あとヨハネッ！」

窓から顔を覗かせた珠冬に突つかかる善子だったが、それもすぐに終わる。そして黒い傘をさした彼女の横を車が通り過ぎれば、さつきまでのことは嘘だったかのように静かになった。

「胸騒ぎがするこの空……最終決戦的な何かが始まろうと——」

言い切る前に吹かれた猛烈な突風によって彼女の傘は持ち主の手を離れ、どんどん遠ざかっていく。

「こらー、待てー！」

それは面白いくらいに風に運ばれ、善子はキャッチし損ねる。まるで生き物のようにアグレッシブだ。だがある程度進むと傘は止まった。離れた善子を待っている……と言えそうなもので、実際彼女も口に出した。

「その動き………何かが私を導い——」

しかし、またもやすべてを言い切る前に突風が彼女を襲う。それは彼女の言う、墮天

使の祝福なのか。すると傘の引つ掛かった場所からガサガサ……と妙な音が聞こえてきた。

「……え、なにっ!?!」

突然の物音に、善子は構えてしまう。しかし人の好奇心や探求心というのは時に恐怖を上回る。やるなど言われればやってみたくなり、見るなど言われれば見たくなる。それは太古の昔から変わることのなく、もうそれはDNAに刻み込まれているのではないかと思いたくなるほどのものだ。日本の昔話にも書かれている。

そんな好奇心が善子を傘の下へと誘う。

善子が見たのは一見普通の段ボール箱。それが小刻みに震えているのだ。気になつて仕方がない善子は躊躇うことなく、箱の中を覗き込む。

「狼……? いや、ライオン……? まさか、堕天使の眷属……にしては色が明るいわよね……じゃあ天界の神獣!?!」

傍から見れば、訳の分からないことを口走っているようにしか見えない。しかし彼女にとつては一大事だったのだ。いったん目を離し、自分を落ち着ける善子。

「善子、そんなわけないでしょ。あなたは見間違えているのよ。そうよ、絶対そうだから……」

そしてもう一度、先ほどの視覚情報を疑うように目を細めて覗き込んだ。

「……………ダメよヨハネ。そんなわけないでしょ」

半分パニツクのようなだが、自分に言い聞かせて踵を返そうとする。しかし鼓膜を震わすのは背後から聞こえる弱々しい鳴き声。振り向いてしまえば、己を見上げている緑色の瞳が目に入る。目に入ってしまったまえば、善子は離れようにも離れられなかった。数秒、或いは数分見つめ合った末に彼女がとった行動は――

くく

「いける、大丈夫」

「うん、絶対動かない。これは保証する！」

曜と一眞は自信たっぷりの様子で話しかけていた。しかし直後に見せた悪戯っ子のような笑みが不安を煽っているが、彼は気付いていないだろう。

2人の念押しに、階段の方からソロソロと近づき揺れる赤紫色の髪。わなわたと震える手が千歌の飼っている犬、しいたけに触れる瞬間目を見せて小さく吠える。

「イイク!? やっぱ無理ー!!」

「あつ、惜しいなあと少しだったのに……」

すぐさま後退した梨子を見て残念そうに語る一真。しかし当の本人は「やっぱ無理よ〜!」と返す。そんなやり取りをしていれば、障子が開きダイヤが顔を覗かせる。

「騒がしいですわよ」

「梨子ちゃんが、しいたけと目が合って触れるかもって」

「ほんと!?!」

すると話を聞いた千歌も顔を覗かせる。そこまで怖がるものではないと、ずっと梨子に言っていた千歌だからなおさら嬉しいのだろう。梨子の手を引き、しいたけの元まで連れていく千歌。

2度目のチャレンジ……だったか

「ヒイイイ!?! ダメ、やっぱ無理!」

「またもや失敗。しいたけが直前で吠えてしまうのが原因だろうが、こればかりはどうにも。梨子のおっかなびつくり、というのも悪いのかもしれないが。」

「う〜ん、しいたけ梨子ちゃんのこと大好きだと思っただけど……」

千歌は不思議そうに呟くが梨子は「そんなことない」と返す。

「そんなことある。犬は見ただけで、敵と味方を見分ける不思議な力があるって」

梨子に説明していた千歌の話は、自然と一真も聞き入っていた。一見信じがたいように聞こえるが、世界が世界だ。何があっても不思議じゃない、などと考えていると「いい加減始めるよ」と果南が呼びかけてきた。

そもそも、今日十千万に集まったのは他でもないライブについての特戦会議。「今日こそ考えないと。時間もないんだよ?」と進行していくのは果南だ。

「わかってるすら……」

「でも、テーマっていわれると」

「どうしても思いつかないよね……」

次の予選ではどういったテーマの曲、ダンスで勝負するかという事なのだが、どうにもアイディアが出てこない。1年生はお手あげといった感じだ。

「ですが暗黒と言うのはあり得ませんけどね」

あらかじめ出たであろうその案をダイヤが却下すると、隣から「どうしてよ!」と抗議の声が聞こえてくる。

「墮天使と言えば暗黒。A q p u r sと共に歩んだ暗黒の墮天使ヨハネ軌跡を――」

――

「やっぱり輝きだよ!」

「聞きなさいよー!!」

もうお決まりだと言わんばかりにスルーして千歌が挙げたのも、彼女の根底にあるあの“輝き”だった。

「まあ、輝きつてのは千歌が始めた時からずっと追いかけてきたものだからね」

「ですがAqpursの可能性を広げるためには、他にも模索が必要ですよ」

そう話す果南とは裏腹に、ダイヤに至ってはあまり好感触ではなさそうだった。加えて携帯の画面を一真たちに見せる。

彼女の再生した動画からは、以前とは異なる曲調で踊る2人の姉妹の姿が映し出されている。その激しいフオーマンスには、つい目を奪われてしまう。

「これってSaint Snowさんなの!?!」

「ひとつに留まらない多くの魅力を持つていなければ、全国大会には進めませんわ」

「そうだよね。次はこの前突破できなかった地区大会……」

ダイヤそして曜の言葉に、皆は納得する。限りある1つよりも、様々な面を見せる複数魅力がある方が強いに決まっている。今まで見せてこなかった新たな風。それを起こすべきなのかもしれない。

「何か新しい要素が欲しいよね」

「新しい……要素……」

皆が考え込む沈黙を破ったのは、意外にも寝息だった。視線を向ければ、鞠莉は瞳が描かれた眼鏡を着用している。

「またこんな眼鏡で誤魔化して……あれ？」

梨子が彼女から外せば、その下には眼鏡と同じような瞳の描かれたシール。まさかの二重対策。

「待てば海路の日和あり、だって」

「焦らず時機を待ててか？」

「鞠莉ちゃん、長い話苦手だから……」

彼女のマイペースさには、ため息を吐くも時もあるが、張り詰めた空気を和らげられることもある。今はその両方だ。

そして千歌は同意を誘うように善子に語り掛けるが、隣から聞こえたのは善子の声ではなく、しいたけの鳴き声。まさかの出来事にみんなは驚いて声を上げる。

「善子ちゃんがしいたけちゃんに!」

「そんなわけではないでしょ!」

「ふわあ、騒がしいデスネ」

いつも通りのAppurraらしい雰囲気になったなと考えていけば、花丸の報告が聞こえてくる。どうやら善子からメールが来たみたいだ。

「天界の勢力の波動を察知したため、現空間より離脱……」

「天界の勢力のはど……え？」

「どゆこと？」

「要するに、〃 帰る〃 つてことずら」

花丸の訳に「素直にそう言えよ！」と一真がツツコミを飛ばすのは、仕方がないと言えた。

くく

「うし、今日の散歩は終わりだ。しいたけもお疲れく」

しいたけからリードを外しつつ、頭を撫でる一真。今日はしいたけの散歩を任されていたのだ。気持ちよさそうに頭を預けてくるしいたけを見て、先の千歌の言葉を思い出す。

「敵味方を見分ける不思議な力……ね」

今はこうやって接してきているという事は、自分のことを味方とみているのだろう。

その時、彼の中にはある考えが頭を過った。

「ああ、悪いなしいたけ」

なにをしているんだと、掌を舐められ我に返る一眞。そのまま犬小屋へとしいたけを戻し、彼は部屋へと戻ろうとする。

だが寸前に彼が足を止めたのは、携帯の着信を示すバイブレーションが伝わったから。そのまま流れるような手つきで携帯を耳に当てる。

「はぁーい、もしもし〜」

間の抜けたような声と調子で話しながら、裏口の方から十千万へと入っていく。表から入ると怒られるのは、千歌とのやり取りもあつてか体に染みついている。

「……………うん。……………うん。……………う、えつ、え……………う？」

片方の靴を脱いだところで手が止まる。「わかった。わかったから。はいはいはいはい。すぐ行きますから！ はいはい、わかったよ！」と電話越しからでも若干押され気味な一眞は電話を切り、もう一度靴を履きなおして外出するのだった。

「で、どうしたんだよ？」

腕組みをし、尚且つジト目で見つめる一眞。その視線の先にいたのは、焦り気味の梨子だった。

「ちよつと一眞くんに聞きたいことがあつて……」

「それはわかつてる。けどさ……なんで廊下で話してんだよ？」

一眞は梨子の家に呼ばれていたのだ。連絡を貰った後すぐ行つてみれば、梨子の母親が案内してくれた。妙にテンションがおかしかったような気もするが、多分気のせいだろう。

「梨子、やったじゃない！」

「……つ、そ、そんなんじゃないから！ ほら、お母さんはもう行つていいから！」

「あらそう？ じゃあ一眞くんもごゆつくり〜」

「ああ……はい……」

そんなやりとりがついさつき行われていた。しかしそれは置いていいだろう。

話を戻せば、廊下で突つ立ってただ話している状況を一眞は尋ねているのだ。

「あははは……」

「いやいや、笑ってる場合じゃなくて……」

「そうね。ごめんなさい。実は——」

梨子が説明するには、あの作戦会議の後沼津まで忘れ物を届けに行つた梨子は善子に会つたらしい。すると彼女は何やら、子犬くらいの大きさの生物を保護していた。だが、善子の家はペット禁止。しかしこのまま放置……にしておくわけにもいかず……

「それで、預かつてくれて頼まれた訳か」

話が見えてきた。廊下で話しているのもおそらく、部屋にいるから入れないというやつなのだろう。母親にもまだ伝えていないようだから仕方ないとはいえ、どうして部屋に入れたんだよと言いたくなってしまう。

「そうなのよ……ってなに笑ってるの？」

梨子にとっては深刻な状況だからなのか、口元の緩んだ一眞を見て頬を膨らます。

「ごめんごめん、別に悪気があつたわけじゃないよ。……でもさ、いいチャンスなんじゃないの？ これを機に克服しちまえよ」

「そうだけど、そうじゃないというか……。あのね、善子ちゃんに頼まれたの……犬じゃないの」

梨子の告白に一眞の頭は一瞬、疑問符でいっぱいになる。しかしそう言えば、さつき

の説明でも子犬とは言っていないなかったような……と記憶を整理していく。

「じゃあ、なんだよ？」

「それが……わからないのよ」

「わからない？ そりゃないだろ。名前がわかんなくても、ネットで調べれば近いのだったっていくつかヒットするだろ」

「それがネットにも載ってないのよ。見た目も何も、一度も目にしたことがないの」

広大なインターネットのどこにも載っていないとなれば、餌のアレコレもわからないのは当然と言える。「なら善子はどうしてんだ？」と聞いてみれば、彼女は犬用のミルクやドックフードを食べさせていたんだとか。

「……大丈夫なのか？」

「今のところはね。それに、善子ちゃんが一番大好きって言ったのは小型犬用のビスケットよ」

「おいおいおい、ホントに犬じゃないの？」

疑いの目を向ける一真だったが、一方で梨子がここで嘘を吐くとも思えない。そのまま彼は梨子が自分を読んだ理由を尋ねる。

「呼んだ理由ってのは、その……動物？ のことだよな？」

「うん。一真くんなら何か知っているかなと思って」

「わかった。とりあえず見てみようか」

梨子の「ありがとう」という声の後、意を決して自室の扉を開けば、そこには見たことのない生物が皿に盛られたクッキーを食べている光景だった。

「……ホントだったんだな」

「信じてなかったの!?!」

「ああ、いや違うって。ほら、現実味が湧かないと言うか……何と言うか……」

「まあいいわ。それで、どう? 見たことある?」

梨子は相変わらず部屋に入らないみたいだが、一眞は臆することなく部屋に入ってしまった。そして、近くまで寄るとしやがみ、その生物をのぞき込む。

それは竜とライオンを掛け合わせたような姿に青い体色とオレンジ色の爪、そして全身に白い鬣が生えている生物だった。恐怖を煽る見た目ではあるが、大きさが子犬程度であること、そして妙にしおらしいからか、脅威には感じなかった。

「頼ってくれて有難いけど、俺にはさっぱりだ。まあ直感だけど、この星のモンじゃねえ……っつてくらいしかわかんね」

「それ、大丈夫なの?」

この星の生物じゃないと言われれば、今の梨子みたいに不安になるだろう。だが、今の様子ではそこまで危険だと感じることもない。

さらにその生物は、扉を開けた梨子に気が付くと、彼女を見上げ近づいていく。しかしそれも敵意からではないというのはなんとなくわかる。

「大丈夫だと思う。それに、梨子に懐いているみたいだしな」
「冗談じゃないでしょうね？」

今度はこちらが梨子にジト目を向けられた。先の仕返しだろうか。

「冗談なんかじゃないって。ほら、千歌の言つてた……敵と味方を見分ける、つてやつ」
預かった生物の正体はわからないが、梨子が預かっていても問題ないだろうという判断で、その場はお開きとなった。

「とは言つても、力になれなくて悪かったな」

「ううん、そんなことないよ。今日はありがとう」

力になれずと謝罪する一真に声をかける梨子。そこには先ほどの不安に塗れた様子ではなく、どこか穏やかな顔を見せている。

彼女の様子から、これからは何とかやっていけるだろう。しかし、地球外の生物を流石にあのままにしておくわけにもいかない。遅かれ早かれ、いつかはその問題と向き合うことになる。そのことを考えると、少しだけ憂鬱な気分になってしまう。

「共には暮らすことはできないのか……?」

夜空の下眩かれた彼の言葉は誰にも聞かれることなく、まだ早いと感じるくらいの、冷たい風と共に流されていくのだった。

第50話 獅子の名は

それは、善子が「白い生物」を拾ってから数時間後のこと。

「くそ……ここに置いといたはずなんだがな……」

少し高めの背丈、短い髪、そして新調したのか、妙に着慣れていないように見えるスーツ姿。そんな見た目こそはただの一般男性ではあるが、彼が探しているのはあの地球外の生物であった。

「丁寧に運んできたつてのによ……これじゃあヴィルゴ様に殺される……」

その口ぶりから、彼が運んできたのだろう。しかし、己の不注意で善子が拾っていつてしまった。数刻前の自分に毒づきながら、最悪の結末だけは回避したいと、彼は辺りを見渡していく。

そして「どこいきやがった……ホロポロス……」とあの生物の名称ととれる言葉を口ずさみ、彼は走り出していくのだった。

一瞬、男性の顔がホログラムのように歪み、昆虫と思しき赤い複眼だけが光っていたことは、誰も知らない。

く

「ワン、ツー、スリー、フォー、ワン、ツー、スリー、フォー……」

カウントする果南の声とリズムをとる手拍子。そんな見慣れた光景が屋上にはあった。次は涙をのんだ地区予選という事で、練習には一段と熱が入っている。

(特に荒立ったこともないみたいだしな……)

靴が地面を擦るといふ、ずっと聞いてきた音。様々な音が交差する中で、ふと一眞の目線は皆と同じようにステップを踏む梨子に向く。

早いことに、梨子がああの生物を引き取ってから数日が経とうとしているのだ。それまでに何かあった……というような報告は聞いてないので、梨子も仲良くやっているのだ。

ろう。しかし、梨子自身には変化があった。一眞の方からも近況を聞くことがあったのだが、梨子から返ってくるのはあの生物の“可愛いところ”の報告だけ。

(マジで克服してるのかもしんねえな……犬じゃねえけど)

「ルビイちゃんもう少し内側」

数時間前のことを思い出していれば、A p p u r s は最後のポーズまで通し終えたようだ。ルビイの立ち位置が若干外側だったが、大した問題ではなさそうだ。

「前よりだいぶ良くなってきたぞ」

「ホントですかー!」

ルビイの眼差しに一眞は笑顔で頷く。嬉しそうな妹の姿を見たダイヤは「ではもう一度……」と言いかけたところで空を見る。

既に薄紫色に染まった空。そして太陽は山に隠れようとしている。誰が見ても、もう日暮れが近くなってきていることなど明らかだった。

「日が短くなってるからね」

「ケガするといけないしね。あとは沼津で練習するときにしよう」

曜の言葉に、鞠莉も同意する。ライトスタンドなどがない屋上では、暗くなつてからは見辛いだろう。それ故に起きるであろう怪我は最も避けたいものだし、ここで終わろうと提案する。

「じゃあ終り?」

「うん……どうしたの?」

「え、いや、ちよつと……私、今日は先帰るね!」

妙にうれしそうだったのに、千歌に問われると歯切れが悪くなる梨子。そして何も言わず帰っていく。そんな、「騒がしいな」と思わせる後ろ姿を見てため息を吐くのは一眞だった。

「また?」

「なにかあつたずら?」

「そういえば、こここのところ練習終わつちやうとすぐ帰つちやうよね」

彼女の最近のやけに早く帰ろうとする姿には、千歌は勿論、花丸やルビイたちも不思議に思っていたようだ。一眞は心当たりはあるのだが、特に語らずその場を後にする。

しかし動きが若干不自然だったのか、それとも一眞の表情に苦笑が見られたのか……。彼の後ろ姿を目で追うものが1人いたことは、一眞でも気が付かなかつた。

「何か知ってるでしょ?」

「……………知らない」

「何よその間！ 明らかに知ってるでしょ!？」

一眞の歩く隣で声をあげているのは勿論善子。あの後すぐにバレたのだ。彼女の問いに別段答えない理由は無いのだが、少し弄ってみたいと思つたのかもしれない。

そのやり取りのしようもなさに溜息を吐いた善子。すると彼女は打って変わり、落ちて着いた口調で尋ねてくる。

「あの生物、何か知ってるの?」

「梨子にも聞かれたよ、それ」

「で? なんて答えたのよ?」

「知らない。でも地球上の生物じゃない」って答えた」

納得した善子は「そうよね」と眩き、後は黙り込む。見つけた彼女も少なからず気付いていたのだろう。それが今確信に至つた。また暫くの沈黙の後、一眞は口を開く。

「で、なんでここにいるんだ?」

「梨子の家を尋ねるのよ。ここまできればわかるでしょ?」

予想通りの答えに「だよな」と返す一眞。梨子の話に聞いたところ、最初に見つけ、拾つたのは善子だったはず。彼女も思うところがあるのだろう。

目的の場所までもう少しといったところで、ふと思ひ出した善子は隣を歩く少年に尋ねる。

「なんで一真も来るの？」

「あのな……いくら可愛いからって地球外の生物だぞ。それなりの注意は必要なんだ」
「それもそうよね、悪かったわ」

善子の言うように、一真まで赴く必要はないように感じられる。しかし、その会話の中心にあるものは正体がわからない未知の生物。現状どうすることが正解だと言いつれない今、一真も見届ける必要があると感じたのだ。

梨子の家のインターホンを押せば、すぐさま彼女の母親が出てきてくれて部屋へと案内してくれた。

「なに、あなたも知り合いなの？」

「色々あったんだ。何も聞くな……」

「え、ええ。そうしておくわ」

一真の引き攣った顔を見たからなのか、苦笑しながら了承してくれた。やっぱり善子だ。

「梨子、お友達よ」

母親が梨子の部屋を開ければ、彼女はライトグリーンのゲージを愛しそうに見つめている。中には白いアイツがいるのだろう。

「一真くんと……善子ちゃん……!?!」

「よっ」

「ヨハネ……!」

「あら、まだそのワンちゃんいたの?」

母親には犬という事で誤魔化しているらしい。それにしても梨子は、ゲージの中の存在に心を奪われたようで、「もう少し預かってほしいって頼まれちゃって……」と母親に返していた。誰も頼んでないぞ、と一真は内心でツッコむ。

「でも梨子ちゃん、犬嫌い苦手だからやっぱり私の家で預かるのかな」

「あら、善子ちゃんの家はマンションだからダメって聞いたけど?」

「少しなら大丈夫だから」

「ダメって言うから私が預かったのよ?」

どちらが預かるかで揉めるとは、梨子に頼んだ当初は思っていなかっただろう。

「さあご飯にしましょうね、ノクターン」

「ノクターン……?」

「ど、どうぞ、ごゆっくり……」

そっちのけで話を始めてしまったためなのか、梨子の母親は微妙な表情をしながらドアを閉めていった。そしてドアが完璧に閉まったあと、善子は開口一番に「ノクターン

ンってなによ!」と問いかけた。

「この子の名前よ。いつまでも名前が無いのは可哀想でしょー」

「この子は私が出会ったのよ!」 名前だってネメアーっていう立派なのがあるんだから!!」

2人して別々の名前を付けているこの光景を見守るしかない一真。口を出しに来たわけでもないが、かといつて来るべきではなかったのではと後悔してしまう。

どうせ今は何を言おうとも、「うるさい」の一言で片づけられるのがオチだ。

「一真(くん)はどう思う!」

が、どういうわけかジャツジは彼に任せられたようだ。このまま2人で話しても、埒が明かないとも思ったのだろう。しかし、飼い主でも発見者でもない一真に判断を任ずのもどうかと思うが。

「……………はひとまず……………ドローで」

曖昧な返しで、今日はひとまず落ち着いてもらった。

く

その翌日。いつも通り練習が終わった後には梨子と善子が言い合いをしながら、ライトグリーンズのゲージを抱えて歩いていった。どうやら今日は人気のいないところで、“ノクターン”あるいは“ネメアー”を走らせてやるんだとか。ずっと家の中、という訳にもいかないのはごもつともではあるのだが、大丈夫だろうか。

「ノクターン！ 取っておいでー!!」

「だからネメアーよ！」

梨子がボールを投げれば、その白い蠶を揺らして疾走するノクターン。その速さは、普段目にする動物の枠組みを越えていた。しかし動きは犬そのもので、ボールを口に咥えれば梨子や善子のもとに一目散に戻っていく。

「よくできたね！」

「ふん、ヨハネの使役する魔獣ならこれくらいできて当然……って聞きなさいよ!」

善子には脇目もふらず、ノクターンをわしゃわしゃと撫でる梨子。その光景は、犬と遊んでいるものと何ら変わりない。そんな光景を見ていると、自分と彼女らが関わっていているように、怪獣と人……異なる種族もわかり合えるのではないかと思えるのだった。

「なにボーつとしてんのよ」

「んあ?」

間の抜けた声を出した一真が横を向けば、そこには善子が座っていたのだった。

「別に……」

「ここまでできて誤魔化すの?」

善子の指摘にはなにも言い返せない一真は、どこから話せばいいかと考えを巡らせる。すると2人の姿を見た梨子も、一真の隣に座っていた。

「俺さ、ずっと怪獣と戦ってきたけど、梨子や善子見てたら思うんだよ。怪獣も俺たちとおんなじだつて」

それだけでは意味が伝わらず、両者ともに首を傾げている。その様子を見て、一真は「ごめん」と言いながら話を続ける。

「俺たちみたいに、いい奴も、悪い奴もいるってことだよ。確かに、自分の楽しみのために牙をむくつてのは許せない。けど、一概に敵と決めつけちゃいけないのかも……って思たんだ」

思い返せば、今までは“狂暴で殺戮を繰り返す生物”だとしか思っていなかったのかもしれない。そして梨子や善子と触れ合うその生物は、間違いなく怪獣と呼ばれる類だ。しかし、彼女たちは心を通わせることができていた。それを今、この状況が証明している。

「だからさ、いつかは怪獣と共に住めることもあるかもしれないって思うんだ。同じ生物で、同じ命だから。これって、俺が……いや、ウルトラマンとしても大事なことだと思うんだ」

ただ倒すだけではいけない。同じ唯一の命だからこそ、考え続けていかななくてはいけないと。

「そんなこと考えてたのね」

「そんなって……俺にとつては結構重大なものなんだけど……」

「でも、それってすごくいいことだと私は思うな」

ノクターンに顔を舐められているのがくすぐったいのだろう。顔を背け、片目を瞑つ

た梨子は言った。

「わ、私もいいことだつて思ったわよ！ でも、共存とかそれ以前に、私にとってその子はもう特別なのよ……」

善子のことを聞く限り、一真とはまた別の感情を抱いているみたいだった。

「それって前に言つてた……運命のこと？」

梨子が聞けば、彼女は無言で頷いた。それは、初めて梨子が白い生物と出会った日のこと。善子は話していたという。「運命デステイニーが2人を引き合わせた」のだと。

「どうして、運命なの？」

すると梨子は彼女の言う運命とは何なのか、その真意を訪ねた。以前は状況が急だったために聞けなかったからなのか、改めて知りたくなつたのだろう。

「運命デステイニーは運命デステイニーよ」

「そうかもしれないけど……」

言葉通りの意味だと善子は言うが、梨子が知りたいのはもつと深いところにあるらしい。

「墮天使使っていると思う……？」

語りだした最初の言葉がそれだった。しかし梨子は突然のことで答えることはでき

ず、善子も気にしないようでも話を続けた。

そんな善子の話を、一真も黙って耳を傾ける。

「私ね、小さいころからすっごくい運が悪かったの。外に出ればいつも雨に降られてたし、転ぶし、何しても自分だけうまくいかないし……それで、思ったの。私が特別だから、見えない力が働いているんだって」

それが墮天使のはじまり。子供心に、「なんで私だけ」と感じていれば、何かのせいなんだってしたくなる。見えない存在による妨害だと、善子は自分を納得させていたのだから。

「勿論、墮天使なんているはずないって薄々感じている。クラスでも言わないようにしているし。……でも、本当にそういうのが全くないのかなって」

現実にはないとわかっていても、怪獣や宇宙人、そしてウルトラマンという想像を超えた存在を見てしまえば考えてしまう。墮天使ではない、別の力……。

「そんな時、出会ったの。なにか見えない力で引き寄せられるようだった。これは絶対、偶然じゃなくて何かに導かれているんだって……そう思ったの。不思議な力が働いたんだって」

すると白い鬘を揺らし、善子の膝上へと乗るネメアー。その気高い容姿からは想像がつかないくらいいの懐きようだ。それを優しく撫でてあげる善子は、穏やかに笑う。

偶然のようでいて、何かに導かれ、紡がれたような出会い。そこには、見えない力が働いているのではないか……と善子は感じていたのだ。ネメアーはその力の象徴でもあるのだ。

「ようやく見つけた……」

3人で話していれば、スーツを着た謎の男が近づいてきた。

「なんだ……あんた？」

「いえいえ、私は怪しいものではないですよ」

怪しくないと言うのは、逆に怪しいですと自己申告しているようなものだ。そして、今まで笑ったことのないような不自然な笑顔を見た一眞は構える。

「その生物……ホロボロスは危険な生物なのです。今すぐに渡してくれば悪いようにはしません」

男が言うホロボロスと言うのが、あの生物の本当の名前なのだろうか。

「ノクターンは渡さないわ!」

「この子はノクターンでもホロボロスでもなくて、ネメアーよ!」

その男の発言に警戒し、梨子はノクターンを抱え込む。梨子たちにとっては、本来の名がホロボロスだとしても信じる気にはなれないだろう。そんな暫くの睨み合いの後、男は頭を掻きむしりこちらに突っ込んでくる。それはやはり、人の目で追えるスピードではなかった。

「いいから……ホロボロスを渡せってんだよッ!」

「くそっ……2人は逃げろ!」

男を受け止め、梨子と善子に促す一真。2人はすぐさま逆方向に走っていくが、受け止めた男の力で一真は吹き飛ばされる。

「逃がすかああああ!!」

「こっちの台詞だッ!」

瞬時に起き上がった一真の飛び蹴りが男を転倒させる。さらに、追撃で繰り出した拳が男を地面に転がした。だが男も抵抗してくる。地球の重力を無視した動きで、一真を翻弄。最後には腹部へと突き、2人を追っていく。

「く、待て……」

うまく息ができない一真はそこで蹲ってしまった。

「……まで……くれば……」

「ええ……」

逃げてきた善子と梨子は後ろを振り返る。だが、道の先には人影ひとつなかった。

「一真……大丈夫かしら」

「……」

しかし、自分たちを逃がしてくれた彼が来ないことに少し不安になる。彼がウルトラマンだとしても、幾度となく自分たちを守ってくれたからとしても、不安が消えさることは無かった。

すると、不安げに遠くを見据える彼女たちを心配してか、か細い声を腕の中で上げるホロボロス。それに気づくと、梨子たちは腕の中に居る白い鬘を優しく撫でた。

「……にいたか……」

落ち着いたのも束の間、先の男の声が2人の鼓膜を震わす。瞬間移動してきたかのよう現れた男に、梨子と善子は固まってしまう。もう1つの理由としては、彼の顔がブ

ルブルと振動を始めていたから。否、擬態が切れかけているのだ。
「けつ、もうこの擬態もおさらばだ」

男の擬態が解ければ、顔の両側面についた大きな複眼、そして額から延びる触覚が特徴の宇宙人となった。

「さあ、ホロボロスを渡してもらおうか」

「やめて!!」

「この、梨子から離れなさいよ!」

「黙れ地球人が!!」

しかし2人の抵抗虚しく、地球人男性に擬態していた“クカラツチ星人”にホロボロスを奪いとられてしまった。梨子と善子は、ホロボロスに付けた名を叫ぶことしかできない。すると――

「そいつを返しやがれ!」

ギリギリのところで一真が追い付いた。

「お前……何者だ!?!」

クカラツチ星人は一真のタフさに驚愕しているようだ。つまり彼の放った攻撃が地球人に当たれば、命はなかったという事だ。

「悪い、やられちゃった」

後ろにいる2人に謝罪しながら、眼前の昆虫宇宙人を睨む。しかし向こうは銃を構えているため、下手には動けない。

「あらあら、羽虫がうるさいと思っただらあなたが運んできたのね」

最悪なことに、何処からともなくドレスを翻して近づいてくるものが1人。その立ち姿と声を聞き、善子は冷や汗を流す。なぜなら善子は、一度彼女“ヴィルゴ”と出会っているから……いや、襲われかけたと言っていていいだろう。

「あ、あなたは……」

「……？ あら、あの時の地球人ね。運良く生きてみたいね」

見るもの誰もが美しいと言うであろう笑顔なのに、どうしてもそうは思えない。彼女は危険だと、一眞の本能が告げる。

「善子、知ってるのか？」

「ええ、アイツが私たちを襲い……珠冬を怪獣にしたのよ」

その言葉に一眞は驚きつつ、ヴィルゴを睨んだ。しかし彼女にも聞こえていたようで、ご機嫌に手を振ってきた。やはり、彼女の笑顔には謎の不快感と恐怖を覚える。

「それより、随分とホロボロスと仲良くしてたみたいね。クカラッチがバカなことしな

ければ、悲しい別れにもならなかっただろうに」

そう言つてヴィルゴは懐から鉱石を取り出した。それは、先日水族館を襲撃してきた宇宙人が持つていたものと全く同じものだ。

「問題です。このヤセルトニウムに溜め込まれたエネルギーを、ホロボロスに照射するとどうなるでしょうか？」

「……やめろ！」

一眞はヴィルゴの狙いに気が付くとすぐさま駆け出す。だが時すでに遅く、ヤセルトニウムのエネルギーはホロボロスの体に注がれていく。閃光と雷鳴で見えないし聞えない。さらに、エネルギーの照射で発生した衝撃で吹き飛ばされてしまう3人。

「ア————アアアアアア!？」

雷鳴の音に加え、クカラツチ星人の悲鳴が聞こえてきた。青白くなる目線の先で辛うじて見えたのは、彼の左腕に付けたプレスレッドが光つているところであった。

「ヴィルゴ様、やめてください!!? こ、これは通信機ではないのですか!!?」

「ヤセルトニウムをそこに仕掛けておいたのよ。でも、通信機の役割も果たしたでしょう?」

何故、と彼が問いかけようとする前にヴィルゴは口を開く。

「当然でしょ。地球人にホロボロスが奪われかけたのよ？ これはその罰。……まあ、アンタみたいな宇宙人は使い捨てだからどの道こうなつてたけどね」

そんな……と絶望する暇もなく、生体エネルギーを吸われたクカラツチ星人はその場に倒れてしまう。そしてエネルギーを放射され続けたホロボロスの体はみるみる巨大化していく。

青い閃光が消え、その場に鎮座していたのは、先ほどまで腕の中に抱かれていたホロボロス。しかしその眼は赤く染まり、四足歩行だったのが二足歩行になっていた。

「そ、そんな……ノクターン？」

「……………ネメアー？」

梨子と善子の声を無視するように、ホロボロスは天に吠えた。その姿は獠猛な狼のように、気高い獅子の様にも見える。

「さあ行け、ホロボロス!! その力で全てを滅ぼしなさいっ!!」

梨子と善子と共に戯れたノクターン／ネメアーはここにはいない。ヴィルゴの命に従い、すべてを滅するもの、死を運ぶものとしてこの地球の大地に降り立つのだった。

第51話 蠶靡く時

街中を疾走し、蹂躪していくホロボロス。ヤツが走った後に残るのは、赤い目から零れた残光と崩れていくビル群のみ。さらに、上半身を駆け巡る青白い雷を一気に解放。それは神の怒りの如く、強力な落雷が広範囲を瞬時に崩壊させた。

先ほどまで可愛がっていた存在が、今は無慈悲に爪を振るい、雷を呼び起こす姿に梨子と善子は立ち尽くすしかなかった。

「そんな……」

「……」

彼女たちは、数刻前の自分を後悔しているのかもしれない。彼女らにホロボロスを奪われなければ、もつと遠くに逃げていけば……。後悔しても仕方ないのは本人たちも承知のはずだ。でもせずにはいられなかったのだ。自分達が引き取り、愛情を注いでいたのは確かなのだから。

「私、何もできないのかな……」

「じゃあ、どうするっていうのよ……!?!」

そのやり場のない感情から変換された怒りを、たまらず梨子へとぶつけてしまう。しかし、自分の行動が筋違いだという事に気付き「…………ごめん」と即座に謝る善子。

しばらくすると、2人に遅れて走ってきた一真が寄り添う。

「梨子、善子、せめてもつと安全な場所に——」

「一真くん、どうすればいいのかな…………今のノクターンは私も、善子ちゃんの声も聞いてくれない…………」

彼の言葉を聞く暇などなく、梨子は一真の腕を掴んで尋ねてしまった。

もう手遅れなのだろうか、俯きながら零してしまう梨子の目には、既に多くの涙が溜まっていた。すると横から、「私のせいよ」と善子が小さな声を漏らす。

「私のせいよ。あの子を拾いさえしなれば…………こんなことには…………」

再度言葉にした善子。今の彼女は、あの出会いを否定してしまいそうなほど追い詰められている。だがそれを認めてしまえば、“出会った運命”ですら善子の敵となってしまう。それだけは絶対にさせたくないと、聞いた瞬間に一真は思った。

「まだ、まだ終わってない！ アイツには、まだ声が届いてないだけだ。善子、お前がネ

メアーと出会ったのが運命なら、アイツは絶対声を聞いてくれる」

一眞はまっすぐに彼女の目を見つめて言葉紡いだ。

「梨子も、見えない力があるって言ってたろ？ だったら、ノクターンとお前の間には見えてなくてもしつかりと紡がれたものがある。それ信じろ」

梨子にも声を投げかけると、少しだけだが2人の表情がマシにはなった。それを確認した一眞は少しだけ頬を緩める。

「俺が時間を稼ぐから、2人はアイツに声を聞かせてやってくれ」

それだけを託すと、一眞は獅子が未だ暴れる街中へと走っていった。

「人間がホロボロスになにしたって無駄よ」

彼が走っていった場所には、既にヴィルゴが立っていた。しかし彼女が邪魔する素振りを見せないことから、その試みが無駄になるとでも思っているのだろう。

「さあ、どうかな。あんたが思ってるほど、人は弱くなんかねえぞ……」

一眞はそれだけを言い残すと、オーブリングを持った左腕を天高く突き上げた。

く

破壊を尽くす白い獅子の前に、2本角を光らせたオーブが立ち塞がる。

「ぶん殴つてでもお前を正気に戻す……覚悟しろッ！」

右の掌を突き出す構えをとったバーンマイト。彼は眼前で吼えるホロボロスを捉え、ジェット噴射の如く勢いで距離を詰めていく。そして放たれた左ストレートがホロボロスの爪に激突。ホロボロスも負けじと怪力で押し返し、巨大な爪を振るってオーブを攻め立てていく。

(くっ……重い……)

幾たびも体に迫ってくる鋭い刃を腕で防ぎながらオーブは踏ん張り続ける。ホロボロス、ヤツの攻撃は生半可な力で受けて良いものではない。白い獅子は単純な力だけでこちらを押ししてくる。それでいて厄介なことに、その獣のような敏捷性で息つく暇さえ与えない。スピードとパワー、どちらも高水準まで高めた獣。まさに荒神と呼ぶにふさわし存在だった。

「ハアアツ！ なに、うおっ?!」

脚部に炎を宿して撃ち出した蹴りを難なく受け止めたかと思えば、今度はこちらの体を投げ飛ばしたのだ。

「流石だ……けどっ!」

頭が下を向いた状態で投げられてしまったが、とっさに両腕をついてバク転の要領で起き上がる。そしてすぐさま火球を生成して解き放った。だがカウンターで放ったストビュームバーストすらも、ヤツは横に難いだけで打ち消してしまった。

「ノクターン！ やめて!!」

「ネメアー、いい加減目を覚ましてっ!」

2人はホロボロスに呼びかけているが、まったく反応してくれなかった。まるで、彼女たちの声など聞いたことなどないように。

「フン、人間が呼びかけても無駄よ無駄」

傍から見ていたヴィルゴは、暴れまわる怪獣を呼び止めようとする滑稽な姿を笑っていた。所詮、人が怪獣と紡いだ絆など簡単に壊れると踏んでいるからだ。

「ぐあああつ!？」

単純な力に押されたオーブは、赤い体をビルにめり込ませてしまう。

そのまま獲物を屠るために突進してきたホロボロスはどうにか回避………したが追撃の腕は躲せず、またしても吹き飛ばされてしまう。

「畜生……ストビュームバーストも弾きやがる……」

どうにか起き上がったオーブの周りでは、ホロボロスがビルを柱のようにして立体的に移動し、彼を翻弄していた。その速さはオーブですらも対応しきれないものであり、ヤツの姿を捉えようとすることに精一杯だった。

しかしそのせいで背後に飛び掛かってきたホロボロスに対処できず、斬撃をもろに食らってしまう。背部に焼けるような痛みが走るが、歯を食いしばり耐える。この無防備ともいえる姿で、ヤツを誘き出すために……。

「チャンスだつ……!？」

ホロボロスもチャンスと思つて腕を振り上げてきたところを、オーブの炎を纏った拳を胴体へ打ち込んだ。直後に爆ぜ、ホロボロスを後退させる。

(つたく、パワーでゴリ押ししてくるかと思えば、スピードで翻弄……おまけにカウンターも効果なしか)

ストビウムカウンターを打ち込むも尚健在の獅子。その強敵ぶりに、一眞は自分の頬が引き撃つていくのを感じた。

するとホロボロスは両腕の爪を発行させ、紫色の斬撃波“メガンテクラツシャー”をオーブに放つ。着弾地点に巨大な煙が立ち上るが、煙の中から跳躍したオーブは上空から“スワロマイトバレット”を放ち牽制。一瞬の隙に肉薄するとともに、蹴り技で吹き飛ばす。

「ストリウムマイトコイツの素早さと力ならどうだ！」

炎の軌跡を描きながら、拳や蹴りを叩きこんでいく。さらにホロボロスの腕をガツチリとホールド。バランスを崩して背負い投げた。

「頼む！ いい加減思い出せ!!」

ここまですれば動きも止まるだろうと思ったのが間違いだった。しかし反撃を食らい、大きく後退してしまふ。さらに再度撃ちだされたメガンテクラツシャーを胴に受け、ビルと共に倒れてしまふ。

「チツ、まだ止まらないか……く、うお……おおおおお」

危険を察知しすぐさま起き上がり、迫ってくるギガンテサンダーを咄嗟に作り出したバリアで防ぐ。

(このままじゃ、押し切られる……)

一眞の思った通り、雷撃に耐えられずバリアはガラスのように砕け散った。衝撃で地面に倒れてしまったオーブの首元を、ホロボロスは噛み千切ろうと馬乗りになる。しかし、ギリギリのところまで腕を噛ませて防ぐことに成功した。

「があああああああ!? あああああああ!?」

とはいっても、その顎力で腕を噛まれているのだ。腕の感覚がなくなるほどの激痛に、堪らず声をあげてしまう。

——
すると

「ノクターン!!」

「ネメアー、いい加減にヨハネに気付きなさいよおおおお!!」

2人の精一杯の叫びが空気を震わせた。そして、周りの環境音すらも聞こえなくなつたかのような沈黙。その中で梨子と善子は叫び続ける。

「ねえこれ、ノクターンが好きだったものよ。わかる?」

梨子がバッグから取り出したのは、よく食べていた餌。

「これはネメアーが遊んでいたオモチヤよ！」

続いて善子が見せたのは、ホロボロスがじゃれていたオモチヤに、先ほど投げたボール。

その掌に収まるくらいのものには、短期間ながらも彼女たちと紡いだ多くの思い出が刻まれていた。それはホロボロスも同じだと。当のホロボロスは無言で2人の姿を見つめ続けていた。

「お願い……気付いて……」

すぎるように思いで梨子はホロボロスを見つめ続け、善子は念を送るようにポーズをとっていた。

梨子は敵と味方を見分ける見えない力を。善子は自分と引き合った運命を。それぞれ力の力を信じ、気が付くと2人は名前を必死に叫んでいた。ホロボロスに付けた愛情深いその名を。

その声を聞いたホロボロスから、徐々に力が抜けていくのがわかった。そして毒気を抜かれたかのように大人しくなりオーブから退くと、梨子と善子の前に己の頭を置いた。それは小さかった時の甘えるしぐさのようだ。

先ほどまでの狂暴性はすっかり消えたようで、その姿は以前と変わらないものだった。

た。

「めでたしめでたし、つて……はあ？　なにそれつまんな。怪獣は怪獣らしく暴れれば
いいつてのに……もういいわ」

自分の軽んじていた人間が怪獣へと呼びかけ、それが成功するとは思っていなかった
ヴィルゴは悪態をつく。気分が大きく下がりに、おまけに腹立たしい。そう感じた彼女は
ダークリングを取り出す。

「もういいわ。ウルトラマンごとおさらばしてもらわ」

懐から取り出したカードを、赤く光るリングへと通した。

く

「ホロボロスも大人しくなったけど、こりやどうすればいいんだ……」

梨子や善子を認識できたとはいっても、これほど巨大となってしまうたホロボロスを

どうするべきか。そのことで頭を悩ますオーブ。もう今まで通りに生活できるとはいえない。

今後のことを相談するため、まずは退避だとホロボロスを移動させようとオーブが腕を翳したその時――

何十発もの銃弾の雨が、オーブ、そしてホロボロスに撃ち込まれた。その雨は地面や周りのビルをも撃ちぬき、凄まじい爆発が辺りを包み込む。

幸いにも、オーブが咄嗟にバリアを張ったことで梨子や善子は大事には至らないだろうが、展開している本人の方は別だ。ホロボロスとの戦闘に次いでダメージに、身体が悲鳴を上げているのだった。

「今度は……なんだ……!?!」

オーブの限界を感じ取り、ホロボロスは空へと跳躍。そして急降下から放つ爪の二連撃で、射撃者を切り裂こうと橙色のそれを煌かせた。しかしバリアで防がれてしまったのかホロボロスは後退し、オーブの隣に降り立つ。

しばしの静寂が辺りを支配。徐々に硝煙が消えていったことで、射撃者の正体が露わになった。

右腕が巨大なハサミ。左腕には先の掃射で使用していたであろう、ガトリングガン。銀色のあちらこちらに、赤の差し色が入った身体。二本の角のような頭と、顔に当たる黒い面。すると、黒い面の中に光る赤いライトが目と口に至る部分で発光を始めた。

「なに……ロボット……!?!」

善子の言葉の後に、妙な起動音が鳴り響いた。

「はあ……デスフェイサー、やつちやつて」

「またもや退屈そうな表情で、ヴィルゴは己の召喚した機械兵器……否、電腦魔神に命じた。」

「ぐ、硬え……」

駆け出した勢いを、ダイレクトに拳に乗せて放ったはずなのに、デスフェイサーはビクともしない。強固な装甲の冷たさが、拳を介し伝わってくる。迫りくる大型のハサミを腕で受ければ、その重みに膝をつきそうになる。さらに銃口が束ねられた左腕を腹部に打ち付けられれば、空気だけの叫びが口から洩れる。

「これ以上は止めて！ ヨハネが言ってるの！！ 私の言うことが聞けないの！！」

その痛ましい光景に、梨子と善子が叫ぶ。だが、ホロボロスはその命を無視した。それも、共にいてくれた人を守るため。凶暴化しても尚、呼びかけ続けてくれた彼女たちを守るためだった。

「まだ抵抗するのは驚きね。……ん、ならこれはどうかしら」

ホロボロスの食らいつきに驚くヴィルゴ。すると彼女はふと少女2人のことを思い出し、薄らと笑みを浮かべた。そしてデスフェイサーに念で命じる。“主砲で撃ちぬけ”と。

デスフェイサーへ青い雷を放って足を止めさせ、相手の頭上を軽々と跳躍。すれ違う一瞬で顔を切り裂いた。鬱陶しいからかガトリングを乱射するが、ホロボロスは回避。躲せなかった数発は紫の刃を飛ばして相殺。加えてどこからともなく放たれた光線が、銀色のボディから火花を散らせた。

「俺を忘れてんじゃねえぞ……鉄くずが」

光線を放った直後にだらりと腕を下げてしまうオーブを無視し、デスフェイサーは空へと飛翔する。そして胸元が開放すれば、砲台が顔を出した。銃口が赤く光りエネルギーチャージを始める。溜まっていくたびに高音になるそれは、破滅へのカウントダウン

ンのようだ。

「あの野郎……ふざけんな！」

一真が激昂し駆け出したのは、デスフェイスの銃口が梨子と善子に向いているからだった。

「梨子、善子、早く逃げろ！」

「今更逃げたところで無駄よ」

走り出したのが一歩遅った。オーブの目の前で、遂に極太の光子砲が発射された。その閃光で目元を覆ってしまふ。

身体の熱が奪われていき、どうしようもない絶望感が体を駆け巡っていく。そんな時、疾風のように梨子と善子の前に立った獅子は、紫色の斬撃波“メガンテクラッシュ”を発動させた。

「お前ツ……何やってるんだ!？」

「ノクターン!？」

「ネメアー!？」

ホロボロスは振り替えることはせず、ただ斬撃波を生成していた。それが何を意味するのか、ホロボロスの意思を理解してしまった3人は何とかやめるように声を上げる。

しかし、ホロボロスは黙って、今まで放ってきたものより何倍も巨大な刃を生成して放った。

刃と光線の両者が中心でぶつかり合う。爆風が梨子と善子のを吹き飛ばす。

その光景を目にしてしまい、地面に倒れた痛みなど気にせず梨子と善子は悲鳴を響かせてしまった。

くく

炎が引いていくと、そこには肌が焼け爛れてしまったホロボロスが横たわっていた。既に虫の息なのは、火を見るより明らか。だがそんな事実、誰も信じたくなかった。

「そんな……」

「いや……」

脳裏に浮かぶ言葉を否定したいのに、目の前に映る全てが証明している。梨子と善子は声を震わせ、痛む体など無視して駆け寄ってきた。

もう聞こえるかすらも怪しい鳴き声を上げ、2人に視線を移す。自分の最期を悟ったからこそ、もう一度だけと……頭を近づける。オーブも静かに頷けば、梨子と善子はホロボロスの頭に優しく触れる。

本来、デスフェイサーのネオマキシマ砲は発射すれば島ひとつ吹き飛ばすことができる威力だ。光線で相殺することなど、不可能に近い。しかし、ホロボロスは守りたい一心でそれを防いだ。彼女たちとの絆が、不可能を可能にしたのだ。

2人の頬に涙が流れる。撫でた……というにはあまりに小さい手だったが、満足そうに鳴いたホロボロス。そのまま青い粒子となり、空へと飛んでいくのだった。

「バカじゃないの。人間に情が移らなければ、こうやって死ぬ事もなかったのに」

誇り高き獅子が消滅する光景を見ていたヴィルゴは、馬鹿馬鹿しいと嘲笑っていた。

「くっ……クッ、ウオオオオオオオオオオオッ!!」

命を奪ったデスフェイサーへの怒り、そしてなによりも、助けられなかった自分への怒り。その怒りを糧にして、デスフェイサーへと突進していくオーブ。今のは限界以上の力が漲っていた。せめて梨子と善子を守る。それがホロボロスへの弔いだと信

じて。

瞬時にサンダーブレスターへと姿を変え、拳で押していく。さらにデスシウムフロストを即席で腕に纏った。それは獣のような鋭い爪へと変化し、強力な切断力を発揮する。しかし右腕のハサミが、片方の爪を切り壊してしまう。

「チツ、忌々しい腕だ！」

ガトリングの掃射を防ぎつつ、バックステップで後退。それと同時にゼットシウム光輪を飛ばし銃口を潰す。再度接近すれば、オーブは左手の光輪、右手の生成した爪で両腕を斬り飛ばした。追撃の後ろまわし蹴りを胴体に当てれば、デスフェイサーは吹き飛んでいく。

吹き飛ばされても、腕を斬られても、痛みを感じない機械は再び立ち上がる。それはデスフェイサーも同じだ。するとヤツは立ち上がり、胸元の装甲をまたもや開けて砲台を出した。再度ネオマキシマ砲を撃とうというのだ。

「ダメ、今度撃たれたらそれこそ一真くんが……」

梨子のそれは正しいが、避けなくても広範囲で被害が出ることになるのは間違いなしだ。

チャージが開始され、発射が近付く。周りのエネルギーが発射口へと吸い込まれていく。体を嫌な汗が流れる。

「悪い……助けられなくて」

「一真くんのせいじゃないよ……」

「そうよ。悪いのはあのロボットでしょ……」

誰一人勝利を喜ぶ者はいなかった。それもそうだ。今自分たちが生きているのも、大事な存在が守ってくれたから。それも今は、夕日のオレンジが彩る空へと駆けて行ってしまった。

たった数日の付き合いだったのに、心に空いた喪失感が虚しく響いている。

「……今日はもう帰るわね」

「善子ちゃん——」

「……大丈夫よ。また明日ね」

一真が視線を外したのは、善子その背中が小刻みに震えているのがわかったからだ。

すると、梨子は善子へ語り掛けた。

「私ね……やっぱり、見えない力はあると思う。善子ちゃんだけじゃなくて、どんな人にも……。だから信じている限りはその力は働いていると思う」

この出会いの終わりが、決してよかったとは言えない。言うつもりもない。しかしそれでも、善子との出会いには必ず意味があったのだと、梨子は伝えたかった。その見えない力を、善子が恨んでしまわないように。

「……さ、さすが私のリトルデーモンね。ヨハネの名において、上級リトルデーモンに認定してあげる」

「あるがとう、ヨハネちゃん」

「善子よ。……ありがとう」

振り返った善子の目から飛んだ涙が、夕日の光を反射していた。

その夜、十千万に寄った梨子はしいたけの頭に触れようと、手を伸ばすがあと少しのところで躊躇ってしまう。

「梨子ちゃん、どうしたの？」

「千歌ちゃん。……試してみようかなって。これも出会いだから」

それは勿論、しいたけに触れることだ。突然の言い出しに千歌は「え？」と声を漏らす。しかし梨子はその反応を予測していたかのように、さらに続けた。

「私ね、もしかして出会ってこの世界では偶然ではないのかもって、思ったの」
「偶然は……ない？」

「いろんな人が色んな想いを抱いて、その想いが見えない力になって……運命のように出会う。すべてに意味がある」

梨子が千歌に出会ったことも、そしてホロボロスに出会った事にも意味があり、それは偶然ではないと。見えない力によって、まるで糸で引き寄せられるかのような運命によるものだと。

「見えないだけで、きつと……」

その力は見えないだけで、誰にも存在しうるもの。

そう言って餌を乗つけた右手を、梨子はしいたけに差し出しす。すると、しいたけが食べてくれたのだ。今まで怖がって触れなかった梨子が、今こうしてしいたけと触れあうことができるようになったのも、あの獅子との出会いのおかげなのかもしれない。

「そう思えば素敵じゃない？」

夜風が頬を掠める。その風を感じながら、梨子はそう問いかけた。

その夜空では、今はいないあの獅子の声がどこかで聞こえた気がした。

第52話 越えるべき壁

スクールアイドル部部屋に集まっている2年生と1年生。彼女達が覗いているのは例もよってパソコンの画面。

「きました……」

画面の表示と共に聞こえてくるルビィの声に、誰もが画面に注目した。それもその筈。画面に表示されているのは今回の地区大会、その開催場所だ。そこに表示されていたのは、前回と同じ場所。同じステージ。皆が悔しい思いを抱えている場所で、再度臨むことができるというのは粋な計らいなのか、運命のイタズラか……。

千歌たちは真剣な眼差しで画面を見つめる。別に前回が重大ではなかったという訳ではないが、今回ここで落選すれば、廃校を免れることは不可能と言える。だからこそ、今回は絶対に負けられないのだと。

別日、浦の星の一室で鞠莉やダイヤ、果南の3人が話し合っていた。しかしその場所

は、ステージ発表の時とはまた異なった、張り詰めた空気で支配されていた。

「57人？」

「そう。今日現在、入学希望者は57人」

「そんな。この1ヶ月で10人も増えていないのですか？」

鞠莉の報告に、ダイヤは思わず立ち上がってしまう。廃校を決定するまでの期間で希望者100人を集めなくてはいけない。しかし1ヶ月経ってそれだけというのは、なかなかに厳しいものだった。それも、説明会やAqoursの活躍もあつたというのに、だ。

「鞠莉のお父さんに言われた期限まで、あと1ヶ月もないよね」

「ラブライブ地区予選大会が行われる夜。そこまでに100人を集めなければ、後はnothingです」

「つまり、次の地区予選が……」

「Yes……Last chance」

「そこにかけるしかないという訳ですわね……」

この状況を打開し、廃校を阻止できるのか。それとも、成し遂げることはできないのか……。最後の判定は、ラブライブ地区予選へと運ばれることとなった。

〃

「One, two, three, four, one, two, three, four...
Changeして〜! Up! Up!」

沼津の室内練習所で反響する鞠莉の手拍子と声は、前回の練習の時よりもより速いカウントを刻んでいた。鞠莉の声に合わせ、全員は最後の決めポーズに入った。

「Oh, good! この腕の角度を合わせたいね〜花丸はもうちょい上げて」

鞠莉のアドバイスに、花丸は曲げた右腕を上げる。すると、筋肉が限界に近づいているのか、身体が小刻みに震えていた。

「この角度を忘れないで!」

鞠莉のアドバイスの後、全体の合わせは終わりを迎えた。インターバル後には各個人での練習、と言う形となる。練習のスイッチを切った彼女たちの緊張が切れた証として、肺から息を吐きだす声が聞こえる。

「お疲れ! ほら〜!」

「花丸、お疲れ!」

一真と珠冬は、彼女たちにドリンクを渡していく。2人の目からでも彼女たちが練習に精を出し、着実にスキルアップしているのは明らかだった。それもこれも、あの結果がでたおかげだろう。

「全国大会進出が、有力視されてるグループだって」

声をかけた曜の周りに、花丸や千歌が集まってくる。善子も別のところで反応したように、視線だけを向けていた。

「そんなのがあるの？」

「ラブライブは人気があるから、そういうの予想する人もいるみたい」

「どんなのがあるの？」

「あ、それは俺も気になる」

梨子や一真も興味を引かれたのか、彼女の下へと集まった。それらに応え、曜が画面をフリックして確認していく。見たところ、前年度の大会に出たグループは勿論入っているらしい。さらに下へやっていくと、自分たちとも関わり合いの持つグループの名が書かれたいた。

「前は地区大会トップで通過し、全国大会では8位入賞したSaint Snow。姉、聖良は今年3年生。ラストチャンスに優勝を目指す」

「2人とも気合入ってるだろうな」

「確かに、むこうもこのチャンスには万全で仕上げてきたいだろうしな」

千歌と一真は、Saint Snowの画像を見ながら言った。彼女たちが狙うのは入賞ではなく優勝。しかも今回がラストチャンスとなれば、気合が入らないわけがない。今この瞬間も、ストイックに練習を続けているに違いない。

「あとは……あ、Aqours!」

「ホント!?」

「ホントだよ。ほら!」

「え、マジのガチじゃん!」

「マルたちすら!」

いざ自分たちが入っているとすると、驚きを隠せなくなり本当かどうかを疑ってしまう。しかし、曜のスマホの画面には、はつきりと“Aqours”の文字が書かれていた。それは、離れて水を飲んでた鞠莉やダイヤにも聞こえたようで、「ねえ、なんて書いてあるの?」と鞠莉が尋ねてくる。

「前は地区大会で涙をのんだAqoursだが、今大会予備予選の内容は全国大会出場者にも引けを取らない見事なパフォーマンスだった。今後の成長に期待したい」

「目の付け所があるよ、この記事を書いた人は」

「なんでカズくんが誇らしげにしているの?」

腕を組んでそう呟く一真に、曜は苦笑いで答えた。とは言っても、このように評価され、期待されているというのは素直にうれしいものである。

「フツ……このヨハネの墮天の力を持つてすればこの程度、造作もないことなのです！」
「造作もないことです！」

すると善子が立ち上がって墮天のポーズをとったのだが、今回は彼女と加えてもう1人でやっている。つまりは2人でだ。その珍しい光景に、誰もがポカンとした顔で見上げていた。

「……ハッ!？」

「さつすが、我と契約を結んだだけのことはあるぞ！ リトルデーモン、リリーよ！」
「無礼な！ 我はそのような契約、結んでおらぬわ！」

ノリノリで梨子が善子へと返しているかのように見えるこのやり取り。前回の件が、2人の仲を深めたのだろう。そんな2人の賑やかなやり取りを見ると、悲しみは徐々に癒えているように思える。

「どうしたの？」

「リリー？」

「これは墮天ずら」

「うゆ」

しかし事情を知らない人たちから見れば、梨子の変化に戸惑うのだろう。その中で唯一知っている一真だけは、顔を背ける。聞かれても「知らない」の一言で逃げる気なのだろう。

「違う〜! これは違くて〜!」

「ウエルカムトゥヘルゾーン!」

「待て〜い!」

でも明らかにノリノリだろ、と突っ込まざるを得ない梨子と善子のやりとり。それを見た千歌も「でも楽しそうに良かった」と笑った。純粹にそう思っているのかもしれないが、梨子は止めほしそうに千歌の名前を呼ぶ。

「善子も良かったね、契約を結んでくれる人がいて」

「何を言っているの? あなたも既に契約を結んでいるではないか。リトルデーモン、スピカよ!」

「ちよつと! その名前出すのはナシ!! ってか契約なんて結んだ覚えないんだけど!」

「スピカ?」

「ああああ!?! ホントにやめて!!」

楽しそうに会話が続ける中で、ルビイは再度スマホに目を通す。そこには、地区予選

の投票システムについて書かれてあったのだ。

「今回の地区大会は、会場とネットの投票で決勝進出者を決めるって」

「よかったじゃん、結果出るより何日も待つより」

「ですが、そんな簡単な話ではありませんわ」

ダイヤは千歌にそう指摘してくる。続けて鞠莉が、地区大会の投票システムによる、こちらの問題を提示した。

「会場には、出場グループの学校の生徒が応援に来ているのよ?」

鞠莉の言葉に「そういう事ですか」と一真は呟く。続けてルビィも気付いたようだった。

「ネット投票があるとはいえ、生徒数が多い方が有利……」

この投票システムは、どうやら簡単なものではないらしい。いや寧ろ……生徒数の少ないこちらだからこそ、一番不利になってしまうのだ。

くく

「……そうなんです」

「出場グループの中では、こちらの生徒数が一番少ない……」

その問題が明るみになった以上、どうすべきなのか。同じスクールアイドルの聖良に、千歌と一真は相談しているのだった。千歌の携帯のスピーカーを通して、聖良の意見が聞こえてくる。

『確かに不利ですね。圧倒的なパフォーマンスを見せて、生徒数のハンデを逆転するしかない』

「圧倒的……ですか」

結局、そこに行きつくだろう。だがそれがどれだけ難しいものなのか、ここにいる誰もが理解している。

『ですが、それは上手さだけではないと思います。むしろ今の出演者の多くは、先輩たちに引けを取らない歌とダンスのレベルにある。ですが、肩を並べたとは誰も思っていない』

スクールアイドルの人口が増えたことで、技術が格段に発展していった。それは先人たちと並ぶくらい。

「でも、肩を並べたとは誰も思っていない……」

『はい。ラブライブが始まって、その人気を形作った先駆者たちの輝き。手の届かない

光

しかしその歌とダンスを磨き上げて見せることだけが、その“圧倒的なパフォーマンス”ではないと聖良は語る。

圧倒的なパフォーマンス……それは、人気を確固たる不動のものにした先駆者たちの輝きが光るパフォーマンスなのだ。しかしそれは届かない。掴むことはできない。もう千歌たちは知っている事だった。すれば自ずと道は見えてくる。

「え？Aquoursらしさ？」

「うん。私達だけの道を歩くってどういう事なんだろう。私達の輝きって何だろう」

翌日、屋上にて千歌はそんなことを問いかけてきた。昨晩の聖良との通話によって導き出された答えに、必要となるものだった。

練習前のストレッチをしていた彼女たちは動きを止めて、千歌の言葉に耳を傾けた。

「それを見つけることが大切なんだってラブライブに出てわかったのに……それが何な

のか、まだ言葉にできない。まだ形になってない。だから形にしたい。形に……」

未だに言葉にできないもの。表現できていないもの。追い求めるAqoursの輝き……それをどう現すべきなのか……。しかしそんな曖昧なものを言い表すこともできず、誰もが口を噤んでしまう。

「このタイミングでこんな話が千歌さんから出るなんて、運命ですわ!」

その空気を破ったのは、ダイヤのひと声だった。

「あれ、話しますわね」

「でもあれは……!」

加えて隣にいる果南に断るが、当の本人は狼狽えている。彼女は乗り気ではないように感じる。

「なに、それ何の話?」

反面、千歌は興味を持ったように振り返る。ここまでできてしまえば、隠すのは逆効果になるだけだろう。

「2年前、わたくし達がラブライブ決勝に進むために作ったフォーメーションがありませんわ」

「2年前って言えば、ダイヤさんたち3人のAqoursってことですよね?」

一眞の問いにダイヤは首を縦に振った。それとは別に、後ろでは何やら言葉遊びめい

たことをしているが千歌は気にせず、果南に詰め寄る。

「そんなのがあったんだ……すごい！ 教えて!!」

だが果南の表情は険しい。先の反応もあり、これにはなにか訳がありそうだ。

「でも、それをやろうとして鞠莉は足を痛めた。それに、皆の負担が大きい今、そこまですてやる意味があるの?」

それが足を痛め、東京で歌わなかったことに繋がる。どうやら果南は、以前のようになる事を恐れているのかもしれない。

「なんで? 果南ちゃん、今そこまでしなくていつするの? 最初に約束したよね!

精一杯足掻こうよ! ラブライブはすぐそこなんだよ!」 今こそ足掻いて、やれる事は全部やりたいんだよ!!」

果南に力説する千歌。確かに、やれることは全部やろうと、精一杯足掻こうと決めた。だからこそ千歌は果南に頼んでいる。

「でも、これはセンターを務める人の負担が大きい……あの時は私だったけど、千歌にそれが出来るの?」

「大丈夫。やるよ、私!」

果南問われても、彼女は折れない。負担が多いとしても千歌は戸惑わない。今彼女にあるのは「やる」……そのみだった。

「決まりですわね。ノートを渡しましよ、果南さん」

「今のAqoursをBreak throughするためには、必ず超えなくちゃいけないWallerがありマース」

「今がその時かもしれませんわね」

現在のAqoursという壁を越え、求める輝きを見つけるためには進化させなければならぬ。ダイヤと鞠莉が語るには、今がその時だと。

「言っとくけど、危ないと判断したら私はラブライブを棄権してでも千歌を止めるからね」

渋々了承し、果南はノートを千歌へと渡す。しかし果南も意志が強く、もしまた傷つくようなことがあればと、千歌の目を見てそう言い残した。

「ノートを見せてもらったけど、確かにあれは負担がデカいな。なんてものを隠し持ってたんだ……」

その夜、自室で一真は呟いた。果南の言っていた通り、今回のフォーメンションは今

までやってきた中で一番と言えるほどの難度と負担がかかるものだと言える。一歩間違えれば大怪我だつてしかねない。果南も渋るわけだ。

「おわっ!? なんだよ今の……爆発でもしたのか……?」

すると隣の方から衝撃音、さらに数秒後に美渡の怒鳴り声と千歌の声が聞こえてきた。

「まさか部屋の中でやったのか……とりあえず、見てきますかね」

一真は自室の襖をあけ、声のする下へと降りていった。

くく

「よっ………つとたたたああ!」

室内はまずいからと、千歌は十千万前の浜辺で練習することにした。しかしその難度は高く、転んでは起き上がりを繰り返すだけだった。

「そっだな……まあ、最初からビビらずに飛んでは来れてる………てかまず回る前には一度跳ねろ、それで勢いをつけるんだ」

「わかった！」

一真もアドバイスをしながら、彼女の練習を支えていた。

「心配？」

「やっぱりこうなっちゃうのかなって」

千歌が練習に励む砂浜を、遠くから見守っていたのは果南と鞠莉だった。

「でも、一真だって手伝っているじゃない？」

「いつでもいる訳じゃやない。怪獣が現れれば、カズはそっちに行かなくちゃいけない。それで怪我を負う事だって……」

一真はいつでもいる訳ではない。それに怪獣と戦う事のリスクもあるのだと。

「あれ、やりたかったね。私達で……」

ふと、以前のことを懐かしむように鞠莉が呟いた。

「それなら何で千歌達にやらせるの？　まるで押し付けるみたい……」

「千歌っちなら出来るって信じてるから。今のAqoursなら必ず成功する。果南だって信じてるんでしょ？」

鞠莉は信じているのだ。今の千歌、今のAqoursなら必ず成功させられると。しかし、鞠莉に問われた果南は何も言わず、練習を繰り返す2人を見つめることしかしなかった。

——次回予告——

「実に長かったよ……」

「……その姿……お前……」

一真とAqoursの紡いできたものを嘲笑うかのようなその言葉が発せられた数秒後、閃光の後に地面が震えた。

「ここに宣言してやる。今からは僕こそが……ウルトラマンだ」

「ああ、いい。ようやく……ようやく君と対等に戦える。君に敗北を突き付けられる」「なんだと……まだ俺が負けるとか、決まってねえだろ……」

次回『漆黒の聖剣』

第53話 漆黒の聖剣

翌日、身体の所々に絆創膏を貼った千歌とともに登校する一真や曜、梨子の4人。

「千歌ちゃん、大丈夫？」

「大丈夫だって、カズくんの手伝いもあって上達してるから！」

絆創膏の張った千歌はニカツと笑って見せた。とは言っても、心配なことに変わりはないのだが……。

果南のの言う通り、センターを務める千歌に求められているものの難易度はこれまで以上だった。千歌は上達していると言ったが実際、成功にはまだ程遠いというのが現状だ。

「でも、あまり無理はしちゃダメよ？」

「もう！ 梨子ちゃんまで。……でも、無理はしないようにがんばるから」

真剣な目つきで言われてしまえば、こちらも黙って見守るしかない。そう感じた梨子は「わかったわ」とだけ返す。

「張り切るのはいいいけど、怪我だけはやめてくれよな」

「わかつてるって」

自分も手伝っているとはいえ、そこだけは気を付けて欲しいと千歌に頼み込む。彼女は突っ走ると止まらなくなるのというのは、曜や果南たちと付き合ひの長さが違うとしてもわかる。実際、今年はそれをよく目にはしている。

「あと、授業中は寝るなよ？ 学生の自分は勉強だつて、ダイヤさんも言つてたしな」

「え!? あ、うん……ダイジョブ」

千歌の微妙な反応に、一眞をはじめとした2人はジト目で彼女の方を向いていた。彼女の反応を見てしまうと、成績云々で説教をするダイヤの声が聞こえてきそうだ。

3人の声を聞きながらも、胸の中で妙に疼く不安。それを消し去ろうとするように一眞はふと、浦の星の校舎を眺める。

「……っ!?!」

そこで、一眞の脚が止まる。その異変に千歌たちも不思議がり、彼の名前を呼んで振り向けば息を吞んでしまう。そこには、校舎をジツと睨みつける一眞の姿があつたのだから。

「どうしたの?」

「何かあつた?」

「……大丈夫？ 顔凄く怖いけど」

「……悪い、先教室行つてくれ」

深くは語らず、一眞はそれだけを言い残し学校へと走つていった。後ろで聞こえる声を無視して。

くく

屋上まで一気に駆け上がった一眞は、そのまま通路と屋上を隔てるドアを壊すような勢いで開けた。

「お前、どういうつもりだ」

「おはよう。……いいね、ここの景色は。おまけに太陽の光も気持ちいいし、練習場所にはもってこいだ」

「聞いてんのはこっちだぞ」

屋上で腕を載せて景色を眺めていたのは、一眞のよく知る人物。リゲル、またの名をアオボシだった。「ごめんごめん、あまりにいい場所だったから」と、悪びれる様子もな

く言い放つ彼に、一眞は一步踏み出した。

「もう一度聞く、どういうつもりだ……!?!」

「何が? こんな朝早くから怪獣騒ぎはやめろつて? まあ確かに、こんな気持ちいい

朝に怪獣の煩い咆哮は聞きたくないよね」

一眞が聞きたいのは、〃何故浦の星の屋上にいるのか〃だ。しかし彼は答える様子になかった。さらにフツと笑い、「冗談はこれくらいにして、本題に入ろう」と言ってくる。完全に彼のペースと言っていいだろう。

「シリウス……僕と勝負しよう」

「なに?」

先の飄々とした雰囲気から一転、彼はそう持ち掛けてきた。

「……はっ、あんだけ言つといて、結局怪獣を呼び出すんじゃないか」

「僕は怪獣を呼び出すなんて一言も言っていないぞ?」

不敵な笑みを浮かべて向き直るアオボシに、険しい顔で見つめ続ける一眞。確かに、怪獣を呼び出すとは言っていないなかった。しかし、彼が戦う手段は限られている。このまま肉弾戦をするか、怪獣を召喚するか、はたまたは合体獣で戦うかだ。

するとアオボシは懐からあるものを取り出した。

まるでオーブリングを小型化したかのような上部に、鏢と柄のようなものが合体しているような外見だ。見方を変えてみれば、刀身の無いオーブカリバー……といってもいいだろう。

「なんだよ……それ……」

低い声で彼に問う。すると、取り出したソレを大事そうに撫でながら、アオボシは話しはじめた。

「実に長かったよ……。シリウスがオリジンに覚醒し、グランド、ウオーター、ウインド、そしてフレーム……。4つのエレメントを発動させた後、僕が少しでもだけ頂いたのさ。それを僕自身の光と闇、加えてダークリングの力でブーストさせてやればあら不思議、コイツの完成さ」

目の前で語る男の姿に一貫は、己の目が見開いていくのを感じた。それが怒りなのか恐怖なのかはよくわからない。でも、それを聞いて心地よいとは思えなかったのは確かだ。

「これ……なんて名付けようか。君たちへの感謝も込めて、“オーブリングNEO”なんてのはどうだ？ うん、それがいい」

「そいつで何をするつもりだ……？」

手に持ったやつの名前などどうでもいいと言わんばかりに、彼の目的を探ろうと一眞は疑問を投げかける。投げられた本人は、少し不服そうに表情を歪めた後、先とはまた異なつた表情のゆがみを見せた。

「いたつてシンプル。君と戦うだけさ！ ただ純粹に、君を負かしたい！ それだけだよ。以前から何一つ変わつてないんだよ僕は！　そして何もかも奪つてやるのさ！　君のもう1つの姿としての……その名前もね!!」

口角を大きく上げたその姿……彼にはそれが悪魔に見えた。1人の男への執念だけでここまで歪むのかと、一眞は身を震わす。

——そして同時に、申し訳なく思つてしまった。

「ここに宣言してやる。今からは僕こそが……ウルトラマンだ」

上部のリングが紫色に光るそのアイテムを、彼は頭上に掲げると同時に……言い放つ。

「君たちの絆、使わせてもらおうよ」

一真とAqoursの紡いできたものを嘲笑うかのようなその言葉が発せられた数秒後、閃光の後に地面が震えた。

己の目が得た情報を脳が理解するまでに、数秒ほどの時間を要した。屋上から離れ、近くの森に着地した彼の新たな姿を前に、一真の震えた声が自然と漏れる。

「……………その姿……………お前……………」

その姿はオーブオリジンそのものだった。さらに視線を移せば、同じ聖剣が右肩に担がれているのではないか。

しかし、それでも決定的に違うもの……………それは禍々しく彼の心を現すような体の色だ。体色はほほ黒に包まれているし、額のランプや両目、そして胸に光るカラータイ

マーは常に赤く輝いている。それはまるで、オーブと対をなすような存在……。

「僕は……そうだな」オーブシャドウ「とても名乗っておこうか。なに、すぐにでもオーブの名は頂くさ」

すると黒いオーブは右手に持った漆黒の聖剣……否、魔剣ともいうべき剣を振るう。それはオリジンでも使った技の1つ“オーブグランドカリバー”に酷似していた。地面を這い進む2つの光が爆発を起こし、地面を揺らし、岩石の雨を降らす。

こちらに近付く岩石に構える一真だったが、それは空中で弾け、粉々となつてしまった。飛んでくる岩石は脅しだったのだ。一真にも当てることができただろうが、彼はしなかつた。それが何よりの証拠だ。

「さあ、どうする？ 君が迷っているのなら、あの学校をぶつ壊して強制的にやる気を出さすつてのをやってもいいんだけど？」

切っ先を学校へと向けたオーブシャドウ。

そう。自分はいつでも撃てるぞと、一真に理解させるために放つたのが先の攻撃だ。自分と戦うためなら、彼は学校もそして彼女らを手にかけることも厭わないだろう。只戦うためだけという彼のエゴでしかない。しかしそのエゴで奪われるものが増えていくと思うと――

「成程、彼が……」

ふと、男が呟いた。その男は巨人同士の戦い、主にオーブの方に注目していた。オーブの剣を持つ姿勢、そして心を乱されたその戦い方をただ見ていた。

——彼が敗北してしまうような事態になれば、その時は……と、男は左手に持った何かを再度握りなおした。

「そうだ……それでいい……」

「う………るせえっ!!」

鏝迫り合いの続いた後、力が互いに伝わり後方へと吹き飛んでいく。しかし、すぐさま前方へと加速する力に変換。周囲を顧みないほどの勢いで突進。——そして激突。

一閃と一閃……互いに似通った太刀筋で体に迫る。だからなのか、簡単に防がれ、こちらも防ぐことに成功するのは……。

けど、けど何故だか腕を伝って体に響く衝撃は、アイツの方が重い気がする。そんな

一瞬のノイズが、こちらにスキを生む。

(っ……………!?)

咄嗟に身体をひねらせ、刃からは逃れる。しかし、すぐさま迫ってきた足への対応が遅れた。

「ウ、ウウオ……………」

痛みでふらつくも、右足を踏み込んで堪えながら左拳を突き出した。

食らってはいるが、こちらよりは効いていないのだと手ごたえが伝える。どうしてだ……………? なんて思わなかった。自分でも薄々気付いているからだ。でも気付かないフリをしている。大丈夫だと虚勢を張っている……………。

「おいおい、どうした? あんなに張り切って登場してきたつてのに覇気がないぞ?」
腹部へと水平に迫ってくるヤツの刃を受け流す。

刃を打ち付けていくたびに、拳を足を使って對抗していくたびに……………謎の不快感が己を襲う。それは鏡に向かって殴っているようなものなのだからか……………。それとも彼と戦いたくないと、心の底で思っているからなのだろうか……………。

「く……………このお!」

心中に渦巻く感情を、己の喉の震えで消し去る。彼との間合いを突き放し、ホイールを回転させた。もうそれは隙を見つけてとかではない、やけくそ気味に繰り出した技

だ。

赤く燃え上がった輪と輪が中心でぶつかり合う。そして踏み込んだ両者の薙ぎ払いも、またもや同じタイミングで衝突していく。

「オーブフレイムカリバー……!!」

「シャドウフレイムカリバー!」

「グ……ウアアアアア!」

目を覆いたくなるほどの閃光。そして紅蓮の衝撃がオーブを吹き飛ばした。

「……………」

ジリジリと身体が焼けてくる感覚。その痛みに顔を顰めながら、迫る来る刃を避けて空高く飛翔。しかし己より高速で肉薄されれば、剣で応戦。しかし、その僅かな隙に拳を腹部や頭部に打ち込まれる。

「ほらよお!!」

トドメと言わんばかりの強力な踵落としがオーブを地面へと叩きつけた。

赤銀の身体が地面に墜落し、土煙が立ち昇る。そのすぐ近くに黒いオーブが優雅に着

地する。

「素晴らしい……これがウルトラマンの力か。この力を君はちっぽけな存在を守るためにだけに使っていたのか？ フツ、フフ……アハハハツ……だとすればホントに馬鹿馬鹿しいよ……」

自分の纏っている力の大きさに感心するとともに、目の前で膝をつく存在を嗤う。彼はどうしてそこまで愚かなのだろうか。

「とは言っても君は守るんだろ？ だったら……」

そして頭上に振り上げた魔剣を――

「本気を出して僕から守ってみせろよオオ!!」

両断するように脳天に振り下ろした。力の使い方を、ただ守るためと言い張る目の前の道化に。

「……ッ!!」

防ぐために持ち上げた聖剣が揺れる。ジリジリと、その剣が下がっていくのがわか

る。目の前の赤い瞳が嘲笑っている。

「クツ……!」

咄嗟に出した蹴りで間合いを離す。

「甘いッ!」

しかし剣を地面に突き立てて、棒高跳びのように黒い体を射出させれば、ミサイルのような左足がオーブの腹部に食い込む。

「ガ……アツ……」

衝撃が体を押し、二転三転と地面を転がってしまう。数秒遅れて、腹部からの鈍痛が全身に広がっていく。

「ハ、ハア……ハア……ハア……」

オーブは片方の膝をつき、オーブカリバーを杖にして体重を支える。

目の前では黒いオーブが彼を見下ろしていた。あまりにも余裕なそのいで立ち……。

「オイオイ……こんなものか? 君の力は!」

「ぐうああッ!」

さらに頭を蹴られたオーブは地面へと伏してしまう。カラータイマーが己の限界を

示していたが、ここで退くわけにもいかなかった。

「く……クソォー！」

再度オーブカリバーを待ちあげ、飛び出していく。だが、オーブシャドウの前では無力にも等しかった。あれだけ戦ってきたのにまだ届かない、まだ勝てない相手がいるのかと、一眞は奥歯を噛みしめる。しかもそれが、ちよつとやそつとじゃ片付けられないほど因縁深い相手。共に肩を並べて、ともに歩んだこともある相手なのだと思つと、柄を持つ手が震えた。

「ああ、いい。ようやく……ようやく君と対等に戦える。君に敗北を突き付けられる」「なんだと……まだ俺が負けるとか、決まってねえだろ……」

鏑迫り合いで互いに目を見ながら話す両者。しかしジリジリと、オーブカリバーが傾いていく。

「いいや、君は負ける。僕の……いや、君自身の力でね」

「くつ……」

——そうか……。彼は俺を負かしたい。でもそれ以上に、“ある意味での自滅”で俺の心を折りたいんだ。

一眞はふと、彼の心情を覗き見てしまう。すると刃がグツと押される。

「わかるかい？ これは証明だ。ウルトラマンとやらも所詮は力を振るうだけの野蛮な種族。僕は君に教えてくれたね？ 人には光も闇もあるつて。それはウルトラマンも同じだ。その力で多くの種族を、文明を滅ぼす災厄にだつてなれる」

「……っ！ うるせええええええええ!!」

「その返し、少なからず君もそう思つてたつてことだ。いや、一度はその力を大事な友人に向けたんだっけ？」

剣を担ぐようにして鍔迫り合いを脱したオーブ。その口を黙らせる為、激情に駆られたまま頭上からいつきに振り下ろした。

「——甘いね」

だが、オーブシヤドウはその重量ある一撃を受けるどころか、難なく弾き返したのだ。一眞は自覚できていなかったようだが、焦りの中出鱈目に振るつたせいで、力がうまく入っていないかった。

いとも簡単に……柄を持った両腕が数刻間と同じように頭上に上がっていた。いや、もつと後ろに持つていかれている。

刹那——オーブシャドウの比類なき一閃が、オーブの胸部を水平に走った。

「が、——ガハツ!？」

青白い粒子がまるで血飛沫のように胸元から噴き出しながらも、力を振り絞りオーブは彼を蹴り飛ばした。

「まだ頑張るか……。まあ、ということだから僕がウルトラマンを名乗って、人を傷つけても変わらないだろう?」

「ふ、ざけんな……。そんなことさせねえ……。絶対に……」

胸斬りのダメージでカラータイマーの点滅が激しくなっているが、そんなことの構っている暇も余裕もなかった。オーブはカリバーのホイールを回転させ、緑の暴風を發動。幾ばくかの隙に、素早く態勢を整える。

「成程、ここで決着ってわけね。望むところだよ!!」

その衝撃に浦の星にいた生徒や職員たちも悲鳴を上げてしまう。

眩い閃光が辺りを照らした。その白い世界が、徐々に色を取り戻していく。千歌たちが目を開ければ、周囲の木々は燃え、灰や炭と化した焼野原が広がっていた。そこにオーブの姿はなく、立っているのは似ていてもまるで異なる黒い姿のオーブ。奴の視線が妙に下を向いているのは、倒れた変身者を見下しているからだろう。

「これで……これで僕が勝った！ 僕がウルトラマンオーブだ!! ハハ、アハハハハハッ!!!」

勝ち誇ったかのように笑うオーブシャドウだったが、胸の違和感に気が付くと、彼もまたカラータイマーが点滅していた。細部までコピーしてしまった故の弊害だ。

「これはまた面倒だな……。さっきので随分消費したってことかな。まあいいさ。この続きは後でじっくりと楽しませてもらうさ……」

最後にオーブシャドウは、倒れたオーブの下へと向かっていたAqoursの方向を一時的に向いた。それは彼女たちにも勝利宣言をしていたのかもしれない。「君たちの信じるウルトラマンは倒れたぞ」と。

視線を送ったオーブシャドウは、わざと彼の行動を真似て空へ飛び去っていくのだった。

「くそ……てめえ……わざと外しやがって……ゴホツ……待ちやがれ……」

体力が完全になくなった一眞は膝をついてしまう。視線の先にある、空へと飛び立っていった黒点に手を伸ばした。届くはずもないのに……。そして、消えていく彼の姿を歯を食いしばり、いつまでも睨み続けていた。そして影も、光も見え無くなれば、一眞は力尽き倒れるのだった。

くく

「……………う、う……？」

薄ぼけた視界の中、一眞は目を覚ました。所々が痛む体を押して、何とか上半身を起こす。するとそこは森の中だった。だが不思議なことに、ただ倒れていたわけではない。誰かに運ばれ、寝かされていたようだ。事実、自分の頭があつた場所には服を畳んで置いただけの簡易的な枕があつた。

なぜこうなっているのか……そう考え始めると割り込むようにして、先ほどの光景を思い出してしまう。

「俺は……負けたのか……」

一眞はオーブシャドウに負けた……という変えようもない事実だ。自分の力の一端で編まれた力を振るわれ、見事に敗れた。それは言い換えてみれば、自分に負けたと言つてもいい。

つまるところアオボシは、宣言通りのことをやってのけたのだ。しかし、ここで彼の行動が終わることは無いだろう。オーブと似たその姿で……ウルトラマン、そしてオーブの名を名乗って人々へ襲い掛るだろう。彼の言つていた“ウルトラマンも力の使い方次第で災厄に変わる”という事を知らしめるために。後は、個人的な嫌がらせのため

に。

—— 勿論止めなくてははいけない。けど、止められるだろうか。鏡写しのような彼に。

「どうやら、目が覚めたようだな」

自分の世界で自問自答が続いていた一真へと投げかけられた言葉によつて、彼は我に返る。そして同時に、困惑しながら声の方向へ振り向いた。

「ええ……はい」

フツと声なく笑う。その男は前をキツチリと閉めた黒いジャケット、そして同種のズボン。はつきり言つて黒ずくめだった。

「貴方が俺をここに？」

「ああ、そうだ」

「そうですか……ありがとうございます」

とは言つても、何故ここに？ そんな疑問を浮かべてしまう。わざわざこんな森で寝かせるだけと言うのはおかしい。

「その回復速度、流石はウルトラマンだ。いや、"オーブ"と言つたほうが良いか」

その言葉で一眞は反射的に構えてしまう。その素性を知っているのはA q u o u r s、そしてアオボシ含めた敵対するの者たちだけだ。この男は自分をどうするつもりなのだろうか。一眞の中で緊張が走る。

「そう構えるな。オレは君の敵ではない。寧ろ敵であれば、既に君の命はない。そうだろう?」

彼の問いに「そう……ですね」とだけしか返せなくなる一眞。そんな一眞を一瞬だけ見た男は立ち上がり、歩き出した。

「ウルトラマンオーブ……いや、暁一眞くん、ついてくるんだ」

「は、はい……」

戸惑いながらも、その男性の後をついて行くことにした。自分の名前まで知っているとは、この男は何者なのだろうか。それだけが彼の心を支配していく。今見てわかるのは、只者ではない異様ないで立ち。前方で歩いているその背中に、例え今襲い掛つても振り返りにされると思わせてくれる。だからこそ、このままなのはあまりにも怖いので、恐る恐る尋ねてみた。

「なんで俺の名を……?」

「ああ、それは先程君たちの友人と話したときにね」

「千歌たちとですか!?! じゃあ……」

「問題は無い。君の友人にも、事情は説明してある。……オレが今から君を鍛えるから、借りていくぞと」

突拍子もなく言われたそれに、一眞は間の抜けた声を上げる。まだ出会って5分も経つてないような見ず知らず男性に、「今彼鍛える」と言われても何が何だかサツパリだった。

「どういうことですか!? いきなり鍛えるって言われてもそんな……」

「すまない。本来であれば、オレもこのような強引なやり方は好ましくない。しかし黒いオーブに敗れた今、早急に君を鍛えなければならぬ。……この星を守るのは君達なのだから」

その言い方で、一眞は感じ取ってしまう。「もしかしてあなたも?」と。だがそれを聞こうとはしなかった。今はそれよりも、いつアオボシが戻ってきてもいいように己を鍛えることが、男の言う通り優先だと感じたからだ。……彼に勝てるようにならなくては、この星を守ることなどできないから。

(俺は、心のどこかで自惚れていたんだ……)

自分のバカな思い上がりを、心の中で反省する。これまで、どうにかして勝つことができていたからと今回も……と、どこかで思っていたのだ。

「……俺は、この星を守りたい! ですから……俺からもお願いします!! 俺を鍛えて

ください!!」

一真は頭を深く下げた。こちらの方からお願いとすると、強くなり、みんなを守るために。

「……ああ、勿論だ」

「よろしくお願います！ えっと……」

一真は男の名を呼ぼうとしたが、当たり前だが知らないために呼べない。

「そう言えば、まだ名乗っていなかつたな。すまない」

名前を知らず困り気味な彼の姿を見て頭を下げた。そして男は、どこか懐かしむようにして己の名を口にした。

「オレの名は……セリザワ。……今はそう名乗っておこう」

第54話 WAVEインターバル

「はあ……はあ……はあ……っ!!」

口元を拭い、目の前に立つ男を見据える。その眼前の男は、こちらと違い息一つ乱れていなかった。対する一眞は乱れた呼吸をどうにか整え、木刀を片手に走り出した。

袈裟斬りを受け止められれば、拳を突き出す。剣を使うだけが戦いではないと、セリザワの動きから学んでいた一眞の反撃。しかし上げられた片足で阻まれ、同時にこちらの木刀が弾かれる。そしてセリザワの木刀の先端が、前髪を掠つていけばその風に髪が揺らされる。

「おおっ……!?!」

数秒後、額に蹴りが加えられる。その衝撃に一眞の体は一回転。ドサツと重たい音と共に地面に転がる。

「いいか、動きにはそれぞれの癖が出る。それを把握し、隙を見つけて。慣れない動きをされれば、当然相手は自分のリズムを崩す」

「は、はい……」

未だ鈍痛が響く額をさすりながら、一眞は立ち上がる。セリザワの動きは、幾銭の戦

いを潜り抜けてきたものの歴戦の戦士を思わせるものだった。その鋭い観察眼も、相手を確実に崩していく姿勢が見て取れる。

「動きと言うものには、予備的な動作が付いてしまう。例えば視線だ。次に動く場所や地形、相手のどの部位に攻撃を加えるか……。その視線にも注意できれば、的確に防ぎ、次の一手を加えることができる」

言うのは簡単だが、そこまでの余裕、テクニックが今の一真には無いに等しかった。しかし、できないと言つてばかりもいられないのも事実。そんな無茶な言葉と共に、セリザワは再度木刀を構えた。

「即実戦形式の訓練……なんていうのはオレの分野ではないが……」

その穏やかな口調からは想像もつかないほどの剣戟が迫ってきた。受ける側の一真は、ただ必死にくらいついて行くことしかできなかつた。

「これで覚えてもらおうぞ、一真くん」

くく

「千歌ー頑張つてー!」

場所は変わり、浦の星の体育館。そこでは千歌がパフォーマンスの練習を行っていた。友達の声援を背中に受けて走り出す千歌。安全のためのマットが敷かれた場所まで助走をつけて回ろうとするが、どうしても失敗してしまう。

一真が居なくなつてから5日。千歌たちは変わらぬ練習をしていたのだが、彼女個人のパフォーマンスは未だ成功していなかった。

そんな千歌を心配そうに見つめるA q o u r sや浦の星の生徒だったが、千歌は「もう一回」と立ち上がる。

「少し休もう? 5日もこんな調子じゃ体壊しちゃうよ」

「ううん、まだ大丈夫。もうちよつとで掴めそうで」

「地区大会まであと二週間なんだよ? ここで無理して怪我したら……」

梨子と曜が声をかけるが、千歌は頑なに首を縦に振ろうとはしなかった。まだできる、もう少しで……と。諦めない姿勢は良いことだが、それはそれとしてどこかに危うさを感じているのも事実だった。千歌のその止まることのない姿勢が、取り返しのつかない事態を起こすような気がして。

「……」

果南も眉を顰めて千歌のを見ているが、声をかけることはしなかった。彼女もわかってるからだ。千歌は言っても止まらないと。

「わかってる。でも、やってみたいんだ。わたしね、一番最初にここで歌った時に思たの。みんながいなければなにもできなかつたって……。ラブライブ地区大会の時も、この前の予備予選の時も、皆が一緒だったから頑張れた」

千歌は、1人では何もできていないと思っているようだった。それこそファーストライブの時だって曜や梨子が隣にいてくれたし、学校の皆や街の人々がいたから体育館を満員にすることができた。そこには、いずれAquorrsに入る6人だった。地区大会の時も、予備予選の時でもそうだ。Aquorrs 8人や学校の皆、それにマネージャーの存在……。それらの力があって今がある。だから、自分だけでは何もできないじゃないか」と千歌は思っているのだ。

「学校の皆にも、町の人達にも助けてもらって……。だから、ひとつくらい恩返ししたい！ 怪我しないように注意するから、もう少しやらせて！」

それだけを残し、千歌は助走開始位置に戻る。みんなの力を借りてきたから、今度は自分が返したい。その想いで、彼女は練習に取り組んでいたのだった。

木刀を打ち合う音、そして時には骨や肉体を打ち付けられているような音が森の中で反響している。

「…………… はああ!!」

側面へ回り込み、そこから一気に間合いを詰めに行く一真。しかしその一閃も、セリザワの前では無力にも受け止められてしまう。

「どうした、君の力はこんなものか?」

鏢迫り合いの中、セリザワは問い掛けた。押し込まれないように踏ん張っている状況にしては、随分と余裕のある声の調子。おまけに表情も、眉一つ動かさない涼しい顔で剣を受けている。

「…………… そんな訳、ないです! ぐおっ?!」

そんなセリザワには対照的に一真は力を籠め、剣を押し返そうとする。さらに彼の問いに触発されて一真が反論しようとすれば数回、木刀を腹部に受けて怯んでしまう。

「……呑み込みが早いな。1人で戦っていたとはいえ、素晴らしいものだ。とは言うても、君はまだ直線的すぎるな。もう少し柔軟に動くといい」

「は、はい……」

セリザワの動き、特に剣の腕には敵いそうになかった。ここまで何度も刀を重ねたが、一向に崩せるヴィジョンが見えてこない。こちらの攻撃を予測されているようで、こちらが一手を出せば幾多もの鋭いカウンターが返ってくる。まさに剣を極める点に至った人……というのは彼であると思わせてくれる。

「——ウルトラマンの力を借りていることに、君は頼りすぎてしまっている」

特訓を始める前、セリザワから最初に言われたのがそれだった。フュージョンアツプ……2人のウルトラ戦士の力を借りて戦うことに慣れてしまったことで、逆に己の力が発揮できていないというのが彼の見解だった。確かにオリジンに覚醒したからといっても、積極的にはならなかった。それはどこか、怖かったからかもしれない。本当に1人で戦うという事が……。

「頼りすぎてしまう……」

「別に“頼るな”と言っているわけではない。どんな戦士であろうと、1人では限界が

ある。一人で何でもできると思い込んでいるうちでは、強大な敵に勝つことはできない。君はその辺、もう理解しているだろう。だが今度は、君自身の力を高める時だ。君は未だ磨けていない原石……と言えはいだろう」

俯いた一眞の肩に、セリザワの手が置かれた。

「さあ、あまり時間がない。すぐ始めるぞ」

「は、はい！」

こんな感じで特訓が始まったわけだ。この五日間のうち、今は実戦形式になってはいるものの最初の3日はそんなものではなかった。

「うあつ!? ……どこから来るか予想つかねえ」

おそらく攻撃を的確に見極め、防御するためなのかもしれないが、鉄製のブーメランを投げられた。これを手刀と蹴り、そして木刀で迎撃しようというものだ。しかし、これが滅茶苦茶痛い。体中にある痣のどれかはこれが原因だろう。最初は何もできず、ただのサンドバックだった。

「どうした? まだまだ始まったばかりだぞ」

「はい……」

(いやいやいや、めっちゃ痛いんですけど! しかも四方八方から容赦なく投げられる

……)

また、こちらは攻撃ができずひたすらに避けるというものもあった。変化していく攻撃に目を即座に慣らすというのもあるのだろう。セリザワの容赦ない剣戟や先を尖らせた丸太を振り子として使って鍛えることとなった。

(避けないと、マジで斬られるか刺される……)

どこかで死を覚悟した一真も、目を血走らせて特訓に臨んでいた。

その他にも基礎的なものもあり、ビシビシと鍛えられた。しかしこれをやっているどころとなく、日頃のストレス発散ではないだろうか……なんて失礼なことを思ってしまう。だが、彼に限ってそんなことは無いだろうと一真も口には出さなかった。

それらを踏まえてたどり着いたのが、今の実戦形式の打ち合いだった。

「君は体術もそうだが、剣の腕はまだまだのようだな」

「以前は剣で打ち合っていたりもしていたんですけど……」

一真は懐かしむように口を開いた。「彼」と剣の特訓をしたのも、もう遠い思い出だ。だからなのか、オーブシャドウには敵わななかった。見知った仲だからこそ、動きが読まれていたのだ。

「思い出話もいいが、今はそれどころではないぞ」
「わかつてます」

そうして剣での打ち合いになったわけである。オーブカリバーを上手く使いこなせていなかったのも、敗因の1つだとセリザワは言っていた。それを克服するためと言うもの以外にも、この特訓にはワケがある気はするのだが、彼はそれ以上何も言うことは無かった。

くく

薄暗い雰囲気、船内に溜息を吐きつつ、アオボシは歩を進める。別段何か目的があるわけでもなく、ただなんとなくで脚を動かしていた。

自身もウルトラマンと同じ存在となり、彼を切り裂いた時の感触は今も腕に残っている。その時の音も、己の心音も、耳にこびりついている。それほどまでに衝撃的で、心地のいい体験だった。しかし一眞シリウスの命を奪うまではしなかった。自分はただ、彼を負けさせたいだけ、屈服させたいだけ。それで心が折れた姿を見せてくれればそれでいいの

だから。

「次は、あの姿で街でも壊してみるか。フフツ……」

ウルトラマンが人々に剣を向ける姿を見れば、彼らはどんな反応をするのだろうか。それを考えるだけで、自然と口角が上がってしまう。あの超人様も、所詮は野蛮な種族という訳だ。自分で力を持って、改めてそう感じていた。

「オイ、待て。テメエ、どういうつもりだ?」

「……何が?」

「何がじゃねえ。なんでオーブを殺さなかった」

個人的な思いに耽っていると、壁にもたれ掛かっていたプロキオからそんなことを聞かれた。彼らからすれば、当然の問いではあるが。

「あいつが思ったよりしぶとかっただけ。あとは……時間切れさ」

「はっ……どうだか」

「話はそれだけかい? 君の話を聞いてると僕は疲れるんだ」

やれやれと、アオボシは両手をあげて首を振る。そのまま彼から離れようとした時、プロキオは言葉を口にした。

「通達だ。次オーブを倒せなければ、オマエにあとは無い。オレ的にはその方が良かったりするけどな」

「……」

アオボシは足を止める。こういうのもなんだが、あまりにも予想外のことだった。それなりに尽くしてきた気はするし、歯向かうこともなかった。

「気まぐれかもな、それとも、ヴィルゴの奴がうっかり口を滑らせたのかもしれない。盛るに盛ってな」

「……………」

プロキオの話を黙って聞いていたアオボシ。彼は内心「あの女狐め」と煮え立たせていただろう。しかし、ここで手を出してはあの女の思う壺……と言うやつなのかもしれない。ならば残された道は1つしかない。シリウスを討つ。それだけだ。敗北させるとか、膝をつかせるというものではなく、完全に息の根を止めるという事だ。

「ま、精々頑張ってくれ」

様々な考えをめぐらすアオボシへ、たったそれだけを言い残してプロキオは通り過ぎていった。

「好き勝手にやってきたツケってわけか。まあ、僕がシリウスを潰せばいい簡単な話さ」
悲壮感と怒りが混じった複雑な思いの中で、アオボシは独り言を口にした。

くく

「痛てて……」

一方千歌は、十千万前の浜辺で練習を繰り返していた。ズキズキと痛む腰をさすりながら彼女は立ち上がる。体育館での練習から数時間経ち、日が傾いている今では顔の絆創膏だつたり腕の湿布の数も増えていた。

「大丈夫ー?」

「平気だよ!!」

そのように曜へと返した千歌は、再び練習を再開する。

「気持ち分かるんだけど、やっぱり心配……」

「だよね……」

気持ちはよくわかるがそれでも心配せずにはいられないと、梨子と曜、そして果南は千歌の練習風景を見ていた。

「じゃ、2人で止めたら? 私が言うより2人が言ったほうが千歌聞くとしようよ」

さらに果南はそう言うて2人に促した。年上の自分が言うよりも、同い年2人の方が話を聞いてくれると思ったのかもしれない。だけど、止めることはできないのだ。“気

持ちがわかる”から。そんな逡巡を繰り返してしまう。

「くそっ!?!」

幾度目かの打撃が一眞の体に走る。そして数秒後、視界がグルんと回りながら背中に走る衝撃で、肺の中の空気が抜けていく。

「やっぱり……強いですね……」

「褒めるのではなく、オレに一撃でもくらわせるのが先だ」

とは言っているものの、セリザワは嬉しそうなのは声の調子でわかった。一瞬の緩んだ場の空気。その隙に酸素を体に回し、一眞は立ち上がる。

「ああ、俺だつて諦めねえよ……」

今も練習を続けているであろう、千歌のことを脳裏に浮かべる。「やめる?」と聞かれれば決まって「やめない」と答えるみかん色の髪の少女。彼女の練習に付き合えないのは申し訳ない。後で説教ならいくらでも受けよう。でも、そうやってみんなの中にいる自分を思い浮かべるだけで、一眞の中には力が湧いてくるのだった。

(なにが普通怪獣だよ……お前はとつくに、普通じゃ収まらねえよ!)

「普通怪獣？」

「普通怪獣ちかちー。何でも普通で、いつもキラキラ輝いている光を遠くから眺めてて……」

果南の横で、梨子は以前千歌が語った自虐的なその呼び名を口にした。

「本当は凄い力があるのに……」

「自分は普通だっていつも一歩引いて……」

自分のことはいつも一歩引いて、普通だと卑下している。遙か遠い先にあると思って
いる輝きを、遠い眼差しですつと見つめているだけなのだ。千歌は思っているようだ。
「だから、自分の力でどうにかしたいって思っている。ただ見ているんじゃない、自分
の手で……」

尻餅をついた千歌は、そのまま沈み行く太陽に手を伸ばした。これまでは引いていた
からこそ、スクールアイドルとなった今はその手で自分の輝きを掴もうとしているの
だ。それと同時に、このパフォーマーを成功させることがそんな普通怪獣から抜け出
すチャンスなのだ。千歌は思っているのかもしれない。

それを聞いた果南は腰掛けていたボートから立ち上がると、千歌の下へと歩いていく。

「千歌」

「果南ちゃん……」

そこで果南は、千歌へとあることを持ちかけたのだった。

第55話 今のAqoursを越えて行け

その日の夜、梨子はいつもの調子で自室のベランダに出る。しかし、そこから見える彼女の部屋に灯りは灯っていない。もしやと感じ砂浜へ視線を移してみれば、そこには人影が。動きを目で追っていくと、これまでの五日間で何度も見たものであり、人影は彼女であると確信できてしまう。

「どうしたの梨子ちゃん？」

「あ、志満さん。千歌ちゃんは？」

志満に話を聞いてみれば、千歌は「まだ練習する」と言っ出ていったきりらしい。こんな夜まで……と梨子は彼女を心配せずにはいられなかったが、どこか納得もしてしま……。そんな、なんとも複雑な気分を抱えたまま、梨子は砂浜へと足を運んだ。

するとそこには、千歌のことを見守り続ける少女が既に一人。

「梨子ちゃんに頼むと、止められちゃいそうだからって。ごめんね？」

梨子には言わないでほしいと、千歌に頼まれたのだろう。謝罪する曜に、梨子は気に

していないと言つて上着を着せてあげた。梨子もなんとなく、わかつていたのかもしれない。誰かが見ていることは。

「でも、こんな夜中まで……」

「あんなこと言われたら……」

梨子と曜は、数刻前の会話を思い出し出していた。その内容と言うのが、果南が千歌へ持ち出した条件。それは「明日の朝までにできなければ諦める」というものだった。

「2年前、自分が挑戦してたから尚更わかっちゃうのかな。難しさが」

怪我をしないためもそうなのだが、ロンダートからのバク転というパフォーマンスの難度がどれだけのものかを身をもって理解している。だからこそ、果南はこの条件を出したのかもしれない。

くく

「ああっ!?!」

苦悶の声と共に、ゴロゴロと地面を転がる一真。既に服も、体もボロボロ。いくつも

の切り傷や痣がその過酷さを物語っている。だが、これまで一度たりともセリザワに攻撃を与えられてはいなかった。

「くそ……なんでだ……俺は……」

ふと、悔しさから声が漏れてしまう。何度やっても、刀身が思うように動かない。自分で振っているはずなのに……。力を込めているはずなのに、上手く伝達していない。彼に届かないという事は、あいつにも届かないという事。ウルトラマンも、オーブの名も穢されたままだという事だ。

木刀を持つ手に、自然と力が籠っていく。

「……………」

「動きのブレですぐにわかってしまうんだが、君は何かに迷っているな」

ふとかけられたセリザワの言葉に、体が震えた。それは見ようとしなかったもの。それを考えてしまえば、何かが壊れてしまうのではないかと蓋をしてきたもの。彼に言われたあの言葉が、ずっと心の中で疼いているのだ。アオホシ

「何を迷っているんだ？ 口に出してみれば、案外解決するかもしれないぞ？」

もう向き合えないわけにはいかないだろう。諦めるように、一真は重い口を開き、音

を発することを拒否する喉を強引に振動させた。

「……あいつが言つてたんです。ウルトラマンの力も、矛先を変えれば災厄になり得るつて。俺は、その言葉を否定できなかった。……俺だつてわかつてるんです。誰もが善人では無いことくらい。この世界には、光と同じくらいに闇も溢れてる。どっちが正しいかなんて主張は、あちこちでコロコロ変わつていく。だけど俺は……ウルトラマンとしての光を信じたい……。そう思つてるはずなのに、ホントにそれが正しいのか、今は分からなくなつています」

それが、一眞の抱えていたことだった。ウルトラマンと言う存在の光を信じようとするも、アオボシの言葉が纏わりついている。その信じたものは、本当に正しいのかどうか。結局は独善的なものに過ぎないのではないかと……。

それを黙つて聞いてたセリザワは、そこでようやく口を開いた。

「昔……星から星へと渡り、己の食欲を満たすだけの存在から、オレはある惑星を守る事ができなかつた。そして復讐心だけをこの身に宿し、ヤツを追つていたことがある。」

「……ええ？」

セリザワが語つたのは、彼の過去の話。復讐の鎧をその身に纏い、高次元捕食体と呼ばれる怪獣を追い求める狩人としての姿は、今の戦いに懐疑的で、理知的な彼からは想

像もできない。

「そしてヤツを……ボガールを倒すために、オレは地球へと向かった。周りを顧みず、ただボガールを討つために剣を振るっていたあの時のオレには、ウルトラマンの名の意味などどうでもよかった」

かつての話をするセリザワに、一眞は言葉を失ってしまった。彼も憎み、怒っていた。それはまるで、人間のようだと思ってしまったからだ。

……いや、彼らウルトラマンだつて意思を持った1つの個人だ。それを忘れてはいけない。意思をもった生物は思い悩んだつてなんら不思議ではないのだから。

「だが、あの地球で彼らに教わつたんだ。復讐だけではない、誰かを守るといふ事。そして、ウルトラマンの名の意味を……」

それは、決して途切れることのない出逢いの記憶。当時の地球に派遣された戦士、そして彼と絆を紡いだ仲間たち。そんな彼らが、自分を復讐の鎧から解放させてくれたと。仇を屠る狩人から、光を守護する存在へと。

一度過ちを犯したとしても、そこからまた立ち直ることができる、彼は教えてくれているようだった。

「確かに、オレたちの信じているものは曖昧で、正解など見つからないのかもしれない。だが、オレは信じている。オレたちの光を、その信念を。ここまで培い、育んできたも

のは間違いではないと。君にも、オレと同じように築いてきた信念がある筈だ。君の信じてきたもの、それはなんだ？」

「俺が……信じてきたもの……？」

セリザワは静かに首を縦に振った。己の信じたもの、在り方。ただ、それだけなのだ。正義や悪も、光も闇も、全て存在している。存在してこの世界は動いている。しかしそれが仕方のないことだと、諦めて受け入れるのではない。その世界の中で自分が掬い取った想いを、揺るぎのないものに変えて生きていく。それだけでいい。

あいつの言い分も正しい。けど、全てではない。

——俺は何を信じた？

——誰も傷ついてほしくないという願いだ。

——千歌たちを守りたいという想いだ。

——自分が見てきた、ウルトラマンの姿だ。

「俺は……みんなを守りたい。アイツの言っている事が正しかったとしても、身勝手に蹂躪して、笑顔を奪っていい訳じゃない。それが俺の信じてきたもの、これからも信じていくものです。そしてアイツがウルトラマンの名を名乗るのなら、俺はアオボシを止める。それが、俺の知っているウルトラマンだから……!」

「その眼……もう迷いはないようだな」

彼の言葉を受け止めたセリザワは少しだけ口角を上げると、木刀を構えた。それを見た一真も同じように構える。先ほど感じていた痛みも、疲れも、少しはマシになった。疲労以外の重荷が、肩から降りたように感じる。息を吸い込んでいくと、夜の冷たい空気が肺の中に取り込まれていく。瞬間、何もかもクリアになつていった。

(この想いを……ただ載せればいいだけだ……!)

ほぼ同時に、両者は地面を蹴った。コンマ数秒で縮んでいく両者の距離。

「うおおおおおっ……!!」

「……っ!」

そして――

数秒の内に、木刀を肉体へと打ち込んだ衝撃音が、暗い森の中に響いた。

くく

梨子と曜の目の前にいる条件千を出された本人は、何度も練習を繰り返した。何度も、何度も。傷だらけになろうが、なんだろうが……定められた期限までに完成させるために。その一点で地面を蹴っている。

「あと少しなんだけどな……」

「あと少し……」

あと少しで完成するのに……というもどかしさと、見守るしかできないという無力感を感じる2人。

「惜しい!!」

すると、重なった気持ちは声で表現された。そして2人は頷きあうと、千歌の下へと駆け寄った。

「焦らないで。力を抜いて、練習通りに」

梨子が千歌の右手を掴み、焦り、強張る彼女を落ち着かせる。

「できるよ。絶対できる」

続いて曜が左手を掴み、微笑んで励ました。

最初から寄り添っていた2人は、千歌ならば必ずできると激励を飛ばしたのだ。2人の「見ている」と言う言葉に千歌の顔に笑顔が戻る。絶え絶えだった息も落ち着いていき、焦燥感も消えていく。

「千歌ちゃん、ファイトー!!」

「頑張るぞー!!」

千歌が視線を向けると、そこには花丸たち1年生4人が駆けつけてくれていた。その声援を受け、千歌は再び挑戦する。

しかし、しかしそれでも飛ぶことができなかった。今まで同じように、地面に仰向けで転がってしまう千歌。

「あぁー! できるパターンだろー、これえー!!」

応援を受けて飛んだのにできないという現実には、千歌は声を荒げてしまう。

「なんでだろう……なんでできないんだろう……。梨子ちゃんも、曜ちゃんも、みんなこ

んなに応援してくれてるのに……」

仰向けで考えてしまうのは、何もできない自分の無力な姿だった。期待に答えられない、不甲斐ない自分の姿。それが溜まらなくらい嫌だった。

「嫌だ、嫌だよ！ 私、何もしてないのに、何もできてないのに……！」

右腕で目を覆えば、去っていく果南の姿が思い出される。何もできていないのにこのまま終わってしまうのかと、千歌の口元が震えた。

「ピー！ ドツカーン!!」

「ズビズビズビー！」

「普通怪獣ヨーソローだぞー！」

「おっと、隙にはさせぬ。りこっぴーもいるぞー！」

突然、曜と梨子は彼女の言っていた普通怪獣の名を出した。一体何だと言うのだ、というふうには千歌が視線を向ける。梨子と曜は思惑通りと笑えば、千歌に問いかけた。

「まだ自分は普通だと思ってる？」

「普通怪獣ちかちかで、リーダーなのにみんなに助けられて、ここまで来たのに自分はまだ何もできていないって。違う？」

「だって、そうでしょ？」

「千歌ちゃん、今こうしていられるのは誰のお陰？」

「それは、学校の皆でしよ、町の人達に、曜ちゃん、梨子ちゃん……それに……」

「合っているが、それじゃ正解とは言えないな」

不意に駆け聞こえてきた、その覚えのある声に全員が反応する。視線の先にいた少年は傷だらけでありながらも、どこかすつきりした雰囲気を纏っていた。

「一真は砂浜に降りると、おぼつかない足取りではあるが、それでも千歌の下へと近づいていく。」

「なあ、千歌。今のAqoursを作り、最初にやろうと言い出したのは誰だ？ そしてみんなを、こうやって集めたのは誰のお陰だ？」

千歌の言っていた「みんな」に含まれるべき、一番大切な人物。最初に声を上げた、決して忘れてはいけない人物。それは――

「千歌ちゃんがいたから私はスクールアイドルを始めた」

「私もそう。皆だつてそう」

「他の誰でも、今のAqoursは作れなかった」

高海千歌、本人だ。彼女がいなかったら、今こうしてスクールアイドルをしていることは無かった。輝こうと、足掻こうとすることは無かった。

「千歌ちゃんがいたから、今があるんだよ。そのことは忘れないで」

「自分のことを普通だと思っっている人が、諦めずに挑み続ける。それができるって凄いことよ？　すごく勇気が必要だと思う」

自分を普通だと思っっている少女が、キラキラとしたスクールアイドルに出会い、そして始めた。その道中で何があつたとしても折れずに挑み、進み続けている。それはとてつもなく勇気のいることだ。

「そんな千歌ちゃんだから、みんな頑張ろうって思える。A q o u r sをやってみようって思えたんだよ」

そんな彼女の姿があつたから、皆が背中を押され、一步を踏み出すようにしてスクールアイドルを始めた。もう一度やろうと思えるようになった。

「恩返しだなんて思わないで。みんなワクワクしてるんだよ？　千歌ちゃんと一緒に、自分たちの輝きをみつけられるのを」

千歌の前に、道を作るようにして並んでいく梨子たち。彼女たちの手首にチラツと見えた湿布。千歌のように全力で足掻こうと、練習を続けている証拠だ。

千歌は以前「みんなのお陰でやってこれた」と言っていた。しかし、それ以上に千歌にもらったものもある。そして彼女たちも、自分たちの輝きを見つかけたいと思っっているのだから、期待だとか恩返しだとか、そんなものを背負う必要はないと、梨子は言った

のだ。

「新たなAqoursのWAVEだね」

そこには鞠莉たち3年生の姿も。

「千歌、時間だよ。準備は良い？」

視線の先、笑顔で待ち構える果南。問いかけていた彼女の表情には、曇りのない信頼が見て取れた。ただ千歌を信じている。それだけを信じている顔。

千歌も頷き返すと、勢いよく駆け出していく。みんなの想いを知り、そして自分の想いとも向き合った。必ずできる。そんな確信が、千歌の中にも、みんなの中にもあった。

「ありがとう。千歌」

彼女が飛ぶ瞬間、一言では言い表せないくらいの想いの詰まった言葉を果南は呟いていた。

山から朝日が昇り切った後、千歌たちはパフォーマンスの成功に歓喜の声をあげていた。

そして各自家に戻ろうという話になったところ、紫色の閃光が彼らを襲った。その光は人型の形を成し、地面に着地する。

「あれは……」

「漆黒に染まりし、偽りの巨人……!?!」

「もう、今そんなこと言ってる場合!?!」

善子の言っている通り、漆黒の体に剣を持った巨人。オーブシャドウが姿を現したのだった。しかし彼は直立しているだけで、行動を起こさそうとはしないようだ。それはまるで、誰かを待っているかのように。

「成程ね。俺をお望み……って感じか」

彼の目的を察した一真は、一步前へと踏み出した。だが、誰が見てもわかるその外傷

の多さでは、みんなも送り出すことなどできなかつた。

「お待ちなさい！ いくらなんでもその傷では……」

「その体で戦えるの？」

ダイヤと果南が問いかけてくるが、一真は「大丈夫です。あの人も結構手加減はしてくれましたから」と答える。反応を見る限り、信じてはいなさそうだが。

「そうよ。まだ見つかつていないみたいだし、今は逃げよう？ 怪我の手当てをしてからだつて……」

しかし、梨子のその提案に一真は首を振ることは無かつた。

「もし俺が行かなかつたら、アイツは街を壊すだろうな。俺が出てくるまで、ずっと」

今行かなければ、食い止められたかもしれない被害がどんどん広がっていくだろう。彼は、オーブの名を名乗っただけ。その本質は、怪獣や侵略者たちと何ら変わらないのだから。

それを言われてしまえば、誰も彼を止められなくなってしまう。一真は「ごめん」と謝罪した後、彼の胸の内を明かした。

「みんな、ありがとう。その気持ちは本当にうれしい。……けど、今ここで戦わなかつたら俺は、アイツの間違いを認めることになる。それだけは出来ないんだ。それは、俺の想いに嘘を吐くことになるから」

黒い巨人を見つめ、千歌たちに語りかける一真。そこには、迷うことなき信念が宿っていた。

「じゃあ、約束して。勝って、帰ってくるって」

「約束だよ！ まだ地区大会も残ってるんだから!!」

しばしの沈黙を破ったのは、曜と千歌の約束だった。そう言った彼女たちの表情が不安げだったのも、オーブシャドウに敗北した姿を一度見ているからなのかもしれない。

「大丈夫だって。もうあいつには負けない……。なんだって俺は……。光の使者だから」

それを言い切った一真は少しだけ駆け出すと、オーブカリバーを眼前の黒い巨人に突き出した。虹色の光が一真の体を包み込み、瞬時にオーブオリジンへとその姿を変えた。

「フフツ……来たねえ」

「さあ、ここで勝負をつけようぜ」

光と闇……道を違えた2人は今一度、その手に持った剣を振るう。1人は彼を殺すため。1人はみんなを守り、そして己の信じたものを貫くため。

2体の巨人の激突は、以前の対戦を遥かに凌ぐ勢いや衝撃で、早朝の内浦を震わせていたのだった。

第56話 その名のもとに

「今度は……君の命を貰うよ！」

「言ってる。もうお前に、負けるつもりはねえ!!」

それぞれの想いを胸に、両者は走り出す。2人は雄叫びを上げながら激突。手に持ったその刃を振るい、刃と刃が交わりスパーク。雷のように爆ぜ、両者の腕にも痺れる感覚が伝わってくる。

先の予想できない両者のバトルに、千歌たちはまっすぐな瞳で見据えていた。

だが、彼らの一騎打ちを見ていたのは千歌たちだけではなかった。遠方で彼ら……否、一眞^{オーブ}を見据えるセリザワ。これまでの特訓の成果を見せる時だと、ただ見つめ続けていた。あの戦いに手出しは無用。これは彼がウルトラマンとして成長する、1つの試練でもあるのだから。

「……………」

セリザワの聴覚は、交戦の激しい音に交じりながら微かに聞こえてくる、空からの何かを捉えた。

「あれは……隕石……いや卵……!?!」

彼が見ているのは、宇宙から飛来してくる隕石……ではなく卵だったのだ。恐らく、この星に眠るエネルギーに引き寄せられているのだろう。今のところ、2つ程の卵が地球へと落下中だ。

「ならば、アレは……」

何かを知っているセリザワ。彼は今一度オーブの方へと視線を向ける。彼ならやれる。最後まであきらめず、何度だって立ち上がる。今までの、そして今の彼の姿を見てそう信じたセリザワは、拳を握った右腕を胸の前に翳した。すると青いブレスが出現。左手に持った金色の短剣を差し込めば、ブレス型アイテム“ナイトブレス”から放たれる光に包まれていくのだった。

オーブシャドウの振りかざした剣の攻撃を、オーブは跳躍と捻りで回避。背中と刃がギリギリで通過していった数秒後、地面に着地。勢いを殺さず、鞭のようにしならせた蹴りを繰り出した。

しかし、放った蹴りは盾として用いたカリバーに防がれてしまった。白く光る眼と赤の双眸の視線は混じり合う。赤い目の彼は、相変わらず嗤っているかのよう。1秒も満たない時間の中で両者は後退。体勢を整えて地面を蹴った。

「……はあー」

「ハハハ……ダアツー！」

攻撃すれば、向こうから倍の反撃が。向こうから攻撃が来れば、こちらの反撃を倍で一進一退の攻防。同じような技、同じような技術で戦っているからこそ、互いが互いの攻撃を潰し合っている。

オーブは攻撃を往なし、防ぎつつ大きく後退。だがその隙を狙っていたのか、黒い巨人は突進。息つく暇もなく鏢迫り合いに持ち込まれた。

「ほう、どうやら腕を上げたようじゃないか」

「お前に負けて、なんにもしないわけには……いかねえだろー！」

鏢迫り合いを解除させ、胸元へ一閃。しかしオーブシャドウはその刃をバックステップで回避。そんなリーチの差を埋める槍の如く突きを、オーブはすかさずに放ってい

く。

「ぐおっ……!?!」

しかし腹部に打ち込まれた膝蹴りに悶え、追撃を受けてしまい二転三転と地面を転がってしまふ。彼はチャンスと捉え、立ち上がらないオーブへと走り寄り跳躍。

「貫つたああああ!!」

仰向けとなったオーブの首元へ、急降下してきたシャドウカリバーが迫る。

(……!!)だ!

オーブが接触ギリギリで避けたせいで、シャドウカリバーが地面に深々と突き刺さってしまった。抜こうとしている間に、オーブは素手で彼に挑んでいく。拳の殴打を繰り返すも、シャドウの足払いで転倒。それでも両足を首に絡ませたオーブは、シャドウも地面へと倒す。馬乗りになったオーブは何発もの拳を食らわせていく。

「……!?!」

背中に打ち込んだ蹴りでオーブから脱出。シャドウカリバーを手に持ち、即座に水のエレメントを解放させる。

「シャドウウォーターカリバー!」

地面と平行になって疾走する水の刃。高速で迫るそれをバク転で回避したオーブ。すると、彼が先ほどまでいた場所が抉れた。

「チツ、オーブカリバー……!」

手元に呼び出したオーブカリバーが収まる。そのまま駆けだそうとしたところで、彼は足を止めてしまった。

「くそ、てめえ……」

「へへへ、ハハハ……」

オーブシャドウの刃が向いていたのは、A q o u r sの皆がいる方向。動けば撃つ……そう言いたいのだろう。刃を向けられている千歌たちも、迂闊には動けなかった。

「そうだよな? 君は彼女たちを守らなきゃいけないんだから……。まったく、甘いよ……君はッ!」

シャドウカリバーから放たれた闇の刃が、無防備であるオーブの胸元に命中した。

く
く

人々で賑わっている首都東京。いつも通りの生活を送ろうと闊歩する彼らの日常は

……突然として崩れた。

突然、街中を歩く誰かが指を指した。それは誰でもいい。しかし重要なのは何故指を指したのか、だ。周りの人々と同じように、視線を空へと向ける。なんとそれは隕石だった。周りがパニック状態となり、阿鼻叫喚の地獄となる。車や電車の走行音よりも、工事の音よりも、人々の悲鳴の方が何倍にも大きく感じられた。

死にたくない。その一心で走っていく。だがその隕石は地面へと落下。衝撃や暴風で辺りは巻き込まれてしまった。しばらくすれば、その隕石は形を変えた。違う、卵から孵化しているのだ。

卵から現れたのは、全身を覆う青いウロコに長大な尾と極端に長く鋭い爪、鉋のような巨大な一角といった、魔物を思わせる攻撃的な外観の怪獣だった。さらに特徴的なのは、般若の面から黒目だけを取り去ったような凶悪すぎる険しい顔つき。しかもそれが2体。

耳を塞ぎたくなるほどの轟音で鳴く目の前の怪獣に、ただ逃げ惑う事しかできない。口から吐く火球や、モーニングスターのように刺々しい尾の先端で街を破壊していく。

さらにはその長く鋭い爪も使って。躊躇なく、野性的に街を破壊していくその姿は、まさしく悪魔と言うのがふさわしいだろう。

逃げても逃げても、あの怪獣から遠ざかった気がしなかった。追いつかれる。ビルの下敷きになる……そう思った瞬間、蒼い光が怪獣の前に降り立った。

誰もが立ち止まり、その光に目を奪われる。眩い輝きが収まり、そこから姿を現したのは“蒼い体の巨人”だった。

東京の地へと降り立ったウルトラマンヒカりは、眼前の怪獣を見据え構えた。
(あの卵、やはりケルビムか)

隕石のように落ちてきた卵は、“宇宙凶険怪獣ケルビム”だったのだ。この怪獣は強いエネルギー波を辿って星を襲い、その星に寄生するという生態がある。今いる2体のケルビムたちも、この星のエネルギーに吸い寄せられてきたのだろう。

(何はともあれ、お前たちを倒す……！)

駆け出したウルトラマンヒカりは、すかさず腹部に拳を叩きつける。爪の攻撃を掻い潜り、力を込めた右足で蹴り飛ばす。対するもう1体も腕を掴み、手刀を叩きこんだ。

「ハアツ！」

しかし側面からは、蹴り飛ばして後退させたケルビムのモーニングスターのような尾が、さながら剛速球のように飛んでくる。バク転で躲すと、もう1体が火球を吐き出した。ヒカりは右腕のナイトブレスから出現させた光の刃“ナイトビームブレード”で切り裂いて事なきを得る。

(やはり、遠近と強力な攻撃手段を持っているというのは、なかなか厄介なものだな……)

近距離戦では、強力な爪と頭部に生えた巨大な一角で攻撃してくる。ならばと遠距離に離れていくと、火球と尻尾の攻撃が待っている。攻撃面では戦況や相手を選ばないオールレンジぶりを見せ、的確に使分けってくるのがケルビムの恐ろしさだ。加えて、空から降ってくるケルビムの卵がこれだけとは限らない。恐らく宇宙空間には、これらのケルビムを放った母体が存在しているだろう。悠長に戦っている暇など、こちらにはない。

そんな緊迫した状況下で2体のケルビムを視界に収めたヒカリは、金色に煌めく剣を構え直した。

く

「ウアアアッ!？」

幾度目かの斬撃が、オーブの体に放たれる。A q o u r sの方へと飛ばされた攻撃を庇い、防ぎ続けているオーブ。アオボシから見れば、それはもうただの案山子に過ぎない。だがそれでもヤツは満足していただろう。目の前の彼を倒すことができるのだから。

「誰かを守るために戦えないなんて……皮肉だよなあ?」

「言ってるよ……お前の攻撃なんてヌル過ぎる。なんも詰まってる、空っぽの攻撃だよ……」

「……その割には随分と痛そうなことでは?」

膝をつき、肩を上下させているオーブ。今の彼は、彼の放った痛みに蝕まれているの

だ。体が痺れるし、カラータイマーも点滅している。後ろからは、もうやめと告げる声も聞こえる。自分達のせいで傷つく姿は、誰だつて見たくない。当たり前前の反応だ。でも、一眞は……

(できねえよ。そんなこと……いや、したくないんだ)

守ることを辞めたくない。その一心で何とか立ち上がり、両腕を広げる。向こう側への攻撃は全て防ぐと、そう言っているかのように。

「そうかい。なら、その無様な姿で……終わりにしてやるよ!」

何度目かわからないオーブシャドウの斬撃。それを受けたオーブは、地面に倒れ伏してしまった。

「カズくん!? ダメだよ……こんなところで……」

帰ってくるかと、勝つと約束させて送り出したはずなのに。……そんな絶望感が彼女たちを包み込む。

「くだらないね。人間なんかを庇うからそうなる」

語りかけるが、勿論オーブは答えない。恐らくは見せつけているのだろう。もうオーブは話さないのだと。

「……立つてええええええ!!」

「みんなのヒーローなのでしよう!？」

「Wake up! オープ!!」

「リトルデーモンなら、ヨハネの言うことぐらい聞きなさい!!」

「もう一度立ち上がって!」

「マル、信じてるぞら!!」

「今までも立ち上がってきたんでしょ! だったら……!」

「約束したんでしょ! こんなところで倒れて、カズはみんなとの約束を破ってもいいの!？」

「さっき言ってたじゃん。ウルトラマンだって!? それも、嘘だったの?」

「カズくん!!」

彼女たちは口々に倒れた彼へと呼びかける。その姿を見ていたオーブシャドウは、どうしても笑いが堪えきれなかった。そんなもので、彼が再び起き上がるとは思えなかったから。そして勝ち誇った高揚感に身を委ねていたからだ。

「何言ってるんだ。いいかお嬢さん方、僕が勝ったんだ。これでやつと言ってるんだ。僕こそがウルトラマンオーブだってね! フフフツ、アーハハハハハッ!!!」

そう言って勝ち誇るだけのオーブシャドウ。彼はそのまま踵を返していく。もう勝負はついたと。

「——ふっ、あははははは……」

直後、なんと肩を震わせて笑うオーブ。その声を聞いて立ち止まるオーブシャドウはたまらず振り向いてしまう。

確実に倒れたはず。なのに、なぜそこまで余裕そうなのかと……不気味で不愉快だったからだ。

「お前……なんもわかってねえよ……。お前がウルトラマン……？ 笑わせんな……！」

地面に倒れても笑い、己を悪罵するオーブを怪訝な表情で見下ろす。

「……ウルトラマンってのはな……誰かを救い、その姿で多くの者に希望を与える存在なんだよ……」

一眞の脳裏には、幾つもの超人の姿がよぎっている。

「それをみんなが、俺に……教えてくれたんだ……」

かつて、そして今の自分がそうだったように。

—— 炎の中見上げた彼の背中

—— カードに描かれ、力を貸してくれる先輩たち

—— 共に戦い、力を授けてくれた存在

—— 俺を鍛え、そしてこの名の意味を気付かせてくれた存在

—— そして何よりも、A q o u r s のみんな

数々の出会いが、一真と言う存在に教えてくれたのだった。

ウルトラマンという名には、とてつもなく大きな責任があることを。

その名には、姿には、どれだけの願いが込められているのかを。

「お前の言うように、光も闇もただの力だ。どう使おうかなんて本人の自由さ。……けど」

立ち上がろうとすると、身体中から軋む音が聞こえた。

しかし一真は無視して立ち上がる。だからなんだと。軋むだろうがまだ動くではないか。まだ戦えるではないか……と。

最後まで、決して諦めない。こんな奴の前で、膝を折ったままではいられない。

そうして己を鼓舞するオーブ。

「けどそれが、誰かを傷つけていいなんて理由にはならない……!!」

「はあ?」

力なんて使う奴次第で変わる。結局のところ、光も闇も、どちらも同じなのかもしれない。しかし同じだったとしても、それが無暗に振るわれていいとはならない。なっちやいけない。

「お前がその力で、その名を使って……誰かを傷つけて、それで嗤うって言うのなら……俺は……」

だからこそ、このまま放っておくわけにはいかない。それは誰かを虐げるための力ではないのだから。

立ち上がり、剣を構える。誰かを傷つかせないために、守るために。そして何よりも、彼らの名前に恥じないために。

「ウルトラマンの名のもとに、お前を倒すッ!!」

「クツ……なに!？」

立ちあがったオーブに困惑しながらも、もう一度袈裟斬りに刃を振るったが、それを素手で止められてしまう。

「なんで、お前の力は……既に……」

「千歌たちだつて足掻いてんだ。俺だつて……カツコ悪くても最後まで足掻いてやるんだよツ!!」

剣から即座に詰め寄って腹部に手刀を1発。怯んだ隙に足を引っかけ、投げ飛ばした。そして、足元に刺さっていたオーブカリバーを引き抜き、地面を蹴って加速。オーブシヤドウに斬りかかっていった。

くく

2体のケルビムの攻撃を避てきたウルトラマンヒカリ。彼も、後ろで自分を見上げ、声を上げる人々を守るために駆けだした。

ナイトビームブレードから放たれる光刃“ブレードショット”で、ケルビムの耳部に命中させる。この耳部は、ケルビムの器官の中でも重要な部位であり、ここを破壊されると極端に大きくダメージを受けてしまう最大の弱点でもあるのだ。

(今だ！)

怯んだケルビムを視線内に確保しつつ、もう1体のケルビムへと走り出していくヒカリ。右腕を左腰に当てて走り出していく。それはまるで、抜刀のタイミングを見計らう騎士のよう。すれ違いざまの素早い胴斬りで、ケルビムの1体が沈んだ。

そして残ったケルビムに狙いを定め、ヒカリは右腕を天に突き出す。すると蒼く光る雷がナイトブレスに収束。左手をブレスに重ねれば、幾何学的な模様が浮かぶ。そこから十字に組み放たれる光線“ナイトシユート”をケルビムへと撃ち込んだ。ケルビムは凄まじい断末魔を響かせた後、爆散していくのだった。

くく

飛び込んできた刃を防ぐが、明らかにおかしい。

目の前の敵は疲弊し、ダメージを追っているはずだ。もう起き上がれないと確信を持っていた。なのにオーブ・シャドウが押されている。眼前に迫ってくるオーブの絶え間ない剣舞が、受けるだけのシャドウの腕を痺れさせる。

以前も見た一撃。防いだ一撃。

変わらないはずなのに……だというのに、その一撃一撃が何倍も重く彼に振るわれてくるのだ。

「い、あのっ……」

驚愕しながらも黒い剣を振るった。しかしそれは空を斬り、直後には強制的に彼との距離が離れた。

「……ッ、グ、グウウ……ふざけるなああああ!!」

己が蹴り飛ばされたのだと脳の理解が追い付けば、急激に腹部から激痛が響いてくる。その痛みを……彼の力の変化を怒りに変え、今まで以上の凌ぎ合いに発展していく。

「細切れになりやがれえええ!!」

オーブシャドウの放った幾つもの光輪が疾走。オーブを切り裂かんと迫ってくる。

(こんなもの……!)

しかしオーブは、四方八方から迫ってくる光輪を的確に打ち落としていく。殴打や蹴り、そしてオーブカリバーで。

「オオオオオオオ……!!」

咄嗟に発動させたオーブウインドカリバー。その力を推進力として使用。ジェット噴射の如く勢いで肉薄。オーブシャドウを追い詰めていった。

「クソッ!」

こちらも攻めなければ、撃ち込まなければ吞まれる……。黒き彼は、そんな思いを抱きながら剣を走らせる。

「ダアアアア!!」

胴を薙ぐであらう一閃。

しかしそれを防ぐどころか、見切ったオーブは宙へと飛び上がって躲す。そして回転

を加えた勢いで剣を振り下ろす。刃が受け止めれば、宙には火花が散り、地面は土煙を上げた。

「あ、あああああ！ 倒れるッ!!」

オーブへの恐ろしさなのか、喉がはちきれんばかりの叫びと共に剣を振るう。

（僕が……シリウスを恐れているだつて……？ あり得ない！ そんなこと、断じてあり得ない!! 僕の方が上だ。実際、僕はアイツを倒しているじゃないか……!）

その自信のようななにかを必死に支えながら、オーブシヤドウは目の前の姿に視線を集中させる。

何撃も何撃も、シヤドウカリバーを打ち付けた。どうやらオーブは防ぐのに手一杯のよう、なかなか反撃には出られない。

このまま押し切れば、時機に耐えられなくなって聖剣を落とす。その時が彼の死地だ。

「……そのまま、地獄に行けッ!」

やはり彼は弱い。ウルトラマンがどうか言っていたが、ここで倒ればそれも終わ

りだ。

不意に出た笑いを飲み込む。そして漆黒の聖剣を、彼の頭上に振り下ろした。

「……!」

「なっ……!?!」

だが、オーブはその重量ある一撃を受けるどころか、難なく弾き返したのだ。アオボシは自覚できていなかったようだが、焦りの中出鱈目に振るったせいで、力がうまく入っていないかったのだろうか。

いとも簡単に……柄を持った両腕が数刻間と同じように頭上上がった。いや、もつと後ろに持っていかれている。

刹那——オーブの迷いなき一閃が、オーブシャドウの胸部を水平に走った。

「が、——あ、ああッ——ぐ、ううッ!」

黒い粒子がまるで血飛沫のように胸元から噴き出しながらも、力を振り絞りオーブ

シャドウは彼を蹴り飛ばした。

あんな訳の分からない理由で負けたくないという彼の信念が、この体を動かしているのだ。

そして自分の剣にエネルギーを貯め、極太の光線を放った。

「シャドウスプリーム……カリバアアアア!!」

「オーブスプリーム……カリバアアアア!!」

以前と同じ光線と光線の激突。その衝撃は以前よりも大きく、両者ともに後退りしてしまふ。だが今回の衝突では、押されている人物が異なっていた。

徐々に光線が打ち消されていくのは、オーブシャドウの方だったのだ。

「なんでだ……」

否定しようにも、力を籠めようにも、どうやっても光線が打ち消されていく光景しか

目の前にはない。それ故にオーブシャドウは問う。何故それ程の力を出せるのか……。もうそれ程の力は残っていないはずなのに。

どうして……と。

「守りたいと思う心が……俺に限界を超えた力を与えてくれる……！」

己の放っている光線がどんどん飲まれ、彼の放つ虹色の光線が目前まで迫ってきてきた。

取りこぼしたくない、抱きしめたものを零したくないと、その一心が背中を押し、身体を動かし、限界以上の力を与えてくれる。今の一真はその想いで体を支え、光線へと変換していた。

「なんなんだよ……その力は?!」

あまりに恐ろしくなり、アオボシは再度問い掛けてしまった。限界を超えても尚立ち上がる彼の凄まじき力……。守りたいと思う力”とはなんなのかを。

「…………お前の捨てた力だあああああああ!!!」

一眞の激昂が光線の威力を増させ、どす黒い光線を一気に呑み込み疾走。直後、光の波に呑み込まれたオーブシヤドウは凄まじい爆発と共に消え去ったのだった。

第57話 輝きの波

オーブとオーブシャドウの戦いから数時間後。内浦はいつも通りの日常を取り戻していた。しかし一眞の傷に至っては美渡や志満、さらにはクラスメイトにあれこれ説明を求められて大変だった。

「痛ててて……安心したら急に痛くなってきた……」

その日の帰り道。千歌たちと同じように、至る所に傷を作っていた一眞は眩く。今朝までは緊迫した状況下であったため、傷の痛みなど気にはいらなかったのだろう。しかし、そんな彼の声はどこか嬉しそうだったのは、束の間の平和を勝ち取ることができたからなのかもしれない。

「いつまで笑ってんだよ2人とも……」

うんざりするような表情の一眞は、隣でクスクスと笑っている2人へと目を向けた。

「ごめん。でも湿布だらけで……」

「そうそう。それに、目の周りには大きな痣まで作っちゃって……カズくんパンダみた

い」

一眞のその傷だらけの姿に笑いを隠せずにいる梨子と曜。まあ確かに、第三者から見れば面白い姿にはなっていることだろう。実際クラスメイトには笑われていた。痣が引くまでは鏡も見たくない……と一眞は思っていた。

「……つたく。言いたい放題かよ」

ぶつくさ言いながらも一眞も気にしているのだろう。精神的ダメージを減らすために、眼帯をして隠した。

「みんなに心配をかけた罰だよ。ば・つ」

「なっ!? そ、それ言われるとな……ホント申し訳ないです」

千歌の言葉に、一眞はぼつが悪そうに答える。それは先程の戦いで一度倒れてしまいい、みんなに心配をかけてしまったからだ。戦いの直後は、1年と3年も詰め寄ってきて大変だった。

困っている一眞を見て、千歌も笑みを浮かべる。彼女だってそうは言っているが、既に許しているし、それ以上に感謝していた。

夕日に照らされた道を歩いている4人。すると梨子が呟く。

「でも良かったわ。千歌ちゃんも成功して、一真くんも帰ってきた」
「うん。後は……」

「地区予選だね」

そう。今までやってきたのは地区予選で勝利し、ライブ決勝に進むためだ。千歌に任されているパフォーマンスが成功するようになった今、地区予選当日までに最高のコンディションへと仕上げなければならない。

だが、彼女たちはやり切るだろう。目一杯足掻き、学校を救うために。

決意を新たにして道を歩く一真たち4人。すると、彼らのもとに、セリザワが歩いてきた。何も言わずとも、一真とセリザワのことを察した千歌たち。彼女らは「先、行ってるね」とだけ一真に伝え、バス停の方へと向かっていった。

「倒すことができたみたいだな。よくやった」

「いえ……セリザワさんと千歌たちの力があつたから、俺はあいつを倒すことができたんです」

謙遜している一眞を見て、セリザワの頬は緩む。そうやって「自分はまだまだ」だと言っている様に、共に地球を守ったことのある「彼」を思い出していたのだろう。

「それと傷は……すまなかった」

「別に大丈夫ですって。セリザワさんが気にすることじゃないです。ホントに」

眼帯を見たセリザワがそう言うってくるが、一眞は気にしないでほしいといった旨を伝える。

そんな平和な会話が続いた後、彼らに流れる空気が一変する。

「もう……行くんですか？」

前に立つセリザワに、一眞はそう問いかけた。彼は何も言わなかったが、ウルトラマンである以上この地球に長くは滞在できないだろうと、そう一眞は思っていたのだ。

「ああ。オレにもやらなければいけない任務があるからな」

瞬間、セリザワの体は光に包まれる。幾ばくかの閃光の後、目の前には蒼い体の巨人が膝について此方を見下ろしていた。

そう言えば学校で聞いた話に、蒼いウルトラマンが東京で怪獣と戦っていたというものがあつた。十中八九、彼のことだろう。

「そう言えば君にはまだ言っていないかったな。オレの名は、ウルトラマンヒカリ」

「ウルトラマンヒカリ……それが本来の名前なんですな」

大幅に遅れた自己紹介を終えたヒカリは、一真に語り始めた。

「オレはもともと、別の理由でこの地球に来たんだ。少し前、タイガに話を聞いてな。ここにオーブがいると」

「え、タイガさんからですか？」

以前共闘したウルトラマンタイガから話を聞いていたと言うウルトラマンヒカリ。彼は、とあるものを届ける為にこの地球へと赴いたそうだ。しかし丁度その時、一真とアオボシの戦いを目にしてしまい今に至るそうだ。

しかしケルビムの襲来もあつたことから、この事態も不幸中の幸い……と言えるのかもしれない。

「本来、オレはこれを授けに来たんだ。受け取ってくれ」

ヒカリの手から伸びた3つの光。それはオーブリングに通されると、カードに変換された。

「この3枚は……」

手に取った一真が不思議に思うのも無理はなかった。なんとたつてウルトラ戦士が描かれていない白紙の状態だったのだ。これは以前、魔王獣を倒す前に見たフュージョンカードとよく似ている。

「それはまだ発現していない力……。言わば種子の状態だ」

「種子……ですか？」

一真は理解できずにそのまま聞き返せば、ヒカリは静かに頷いて説明してくれた。

「そうだ。彼女たちと結んだ絆の力が最高潮に達した時……その種子は芽吹き、新たな力となってくれるだろう。いずれ来る戦いの時、それが必要になる筈だ」

「絆の力……。いずれ来る……戦い……」

ヒカリの言葉を染み込ませるかのよう、一真は再度呟いた。今までのフュージョンカードとは何か違う雰囲気を感じ出しているその3枚。力の発現もまた異なるそれを見つめた後、一真は何か納得するかのよう、頷いて、ホルダーへと収めたのだった。

「なんとなく……理解できました。ヒカリさん、この短い間、本当に……色々ありがとうございました。……俺、もつと強くなります。ウルトラマンとして、この星を守るように。そして、そのいずれ来る戦いに備えるために」

ヒカリを見上げながら語る一眞。その顔は以前出会ったよりも、随分と凛々しい顔付きになっていた。

「そうか……。ではあともう一つ。これはオレ個人からの贈り物だ」

そう言つて青い光がオーブリングに放たれると、先程と同じようにフュージョンカードへと変化する。そこに描かれていたのは……

「ヒカリさんの力……？」

「ああ。今の君であれば十分に使いこなせる」

「……本当に、本当にありがとうございます。ヒカリさんの力、使わせて貰います。この星は……俺たちが……必ず」

ヒカリは再度頷いて立ち上がり、そのまま宇宙へと飛び去っていった。それを見つめる一眞の瞳には、空へ飛翔する青い光が反射していた。

緑の惑星、地球を背にして飛んでいるヒカリ。すると彼は、何かに気づいたようで動きを止めた。

「地球は大丈夫みたいだね、ヒカリ」

そうやって聞いてくるのは赤と銀の身体を持ち、左腕には炎のような形の手甲を装着している戦士だった。青く輝く菱形の水晶……カラータイマーからもわかる通り、彼もウルトラマンのようだ。ヒカリとも親し気に話している。

「ああ。お前のお陰で、ケルビムの被害も最小限に済んだしな。それに……」
「どうやらゲルビムの母体……マザーケルビムを倒したのは彼らしい。」

軽口を叩いていたヒカリだったが、彼は急に無言となり、背後にある地球へと目を向けていた。

「居るんだね。あの地球にも……」

彼の行動で察した戦士は、懐かしむようにして目の前の地球を見つめる。

「……彼らになら、あの星を任せられる」

地球の姿をその銀色の目に焼き付けるかのように見つめていたが、そうもしていられないとヒカリは向き直る。

「……名残惜しいが、オレたちにも任務が残っている。行くぞ——！」
「ああ、行くぞう！」

暗い宇宙の中で、赤と蒼の眩い光がいつまでも煌めいていた。

くく

地区予選となるライブ会場で、9人の少女が華麗に舞う。

一真と珠冬は、客席で彼女たちの姿を見ていた。サイリウムを両手に持って入るが、振らずに彼女たちのステージに見入ってしまった。

——MIRACLE WAVE——

9人のAqours、その新しいカタチ。そしてキセキの名を当を冠した楽曲だ。

チアガール風の衣装に身を包んだ彼女たちはステージで踊り、輝いていた。諦めずに挑戦を続け、今の自分を超える時だと、応援するかののような歌詞。いつも目になっている海、そして波のような激しいダンス。

そしてサビ直前、千歌は練習通り、ロンダートからのバク転を成功させたのだ。果南たちから始まり、千歌たちへと受け継がれていったAqoursというグループの軌跡、そして彼女たちが起こそうとしている奇跡。2つのキセキを感じさせる圧倒的なパフォーマンスを披露していった。

客席、ステージから照らされる光と共にジャンプした彼女たちを前にして、一真は見た気がしたのだ。彼女たちが追い求める“輝き”というものを。

ライブを終えたAqoursへ、会場が震えるほどの拍手や歓声が響いてくる。

「私、Aqoursを知れてホントに良かった……」

客席で見ていた珠冬は、涙を流しながら拍手をしていた。

「俺も、Aqoursに出会えてよかったよ」

彼女と同じように、一真もまたA q o u r sの姿に身と心を震わせていた。なんとも言えない、心の内から湧き上がってくる熱い感情。それが無意識のうちに、目から溢れ出していた。

「今日ここで、この9人で歌えた事が本当に嬉しいよ」

ステージ上で、千歌は今の気持ちを含め、ありのままに話し始めた。

「私達だけの輝き。それが何なのか。どんな形をしているのか」

ずっと問いかけ続けてきたもの。実体のない漠然としたそれは、一体どこから現れるのか……。

「私たちが見たこと、心を動かされたこと、目指したいこと。その素直な気持ちの中に、輝きはきつとある！」

それが今、ようやくわかったのだ。

「皆、信じてくれてありがとう！」

千歌は信じているみんなへ、自分を信じてくれたことへの感謝を伝えていた。

そうしてハイタッチを交わしていた彼女たちの視線には、客席からは見えない別の景色が広がっていることだろう。

第58話 全力の果てに

地区予選の行われたステージ上では、大勢のスクールアイドルたちが発表の時を今か今かと待ちわびていた。後日発表ではなく、リアルタイムでの投票で決勝出場校を決める。以前とは違うそのシステムのせいなのか、会場全体が緊迫とした雰囲気にも包まれている。

さつきまでの熱狂も消え失せ、今はただ静かに……発表の時を待っている。

「知れでは皆さん、ラブライブファイナリストの発表です！」

スピーカー越しに響き渡る司会の声と共に、目の前のモニターが起動する。そしてここに集まった16グループの投票数が映し出された。

「決勝に進めるのは3グループ……！」

鞠莉は呟きつつ、目の前のモニターに視線を固定する。

「お願いー！」

曜も祈るようにして見つめる。

誰もがそうだった。自分達を信じてやってきた。後は、どれだけ魅了投票されたのか……
それだけなのだから。

金、銀、銅の枠にグループ名が書きだされる。そこにAqoursの名は――

千歌たちの場所にスポットライトが当てられた。

「千歌ちゃん！」

曜はモニターを見上げる千歌に抱き着いた。しかし彼女は反応せず、ただじつとモニターを見つめているだけ。

それも情報の処理が追いつかないからだろう。だって、A q o u r s はトップに書かれているのだ。つまりは1位通過。最も投票数が多かったという事なのだから。

「やったの……？ 夢じゃないよね？ ハッってならないよね？」

今この瞬間が夢だと思うくらい、彼女は嬉しいのだ。あの時は果たせなかったが、今は違う。この場所に立って、切符を手にした。それがまるで夢に見るような光景だと思えるくらい、輝いていた。

「ならないわ」

「ほんと？ だって決勝だよ、ドームだよ？ ほんとだったら奇跡じゃん！」

周りに目を向ければ、果南たち3年生や花丸たち1年生も、嬉しさに笑みを浮かべている。

「奇跡よ。奇跡を起こしたの。私たち……」

今まで奇跡を追い求めてきた千歌。しかしその彼女が信じられないと思うくらいの奇跡が、今ここで起こっていた。……いや、起こしたのだ。

会場を後にしたA q o u r sは、しばらく外で語り合っていた。未だその実感が湧かない、高揚感が抜けきらないというのが現状だ。だが、あれほど大きなことを成し遂げただけだからそれも仕方ないと言える。

「緊張で何も喉に通らなかつたずら〜」

なんて言いながらも、花丸はパンを食べている。その光景には善子もツツコまざるを得ない。

「嬉しくつて……私もう、涙が止まんないよ〜!!」

「どんだけ泣いてんのよアンタは!?!」

「だつて〜!」

それは珠冬にもだった。彼女は、集まつてからずっと涙を流しているのだ。いつまで泣いているのだと善子も言つてはいるのだが、満更でもなさそうだった。そんな珠冬はずっと泣いているためなのか、ルビイはティッシュを手渡していた。

一方、一真の方も曜に何やら詰め寄られていた。

「カズくんも泣いてたんだって？ 珠冬ちゃんに聞いたよ〜」

「は!?」泣いてないし。そんな時は目にゴミが入っただけですけど〜?」

傍から見ればしようもない問答であった。しかしそんなしようもないやり取りでも、当の本人たちは楽しみにやり取りを交わしていた。そんな会話中、一眞の言い分に曜は目が赤いとどの指摘をする。

「……………目擦ったんだよっ!」

そんなバレバレな嘘など通用せず、曜は悪戯っぽい笑みを浮かべて深く詰め寄ってくるのだった。

「お前……………性格悪いぞ。痛ッ、怪我人を叩くなっっておい!」

それぞれが決勝進出での喜びを嘯みしめている中、果南は「アキバドームかあ」と呟いた。未だ想像できぬ場所であると同時に、以前3人で行こうと思いつた場所だ。それが2年の時を経て実現するのだ。彼女には様々な思いがあるのだろう。

「どんな場所なんだろうね」

同じく千歌も、その会場に想いを膨らませる。全国から勝ち抜いてきたスクールアイドルが頂点を決める場所。最大のステージから見る景色は、輝きは、一体どんなものなのだろうか。

「いい曲をつくりたい！」

「ダンスも、もつともつと元気にしよう！」

梨子も曜も、それぞれのできることを最大へと引き上げて臨みたいと語る。決勝に行つて輝きたいという気持ちは誰もが同じだった。

すると、ルビイの呼びかけに全員が反応する。彼女の先にある街頭モニターには、ほどのAquorsのパフォーマンスが映し出されていたのだ。その再生回数は既に4万を軽々と超えている。

「生徒数の差を考えれば当然ですわ。これだけの人が見て、私たちを応援してくれた」
歓喜の声を上げる中、ダイヤはそう言った。確かに生徒数ではこちらが不利であったのにもかかわらず、1位通過という形に収まったのは、多くの人々がAquorsの存在を認知し、応援してくれたお陰だと言えよう。

ならばと、千歌は振り向いて鞠莉に問いかける。これだけの人々に知られ応援されたのであれば、入学希望者も増えているはずなのでは？ と。他の皆も、期待を込めた眼差しで視線を向けた。

が、鞠莉は何も答ええない。否、応じていないのが“答え”となっている。「まさか」と

考えたくもない結果が頭に浮かぶ。

「携帯、フリーズしているだけだよ。昨日だっていくつか増えてたし。まったく変わってないじゃないって……」

徐々に弱くなっていく鞠莉の声。そこには、いつもお転婆な鞠莉の姿はなかった。サイトや携帯がフリーズしてる……そうあってほしいという願望は、ただ現実から目を背けているだけでしかない。けど、そうなりたくもなる。ラブライブ地区予選を通過し、決勝に臨めるというのに……こんな仕打ちはあんまりだ。

「鞠莉ちゃんのお父さんに言われている機嫌って、今日までだよ？」

「大丈夫、まだ時間はありますわ。学校に行けば正確な数は分かりますよね？」

「……うん」

この状況でも冷静なダイヤは鞠莉に確認した。いや、こんな状況だからこそ、彼女は冷静でいなくてはいけないと思っている。

そんな一転した重々しい空気間の中に、千歌の声が響く。雰囲気とは逆の明るい声で彼女は言った。「帰ろう」と。

くく

浦の星に帰ったのは20時を越えたころだった。しかし、時間なんて気にする程余裕などない彼女たちは、すぐさま理事長室で入学希望者を確認する。

「どっつ?」

「……変わってない」

先ほど携帯で確認したのと同じ。現時点での入学希望者の数は80人。あと20人の希望者がいなければ、浦の星は統廃合が決定する。

「そんな……」

「まさか、天界の邪魔が!」

善子はいつもの調子だ。でも、そんな天界のせいになりたい気持ちも確かにあるが、誰も口には出さなかった。

そんな中、あと4時間しかないと果南が告げる。

「Aqoursの再生数は?」

ライブ映像はずっと伸び続けているとルビィが鞠莉に伝えると、彼女はもう一度父親と話すために理事長室を後にした。

増えない希望者数と反し、ライブ映像の視聴回数はすさまじい勢いで増えていく……。どうにも消化しきれない複雑な感情が全員胸中に蠢く中、時計の針は21時を示していた。

「遅いな、鞠莉さん」

「向こうは早朝だからね。なかなか電話が繋がらないのかもしれないし」

秒針の動く音が妙に鼓膜へと響いていた理事長室内で、ようやく会話がなされた。鞠莉が電話をしに行ってから約1時間。それまでの間、誰も話そうとすることは無かったのだ。

「Waitingだったね」

扉の開く音共に、鞠莉の声が聞こえてきた。ようやく話が付いたのだろう。誰もが出た答えを知りたくて、彼女へ視線が集まっていく。

千歌が聞いたところ、父親とは話せたようだ。決勝に進み、再生数も凄いことになっている。でも、聞きたいのはその先だ。

「何とか明日の朝までは伸ばしてもらいましたわ」

「朝……ですか？」

「ええ。日本時間で朝5時。そこまでに1000人に達しなければ、募集ページは停止すると」

目を伏せてしまった鞠莉の代わりに、ダイヤがそのように説明してくれた。正真正銘、これが最後のチャンスとなるだろう。

「でも、あと3時間だったのが8時間に伸びた」

十分可能性は残っていると励ます千歌の隣で、パソコンを見ていたルビィと珠冬が声を上げて立ち上がった。

「今、入学希望者が増えたんですー」

そう言って画面を見せると、人数は86人になっていた。1時間近くで、6人もの人が希望してくれたのだ。その様子に「やつぱり、私たちを見た人が興味を持ってくれたのよ」と梨子が言った。まだ結果は分からない。まだ終わってないという事だ。

「このまま増えてくれれば……」

曜が呟いていると、千歌が駆けだした。

「どっ行くのよー」

善子が呼び止める。

「駅前。浦の星、お願いしますってみんなでお願ひして、それから……」

「千歌、気持ちはおわるけど時間が時間だ。人がいねえ」

焦る千歌をそう言つて一眞が止める。残念だが、今駅前に行つたところでどうにかなるとは思えない。仕事帰りの人ならいるかもしれないが、それも無理があるだろう。

「じゃあ、今からライブやろう？ それをネットで——」準備している間に朝になつちやうよ」

さらに案を出そうとする千歌に、曜は抱き着いて落ち着かせる。

「大丈夫、大丈夫だよ」

「でも……なにもしないなんて……」

何かしたいという気持ちは痛いほどわかる。みんなだつて同じ気持ちだからだ。でも、もうどうこうできる時間なんて残されていない。だから——

「信じるしかないよ。今日の私たちを」

果南の言葉に、千歌はメンバーやマネージャーたちに視線を向ける。彼女の目に映つていたのは、信じようとするみんなの強い眼差しだった。この部屋にいる誰もが、今日の自分達、そして見て見えていた彼女たちのことを信じているのだ。

「そうだよね。あれだけの人に見てもらえたんだもん。大丈夫だよね」

ようやく落ち着きを取り戻した千歌も、それを感じた曜も離れる。すると、ダイヤか

ら声がかかった。「そうとなったら皆さんは帰宅してください」と。しかし「帰るずらか？」と花丸は不満そうに尋ねた。

「なんか1人でいるとイライラしそう……」

「落ち着かないよね」

「確かに。気になるもんな、希望者の数」

誰もがここの残つて見守りたいと意思を露わにする。自分も同じだったのだろう。ダイヤは「仕方ないですわね」とここに残ることを許可してくれた。ただし、親と理事長の許可があれば、だが。

「勿論、みんなで見守ろう」

後者に至っては聞くまでもない。

さらに両親たちの許可も取れたとのことで、全員が学校で見守ることとなった。信じられる彼女たちの雰囲気に乗じて、また1人、入学希望者が増えたのであった。

「あれから1人も増えない……」

それから4時間が経過したが、まったくと言っていいほど増える気配がなかった。深夜でもあるし仕方ないと思うが、それでも今日の5時までが期限だ。悠長に構えては

いられないのだ。

「やっぱりパソコンが壊れてるのよ！」

善子はルビィからパソコンを奪うと、上下に振り始める。「昭和の家電じゃないんだから……」と珠冬も止めに入るが、聞こえていないようだった。

「Stop. 壊れていないわ」

「これが現実なのですわ。これだけの人が浦の星の名前を知っても……」

「例え街が綺麗で、人が優しくても、わざわざここまで通おうとは思えない」

ダイヤや果南が言っていることも理解できないワケではない。寧ろ誰だつて便利な方に、賑わっている方に行きたいだろう。だがそんな現実が、今はちよつと恨めしい。

誰もが果南やダイヤの話に耳を傾けていると、どこからか音が聞こえた。

「そう言えば、お昼食べた後何も食べてなかったわね！」

梨子は恥ずかしさを隠すためか、妙に声を張り上げている。でも彼女の言う通り、何も食べていないのも事実だ。一眞は行ってこようと立ち上がったが、今回は1年生たちが買つてくると言い出したため、彼女たちに任せることとなった。

「まったく、世話が焼けるつたらありやしない。こっちはリトルデーモンのもので手一

杯なんだから」

ガサガサとレジ袋の音を立てながら、善子たちは歩いていった。

「仕方ないすら。今のAqoursを作ったのは千歌ちゃんたち2年生」

「その前のAqoursを作ったのはお姉ちゃんたち3年生3人だもん」

花丸に続くようにルビィも口を開く。

「責任、感じているすらよ」

「そんなもの感じなくてもいいのに……少なくとも私は感謝しか……」

ふと漏らした善子の本音。責任など感じなくてもいい。変わった人がいたのは、自分
は自分のままでいいと思える場所があったのは、紛れもなく千歌たちや3年生たちのお
陰だからだと。

善子は自分が何を言ったのか理解すると、すぐに後ろを振り向く。そこには微笑みを
浮かべる花丸やルビィの姿が。

「リ、リトルデーモンを増やすためにAqoursに入っただけなんだし!」

「私も感謝しかないよ。みんなと出会えて、今こうしていられるのはAqoursのお
陰なんだし」

紛らわしている善子に、珠冬は抱き着きながら自分も同じだと打ち明ける。

「だからマル達が面倒見るすら。それが仲間すら」

「だね。何かいいな、そういうの。支え合ってる気がする」
ルビイたちは夜空を見上げた。そうしていると、深夜のちよつぴり冷たい風が頬を撫でた気がした。

その後彼女たちは、買ってきたおでんの具在のどれをあげるか……なんて話をしながら帰っていくのだった。

「94人……」

「あと6人……時間は？」

「……1時間もない」

パソコンの前で希望者数を見つめる彼女たち。僅かながらも増え続け、あともう少しという所なのだが同じくして、残された時間も残り少なかった。

待っているうちに朝日も登り、澄み切った空が広がる早朝。現実から切り離されたかのような空気感の中で、千歌たちの声が響いていく。

良い所だと、いい子ばかりだと、後悔させないぞと叫ぶ果南や千歌、曜。そして3人に続いて「私が保証する」と叫んだのは、転校してきた梨子だった。そんな彼女たちの

姿をフェンス越しから見ている一眞は、ふと呟いた。

「いいトコだよ、ホントに……」

そんな時、理事長室の窓からルビイの声が聞こえ、4人は急いで戻っていった。

「あと3人!!」

刻々と迫る時間、それと同じくして増える希望者の数。心臓の鼓動が早くなる。頼む

……その一心で。

「……98!!」

大丈夫、絶対に届く。そう信じている。奇跡はまた起こると、全員が息を凝らして見守っていた。

——届く……! 98人

——届く……! 98人

——届く……! 98人

募集終了

無慈悲にも、サイトにはその4文字だけが表示された。

驚くほどあつけなく、迅速な切り替わり。そしてそれは、浦の星の統廃合が決定したという事を嫌でも理解させられる。

「時間切れですわ」

「……そんな、あと1日あれば……ううん、半日でいい。1時間でも……それで絶対——」

「何度も掛け合いましたわ。一晩中、何度も何度も……。ですが、もう2度も期限を引き伸ばしてもらっているのです」

本来であれば、ここまで無茶を通してくれたことの方が異例なのだ。これ以上は無理だと、ダイヤは言った。さらに続くようにして鞠莉も

「いくらパパでも、全てを自分1人の権限で決める事は出来ない。もう限界だって……」
すでに統合の手続きに入っているだろうと。遂に迎えてしまった約束の時間。彼女の大きな目標「廃校阻止」は叶わなかった。その受け入れがたい現実は、みんなの心を締め付けていく。

「だめだよ。だって私達まだ足掻いてない。精一杯足掻こうって約束したじゃん！」

まだ手立てはある筈だと、ここで終わらせたくないと叫ぶ千歌。しかし

「やったろ、全部……」

「そして決勝に進んだ。私たちはやれることはやった」

やれることは全部やった。足掻いて足掻いて……決勝に進んだ。そのやり尽くした結果の果てに、この“廃校決定”に至った。

受けれ難いが……もうここまでだと。

「じゃあ何で、学校がなくなっちゃうの……学校を守れないの……そんなの……そんなの……」

今彼女の内にあるのは、全部やったのに何故学校が無くなるのかという、やり場のない憤りと悔しさだ。

見ていられなくなった鞠莉も、もう一度父親と連絡しようと思いき出すが、ダイヤと果南に止められる。これ以上の無理を言えば、今度は鞠莉自身が理事長をやめるように言われてしまうからだ。

受け入れしかないのだ。学校は……無くなるのだと。

くく

その日、全校集会にて正式に統廃合することが決定したと告げられた。壇上で話す鞠莉を見ていられず、一眞は目をそらしてしまふ。

悔しさもあるが今はどちらかと言うと、どうすることもできない無力感や虚無感の方が大きかった。

決勝進出については、クラスのみんなが応援してくれている。でも今は、それを考えることはできない。しかし内心ではそう思っている。実際には本音とは逆のことを言うことしかできないのだが。

その日の夕方、沼津の練習場に集まったAquours。廃校は阻止できなかったが、ライブは待ってくれない。

「55, 000のリトルデーモンが待っている魔窟だもの！」

「みんな善子ちゃんのスベリ芸を待ってるぞら」

「ヨハネー！」

相変わらぬのやり取りに少しだけ救われる。すると、手を挙げたルビィから「3年生はこれが最後のラブライブだから、絶対に優勝したい」と強い意気込みを語った。

「じゃあ優勝だね！」

「そんな簡単な事じゃないけどね」

「でも、そのつもりでいかないと」

俯く千歌に、梨子は声をかけた。優勝を狙って突き進もうと。

そして始まった練習。そんな時にふと脳裏に過つていくのは、あの光景だった。パソコンに表示された98人という希望者の数。5時を指そうとする時計の針……。そして何よりも明確に出てくるのは、募集終了というあの文字だった。

届かなかった時の想いと、今まで押し込めていた感情が、いつの間にか千歌の頬を伝っていた。

「今日は、やめておこうか」

「え、なんで？ 平気だよ」

「わかってるよ。お前の気持ちくらい……」

やせ我慢で言っているのか、それとも気付いていないのか……どちらにしろ、千歌の感情は誰もが抱いているものだというのは確かだ。

「ごめんね。無理にでも前を向いたほうが良いと思ったけど……やっぱり気持ちが追い付かないよね」

「そんなことないよ。鞠莉ちゃんたち最後のライブなんだって、ルビィちゃんも言っていたじゃん。それに……」

「千歌たちだけじゃないの」

歩み寄った果南が、千歌にそう告げる。

「ここにいる全員、そう簡単に割り切れると思っっているんですの？」

前を向こう、ラブライブに集中しようと言っただけのもの、ここに居る誰もがそう簡単に割り切れることはできなかつたのだ。マネージャー2人も、何も言わなかつた。彼らも同じだったからだ。

「やっぱり、私はちゃんと考えた方が良くと思う。本当にこのままラブライブの決勝に出るのか、それとも……」

「自分の心に聞いてみて。千歌たちだけじゃない、ここに居る皆」

本当の気持ちはどうなのか。ここにいる全員に対して、鞠莉は自分の心に聞いてみるべきだと投げかけた。

あれから数日。私服姿の一真は、1人で海を見つめて考えていた。自分がどうしたからといって何かが変わるわけでもないとは思うが、それでも向き合えないわけにはいかないだろう。

「……………ん？ よっ」

砂を踏む音に気が付いた一真は、足音の方向に顔を向ける。するとそこには、私服姿の珠冬が立っていた。

「一真はどう思ってる、統廃合のこと？」

2人して海を眺めながら、おもむろに口を開く。

「……………正直しんどい。足掻こうって決めてここまで来たのに、廃校が決まっちゃった。……………何が足りなかったんだろう、どうすればよかったんだろうって考えちまう。何考えでももう遅いってのに、まったく……………」

胸の内から込み上げてくる感情をどうにか堪え、一眞は逆に聞いた。「お前はどんなんだよ」と。

「……私は、みんなよりもここに思い入れは少ないよ。そりやもう圧倒的に。でもさ、そんな短い間でも、確かに私はここにいた。だからさ、悔しいし寂しいなつて……」

波の音と混じり、彼女の鼻をすする音が聞こえてくる。彼女は「見るな」とでも言うだろうから、一眞は目の前の海だけを見ていた。

(もう一度お前と話したいよ……)

どうしようもない感情の中、一眞はあることを思い出していた。いつの日だったか、和哉と……いや自分の記憶の欠片と話した時のことだ。思い出してみると、彼からは多くのヒントを貰い、背中を押してくれていた。

「俺が……お前の……っ!」

最後に言った言葉を思い出す一眞。すると何か合致したのか、一眞は立ち上がる。

「え、ちよつとどうしたの!?!」

「あいつに……和哉にまた助けてもらったよ」

珠冬に話す一眞の顔は、先程よりもマシな笑顔を作っていた。

—— 次回予告 ——

突如として内浦に降り立つ脅威。その恐るべき目的は……。

オーブ大ピンチ。

次回 Sunshine!! & ORB 「見つめる海」

目覚めよ、巨人！

第59話 見つめる海

考えがまとまった千歌。その足は、自然と学校の屋上へと向いていた。階段を登り切れば、曜が「おはよう」と声をかける。

「やつぱり、みんなここに来たね」

すでに来ていた梨子の言葉通り、ここに集まっていたのは千歌や曜たちだけではなかった。一眞を除いたスクールアイドル部全員が、この場に集まっていたのだ。

「結局、みんな同じ気持ちだってことでしょ？」

悩みながらも出した彼女らの想いは、一緒だったという事だ。

出場した方がいいというのは確かだ。しかし「学校を救う」ことは出来なかった。そんな中で出場し、そのうえ優勝したとしても……。

「でも、千歌たちは学校を救うためにスクールアイドルを始めた訳じゃない」

果南の言うように、千歌たち6人は別の目的もあつて始めた。

「輝きを探すため」

「みんなそれぞれ、自分たちの輝きを見つける為……」

——でも

「見つからない」

優勝しても学校は無くなる。奇跡を起こして、学校を救って、だからこそ輝けた。輝きを見つけた。ラブライブ決勝に進む原動力たるその目標が“学校を救う”だったのだ。

しかし、それが崩れ去った今では——

「輝きが見つかるとは思えない！」

千歌は叫んだ。阻止できなかった今の自分たちに、輝きなど見つけられる訳がないと。

「私ね、今はラブライブなんてどうでもよくなってる。私たちの輝きなんてどうでもいい」

今まで奇跡が起こると信じて走ってきた。目指したいことや、素直な気持ちの中に輝きはあるのだと感じた。しかし、一番起こってほしかった奇跡は起こらない。そんな中で自分たちが追い求める輝きなど見つからない。

「……学校を救いたい！ みんなと一緒に頑張ってきたここを……」

されど願う彼女の夢い思いが空気に溶けていこうとした時……

『じゃあ（だったら）救ってよ（くれ）!!』

突然、下の方から聞こえてくる多くの声は、彼女たちの悲しみに包まれた世界に切り込んでいく。

千歌が覗くと、そこには浦の星の……全校生徒が集まっていた。

「だったら救って!」

「ラブライブに出て……」

「優勝して!!」

よしみたちは声を張り上げて伝える。優勝し、学校を救つてと。

「できるならそうしたい。みんなともっともっと足掻いて、そして……」

「そして?」

「そして! 学校を存続させられたら……」

その後の言葉が出てこない。出そうとすると悔しさと悲しさで口元が震えてしまう。

「それだけが学校を救うって事?」

投げかけられた言葉に、千歌は目を見開く。希望者を増やして、学校を存続させようと足掻いてきた。しかし、それ以外にも方法があるというのだから。

「むつ達が言ってたぞ。みんなの気持ちは一緒だってな！」

下にいる一真も口を開く。千歌たちにどうして欲しいか、どうなったら嬉しいか……生徒たちの想いは一つだったのだと。

「ラブライブで優勝して欲しい！ 千歌たちのためだけじゃない。私たちのために！ 学校のために！」

「この学校の名前を残してきて欲しい！」

「学校の……」

ダイヤは何かを察したかのように呟いた。全校生徒の言わんとすること。やれるのは千歌たちだけ。千歌たちにはかできないこと。それは……

「浦の星女学院スクールアイドル、Aqours！ その名前をラブライブの歴史に、あの舞台上に永遠に残して欲しい！」

「Aqoursと共に、浦の星女学院の名前を！」

「だから……」

『輝いて！』

救う方法は1つではない。その名前を刻み込むことで、存在が、ここにあったという証は永遠となる。多くの人々の記憶に刻まれることになる。

それが学校を救うこと。浦の星の生徒から、A q u o r sへと託された想いだ。

「千歌ちゃん」

曜と梨子は、千歌を奮い立たせる“あの言葉”を投げかけた。

「や・め・る?」

「やめる訳ないじゃん。決まってるじゃん、決まってるじゃん決まってるじゃん!」

足をバタバタとさせせる千歌。みんなの言葉は、千歌の心にもう一度火を灯し、強い決意を抱かせた。

「優勝する! ぶっちぎりで優勝する!! 相手なんか関係ない。アキバドームも、決勝も関係ない! 優勝して、この学校の名前を……一生消えない思い出を作ろう!!」

もう普通怪獣とは言えない、千歌の力強い発言。

新たな目標へと向かって走り出そうとする彼女たちだったが、そんな時……空の一部

が歪み始めたのだ。その歪みは暗雲の渦となり、やがて中から巨大怪人が降りてきた。

白と黒の身体に、背中には黒く巨大な翼を持ったその外見は、まるで烏天狗のよう。

「なにアレ!？」

「まさか、墮天使の遣い……!？」

「そんなこと言ってる場合じゃないぞら！」

「でも妙ね……?？」

「どういうこと、鞠莉ちゃん?？」

地面に立つ存在を見つめるAqours。しかし、それを見た鞠莉は違和感を抱いた。それが一体なんのか曜は問いかける。すると、横にいたダイヤと果南も気が付いたみたいだった。

「鞠莉さんの言う通りですわ……」

「あの怪獣……動いてない」

そう。あの怪獣……否、魔人ともいうべき存在は、地面に降り立ったのはいいが一步も動いていないのだ。まるで何かを待っているかのよう。

「……!!」

「ちよつと一眞君!」

「むつたちは逃げるよ! いいな!!」

存在を目視していた一眞はむつ達に逃げるように忠告した後、魔人のもとへと駆け出していくのだった。

くく

魔人の下へと走っていく一眞。するとそこには以前に見た少年の姿があつた。金赤の短髪と緑の瞳。日焼けした筋肉質の肌。そしてこの場には似つかわしくない服装。

「久しぶりだな、オーブ」

「お前……プロキオ……だったか?」

獲物を見据え、衝動が抑えられないと言わんばかりの笑みを浮かべる異星人。彼もアオボシと同じように、自分^{オーブ}を狙う存在だ。

「なんでお前がここに……?」

「なんでって……オマエと戦う以外の理由が何処にあるんだよ。あのアオボシヒョロガキも失敗したみたいだしな。次はオレの番ってワケだ」

さも当然かのように答えるプロキオ。一眞はそこで話が見えてきたのか「成程……」と呟く。

「アレもお前が呼んだってことだな。そして、俺を誘き出した……」

「その通りだ。コイツは破滅魔人ブリッツブロット。オマエに倒せるか？」

後ろに佇むブリッツブロットを見上げ、笑みを浮かべるプロキオ。やはり、彼は純粹に戦うことを望んでいるようだ。しかし、その純粹さが逆に恐ろしく感じる。

「倒してみせるさ……必ず！」

オーブリングを取り出し、構える一眞。

「オレが一体化した場合でもか？」

その言葉に、一眞は固まる。クククツと笑いながら、プロキオは告げる。

「レグリオス星人ってのは怪物と一体化し支配する。勿論オレもできるんだぜ。こんな風にな！」

まるで光の粒子のように状態となり、ブリッツブロットの体へと入り込んでいく。すると頭部には王冠のようなものが出現した。

此方を見下ろしてくるブリッツブロットを睨み返し、一眞も光を解放させた。

「見て、オーブが！」

千歌たちもオーブとブリッツブロットの戦闘を目にする。

青い風を纏い、オーブスラッガーランスを突き立てるオーブ。しかし魔人はその攻撃を簡単に躲けていき、腹部を蹴り上げた。後退してしまうオーブへと、手の甲から放たれた光弾が襲い掛ってくる。それをスラッガーランスを巧みに扱って防ぎ、再度駆け出す。

己の武器で応戦するハリケーンスラッシュに、空を舞う破滅魔人。両者が衝突するたびに起きる暴風が、地響きが……内浦を襲い、海を揺らした。

「クッ……オーブスラッガーショット!!」

ブリッツプロッツに向けて投擲された2対のブーメラン。だがその攻撃も腕で払い除けられてしまった。

「ならコイツでえ！」

瞬時に己の姿を変え、ストリウムマイトで拳を叩きこんでいくオーブ。燃える拳を何度も叩きつけ、脇腹に蹴りを入れる。最初に彼と生身で戦った時は、圧倒されるばかりだった。しかし今は彼とも互角に渡り合えている。それも一真がここまで戦ってきた経験が活きているからだろう。

「……ッ！」

そして決め手として、地面を蹴り一気に加速。右腕を命いっぱい引き絞り、顎を捉えようと打ちだす筈が突如横から乱入してきた光線に撃ち落されてしまう。

「うああッ!？」

地面を転がるオーブ。撃たれた方向に顔を向ければ、そこにいたのは……なんとオーブだったのだ。

「What!？」

「なんで……」

「オーブが……2人!？」

「まさかドツペルゲンガー……?」

A q o u r s の面々ですら、その異常な光景に唾然としてしまう。以前にもオーブが2体いたという事があつたが、それとはわけが違う。撃ち出した光線は完璧にオーブへと向けられていた。これは完全なる悪意を持った故の行動。オーブを倒す為に送り込まれた……新たな敵だ。

スペリオン光線を撃ったオーブが擬態を解くと、黒のボディに金色の鬣、そして2本の角を頭に生やした姿となった。奴の名はババルウ星人。別名、暗黒宇宙人とも呼ばれる存在だ。

「なに、宇宙人……?」

そう呟くオーブを余所に、ブリッツブロッツ……もといプロキオはババルウ星人へ近づく。彼の性格から見れば、戦いを邪魔されたと思つているのだろう。破滅魔人の状態では喋ることができないみたいだが、その動きから予測できる。

「これはヴィルゴからの命令だ。オレも協力させてもらう」

察していたのか、ババルウ星人も手短かに伝える。ここで確実に仕留めたいとヴィルゴ

は思つてヤツを寄こしたのだろう。納得はいかないだろうが、余計に拗らすわけにもい
かないと判断したのか、ブリッツプロッツは首を縦に振りこちらを睨んだ。

(2体1、それにどつちも只者じゃない……完べきに殺しにきてるよな、コレ……)

眼前の敵を睨みながら立ち上がるオーブ。状況はこちらの方が圧倒的に不利だ。し
かし、こちらにも譲れないものがある。ヒカリにも宣言したのだ。あんな戦いを追い求
めるような戦鬪狂に、この星を、命を……易々と明け渡して堪るか。

「オオオオオッ!!」

己を蹴り飛ばすために伸ばした脚を往なし、2撃目は掴んで投げ飛ばす。瞬時に跳躍
し回転。ブリッツプロッツの頭部に手刀を叩きこんだ。再度迫ってきたババルウには、
首投げをかます。

しかし、ずっと攻撃をし続けられているわけでもなかった。2体の攻撃は着々とオー
ブの体力を奪っていく。反応も追いつかなければ、すぐさま容赦ない一撃が叩きこまれ
る。

「そらよッ!」

右腕に付けられたカッターと体術と織り交ぜて攻め立てられれば、持ち前の俊敏さも
相まつてこちらは回避に専念せざるを得なくなる。

「おいおい、どうした! さっきの威勢はどこ行つたんだよ!」

白銀に輝く刃が、オーブの脇腹を抉り裂く。

「があああああああつ!!」

ダメージを受けたオーブは、悶えながら地面に片膝をついてしまう。

(アイツ、速え……!!)

格闘センスに優れた的確な攻撃がオーブを苦しめる。だが、悠長に彼だけを相手にする場合ではない。空中からはブリッツプロツツの光弾が絶え間なく降り注ぐ。

「ハ」の………」

何とか光弾を交わすことに成功するが、ヤツが地面に降りてくると両手の鋭い爪を使つて切り裂こうと迫ってくる。

「いい加減に……しろー!」

瞬時に距離を離れたオーブは、すぐさまエネルギーを腕に回す。狙いを定め、腕をT字に組んで光線を発射した。

——誰が決まったと確信した瞬間、ブリッツプロツツは胸部にある十字部分を展開。なんと、内部の結晶体が光線を吸収してしまったのだ。

「……!?!」

そして光線を倍の威力へと変換し、こちらに撃ち返してきた。これを防ぐことができなかつたオーブは、声をあげながら後方へと飛ばされてしまう。

光線を倍の威力で反射してくる。初見ではまず見抜けないであろう能力。今まで見たことのない敵の能力に、誰もが驚愕する。

「へへへへッ、勝負ありって感じだな。オーブさんよ」

先のダメージのせいで、カラータイマーが遂に点滅を始めてしまう。フラフラと立ち上がるオーブを嘲笑い寄ってくる2体。

しかしそれでもなお、オーブはその体で構えをとる。

「はあ、お前頭がおかしくなっちゃったのか？」

勝ち目がないのにもかかわらず、未だ戦おうとするオーブを見てババルウ星人は嗤う。

「……言つてろよ。俺は……この場所を守る。こつから先は、一歩も……通さねえ！」

どんなに絶望的でも、彼は戦う。最後の力が無くなるまでは、ここからは一歩も退かない。そんな彼の強い意志を感じさせる。

そんな彼の背中を見たAquoursや浦の星の生徒たちも彼のことを見守る。自分

達に何ができるわけでもないが、それでも滅びに抗うことくらいはできるのではないかと。

だが彼の意思を無視するかのようには、ブリッツブロッツはオーブの首を掴み、片腕の爪をカラータイマーに突き立てる。ゆっくり、ゆっくりとその引き下ろす。その異物感、不快感や痛み、苦しみにオーブが声をあげた。

———
そんな時だった。

内浦の海から一筋の光が放たれた。太陽すらも霞みそうな強力な光に、A q o u r s、浦の星の生徒、敵対宇宙人、そしてウルトラマン……その場にいる誰もが目を奪わ

れた。

さらに、海を切り裂くようにして打ち上がる何本もの水柱。その輝きの中、なんと――

「海が……割れてる……?」

「Miracle……」

「な、なんだ!?!」

海が真つ二つに割れたのだ。本来ならばあり得ることのない自然現象。まさしく奇跡の所業……神の御業だ。ふたつに分かれた海の中に、光が1つ。その光は形を成し、人型へと変わっていく。その姿は、今誰もが目にしている彼と酷似していた。

「あれ……もしかして……」

「ウルトラマンずら……」

片膝を立てていた巨人は、ゆつくりと立ち上がる。地球の海を思わせる鮮やかな明るい青に走る銀のライン。胸元の金に縁どられた黒のプロテクター。こちらを見据える乳白色に輝く目。

地球が生んだ海の青き巨人、ウルトラマンアグル。こことは別の地球で、彼はそう呼ばれている。

ウルトラマンアグルはすぐさま跳躍。こちらに一回転で接近し、手から発射する光弾“アグルスラッシュ”をブリッツプロッツの手元に撃ちオーブを救出する。

「……………」

アグルの隣に並び立ったオーブは彼へと目を向ける。アグルはただ無言で頷き、オー

ブも頷き返す。言葉を交わさずとも、目的は同じ。そう心に直接響いたような気がした。

2人の巨人は構えると同時に駆けだした。この星を、この場所を守るために。

くく

「何だか知らんが、相手はこのオレだ!!」

腕のカッターをギラつかせて、アグルを切り裂かんと飛び掛かってくるババルウ星人を易々と躲す。攻撃を受け止めたかと思えば、そのまま胴体に掌底を打ち込む。

「おおっ!! 何をッ!」

ババルウ星人が駆けだそうとする前に、アグルは右腕を伸ばし牽制する。暫く睨み合

う2人。だが痺れを切らしたババルウが腕を振り上げてしまえば、カウンターで蹴りを2度も打ち込まれて地面を転がる。

身体に残る痛みと痺れに声を漏らしながら、立ち上がったババルウ星人は髪をかき上げる。アグルはその様子を見た後、手を使って挑発する。

「くっ……なんだと?! いきなり現れて好き放題しやがってええええ!!!」

どこからともなく剣を出現させ、アグルに向かつていく。対するアグルも右手から細長い刀身の光剣“アグルセイバー”を発生させて応戦する。

様々な武器を扱うことができ、どれを使わせても強力なババルウ星人の攻撃を、アグルは青い剣で防いでいく。胴や腕、首を斬らんと迫ってくる刃を素早い突きで打ち込み、剣筋をズラしていくのだ。精密でいて素早いアグルセイバーの切っ先が、ババルウ星人の手に遂に直撃。持っていた剣を後方へ飛ばされてしまう。

「へ、このおおおお……」

怒りに燃えるババルウ星人は距離をとって、左腕から光弾を放射状に放った。しかし放った光弾……そのコースがまずかった。射線上にあったのは……なんと浦の星。

「学校が!？」

千歌の叫びが聞こえる。このまま光弾が直撃すれば、学校は瓦礫の山と化すだろう。校舎すら残されずに消える……それだけは避けたかった。

その必死の祈りが通じたのか、アグルは学校の前に立って自らが盾となった。防ぐことはできているが、このままではアグル自身が危ない。今は無抵抗だと知ったババルウ星人も、チャンスと言わんばかりに紫色の光弾を撃ちまくる。胴体に直撃し、地面にも当たり爆発がアグルを包み込んでいく。

「へへへッ、そのままくたばっちゃまええええ!!」

一瞬の静寂が辺りを支配する。誰もが不安げな様子で煙を退くのを待った。煙の中にあるのは、倒れた巨人か……それとも——

「見て!」

その煙の中には——構えを保ったままのアグルの姿があった。

「なんでだ……このオオオオオ!!」

怒り心頭の様子で左腕を突き出したが既に遅かった。アグルは光を球体の形へと集約。腕を捻った後、手を開いた状態でスクリュー状の波動弾“フォトンスクリュー”を撃ちだした。

紫色の光弾はフォトンスクリューを止めるところか呑み込まれてしまい、一直線にババルウ星人の胴体に風穴を開けた。虫の息であるババルウ星人を確認することなく、アグルはその場を立ち去っていく。その後彼の後ろでは、巨大な爆発が起きるのであった。

く
く

拳や脚……そして光弾などの攻撃を往なし、回避していくオーブはその傍らでヤツの対処法に考えを巡らせていた。

光線を撃ちだせば胸元に吸収され撃ち返される。さらに、危険なのはあの爪だ。その爪でカラータイマーを引っ搔かれた時はなんとも言えない不快感を感じた。アグルの手助けもあり何事もなかったが、なかった時の場合を考えるとゾツとする。

するとそこに、駆け付けてきたアグルの飛び蹴りが加えられる。予想外の攻撃に、ブリッツブロットは後退してしまふ。

顔を見合わせ、協力して攻撃を加えていく2体のウルトラマン。アグルの蹴りから入れ替わるようにしてオーブの拳の乱発。そして決め手として、炎と水……それぞれのエネルギーを纏わせた拳がヤツの胸部を捉えた。衝撃に吹き飛ばされ、ブリッツブロットは地面に倒れこむ。

——しかし

「コイツ……まだピンピンしてんのかよ……」

結構なダメージを与えたと思っていたのに、ブリッツプロッツは起き上がったのだ。2人がかりでも倒れることのないそのタフネスさに、一真は顔を顰めてしまう。するとそんな時、あることを思い出したのだ。それは光線を吸収、反射された時のこと。

（そう言えば、アイツは俺の攻撃を吸収し反射した。……なら過剰に攻撃を与えればどうなる？）

何事にも限界がある。過剰に吸収しすぎるとそれが毒になることだってあるのは、一真も知っていることだ。

（この状況を打開するのは……これしか！）

この目論みが通用するかわからないが、これだけに賭けるしかない。そう判断したオーブは、突っ込んでくるブリッツプロッツの腹部を蹴り上げて後退。そして体全体にエネルギーを行き渡らせ……

「ツインダイナマイト……ブラスタ―!!」

全身から放たれた虹色の光線をブリッツプロッツ目掛けて放っていくのだった。当然ながら、ヤツは胸元の結晶体を露出させて光線を吸収していく。しかし、オーブはそ

れでも光線の発射を辞めない。許容オーバーになるまで撃ち込むために。

「腹一杯に……呑み込みまええええええええ!!」

ヤツも狙いに気付いたのだろう。苦し紛れに手の甲から光弾を放ち、光線の照射を中断させる。しかし時すでに遅く、許容量以上のエネルギーを貯めこんでしまったブリッツプロッツの動きは鈍くなってしまった。

「胸元にはエネルギーが溜まっています。そこを！」

すぐには動けないオーブはアグルに頼み込む。するとアグルは頷き、胸元へと攻撃を開始した。

光弾のアグルスラツシユ、握り拳を合わせて敵に撃ち出す光球“リキテイター”。そして、頭部のブライトスポットから光の刃を垂直に伸ばし、敵に向けて放つ必殺技“フォトンクラツシャー”を最後に撃ち込んだ。

すると激しいスパークと共に胸元の結晶体が破壊され、胸元には焦げて抉れたかのような跡が残るだけとなった。これで吸収能力は喪失。未だ動きが鈍く、さらに胸元を破壊されてダメージを追ったブリッツプロッツに、これ以上の手立ては無いに等しい。

(今だ……!!)

最大のチャンスに、最大の一撃を打ち込むためにオーブオリジンへと姿を変え、聖剣にエネルギーを貯めこんでいく。そしてアグルも全身のエネルギーを右腕へと集める。

「オーブスプリーム……カリバアアア!!」

気迫の声で叫ぶオーブと共にアグルも撃ちだす。左腕は腰で構え、L字に曲げた右腕から放つアグル最強の光線“アグルストリーム”を。

虹色の光線と青い激流が混ざり合い、威力を底上げして宙を疾走する。この場所やそこに住まう人々の叫びにも似た光線は、破滅魔人の胸元を見事貫いた。獣の如き断末魔を上げたブリッツプロッツは、その体を内側から爆散させていくのであった。

『ありがとうー!』

戦いの後、2人の巨人へと呼びかけているのは浦の星の生徒たちだった。2体は頷いた後、アグルはオーブの方へと顔を向ける。

「今回は助かりました。ありがとうございます」

通じているかわからないが、オーブは頭を下げる。実際、アグルの助けがなかったらここには立っていないかっただろう。

対するアグルは右手に小さな光を灯した。その光はふわりと浮くと、オーブのカラータイマーに吸い込まれるようにして入っていく。

「これは……貴方の力？」

胸元に手を置きながらオーブが問いかけるが彼は答えない。そして背を向けたかと思えば身体は徐々に透明に、そして端の方から粒子となって空気に溶けていく。もう時間なのだ。

「青いウルトラマンさーん！」

「学校を守ってくれて……」

「ありがとう!!!」

学校を自らが盾になってまで守ってくれた。彼が消えゆく前に、A q o u r s は伝えなかったのだ。アグルは振り向きぞしなかったが、頭が少しだけ動いたのだからしっかりと届いていたのだろう。

風に運ばれた青い光の粒子が、海へ帰っていくのだった。

くく

1日が終わりを告げようとする夕暮れ時。一眞は海を見ていた。手に持っているのは、青い巨人からもらった力が内包されているカード。

「あのウルトラマン……名前は何なんというのかな？」

隣にきた千歌は呟くようにして言った。人々を守り、学校を守った存在だ。誰だって名前を知りたくなる。

「アグル……。ウルトラマンアグル。それが彼の名前だよ」

「AGUL……造語かしら？」

「それより、どうして知ってるのよ」

聞いたこともない言葉だと鞠莉は不思議がり、それならどうして一眞は知っているのかと善子は尋ねる。

「そう言ってる気がした。なんでかわからないけど」

「ウルトラマン同士、通じ合ってるって事すら」

「そうかも！」

一眞はよくわかってないが、1年生たちはそれで納得しているようだ。本人を差し置

いているが、別にいいだろう。

「でも不思議だったわよね。あのウルトラマン」

「空からじゃなくて、海から来たもんね」

確かにこれまで出会ってきたウルトラマンの中では、何かが違うと思わせてくれる存在だった。確かに同じウルトラマンという括りであるのかもしれないが、今まで出会ってきた彼らとはまた違う感覚であったことも否定できない。

「それもそうだけどさ、どうも初めて見た気がしないんだよね。なんていうか……ずっと一緒にいたかのようなかんじ……？」

その言葉に、一眞はフフッと笑う。彼の反応が不服だったのか、果南は尋ねる。「何が可笑しいのさ」と。

「別に可笑しいから笑ったわけじゃない。ただ、やっぱりそうだよなって思っつて」

疑問符を浮かべる少女たちを余所に、一眞は口を開いた。

「アグルはさ、あれなんだよ」

彼の指さす方向にあるもの。それは浦の星からも見える、内浦の海そのものだった。

「……海？」

「そう、海。ずっと海は俺たちを……いや、みんなを見ていたんだと思う。そしてみんなが諦めなかったから、もう一度輝こうと決めたから……力を貸してくれたんじゃないか

な……」

一眞の話は、当に信じられるものではなかった。海が……もう少し大きな目で見れば地球が、そんな意思を持っているかなどわかる筈もない。ましてや人の声に答えたかどうかともわからない。地球に害する存在へのカウンターであり、ただ目的が一緒だったという見方だつてできるのだから。

「なにか理由でもあるの?」

そう聞かれたが一眞は「別に理由なんてないよ」と答え、「でも……」と付け足し

「そう……信じたいじゃないか」

確信はないけど、答えてはくれないけど、そう信じたい。それだけでいいと。

青い羽根が空を舞い、水平線へと向かっていく。彼女らは曇りなき目で空を、そして海を見つめている。そして彼女らと同じように、海もまた見つめてくれていることだろう。

第60話 A q o u r s、北の地にて

「ハハ、どハ？」

「何も見えませんわ」

吹雪吹きすさぶ地で、A q o u r sは歩を進めようと必死だった。しかし目の前は白一色で何も見えない。

「天は、ルビイたちを……」

「見放したずら」

さらには眠くなってきたとか言い出して、地べたに座り込む曜や梨子に「寝たらダメ」と呼びかけるのは覆面レスラーのような被り物をした千歌。一体どこで買ってきたのだろうか……。

「これは夢だよ……」

「そうだよ。だって内浦にこんなに雪が降るはずないもん」

「じゃあこのまま目を閉じれば自分に家で目が覚め——」

「ないですよ。何言ってるんですか！」

そろそろこのおふざけムードを終わりにしようと、珠冬が声をかける。だってここは

『北海道だもーん!!』

浦の星のスクールアイドル、Aqoursは現在北海道にいます。

「きたぞー！ 北海道お!!」

「はるばる来たね、函館！」

両腕をあげて喜びの声をあげる一眞の隣では、さも喋っているかのように先ほど被っていたマスクを動かす千歌の姿が見受けられた。

「まさか地区大会のゲストに招待されるなんてね」

決勝進出を決めたAqoursは、北海道の地区大会予選の観覧に呼ばれて来たのだった。とは言っても、まさかこのような形で北の地へと赴けるとは未だに信じられな

い。

「寒い……」

「曜ちゃん、もうちよつと厚着した方がいいわよ」

「ぶあつくしゅ!!」

その横で一眞は豪快にくしゃみをしてしまう。

「一眞くんにも言ったよ、厚着したほうが良いって」

「いや、こんなに寒いとは思わなくてさ……」

ある意味この地よりも冷やややかな視線を送る梨子に、一眞はバツが悪そうに答える。彼も初めての北海道に浮かれているのだろう。

それはみんなも同じなのかもしれない。善子は内浦と同じ靴を履いてきたわけだが、滑って尻餅をついてしまう。鞠莉やダイヤは雪用のブーツを履いてきたわけだが、滑らないことを証明するために隅に積まれてできたであろう雪山に登って見事に沈んだり……。

「おまたせずら〜」

花丸は厚着しすぎてて丸くなってしまっている。

「やつと温かくなつたずら〜」

すると服の重さに耐えられずに転倒してしまい、大玉よろしく転がりながらルビィや

善子、曜、珠冬を下敷きにしてしまった。着いて早々賑やかだなど、ドタバタを見ていた一眞は口元を緩めた。

「そんなこんなで地区大会が行われる会場に着いたわけだが、外には既に観客たちでいっぱいだった。」

「あ、Saint Snowさんだ」

「流石優勝候補ね」

会場内のモニターに映し出されているのは、今日出場するスクールアイドル。その中には勿論Saint Snowの姿もあった。

「あの……」

「Aqoursの皆さん……ですよね？」

すると見慣れない制服を着た少女たちが声をかけてきた。おそらく地元の学生たちだろう。あまりに突然だったので、千歌たちも間の抜けた声で返事してしまう。

「えつと……」

だが彼女たちには聞こえてない……気にしていない様子。寧ろ自分たちの問題で手

一杯と言った方が良いだろうか。もじもじとした様子から、意を決したかのように声を張り上げる。

「あの、一緒に写真撮ってもらっていいですか？」

「ちよ、ちよつとみ、みんな落ち着こう!？」

「梨子ちゃんが落ち着いて」

その後、一真が写真を撮ることになったのは言うまでもない。

「決勝に進むって凄いいことなんだね」

ルビイの眩きにみんなが頷く。決勝に進んだからこそ、遠く離れたこの場所にまで A q o u r s が知られ、ファンが増えたのだ。ラブライブの決勝へと進んだことがどういふ事なのか、それを考えさせてくれるいい出来事だったのかもしれない。

「失礼します。S a i n t S n o wさんは……」

「はい。あ、お久しぶりです」

控室にあいさつをしに行った A q o u r s。本番前に申し訳ないと謝るが、既に衣装

に身を包み髪をサイドテールにした聖良は快く受け入れてくれた。

「今日は楽しんでいってください。皆さんと決勝で戦うのはまだ先ですから」

「はい。そのつもりです」

その横で善子と花丸は屈んで聖良たちの方を見ていた……と言うよりは睨んでいたと言った方が近いかもしれない。

「もう決勝に進んだつもりでいるの？」

「凄い自信すら。と、ものすごい差し入れすら」

花丸に至っては机に置いてある差し入れを。善子はそんな差し入れを見つめる花丸の方をより強く睨んでいたが。

「また見せつけようとしてるんじゃない？ 自分たちの実力を」

果南はそう言って煽るが、聖良はそんなつもりはないようだ。それに、今のA q o u r sにそのようなことを言っても動じないとも。

「どう意味ですか？」

「A q o u r sは各段にレベルアップしました。今では紛れもない、優勝候補ですから」
聖良の言葉にはある意味の信頼と、負けたくないと呼ぶ両方の意味があるように感じた。

「あの時は失礼なことを言いました。お詫びします」

あの時とは、東京でのライブがあった時のことだろう。そのことについて、聖良は深く頭を下げる。

「次に会う決勝は、ラブライブの歴史に残る大会にしましょう！」

そう言って聖良は握手を求めてきた。すると奥の方で他のグループと談笑していた鞠莉と曜が囁く。

「ここは受けて立つところデース」

「そうそう」

同じスクールアイドル、そして優勝を目指すライバル同士……とてもいい関係だと思えるまでに成長している。千歌も手を拭いしつかりと聖良と握手を交わしたのだった。

「理亜も挨拶なさい」

先ほどから一言も発していないのは、聖良の妹である理亜。彼女は音楽を聴いているだけで見る気も起きないようだ。聖良は再度声をかけるが、彼女は反応を示さなかった。

「ああ、いいんです。本番前ですから……」

「……」

聖良とAqoursが話している中、ルビイは見てしまったのだ。理亜の重ねられた手が震えていることに。さらにそれはルビイ一人だけでなく……

「……………」

珠冬も同じくその瞳に収めてしまっていた。

すると聖良は「そういえば……」と千歌たちに疑問を投げかける。

「一眞さんはどうしました？ 先ほどから姿が見えないようですが……」

「あ!? え、えくと……」

「入れないって！ カ、カズくんも「流石に控室には入れないよ」って言って客席で待ってます！」

「あー！ そ、そう言えばそんなことを言ってたわね！」

「そ、そうなんですか……？ 確かに、それもそうですよね」

言い淀む千歌をフォローすべく、曜と梨子は捲し立てた。確かにスクールアイドルの控室に入るのは、彼本人がこの場に居たら断るだろう。

だが実際、それは土壇場で思いついた建前でしかなく……

「なんでこんな時に出てくるんだ!!」

真つ赤に燃える巨人の蹴りが、白い体に覆われた巨大生物の顔を蹴り飛ばした。地面を転がると巻き上がるのは土ではなく、真つ白な雪。

再度起き上がる怪獣の姿を見据えれば、雪が体に纏わりついているのではないかと思わせるくらいの白銀の毛皮。そしてマンモスのような牙と鼻。只でさえ銀世界な北の地を、一層氷漬けにしようとしている冷凍怪獣……名をマーゴドンと呼ばれる存在と対峙していた。

「くそ……寒いし強いしライブ見たいし……」

会場で写真を撮った後、なにやら怪獣と思しき存在の記事を携帯で見つけてしまった一真は、一目散に飛んできたという訳だ。

せつかくの北海道を早速ぶち壊したことに愚痴るオーブの目の前で、マーゴドンは全身から発する冷凍ガス「ステイファフロワー」をまき散らしながら迫ってくる。その極寒に対抗するためバーンマイトとなり、身体全体を炎に覆わせて攻撃を与えているのだったが、ダメージは期待できないのが現状だ。もう何度も倒され、踏みつけられたり

で身体はへろへろだった。

(脚が重たい……)

マーゴドンは地球のような熱源が有る惑星を見つけると、その惑星に降り立ち片っ端から熱エネルギーを奪い取る。そして星を氷漬けにし、死の惑星へと変えてしまうという恐ろしい宇宙怪獣だ。その体から発する冷気は、吸収した熱エネルギーを交換している。即ちバーンマイトの攻撃は、逆にヤツへ力を与えているようなものに過ぎない。

「また厄介な相手が出てきたもんだ……よっ！」

冷凍ガスを吹かし、蹂躪した後に残るのは氷漬けになった木々や地。吹雪など生ぬるいのだと嫌でも認識させれる。現れたのが深い山の中であつたことが唯一の救いかもしれない、もしここが街中であれば大惨事となつただろう。

(体全体に炎を纏つてたら多少はマシかなと思つてたけど……思つた以上にエネルギーの減りが早いな……)

胸のカラータイマーの点滅を見た一真は、すぐに纏つた炎を解除する。しかし、解除したら次は寒さで追い詰められていく。この極寒の地という場所自体が、ウルトラマンにとっては弱点になつているのかもしれない。何もしなくてもエネルギーが消費されてしまう以上、下手に光線を撃つたらこちらが死にかねない。

(くそっ……冷気をぶつ放すだけかと思つたら力も強いなんて……)

耳を広げ空を滑空。そのまま突進してくるマーゴドンを受け止め、オーブは唸る。その冷たく硬い感触を掌に感じながら、ヤツを投げ飛ばした。

(冷たく……硬い。なら衝撃には弱いはず……。オツケー、怪力でぶちのめしてやる！)
雪に覆われた地面を蹴りながら、オーブはその姿をサンダーブレスタターへと変化させた。攻撃を掻い潜り、アツパーや手刀、さらに蹴りを食らわす。だがその連撃も長くは続かず、マーゴドンの怪力に見事吹き飛ばされてしまう。

「ウオオオオオオオオ!!」

雪原から起き上がったオーブは天に向かって吼え、即座に肉薄する。爪で胴を切り裂いたかと思えば膝蹴りを見舞う。そうして物理的ダメージをマーゴドンの体に蓄積させていく。

「■■■■ツーー」

苦悶の声と共に首を揺らして怪獣が後退。チャンスと思いい懐へと入り込み、腕を突き上げた。

「デメエが凍つちまえ……デスシウム……フロストオー！」

拳を撃ち当てるとともに放たれた冷気は、体の内側から怪獣を凍らせていく。

(よし……!)

その様を見届けたオーブは腕を限界まで引き絞り、光と闇のオーラを纏わせた拳を

マーゴドンに向けて打ち付けた。するとヤツは強い衝撃に耐えられず、バラバラに砕け散っていくのだった。

「悪い、遅れた!」

その後、会場に到達した一真は急ぎ足で客席へと向かった。寒さと疲労で鈍くなった脚に鞭を打ちながら席へ向かうと、既にAqoursの皆や珠冬は席についていた。

「遅いよ!」

「そういうのは後でいくらでも聞くつて。それよりSaint Snowさんは……もう終わっちゃった?」

「いいえ。まだこれからですわ」

ダイヤの言葉に「ホントですか? いやよかつた」と安堵する一真。目にしておきたかった本命を見れないとあれば、あの怪獣を心底恨むところだった。

「いつまで突っ立ってんのさ。空いてるところに座りなつて」

「はいよ。ううさみつ……」

先ほどの寒さが抜けないのか、腕を摩りながら一眞は席に着く。そしてスポットライトがステージを照らすとともに歓声がより一層大きくなる。心を揺さぶるような激しいイントロから始まったSaint Snowの曲に観客の熱狂も頂点に達そうとしていた。

「It's showtime!」

そして彼女らは踊り始め――

く

「まさかあんなことになるなんて……」

「でも、これがラブライブなんだよね」

全てのグループの発表を終え、地区大会の順位が映し出されたモニターの中に、Saint Snowの名前は……なかつた。

まさかとも思えるかもしれないがこれが事実。しかもその光景を自身の目で見てしまったのだ。

「一度ミスをする、立ち直るのは本当に難しい」

「一歩間違えれば私たちもつて事？」

「そうずら……」

控室へと向かいながら、珠冬は先の光景を思い出す。ダンスの最中、2人はぶつかって転倒。その後どうにかして持ち直そうとしたが、動揺して歌えるわけもなく……。さらに気がかりなのは、最初に控室に入って見た彼女の――。

「……？」

そんな中、珠冬の視線に入ってしまう。思い悩むようなルビイの姿を。

その後、路面電車でホテルへと向かっているのだが、内部での彼らの雰囲気は実に重たいものだった。

控室に向かったのはいいものの既に2人の姿は無く、机の上も綺麗に片付けられていた。さらに残ったグループの話では、今日はいつもの2人ではなかったようだ。喧嘩していたという話もあるが、真意は本人たちにしかわからない。

「まだ気になる？」

「そりゃあな……」

電車内での雰囲気にも果南はそう切り出す。言わずもがな誰もがそうだろう。千歌たちに至っては本番前に顔を見せた仲でもあるし尚更だ。

「ずっと2人でやってきたもんね」

「それが最後の大会でミスして……結果まで」

やっぱり会いに行かなほうが良いのだろうか。そう千歌が言うのと、善子も無理に明るくした声で同意する。確かに彼女たちには彼女たちの時間が必要だ。今無理に会うこともないだろう。

「私たちが気にしても仕方のないことデース」

「そうかもね」

仲のいい2人の姉妹なら問題ないと、こちらが過度に心配することは無いと結論付けたところでようやく明るい雰囲気に戻りつつあった。しかしルビィだけは、どうにも煮え切らない感情を抱いてしまっていた。それは多分、自分にも通ずることなのかもしれないから。その無意識が、自然とダイヤへ視線を向けてしまう。

「……手、震えてた」

すると隣に座る珠冬が、ポツツと言葉を漏らした。それは控室で見た理亜のことだろう。

「え……珠冬ちゃんも見てたの？」

「見てたつていうか、見ちゃったつて感じだけど……」

無理やり作つた笑みをルビイに向けて語る彼女。だが理亞が何故手を震わしていたのか、その理由を知ることはこの2人にもできなかつた。

くく

「へへへッ……どこ行きやがった。オーブ……」

暗い道を1人で歩く少年の姿があつた。彼は足を引きずり、口からは血を流していた。しかし彼が浮かべているのは笑み。飽くなき戦闘欲を内に秘めた少年プロキオはオーブを探し歩いていた。

「いい戦いだつたが、オレはもつと、もつと戦いたいんだよ」

以前の戦いで敗北したプロキオだつたが、彼の戦意が消えることは無い。逆に敗北し

たからこそ、今度は負かしたいと思える。

生か死しかない、純粹な命のやり取り。その中でしか己の価値を見出せないのが彼なのだ。戦って、その屍の上に立つ。それでしか己の存在を感じ取れない。心が燃え滾るような熱さを感じ取れない。

「今回はこつ酷くやられたのね、プロキオ？」

無意識の内に耳へと入ってきた女性の声に顔を顰め、声の方向へ視線を向ける。

「テメエの寄こしたババルウ星人が碌に働かなかったからだろ。ヴィルゴ」

プロキオの憤慨すらも楽しそうに見ていたヴィルゴは「アンタが弱いだけでしょ」と一蹴する。

「そうかよ。じゃあ何しにきたんだ。オレを笑いに來るだけじゃないだろ」

「珍しい、今回は頭を使ったのね。まあいいわ。どうせあなたはオーブとの再選をのぞんでいるだろうから、コレをあげに來たの」

ヴィルゴは手に持ったカードを投げた。

「……あ？」

「そいつは前のヤツよりかは動きやすいはずよ。光線の反射とかはできないけど、劍術ならあなたも得意でしょ？」

「オマエは相変わらず腹ん中は見えねえが、今は感謝しといてやる」

「気を付けてね」

「チッ、思ってたねえだろうが」

ひらひらと手を振るヴィルゴには目もくれず歩き出したプロキオ。

彼の手に握られたカードには、黒をベースに金の装飾が施された体に赤く光る目。そして胸には青い光を宿す星人の姿が描かれていたのだった。

第61話 隠された想い

あのライブの翌日。予定通り、みんなで函館観光をすることとなった。しかし、一部は煮え切らない想いを抱えながらではあったが。

「何だかおいしそうな形ずらね」

「もう口に入れてるじゃん、花丸は」

五稜郭タワーから景色を堪能しているのだが、花丸はおいしそうな形に見えていたり、善子は超巨大リトルデーモンを召喚すると言っていたりして、初めて見るその形状の城郭に心躍らせていた。

「デカいな……」

初めて見るのは彼女たちだけではなく、一真もその1人だった。景色を見て目を輝かせているそれはまるで幼い子どものように。

「カズくん、写真撮って！」

「え、ちよっつ!？」

だが景色を長く観ることは叶わず、写真を撮ってもらうためだと袖を引っ張られ、曜に連れていかれるのであった。

「ハグウ……」

一方3年生組。全然平気だと果南は強がっていたものの、地上が見える透明な床に視線を移した瞬間、足がすくんだのか鞠莉にもたれ掛かってしまう。

等々……各々が楽しむ姿を見てルビイは笑顔になるがそれも一瞬であり、すぐに思い悩んだ表情を浮かべてしまっていた。

「落ち着くねここ」

「内浦と同じ空気を感じる」

「そっか……海が目の前にあって、潮の香りがする町で、坂の上にある学校で……」
「繋がってないようどこか繋がってるものね、みんな」

Saint Snowの母校を訪れ、景色を眺めていると千歌たちは浦の星との共通点を見出していた。そう言われてみればと、一真も学校と景色への視線を歩き来させる。冷たい空気と一緒に、潮の香りが鼻孔をくすぐり、坂を登れば学校がある……。確

かに、この場所の雰囲気はどこか似ていると思わせてくれる。

「おまたせずらく」

いい感じの雰囲気に包まれていたかと思つたら、着こみ過ぎてまん丸になつた花丸が歩いてきたではないか。それを見て、先の悲劇を思い出した数名は腕を突き出して声をあげる。

「またそれ、またそれなの!？」

「なんでまた着てくんのよ!」

「転ばないでよ……」

「それはフリずらかく?」

「違ーう!」という珠冬の声は届かず、またしてもルビィや善子、曜、珠冬は下敷きとなつてしまった。

「味を占めたのか……? 花丸、恐ろしい子……」

「学習能力ゼロなだけでは?」

辛辣なダイヤに一真はツツコまれるのだった。

その後も街中を歩きまわっていたのだが、ここは北の地。いくら着込んでいても身体は冷えてくる。

「寒いね〜」

「それじゃあTea timeにでもしますか!」

「さんせー!」

鞠莉たちの提案で体を休めることに。花丸も凍えまくっているようで声が震えているし、丁度いいタイミングだ。ではどこで休もうか……店を探して視線に入ったのは

「くじら汁?」

「渋い……」

くじら汁……みなみ北海道では正月の定番料理として定着していると、以前聞いたことのある名だった。

みんなが足を止めたのは、そのようなメニューの看板が張られた店。外観の雰囲気も昔懐かしい感じ……というものを感じさせてくれるが、一真には少し不思議な感覚だったに違いない。

「すいませーん」

店の戸を開けた千歌が声をかけるも、中からは返事がなかった。

「いやでも……」

「商い中つてありマース」

扉の横にかけてある看板を見た一真と鞠莉。だがそれよりも花丸は「とりあえず中に入れて欲しいすら」と懇願する。彼女も含めみんな寒いだろうし仕方ないだろうという事で、店内へと入っていくのだった。

最後に店内へと入ったルビイは物音でも聞いたのか、店の奥の方へと向かっていく。

「……ルビイ?」

その一部を目にしてしまった珠冬は不思議そうに首を傾げていた。

くく

「綺麗〜」

「すつごいおいしそ〜」

テーブルの上には綺麗に盛られたぜんざいが置かれていた。

「とても温まりますよ。どうぞお召し上がりください」

そう言って話すのは、なんと店の制服に身を包んだ聖良だった。彼女らが立ち寄ったここは聖良、理亜の実家兼店だということだ。お店の雰囲気、一眞は初めての物を見るようにキョロキョロしている。

「このおいしさ、天界から貢物!」

「おかわりずら」

別の地に来てても変わらない2人のやり取りは、先ほどの学校の話の思い出させてくれる。

「学校の寄られるかとは来ていましたが……でも、ビックリしました」

「せっかくなのであちこち見て回ってたんです。そしたら……」

「偶然ここを見つけて、そしたら偶然にも聖良さんたちのやってるお店でって感じです。

あ、あとおかわり貰っていいですか?」

数秒間のうちのどこに食べる暇があったのだろうかと驚く千歌たちとは別に、聖良は快く「はい」と言って器を受け取ってくれた。

「街並みも素敵ですね。落ち着いてて、ロマンチックで」

「ありがとうございます。私も理亜もここが大好きで、大人になったら2人でこの店を継いで暮らしていきたいねって」

窓から見える景色、そして今まで見てきた風景を思い出しながら梨子は感想を口にした。聖良が語った言葉には千歌たちと同じように、この街には特別な思い入れがあることを教えてくれる。

「残念でしたわね。昨日は」

そう切り出したダイヤ。きつと、彼女もずつと気にしていたのだろう。姉妹でスクールアイドルをやっている者同士として。

「いえ、でも——」「食べたらさつきと出ていって」

聖良が何か言おうとしたところで、理亞の言葉がすべてをかき消した。

それは褒められたものではないが、理亞からしたら地雷を踏みぬかれたのと同じ。こ
うも言いたくなる。

「ごめんなさい。昨日の事、まだ引つ掛かってるみたいで」

「そうですよね……」

厨房へと消えていった理亞の方に自然と目が行ってしまう。「まだ」というが昨日の今日だ。すぐに吹っ切るのは難しいはずだ。

「会場の方でもちよつと喧嘩してたみ——むぐつ!？」

「善子!」

ズバズバとモノを言ってしまう善子に向かって花丸はスプーンで口をふさぎ、珠冬は

頭にチョップを入れる。

「いいんですよ。ラブライブですから、ああいう事もあります。ですが私は後悔はしていません。だから理亜も、きつと次は……」

「嫌！ 何度言っても同じ。私は続けない。スクールアイドルは……：Saint S nowはもう終わり!!」

「いいの？ あなたはまだ1年生。来年にだってチャンスは……」

「いい。だからもう関係ないから。ラブライブも、スクールアイドルも」

まだ来年もあるという聖良に対して、関係ないと突き放した理亜は再度厨房へと消えてしまう。仕方ないとはいえ、先ほどまでの空気は完全に崩壊してしまった。

「未来ずらく」

そのまま空気を引きずってしまい、今は場所を変えてハンバーガシヨップに立ち寄っていた。花丸の食欲は留まることを知らないようで、「口に入らないだろ！」とツッコミたくなるくらい大きいハンバーガーに目を輝かせている。

「何も辞めちゃうことないのに……」

千歌たちは理亞の言葉を思い出していた。Saint Snowも終わりにし、ラブライブも興味ないと言い切ったこと。関わった時間は少ないが、聖良と共に高みを、優勝を目指していたことは知っている。だからこそここでやめるといふのは少し気になる。

「でも理亞ちゃん、来年からは1人になっちゃうんでしょ？」

「メンバーを集めてRestart——」

「と行くほど単純な話ではないでしょう」

「……私たちもそうでしたからね」

2年前のことと重なったダイヤも、一真と同意見のようだ。これまでやってきた形を崩し、新たなメンバーでやろうとするには当人の気持ちの整理が必要だ。かといってすぐにはできるわけでもないが。

「結局、ステージのミスってステージで取り返すしかないんだよね」

「でもすぐ切り替えられるほど、人の心は簡単ではないってことですわ」

「……自信、なくしちゃったのかな」

彼女たちは理亞の気持ちを推察していくが、ルビイはただ1人「違う」と答えた。

「お姉ちゃんと一緒に続けられないのが嫌なんだと思う。お姉ちゃんがいないなら、も

う続けたくないって……」

「あんた……」

「凄いずら……」

ひとしきりに話し、尚且つ彼女の内面を察していたルビイに、善子と花丸は目を見張る。

こうやって言葉を紡ぎ出していったのも、ルビイが一番彼女と近い存在だからなのかもしれない。何よりも同じスクールアイドルとして、そして3年生の姉がいる妹として。

「そよね……寂しいよね」

梨子が呟くように言うと、ルビイはふと我に返る。

「ち、違うの！ ルビイはただ理亞ちゃんが泣いて……あ……!!」

言っではいけないような事でも口走ったのだろうか。ルビイはそれから黙り込み、しまいには店外へと走り去って行ってしまった。

くく

「どんな感じなの？ お姉ちゃんって」

「うーん、どうだろ……」

改めて聞かれるとどう答えるべきなのだろうか、千歌は唸る。今回の聖良と理亞、ダイヤとルビイを見ていて何か思うところがあつたのだろう。

「あのなあ……勝手に入って、勝手に話を展開するなつての」

そしてその話は何故か一眞の部屋で行われているのだつた。だというのに、千歌や曜の方が部屋を占領しているという状態に彼は頭を抱える。

「うちはあんな感じだからあんまり気にする事ないけど……」

「話聞けって……」

「でも、やっぱり気になるかな」

一眞の声を余所に、千歌は姉という存在について語りだした。

「ほら、最初に学校でライブやったとき、美渡姉雨の中来てくれたでしょ？ 何かその瞬間泣きそうになつたもん。ああ、美渡姉だつて……」

普段は喧嘩し、からかい合つているところをよく見るが、心の底では信頼しているし、助けてくれる存在。姉妹というのはそういうものなのだろう。

「いいなー、私そういうのよく分からないけど」

「わたしもよくわからないよ。だってあまりにも自然だもん。生まれた時からずっとい

るんだよ、お姉ちゃんって」

生まれたころからずっと一緒にいる存在。だから改めて説明しようにも、当たり前すぎてどんな感じなのかはわからない。案外複雑なものだ。

「そんなもんかね……」

すると、「じゃあカズくんは憧れたりしなかったの？」と聞かれてしまう。「存在は認知してたのね」とは思いつつも、曜の問いに頭を働かせる。しかし、兄弟姉妹に憧れたことは無かったかもしれない。

「無い……かな」

「嘘だ〜」

「いやホントだって……あ、いやでも」

そこで一眞は目を細め、あることを思い出したかのようにして呟いた。

「兄に近い存在は……確かにいたかな」

自分の言った事、そして過去形であったことで少し空気が沈み込んでしまうと思った一眞は強引に話を終わらせる。

「まあ、俺のことは良いんだよ……ってか、なんでこの部屋に来たんだよ！ 自分の部屋に帰れって……!!」

そうして一眞は、再びため息を吐くのだった。

「私もわかるかも。ルビイの気持ち……」

「いきなりどうしたのよ」

ホテルの別室では、珠冬や善子、花丸が話していた。ちようど話題に上がったルビイは、行きたいところがあると言ってこの部屋にはいない。

「別に」

「なによ。勿体ぶらずに言いなさいよ」

「マルも聞きたいぞら」

はぐらかされたことが気に入らない善子の隣で、花丸は特大のハンバーガーを口に運びながら言った。ルビイのために買ってきたのだったが、本人が「いらぬ」と言っていたらしい。それを聞いて頬張る花丸を見て「フラグ立ちまくりね」と善子は不敵に笑っていたが、意味はよくわからない。

「やつぱりさ、ずつといたダイヤさん……ううん、お姉さんがいなくなるのって、すつごく寂しいことなんだと思うんだよね。一緒にスクールアイドルをやっていると尚更

……」

「へえ、あなたも言うわね」

「私にもいたからかな。私の場合には兄だったけど」

へへっと笑う珠冬。そう言えば、一真から兄のことも聞いた気がしたなと善子と花丸は以前の会話を思い出す。

「……ごめん」

「え、何で謝るの?」

いつかの会話を思い出せば、たしか彼女の兄はもうこの世にはいないとのことだ。無神経に聞いてしまったことに、善子は申し訳なくなつたのだろう。

「気にしてないって言うのは……ちよと違うか。でも大丈夫なのは本当だから。善子や花丸がそこまで気に病む必要はないよ」

珠冬のひと声で、善子たちにも笑顔が戻る。そんな時、花丸の携帯が鳴つた。あまりに突然だったので、花丸は携帯を落としそうになりながらも耳に当てる。

「もしもし……。ルビィちゃん!？」

「どうやら電話の相手はルビィらしい。」

「うん。うん。……わかつたぞら」

ほんの数分の会話を終えた花丸は携帯を切る。すると善子と珠冬はも気になるのか、

花丸へと問いかける。

「なんだったの？」

「ルビイちゃん……マルたちに協力してほしいことがるって言ってたずら」

第62話 私たちの力

「お姉ちゃんがいなくても、別々でも……頑張ってお姉ちゃんの力無しでルビイが何か出来たら嬉しいんだって。きっと聖良さんもそうなんじゃないかな？」

「そんなの分かってる。だから、頑張ってきた」

「姉様がいなくても1人で出来るって、安心して……。なのに……最後の大会だったのに……」

「じゃあ、最後にしなければいいんじゃないかな？」

「歌いませんか？　一緒に曲を！　お姉ちゃんに贈る曲を作って、この光の中でもう一度……」

それが昨晚、ルビイが理亜に対して持ちかけた提案だった。姉がいなくても、妹一人で何かをなす姿を見せてあげられることが姉の幸せであり、安心させてあげられることだとは分かっている。

でも、それが出来なかった。姉に自分が独り立ちした姿を見せる最後のチャンスだったのに、自分の失敗のせいでその姿を見せることができなかったと。

だからルビイは提案したのだ。最後にチャンスにしなければいい。もう一度見せればいいのだと。曲を作り、光の中で姉たちに想いを共に伝えようと……。

（ ）

実はこの提案は花丸たちにも共有されていた。いつ、どこで、どうやって……何も決まってははいないけれど、ルビイの頼みだ。協力しないわけがない。すぐさま協力すると申し出た花丸たちは早速、理亞と待ち合わせ場所のハンバーガショップに向かったのだが……

「3人も来るなんて……聞いてない」

飲み物をプクプクとさせる理亞。ルビイとは協力するとは言ったが、さらに3人も追

加されていたのだ。彼女がこうも不満げになってしまうのも無理はない。

「ああでも、花丸ちゃんもいるし……ヨハネちゃんも頼りになるし……」

睨みを利かせた善子が視線の端にでも入ったのか、ルビイはヨハネと呼んでいた。3人が頼りになるとルビイは説得するが、理亞にとっては関係のないことだった。

「私、みんなでワイワイするの好きじゃないし」

当たり前ではあるが、まだ壁はあるみたいだなと珠冬は苦笑する。彼女自体、理亞とは話したことも無い。すると花丸は、「それを言ったらマルもそうずら」と理亞と思うことは一緒だと伝える。ついでに善子はもつと酷かったことも……。

「ずらっ？」

「これは……オラの口癖というか……」

「オラ……っ？」

テンパってしまい、隠していた口癖が次々に出てしまった花丸を善子がフオーする。

「ずら丸はこれが口癖なの。だからいつもルビイと図書室に籠ってたんだから」

A qoursの面々には既に馴染んでいて気にならないが、理亞は初めて聞いたことだろう。さらに加える形で、善子は花丸とルビイが図書室に籠っていたことも伝える。

「私も学校ではそうだから……」

どうやら、理亞も同じらしい。彼女の隠れていた面を見れたからなのか、ルビイたちの頬が緩む。

「意外な共通点……だね」

「善子ちゃんに至っては図書館どころか学校にも来な——」

その共通点が見つかったことが嬉しかったのか、花丸は善子の過去を語ろうとするも本人に止められてしまう。自分でも思い出すのが嫌なのだろう。

「イチイチ言わんでもええわーい！ てかヨハネ！」

「ごめんね善子ちゃん……」

「だからヨハネ！」

いつもの調子でやりとりを交わす3人。理亞はその姿を見て、学校でひとりぼっちだったのは自分だけではないと共感を覚えたのか、思わず笑みが零れる。この小さな共感が、彼女らの仲をぐっと縮めてくれた。

「私は負けない何があっても……」

「愛する人とあの頂に立って必ず勝利の雄叫びを挙げようぞ」

その後理亞が作ってくれた詞を確認しあうルビイたち。読み終えた後の雰囲気能耐えられなかったのか、理亞は聖良が曲も詞も作っているのだと再び伝える。

「しっかし、捻りも何もないわよね。直接的すぎるっていうか」
「文句あるの？」

直接的なのは善子の伝え方もそうかもしれない。だがこれが逆に“変に気を使わない雰囲気”を作ってくれているのだから有難いことだ。

「善子だつて同じようなもんでしょ」

「なにを!? だからヨハネ」

「でもさ、これで曲のイメージはつかめた」

「そうすら」

善子をスルーし、どんな曲にしたいのかはわかったと珠冬。まだまだこれからだとルビイも理亞を励ます。しかし……

「あなた達ラブライブの決勝があるんでしょ？ 歌作ってる暇なんてあるの？」

「それは……」

確かに理亞の言う通りだ。年が明ければラブライブ決勝。あまり時間が無いのもわかってる。だが今は理亞とのことに集中したい。そんな葛藤をルビイは抱いていた。

「確かにそうだけど、このままで“ハイ終わり”なんて事にはしたくないでしょ？」

「珠冬ちゃんの言う通りすら。それにルビイちゃんは、どうしても理亞ちゃんの手伝いがしたいすら」

「……理亜ちゃんやお姉ちゃんと話してて思ったの。私たちだけでもできるところを見せなくちやいけないんじゃないかって。安心して卒業できないんじゃないかって」

理亜の望みを叶えるとともに、これは自分にとつても必要なことなのだどルビィは口にした。

そんな時、善子の携帯に……

「げっ、リリーだ！」

梨子からの連絡のようだ。ちなみに内容は

——どこにいるの？ もう帰る準備しなくちやダメよ

らしい。本来であれば帰る支度をしなくてはいけないのだが……

「今は冬休みすら」

花丸は慌てた様子なく、ある考えを伝えた。

「ここに残る？」

帰る間際、1年生組から伝えられたことに果南は思わず声をあげてしまう。

「理亜ちゃんものすごく落ち込んでたすら。もう少し励ましたいすら」

「ここに残るための理由をなんとかでつち上げて伝える。」

「泊る所は？」

「幸い、理亞のところには余裕があるみたいなので」

そこまで伝えると、「この際わたくしたちも……」とダイヤが提案しかけてきたのを慌てて制する一真。

「いくら何でも全員はまずいですって。ここはルビイたちに任せましょう」

「そう……ですわね……」

ダイヤの歯切れの悪い返事後、ルビイは彼女に駆け寄って「2、3日で必ず戻るから」と伝える。

「別にわたくしは構いませんけど？」

そう言ってダイヤは口元のほくろを掻くのだった。そして千歌も……

「いいんじゃないの。1年生同士で色々と話したい事もあるだろうし」

残ることを了承してくれたのだった。

4人のいない帰りの飛行機の中で、ダイヤの震えた声が聞こえてくる。既にルビイたちのいる函館の地は雲の下だ。

「ルビイ……」

「何か気に入らないことでもしたんじゃないの？」

何か理由があるように思えたルビイたちの動き。それをダイヤは悪い方向に考えてしまっているようだった。果南も冗談半分、真面目半分で問いかけてみる。

「そんなことっ！」

機内での大声量に、他の乗客や客室乗務員が反応してしまう。メンバーと別れてSaint Snowの家に泊まったことから、鞠莉とはある仮説を打ち立てた。それは彼女たちで“Saint Aquours Snow”を結成するのでは？ というものだった。そんなことを言われたダイヤは、またしても機内で不安を爆発させてしまう。

「It's joke……」

鞠莉も揶揄うために言ったみたいで、ここまで本気にするとは思っていなかったのだろう。すると後ろの席から千歌は「そんなことじゃないよ」とダイヤに伝える。

「多分アレは……」

「アレは……?」

「言ーわない! もう少ししたらわかると思うよ」

何かを察している千歌にお預けを食らったダイヤの不安の叫びが、またもや機内に響くのであった。

くく

「ここが理亞ちゃんの部屋？」

「好きに使っていいけど、勝手にあちこち……」

理亞の部屋に案内された4人は、周りをぐるりと見渡していた。目の前の理亞の忠告など、耳に入っていないだろう。

「うわぁ……綺麗ずら」

そう言って花丸が手に取ったのはスノードーム。それを見た理亞は慌てて花丸から奪い去る。「勝手に触らないで」という彼女の言葉には、何か秘めた想いがあった。た。

「雪の……」

「……結晶？」

顔を見合わせた善子と珠冬が理亞に問いかけると、彼女はスノードームを大事そうに抱えてとある思い出話をしてくれた。

「昔、姉様と雪の日に一緒に探したの。2人でスクールアイドルになるって決めた……」

あの瞬間から、雪の結晶をSaint Snowのシンボルにしようって……」

スノードームを柵に戻し、胸の奥から込み上げてくるものを堪えながら話を続ける。

「それなのに……最後のラブライブだったのに……」

そんな彼女にルビィは優しく「綺麗だね」とだけ伝えようと、理亜もいつもの調子を取り戻す。

「当たり前でしょ。姉さまが見つつけてきてくれたんだから。ほら、あなたの姉より上でしょ?」

「……っ! そんなことないもん! お姉ちゃんはルビィが似合う服、すぐ見つけてきてくれるもん!!」

「そんなの姉さまだつたらも……っつと可愛いの見つけてくれる!」

「そんなの……!!」

姉自慢が激化していく光景を前にし、善子や珠冬……さらにはルビィのことを良く知る花丸まで目を丸くする。

「こんな強気なルビィちゃん……」

「初めて見た!」

珠冬も無言で頷くばかりである。

「ホント姉の事になるとすぐムキになるんだから」

「それはお互い様だよ……」

「そうかも」

ルビイの返しににこりと笑みを浮かべる理亞。

同じ妹同士でも、性格は違う2人。しかしだからこそ、笑顔で認め合う間柄になっているのだと言える。

「皆さん……本当に戻らなくて平気なんですか？」

店の制服姿の聖良に聞かれ、善子と花丸が対応する。他のメンバーに頼まれてどうしてもやらなければいけないことがあると。騙すように申し訳ないが、真実を言うわけにもいかない。

「そうですか……」

「こちらこそ、急に押しかけて来てしまってすみません」

「いえいえ、うちは全然平気なんですけど。では、ご飯が出来たら呼びますね」

それだけを言い残し、部屋を後にする聖良。

だがそれよりも、善子の見せた対応にみんなは驚いていた。

「善子ちゃんが……」

「ちゃんと会話してる……!?!」

「これはびっくり」

「ヨハネ！ これは仕方なくよ。あんた達に任せておけないし。……墮天使はちゃんと世に溶け込める術を知っているのだ！」

「善い子の善子ちゃんだね！」

最後の珠冬の言葉を受け、善子は彼女の頭へ手刀を食らわす。以前の仕返しだろうか。

「みんな意外な一面があるずら」

「隠し持っていた魔道力と言ってもらいたい！」

普段から知っている仲でも、意外に知られていないような一面がそれぞれに隠されている。もしかしたら、まだ眠っているのかもしれない。

「でも、そうかも……」

「……え？」

「ルビィ最近思うの。お姉ちゃんや上級生から見れば頼りないように見えるかもしれないけど、隠された力が沢山あるかもしれないって」

ルビィのその言葉を聞いて、花丸は閃いたらしい。「何が？」とルビィが尋ねれば、彼女はピースサインを見せて答える。

「歌のテーマずら」

「(イ)を……(イ)う。どうっ？」

「だったら……」

ノートにペンを走らせ、作詞を進めていく2人。最初は5人でやっていたが、善子、花丸、珠冬は力尽きたのかベッドで眠っている。

「最後は……」

最後の一節をノートに書き終え、全体を見直していく。

「……うん、すごくいい！」

そうしてようやく歌詞が完成し、その喜びに声をあげる。

「うっさいー！」

なんて善子の寝言にびっくりするも、歌詞を完成させた喜びは大きいものだった。

その2人の喜び様をさっきの声で起きた珠冬が見て微笑んだのは、彼女だけの秘密だ。

そして残るのは、イベントへのエントリーだけだった。しかしそのエントリーの前に

は選考会があり、そこで相応しい内容か説明する必要がある。もしこの選考で落選してしまえば、姉たちへ曲を、想いを伝えることはできない。

「ルビイ、知らない人と話すの苦手……」

「私だって……」

あまり前に出て話すようなタイプではない2人にとって、このような場で説明するというのは少々辛いものがあるだろう。

「姉様がないのがこんなに不安だなんて……」

隣にいてくれたはずの“姉”はいない。それだけで不安になる。今までどれだけその存在に救われてきたのか……そんなことを思ってしまう。

珠冬が手元に視線を移すと、どちらの手も震えていた。まるで“あの時”のよう……。

「でもさ、自分たちで全部やらなきゃ」

「すべて意味がなくなるぞら」

「曲も自分たちで作ってきたんだよ？ なら出来るよ。ルビイにも理亞にも」

3人はルビイたちの手を優しく握ってあげる。

彼女たちのお陰で、不思議と渦巻いていた不安は消え去っていく。

「行こう、私たちだけで」

3人の友人に背中を押され、彼女らは一步を踏み出した。

中で審査を受けている2人を3人は外で見守っていた

「私達はスクールアイドルをやっています。今回はこのクリスマススイベントで遠くに暮らす別々のグループが手を取り合い、新たな歌を歌おうと思っています」

「大切な人に贈る歌を」

最初の方は少し不安もあったが彼女たちは勇気を出し、しっかりと伝え終えることができた。その姿を見た3人は思わず涙を流してしまった。

「善子ちゃん、何泣いてるずらあ……」

「花丸の方が泣いてるよお……」

「ずらあ……」

その時ふと視線を右にやると、自分たちのように窓の中を見つめる者がいた。

くく

結果、イベントの参加権を手にすることができた。しかし不安なのは「絶対に満員になる」と言ってしまったこと。こうも言わなければ合格にならないだろうという理亞の言い分もわからなくはないが。

「まあ、言っちゃったのなら現実にするまでだよ。それでね、さつき調べたらクリスマスライブに出るグループは……」

珠冬の調べ見つけたのは、クリスマスライブに出るグループはラジオで告知することができるという情報。

そして今がその収録だ。

「さあ今日は、クリスマスフェスうティバル出場者の……」

「Saint Aqours Snowです！」

「ド直球な名前すらね」

「北の大地、結界と共に亡者が蘇りし鐘が——ムツ!?」

「善子、今はそれNGで！」

善子の口を珠冬が抑えている間に、ルビイが告知を始める。

「クリスマスイヴにライブを行います！」

「よろしくず……じゃなくて、よろしくお願いするず……でもなくて、お願いしますずら

！……あ

結局、口癖を隠せないまま告知をしてしまう花丸だった。

「はあく失敗したずら……」

「大丈夫だよ花丸ちゃん」

「そうそう。気にすることなんてないよ」

花丸を励まししながら、収録スタジオを後にする5人。すると前方から歩いてくる制服姿の女子2人。

「あの2人……」

「確か選考会の時にも……」

「どなた……?」

「……クラスメイト」

言われてみれば、理亞と制服が一緒だった。すると理亞は、ルビイの背後へ隠れてしまう。

「どうして隠れるの?」

「だって……ほとんど話したことないし」

しばし訪れる沈黙の間。

それを破ったのは、ルビイの素直な一言だった。

「Saint Snowのライブです！ 理亞ちゃん出ます！」

「理亞ちゃん……」

「私たちも行つていいの？」

すると、クラスメイトの雰囲気も柔らかくなった。

「え、うん。それと……今更だけど、ラブライブ予選はごめんなさい」

この際にと、今まで言えなかったことを口にする理亞。対してクラスメイトはこちらこそごめんと謝る。嫌われているのかと誤解し、会場へ応援に行かなかつたことに。そして

「理亞ちゃんや聖良先輩がみんなのために頑張っていたのは知ってるよ！」

「Saint Snowは学校の……私たちの誇りだよ！」

応援には行けなかったが、それでも2人の頑張りは知っていた。そして2人は学校や生徒たちの誇りになっていたので。

「クリスマスフェスティバル出るんでしょ？ みんなも来たいって！ いい？」

それらを聞いた理亞には、もう涙を抑えることなどできなかつた。

（ ）
そしてイベント当日。その前にダイヤに伝えることがあると彼女を呼んだルビィ。ダイヤには“迎えに来てほしい”という名目で呼んでくれるように、鞠莉にあらかじめ頼んでおいたのだ。

「函館山の頂上に来るようにと言われたダイヤ。言われるがままにロープウェイに乗れば、なんとそこには聖良もいたのだった。

「どうして“ここ”なのか……疑問を持ちながらも頂上へと向かえばダイヤと聖良、2人にとって大切な妹たちが待っていた。

ルビィと理亞は互いの姉に、封筒を手渡す。

「これは……？」

「クリスマス……」

「プレゼントです！」

その文字からも、姉を想う妹の意思が伝わってくる気がした。

「クリスマスイブにルビィと理亞ちゃんでライブをやるの！」

「姉様に教わったこと全部使って、私たちが作ったステージで……」

「自分たちだけの力でどこまで出来るか」

「見て欲しい!!」

「あの……」

見つめ合う中悪いのだがと言わんばかりに、聞き覚えのある声の上の方から聞こえてきた。

「私のリトルデーモンも見たいって!」

「誰がリトルデーモンよ!」

上の階から姉妹たちを見つめるAqoursの姿が。まさかのサプライズに嬉しくなる。

「鞠莉さんが飛行機代を出してくれるってことで……」

「みんなでトウギヤザーだって!」

「あつたりまえデース! こんなイベント見過ごす訳ないよー!」

「流石太っ腹」

そこに太いのは善子ちゃんずらと言う花丸の声が聞こえ、善子はかき消すように声をあげる。そんないつもの明るいやり取りに、笑い声がこだまする。

「姉さま」

「お姉ちゃん」

今まで感謝、そして精一杯の想いを込めて姉へと伝える。

「私たちの作るライブ、見てくれますか？」

「もちろん」

「喜んで」

抱きしめ、彼女らの言葉を受け取ったダイヤと聖良。

上で見ているA q o u r sも、サプライズの準備に取り掛かろうと意気込む。実は2人に内緒でこっそり計画しているものがあるのだ。

街の美しい夜景をバックに、ルビイと理亜の精一杯の輝きを見せようとしたその瞬間

「ようやく見つけたぜ、オーブツ！」

「……！」

今のタイミングで耳に入ってほしくなかった声が一眞の鼓膜を揺らす。

その声の正体。それは……

「プロキオ……生きてたのか」

緑の瞳を輝かせたレグリオス星人、プロキオ。

招かれていない乱入者に、ルビイたちの間に緊張が走る。

「以前は随分こつ酷くやられちまったが、今回はそうはいかねえ。再戦といこうじゃねえか」

ギラギラと目を輝かせるプロキオに、一真は怒りの籠った声で返す。

「悪いが、今はお前に付き合っている暇はないんだ」

「そうかよ。いいんだぜ？ オレがこの街を破壊しまくってやつてもよお!!」

「く……」

なぜこうも大事な時に邪魔が入るのか、一真は思わず歯を食いしばる。その姿にクククツと笑うプロキオとはあるカードを取り出し、ダークリングにリードさせる。

「コイツはバルキー星人キルバって奴らしい。なんでもプラズマソウルハンターとかなんとかって話だが……まあ、オレが使うんだからどうでもいいんだけどな!」

そのまま一体化し、函館後に降り立ったバルキー星人キルバ。しかしその姿はまるで鎧を着こんだ戦士の様にも見える。さらに両腕の“バルキーツインソード”が夜の街頭で不気味に輝いていた。

舌打ちをし、周りが見えなくなった一真はオーブリングを取り出した。

「え、ちよ、ちよつとカズくん!？」

「そつちがその気なら……」

制止の声も聞かず走り出した一真に聖良と理亞の視線が集中してしまう。

「やってやるよ!!」

勢いを利用して展望台から飛び出した一真は、オーブリングの閃光に包まれていき

……

ウルトラマンオーブへと変身を遂げ、同じく函館の大地に降り立ったのだった。

第63話 聖なる刃が光る夜

夜の函館に降り立った巨人、その名はオーブ。ビルの光やクリスマスイルミネーションがスペインウムゼペリオンの体を照らすと同時に、対面したバルキー星人キルバをも輝かせていた。

冷たい風が吹きつけるも、2体は構えたまま動くことは無い。睨みを利かせ、動き出す時を狙っている。

「……」
「……」

どこかでクリスマスツリーが微かに揺れた。

微弱な音をも拾える彼らの耳には、それが開始のゴングだったのだろう。両者は全く同じタイミングで地面を蹴った。徐々に詰まっていく距離。オーブは右手の拳を、キルバは右腕に持った剣を……引き絞り、振り上げた。

「ウオオオオオ……！」

「ダアアアア……！」

拳と剣が交わり、沼津から遠く離れた函館の地でウルトラマンの戦いが開始されたのだった。

「……ッ！」

迫りくる左右の剣を手刀で防ぐ。時には右腕を掴み脇腹に殴打、そして蹴りを入れる。しかしこちらが有利をとれたのも束の間。キルバの激しい攻撃にオーブは押されてしまう。

（速っ……！）

身体の紫のラインが輝く。ティガスカイタイプの力を使い回避の速度を上げたのだ。

さらにバク転で後退し、スペリオンスラッシュを連続で放つ。

「フンッ！」

しかしキルバはその連弾すらも二刀の剣で撃ち落とし、オーブへ突進。腹部目撃した蹴りを打ち込んで彼を吹き飛ばし、ビルの上へと落とす。

「この……」

以前戦った時よりも、明らかに攻撃や動きにキレがあった。何をしようも剣を振るつて向かってくる……。厄介な二振りの剣……。『バルギールリング』が変形したといわれる『バルギールツインソード』を持って迫ってくる様はまさしく『攻撃は最大の防御』という言葉を思い出させてくれる。

「おいおい、もっと本気を出してくれよっ！」

そう言ってるキルバは膝をつくオーブに剣を振り下ろした。

「ウアアア——!?」

少し前。丁度戦いが開始されたころ、函館山にいるSaint SnowやAquoursの面々も、中継などでオーブの現状を把握していた。

しかし聖良や理亞には画面越しに戦うウルトラマンの存在が、どうにも信じられないようだった。目の前の少年がウルトラマンへと変化する瞬間を間近で見ってしまったのだから無理もないのだが。

「みなさんはこのことを？」

聖良の問いに無言で頷く千歌。それならばさつき止めようとしたのも合点がいく。

「……勝てるの？」

隣に佇む理亞はそう問いかけてくる。今まさに戦うオーブは劣勢ではないにせよ、やや押され気味だった。彼が負けてしまえばクリスマススライプはおろか、自分たちの明日もないのかもしれない。そんな不安が立ち込めているのだろう。

「大丈夫だよ、理亞ちゃん！」

ウルトラマンは負けたりしないと、これまでも数多くの強敵と戦って勝ってきたのだからと、ルビィは励ます。ルビィの励ましにより、理亞も幾分か落ち着いてきたようだった。

「そうですね。今は信じましょう。彼を……いえ、ウルトラマンを」

くく

刃を振り下ろされてしまったオーブ。しかし幸いにも、胸から肩にかけてのプロテクターが守ってくれたおかげで重傷になることは免れた。だが守られたとは言っても、刃の激痛に耐えられるわけではない。

「ク、ウウウウ……アアア……」

苦悶の声を漏らすオーブ。それを見て刃を押し付けるキルバだったが、一瞬の隙にスペリオンスラッシュを至近距離で受けてしまい後退。

右肩を抑えながらも立ち上がったオーブは、キルバ目掛けてスペリオン光輪を何とか放つ。放たれた光輪キルバの目の前で2つに分離。左右から挟み込むようにして疾走する。

「つまらねえ小細工だ」

キルバは動揺することなく、ノールックで光輪を斬り落とす。

「ダアアアアア——！！」

そこに、正面から飛び込んできたオーブの姿。手にはスペリオン光輪を展開し、至近距離で斬りつけようというのだ。

「ウウウウ……！！」

「今のはちよつとビックリしたぜ。けど、そんなんじやオレには傷一つ付けられねえよ！」

丸鋸のように高速回転させるが、ツインソードに止められてしまう。さらにキルバに押し込まれてしまえば、光輪は砕け散りオーブも後退。土煙と同じように、白い雪も宙に舞った。

「これじゃ、相性悪いか……」

息を整え、オーブは再度突進。その最中に光に包まれ——

「オラァー！」

此方もオーブカリバーで斬りつける。そしてグツと腕や足腰に力を入れ、刃を押し付ける。

「面白え、そのデカブツでどこまでやれるか試してやるよ」

「言つてろ！」

二刀対一刀。素早く斬りかかってくるキルバに対し、堅実に対処していくオーブ。幾度も起こる鏖迫り合い。

弾かれて後退しかける中、咄嗟にまわし蹴りを繰り出してキルバを吹き飛ばす。

(「こんなにやっても活路が見いだせないってのは……なかなか辛いな……」)

未だ構えをとるキルバを見て、オーブは内心そんなことを思っていた。以前もそうだ

が、彼……プロキオの恐ろしさは幾らダメージを受けても止まることのないその執念だろう。恐らく彼の場合、痛みを受けるごとに闘争本能が刺激され、戦闘欲が抑えきれなくなる。さらに戦いという行為自体に一種の快感を得ていると言ってもいい。だから彼を止めるには生半可な力ではいけない。全力を持って叩き潰さなければ……。

(まったく……負のスパイラルって感じだ)

ジワリとした気持ちの悪い汗をどこかで感じ、苦笑しながらもオーブはオーブカリバーに手を掛ける。

「オーブフレイムカリバー!」

火球を撃ちだしたことを視認したキルバ。彼はツインソードで左右交互に竜巻を起こす斬撃を発生させ、火球を切り刻んだ。バルキー星人キルバの必殺技の1つ“バルキーツインサイクロン”だ。

「何……!?!」

迂闊だった。相手が技を使用しないだろうと踏んでしまった自分にイラつきつつも、オーブカリバーで飛んできた斬撃の竜巻をやり過ごす。

「くっ……!」

なんとか攻撃を防ぎ切り目の前に視線を向けるも、周囲の爆発の影響で煙が辺りを覆ってしまっていた。なんとか見つけ出そうと辺りを見回していたその時――

「死ねやー！」

煙の中から飛び掛かり、両腕にエネルギーを溜めはさむように相手を一刀両断する技“バルキーダブルハング”を放たれてしまう。

ギリギリ即死のコースから外すことはできたが、そのダメージは許容量を超えおり、オーブは倒れこんでしまう。カラータイマーの点滅も既に始まっており、危険域に達していることを知らせていた。

「く、うう……直は免れたか」

「オマエ……どうして生きてる……？」

完全に息の根を止めたつもりだったのだろう。目の前にいる、宇宙人は怒りに声を震わせて問いかける。

「そんなの……俺が倒れる訳にいかないからに決まってるだろ」

「はあ？」

「俺が負けたら、あいつらのライブができねえって言うてんだよー！」

ここまで準備してきたものを、こんな戦闘欲の塊に滅茶苦茶にしてほしくない。オーブはそう言つてのけた。

「あいつらだけの力で一步を踏み出す大事なステージがあるんだ……負けられるか!!」

直後、立ち上がったオーブのカラータイマーから光が溢れ出る。

「みんなのステージを守るために……力を貸してください！」

インナースペースで一真は2枚のカードに語り掛け、オーブリングへと通す。

ウルトラマンアグル

ウルトラマンヒカリ

フュージョンアツプ

ウルトラマンオーブ ナイトリキデイター

蒼く輝く光が水飛沫のように飛び散っていく。

聡明な蒼と、海のような青。それを包む金に縁どられた黒いプロテクター。同じく胸元に輝くりベット。そしてオーブ共通である額のクリスタルは赤く輝いていた。

「ハアアア……」

風が吹きつけてくる中、オーブはゆったりとした動作で構えをとる。

「オイオイ、いままで出し惜しんでたつてことかよ。つたく……また面白くなつてきやがったな!!」

興奮でツインソードを振り回し、そのまま駆けてくるキルバ。そしてツインソードの刃が振るわれる直前——

「シユアツ！」

オーブの掌底がキルバを押し返す。

そう。オーブはカウンターを放つたのだ。並みの攻撃速度ではないキルバに対応で

きたのは、力の源であるウルトラマン2人が優れた剣士であるからだろう。加えて……

「お前の目線が、剣筋を導き出すヒントだ」

キルバの怯んだ隙を確認し、すぐさま駆け出したオーブ。勢いをつけた飛び蹴りが、キルバの腹部へ命中。着弾点から波紋のような衝撃が広がっていく。

「やってくれる……」

「……」

オーブ目掛けてツインソードで再度斬りかかるも、オーブも両腕から青い光の刃を出現させこれを受け止める。

「ナイトアグルブレード」

「同じ条件か……いいぜ、剣士勝負と行こうじゃねえか!!」

幾度目となる剣同士のぶつかり合い。キルバが攻めまくるように、オーブもまた攻めまくる。時に横へ薙ぎ、時にピンポイントを突く。

「クソツ……!」

いったん距離をとったキルバは、またもや技を放とうとするが

「何度も受けてたまるか!」

させまいとオーブは、額のクリスタルにエネルギーを集中。そこから光弾を連続発射した。

「クラッシュヤーナイトリキテイター」

「ガッ!? ハアア……」

よろけるキルバへ再度肉薄し、ナイトアグルブレードを突き出す。

「……ッ!!」

刃と刃がぶつかり、不快な金属音が周囲に響く。数秒後……パキツと音を立てて、ツインソードが崩壊した。

「な……」

ツインソードに絶対的自信を抱いていたのか、キルバはその場で狼狽えてしまう。オーブのスペリオン光輪を受け止めた時の生じた小さなキズ。ナイトリキテイターとなった時に気付いた彼は、ずっとその1点を狙っていたのだった。斬りかかる時はなるべくその傷部分に負荷がかかるように。突くときは言わずもがなその1点を。

「こ、この……。強大な力を持っているオレが……。どうして……」

「お前は力あり方を知らなすぎる。ただ振るうだけが力じゃない。誰を見守り、背中を押す……。そして導く。それがいつの日か、大切な人の力になる。勇気という力に」

「ふざけたことをおとおおおお!!!!」

オーブは腕を水平に広げた後、右腕を天に掲げる。蒼い雷を纏わせた光球を生成。両腕からスクリュー状の波動弾を撃ち出した。

「ストライクナイト……リキダイター」

動きを止めたキルバは、その場に倒れると凄まじい轟音と共に爆発したのだった。

—Awaken the power—

それは大切な人に贈る曲。ここまでの感謝、そして一人でも大丈夫だと伝えるための唄。

彼女たちの歌声は、聖夜の夜をより一層煌びやかにさせていた。それと同時に、ライブ会場のクリスマスツリーもまぶしくらいに輝いていた。まるで想いを伝えた彼女たちを祝福するように……。

「やっぱり理亜はSaint Snowを続けないのか？」

「そうみたいです。でも、前とは少し意味が違うんですけど」

沼津へと帰る途中、一真はルビイに尋ねた。しかし予想外の返答に、一真は首を傾げ

る。

「Saint Snowは聖良さんとの思い出で、世界に1つしか無い雪の結晶だからって。だから新しいグループで、新しい雪の結晶を見つけてるんだって！」

「成程……そういうことね」

聖良との思い出であるSaint Snowはこの世界に2つとない結晶の形。だから理亜は新たな結晶を探すことに決めたのだろう。形としてではなく、思い出として留めておくと。

新たな未来に向かって羽ばたき始めた妹たちのことを、姉たちは誰よりも祝福している事だろう。

こうして、冬に起こった小さな奇跡の出来事は幕を閉じるのだった。

第64話 思いがけないこと

「あけましておめでどうございます！」

「はい、おめでどう」

「あけおめ〜」

「おめでどう」

「はいはい、おめでどうおめでどう」

様々な出会いや出来事を経験した年も終わり、今日から新たな1年のスタートとなった。

千歌の母、美渡、志満そして一眞の順で千歌に伝えていく。千歌は早速、「お年玉」と丁寧に書いた半紙を持って志満、美渡そして母親へと声をかけていた。

千歌の声を聞き、新年早々騒がしいなど一眞は未だ眠気の残る頭で考えていた。

「あんたまだ貰うつもりでいたの？」

しかし貰ったのは大きな玉のオブジェ。それに納得いかないと、千歌はぐちぐちと文句を言っていた。

「梨子ちゃんはいらないって言ったらしいわよ」

「だったら千歌も貰えないよね〜」

そう切り出してきた志満に乗り、意地悪そうな顔の美渡に千歌は反論する。「よそはよそ。うちはうち」だと。

「都合がいい言葉だよな。それ」

「カズくんもなんか言ってるよ！」

「ええ……何を言ってるんだよ」

面倒くさそうに頭を掻く一真。すると外から千歌と一真を呼ぶ声が聞こえた。

「ああ、来ちゃった」

「いいタイミング。でかしたぜ囉！」

「ちよつと、それどういう意味!？」

「い、いや……別に〜?」

これ以上は迫られまいと、一真はすぐに玄関の方へ駆けていった。

新年として練習はある。ラブライブの決勝もすぐそこまで迫っているのだ。

しかし彼女たちも年末は各々思い思いに過ごしていた。何をしたのかや、年末のテレビ番組の話で持ち切りだった。特に善子は聞くとところによると、昨日は正月生放送をしていたとのことだとか。欠伸をしていることから、彼女は夜通しでやっていたらしい。

「私も見てたよ。おかげで全然寝れてない」

「やはり見ていたか！ さすがはリトルデーモンズ——」 「だからそれはやめて！」

何気に珠冬と善子は仲いいよなど、一眞は2人のやり取りを見ながらそんなことを考えていた。

「寒いね〜」

「ダイヤさんたちまだかな？」

冬の冷たい風が体を吹き抜けていく。みんな身震いしながらダイヤたちの到着を待っている、黒塗りの車が目の前に停車する。

「前から思ってたけど、ホントに黒塗りなんだな」

「一眞も気を付けなよ。下手なことすると……」

急に鞠莉の声のトーンが下がる。やはり網元の家には黒服の集団でもいるのだろうか。怖くなった一眞は恐る恐る聞き返す。

「え？ ホント……ですか？」

「It's a joke！」

鞠莉に押搦われ、一瞬でも信じてしまった一眞はため息を吐く。そういえば鞠莉さんはこういう人だったと。そんなことをしていると、ルビイとダイヤそしてもう2人の人物が降りてくる。

「あけましておめでとうございます」

「うわ！ 本当に来た」

「悪い？」

聖良と理亞。Saint Snowだ。冬休みという事もあり、練習のコーチをお願いしていたのだ。もっとも、そちらは偶然にも本州に来る予定があつたらしく、できればと願ったものだったが快く引き受けてくれたのだ。

「それにしてもその恰好……」

理亞は呆れながら全員の服装を見ていく。その姿には聖良も困惑気味のようなんたつて……

「それではみなさん！」

『あけましておめでとうございます!!』

全員着物姿だったのだから。

グラウンドへと場所を移した一行。ちなみに服装はいつもの運動着に着替えてもらった。まあ当たり前なのだが。

「あんたたちやる気あんの？」

「一応、お正月ってことで！」

「だからって晴れ着で練習できるかー！ーい!!」

理亞の怒号が校庭にこだましていく。さらに横にいる一真にも

「マネージャーでしょ？ おかしいと思わなかったの？」

「逆にこういうのもアリなのかなって」

「んなわけあるか！」

初対面の時から考えられないやり取りを見せてくれた。これもクリスマス的一件事があつてこそだろう。

「いい学校ですね。私たちと同じ、丘の上なんですネ」

すると聖良は校庭を見て……いや、ここに来た時から思っていたことなのかもしれない。自分との学校の共通点を見出した。

「うん、海も見えるし」

以前函館を訪れたAqoursが言っていたように、聖良もまた同じ空気を感じたの
だろう。

「でも無くなっちゃうんだけどね」

曜の言葉に、2人は目を丸くする。知らなかったことではあるし無理もないが、あまりにも突然だったかもしれない。

「今年の春、ここは統廃合になるの。だから3月でThe end」

すると鞠莉がさらに詳しく説明してくれた。それを聞いて、聖良と理亜は駆け寄って尋ねる「ラブライブで頑張って生徒が集まれば……」と。かつて彼女らがそうしたように。

「ですよ。私たちもずっとそう思ってきたんですけど」

穏やかながらも、どこか悲し気にグラウンドを見据える千歌。しかし、その声に後悔の色は無かった。

「……そうだったんですか」

「あ、でもね！ 学校の皆が言ってくれたんだ！ ラブライブで優勝して、学校の名前を残してほしいって！」

その後、果南が続く「浦の星のスクールアイドルが、ラブライブで優勝したって。そんな学校がここにあったんだって」

それが友人たちから託された学校を救う方法。一度目標を見失ってしまった彼女たちに示された航路。

「最高の仲間じゃないですか！ 素敵です！」

それを聞いた聖良も瞳を輝かせる。一方理亞は、ルビイたち1年生のもとへと向かう。

「じゃあ、遠慮しないよ。ラブライブで優勝するために、妥協しないで徹底的に特訓してあげる」

「……マジ？」

「マジ」

「マジずら？」

「マジずら」

「マジですか」

「だからマジだって！」

そのやり取りを見て珠冬も頬を緩ませていた。

彼女たちのやり取り、そして自分たちの目標を再確認したことで、ラブライブ優勝に賭ける想いがまた強くなっていった気がした。

早速始まった練習だったが、果南を除いたA q o u r sの面々にはなんともキツそうだった。正直、まだアツプの段階なのだ。

「お正月ですからね、皆さん」

「どういう事ですの……？」

息が切れているダイヤが聞くと、理亞は「随分と身体がなまっているってことよ」とわかりやすく教えてくれた。

「一度身体を起こす必要がありますね。坂道ダツシユをしてから、校庭を3周してきてください」

聖良の言い放った注文に納得するものは、果南以外誰もいなかった。この場合果南が特殊なのか、他がなまっていたのか、もう一真にはわからなかった。

「この調子で決勝なんて……本当に大丈夫なのか」

どうにか走り終えることができたが、もう既にしんどいと座り込んでいる梨子は不安げに呟いた。だが、聖良は「いけると思いますよ」と励ます。

「ステージって、不思議とメンバーの気持ちがお客さんに伝わるものだと思うんです。今の皆さんに気持ち自然に伝わればきつと……素晴らしいステージになると思います！」

聖良の言葉に、千歌は力強く頷いた。そこには、聖良のA q o u r sに対する信頼も

伝わってくる。

するとルビィは「鞠莉ちゃんは？」と聞いてくる。確かに、彼女の姿が見えない。

「何かご両親からお電話だったみたいですが……」

ダイヤがそう答えると、花丸が「もしかして、統廃合中止ずら？」と期待の眼差しを向ける。その横で善子は声を作って鞠莉の父親を想像する。

「ホホホッ、この学校を続けることにしただよ」

「絶対そんなキャラじゃないから」

そうやって休憩時間を過ぎてしていると、鞠莉が声をかけてくる。どうやら話は終わったようだ。

「理事!?!」

「Of course. 統合先の学校の理事に就任してほしいって」

体育館に移動し、鞠莉は先の話の内容をみんなに共有する。浦の星からも、たくさん生徒が統合先の学校に行くことになる。であれば鞠莉がいた方が安心するだろうと言っ訳らしい。

「理事って?」

話について行けない理亞に、ルビイは説明する。鞠莉は浦の星の理事長でもあることを。

「じゃあ、春から鞠莉ちゃんも一緒の学校に!? A q o u r s も続けられる!?!」

千歌は期待を込めて鞠莉に問いかけるも、曜は「それだと留年したみたいだし」と。加えて一真も「さすがにな……」とあまり好感触ではなかった。

すると鞠莉の声が、体育館に響く。

「大丈夫、断ったから」

彼女の答えに、誰もが声をあげて困惑する。そしてあまりにもあっさりとした答えでも、理由のひとつだ。

「理事にはならないよ。私ね、この学校を卒業したら。パパが進めるイタリアの学校に通うの。だから、あと3ヶ月。ここに居られるのも」

それは、みんなと過ごす時間のタイムリミットだ。それを理解すると同時に、どこか否定したいような複雑な気持ちに支配されるのだった。

「では」

「もう少しゆっくりしていけばいいのに」

夕暮れの沼津駅で、聖良と理亞を見送りにきたA q o u r s。聖良曰く「他にもよる予定がある」ということのようなのだ。

「ルビィ知ってるよ。2人で遊園地行くんだって！」

理亞は顔を赤くしながら「言わなくていい！」と声をあげてしまう。

「別にいいじゃん。遊園地」

「もう……。これ、姉さまと2人で考えた練習メニュー」

恥ずかしまぎれなのかはわからないが、千歌に練習メニューの書かれた紙を手渡す理亞。それをのぞき込めば、びっしりと練習内容が書き込まれていた。

「ラブライブで優勝するんでしょ？ そのくらいやらなきゃ」

「ただの思い作りじゃないはずですよ？」

優勝する目的が目的だ。生半可なものでやっていいものではないだろうと言う、彼女たちなりの激励。そして、自分たちが成し得なかったことを彼女たちに託すという信頼でもある。

「必ず優勝して。信じてる」

千歌の頷きの後「頑張ルビィ！」とルビィも意気込む。しかし、理亞には「なにそれ」と冷たく返されてしまうが。

「ルビィちゃんの必殺技ずら〜」

「技だったの!？」

「知らなかった……」

夕焼けの色が強く照らされた沼津駅に、彼女たちの笑いが木霊していくのだった。

「イタリアか……」

「きつとそうなるのかもなどは、どこかで思ってたけど」

「実際、本当になるとね……」

海を見つめる4人。あと3ヶ月しか、今のメンバーではいられない。ラブライブ決勝後にはすぐさま卒業式がある。

「鞠莉ちゃんだけじゃないわ。ダイヤさんも、果南ちゃんも……」

「春になったらみんなで学校通ったり、バス停でバイバイすることも無くなって……制服も、教室も……」

「色々……変わっていくんだな」

いままで見てきた場所でもなく、制服でも教室でもなくなることが寂しいのだと……そう言っているように感じた。

浜辺へと向かった千歌が書いたのは、A q o u r s の文字。

「どうするの?」

「3年生が卒業したら」

曜と梨子がすべてを言わずとも察してしまう。A q o u r s を続けていくのかどうかという事だ。

「わかんない。ほんとに考えてない。なんかね、ラブライブが終わるまでは、決勝で結果が出るまでは……そこから先のことは考えちゃいけないような気がするんだ」

「みんなのため?」

「全身全霊、全ての想いをかけてラブライブ決勝に出て優勝して、ずっと探していた輝きを見つけて……。それが学校のみんなど、卒業する3年生に対する礼儀だと思う」

一歩踏み込んだ梨子は、千歌の両頬を挟み込み「賛成」と口にする。そして曜も「大賛成」と言つて2人に抱き着く。

「まったく……リーダーの時はいろいろ考えてんだな。お前も」

「ちよつとそれどういう意味!?!」

今朝のようなやり取りに、一眞は口元が緩む。すると曜は「賛成つてことだよね!」と言つて一眞も引き込んだ。

「曜、お前……。遠慮がねえな、ほんと」

すると4人からは、自然と笑いが込み上げてくるのだった。

くく

翌日の沼津某所。人通りの少ない道を行く青年の姿がそこにはあつた。所々ボロボロになつた衣服。足を引きずり、壁伝いに歩く姿。そして乱れた髪からは、以前の余裕そうな表情は見られない。

「ははっ……ここまでドジっちゃうとはね……」

壁にもたれ掛かり座りこんだ青年。その口からは、乾いた笑みが零れるのみ。負傷し、身体を動かすのもやつとだと言つた感じだ。

「はあ……逃げきれるか不安になつてきたなこれは……」

気を抜いた瞬間に襲てくる痛み顔に顔を顰める。

彼は以前オーブに敗北したアオボシ。しかし今は体のダメージからか変身することはできない。そして……

「もう来たか……くっ……くっ……！」

彼は逃げていようだ。アオボシが立ち去つた後に現れたのは——

「どこに行つたんだあの忌々しい男は！ 死ぬときぐらい大人しくしているよ……！」

黒い肌に赤い水晶が浮き出ている顔、赤い突起物のある白い体……ナツクル星人。

オーブの抹殺に悉く失敗したアオボシは肅清対象となつているのだ。しかし彼が易々とその魂を差し出すわけもなく、命からがら逃亡しているのが現状。

そしてそんな彼を追うのは、惑星侵略連合に身を置いていたナツクル星人。彼のいない間に壊滅してしまつた侵略連合の敵を討つため、そしてすべての事が狂つた元凶ともいえるアオボシを殺すため、この任務に志願したのでつた。

「はあ……はあ……はあ……くっ、痛むな……」

このように逃げて何日目なのか、もうわからない。いつ殺されてもおかしくない状況で、頼れるものは誰もいない。その前に、頼るなんて選択肢はないが。

「……フツ」

偶然なのだろうか。今の状況はまるであの頃のようなようだった。どうでもいいと思つたはずの過去のなに、今思い出すと自然と笑えてしまう。隣にはあいつがいて、しようもない理想論に頭を痛めていた気がする。

その時——

靴と地面の擦れる音が響き渡る。遂に見つかってしまったのかと、アオボシは警戒の目を向ける。

しかし、そこにいたのは白い体の宇宙人ではなかった。

「あなた……!」

「君は……確か」

疲れているせいか、目の前の人物の姿がやけに眩しく感じる。金髪を揺らして驚愕の表情を浮かべる人物を、アオボシは以前見たことがあった。いつの日だったか、ステージで輝くように踊っていた彼女。A q o u r sの一員で、名前は――

「……小原鞠莉、だっけ?」

くく

「で、どうしたんだよ。話があるって」

「一真さんに見て欲しいものがあるすら」

その頃、一真は花丸に呼ばれて彼女の家に足を運んでいたのだった。花丸はそれだけ

を伝えると、何かを取りに敷地内にある倉に入っていった。そして待つこと数秒。彼女は古そうな布に覆われた箱を持って、一眞のもとに戻ってきた。

「なんだ、それ？」

「大掃除をしていたら見つけたぞ。それでおばあちゃんに聞いたら、これはずっとこの家で補完してきたものだって」

布を丁寧に捲っていくと、あったのは2つの大きな木箱が重なって包まれていた。

「花丸……これって……！」

「太平風土記ぞら」

木箱にあったものの1つ。それはなんと太平風土記だったのだ。

「これ、原本か？」

「そこまではわからないぞら」

中身を見てみると、ネットにアップされている太平風土記と全く同じ描かれ方をしていた。

「花丸、とんでもねえもん持ってたんだな」

「マル、ずっと引つ掛かつて事があつて前に善子ちゃんが『偽りの光球』って言ったことがあつたぞら」

そうして花丸は、太平風土記のある部分を開いた。

「偽りの日輪……」

「多分、マルも小さいころに見ていたんだと思う」

「成程ね……」

魔王獣や紅蓮鬼など過去に戦ったことのある存在などが描かれているが、どうにも恐ろしくその先を読もうとは思わなかった。

「そうだ。それで、もう1つの方は？」

「ああ、そうだったずらー！」

彼女が歴史書を箱に戻し、もう1つの箱を開ける。中に入っていたのは

「種か？」

「種……ずら」

植物の種子のようだ。しかし彼らがよく見る種子とはかけ離れており、掌からはみ出してしまうくらいの大きさがあったのだ。

「でも、どうして一緒に入ってたずら？」

「さあな。でも一緒にあったことは、なにか大事な意味があるのかもしれない」

「大事な意味……ずらか……」

様々なことが記された歴史書と、謎の種子。その存在に、2人は頭を悩ますのだった。

第65話 星に祈る

「もう鞠莉つたら遅いな〜」

沼津の某所で待ち合わせをしていた果南はふと、いつまでたつても来ない幼馴染への不満を呟いた。

「以前にも何度か遅れてきたりもしますが……今回はちよつと遅れすぎな気がしますわね」

果南と同じく待ち合わせをしていたダイヤは怒るところか、いつもより遅いことを不審に感じていた。

「なにやってんの、あのお嬢様は！」

どうにも落ち着いていられない果南は、鞠莉の携帯へと連絡を入れるのだった。

果南が電話を入れる少し前……。

「あくだからDon't moveだつて！ 包帯が巻けないでしょ」

「さつきも言ったが、手当は必要ないって……おいっ！ はあ……聞いてない」

なんとアオボシへ応急処置をしていたのだった。傷だらけの彼を見つけた鞠莉はすぐさま場所を変え、包帯や消毒液など買ってきたのだった。そして嫌がるアオボシの声を無視し、包帯を巻いているというわけだ。

「はい。これでさつきよりはマシになった筈よ」

「……」

アオボシの不貞腐れたかのような表情からも、痛みはだいぶ軽減されたことがわかる。

「……………ありがとう」

そんな素直になりきれないアオボシの礼に、鞠莉は頬を緩ます。だがアオボシにとつてはそれが嫌だったのだだろう。話すことで気を紛らわそうと口を動かす。

「けど意外だね。まさかお嬢様がここまでできるなんて」

「あなた、私のどこまで知っているのよ」

「ふっ、さあね？」

そこまで認識していないかと思つた彼の口から出た言葉に鞠莉は聞き返すも、あつさ

りと受け流されてしまう。

「マリーのプライベートを語るなんて、デリカシーがNothingグースー！」

「……は？」

いつもやり取りをしているAqoursたちならともかく、ほぼ初対面のアオボシは彼女のテンションに困惑したことだろう。しかし、彼女のお陰で出会った直後よりも接しやすいくらいになっている。

「まあいいわ。私だってスクールアイドルよ。これくらいできなくちゃ」

「……ありがたいことだけど、なんで僕を助けた。僕が君たちにやったこと……忘れた訳じゃないだろ？」

しかし、アオボシにはどうしても納得いかなかった。オーブに怪獣を嚇け、間接的にはいえ彼女たちを危険な状況に追い込んだのだ。彼女たちから見れば、自分が憎むべき敵であることは間違いない。なのに……。

「怪我人をそのまま放っておけるわけじゃないでしょ。それが例えあなたでも。それに見つけたのが果南やダイヤでも、同じ選択をしていたと思う」

「ふっ……君は随分と友達を信頼しているんだね。なにもかもお見通しって感じだ」

見返りも求めず、敵を助ける……。そのお人好しはあの男に匹敵するだろう。だがそれを口にするのは野暮というものだ。だから友人の話を持ち出してみたのだ。半分嫌

味っぽく。

「果南とダイヤにはいろんなことを教わったのよ？ そんな2人とはいつも以心伝心デース！ ……つてのは嘘。お見通しなんかじゃないよ。それどころか、何もわかってなかった」

「……どういう意味だ？」

先のテンションから一変。そんなことは無いと語る鞠莉へ、気になったアオボシは尋ねた。

「私と果南、ダイヤの間でね……すれ違いがあつたの。それで2年間もわだかまりが続きちゃつて。果南もダイヤも、私にずっと伝えてくれていたのに……気付こうともしなかつた」

「友情なんて所詮はそんなものさ」

半分バカにしたような言い方で吐き捨てるアオボシ。そんな彼に鞠莉は、苛立ちを含んだ声で尋ねる。恐らく、果南やダイヤの友情を“そんなもの”と軽々しく語つたのがいけなかつたのだろう。

「そういえば、あなたも一真と因縁があるわよね？ どうやら知り合いだと思うけど、もしかしてあなたもそういうつた友情絡みかしら？」

「……さっきの言葉は撤回させてくれ」

流石に不味いと思つたのか、両手を挙げて謝るアオボシ。そしてその後、自分と彼の因縁を話し出した。

「過去に何があつたにせよ、僕はただシリウスを負かしたい。その一点だけだつたんだよ。精神的でも肉体的でもいい。アイツが苦しみ、倒れる姿を見たい……それだけだつたのさ。けど、それも散々失敗してこの様……。今は追われる身で、頼るべき人も、帰るべき場所もない。ただの孤独な宇宙人さ」

今までのことを振り返り噛みしめるように……そして自虐的に笑いながらも語るアオボシ。それを聞いた鞠莉に何かアドバイスができる訳でもなかったが、それでも口を開こうとしたとき――

「見つけたぞ！ 逃げ回つてる最中に女を捕まえるとは、いい根性してるじゃないか？」

ナツクル星人がその場に踏み込んできた。

「不味い……逃げるわよ！」

「あ、おい!？」

鞠莉はアオボシの手を引っ張り、その場から逃げ出した。

「アイツは僕を狙つてる。だつたらわかるだろ？」

「いいえ、私はあなたを見捨てない！」

「バカか君は？　いいやバカだ。お人好つてのにも限度がある。君のそれはシリウス並みだ!!」

アオボシを置いて一人で逃げればいいのに、危険を冒してまで一緒に逃げようとする鞠莉に、彼は声を上げた。

「何言ってるのよ！　私だつてここで見捨てたら、絶対後悔する。そんなのはしたくないの！　つていうかあなた幾つよ?」

「シリウスと同じ年。17だ!!」

「だったら私の方が年上よ！　先輩で理事長な私に向かって何言ってるのよ!」
「知るかああああ!!」

途中から全然関係のないやり取りを始める2人。しかしこれは緊急時かつ予想外の行動を互いにとっていることで頭が回っておらず、勢いに任せて話してしまっているが故なのだ。

そんな緊急時、ポケットの中で陽気な音楽が流れ始める。

「もうこんな時に……つて果南!」

それは鞠莉の携帯。そして相手は待ち合わせ場所に来ないと電話をかけてきた果南だった。

『ちよつと鞠莉！　なにやって——　「今は詳しく話せないの!」

『え、どういうこと？ それになんだか……』

「待ちやがれ！」

「ああ、一眞に伝えておいて！ 場所は……」

そこまで言い掛けたところで、追い駆けてきたナツクル星人の持つブラスターの銃声が響いたのだった。

「太平風土記に謎の種子……いったい何のために……」

花丸宅からの帰り道、一眞は1人でうんうんと唸っていた。彼女の家から見つかった風土記と種子が何を意味するのか、花丸と考えても思い当たる節も意味も分からなかったのだ。しかし理由が無ければ一緒に置くことは無い。であれば……と、永遠と同じところを行ったり来たりするだけで一向に答えらしいものにたどり着かなかったのだ。

「ヒカリさんとか知ってそうだよな」

ここにいない人物を頼りにしても仕方がないと頭では理解しつつも、そんなことを眩

いてしまう。

空をぼんやりと見上げながら歩いていると、一眞の携帯に着信が入る。

「は〜い、今は頭があまり回ってない一眞で〜す」

『カズ！ 大変なの!!』

果南の緊迫した雰囲気電話越しから感じた一眞は、さつきまでのお茶らけた雰囲気から一変。真剣な面持ちで話を聞く。

「……な!? 鞠莉さんが!? 場所は!」

電話を切った一眞はすぐさま走り出す。しかしその速度は、人間の限界を遥かに超えたものだった。

く

ブラスターの発砲音に、鞠莉は思わず目を閉じていた。しかし数秒立っても自分を襲ってくるであろう衝撃や激痛と言ったものは、全く感じられなかった。

恐る恐る目を開けると

「ほう……」

アオボシが黒い剣を携えて鞠莉の前に立っていたのだ。彼の構えから、恐らく剣で銃弾を弾いたのだろう。

「あなた……」

「……」

背後にいる鞠莉に答えることは無い。それどころかアオボシ自身、かなり動揺しているように感じた。信じられないとでも言いたいのか、目を見開き、口をパクパクさせていたのだから。

「お前のような男が小娘を助けるとはな……。逆に絆されちまったか？」

「……ぼ、僕はただ……関係のない彼女が巻き込まれて、後でご友人たちにアレコレ言われるのが嫌なだけさ……」

「何を今更。お前が散々やってきたことだろ」

あいつに言われるのは癪だったが、ナツクル星人の言う通りだった。これまで何度も巻き込んで、今更アレコレ言われるのが嫌だなんて虫が良すぎる。でもこれは、咄嗟に“助ける”だなんていう行動をとってしまったアオボシが、精一杯自分に言い訳をしているようにも受け取れた。

「死に際に善行でも積みたくなつたか？　フフフツ……だが、どうあれお前はここで終りだ」

ナツクル星人は再度プラスチックを構える。しかしアオボシは傷が痛むのか、構えていた腕を下ろしてしまった。万事休すかと、2人は唇を噛むことしかできなかった。

「見つけたあああああ!!」

聞き覚えのある声と共に、黒い塊がナツクル星人へ突っ込んでく。そして速度を最大限に生かしたタツクルを食らい、ナツクル星人は後方へと吹き飛んでいった。

「間に合った……つたく、ウルトラマンと同化してる奴の脚舐めんな」

「一真!？」

その正体は一真だった。黒い塊に見えたのは、速すぎて輪郭をキツチリと捉えることができなかったからだ。

鞠莉の声に反応し「無事でしたか」という声と共に振り返るも、鞠莉の前に立っていた人物に対し彼は驚愕の声をあげた。

「おま……どうしてこんなところに!? っていうか、生きてたんだな」

敵意むき出しの一真に対し、アオボシはうんざりとした表情とともに「おかげさまでね」と返す。

「一真、彼は私を守ってくれたの」

鞠莉から語られる信じがたい内容に、一真は言葉を失う。かつては仲間同士であったが、最近の行動を見せられては怪しんでしまうのも無理はない。しかし鞠莉の表情や声音からは、揶揄していると、脅されたから言っていると、そういった類のものは感じなかった。

「信じなくてもいいけど、どうやら僕は小原鞠莉を助けちゃったみたいだ」

「あなた馴れ馴れしいわよ。ちゃんと先輩は敬いなさい! あ、もしかして嫌だ? だったらマリーでもいいわよ!」

「あ、あのなあ……」

緊張感から解放されたのか、鞠莉はアオボシのことを揶揄った。的にされているアオボシは、普段からは想像できないような弄ばれっぷりだった。その光景から、彼が鞠莉を助けてくれたのだと一真は確信。彼のもとへと歩いていく。

「お前のやってきたことを許すつもりはねえし、許そうとも思わねえ。けど、鞠莉を助けたのは本当みただしな……。その部分だけは感謝しとく。ありがとう」

「僕は助けたくて助けたんじゃないさ。ただ、身体が勝手に……」

「お前……」

アオボシのそれは、どうしても“自分が助けた”という事実を否定したそうに聞こえた。一眞はより話を聞こうと口を開こうとした瞬間――

「無視してんじゃねえ!!」

ナツクル星人が回復。怒号と共に戻ってきた。

「オイオイ……まさか粛清のために追いかけてきたら、まさかオーブまでノコノコやって来るとはな。こりや幸運にでも恵まれてるかもな」

「どういう意味だ」

ナツクル星人を捉え、鞠莉を守るようにして一眞は立った。すると、横のアオボシが状況を説明してくれた。

「僕は今やお尋ね者って意味だよ。そしてアイツはナツクル星人。惑星侵略連合に身を置いていた1人。つまるどころ、君を殺すことで仇を撃ちたいってことだよ」

「ざらつと何言ってるんだよ。お前、逃げてきたのか?」

「ああ。お前を殺し損ねたからいららないんだってさ」

2人だけで会話が始まってしまったところに、再度ナツクル星人が介入する。

「その通りだアオボシ！　もとはと言えば、貴様が変に引つ掻き回したのが原因だった。あの黒き王のカード。貴様が大魔王獣復活のために持ち出した後、オーブに奪われてしまったではないか。そして我らの長もオーブに倒され、侵略連合は壊滅……引き金となったのは貴様だ!!」

「お前なあ……」

冷やかな目を向ける一真に、アオボシは悪びれる様子などなかった。

「反省しなさいよ!」

するとアオボシは後ろの鞠莉に怒られる。当たり前だ。

「ううう……なんなんだお前らは!　何でもいい、まとめてぶつ殺してやる!」

そう言つてヤツが取り出したのは黒い卵。その中からは怪しい光が漏れている。

「我々の復讐を果たすぞ!　さあ、目覚めろブラックキングツ!!」

眩い閃光とともに、ナツクル星人が巨大化していく。さらに卵も巨大化。黒いボディと金色の角を持った怪獣が顕現する。

用心棒怪獣ブラックキング。ナツクル星人の使役する怪獣だ。

沼津の街中に現れた宇宙人と怪獣によって、市民は大パニックだ。その悲鳴やサイレンが耳へと入ってきながら、3人は離れた場所まで退避してきていた。

「果南やダイヤさんも避難したそうです」

「そう。ならよかった」

「じゃあ俺は……」

「気を付けて」

友人が避難したことに安堵するが、一眞の言葉の意味を察した鞠莉はもう一度表情を引き締める。一眞は去り際にアオボシへ目を向ける。それは手を出すなという警告か、それとも……。

「オーブシャドウになれるほど、コイツに力は残ってないよ。……誰かさんのせいだね」
オーブリングNEOをひらひらと振りながら語った。確かに、その輪に光が宿っている様子はない。

「鞠莉さんにも、だ」

「わかってる。早く行け」

一眞は目の前で暴れている2体を見据え、駆け出していくのだった。

街を破壊し、さらに闊歩するブラックキングと巨大化したナツクル星人。それもこれも、侵略連合を壊滅させたオーブへの復讐なのだろう。彼の守りたいものを破壊し、精神的にも追い詰めたいのだろう。

するときらりと光る輝きと共に、オーブの蹴りがブラックキングに炸裂する。

「そこまでだ、ナツクル星人!」

土煙の中から立ち上がり、ハリケーンスラッシュは構えをとった。

「来たかオーブ。侵略連合の仇……取らせてもらおうぞおおお!!」

ほぼ同時に地面を蹴った3体。オーブスラッガーランスを生成し、エメラルド色の軌跡が宙に描かれる。ブラックキングの皮膚から火花が散り、ナツクル星人は突きを受けて後退する。

「■■■■ー!」

ブラックキングは口からマグマ光線「ヘルマグマ」を放つ。跳躍してオーブは回避するものの、今度はナツクル星人の取り出したプラスターが火を吹く。

「……ッー！」

オーブはランスを回転させて銃弾の雨を防ぐ。周辺には弾いた弾丸が降り注ぎ、炎を上げる。素早く光刃を飛ばし銃撃を止めさせるも、ブラックキングの尻尾が彼の胸元を直撃。大きく吹き飛び、そのまま地面に叩きつけられてしまう。

「ああ……。うおっ?!」

起き上がれないオーブは2体の接近を許してしまう。ブラックキングの羽交い絞めからの、ナツクル星人による殴打の連発。最後にはブラックキングによって宙へ放り投げられて地面を転がる。

「くっ……。うっっ……。くっ」

起き上がろうとするも先のダメージで体が動かない。カラータイマーの点滅も始まる。さらに、ナツクル星人の銃口が自分に向けられているのではないか。

動くことのできない中、ナツクル星人の声が響く。

「奇しくも、同じ夕日とは……。なかなか感慨深いと思わないか？ オーブ」

「何の話だ……」

「我々は、ウルトラ族との戦いを長年繰り返してきた。決まって負けるのは我々。立つ

くことはできた。

彼らの側面に滑り込み、右手に左手を添えた構えで光線を放つ。

「ウルトラスラッシュショット！」

ブラックキングへと着弾。怒りの声を上げ再度ヘルマグマを放ってくるが、オーブレーションシュートで相殺する。

「次はこれだ！」

オーブのカラータイマーから光が溢れる。そして真紅の体を持つバーンナイトへと姿を変え突進。

「ぶっ飛べー！」

ブラックキングの攻撃を避け、カウンター気味に左拳を腹部へ打ち込んだ。そして同時に拳からダイナタイトの如くエネルギーが放たれる。パンチの衝撃とゼロ距離の爆発……その二重のインパクトによって、ブラックキングは地面に倒れこんだ。

「……ストビュームダイナタイト！」

そのまま炎を纏った体当たりを放つことで、ブラックキングは爆散した。

「この野郎オオオ!!」

相棒を失った事への怒りに身を任せ、ブラスターを連射するナツクル星人。だが、撃ちまくった場所には既に彼の姿はない。

「どこに行きやがった……」

「こつちだ！」

その声の方向……頭上に目を向けると、急降下しながら燃える拳を突き出したオーブの姿が。

「ゴアアツ!?!」

一瞬だけナツクル星人の顔が凹み、その勢いで地面に沈んでいく。

そしてオーブは青い光に包まれながら地面に着地。光が収まれば、その姿はナイトリキデイターへと変化していた。

「コロコロと姿を変えやがって!」

怒号と共に放たれる銃弾。しかしオーブは華麗に避けていき、両腕のアグルナイトブレードを展開。ナツクル星人の元へ一直線に駆けていく。

「ハアッ!」

肉薄したオーブにナツクル星人の近接攻撃が迫るも、彼は腕を払いのけて胴を薙ぐ。さらに迫りくる蹴りを腕で防ぎ、逆にこちらから蹴りを打ち込む。そしてトドメと言わんばかりの袈裟斬りが、白い体を見事に捉えた。

「(っ、(っ、(っ)で……負けるわけにはあああああ!!」

「……………」

手負いのナツクル星人はそれでも足掻いた。一族の因縁のため、そして仇のため。ブラスターを向けてオーブを牽制。

両者は睨み合った。背景の夕日が、2体をオレンジ色に染め上げる。

ナツクル星人は引き金に指をかける。対するオーブは腰を深く落とし剣を構えた。するとオーブの意思に反応してなのか、身体中を蒼い雷が駆け巡っていく。

「ハアアアア……」

「死ね！」

銃弾が放たれる。しかし聞こえてくるのは着弾した際の爆発音。そして爆発の中から見えたのは、宙に舞い上がる砂塵。ナツクル星人の目の前に、既にオーブの姿はいなかったのだ。

「なっ!?!」

「……悪いな」

その声は背後から聞こえた。背筋が凍る……というより全身から熱が奪われ、五感が徐々に遠のいていく感覚だった。そして決定的だったのは己の影。地面に目を落とすと、自分の影に刻まれたX字の跡。それはつまり……

「お前を斬った」

オーブは雷の如く神速で相手を斬り裂く技“ブリッツナイトリキテイター”でナツクル星人を討ち取っていたのだ。

自分が斬られたのだと自覚すれば、徐々に意識が朦朧としてくる。

「ああ……この夕日も……いずれ……吞まれてしまうのか……」

それだけを言い残し、ナツクル星人は地面に倒れ大爆発を起こした。

——爆発の煙が風に運ばれていく。そんな場所に佇むオーブの姿を、夕日はいつまでも照らしていた。

くく

2体が倒されウルトラマンが去った後、すぐさま工事の音やサイレンが響いてくる。そんな今となっては当たり前になりかけている景色を見ながら、アオボシは歩き出そうとする。しかし彼の声がそれを止めた。

「はあ……はあ……鞠莉さんに場所聞いて来たんだ」

「何の用だ？」

少しの沈黙の後、一眞は尋ねた。「……これからどうするんだ？」と。

「……なんだい急に。そもそも、君が気にすることかい？」

それは尋ねた一眞自身も不思議に思っていたことだった。以前まで敵対していたはずなのに、今は彼のことを気にかけてしまう……ということ。

「まあいいさ。今の僕にとつて、君が勝とうと、アルファルドが勝とうと……正直どつちでもよくなった。だから僕はこれから、君たちの行く末を見届けることにしようとう」

それだけを言い残した彼は、一眞の制止も聞かずに歩き始める。

「あ、それじゃあ……僕と君の仲だし、これだけは教えてやる」

ふと立ち止まったアオボシは、振り返つて一眞に告げた。

「もうすぐ、災厄の卵が孵る。そしてそいつは、アルファルドの傀儡にされる」

「どういふことだ……？」

「残念だけど、もう孵るまで止められない。傀儡になる手筈もね。……もう、既に僕がやってしまったから」

それだけを言い残したアオボシは、今度こそ止まることなく去つて行つてしまった。

ラブライブ決勝と同じように、「その日」も着実と近づいてきているのだった。

（（

その夜、鞠莉はみんなに「星を探しにいこう」と誘った。一体どこで？ という疑問は十千万に集まった誰もが抱き、そして予想外の答えに驚かされた。

「鞠莉ちゃんの車!？」

「Yes! イタリアに行つてから必要になるから」

留学すれば必要になるだろうと、鞠莉は免許をとっていたのだ。そしてAquours 9人に乗せたワーゲンバスは走り出した。因みに、他2人は用事があるとかで行けないのだとか。

車を走らせていく中、窓から見えるのは夜の内浦。暗い中に輝く船や、その光を反射

している海の景色はとても幻想的だった。

「綺麗ね……」

「考えてみたら、こんな風に何も決めないで9人で遊びに行くなんて初めてかも」

今までにない非日常感に心を躍らせる一同。

さらに車を走らせ、ある峠道を登っていく。そしてたどり着いたのはとある駐車場。そこでは海や空を一望できるような場所になっているのだった。そして何よりも空がとても近い。手を伸ばせば、それこそ雲を掴めるくらいに。

だが天気は生憎の雨。星々を拝むことはできそうもないくらい、厚い雲に覆われているのだった。

「何をお祈りするつもりだった？」

「決まってるよ」

「ずっと一緒にいられますように？」

「これから離ればなれになるの？」

卒業後はそれぞれ別の道に進んでいく。それがわかっているのにも関わらず願うのかと、果南とダイヤは尋ねたのだった。しかし鞠莉は「だからこそお祈りしておくの」と答える。いつかまた必ず、一緒になれるようにと。

「……でも、無理なのかな？」

涙が溢れそうな眼で、鞠莉は空を見る。

いつもそうだ。幼い時、家から抜け出して3人で流れ星を見に行つた。しかしそれは叶わず、冷たい雫だけが自分たちを待っていた。

そして今。自分達だけの星は探させないと、空は嗤っているのだろうか。

「なれるよー！」

沈黙を破つたのは千歌。そして、鞠莉が大事そうに抱えてた早見盤を持って外へ飛び出す。

「絶対一緒になれるって信じてる！ この雨だつて、全部流れ落ちたら必ず星が見えるよ。だから晴れるまで……もつと、もつと遊ぼう！」

早見盤を天高く上げて、千歌は言い切る。星に手を伸ばしてもまだ見えない、届かないのなら、晴れるまで遊ぶのだと。

千歌以外の皆も早見盤星に手を伸ばす。そうすれば、不思議と不安も無くなっていく。すると

「おーーいー！」

千歌達に向けられる少女の声が聞こえた。聞き覚えのある声に、全員が視線をあちこちに移す。そして声の主は

「珠冬ちゃん……ええ!？」

「ここにいたんだね。まったく探すのに苦労したよ」

誰もが珠冬の乗っている場所に驚愕した。彼女はなんと、ウルトラマンオーブの掌に乗っていたのだから。

彼女たちの前に、ふわりと着地したオーブオリジン。そして彼は両手を地面に置く。

「これは……?？」

「一真が、今日はサービスだって!」

もう一度上へ視線を向けると、オーブは頷く。そして――

『うわあああ……!!』

全員を乗せ、空を飛翔するオーブ。彼女たちが落ちないように、そして高度のアレコ

レを考慮して、球体状のバリアの中に入れてもらっている。

雲の中を突っ切った先にあったのは、満天の星空だった。先ほどよりもより星との距離が近くなったこと、そしてまるで自分が鳥になったかのような感覚に、誰もが感激していた。

「あ、あれ!!」

誰かが呟く。その先には、黒い空を駆け抜けていく流れ星が。その幾つもの星の雨は、まるで彼女たちを祝福するかのように。

手を合わせ、各々は星に願いを届けていく。

——見つかりますように。輝きが、私たちだけの輝きが……見つかりますように

第66話 彼女らがいた場所

「こそ、そつち気を付けて！」

「こつちはOK、固定して」

朝から騒がしいくらいの作業の音。そして生徒たちの声。校庭や校舎からも掛け声や、杭を打ち付ける甲高い金属音が聞こえてくる。

それは校門で作業をしている3人も同じだった。

「できた！」

「立派ね」

「うん。今までの感謝をこめて、盛大に盛り上がるよ！」

彼女たちが立てた手作りの門には「閉校祭」と書かれていた。

「そう言えば一真くんは？」

梨子は思い出したかのように、少年の名前を口にする。

「確か他の出しものの手伝いに行くって言ってたかな」

「学校の中じゃ数少ない男手だしね！」

「そうなんだ」

「どうやら一眞は他の場所を手伝っているらしい。どうせ彼のことだ。頼まれたら二つ返事で応じたのだろうと梨子は笑う。」

閉校祭を開催することになったのは、最後は卒業生や近所の人たち、みんなで盛り上がるイベントをやりたいというのを理事長に提案したことが始まりだった。「3学期のこんな時期に」と思うかもしれないが、他の生徒も最後だしとやりたいと声をあげてくれたのだ。

「それじゃアーチの設置が終わったこと、鞠莉ちゃんに報告しに行こう」

そうして3人は駆け足で鞠莉がいるスクールアイドル部部室へと向かった。順調そうに見えて、実はかなり遅れている。開催は明日なのだが、このままでは夜までに帰れそうもない。でも、それでも彼女たちは構わないだろう。こうして準備している時間も、楽しんでいっているのだから。

「いや〜ありがとね一眞さん！」

「僕たちの部にも駆け付けてくれて！」

「駆け付けてない。ってかお前らが勝手に引つ張ってきただけだろ」

腕を組み、いかにも面倒だといわんばかりの顔で対応している一真。とはいえ、彼も内心楽しんではいらぬ。しかし、彼らにバレると茶化されたり揶揄われるなどされて鬱陶しいから本心は明かさないが。

「そんなこと言つて、積極的に手伝つてくれたじゃないっすか」

「お前らがやるべきところだぞ」

「まあいいじゃん」

なんとも調子のいい奴らだと、一真はため息を吐く。彼らは同じクラスの松戸と、1年生の早見だ。彼ら2人とあともう1人、3年生の先輩で部を結成しているのだが、その実態は新聞部なのかオカ研なのかよくわからない状態だ。ここに至つて、ダイヤは何も言わなかつたのかと思いたくなる。

「で、何を飾るんだっけ？」

彼らはこれまでの活動の成果を展示するという内容で閉校祭の準備を進めているらしい。一真が尋ねると「やつぱり気になつてるんじゃないっすか〜！」と早見に肘でつつかれる。さらに松戸も、待つてましたといわんばかりに誇らし気に話をはじめめる。

「僕はこの小型気象観測装置かな。うまく作動すれば、竜巻を追跡できる。まあ、僕の発

明品が作動しないわけないけど」

「それはやっぱり俺がこれまでに撮ってきた動画ですよ！ 最後の最後だし、ここで出してあげなくちゃ」

楽しそうに語る彼らを見て、一眞は「そっか」とだけ呟く。

その後もなんやかんや楽しく作業していると、彼らのいる部室の中にもう1人少女が入ってきた。

「もう遅いつすよー！」

「いままで何やってたんですか？」

「ごめんごめん。私たちの教室の方に力入れちゃってて……」

申し訳なきそうに入ってくるのは3年の先輩。この部の部長でもある。

「あ、そうだった。一眞くんはそろそろ自分の担当に戻って大丈夫だから！ ごめんね、

この2人が迷惑かけて」

「いいえ、俺も好きで手伝ったわけですから」

一眞の言葉に、聞いていた2人は悪びれる様子もなくコクコクと頷く。しかし、彼らも手伝ってくれたことには感謝の言葉を口にしてくれていたし、自分も楽しかったのでチャラだ。

「じゃあ俺はこれで」

そうして一眞は部室を後にしたのだった。

「そう言えばさつきうちつちーを見かけましたけど、一体何なんでしょうかね？」

「まさか、デカイス——」「な訳ないでしょ！ それよりほら、残りの準備も終わらしちゃうよ！」

くく

「千歌ーって、あれ？ いない……」

一眞は千歌たちの担当する教室に向かったのだが、そこには彼女はおろか、一緒に担当している梨子の姿もなかった。

「千歌ちゃんたちならさつき出ていったけど……」

「え？ そっか、ありがとな」

すると同じ教室の生徒が、少し前に教室から出ていったという事を教えてくれた。理由は何でもうちっちは追ってだそうだ。

なんで追いかけたのかと疑問に思いながら階段を降りていくと、これまた何故か準備室前にいる善子やルビィ、珠冬を見つけてしまい、一眞は話し掛ける。

「おい、何やってんだ？」

「ひいつ!？」

「ピギツ!？」

声をかけただけで驚かれたことに若干ショックを受ける。当の本人たちは一眞だと分かった瞬間に胸を撫で下ろし「ビックリさせないでよ」と小言を言いながら、これまでのあらましを説明してくれた。

「お化け……?？」

「そうよ。こ、この中に入っていくのを見たんだから!」

「今千歌さんたちが中で探してるんだけど……」

うちっちは曜じゃないかと思つた千歌たちはそれを追いかけたのだが見失つてしまったらしい。そして今度は白い布を被つた何者かが準備室に入っていくのを見かけ、その正体を探るためだとかなんとか。

おい、うちっちは探しに行った話はどうなっているんだ? というツツコミは置い

ておくとし、扉の窓から準備室の中を見る。するとルビイの言う通り、千歌や梨子、花丸が中で探し回っているようだった。

「一眞も千歌たちに加勢した方がいいんじゃない？ ほら、ヨハネにはない光の勢力の力を持っているわけだし……？」

「そりゃ否定しないけど、お化けには墮天使の力の方が——」「私はここで結界を張ってみんなを守らないといけないの！」

食い気味に善子は自分の役割を話し始めたので、一眞は確信する。ビビッてるな、と。墮天使云々を言ったのも揶揄うためだ。

「ビビッてるの？ 墮天使が？」

「うっさい！ じゃあ珠冬が入ればいいじゃない！」

「無理無理無理！」

珠冬くらい正直な方がいいなとも思うが、確かに墮天使が怖がりにはアウトな気もするため黙っておく。

「わかったわかった。ヨハネの願いに従って見てくるよ。結界の方はよろしく〜」

「だから善子よ！ あ……」

そうして一眞はドアを開くのだが、彼らが見たのは既に千歌が白い布を取っ払っているところだった。千歌たちが見たものは……

「なんだ、しいたけちゃんか……え？」

「お化けな訳ないじゃない」

いやそれ以前におかしいだろと声をあげようとする。しかし準備室に入らなかった3人の後ろにうちつちーが2人立っており、そのせいで3人の声が校舎内に響いてしまったため、それどころではなくなった。

さらにしいたけが校舎内で暴走。挙句の果てにはアーチを倒して逃走という笑えもしない事態を引き起こしてしまったのだった。

結局、閉校祭の準備は予定通りには終わらなかったが、許可が下りた生徒は夜まで残っていいという事になった。帰りは小原家を送っていくというのだからありがたい。

「はい、お待たせー！ 千歌ちゃん家特性みかん鍋ー」

教室内では美渡がしいたけを放してしまったお詫びにとみかん鍋を頂いたので、みんなまで食べていた。

「結局、その恰好は？」

さらにうちつちーの着ぐるみ身を包んだ果南に、梨子は説明を要求する。元はと言えば、これを追ったのが事の始まりだった。

「曜と2人で、教室に海を再現してみようって」

水族館のマスコットキャラクターでもあるからという理由なのだろう。そして曜の

伝手で借りてきたといふところまで見えてきた。

しかしその恰好で校舎や外を歩き回られると更なる混乱の種になりかねない。だから梨子はもう本番までは着て出歩かないでと注意する。

一方一眞はアーチの修繕を行っていた。

普段ならばもう真つ暗だと言うのに、今は各教室の電気が点き、それが一眞のいる場所を照らしてくれていた。夜の中光る浦の星の光景は、なんとも不思議な気分にかけてくれる。

「よし、これで終りつと」

杭を打ち付けた一眞は、これで安心だと息を吐く。それと同時に、時々吹く冷たい空気が彼の頬を撫でる。アーチを修繕させるために働かせた身体を冷ますには丁度良い風だ。

「お疲れ！」

背後から聞こえてきた声に振り返る。するとその声の主である曜は、そのまま彼のもとへと歩いていく。

「千歌ちゃんと呼んできたよ。一緒にみかん鍋食べようって」

「ああ、そうだったな。忘れてた」

つい作業に夢中になってしまっただけで忘れていたと、一眞はにかつと笑う。すると曜も、彼につられて口元が緩んでしまうのだった。

そろそろ戻ろうかと踵を返しかけたところで、曜はふと、校門近くに置かれていた箱に目を移す。

「これ……」

そう。忘れもしない、千歌がスクールアイドル部勧誘の時に立っていた箱だ。思い返せば、あそこからすべてが始まった。

「懐かしいな」

「そうだね。それに全員じゃないけど、既にこの場所で会ってたんだよね」

運命が存在するとしたら、きつとあの時のことを言うのかもと思う。そこから随分と遠いところまで来てしまったと感じるのは、自分の思い出補正のせいなのかと一眞は考えていた。

「カズくんはさ……」

彼女は不意に「卒業したらどうするの？」と聞いてくる。恐らく閉校祭や卒業に関連して、聞いてみたくなったのだろう。

「オイオイ、それは決勝が終わるまで考えないんじゃないやなかったのか？」

「カズくんは別にいいでしょ」

「んだそれ……」

俺は良いのかよと思ったが、実際のところ先のことなどあまり考えたことがなかった。これもいい機会だと一眞は考えをめぐらすも、これといって明確なビジョンがあるわけでも、ましてやりたいことがあるわけでもなかった。

「うーん……わからない。まだ何も決まってるない。でも、今はそれでいいかなって」

「そっか」

現状に手一杯だから考える暇もないというのもある。ラブライブに、迫りくる侵略者たち……。しかしそれ以外にも、今は目の前にあることに全力を注ぎたいという想いも同じくらいにあった。

「でもまあ、ラブライブ決勝が終わったら、そんな時はゆっくり考えてみるよ」

「見つかつたその時は、真っ先に教えてね」

「どうだろうな」

一眞の応答に不満を漏らす曜だったが、暫くして2人は笑い合つた。

でもいつその事、こんな瞬間がずっと続けばいいのにも思ってしまう。叶わぬ夢ではあるのだが、どうしても。

くく

翌日。閉校祭は生徒や地元の人々など、たくさんの人で賑わっていた。

「ここは広くて深い、内浦の海！」

果南と曜はうちうちーの着ぐるみに身を包み、園児たちを楽しませていた。教室内を青い光が照らし、彼女たちが言っていた海が再現されていた。

「まだまだラブライブマニアには遠いですわよ！」

ダイヤとルビィは、ラブライブやスクールアイドルに関するクイズを出題していた。

クイズに参加している生徒を差し置いてダイヤが正解している様子は、彼女が本当にスクールアイドルが好きなんだという事を感じさせてくれる。

「占いに……」

「興味は……」

「ないですか……？（ずらか……？）」「」

千歌を呼び止めた花丸と珠冬は、死んだ顔でそう尋ねる。尋ねられた本人の千歌も、なんとも言えない状態で困惑していれば

「占いに興味はないずらか!？」

「ええ……」

どうしてもと花丸が手を握って聞いてくる。そんな花丸のお願いに、少々押され気味の千歌。

「千歌さん、どうか……は……!？」

「珠冬ちゃんまで……」

手を合わせ、頭を下げる珠冬まで見てしまった千歌は、彼女たちと共にある教室へと向かっていくのだった。

皆が閉校祭を楽しんでいる中、一眞はぶらぶらと校舎や校庭を歩いていた。様々な出しものを自身の目で捉えていく中で、みんな最後とかは関係なく、“今この時”純粹に楽しんでいるのだと感じていた。

「……」

しかし心のどこかを小さな針が刺してくるように、一眞の感じている後悔、そして無力感の時折顔を覗かせるのだった。

「せっかくみんなが楽しくやってるのに、その顔はなんだい？」

「……っ!? お前、どうしてここに？」

「どうしたんだ。まるで鳩が豆鉄砲を食らったみたいな顔をして。そもそも、ここは出入り自由だろ。僕だけ歓迎されないなんて悲しいじゃないか」

驚愕する一眞とは対照的に、背後に立っていたアオボシは楽しそうに笑う。そこには、以前のような邪悪さはあまり感じられなかった。

「そうだけど、でも……」

「シリウスがそう言うのもわかるよ。まあただ単に、楽しそうだから来ただけさ」

裏があるのではと勘ぐってしまうが、今の彼にはそのような感情はないだろう。その証拠に、両手にはたくさんの食べ物を持っている。屋台で買ってきたのだろう。

場所を移動した2人はベンチに腰かけていた。あんなに敵対していたのだがやはり旧友同士、実はそこまで嫌っているわけではないというのが実際のところなのだろう。

「これがシャイ煮……」

物珍しげにシャイ煮を見つめ、口に運ぶアオボシの横で一眞は口を開く。

「なあ……」

「……？」

一眞が考えてきたこと。それはアオボシがどうしてここまで歪んでしまったのか……ということだった。本当のところはよくわからない。でも、原因の1つに自分も含まれているというのわかる。だって彼が喉け、戦ってきた目的はオーブの……暁一眞

の敗北だったから。そこには、今はない母星での出来事も関係しているはずだ。

「……すまなかった。俺は……お前のことをわかつともしないで、ただ追い詰めてた」
アオボシが葛藤を抱え、たくさんの悩みを抱えていた筈なのに、気付きもせず突っ走っていた。それが彼を追い詰め、このようなことになってしまった。原因は自分にもあるのだと、オーブシャドウとの戦いを通じて感じていたのだった。

「何を言ってるんだ。僕は僕で選んだ結果さ。君が謝る必要はないし、むしろ謝らないでくれ。正直気持ち悪い」

「なあ!? そんなこと言うか……」

一眞は肩を落とすが、アオボシもアオボシで何か思うところはあったのだろう。「半分冗談、半分本気ってとこにしておこう」とフォローを入れた。

「前にも言ったけど、もうそんなことはどうでもいいんだ。自分でもどうしてあそこまで狂っていたのかわからないほどにね」

アオボシは天を仰ぐ。すると何かに気が付いたのか、一眞の腕を肘で突く。

「なんだよ」

「あれを見てみる」

アオボシと同じ方向に視線を向けると、「浦女ありがとう」と形どった風船が色とりどりの風船と共に空へと昇っていく光景がそこにはあった。みんなの学校への感謝の気

持ち、それが羽ばたいていく。そこにはこれまで浦の星へと通っていた者、そして通っている者のすべての気持ちなのだと思わせてくれる。

「……本当にここはいい場所だね。僕みたいなのやつが居ていい所じゃない。シリウスや Aqours、そしてここに住む人たちがいるべき場所だよ、ここは」

「なんだよ……らしくない」

「フフツ、うるさい。……さて、邪魔者はここで退散しておこうかな」

この学校にいる誰もが空へと羽ばたいていく光景に声を上げる中、アオボシはベンチから立つ。

「こんな気分を壊しちゃうのは嫌だけど、君のために言っておく。ヴィルゴとプロキオには気を付けなよ。アイツらは頭のネジが飛んだ異常者だ。君を倒すために今も何か計画している」

アオボシは振り返ることなく、一真にそう伝える。一真はただ、彼の警告を黙って聞いている。

「まあ、君なら大丈夫だろうけどね」

ぎこちない笑みを浮かべるアオボシに一真も立ち上がって、こちらも負けるつもりはないという旨を伝える。

「だと思った。あと、小原鞠莉に伝えておいてくれ。シャイ煮、美味しかったってね」

く

——勇氣はどこに？君の胸に！——

日も落ち、空は黒くなり星々が瞬き始めたころ、閉校祭の最後はキャンプファイヤーで締めくくることがとなった。今日ここに来た人たちから伝わったのは、浦の星がどれだけ愛されていたのか、どれだけ大切だったのかということ。

楽しい時間がずっと続けばいいと思うけれど、それでもどうなるかわからない未来がのほろが楽しみだということ。

二度と同じ時間が来ることはないのだから、今こうしていられるのが一度だけと分かっているから、全力になれる。

燃える木々を見つめながら、一真たちは最高に明るく楽しく声を出して歌う。

燃え尽きた木々を寂しそうに見つめる生徒たち。それは閉校祭が終わったのを伝えるのと同時に、学園自体の最後を伝えるものでもあった。

しかしそれでも、ここにあつたことは消えない。これからも形を変えて残っていく。そしてまだ、挑戦は続いているのだ。

やり残したことなどないと言える日が来るまで、今を全力で駆ける。それが彼女たちの、今できること。

第67話 ロートスの果実

朝の日射しが顔に掛かり、暁一眞は目を覚ました。上半身を起こした彼は肩を回したり、ストレッチをしながら意識を覚醒させていく。そのまま時計に目をやると、登校までは十分余裕のある時刻であつた。まだ寝ていたいという欲を抑え込み、一眞は布団から出て畳んだ後部屋を出ていく。

居間に来たものの、そこには誰もいなかった。恐らく兄も妹も、先に出ていつてしまったのだろう。

「早いな……」

誰も反応することがない沈黙の中、一眞は洗面所へと向かつた。

その後制服に身を包み、適当に朝ご飯を口に突っ込んだ一眞は家を後にする。外に出るとすぐさま入ってくる秋の太陽の光がまぶしく、彼は思わず手で遮ってしまう。

「今日もいい練習日和だな」

なんて暢気なことを言いながら、一眞はバス停へと向かつて歩いていく。バス停には

既に先客がいるようで、こちらに気が付くと元気に手を振ってきた。

「一眞くん、おはよー!」

「おはヨーソロー!」

「おはよう」

「ああ、おはよう」

千歌のあいさつに始まり、曜、梨子とバス停であいさつを交わしていく一眞。

「今日は一眞くんが最後だね」

「ああ、いつも通り千歌が最後だと思ったのにな」

「残念でした! わたしだって頑張ってるんだよ!!」

「毎日だったらしいのに……」

どうやら日によってビリは違うらしい。千歌が寝坊するだろうという予想が外れたことに一眞はぼやき、対する千歌は腕を組んで誇らし気だ。そんな彼らのやり取りに、隣の梨子のため息を吐いてしまう。

その後は他愛のない話をし、バスを待つ4人。まったく変わらない、いつもと同じ日常だった。

「珠冬ちゃんはもう学校に行ってるの？」

「俺が起きた時にはもういなかったから、多分そうなんじゃないか」

バスの中でも話は続く。今は彼の妹である珠冬の話へと移っていた。珠冬もAq oursのマネージャーとして活動しているのと同時に、図書委員の仕事などもやっているそうだ。当初は花丸と同じく悩んでいたが、説得されて春に入部したのだった。

「ねえ、お兄さんや妹がいるってどんな感じ？」

兄妹というものに興味がある曜は一真へと尋ねる。一人っ子というものもあるだろう。さらに「私も聞きたいと」梨子も加わる。

「つつてもな……別になんも……ただ気が付けばいたって感じだし、兄に至っては生まれて……ん？ 生まれて……」

どんな感じだと聞かれても、明確に言語化できるものではなかった。しかし、頭をはたらかせていく中で、一真はある違和感を感じた。しかしそれが一体何なのか、一真にはわからなかった。

「一真くん？」

「……あ、ああ。と、とにかく、もう当たり前前の存在だから意識なんてしないってことだよ」

先ほど感じた違和感の正体は全くわからないが、そんなことはどうでもいいと言わんばかりに頭の中から消え失せていく。

今まで感じることもなかった違和感に戸惑いつつ、彼は窓の外に目を向ける。漁港や富士山、淡島、そして青い海。どれもこれもここに生まれてからずっと見てきた景色だ。それらは変わりなく自分たちを見守ってくれているのだと感じる。

「……くん、……真くん」

「一真くん？ 学校、もう着くよ？」

「あ、ああ悪い」

違和感に悩まされるも曜の声で現実に取り戻される。先ほどまで感じていたものは何か、考えようとするも……

（——何考えてたんだっけ？）

忘れた。いや、最初から考え事などしていなかったという認識の方が正しいかもしれない。

それはそうと、浦の星学院近くのバス停に到着する。バスを降りれば、また眩しい太陽の光に照らされ、おなじみの潮の匂いが鼻孔をくすぐる。

「あつたけ……」

一眞は道中、背伸びをしながら眩く。すると梨子も「そうね」と同意しながら、何か勘付いたのか彼の方に向き直って注意を促した。

「気持ちいいからって、千歌ちゃんみたいに寝ないでよね」

「……善処する」

「どうだか」

その言葉への信頼度はえらく低いようで、梨子は疑いの目を向けている。しかしこのやり取りの一番の被害者は、例として挙げられた千歌だろう。本人も聞き流す気はサラサラないようで「梨子ちゃん酷い！」と抗議する。

「でも、最近は授業ちゃんと受けてるよね」

「だよな。まあ燃えてんだろ。いや、まだ継続してるって感じか」

曜と一眞の話聞いて千歌は「当たり前じゃん！」と返し、そのまま校門まで走り出した。

校門前に辿り着くと、千歌は自然と足を止める。彼女の背中を追い駆けきた3人も、同じように隣に並び立って校舎を見上げる。そしてふと、千歌は嘯みしめるようにある

言葉を呟く。

「私たちが救ったんだよね……」

「ああ。お前たちが救ったんだ」

「まだ、現実味がないんだけどね」

「私もかな」

みんなで足掻こうと決めたあの日から始まり、幾多の壁が立ちふさがることもある。途中で歩みを止めそうになったこともあった。しかしそれでもあきらめずに挑戦を続け、遂に果たすことができた。自分達で言っておきながらまるで夢物語のようだ。涙を流し、笑いあつたのも記憶に新しい。

「つつてもまだ終わつたわけじゃない。決勝だつて控えてる。見つかった輝きを、そこで見せつけるんだろ？」

一眞の問い掛けに、3人は力強く頷いた。

「あ、そろそろ時間！」

「やべ!! 急ぐぞ!!」

ここで達成感や感動に浸っていたところだが、そろそろホームルームの開始時間になりそうだ。遅刻するわけにはいかないと、慌てた様子で彼らは玄関へ走っていく。

「……? 救った?」

足を止めてしまう一真。やはり何かがおかしい。しかし“おかしい”と感じても、“何がおかしいのか”まではわからない。

言葉にできない何かだが、どうしようもない不快感となって胸の中を駆け巡る。

「ほら一真くん、はやくー!」

「あ、ああ!」

未だ消えない不快感を抱きつつも、彼は教室へと走っていくのだった。

くく

結局、先ほどの違和感が消えさることはなかった。喉に刺さった小骨のように、一真

の中に残留し続けた。ペンをノートに走らせていた授業中だつてそのことで頭がいっぱいで、内容なんか入ってくるはずもなかった。千歌たちと談笑しているこの休憩時間中だつてそうだ。空返事でも何も言われたいのは、3人での話がヒートアップしているからだろう。

「千歌ちゃんなんて小学校の頃——」

「へえ、そんなことがあつたんだ」

「な!? 曜ちゃんだつて——」

談笑を続ける彼女たちの声が遠い。いや、この教室内にいる生徒全員の声が……と言つたほうが良い。いつもと同じ光景、変わりの無い空気の震え。だというのに、自分だけが取り残されているような異物感。疎外感まで感じる。まるでこの教室、この世界が創造物のようだ。しかし、彼は頭を振つてその邪念を振り落とそうとする。

だつて、暁一眞は

（——ずつとここで過ごして来たじゃないか）

……ずつと? 思考が止まる。第一、ずつとはいつからのことを言っているのか。

高校に入学した時から? 中学? 小学校? それよりもずつと前?

（俺はいつ千歌たちと知り合つたんだっけ?）

呆然とした記憶の中に出てくるのは「小学校の頃から」という、漠然としたもの。し

かし、小学生の自分が見たであろう、彼女たちの姿は全く出てこない。思い出せない。「一真くん、ちゃんと聞いている?」

「ん? あ、ああ。聞いている」

「……大丈夫? 今日ほちよつと変だよ」

曖昧な返事に、千歌は彼の顔を覗き込む。今の自分を悟られたくなくて、咄嗟に「めん聞いてなかった」と訂正する。

「だから覚えてるでしょ? 小学校のころ!」

「……っ!」

丁度、考えていたことと話題が一致してしまった。言葉を失いそうになるがギリギリで堪え、適当に、それでいて怪しまれない程度に言葉を紡いでいく。

「わたしや曜ちゃん、一真ちゃんと珠冬ちゃん。あと果南ちゃんと和哉さんで遊びに行っただでしょ?」

「……そういえばそんなことがあったな」

口では懐かしそうに言ってはみるが、そんなことなどあったらどうか。しかも小学校の頃に。疑った一真の心とは裏腹に、頭の中では確かにその時の様子が思い出される。まるで他人の中を頭を覗いているかのような感覚。

「ねえ、ホントに聞いている?」

「具合が悪いなら、ちゃんと行ってよ?」

どうやら体調がすぐれないように見えたらしい。まあ、今感じている違和感に振り回されている状態では、とてもいい気分とはいえない。

すると、教室に残っていた生徒がゾロゾロと廊下に出ていく。

「次は移動教室だったね」

「私たちも行こっか」

席を立ち、廊下に出ていく。そんな中、たまらなくなつた一真は、遠ざかっていく千歌の背中に向かって呼びかける。

「なあ、千歌」

「…………? どうしたの?」

「学校を…………救つたんだよな?」

きよとんとした顔から、笑いに変わつたのはほんの一瞬。そして彼女の口から飛び出たのは、今は聞きたくないと思わせる、あの言葉だった。

「そうだよ。ラブライブ決勝に進出して、定員も1000人以上集めて廃校を阻止したじゃん! 忘れたの?」

結論から言うと、あの後一眞は保健室に直行した。保健室のベッドに座り、彼はこれまでのことを考えていた。千歌の言葉で、少しは頭がクリアになった気がする。

そう、全ての事象が一眞自身の経験してきたものと全く異なっている。何故今まで違和感だけで済んでいたのか不思議なくらいだ。廃校を救っている、自分に兄妹がいる、そしてここで生まれて育ったという過去……全部が全部、あり得るはずのないもの。

ではなぜこのような偽りに囲まれた中で、何も疑わずにいられたのか……。今朝なんて、操られた人形のように全てが本当ことだと思い込んでいた。周りが変わったのか、それとも自分だけが別の世界に放り込まれたのか。

何はともあれ、みんなを正気に戻す、あるいは脱出する方法を探らなくてはと思いついたところで、ベッドを仕切るカーテンが開けられた。保健室の先生が、様子を見に来てくれたのだ。

「具合はどう？」

「はい、大丈夫です。さつきよりはマシになりました」

「そうね、顔色も良くなつたみたいだし。あ、でもお水はちゃんと飲んでね」

横に置かれていたコップに視線を移す。そう言えば、まだ飲んでいなかったなど一眞は一気に飲み干した。

だがそれがまた失敗だったとは、今の一眞にはわかる筈もないことだった。

(さて、ここからどうやって……あれ……?)

途端、意識が朦朧としてくる。そしてあろうことか、先ほどまで考えていたことを完全に忘れてしまったのだ。書かれた文字を消しゴムが消すように、汚れが水で落ちるように……きれいさっぱりと。

「あれ……俺は今まで何を……?」

先ほどまでの疑いは消え、彼はまた教室へと戻っていくのだった。

学校を終え、自宅に戻った一眞。今の彼には、この世界がどうか、脱出しようだとかなど微塵も考えていなかった。ただこの世界で生を受け、そして命を落とす。そういうものだと思つて。

「一眞、今日は練習とやらは良いのか？」

一眞の自室に入ってきたのは暁和哉。学生服に身を包んでいることから、彼も学生のようにだ。彼の言っている「練習」というのは、十中八九スクールアイドルの事だろう。

「ああ。決勝が近いけど、まずは休ませることが大事だつてダイヤさんが言つてたから」
「そうか。じゃあ珠冬は？」

一緒に帰ってきてきかないのを不思議に思つたらしい。口に出すと本人は否定するだろうが、和哉はシスコン疑惑がある。絶対に本人は否定するだろうが。

「さあ。花丸たちと遊んでいるんじゃないの？」

「随分と適当だな」

「あのねえ、俺だつて全部を知つてるわけじゃないんだから」

「……それもそうだよな」

ため息を吐きつつ部屋を後にしようとするも、彼は足を止めて一眞に尋ねる。「その顔はどうしたのか」と。心当たりがないと一眞は聞き返すと、「寝不足か？」と茶化され去り際に「今日は早く寝ろ」と言われてしまうのだった。

「なんだよ……。うん？」

顔を擦ると、手の甲に冷たい感触が。視線を移すとそこには液体が。恐らく己の目から流れ出たものなのかもしれないが、流れた理由は今の一眞にはわからないだろう。

「変だな……。どうして泣いてなんか……」

今の一眞は疑うことなく、拒否することなくこの生活を享受している。どうにかしたい、脱出したいなんていった余計な感情だつて抱くことはない。なぜならここには、彼が心のどこかで密かに望んでいるすべてがあるのだから。

本来在り得ることのない、偽りの世界。彼らの住まう世界の片隅で、桃色の羊がジツと一眞を見つめていた。

第68話 ポバートルの暗躍

ことは2日前に遡る。

ちやうど内浦に出現した地底怪獣テレスドンを止めるために、オーブが戦っていた時のこと。

「コイツ……なんか変だぞー！」

強靱な腕力でテレスドンを押しつけたサンダーブレスターは、眼前の怪獣の様子にいつもとは違う“何か”を感じていた。

まず見た目だ。目が赤く変色し、首元に虫刺されのような腫れが浮かび上がっている。そして次に動き。体力がないのか、フラフラとまるで屍のような状態……。だといふのに、目の前の獲物に食らいついてくるかのような様。死にゆく体で人形のように動かされ続けているかのような姿に、一眞の背を冷たい雫が流れていく。

「ゾンビかよ……！」

ややカウンターの気味のドロップキックが、テレスドンの首元に炸裂。苦悶の声とともに

に、地響きを立てる怪獣にオーブは飛び掛かる。馬乗りになって打撃を数度浴びせた後、尻尾を掴み放り投げた。

「ウウ……オオオオオッ!!」

「■■■■ ツー……」

重量のあるテレスドンを投げ飛ばしはしたが、そのおかげで腕に力が入らなくなる。かといってヤツがご丁寧に待つてくれるわけではない。激情に駆られたテレスドンは体をドリル状に高速回転しながら体当たり。

「……………?!? サンダークロスガード!」

咄嗟のガードで致命傷を避けたはいいものの、地中を掘り進むための硬い体と回転力には咄嗟のガード如きで対抗できるはずもなく、オーブは吹き飛んでいく。

「……………この野郎!」

立ち上がったオーブへ追い打ちと言わんばかりに口から溶岩熱線を吐き出す。だがオーブもやられっぱなしになるわけにはいかない。ゼットシウム光輪を前方に投擲し、熱線を防いだのだ。そして空高く跳躍。落下の勢いも合わせ、両手をテレスドンの頭部に振り下ろした。

顔面を地面に打ち付けたテレスドンに、オーブはトドメだと距離をとる。

「もう眠ってる!」

十字に組まれた腕から放たれるゼットシウム光線を受け、テレストンは爆散するのだった。

(終わったか……)

一瞬にして静寂を取り戻した内浦の大地から飛翔しようと、オーブは空へ目を向ける。すると彼の強化された視力は、人間ではまず見えないであろう距離に光のカーテンを視認する。

だがオーロラというのは、天体の極域近辺に見られる大気の発光現象であり、限られた場所で見ることができない。日本でも北海道くらいだろう。だから本来はここで見られること自体があり得ないのだ。

(なんだあれ……調べてく——)

地面を蹴ろうにも足に力が入らない。さらに感覚も鈍くなり、何よりも瞼が重い。

(こんなの……はじめてだ……あれ……)

意識を失うようにして倒れたオーブは、そのまま変身が解けてしまった。オーブが倒れた場所には、一真がうつ伏せの状態で倒れており、すぐさま彼の意変に気が付いた千歌たちが駆け寄っていくのだった。

「先生はなんて？」

近くの病院に運ばれた一眞。彼は今、ベッドの上で横になっている。そして数十分後、意志から話を聞き、戻ってきた果南とダイヤに残っていたメンバーは詰め寄る。

「容体は安定してる。というより体は健康そのものだつてさ。ただ……」

「ただ？」

「脳が活動し、覚醒状態にあるそうです。所謂レム睡眠といわれている状態ですわね」

要はただ眠っているだけではないかと安堵する。確かに、彼にも疲労が溜まってきているだろうと緊張の糸が解れ掛けたその時、ダイヤは浮かばない顔で「しかし」と付け加える。

「“ずっとレム睡眠の状態”なのだそうです」

「……どういう事？」

「いいですか。睡眠時には普段、レム睡眠とノンレム睡眠を繰り返します。ですが今の一眞さんの場合、レム睡眠だけを行っているという状態なのです」

空気が冷えていく。専門的なことがわからなくても、ダイヤの語ったことにより一眞

の置かれている状況の不気味さが浮き彫りになっていく。

「私たちにできることって……」

「今は……なにも」

粗方予想通りの返答がダイヤから放たれ、一同は沈黙。鎮まった病室の中で聞こえる一眞の規則正しい寝息は、見ている側に安心を与えるものではなく、むしろ底知れない不安を抱かせる。

「我が墮天使の力を持ってしても、リトルデーモンに干渉できないとは……」

「そんなこと言ってる場合じゃないすら」

「わかっているわよ、そんなこと……」

不安に押しつぶされそうだからこそ、いつも通りに振舞おうとしたのかもしれないが花丸に戒められてしまう。当の本人も不味いと感じているため、バツが悪そうに答えていた。

「とにかく、今日はもう遅いですし、ひとまずは解散にしましょう」

皆に帰宅を促すダイヤの声も落ち込んでいる。しかし、病院にも面会時間というものがある。個人的な理由で、ここに居続けることはできない。

やり場のない気持ちを胸に、彼女たちは病室を後にするのだった。

（
）
そして一眞は、所謂“夢の世界”に引きずり込まれたのだ。そこでの彼は、和哉や珠冬とは実の兄妹という関係となっていた。夢の中とあり、無論和哉も生きている。さらに浦の星の統廃合の危機も、Aqoursの地区大会での活躍により希望者が100人を越えたことで学校を救った……ということになっている。しかし今の一眞は気付かないだろう。一時的にこの偽りの世界から逃げ出そうとしたが、再びこの世界での生活に戻されてしまったのだから。

「一眞くん、一緒にご飯食べよう」

「ああ、わかった」

彼は統廃合の危機が消えた浦の星で、平和に暮らしていた。学校で授業を受け、放課後にはスクールアイドルの練習を手伝い、そして家に帰る……そんな毎日を。あり得たかもしれない日常を。

（……………おい……………おい、いい加減目を覚ませ！）

「……………っ!？」

「ん、どうしたの?」

そんな一眞に、突如として響いてくる声。聞き覚えの無いその声を聞いて立ち止まる彼に、曜たちは首を傾げる。

「あ、いや……」

(いつまでこの世界にいるつもりだ)

頭の中に響く声は先ほどよりも明確に、一眞へと呼びかける。

「そ、そうだった。俺ちよつと先生に頼まれてる用事あつたんだつた。先にそれ片付けてくる」

誤魔化して教室を後にした一眞は、中庭へと出る。そしてそのまま校舎の陰へ。そこまで行けば人の目はないだろう。

「なんなんだよ」

(オレが君に伝えられる時間は限られてる)

「……」

謎の声によって、一眞の頭にかかった靄が消え始めていく。だがそれよりも、頭に響く声の方に一眞は意識を持っていく。

(ここは夢の中に作られた偽りの世界。誰の目論見かは知らないが、オレ達はまんまと嵌つたみたいだ)

「……夢？ 誰のだよ!？」

(君自身だ。君の居たいと思える世界を何かが構築したんだ)

成程。和哉が生きていて、浦の星も救われた世界線。確かにここに閉じ込めるには十分な設定だ。

「最悪だよ……」

(それだけじゃない。この世界の飲食物は実物ではないが、どうやらある種の催眠状態にさせる効力があるようだ。現実世界に帰りたいという意味を奪い、永遠にここに居させようとする)

この夢の世界の飲食物には、現実世界に戻りたいと思わせなくさせる作用がある……というのもこの世界を作った人物、或いは存在の罫だろう。何も知らずに摂取すれば一生催眠に掛かりっぱなしになるのだから。

「性格が悪いですね」

(その調子だと、どうやら効力は切れたみたいだな)

「……ええ、あなたのお陰です」

今話しかけている存在が誰なのか、一真は見当がついているようでその言葉に口角をあげる。夢の中とはいえ、千歌たちに何も言わず逃げ出すのは気が引けるなど思いつつも地面を蹴り出そうとしたその時。

「ちよつと……!? ……わかりました。ここからは俺だけで!」

その声の主は消えてしまったのか、呼びかけても反応はない。声の人物へ感謝の念を抱きつつ、一真は迫ってきている生徒らから逃げるための行動を起こす。

彼女らの行動からお察しの通り、説得の余地はないと踏んだ一真は三角跳びや限界突破した身体能力を駆使し、人々の頭上を越えていく。どうやら体の方は現実世界と同じようだ。もしくは、意識を覚醒させたおかげか。

「夢じゃ全然走れないとか言われてた……けど!」

脚を回す速さをもう一段上げる。負荷はかかるがここは夢の中。さらにこっちは追われている身ときた。つべこべ言っている状況ではないだろう。

「はあ……はあ……はあ……何とか撒けたか」

走力で突き放した後、家の陰に隠れていた一真は追手が来ないことを確認すると、肺に溜まっていた空気を一気に吐き出した。

しかし状況はあまりいいとは言えない。なにせ、生徒たちからは逃げることはできたが、この世界から脱出する方法が何も見つかっていないのだから。ここからは、どうかして抜け出す手段を探し出さなくてはいけない。誰にも見つからないように。

「厄介だな……この世界に引き込んだ奴は相当性格が悪いぞ」

自分がこの世界に来てしまった原因……その黒幕たる存在を悪く言いながら辺りを散策する一眞の目の前には、現実の内浦と何ら変わらない景色が広がっていた。

「……夢の中、つっても随分とリアルだな」

手に触れた感触、耳に入る音、頬を撫でる風や自分を照らす日光。夢という曖昧な空間の中だというのに、現実世界並みの情報量だ。これは知らず知らずのうちに飛ばされたら、区別がつくはずもない。

「ここにいたんだな」

ふと、声をかけられる。一眞が振り向いた先にはなんと和哉が立っていたのだ。

くく

一眞が夢の世界で謎の声を聞くようになった時よりも数時間前の現実世界の病室。そこでは千歌たち2年生がお見舞いに来ていた。しかし一眞はベッドに横たわったまま。話しかけても反応することはないし、回復の見込みがあるのかも怪しかった。

「大丈夫……よね？」

しばらく無言の状態が続いていたが、それは梨子の一言によつて破られる。彼女の言った“大丈夫”とは、いつものように何事もなく回復し戻ってくるという期待が込められた反面、もこのまま眠り続けたままなのではないかという不安をかき消すために言い聞かせるという想い故に出た言葉だった。

「……大丈夫だよ。またいつもみたいに戻ってくる。反省しているのかしてないのかわからない表情を作つて」

それが今までの彼じゃないかと。だが千歌や曜だつて、全く不安がない訳ではない。曜だつて、動くことのない彼の手を握り、浮かない表情で眠り続ける彼の顔を見続けた。た。

「あ、もうこんな時間……」

「そろそろ行かなきゃね」

しかしずつとはいられない。決勝に向けた練習が予定されており、今日は午後から

だったのだ。そろそろ向かわなければ、開始時間に間に合わない。名残惜しさをどうにか封じ込ませ、病室を後にしていく3人。

彼女たちが去った後、まるで待っていたかのようにして病室に入ってくる影が1人。

「……厄介な罠だと思わないか、シリウス？」

彼をその名で呼ぶのは1人だけ。そう、アオボシ。一真が何も答えずとも、彼は一方的に話を続ける。

「こーやって回りくどく追い詰めるのは“彼女”のやり方かな。まったく、陰湿で悪趣味な女だよ」

一真をこの状態にした黒幕に毒を吐くアオボシ。今もその女は計画通りに事が進んでいて笑っているだろう。だからこそそれが気に食わない。そんなアオボシは、ポケットからオーブリングNEOを取り出した。

「僕は君を助けたくはないし、君だって嫌だろ。だから、君の中に居る“彼”に手助けしてもらえ」

そう言って、オーブリングNEOの光を彼に照射した。

「これで少しぐらいは目覚めてくれるだろ」

くく

「……」

「おいおい、どうした。そんな怖い顔してき」

和哉は不思議そうに尋ねてきた。その様は、短い時間ながらも一眞の記憶の中に刻まれた“暁和哉”という人物のそれだった。しかし冗談もそこまで。和哉は一眞が逃げていることを知っているらしく、「どうして逃げるんだ？」と尋ねてきた。

「ここは……俺のいるべき場所じゃない」

「いや、お前のいるべき場所だろ。叶わなかった願いが、ここでなら叶ってる。怪獣だつて現れないし、お前が自由に生きられる場所だ」

「そう。私たちの学校だつて救えたんだよ？」

一眞を囲むようにして、千歌や曜、梨子も姿を現す。

「悔しかつたでしょ？」

「辛かつたでしょ？」

「でもここなら……そんな思いをしなくて済む」

救いたかった人を救えず、一番叶えたかったことをとり零してしまった世界よりも、理想を体現したかのようなこちら側をとるべきだだと、彼女たちは言う。

「ああ……そうかもな」

同意する一眞を見て、口角が上がる。だが一眞の「けど……」という言葉が、状況を一変させる。

「ここにはいられないんだ」

一眞は言い放った。そんな様子を受け入れられず、和哉……和哉の模造品レプリカは引き留めようと声をあげる。「どうしてなんだ！」と。

「夢が叶っていても、お前が生きていて平和だったとしても、ここは偽りの世界であることに変わりはない。そんな世界でぬくぬくと生きていくほど俺もバカじゃない。それに……」

理想を体現した世界でも、所詮は嘘まみれ。結局催眠をかけることでしか、一眞を閉じ込めておけない世界だったのだ。さらに一眞はこの世界に思うところがあるようで、偽物の千歌たちを睨みつける。

「この世界の存在そのものが、あいづらに対する侮辱だ」

一度は目標を断られたが、あらたな道を浦の星のみんなが示してくれた。しかしこの世界では、それすらもなかったことになる。それだけは絶対に許せなかった。

「いい加減……」

一眞は地面を蹴ると同時に右腕を目一杯引き絞り、目の前で困惑する和哉の顔面目掛けて拳を打ちこんだ。

「その姿で俺に話しかけるな！」

無抵抗のまま地面を転がった和哉の模造品は、起き上がることなく消えていった。彼と同じくして、偽の千歌たちも。

この世界の人物を傷つけたからか、一眞の強い意志のお陰か“作られた内浦”の風景が崩れていく。そして新たに形成されたのは、チープで明らかに作り物だとわかる内浦。太陽は無く、代わりに薄暗いスポットライトだけが光を灯している。

加えて、ピンク色の羊が一眞の目の前に姿を現す。しかし牙をこちらに向けた恐ろしい顔。

「お前か、俺をここに引きずり込んだのは」

羊が何も答えることはなかった。代わりに多くの羊が集まっていき、巨大な人型の姿を形成していく。そして禍々しい光がはじけ飛んで真の姿を現した。白い毛皮を手足に生やし、黒い複数の目でこちらを睨んだ獣人のような姿。頭に生やした巨大な角とそのシルエットから、一眞は悪魔を連想する。

「悪魔……と言うよりは夢魔ってところか」

夢幻魔獣インキュラスは、一真へと攻撃を開始した。

「痛めつけてでもこの世界に縛り付けようってか!」

攻撃をどうにか避けた一真は左手に視線を落とす。するとそこにはオーブカリーバーが。自身の夢の中でオーブに変身するという訳の分からなさに苦笑しつつ、左腕を天高くに掲げた。

「散々弄ってくれたお礼だ。覚悟しろ!」

オーブオリジンへは聖剣を構え、ステージのように固い地面を疾走していく。対するインキュラスも、不気味な声をあげて突進。剣と拳がついに交わる。

「くっ……!」

しかしインキュラスの一撃は重く、力負けしてしまったオーブは後退りしてしまう。驚く暇もなく、追い打ちをかけるように飛び込んできたインキュラス。だがその動きを捉え、姿勢を低くして回避。そしてしびれる腕を無視しながら横に薙いだ。

……が

刃はヤツを捉えることなく、空を切っただけ。一瞬の出来事に戸惑うも、左側面に気配を感じオーブカリバーを振り下ろす。しかし肉体を切り裂いた感触は伝わってこない。またしても空振りだったのだ。

「……………?!」

そして今度は右側から迫る裏拳を右腕で防ぐ。しかし腹部に激痛を感じると同時に、肺から空気がすべて出ていく。視界がチカチカしながら次の攻撃を警戒しようと思いをあげるも、振り下ろされた拳が顔を捉える。

「グア!?!」

朦朧とする状態でもインキュラスの姿を視線に固定。聖剣の切っ先がヤツの腹部を刺す直前、インキュラスの姿が消えた。数秒後、痛烈なアツパーカットがオーブを宙へと舞わせた。

「ウアアアアア……!」

地面に叩きつけられたオーブは、しばらく起き上がることができなかつた。瞬間移動能力で翻弄され、俊敏でいて力強い攻撃によりダメージを負ってしまったからだ。そんな全身が痛む攻撃を受けた後でも、一眞は思考を巡らせる。

「読まれてる……か」

かなり無茶をした攻撃でも、インキュラスは捌いてみせた。それはつまり、自分の攻撃を見切っているからではと考えたのだ。ここは一眞の夢。本人がどう動くかも知っているが無理はないだろう。第一、相手は夢の世界を作り出した張本人。何をしてくてもおかしくはない。

状況はこちらが圧倒的に不利。だが甘んじてヤツに倒されるような自分ではない。目の前の羊の妖魔をぶつ倒し、この世界から出るのだと一眞は己を奮い立たせる。

「■■■■ー！！」

倒れたオーブにトドメをさそうとインキュラスが飛び掛かるが、彼の熱意が現実化したように、オーブはバーンマイトに変化。ゼロ距離のストビウムカウターで吹き飛んでいく。

「……つてえな。それにこの場所、薄気味わりいんだよ！」

追い打ちをかけようと駆け出したが、受け身をとって起き上がったインキュラスがこちらに向かい突進。しかしその攻撃方法が先と異なっていた。なんと槍を生成していたのだ。ギリギリで攻撃から回避へと脳の伝達を切り替え、後方へと飛び上がることで距離をとる。

離れたところでインキュラスの持った槍に注目する。

「それは!？」

「一眞が驚くのも無理はない。その形はまるつきりオーブスラッガーランスそのものだっただけだから。」

「なんでもありかよ」

フフフ、と怪しく笑うようにインキュラスの方が上下する。一眞を通した夢だからなのか、オーブの動きのみならず、武装まで呼び出すとは……。夢という何でもありの世界を自在に操るだけのことはある。

「■■■■ー!」

此方に突き出されたオーブスラッガーランスの攻撃を避ける。しかし攻撃速度はむこうの方が上、加えて本体は安全距離からの攻撃ときた。

「やり辛えんだよ!」

掠ったオーブスラッガーランスを掴み上げ。インキュラスの脚を蹴飛ばして槍を取り上げる。

「はあ……はあ……はあ……」

掠った場所を抑えるオーブ。そこからは血のように光が漏れ出していた。インキュラスはチャンスと感じてか、右手からは紫色の光輪を、そして左手からは赤の光輪を投擲してきた。

「チツ……！」

迫りくる丸鋸状の光線をバックステップで距離をとりつつ、蹴り技で叩き落とす。
(まさか、すべての形態……なんて言わないよな?)

懐に潜り込むように肉薄してきたインキュラス。その真つ赤に燃える拳で、こちらを叩きのめすつもりらしい。オーブも対抗し、拳を受け止めて一発。裏拳で一発。最後に胸部にドロップキックを浴びせた。

これ以上長引かせるわけにはいかないと、倒れこんだインキュラスに向かいストビュームバーストの発射準備に取り掛かった。一真がこれで終わりだと口に出そうとした瞬間、頭上から光の筒“キュラスター”が出現。なんとオーブを閉じ込めてしまった。

「出しやがれ！ ガアアツ!」

筒を破壊しようと拳を打ち付けると、電流が流れオーブを襲う。何もできない巨人を見て、無力さを嗤うインキュラス。ヤツは余裕そうな表情でゆつくりとこちらに向かつてくる。それも何もできないオーブを嘲笑つての事だろう。何もできずにいるオーブを、手に持った聖剣擬きで首を落とすつもりか。

「くそ……！」

打つ手なしかと唇を噛んだ一真。だが無力なままで終わるのだと思うと拳に力が入

る。大切な人たちを再現し、あれこれさせたのも気に入らない。そんな怒りの炎が一眞の心で燃え盛っていた。

すると一眞はふと、ここが夢の世界だという事を思い出す。現実では起こり得ないことでも可能になり、何だつてありえる世界だということ。現にインキュラスだつてしたい放題。それが何よりの証拠だ。

「なんだつてアリなら、こういうのもイけるだろ……」

取り出したのはウルトラマンタイガのフュージョンカード。一眞は今のバーンマイトにタイガの力を上乘せしようというのだ。タイガの父タロウ。そしてタロウを教官に持ち、タイガの兄弟子たるメビウス。3つの炎を1つにまとめ上げようというのだ。現実では決して起こることのない現象。でもこの世界ならば……。

「いい夢……見させろ！」

意を決した一眞は、迷うことなくオーブリングへカードを通す。

■■■■■■■■■■!!

爆発にも似た火柱が、キュラスターを粉々に破壊した。狼狽えるインキュラスは、太陽が間近にでもあるかのような明るさに目を覆う。

光が人型に収束しても、まだ辺りは明るいまま。バーンマイトの胸部には青いプロテクターが装着されており、頭部の角にも燃える炎のような意匠が施されている。しかし体はすぐに炎に包まれた。

「ウ、ウオオオオオオオオオ……」

包まれた……というより、全身から絶えず炎を噴出しているのだ。その内外からの絶え間ない熱で、一眞自身も焼かれているような状態。だから彼はたまらず、声を上げてしまっていたのだ。

「なんだよこれ……ウウツ……」

苦痛をどうにか受け入れ、彼はインキュラスを見据えると同時に右の拳を左掌に打ち付けた。

「こつちも時間ないからな……すぐさまぶつ倒してやる!!」

駆け出したオーブは、炎の尾を作りながらインキュラスに接近。瞬時に手に持った聖劍擬きを落とさせて、顔面を何度も殴りつける。吹き飛んだインキュラスを待ち構えるように移動し、腹部を蹴り上げる。そして上空を舞う体ヘストビュームカウンターを打ち込み地面へと落下させる。

「その剣をお前が持つ資格はねえ！」

しかしインキュラスもサンドバッグでいる気は無く、瞬間移動でオーブの攻撃を逃れる。

「……ッ！」

気配を感じたオーブは火球を辺り一帯にバラまく。あちこちで起きる爆発に紛れ、インキュラスはオーブの隙を伺い突進。飛びつかれはしたものの、回転の勢いを利用して遠方に投げ飛ばした。さらに左腕の手甲から、金色の光剣を伸ばす。

「ストビュームブレード！」

多くの斬撃をインキュラスに浴びせ、右の拳でさらに殴り飛ばす。すると怒りに震えるインキュラスは青い刃を両腕から延ばした。しかし剣技はそこまでのようで、ただ出鱈目に振り回しているだけだ。

「お前如きが、その剣を扱えると思うな！」

青い形態の力を使ってしまった事が、さらに油を注いでもしまったらしい。目にも止まらぬ乱れ斬りでインキュラスの生成した刃を折り、突き立てた拳がヤツをさらに後方へと吹き飛ばした。

フラフラと立ち上がり、憤怒に声を上げるインキュラス。オーブは両腕を水平に開いた後、頭上で手を合わせる。そして収束していくエネルギーと共に、腰へと持つていく。

「ストビウムブラスター!!」

十字に組んだ腕から、オレンジ色の光線を放つ。

光線を浴び続け、苦悶の声を上げるインキュラスをしつかりと捉え、地面を蹴って加速。右足を突き出してドリルの如くきりもみ回転。深紅の炎を増幅させ、インキュラスに向かい突撃。

“オーブブラストスピンキック”でインキュラスの体を穿つと同時に大爆発。インキュラスは塵一つ残さず消え去ったのだった。

すると周りの世界も、光に包まれていく。ようやくこの夢が覚め、目覚めるという事だろう。

くく

「う……………は……………」

目を開け、入ってくる情報にしばし困惑する一真。どうやら病院らしい。まあ、ずつ

と外で倒れていたのでも困るが。

「……………?! つう……………」

意識が覚醒すれば、すぐさま痛みが襲ってきた。それはあの焼かれるような痛み。本来は負つていない痛みではあるが、夢の世界へと向かった心……魂にでも刻まれたのかもしれない。もし此方でもなれたとしても、二度とゴメンだと一眞は思う。

「……………」

眠っていたのにもかかわらず、ぐったりと疲れた頭で夢の出来事を思い出す。夢の中に理想の世界を築き、そこに閉じ込めようとする。自分を狙ったのも、オーブをこれ以上動かせないようにするためだろう。しかしそのために、彼ら彼女らを使つて誘惑したことは許しておけない。あの怪獣を呼び出した黒幕が必ずいるはずだ。

(恐らくアイツだろうけど……………)

親しい人を目の前で怪獣にしたり、小さく無害な怪獣を狂暴化させた彼女だろう。これのお礼はいつか必ずと、心に誓う。

すると、自分の病室に近付いてくる足音が聞こえてくる。恐らく彼女たちだ。病室のドアが開いたら、開口一番になんて言おうかと一眞は考えをめぐらすのだった。

STAGE 2. 5 天地繋ぐ光

第零節 プロローグ

「この役立たずが！」

姿に似つかわしくもない怒号と共に、彼女に蹴られた椅子が床を転がる。彼女らが潜伏している屋敷中に、その声と衝撃が響き渡る。しかしその様を見ている男は、ただ壁にもたれ掛かっているだけ。それは彼女の憤慨にも、そして周囲に当たり散らす様にも慣れていくからだだった。

「せっかくなこのワタシが住みやすい世界を提供してやったのよ？ だったら疑うことなくそれを享受していればいいの！ こんな世界のどこがイイんだか……。所詮はワタシに跪くだけの下等な生物の星よ？ こんなゴミ溜めを守ってどうすんだか。……。そもそもあの羊擬きよ！ アイツは夢に閉じ込めておく仕事だつてロクにできないの？ アイツの能力でしょ!？」

「……その辺にしたらどうだ？ 今までも聞き流してきてやったが、流石に今回は我慢できねえ」

もううんざりしているのかその男、プロキオは喚きたてていた女性……。ヴィルゴを睨

む。その声音からも、彼の腹の中もグツグツと煮え滾っていることは容易に想像できる。理由は十中八九、彼らが戦いを挑み、命を奪おうとしてきた巨人のことだろう。確かにプロキオは彼に戦いを自ら挑み、そして戦闘を楽しんでいたところもある。しかし、流石に2度も負けたとなればいい気はしないだろう。

「……」

「そろそろ目覚めそうなんだろ？ おまけに、あの打ち込んだ毒も龍脈に回ってるみたいだしな。あとは……アルファルド様がアレ見つけてくるだけだが、全てを任せる気にはならねえ。そうだろ？」

星に巢食う禍々しい存在、大地を流れる気に紛れ込んだ毒。そして今この瞬間も探しているであろう、とある毒を統べる女王。この地球にカードが揃いつつあるようだが、その瞬間、その情景を待ち、そして黙って見ている気になれないのは、ヴィルゴも同じらしい。

「ええ、あれだけコケにされてワタシが黙っていると思う？ いいえ、あの男には情けなく地面を這い蹲ってもらうわ」

「ああ、オレも同じ気持ちだ」

ニヤツと笑うプロキオの横から、コートに身を包んだ人影が横切る。そしてヴィルゴの前に立ち止まると同時に、コートを脱ぎ捨てる。その姿は人型ではあるが、鳥類に似

た顔、鋸の歯のような形の縞模様を持つ体は、地球に住む生物からは凡そかけ離れていた。彼は分身宇宙人ガッツ星人。多くの戦いに悉く勝利してきた実績を持つ、宇宙の実力者だ。

「あら、意外と早かったのね」

「はい。危ない所でしたが、きちんと手に入れてきましたよ」

その異形の者が持つジュラルミンケースが開けられ、その内の一つを彼女に見せる。機械のような風貌に、腕や背中から生えている刃が特徴的な姿の……人形だった。約14センチほどの怪獣の人形。地球に眠っているオーパーツであり、何らかの些細な出来事で異次元に飛ばされて変化したとある怪獣の亜種らしい。

「これだけ？」

「途中で防衛隊と巨人の妨害にあいましてね。こればかりは申し訳ありません……」

話的にどうやらガッツ星人は盗んできたようだ。しかしこの世界にはそんなものなど存在しないし、防衛隊なんてものは発足していない。あっても軍くらいだ。そんないくつも疑問点があがってくるような会話だが、それは次に発せられたヴィルゴの言葉で解決する。

「ふうん……まあいいわ。別の宇宙から持ってこられたものだけに頼りきりなのも嫌だし」

彼女の声に心臓が縮み上がったガッツ星人。彼は蹴られるとも思ったのだろう。しかし、ヴィルゴは足ではなく手を動かした。懐からカードを取り出したのだ。闇の支配者の尖兵、宇宙からの脅威、術師の化身、異星から送り込まれた者、機械の体を持つた存在……これらも加えようというのだろう。屈辱を受けたのならば、何倍にもして返す。今回は搦め手なしの……純粹な力で。

「こりゃ、一面焼け野原だな」

カードに描かれた怪物や宇宙人を覗き込み、これから起こるであろうことを気にしてもないのに想像するプロキオ。するとカードの一枚が彼に手渡された。

「アンタはどうせこれを選ぶでしょ？」

「フン、わかってるじゃねえか。コイツでリベンジマッチだ」

彼らは笑う。星を喰らう者が目覚めるその前に、あの巨人を……オーブを今度こそ殺すために。すると扉を開けて入ってきたのは、もう一人のガッツ星人。その右手に少女を2人を掴んで。

「どうしたのですかワタシ？」

「屋敷の前に居たので、面白半分に捕まえてきたわけですよ」

少女2人を放り投げると、片方のガッツ星人は青白く光りもう片方の体と重なる。つまるところ分身していたという訳だ。放り投げられた少女はどうやら気を失っている

らしく、動くことは無かった。そんな少女を見つめ、プロキオは唸る。どこかで見た気がしたからだ。そして数秒後、良く響く声で「コイツらっ!」と声を上げたせいでヴィルゴとガッツ星人に睨まれた。

「思い出したぜ。そういやオーブとよく一緒にいる奴らだ」

「なんと……そんな偶然が」

「へえ……思わぬ収穫つてところね」

みかん色の髪とグレーの髪。それらはオーブの変身者、一真と関わりを持つ人物だったのだ。

「なら、彼をこのままここに誘き出しましょう。そうすれば手間をかけずに済む」

物量で責める手筈だったが、餌が手に入れば話は別だ。それを使ってノコノコとやってこさせればいい。どうせオーブが倒れた後も、アレが目覚めるまでは自由にできる。その時に先の怪獣たちは使ってやればいいのだから。

「ここに来たのなら、最初はオレが貰う。いいな?」

「ええ、どうぞ」

やってくるであろう彼の必死な顔や声を想像しながら、ヴィルゴは笑うのだった。

それはあまりにも偶然だった。キツカケなんて些細なことだったのだ。ただ少し気になったからから……と言えはいいのだろうか。

「あ、あのっ！」

男性のコートから、なにかが落下したところを偶然見てしまった高海千歌。彼女は拾い上げて声をかけた。しかし男性は焦っていたのか、それとも沼津の喧嘩にかき消されてしまったのかは……耳に留まるとはなく、立ち止まって振り返ることも無かった。そしてそのまま男は、人混みの中に消えていってしまう。

「千歌ちゃん、どうしたの？」

練習で乱れたのであろうグレーの髪を整わせながら、渡辺曜は千歌へと問いかけた。「男の人が落としていったんだよ。早く届けてあげなきゃ」

男が歩いていった方向に目を向け、千歌はそのまま走り出した。最少の理由だけで話の全貌が見えていない曜も、なりゆきで彼女の後をついて行く。幸い人混みの中でも男は見分けがつき見失わずに済んだが、距離はだいぶ離れている。一見千歌たちのそれは

尾行のようにも見えるが、こちらには相応の理由があるため問題はない。

「あ、待って……………」

千歌の声は虚しくも男には届かず、彼は洋館へと入って行ってしまふ。

「ああ、もう……………」

「入っていつちやつたね。どうする?」

「うくん……………ここまで来たんだし行こうよ」

「それもそうだね。よくし……………全速前進、ヨーソロー!」

意気込んで洋館へ近づいていったのはいいものの、どことなく漂う薄気味悪い外観や
雰囲気に戸惑う2人。すると千歌は、こんな疑問を曜へと投げかけた。

「ねえ、曜ちゃん。ここまで来て聞くのもなんだけどさ、こんな洋館……………沼津にあった
?」

「最近沼津にできた建物があるって噂をママから聞いたよ。多分、これがそうじゃない
かな」

では、先ほどの男はここに越してきた人物なのかもしれない。例えば、子どもができて育児のためとか……そのためにドデカい洋館を建てるのはどうかと思うが、そうであれば彼の落としたものにも説明がつく。

「それって……人形だよね？」

改めて男の落とした品を見つめる2人。それは何処からどう見ても人形だった。しかし女の子が遊ぶような可愛げのある人形ではない。その姿に似たものを、彼女たちは幾度となく見てきた。

「怪獣の……人形？」

「マニアックな人がいるんだね……」

あまり人の所有物をジロジロ見るべきでもない判断し、彼女たちは意を決して洋館の扉を叩いた。

「あゝー！」

「すみませ〜ん」

しかし、扉を開き館の主人が出てくることは無かった。聞こえてくるのは鳥のさえずりや、遠い町の喧噪だけ。まったくの無反応だったという事だ。顔を見合わせ、もう一度声を上げ扉を叩くも結果は同じ。

「……」

すると数秒後、扉が勝手に開いたのだ。目を見開く2人は息を呑む。

「は、入っていい……ってことかな？」

「ど、どうだろう……」

「でも、開いたってことはわたしたちが来たことに気付いてくれたってことでしょ？」

「そ、そうかな……あ、千歌ちゃん!？」

千歌は怪獣の人形をポケットの中に入れ、そのまま館の中へ踏み込んでいく。遅れながらも彼女について行く曜。洋館の中は、静かで未だ新築のような綺麗さだった。家具や床、そして屋内の全体から漂ってくる匂いは、本当にまだ建って日が浅いのだと感じさせてくれる。

だがどこまで進んでも人の姿形を目にすることは無い。

「どこにいるんだろ」

「見当もつかないよ」

すると2人の背後に“何か”が通る気配。外の音も多少は遮断され、2人だけという状態だからこそ、敏感になってしまう。2人は同時に振り向き、周囲を確認するが何もいなかった。

「でもさつき……」

「足音みたいなのが聞こえたよね？」

確認しあうが、現にそこにはいない。ならば私たちの気のせいなのかもしれない。ちよつとした不安がらしく処理されてしまうという事は前にも聞いたことがある。恐らくそれだ。そう解釈して向きなおそうとする2人。

——
だつたが

すぐ横にいる。気配だとかそんなものではない。視線の端に見えているのだ。それは人ではなく、人の形をした生物。水色と白の縞模様や、赤い腕が見えているのだ。さらに確認できるわけではないが、恐らくそれは自分たちを見下ろしている。ジツとこちらを睨んでいるのだと、感覚が伝えている。頭を動かすな。見ようとするな。手も足も動かすな。動いたら最後、どうなるかわからない。

「…………ツ、…………ツ、…………！」

息を吸うのすら忘れてしまいそんな中、その生物は踵を返すように奥の方へと戻っていく。見逃してくれたの……という事だろう。理由が何であれ助かったという感情が湧いて出てくる。しかし、まだ動けそうにはなかった。完全にその姿が見えなくなるまでは、安心することはできなかった。

——バタン、と扉が閉まる音が聞こえ、千歌と曜はゆっくりと息を吐きだした。それでも慎重だったのは、完全には警戒を解いていないからだろう。普通に息を吐いた瞬間、戻ってくる気がして。

そのまま2人は玄関まで引き返した。音を立てないよう慎重に。もう落し物のことなどどうでもよかった。恐怖もあるが、それよりもこのことを一真に伝えなければという想いもあつたのだろう。そして玄関に辿り着き、手汗が酷かつたことも忘れドアノブを回す。そこには先のような晴れた空や風景が広がっていると信じて——

が、扉の先には先ほどの人型の生物が立っていた。鳥のように目を光らし、こちらに襲い掛ろうとする宇宙人が。

2人は絶叫の後に、意識を手放した。

第一節 狂者の再来

夢の世界に引きずり込まれるというある意味恐ろしい体験から三日後。いつも通りの日常を取り戻し、来るラブライブ決勝のために練習に励んでいたAqoursを変わらず支えている一真。そして今は休憩時間であるのだが、彼は花丸と話し込んでいた。どうも、彼女の家から見つかった太平風土記のことらしい。

「気になって先のページも読んでみたずら」

「それで、なんて書いてあったんだ？」

花丸が話すには、地中に打ち込まれた毒があるらしい。その毒は生物の意思を奪い、知識を奪い、只の傀儡にさせる力があると。そしてその毒を統べるものが、八つ地脈の交わる地で転生のときを待つ存在と混じり合う……というものだった。

「……なにそれ怖っ」

「悪魔に意思を奪われし、悲しき獣……つてとこね」

「それはよくわからない。つてかお前悪魔だろ」

「うっさいわい！」

善子たちのやり取りに緩和されてはいるが、地球にそのような得ても知れない存在が

あるというのは怖いものがある。太平風土記に記されているものにはいい思い出がない。これから先、自分たちの身に何が待ち受けているのかは想像ができなかった。

「でもそれは大昔に書かれたことでしょ？ 今更心配なんかしてどうすんのよ」

「それもそうなんだけどなあ……」

大昔に書かれた書物なのだから、現代を生きる自分たちにとつては関係のないことなのかもしれない。かといって無視する気にもなれない。モヤモヤとした感情が、余計に考えを鈍らせていく。

「ほらほら、もうすぐ練習再開するよ〜！」

しかし果南のひと声によつて、その疑問はとりあえずの保留ということにした。彼女の声に集まっていくなメンバー。しかし、千歌と曜の2人がいつまで経つても練習場に現れることはなかった。

「2人とも……来ませんわね」

先ほどの練習までは共にいたのに、休憩後帰ってこないということがあるのか。しかも千歌と曜の2人に限つてだ。答えはN。ありえない話である。だからこそ時間に厳しいダイヤも心配しているのだ。

「梨子、2人がどこ行つたか知らないか？」

「休憩の時、外に涼みに行くつて言つていたけど……」

「……しゃーない、ちよつと探しに行つてくる。みんなは先に練習始めててくれ」
梨子の話を聞くに、外に出たところで何かあつたと見た方がいいだろう。そう判断した一眞は、果南たちに出てくる伝えて沼津の市街地へと足を運んだ。

街の人に聞いてみたりするものの、千歌と曜の情報は未だ見つからない。いったい何処へ行つてしまったのか。一抹の不安が彼の心を過る。

「……つたく、どこに行つたんだよ。……ん？」

すると、街を歩く少女が一眞のズボンの裾を引っ張つてくる。何か言いたいことでもあるのだろうか。一眞はしゃがみ込み、少女と同じ目線で話しかける。

「どうした？」

「2人のお姉ちゃんがね、むこうの洋館に走つていったの」

「向こうの？」

一眞の指さす方向を見て、少女は首を縦に振つた。これは有力な情報なかもしれな

い。仮に空振りだとしても、確かめなければ……。一眞は「ありがとね」という言葉を残し、洋館へと走り出していくのだった。

「……」

「ちよつと、はぐれないの」

残された少女に、彼女の母親だと思われる女性が声をかける。はぐれたら危険だと、娘のことを思つての注意だろう。

「……? ママ、私なんどこんどころに?」

「え? もう、変なこと言わないでよ。あなた急に駆け出していつちやうんだから」

どうやら少女には、一眞のもとへ向かい話かけたことの記憶がないらしい。おそらく裏で糸を引いている者が、一眞を呼び出すために操つたのだろう。しかしすでに駆け出している彼には、そんなことなど知る由もなかった。

く
く

「探してくるなんて言ったけど、なかなか帰ってこないわね」

「連絡くらい超越しなよ。まったく」

「一眞さん一人だけでは限界がありますわ」

「もう、一眞ったら水くさいんだから」

スタジオでは善子や果南、ダイヤや鞠莉が話していた。一眞が探してくると出ていつからだいたい時間が経つが彼が2人を連れて帰るところか、連絡すらないのだった。練習をしようにも身が入らない。

「一眞の悪いところだね。素直に頼めばいいのにさあ〜」

「一眞くん自身も自覚してるとは思う。けど、すぐに直せるものでもないから……」

素直に頼ってほしい。しかし彼は、そういう部分を手苦手としているのかもしれない。それがわかってしまうから、彼女たちも余計に言い出せないのであった。

「でもルビィ、ここまで遅いと心配かも……花丸ちゃん？」

ルビィは、隣でパソコンをいじっている花丸に注目する。以前パソコンを扱うことすらできなかった彼女はここにはいない。本やインターネットを巧みに扱い、多くの事柄を調べるのが現在の花丸の姿だった。

「気になった動画が出てきたぞら」

彼女は画面をみんなの方に向ける。動画に移されていたのは洋館。

「これって、最近できたって噂の?」

「そうすら」

ここにいる誰もが知っているとされる、町はずれに建てられた洋館。その中に入ったカップルが撮った映像が、そこには映し出されていた。カメラを回したのが夜だったのか、周りは暗くよく見えない。

「何よこれ、やらせ?」

「黙って見るすら」

その数秒後に、カメラは衝撃的なものを映し出していた。館の中にいる人影。それは頭が異様に大きく、さらにはその眼も昆虫のようだった。加えて暗闇の中で赤く光るそれは、どう見ても人間ではない。ましてや作り物の雰囲気でもなかった。そうなれば、まず正体がわかってくる。ここにいる少女たちは、似た生命体を幾度となく見てきたのだから。

「ここに行ったってこと?」

「でも千歌さんや曜さんのこととは関係ないのでは?」

「そうでもないよ」

果南は携帯の画面を見せる。どうやら一真とメッセージアプリで連絡を交わしたみたいだ。しかしそこに書いてあるのは、自分一人で大丈夫だという旨を伝えるもので

あつた。そして最後の果南の問いかけである「街はずれになんて行つてないよね？」というメツセージには返信せず、「とにかく大丈夫だから心配するな」と一方的に会話を終えている。

「一眞は多分そこにいる。なんでかはわからないけど、洋館に千歌たちがいることを突き止めたんだよ」

一方的に会話を終わらせたのも、一眞には凶星だったからだろう。一眞が、千歌や曜がいるであろう場所を突き止めた彼女たちはどうするのか……。みんなで出した答えは――

「……か。そういや……最近建つたって噂のとこだよな」

洋館に着いた一眞。彼もこの洋館の噂は聞いていたのだろう。周囲から滲み出るような異様な雰囲気、眉をしかめつつドアに手をかけようとする。寸前、果南からの心配を半ば強引に終わらせたことに罪悪感を感じてしまう。しかし洋館の雰囲気からもわ

かるように、ここでは何が起るかわからない。彼女たちを危険に晒さないためには仕方のないことだったと、自分に言い聞かせる。

「……………よしー」

息を吸い込み、心を決めた一眞はドアを開けて中へと入っていく。

廊下を渡り、階段を上っていく。しんと静まり返った館内。住民がいるのかもどうかわからないが、静かすぎて逆に不穏だ。警戒しながら先へと進んでいく一眞。するとどうだろうか、一瞬……揺れたのだ。しかし地震ではない。空間そのものが揺れたのだ。自分のいる一帯だけが切り取られ、箱を揺らすかのように。

「……………!?!」

さらに近くの振り子時計の針もまるで時間を遡っているかの如く、逆回転を始める。そして戸惑う一眞の足元の床が消失。時空の歪み……或いは穴に落ち、ウォータースライダーにでも乗っているかのように別の場所へと飛ばされたのだった。

「……………つああ!?! つう……………うう……………」

勢いよく地面にたたきつけられた一眞は、顔を歪めながら起き上がる。あたりを見回すと、公園を思わせる場所へと飛ばされたようだった。出口を探すため、急いで探索を始める一眞。

「……だ………は………」

所謂異次元世界というものだろうか。現実世界のようにであつても、周りの空気感は閉鎖的だ。まるで一眞を逃がさんとでもしているかのように。

「まさか、仕組まれてたか？」

「その通りだ！」

突如聞こえてくる男の声。覚えたくはないものの、聞き覚えてしまった男の。もう対峙することはないだろうと思えば、どこからともなく現れる人物。アオボシが警告してきた者の一人。

「……プロキオ」

「また会つたな。オマエは死んだと思つてたろうが……残念、この通りだ」

「……」

ニヤリと獲物を見つけた獣の如く歯を見せたプロキオ。どうやら、ここにまんまとおびき寄せられてしまったようだ。これでは餌に食いつく魚。

「お前に付き合っている暇はないんだ」

「いやあるね。オマエは今日……ここで死ぬんだからな！」

手に持っていたダークリングにカードをスキャンさせる。彼の背後に現れたのは、緑に光る4つの瞳に赤や銀色の人口パーツで体のいたるところを補強している宇宙人だった。体の半分を機械化しているサイボーグ……といったところか。

「ガピヤ星人サデスって奴らしい。オマエを殺すにはピッタリだと思わねえか、オーブ？」

プロキオは奇機械宇宙人と一体化。即座に右腕に装備した拳銃“ガピヤ・スネイク”を乱射する。

「くそっ！」

放たれる銃弾を柱に隠れてやり過ごそうとするも、柱の方が先にボロボロと崩れていく。弾の制限はないのか、笑い声をあげながら撃ち込んでくるサデスもといプロキオ。一眞は姿勢を低くしながら走り出し、前転で接近。懐に入り込み拳を振るう。しかしプロキオには防がれ、逆に回し蹴りの一撃で吹き飛ばされてしまう。

「さあ来いよ。まだまだ始まったばかりだろ！」

次の瞬間、全身を赤く輝かせ巨大化。右腕を振り子のように動かし、広範囲に発砲。土が空高く舞い上がり、一眞の周囲にはクレーターが形成されていた。

「やってくれる……！」

ここを切り抜けなれば、千歌と曜を助け出すことはできない。そう判断した一眞はオーブリングを取り出し、光を解き放つ。

「……ラアッ！」

体全身を炎で包み、空中で捻りを加えたバーンマイトの飛び蹴りがプロキオの首元を

とらえた。

「燃えるなあ」

「……言ってる」

睨みあう両者は即座に攻撃へと転じた。ガピヤ・スネイクの射線を外すように右腕をブロック。その隙に腹部や首元に拳、手刀を叩き込む。

負けじとオーブの左腕をつかみ上げて捻り、動けない頭に銃口を向ける。

「こんのおおー」

だがオーブは屈んで回避。おまけに腕の拘束も振りほどき、続けざまに来るプロキオの攻撃もブロック。胸元をつかんで遠方へと放り投げる。

地面に転がるプロキオ目掛け、オーブはトドメだと十字に組んだ腕からオレンジ色の熱戦を発射した。

「ストビューム……光線！」

……のだが、なんとヤツが取り出した長剣“サデステイン”で防がれてしまったのだ。煙の中から顔を見せ「イイなあ……もつともつと向かって来いよ！」と挑発してくる様は、プロキオにそれほどダメージが通ってないことを思わせる。

「お望み通り……次はこいつで！」

ハリケーンスラッシュへとフュージョンアップ。2対の光刃を飛ばしプロキオを足

止め。そして空中でオーブスラッガーランスを生成。落下の勢いを利用し、機械の体めがけて突き立てた。

「次は手数かあ?」

長剣と槍が激しくぶつかり合い、金属音が空間に木霊する。迫りくる刃をその長い柄で受け止めた一瞬、オーブは左足でプロキオの腹部を再度捉えようと振り上げる。さらにほぼ同時ともいえるタイミングで頭部を切りつけようとするが、機械化されているのは頭も同じか……強固な金属に阻まれて刃が通らない。

「やってくれたなオイ!」

プロキオの怒号とともに放たれる猛攻。状況は一転。オーブはひたすらに槍で防ぐことしかできない。そして遂には槍を蹴り飛ばされ、鋭い横なぎが胸元を搔つ捌く。

「うああ……が、ああ……」

特大のダメージを受けたからか、カラータイマーの点滅が始まる。

「おいおい、こんなモンじゃないだろ。もっと楽しませろよ……オイ!」

意識が朦朧としているオーブを叩き起こすかのように、ビンタをかますプロキオ。その大振りな勢いのせいで、幽体離脱かのように体から出ている半透明の巨人たちも一緒に叩いたことは、プロキオにはわからなかっただろう。

すると次元の穴から一体の宇宙人が現れる。ガッツ星人だ。登場して早々、目から光

線を撃ちこんだ。不意打ちだったためオーブはモロに攻撃を食らってしまふ。それが決定打になったのか、意識を失い地面に倒れこんでしまった。

「なんだよ！　せつかくいいところだったのによ!!」

「コイツを連れて来いとヴィルゴ様の命ですのぞ」

「あの野郎、また勝手に動きやがって……」

「勝手に動くのはあなたの方でしょう？」

「アア？　オイ、ちよつと待ちやがれ！」

長々と話す気はないらしいガッツ星人。プロキオのことを半ば無視しながら、オーブを引き連れて次元の穴へと消えてしまうのだった。

くく

ちよつどその頃、外ではようやくAqoursのメンバーが洋館へと到着していた。

「い、如何にもって雰囲気だね……」

「本当にここに千歌ちゃんたちがいるのかな……」

「もう、信じるしかないと思う」

そろそろとビビりながら歩いていく彼女たち。先ほど見た動画や洋館の雰囲気は圧されているのだろう。しかし、大事な友達が、仲間がいるとなれば助けなければ……。その思いで足を動かしていた。

「いざとなれば我がヨハネの力で……!」

「ビビりなのに大丈夫ずらか〜?」

「う、うるさい!」

そのいつもやり取りに空気が少しだけ緩む。

彼女たちがドアを潜った後、もう1人……青年が洋館へと近づいていた。

最後に入った鞠莉がドアを閉めるとその音が館中に響いた。

「ヒイ!？」

「鞠莉さんっ……!？」

「Sorry……」

舌を出して謝る鞠莉に、半分脅かすためにやったのではと思った大半。しかしすぐさま行動を再開。階段を一段一段上っていく。途中で善子が「押さないでよ」と珠冬に小声でキレていたが、誰も気にしなかった。

彼女たちはそのまま二階に上がるも、今のところは普通の館。怪しいところは何も無い。唯一置いてある振り子時計に目を移すと、どういうわけか現在時刻と一致しない。

「使っていないってこと？」

「でも見た感じ、使い古したってことでもなさそうだけど……」

時計について考察を展開していると、背後から扉の開閉音と足音が聞こえた。すぐさま振り向く。するとそこには鳥の頭のような宇宙人が……。さらにはまるで猛獣の鳴き声のような声を上げ、?!?!?!こちらに迫ってきた。

『きゃああああああ?!?!』

悲鳴を上げ隣の部屋、!!その奥の部屋、そしてまた奥の部屋へと逃げていく。しかし宇宙人はずっと追いかけてくるのではないか。

「ちよっと、速くいって!？」

「押さないでって言ったでしょ!?!」

「墮天使パワーでどうにかしてよ!」

「宇宙人は例外よ!?!」

「ピギヤアアア!?!?!」

一同パニック状態だ。さらに不幸なことに次元が歪み始めた。そのまま彼女たちは、異次元へと落ちていくのだった。

「痛ててて……あれ?」

「どいずらっ?」

気づけばそこは市街地。しかし人通りはなく、いるのは彼女たち8人だけ。洋館の暗さと外の明るさに差がありすぎたのか、一時的に見えるものすべてが白黒になる。

「沼津? だよね……?」

「ですがわたくし達が先ほど向かっていたときは、これほどまでに人が歩いていないなんてことは……」

「ならばここは、現実と鏡合わせの世界。失われた世界……」

「そう思った方がいいかもね」

どうやら先ほどの宇宙人は追ってきていないようだ。しかし、ここは現実とは異なる次元なのかもしれない。となれば一刻も早く出なければ……。

そんな時、先ほどまではなかった筈の場所に黒いスーツ姿の男女4人が立っていた。

「みなさん、ここは危険なんです。ですから……」

「待って！」

梨子が話しかけようと近付くのを、果南が済んでで引き留める。彼女曰く、何かがおかしいとのことだ。

すると彼ら彼女らの頭部が変化。否、偽装を解除したというべきか。そこにいたのは人ではない。クカラッチ星人、セミ女、ヒュプナス、ガルメス人……異星人たちだったのだ。

「Oh……」

「に、逃げないと……!?!」

梨子のひと声に全員は一斉に走り出した。無論、宇宙人たちも後を追いかけてくる。

「出口はどこですのー!!」

「こうなれば、暗黒の力を……」

善子は立ち止まり、右手を伸ばして構える。……が一、二番に向かってくるクカラッチ星人とセミ女に注目しすぎてしまう。

「うう……やっぱ無理〜グエ!?!」

「善子ちゃん!?!」

しかも彼女不運はなことに足がもつれたのか、何も無いところで転んでしまう。宇宙人たちもすぐそこまで迫り、まさに絶体絶命といえる状況へと陥ってしまう。

——
そんな時

「みんな、屈んで！」

恐怖や焦燥感に包まれた空間の中に突如として響いてきた声は、彼女らにどことない安心感を与えた。

「……………え？」

声が空間に拡散されてから数秒後。黄色い光がまるで矢の如く彼女たちを横切り、宇宙人たちのもとへと突き進んでいく。そして外れることなく胸元に命中。

『ほら、ワタシの言った通りじゃないか』

「ああ。ありがとう、” エックス”」

機械のようなくぐもつた音声と会話をしている青年。彼は拳銃のようなものを構え、宇宙人の元へと向かって行く。

青年は彼女たちを守るようにして前に立つ。彼女たちの目にする青年は、赤と黒を基調とした服に身を包んでいた。見た感じ、恐らく何らかの組織へ属していることを示す制服……なのだろう。それを裏付けるかのように、青い字で背中に大きく書かれているのは――

「……X？」
エックス

『大地、5時と7時の方向！』

「……！」

彼の周りには誰もいないのに、声だけは聞こえてくる。”大地”と呼ばれた青年は声に躊躇うことはなく、寧ろ絶対的な信頼を置いているようですぐさま振り向き、銃を発砲。宇宙人は無力にも地に伏せる。

『3時の方向に敵接近！』

次の宇宙人は肉弾戦を仕掛けて来るようだが、声のアドバースと青年自身が身に着いた格闘スキルのおかげでなんとか対抗する。

「後でアスナにお礼しとかないと!」

最後の一体を組み伏せ、銃床で意識を奪う。青年は気絶した宇宙人をロープで拘束すると、その様を見ていた少女たちに語りかける。

「……ふう。みんな、怪我はなかったかい?」

「は、はい……私たちは大丈夫です」

「無事なのも貴方のおかげですわ。助けていただき、ありがとうございます」

無事な確かめ合い、咄嗟に救いの手を差し伸べてくれた青年に頭を下げるダイヤたち。だが彼女たちの興味、或いは疑問はその青年へと移っていた。彼の着ている制服は今まで一度も見たことのないものだ。コスプレ……というわけでもあるまい。腰にマウントしてある拳銃は実弾ではなく、明らかに光線を放っていたし、左腰にあるデバースも気になる。

「あの……あなたは?」

「果南さん!」

命の恩人とも言える人に遠慮なく尋ねる果南を諫めるダイヤ。しかし青年は「いいよ」とだけ答える。まるで何度も経験しているかのよう。それ以外は気持ちのいい好青

年といった印象だ。

「俺はおおぞらだいち大空大地。それと……」

青年……大地は左腰にマウントしてあったデバイスを手取る。すると液晶に人のようなものが映し出され、同時に声が聞こえてきた。

『やあ。ワタシは……ウルトラマンエックスだ』

第二節 囚われの人

それはあまりに突然だったらしい。一真たちのいる宇宙とは異なる世界。ここよりも遠く離れ、泡のように存在する宇宙の1つで起きた出来事。

その世界では、地底や海底で人形の姿となつて眠っていたオーパーツ“スパークドールズ”が怪獣となつて復活してしまつたらしい。暴れまわつてしまう怪獣たちや地球を狙う侵略宇宙人に対抗するため、人類は地球防衛組織“UNVER”を創設した。その実働防衛チーム……通称“Xio”の拠点に、ある日宇宙人が侵入したのだった。そこには多くのスパークドールズが保管されており、ヤツの狙いもそれだった。スパークドールズを悪用させまいと、Xioの隊員たちは宇宙人を拘束しようと追跡した。もちろん大地とエックスもだ。

しかし相手は用意周到だった。さらに別の場所で手に入れていたのであろう“怪獣爆弾”と呼ばれる爆発後に怪獣が出現するアイテムで攪乱。Xioとエックスが交戦している隙に逃げてしまつたのだ。

「——まずい、このままじゃ……!」

《——大地とエックスはヤツを追え!　あの怪獣は俺たちで何とかする!!》

「——わかった。エックス、行こう!」

『——ああ!　みんな、任せたぞ!』

《——ウルティメイトゼロ　ロードします》

「それでこの宇宙に、俺とエックスは来たんだ」

『そしてスパークドールズの発する微弱な電波を辿り、この洋館に辿り着いた』

「君たちを助けられたのはホント幸運だったよ。もう少し遅れていたら、どうなっていたか」

次元を渡り、スパークドールズの反応を追ってやって来たと言う大地とエックス。ここまでの経緯をじつとして聞いていた8人の反応はというと、ただ目を丸くしていた。それしかしようがない。なんせ、次元を超えてくるなんて、いつも見ているウルトラマンと怪獣の戦い以上に想像を絶する話なのだから。全部理解しろというのがそもそも無理な話だ。

「難しかったかな……?」

「別の宇宙……?」

「もう一つの世界……パラレルワールド!」

『そう思ってくれて構わない』

話の規模が大きすぎたか眉を寄せて唸っている果南の横で、善子はよく触れるジャンルだからかすんなり飲み込めてる様子。すると善子の隣に座る花丸が「善子ちゃんの癖に話を遮らなかつたずら〜」などと言えば、善子がまた声を上げる。そんないつも通りのやり取りに大地は笑みを浮かべた。

「君たちはこんな状況なのに、やけに落ち着いているね」

『ああ。まるで慣れているかのようだ。それにさつきだって、ワタシ達の正体を知ってもさほど驚かなかつた』

普通、宇宙人たちに襲われた直後とあれば、恐怖で震えが止まらなくなるだろう。しかし彼女たちにはそれが見られない。さらに、大地とエックスのことだつてすぐに信用してくれた。確かに信用してくれるのは嬉しいが、もつと警戒されたり、精神面を心配されたりすることだつてあるかもしれないと思つていたからだ。

「私たちも、大地さんやエックスさんのようにウルトラマンとして戦っている人がいることを知っていますから」

梨子も先ほどよりかは緊張していないのか、柔らかい雰囲気で言葉を紡いだ。ここに

いるみんなが知っている青年のことを。すると大地とエックスは彼女の言葉に食いついた。「この星にもウルトラマンがいるか」と。

「え……はい」

もう当たり前となっていることだ。逆に驚かれていることに困惑してしまう。

「順を追って話しましょう。ここへわたくし達が来たことへの理由にも繋がりますから」

ダイヤの一声に頷くA q o u r s。大地たちの事情を聴いたのであれば、次はこちらの事情を話すべきだろう。そうしてこの世界のウルトラマン、暁一真、そしてこの洋館へと足を運んだ経緯を話すことになった。

くく

その頃、プロキオやガッツ星人に敗北してしまった一真は意識を失ったまま、洋館のメインホールのような場所にある椅子に拘束されていた。

「……………う、うう」

未だ重たい頭をどうにか回転させながら、一眞は目を開ける。するとスイツチでも入ったかのように、即座に攻撃を受けた胸元や背中が熱く脈打ち、臍げな意識を半強制的に目覚めさせた。痛くはあるが、慣れないものでもない。それにじきに治まるだろう。

そんな己の傷よりも、自分の目の前にいる人物を見据えた一眞は確信する。またお前の仕業なのかと。

「ヴィルゴ……これもお前たちの作戦通りってわけか？」

大切な人物を怪獣へと変貌させたり、心の通った生物を狂暴化させ、拳句の果てには役に立たないからと殺す。ストレートに攻めてくるプロキオとは異なり、ヴィルゴは精神面から突いてくる最悪な人物だ。

「ええ、そうね。でもまあ、あの2人がここへ来たのは予想外。けれどお陰でアナタをここに誘き寄せられたんだからこれもラッキーね」

「……………俺をここに連れてきてどうするつもりだ？ 見せしめに処刑でもするつもりか？」

「それもいいけど……………アナタはワタシの計画台無しにしてくれた。だからそのお礼をしてからでも遅くはないかなって？」

「計画？」

「アンタを夢の中に閉じ込めたのに、ノコノコと出てきたのが気に入らねえって言うんのよー！」

するとヴィルゴは急に口調を荒げ、近くにあつたカップを一真に投げる。どうやら夢の中に閉じ込めたのも彼女の仕業らしい。飴を使って永遠に閉じ込めようとしていたとは……容姿に似合わない邪悪さを持つ彼女らしい。

「だからね、ワタシは考えたの。アンタの大事な大事な存在が目の前で死んじゃったら、どんな反応をするのかわらなかって。アナタは見ているだけ、ただ2人が死ぬ瞬間をね」

一真の前にとある映像が映し出される。そこに映されていたのは、彼が探していた少女たち2人の姿だった。

「……………つ、千歌！　曜！」

く

「じゃあ君たちは、その……一真くんという少年がウルトラマンに変身することも知っているし、協力しているってことだよな？」

「That's right! でも協力……かどうかは微妙なところね」

『成程。君たちの話で、暁一眞のことも大体把握できた。例え異なる存在でも、志すものは同じ……というわけだな』

これまでのことを大地やエックスに説明してきたAqours。当初は一眞がオーブに変身するということに心底驚いていたみたいだったが、「多次元宇宙ならあり得なことはない話か」と大地は納得していた。

『それで？ 友人である高海千歌と渡辺曜を探しに行った暁一眞を追い、君たちもここに来た……と。はあ……はつきり言って危険すぎる。一番近いところで見てきた君たちなら知っているだろ。残酷な宇宙人の本性を』

事情を整理したエックスは溜息とともに、彼女たちに注意の意味でも説教まがいのことをしてしまふ。確かにエックス言うことは、ごもつともだ。先ほども大地やエックスが助けに入らなければ、どうなっていたかは想像もしたくない。

「ごめんなさい……。でも、千歌ちゃんも曜ちゃんも、それに一眞さんもルビイたちの大事な友達なんです……!」

「ルビイの言う通りよ。黙って待つてるわけにもいかないでしょ」

「ずら!」

「1人で何とかするより、仲間がいた方がいいかなって。向こうだって組んでるんだか

ら」

危険なのは百も承知。しかし捕らわれているのは大事な友人であり、仲間なのだ。ただ指を咥えて見ている……なんて出来るはずもない。大地やエックスだって同じ状況であればそうするだろう。

『だが……』

「大丈夫だよ。今ここには、俺とエックスがいる。それに彼女たちは、そう簡単に諦める性格じゃない。そうだろ？」

大地の問いに全員が力強く頷く。

『大地……わかった。だが危険だと判断したときは、ワタシや大地の意見に従ってもらうからな』

そうして千歌達を救出しようと意気込んだわけだが、何処にいるのか全く見当がつかない。本当にここにいるのかすら確信は持てていないわけだが……。すると、大地の持つデバイス“エクステバイザー”で何らかの反応をキャッチしたらしい。

「地下の方かな……スパークドールの反応がある」

『それだけじゃないぞ大地。どうやら生体反応が2つ、同じ地下からだ』

「じゃあもしかして……」

可能性は高いと、大地は静かに頷く。希望が見えてきたと一同に笑顔が見え始める

が、問題が1つあるとエックス。

『同じ地下でも、2つの反応は別々の場所からなんだ』

おそらく2人は個々で監禁されているのではないか……というのがエックスの見解だった。なら二手に分かれて助け出せばいいとなるが、何か仕掛けられているのかと慎重になるエックス。

「手伝おうか？」

彼女たちの背後から、1人の青年が声をかけてきた。「手伝おうか」という言葉がそれほど信用ならないのは、その男の所業のせいだろう。いつもとは違う服に身を包み、アオボシはそこに立っていたのだった。

「あんたが？」

「まあ、信用ならないのはわかってはいるけど」

「……彼は？」

大地とエックスは勿論知らない為、傍にいた梨子に尋ねる。

「私たちとはいろいろ複雑な関係で……」

本当に複雑だしなんなら一真との関係の方が深いような気もしてくるため、説明が難しく苦笑いする梨子。

そんな後方のやり取りなどアオボシは気にせず、話を続ける。

「あの2人……千歌ちゃんと曜ちゃんだっけ……このままだと、彼女たちは処刑されてしまう」

全員が息を呑んだ。さらつと彼の口から告げられたのは、このまま2人は死んでしまうということなのだから。理解しがたい状況に、言葉が出てこなくなるのも当然といえる。

「捕まったシリウスに見せつけたいんだろう。ヴィルゴが考えそうなことだ」

「カズもここにいるの？」

「ああ。だけど優先するのは2人の方だ。あいつはまだ殺されないよ」

ヴィルゴと共にいた期間があるからこそ、彼女が何をしたいのか想像がつくのだろう。彼の想像……予測だと一眞はすぐには殺されない。ヴィルゴ、そして一眞にある意味での信頼を置くアオボシだからの言葉だろう。

「僕を信じるか？」

「……彼を信じましょう」

しばらくの沈黙を破ったのは鞠莉。彼女の言葉に他の面々は啞然とする者もいれば、こんな男の言葉を聞けるかと問い詰める者もいる。しかし彼女は「この状況じゃ、彼の手も必要よ」と返す。

「……信じていいんだね？」

「最終的に決めるのは君たちだよ」

大地の問いをかわすように、アオボシは歩き出してしまった。

「待って」

善子の呼びかけに足を止めたアオボシは、面倒くさそうに振り返る。次に聞こえてきたのは、今までの緊迫した空気をぶち壊す一言だった。

「あんた……その恰好は何よ？」

「今聞くことか……」と誰もが思ったが、それと同じくらい「確かに」と疑問符を浮かべてしまうアオボシの恰好。裾が燕の尾のようになつた服……所謂燕尾服を着ているのだ。それはつまり屋敷の召使い……執事と言つた方がいいだろうか。そんな役職を連想させる。

「僕……就職したんだ。……つてのは嘘、こんな洋館に忍び込むにはまず形からつてね。もういいだろ、置いていくぞ」

アオボシの先導で、一行は千歌たちを救出に向かった。

「くそつ、拘束コイツを外せ！」

暴れる一真だったが、傷のせいなのかそれとも単純に強固なのか、あるいは両方のせいか……縛り付けられている枷を外せないでいた。目の前で映像に映し出されている2人。何もできずただ見ていると言うのは酷というものだろう。

「外せと言われて馬鹿正直に外してあげる人なんていないでしょ。ワタシはね、アンタが何もできず泣き叫んで壊れていく様子が見たいの。大丈夫、2人の死体を見届けることができたらずぐに外してあげるから」

「ふざけんなつ！ お前は どうして そんなことを!!」

怒りの感情に任せて飛ばした疑問の答えに、一真の心は急激に怒りを鎮めることとなる。いや、思考が止まったというべきなのか。

「うくん……楽しいから」

「……え？」

「楽しいからに決まってるでしょ」

言葉の意味を理解できなかった。違う、理解しようにも脳が拒んでいる。誰かに悲しみを与え、苦しむ様を見るのがただ楽しいから……。そんな個人的な娯楽、精神の静寂のために、他人の何かを踏み躪るのか。

「そんな……」

言葉が出ない。自分が呆れているのか、理解できないものに恐怖しているからなのか……ただ言葉が出ない。

「ワタシね、いつも他人とはどこか違うなつて感じてた。他人が楽しいつて感じるものが楽しいと感じない。面白く感じるものが面白くないつて。でもね、他人の矜持を踏みにじつた時は違う。惨めな姿を見るときは違うの。心から楽しいつて思えるし、面白くて涙が出ちゃうの！」

この時一真は思っただろう。「ああ、この人物とはわかりあえない」と。彼女は根本から違う。元から狂っていた。そんな人物には何を言っても理解されない。多くの人が抱く幸せと、彼女の抱く幸せは全く別のもの。違いはあつていいことだ。だが、それが他人に牙をむいてでしか辿り着かないのであれば、話は全く別だ。

「だからか……」

「ええ。ワタシが手を組んでいるのも、行く先々で面白いものを見れるから。この星で言えば……win-winの関係つてやつかしら？」

「お前はアオボシの言う通りの奴だ。……頭のネジが飛んでる」

「……さ、あの2人を始末しなさい」

地下に監禁、拘束されている千歌そして曜に向かい、処刑用と思われるコントロール

された鋸が迫っていく。一眞は「やめろ」と叫ぶが、ヴィルゴは笑みを浮かべて言い放つ。「やめろと言われて馬鹿正直にやめる人なんていないでしょ」と。

「何あれ!？」

「まずい、もう始めやがった!」

監視の目を潜り抜け、時には大地やアオボシの協力で突き進んできた一行。ようやく千歌たち2人の姿を目にしたところで、処刑が始まってしまっていたのだ。アオボシは、即座に地を蹴った。と同時に大地に向かって一言「千歌ちゃんを頼む」と言い残す。

「どうなってるの、この仕組み!？」

「叩けば止まるんじゃないの!」

「そんな乱暴で止まるわけないでしょ!？」

「エックス!」

『わかった』

慌てているせいなのか、脳筋的な解決方法を挙げているAqoursの横でエックスと大地、2人はコンピューターをハッキング。即座に装置を止めると同時に拘束を解いた。

「千歌!」

「千歌ちゃん!」

駆け寄り、声をかけていく。すると千歌は薄っすらと目を開ける。

「あれ……みんな?」

「よかつた……無事で」

「まったく、わたくし達に無断で出て行ったことは後でみっちりお説教ですからね」

無事であることを確認し、安堵の表情を浮かべる。

「終わったか?」

声の聞こえた方に振り向くと、曜を連れたアオボシの姿が。視認すれば、自然と足が動き出す。ここまでの心配、恐怖……そんな感情が足の回転を速める。互いの身体がぶつかり合うくらい勢いで抱き着き、無事であることを喜ぶ。

「心配描けんじやないわよ!」

「無事でよかつたずら!」

「千歌ちゃん、曜ちゃん!!」

「おい、まだ安心するのは早い。もう一人残ってるだろ？」

油断するなど注意を促しているようにも聞こえる。しかし状況が掴めずにいる千歌と曜は「もう一人？」と聞き返す。そこで一真が捕まっていること、大地やエックス、アオボシの協力については移動しながら説明することにした。

が、その前に宇宙人たちが追ってきた。装置を止められたことを知られたのだ。ゾロゾロと向かってくる影を前にし、アオボシは一步ほど前へ出る。

「ここは僕に任せてくれ。彼はおそらくメインホールにいる。大空大地さん……と、ウルトラマンエックスでしたっけ、彼女たちをお願いします」

「ああ。君も気を付けて」

『そのつもりだ』

どこの誰だかはよく知らないが、これまでの行動で彼を信頼しても良い相手と判断したのだろう。大地はA q o u r s を連れ、反対方向から逃げていく。

「あの……!」

しかし一人だけ……アオボシに助けられた曜だけは彼に声をかける。

「何してるんだ? 早くいきなよ」

「まだお礼言ってなかったから……助けてくれて、ありがとう」

「……」

首だけを動かし、後方を見ればすでに曜は走り出していった。段々とその背中が小さくなる。

「君にありがとう……なんてね。罪悪感で押しつぶされそうだよ」

どうにか捻りだしたアオボシの呟きは、大きくなる足音によつて簡単にかき消されたのだった。

第三節 奇機械怪獣

「そんなことが……」

『だが、君たちが気に病む必要はない』

「そうだよ。悪いのはスパーク……『ドールズ』なんたらドールズを落とした宇宙人なんだから。……あれ、悪いのか?」

千歌と曜にこれまでの事情を話し、一眞の捕まっているところまで歩みを進めた一行。しかし、この話を聞いて彼女ら2人はあまりいい気はしないだろう。例え、エックスや果南からフォローされても。

「でも、君のお陰で居場所を突き止めることができた」

微笑む大地に、千歌は首をかしげる。君のお陰と言っても、自分で何かした覚えはないのだから。

「スパークドールズ、拾ってくれたでしょ。それが俺たちと君を繋げてくれたんだ」

「もしかして……これが……ですか?」

千歌がポケットから取り出したのは、届ようと思つて拾つた人形だ。彼女が持つてくれているおかげで、大地やエックスと巡り会えたことは不幸中の幸いと言える。

「うん。持っていてくれてありがとう」

渡されたスパークドールズを大事にそうに見つめる大地。スパークドールズも星と共に生きる命。その価値に変わりはないのだ。

『みんな、そろそろ一眞君が囚われている部屋に到達するぞ』

エックスの一声に、空気が一気に引き締まる。部屋への入り口に差し掛かれば、身を潜めて中を覗き込む。

「ああもう！ どうしていつも邪魔ばかり!! それにどいつもこいつも役立たず……」

「お前はそうやって誰かを見下すことしかできないから、だれにも信頼されてないんだろ」

「黙れ下等生物が!!」

「があっ……!!」

計画が阻止されたことを映像で知ってしまったっているヴィルゴは激昂し、八つ当たりとばかりに一眞を蹴る。

「カズ……!!」

『待つんだ。ここはワタシと大地で救出にあたる』

今にも飛び出していきそうな果南を抑え、自分達が行くと伝えるエックス。

「じゃあ、私たちが注意を引くから!」

「え、ちよつとみんな！」

『仕方ない。行くぞ大地！』

A q o u r s は周りにいる宇宙人4体やヴィルゴの気を引き、大地とエックスにはその隙に救出してもらおう。そんな運びとなった。が、特に手段もないので周りにある壺や椅子を振り回すことしかできないのだが……。

「ダイヤその椅子貸して！」

「はい！」

「果南、やつちやえー！」

ダイヤから手渡された椅子を、果南は勢いよくぶん投げた。飛翔した椅子はセミ人間の頭部に見事激突。セミ人間は頭を抱えて座り込んだ。

「大丈夫かい？　ちよつと待ってて！」

大地は腰のホルスターからX i o の正式装備である光線銃“ジオブラスター”を抜き、枷へ発泡。自由になった一真へ手を伸ばす。

「ありがとうございます！」

手を取って立ち上がった一真は、目の前の青年とデバイスの中の人物に尋ねる。「あなた方は？」と。

「俺は大空大地」

『ワタシはウルトラマンエックスだ』

「あなた方も?」

「うん……でも話は後、すぐ逃げるよ!」

一真と大地とやり取りの横で、1年生組はレキキューム人からグルグルと逃げ回っていた。その様はこの場所や雰囲気にはあまり似つかわしくない、なんともコミカルなものだった。

「どうすんのよ!」

「わかんないよ!」

「善子ちゃん」

「どうにかするぞら!」

あまりの無茶ぶりに驚いた善子は、足をまたまた絡ませ転倒。善子が先頭だったものもあり、続けざまに転んでいく。すると、なんとレキキューム人も巻き込まれてしまう。さらに善子たちが倒れた衝撃で、飾ってあった壺が落下。積み重なる形で横になっていたことから、一番上のレキキューム人の頭に直撃。気を失ってしまった。

「おお!」

「善子ちゃんのお陰だね!」

「ふ……フフフツ、これも墮天使ヨハネの力……!」

「早く逃げるぞらよ〜！」

2年生組もフック星人から逃げ惑う。しかし側面から飛び込んできた一眞の飛び蹴りでダウン。残りの1体であるバド星人も、ジオブラスターの前に倒れるのだった。

「大丈夫か？」

「こっちは平気」

「それよりも……」

「2人が無事ならそれでいいよ。謝るのもなしな〜！」

宇宙人たちも倒れ、計画はもはや滅茶滅茶。そんな状況にヴィルゴが憤慨しない理由は存在しなかった。

「どこまでこけにすればすれば気が済むのよアナタたちは……!!」

『お前か、我々の宇宙からスパークドールズを盗み出すよう仕向けたのは!』

「はあ? だから?」

「スパークドールズを返してもらおう。彼らは道具じゃないんだ!」

争いの道具には利用させないと大地が語るのには、異なる生命との共存を望んでいるからだ。しかしヴィルゴは自分は持つていないという旨を伝える。では一体がと言いかけたところで、皆の背後からガッツ星人が姿を現す。

「お探しのものというのはこれですか?」

ジュラルミンケースを見せつけてくるガッツ星人。下手に手を出すと、何をしでかすか……そんな不安もあり動きが止まる。

「でかしたわガッツ星人。フフフ……それじゃあ、アンタら仲良くここでブツ潰してあげ——」

しかし影のように滑り込んできた人影が、ガッツ星人へと剣を振り下ろした。

「ハアツ！」

攻撃は外れたが、衝撃でジュラルミンケースは宙を舞う。そして割り込んできた男がキヤツチした。

「よつと」

「オマエ……悉く割り込んできやがって」

ヴィルゴはケースを持った男、アオボシを睨む。元から気に入らなかった上に計画の邪魔したり、ようやく殺せると思えばまったく死なないともなれば、彼の存在は一層忌々しくなるだろう。

「君を怒らすためなら何度だって割り込んできてやるよ。ほら、これでしょ？」

「ありがとう……」

「お前……なんだその恰好……?」

「そこかよ……早く逃げるぞ！」

一瞬の静寂を打ち破るように、アオボシの声で全員が館から逃げ出していくのだった。

「何やってるのよー！ 早くアイツら追って始末してきなさいよッ!!」

あろうことかスパークドールズすらも取られてしまい、煮え滾った感情を爆発させるヴェルゴ。彼女はガッツ星人に命を下しながら、体を蹴り上げた。

「クソッ……クソクソクソッ！ どうしてこんな……!!」

完璧だったのに、途中までうまく行っていたのに……そんな感情が彼女の胸の内でも渦巻いていた。この星に来るまでは何もかも思い通りだった。なのにオーブやあの裏切り者のせいで悉くを打ち碎かれてしまう。

「もういいわ。だったらコイツらを使って……この星を焦土にでも変えてやるわー!」

自棄になった彼女が取り出したのは6枚のカードと、唯一残ってガッツ星人の手元に残っていたスパークドールズ。それらを一気に召喚し、物量で攻め立てようとする初期

の作戦を実行に移そうとしていたのだった。

——すると

「やっぱりそつちの方向で行くのか？ オレは賛成だぜ」

背後から近付いてきていたガピヤ星人もといプロキオに気付かず、ダークリングとカードを奪われてしまった。

「ちよつと!? プロキオツ……!」

「けど、コイツらだけで暴れさせるのはちよつと勿体ないなあ……」

「はあ? 何言ってるのよ」

ダークリングを眺めながら語るプロキオの言葉をヴィルゴは理解できず、堪らず聞き返してしまう。しかし髪が乱れ、いつもの妖美な雰囲気欠片もない今のヴィルゴに、彼は答えず話を続けた。

「オマエはこの星を焦土に変えたいんだろ? だったらさ……オマエがやれよ」

そう言つてプロキオはカードの一枚をダークリングに読み込ませ、ヴィルゴへと淡く

光る輪を向ける。

《デアボリック》

放たれた闇の波動は、剣の如くヴィルゴの体を貫いた。

「な、なんで……？」

闇が体を侵食し、自分という存在が上塗りされていく感覚。自分が自分でなくなっていくのをひしひしと感じているヴィルゴは声を震わせた。

「理由なんかねえよ。その方が面白いかなと思っただけさ」

今のプロキオはガピヤ星人……それも半機械化したサデスの体。故にチカチカと輝く光でしかない瞳からは、表情を読み取ることはできない。しかしヴィルゴから見た時、彼の眼からは侮蔑の意を感じた。

「オレ個人はオマエに恨みはない。けど、散々他人を利用してきたところは見てきたからな……。こんな時ぐらいオマエも前に出ろ」

「い、嫌?! ワタシはまだ……こんなところで——」

終わるつもりはないと言いかけたところで、プロキオは言葉を遮る。

「それで兵器にでもなつて、沢つつつ山暴れてくれよ？」

闇が全体を侵食する。美しくはあつたヴィルゴの顔も既に虚空を見つめ、口からは涎がダラダラと垂れている。美しかった彼女の落魄れようが見るに堪えなかつたのか、それともただ飽きたのか……プロキオは部屋から出ていく。残りのカードとスパークドールズを持って。

「あ……わた……あ、しあ……あ、ああ——」

波動は黒煙へと変貌し、ヴィルゴを完全に包み込んだ。

くく

「ちよつと、あの屋敷爆発したわよ!？」

「気にしてる場合じゃないでしょ!」

「そうですわ。一刻も早く安全な場所まで行かなくては!」

館から逃げ出し、市街地に向かう一行。道なりに進めばいいだけだが、律義にエツクスはナビをしていた。

『300 m先、左折です』

そんな中、一眞は梨子や果南といった8人に問いかけた。「なんで来たんだ？」と。助けてくれたのは心の底から感謝している。しかし彼女たちが危険な目に遭うのを避けたかったのだ。

「私たちだって心配なのよ！」

「そうですね。特別な何かができなくても、わたくし達にだってできることがある筈ですわ」

「そうやって今までもやってきたでしょ」

口を噤む一眞を見つめる大地。戦う側と、それを見守る側の気持ち。どちらの想いも理解している彼は、現に迷う後輩に向かって言葉を紡ぐ。

「俺にも、大勢の仲間がいる。苦しい時には、その人たちの笑顔が力になるんだ」

「……」

そんな時、地響きを鳴らしながら街に怪獣が降り立った。

「え、怪獣!？」

「あれは……」

『デアボリックか!？』

既に一度交戦経験のあるエックスは、その怪獣の名を叫ぶ。

頭と胴が一体化したような風貌に、右目には緑色のスコープ。左腕の巨大な機関銃、

右腕には3本の爪を持ったロボットアーム、両肩に三連装砲や小型ミサイルポッド、弾発射機といった多くの武装が装備されている。歩く武器庫ともいえる怪獣……奇機械怪獣デアボリックは、笑い声の様な不気味な咆哮を上げた後、街を破壊していく。銃口が連続的に火を噴き、ミサイルが空を突き進み、光線が一直線にビルを貫く。

「沼津の街が粉々に……」

ものの数秒で瓦礫の山と化していく街を見て、呟く千歌。これ以上好き勝手にさせるわけにはいかないと、大地と一真は前方の怪獣を見て走り出した。

「行きましょう、大地さん!」

「ああ! エックス、ユナイトだ!!」

『よし、行くぞ!』

一真はオープリングを前方に突き出したのと同時に、大地もエクステバイザーの上部スイッチを押し込んだ。

エクステバイザーは左右の金色のパーツが展開。Xを象った形へと変形すると同時に、ウルトラマンエックスのスパークドールズが具現化。即座に掴みデバイザーで読み取る。

《ウルトラマンエックスとユナイトします》

「エックスウウウウウウ!!」

全身武装を一斉に解放。周囲にも被害を及ぼしながら足を進めるデアボリック。対するオーブはシールドを展開し初撃を防ぐ。その後は手刀や蹴りで叩き落とし、スペリオンスラッシュで相殺。エックスも同じく矢じり型の光弾“Xダブルスラッシュ”で撃ち落としながら弾幕の中を突き進む。

「オオオオッ！」

エックスの腕を掴み回転。パワータイプの力も併用し、ハンマー投げのようにエックスを飛ばす。胸元に体当たりが命中。後退し、弾幕も治まる。

『ヤツの攻撃は厄介だ。なるべく撃たせるな！』

「はい！」

アドバイスもあり、即座に左腕を蹴り上げるオーブ。さらに雷をまとった蹴りで下方向から蹴り上げるエックス。だが、デアボリックも反撃に肩から連射。一発の威力も高く、当たれば連鎖的に次の攻撃の餌食になってしまう。終わることのない銃撃の風。

「一眞君！」

エックスは右手に力を溜める。青く輝く手刀をXを描くように打ち込んだ。

『X……クロスチョップ！』

巨体に描かれたかのような光の筋。そこに向かって拳を叩きこめば、X字の衝撃波がデアボリックを襲う。

フラフラと動くデアボリックを逃がすまいとオーブは肉薄。蹴り上げから頭を掴む。
『イイツサアーツ!』

足に力を入れて加速。渾身の飛び蹴りをデアボリックへお見舞いする。

「スペリオン……光線ッ!」

十字に組んだ腕から光線を放つ。しかしヤツは右腕のロボットアームから赤いレーザーを照射。中心でぶつかり合い巨大な爆発を引き起こす。

「クツ……!?!」

『大丈夫か!』

衝撃で吹き飛んだオーブを起こすエックス。並んだ2体の戦士は、再度怪獣を見据える。

『デアボリック……以前戦った時とはまるで違う』

星を宝石に変えようとした宇宙魔女賊との戦いでも、エックスと大地は対峙した。しかし、今回のヤツは以前とは何かが違うと感じていたのだった。

「エックス、何かわかるかい?」

『いや、まるで見当がつかない……』

笑い声のような咆哮を再び上げて向かってくる。対するこちらも、また駆け出そうとしたその時だった。緑色の銃弾が側面から撃ち込まれたのだ。想定外の攻撃になす術

なく、地に伏せてしまう。倒れながらも顔を上げ、射線の先を見つめる。

「デアボリックもよくやってるみたいだな」

二連装の銃口がついた腕を下したガピヤ星人サデス。彼の登場にエックスと大地は驚愕する。

『お前、生きていたのか！』

「いえ、こいつは別人。体だけに乗っ取っているんです！」

「そういうこと。それじゃあ第二ラウンドと行こうぜ！」

長剣を取り出し、左腕をグルグルと回し始めた。

全身武器の機械怪獣と厄介なサイボーグ宇宙人の登場に、大地も一真も思わず奥歯を噛み締める。すると機関銃の攻撃が迫りくる。2体は前転で回避。エックスはデアボリック、オーブはプロキオへと走っていく。

「ゴモラ、力を貸してくれ！」

大地はデアバイザーに、サイバー怪獣のデータが記録されているサイバーカードを差し込む。

《サイバーゴモラ ロードします》

水色の鎧が上半身に装着される。胸部中央に施された巨大なXマーク、角のような突起のある肩アーマー、4本の爪が特徴の巨大な両腕部アーマーにはGというマーク。地

球人のサイバー怪獣技術とエックスのコラボである“モンスアーマー”だ。

《サイバーゴモラアーマー アクティブ》

巨大なクローがボディを引き裂き、デアボリックから大量の火花が散っていく。合間に撃たれる攻撃を両腕部のアーマーで防ぎつつ、鋭い一撃を放つ。

「ハアアアッ！」

高速移動でプロキオを翻弄しながら、一撃を叩きこむナイトリキデイター。

「またソイツかぁ！」

一度やられた経験があるためだろう。プロキオの攻撃は苛烈になっていった。互いに長剣を振り回し、ぶつかれば火花が散る。幾度目かの鏖迫り合いの後、バク宙で距離をとったオーブは即座に雷を纏わせた光球を撃ちだした。

「ストライクナイトリキデイター！」

「もう通用しねえ！」

しかしサデステインで一閃。半球となって消滅してしまう。

「ならコイツで！」

加速して間合いに入ったストリウムマイトのアップパーが命中。だというのに、気にも

せず空中でガピヤ・スネイクを乱射。こちらにも連弾で対処する。

「スワロマイトバレット!」

「それもだ!」

煙の中を突っ切り接近したプロキオ。落下の勢いも加え威力を倍増させた一撃によつて、オーブは仰向けに倒れこんでしまう。そして遂にカラータイマーが点滅を始めてしまった。

「やろう……」

オーブは早々に決着をつけるため、首跳ね起きで立ち上がると同時に赤い光に身を包んだ。

「オオオ……ラアッ!」

サンダーブレスターへと姿を変え、銃弾の嵐を片手で防ぎつつ突進。プロキオの頭を渾身の力で振るつた裏拳で吹き飛ばす。

「いいねえ、やつと骨のあるやつが出てきたな……」

吹っ飛んだものの、今の彼は痛みよりも強者と戦えるその喜びで体を震わせていた。

《サイバーエレキングアーマー アクティブ》

Eのマークが施された巨大な電撃銃を右腕に装備した、黄色のモンスアーマーを纏うエックス。電撃銃から放つ雷撃を、さながら鞭のように扱い攻め立てていく。広範囲の攻撃も、横一文字に薙ぎ払うことで一気に打ち消した。

『クツ……もう時間がない!』

エックスと大地のユナイトも残り時間が僅かなのだ。しかしこのデアボリックには微妙に知能が残っているのか、ただ乱射するというわけでもなかった。

「エックス、一気に決めよう!」

そう言ってもう一つのスパークドールズを取り出そうとした矢先、ブーメラン型の光線がエックスに直撃。

『……なんだ!?!』

「遅いじゃねえかよ」

「申し訳ありません。お待ちせしました」

煙の中から姿を現したのは巨大化したガッツ星人。それともう一体の怪獣だった。

全身から突き出した鋭い突起が光を反射させる。背中にも生えた刃はまるで翼。金属化した皮膚やビスで止められた鎧のような体に、シャッターで閉じたかのような口元。そして均一に光る黄色の目……生物というよりも機械に近い姿は、もはや同族とは思えないほどの変化だった。

「あれは……い！」

大地は見覚えがあった。なぜならそれをX i oの基地で保護していたからだ。盗まれたスパークドールズの1体。

その名は次元凶獣カミソリデマーガ。両腕の“レーザーエッジ”で煌めかせ、その咆哮を轟かせた。

第四節 想いを束ね

『「があああああッ！』』

宙を裂くように舞った光刃が、赤と銀の身体を幾度も襲う。

『大丈夫か、大地!？』

「あ、ああ……」

熱した鉄串を当てられたような激痛が走る。膝をつき、そして脇腹を抑えたままエックスは前方の怪獣を見据える。攻撃を加えた本体……カミソリデマーガは両腕の刃を研ぎ、なんとも余裕そうな表情で向かってくるのだった。

『厄介な相手だ……』

全身が凶器と言つていくくらい鋭刃が飛び出しているため、近距離戦を仕掛ければこちらが不利になるのは確実。さらに近距離だけでなく、数多の遠距離攻撃も備えている。そしてそれらを適切に扱う高い知能。この3つの要素を併せ持ったのがこのカミソリデマーガという怪獣なのだ。

「エックス……まだいける？」

『ああ……勿論だ』

ユナイトを保っていられる時間も残り僅か。時間が来てしまえば、いつまた再びユナイトできるかわからない。そのためにも早急に終わらせなければ。今もジリジリと燃えるような痛みが体を蝕むが、どうにか意識を切り離して戦意を掻き立てる。

「■■■■ ツーー!!」

再度飛んできた剃刃を横に飛んで回避。回り受け身をとりつつ、地面を蹴って突進。拳のラツシユで押し、迫る凶刃を仰げ反って躲す。そして流れるように足蹴り。フィニッシュに光エネルギーを圧縮して纏わせた右腕を胸元にぶつける。すると小規模の爆発。これで少しは隙が出来た筈――

『……………な!? アアアアアッ!』

だが黒煙から振るわれた刃は、点滅のする水晶の横を斬り上げる。そのまま宙に飛ばされたエックスは、ビルを潰しながら倒れてしまうのだった。

「これでも……………くらえ!」

サンダーブレスターは勢いよく右手を振りかぶった。飛んでいくのは赤い光の鋸

……ゼットシウム光輪。

「んだこれはあー！」

だがそんな単純な攻撃をまともに受けてくれるはずもなく、左の長剣で叩き落した。ガピヤ星人サデスの身体を操るプロキオは、楽しそうに切っ先をこちらに向ける。

すると面倒なことに、標的をオーブへと変更したデアボリックが機関銃を乱射しながらこちらへ接近してきた。星人と怪獣、そしてウルトラマン。状況は2対1へと変化する。

「クソツ……時間も少ないってのに！」

「ああ？ このデカブツが……あの不愛想な方を相手してりやいいってのによ」

悪態をつくプロキオ。彼はタイムマンで勝負をしたかったらしい。だがキレたとしても、理性らしい理性のない動く火薬庫は聞いてくれないだろう。その結果を作ったのは自分だとわかっているから、彼は小さく舌打ちをする。

「しゃあねえ。これでも耐えてくれよな、オーブ！」

「……上等だ！」

闇を抱きしめるといふ方法で暴走を克服してはいるが、それでもフュージョンカードの影響を受けているようだ。いつもより好戦的な一真は声を上げると同時に地面を蹴る。

赤と黒の稲妻が尾を引き、オーブはすれ違いざまにデアボリツクの側面へ手刀を打ち込む。その後も勢いを緩めずにプロキオへと突貫。オーブの振るった左の拳と、同じく突き出された機械の拳が衝突。衝撃が波紋のように広がり、ビルを薙ぎ倒していく。そのあまりのインパクトに、同時に打ち出されたプロキオの右腕は粉々に砕けしまった。「もらった！ ゼットシウム光線ッ!!」

吹き飛んでいく無防備なプロキオに狙いを定め、十字に組んだ腕から熱戦を放つ。闇と光の混じった熱戦を受け、ヤツは爆風の中に消えていくのだった。

火花が飛び散り、瓦礫が宙を舞い、黒煙が上がる。そんな激戦の様子を、千歌たちは固唾を呑んで見守っていた。しかし途中で参戦してきた宇宙人と怪獣には声を上げたりもしていた。「卑怯だ」と。

「何言ってるんだ。むこうはどんな手だつて使ってくる。卑怯なんて言葉……あいつらには誉め言葉だよ」

戦っている場所とは全くの別方向を見て呟くアオボシ。彼らの戦いには興味はないし、関わりたくないのだろうか。逃げてきた後も戦いに参加していない。

「どうして一眞たちを助けてあげないの？」

「僕にはそこまでする理由はないね」

真つ当ともいえる問いに淡々と理由を述べるアオボシ。確かに彼がウルトラマンたちに手を貸す理由はないのかもしれない。けれどそうになると、先ほど手を貸したのはどういうことなのか。怒りが湧いてくる寸前に出た疑問によつて、思考がストップする。

「じゃあさつき私たちを助けてくれたの——」
「僕が手を貸したのは、ただの個人的な嫌がらせのためだよ」

「そんな……」

「それにね……あいつらに勝てないようじゃ、シリウスはこの先何と戦つてもダメだ」

この先にあるものを見越しているのか、或いは既に知っているのか……。意味深な言葉だけを残してアオボシはその場を後にするのだった。

少女たちが見えなくなるところまで歩いてきたアオボシは、その場にある木を背もたれにして倒れこんだ。ここまで我慢していたのか……。額には汗の粒が。

「失望されたかな……。まあ……。それが僕だしね」

腹部を抑えていた彼は、ジャケットを脱ぎ捨てる。すると通常無地であるシャツが、赤い斑点模様で埋め尽くされていた。さらに所々切れている。洋館内での宇宙人との戦いで傷を負ってしまったようだ。彼が戦いに参加しなかったのは先の理由もあるが、この傷で満足に動けないというのも大きい。

「はあ……。正義の味方って……。面倒くさいなあ……」

愚痴るように呟いてはいるものの、何処か満足そうだったのは口元が緩んでいるからだろう。

くく

「このっ……」

戦いは苛烈を極める。デアボリックは未だ健在でありオーブと光線を続けている。さらにエックスもカミソリデマーガ、そしてガッツ星人の2体を捌いている。体の隅々が悲鳴を上げているが、躊躇うことなく拳を振るい、足を前へ前へ動かす。

するとデアボリックとはまた別の光弾がオーブを襲った。瞬時に腕をクロスさせて攻撃を防ぎ、その方向に目をやった一眞は思わず溜息を漏らす。

「やってくれたな……おかげで体がバラバラに砕けちまったぜ」

先ほどゼットシウム光線を当てた筈のプロキオが、煙の中から姿を現したのだから。

「な、お前……」

「ああ、言つてなかったよな。サデスの体こ体はな、サイボーグになつてからか強力な再生能力を持つてるんだ。さつきみたいにならばらにしたつて、この通りつてわけさ」

腕を広げて見せるヤツの体。それは今日初めてや対峙した時と同じだった。まるで時間を巻き戻しでもしたかのような、汚れない体の彼がそこにはいたのだ。これまでも倒す度に彼は再戦を仕掛けてきた。しかし今回はインターバルなしだ。その理不尽な再生能力で何度でも蘇る。

拳を握りしめるオーブを嘲笑うプロキオ。その偽りの姿……いや既に本当の姿とも言つていいヤツら向かい、オーブは何度目か激戦を繰り広げるために地面を蹴った。

だが、体力は既に無いに等しかった。それは共に戦うエックスや大地も同じ。両刃で体を引き裂かれ、分身体から放たれた光線が身体を穿つ。それはオーブも同じ。猛吹雪のように打ちつけられる銃弾。防ぐ暇のない拳や蹴り。意識も朦朧とし、相対して激しく点滅するカラータイマー。

「これで終わりです。ウルトラマンエックス」

『「ウアアアアアアアア——」』

ガッツ星人とカミソリデマーガの同時光線を受けたエックスは爆発に吞まれ姿を消してしまふ。ユナイトが解除されてしまったのだ。

「エックスさん、大地さん!!」

目を離れた一瞬の間。飛び込んできたプロキオの強力な拳がオーブを吹き飛ばした。

「ギャラクティカ・サデスファクション！」

「ガアアツ——」

ビルを巻き込みながら倒れたオーブ。彼は体を維持することができず、遂にエネルギーが霧散。その姿は一真へと戻っていくのだった。

「……………?!」

その様を見ていた千歌や曜たちは思わず彼の倒れた場所まで走り出していく。

「ううっ……………」

一方ユナイトを解除された大地も同様に、別の場所へ投げ出されて地面を転がる。幸い受け身をとれたようだが、ダメージの残る体では起き上がれない。

「エックス……………大丈夫？」

『あ、ああ。だが、再びユナイトとなると……………』

エックスが無事だということに安どするのも束の間。お互いに満身創痍であり戦いへ赴けないこと、そして周りの景色を見まわして奥歯を噛み締める大地。

あちこちに上がる煙や炎。建物だつてここら一帯は原型が残つていないだろう。瓦礫の山となった地を闊歩するのは4体の怪獣と宇宙人。成す術のない今は、ただ視線を送ることしかできなかった。

「く…………ぐ、うう…………」

ビルが崩れ、クレーターとなった中心に倒れていた一真。体を焼くような痛みで喘ぎ、起き上がるうにも体が言うことを聞かない。耳鳴りも酷いし、頭もクラクラする。だからなのか、近づいてくる声が自分を呼んでいるのか、悲鳴なのかわからない。

「カズくん……………」

「ちよつと、しつかりして!？」

「…………何してんだよ。こんなトコ、まで来て…………があ…………」

そんな中大きな振動が彼女らを襲う。未だ宇宙人たちや怪獣は健在だ。暇なのか暴

れ足りないのかは知らないが、銃を乱射し、刃を振るったり……様々な方法で残ったビル群を破壊。街を蹂躪していく。

「くそ……」

その光景を目の当たりにした一眞は立ち上がろうとしたものの、足がもつれて膝をついてしまった。彼はまた変身しようというのだ。その姿を見て、周りからは止めるように言われる。

「無茶よ！」

「その体では……」

「わかって、るけど……」

この体で何ができる？ その答えは何もできない、だ。仮に変身できてあの群れに突っ込んでいくとしよう。すれば袋叩きにされて今度こそ死ぬ。こうやって変身解除で済んでいるのが幸運なくらいだ。けどそれは本人である一眞が一番わかっている。しかし理解していても納得することはできない。そんな一眞は自分の無力さに拳を握ることしかできなかった。

すると、一眞の肩にポンつと手が置かれた。

「…………え？」

見上げたものの、太陽の光で顔はよく見えない。けどその体つき、そして置かれた手の力強さから男と判別できる。

「諦めてはいけない」

その声に、少女たちも顔を向ける。男は穏やかな雰囲気を纏っている。しかしそれだけではなく、多くの出来事を経験した特有の何かを感じる。かといって一真たちを包むのは緊張ではなく、どことない安心感。

「かつてウルトラマンたちも数多くの強敵に敗れることがあった」

「……………」

この人はウルトラマンのことを知っているようだ。それも経験してきたみたいだ。

「だがウルトラマンも人間も……仲間がいる限り、どんな強敵にだって勝つことができ。今の君なら、その意味が分かるはずだ」

「…………あ、あなたは……誰です？」

その男に一真は尋ねた。そこまで見通しているあなたは何者なのだと。

「誰でもない。ただの風来坊さ」

そう言つて男は、胸のポケットから真紅のフレームに覆われたメガネ状のアイテムを取り出した。そのアイテムが「ウルトラアイ」と呼ばれるそれを男が装着すれば、渦巻く

火花のような閃光と共に体が変化する。銀色の頭部に額のビームランプ。真っ赤な体色に、胸から肩にかけて備わるプロテクター。

幾度も侵略者から別の地球を守り続け、真紅のファイターと呼ばれる戦士。彼がこの地に立った瞬間を、一真やA q o u r sは疎か、大地やエックス、宇宙人たちの全員が目にしていた。そんな戦士の登場に、誰もがその戦士の名を呼んだ。その名は――

「……セブン!？」

『『セブン!』』

「セブン?」

「セブン……!」

恒点観測員340号、ウルトラ警備隊七番目の仲間とも言われ、ウルトラ兄弟と呼ばれる地球を救ったウルトラ戦士に与えられる名誉の称号を持った戦士……ウルトラセブんだ。

怪獣たちを見据えたセブンは一気に駆け出した。デアボリックのミサイル群を突き出した指から光弾を連射する。ウルトラショットで撃ち落とし、そのまま体当たりで後退させる。次に迫ってくるカミソリデマーガの刃を躲しつつ、頭部に備わる宇宙ブー

メラン”アイスラッガー”を使って打ち合う。

だがそこに緑の光弾が放たれる。しかしセブンはこれも回避。額のビームランプから放たれる”エメリウム光線”を3連射。攻撃を止めさせる。

「セブンさん……」

一連の動きを見ていた一真は、体の痛みを忘れるほどに見入ってしまった。力強くも、素早いその動きは長年の末に会得し、今現在も成長しているという歴戦の勇者を思わせるものだったのだからだ。

セブンは語らずとも、一真へと頷く。

「これが噂に聞く生涯現役つてやつか。おい、オマエらは手を出すな。コイツはオレが！」

ガッツ星人や怪獣2体呼びかけ、プロキオは地面を蹴って飛び上がる。落下の勢いを利用して襲い掛かろうとするが、セブンは簡単に投げ飛ばしてしまう。馬乗りになつて攻撃しようとするが、プロキオはそれを阻止。互いに立ち上がり、激しい肉弾戦が始まる。

巴投げから始まり、素早くそれでいて強い手刀。丸太をぶつけたような重い打撃。怯んだところでプロキオを地面に叩きつけ、トドメにはドロップキック。その機械の身体は滑るように吹き飛んでいく。そして数秒後には地面へ倒れこんでしまった。

「セブンのキック……効くなあ……」

腹部を抑えながらも戦いを繰り返されるのが楽しくてたまらない彼は、すぐさまセブンと衝突した。

く

そんなセブンとプロキオが衝突する中、デアボリックはA q o u r sや一眞のいる方に体を向けた。それはヤツの本能か、消えた彼女の怨念が残っていたのかはわからない。けれど確実なのは、確実に命を奪おうとしていること……それだけだった。

「あの野郎……みんなはこっから逃げろ。俺がどうにか時間を稼ぐ！」

しかし彼言ったことを聞く者は誰もいなかった。それどころか、一眞の前に立ったのだ。まるでデアボリックを止めようとでもするかのよう。

「その怪物！ カズくんに何かするなら、わたしたちを倒してからにしろー！」

「マルだつて相手になるぞらー！」

「このまま守られっぱなしつてのも嫌だしね！」

「何言つてんだよ！ 早く逃げろつて!!」

彼女たちの行動はとももありがたかった。でもそれはそれだ。みんなが恐怖に心を支配されているのは見なくてもわかる。さらにこのままでは、全員とも灰になる。そんなことにはさせたくない。その一心で一眞は叫んだのだった。

「何言つてんのよ」

「ルビイたちだつて仲間です!」

「最後まで一緒ですわ」

「今更言わせないでよね」

デアボリックの鳴き声とともに迫る。すぐそこまでやって来た地響きで倒れそうになるも、必死に堪えて顔を上げる。辛かった時もあつた、現実には打ちのめされそうになった時もあつた。それでもやってきた自分たちであるから。それがステージの上でも、そしてこの瓦礫の上でも変わることはない。

「私たちは絶対に……」

「諦めない!」

かつて離れ離れとなり、消えかけた夢や目標があつた。しかし今こうやって再び集ま

り、また歩き出す事ができた。そんな経験があるからこそ、いつだって諦めないと3年生は叫ぶ。

「私たちはいつだって……」

「「前を向くー！」」

何が起ころうとも、ひたむきに前を向こうとする。隠された力を信じ、進み続けようとする1年生の叫び。

「限界だって……」

「「越えてみせる!!」」

輝きたいと始まり、いつしか自身の抱えてしまっていたものすらも取り払っていった。いつかのパフォーマンスの時のように、自分の見えている、知っている限界なんてものは超えていけると2年生が叫んだ。

彼女らの叫びは、ここにいる全員との絆を紡いでいくと同時に……歩んでいくうちに
培い、経験してきたもの。それが光となり……彼に力を与える。

「……………これは……………」

オーブリング、そしてホルダーにある3枚のカードが銀色に光り輝く。そこで一眞
は、この力を与えてくれたウルトラマンヒカリの言葉を思い出す。

『——彼女たちと結んだ絆の力が最高潮に達した時……その種子は芽吹き、新たな
力となってくれるだろう』

芽吹く時……それが今なのだ。白紙のカードは千歌たちの周りを回ってオーブリン
グに吸い込まれていく。

「本当に……バカだよ。みんなは……」

一眞は呟くも、その口調はどこか嬉しそうだった。ここまで信じてくれたこと、そし
てこれからも信じてくれること……いっただって助けてくれる彼女たちに一眞は——

「ありがとう」

とだけ。

そんな彼の言葉を聞き、千歌たちは頷く。再び戦いへと赴く彼の背中を押すように。そして見守っていると喋ってくれているように。

再び立ち上がった一真は眼前の存在を睨みながら、青く光り輝くオーブリングを起動させた。

ウルトラマンギンガ

ウルトラマンビクトリー

ウルトラマンエックス

《トリニティフュージョン》

3枚のカードをリード。その後オーブリングから現れたのは、丸鋸状の武器“オーブスラッシャー”。みんなの絆が生み出した力、そして新たな道を切り開く3人の力を借りるため、一真は虹色に輝いたオーブスラッシャーを天高く掲げた。

「オーブトリニティ!!」

赤、黄、紫のオーラに包まれた3人のウルトラ戦士が、青く光るオーブと重なり合う。そして虹色の粒子が体を形作った。

天から降り立つオーブに、周囲の空気がまた一段と変化する。

手足や額に光るクリスタルや、サイバーメカニツクな耳当て……カラータイマーの周りには金色の装飾に、青いXの輝き。右肩には、5色に煌めく鋭利な刃……。

ギンガ、ビクトリー、エックスの特徴が上半身に集中しており、下半身はオーブオリジンの面影を残すような外見。新たな世代を行く彼らをその身に宿した姿に、誰もが目を奪われた。

「俺の名はオーブ。ウルトラマンオーブ……オーブトリニティ!!」

右肩からオーブスラッシュャーを取り出し、構えを取るオーブトリニティ。

「■■■■ー！！！！」

「イイネイイネ！そう来なくっちゃなあ!!」

再び彼が立ち上がったことに、怒りの咆哮をあげるデアボリック。そして、興奮で声を上げるプロキオ。目の前の敵に走り出してくオーブを見てセブンも領き光を送った。その方向にいたのは大地とエックスだ。

「……」

その光はエクステバイザーに吸収され、中からエックスが呼びかけてくる。

『大地、セブンのおかげでワタシの力も回復した。いつでも行けるぞー!』

「よし、もう一度ユナイトだ!」

再度エクステバイザーの上部スイッチを押し込み、大地は再び光に包まれた。

『Xクロスキック!』

上空から出現した勢いのまま両腕、両足を開き、X字の姿勢からエネルギーを集中させた右脚で強力な蹴りを繰り出した。

「■■■■ツツー!!!」

空気を震わす轟音と苦悶の叫びを上げてカミソリデマーガは転倒。エックスも着地し構えをとった。

そうして並び立つ3体の巨人と4体の怪獣と宇宙人。一触即発ともいえる空気の中で、プロキオは声を上げる。

「悪いな。こつちにはもう1つ隠し玉があるんだ。こんな盛り上がる中で使わなきや損だろ？」

ヤツの手の中にあつたのは豆粒ほどの小ささ。しかしウルトラマンの強化された視力で見れば、その正体が怪獣カードだとすぐに認識できた。そしてそのカードをダークリングにリード。

《ゴルザ》

《メルバ》

《レイキュバス》

《ガンQ》

《超コツヴ》

黒い翼が広がれば、破壊を尽くす王者が誕生する。

《ファイブキング》

ゴルザの頭部に、額を覆うようにしてから背中を構成するメルバの翼。右腕を構成するレイキュバスの頭。左腕はガンQの瞳が目立つ。そして腹部に張り付いた顔から構成される超コツヴの下半身。各怪獣の特徴や技を併せ持つ超合体怪獣だ。

「これで5体3だな。存分に楽しめよ？」

『なんて奴だ……』

不穏な空気になる寸前で、オーブは語りかけた。

「例えこちらが不利でも、諦めないのが俺たちでしょ？　どんな強敵でもみんなの力で！」

「ああ、そうだね」

セブンも頷き構える3人。どんな強敵でも、みんなの力を合わせれば勝つことができる。1人では無理だとしても仲間を信じ、絆を築けば勝つことができる。

「やる気になったか。じゃあ早速ファイブキング、あいさつにぶちかませ!!」

指示のもとファイブキングは一步踏み出して額や目、右腕や左腕から一斉に光線を放った。地面を抉り突き進む光線をもろに受ければ無事では済まないだろう。

しかしそれは、上空から放たれた2つの光線によって相殺された。

「ギンガクロスシュート！」

「ビクトリウムシュート！」

第三者の攻撃に狼狽えるプロキオは、射線を迎える。空から落ちてくる2つの影は、オーブの目前に着地した。

1人は赤や銀の体に、額や耳、胸部や両肩、両腕、両脚についたクリスタルが印象的

なウルトラマン。

そしてもう一人は黒を基調とした全身に、手首や足首に光るV字型のクリスタル。V字型のカラータイマー。そして何よりも特徴的なのがV字に沿った形状の頭部は、さながら海賊帽のようだ。

「ギンガ、ビクトリーー！」

大地は思わず声をかける。それは彼と同じように別の宇宙で活躍するウルトラマンで、過去に共闘した仲間でもあるからだ。一人は未来から来た銀河の覇者“ウルトラマンギンガ”。そしてもう一人は太古の昔に地球に降り立った戦士“ウルトラマンビクトリー”だ。

「よお大地、エックス、セブン」

「あなたがウルトラマンギンガ……」

オーブ以外は顔見知りであるらしく、親しげに話しかけるギンガ。その様に若干戸惑いの表情が見える一真。

「あんたは……俺らがしってるオーブじゃないってことか？」

「おそらく……」

「そっか。それじゃあ改めて、俺がギンガ。んで、そっちがビクトリーだ。よろしくな」
そうして短い紹介を終えた後に、ギンガとビクトリーも並び立つ。

「状況は理解できた。そんなじゃ、こいつらを一緒に倒そうぜ！」

「例えオレたちの知るオーブでなくとも、進む先は一緒だ。行くぞ、オーブ！」
「はい！」

守る者と壊す者、その双方が睨み合い構える。少女たちが見守る中、いよいよ最後の
大決戦が始まろうとしていた。

第五節 新世代の力

ゴゴゴツ……と、大地が揺れている。遅れて凄まじい爆発音が届く。目の前に広がる景色は日常とは遠く掛け離れたものだった。しかし太陽はいつもと同じように街を、彼女たちを、巨人を、怪獣を、宇宙人を……平等に照らし続けている。

正直今日は多くの出来事が立て続けに起きすぎて、脳が処理しきれていない。でも彼を見送ったのだから、自分たちは見届ける責任がある。「理解できない」なんて言い訳に逃げてはいけない。

「……」

再び立ち上がった彼の背中を、彼と共に戦う巨人たちの姿を……少女たちは、ただ祈るように見つめ続けていた。

「……っ!? ゴモラアーマー!」

上半身を水色の鎧で包み、プロキオの拳を防ぐ。エックスのようにサイバーゴモラアーマーをその身に纏ったのだ。耳を塞ぎたくなる金属音が響くが、両者ともに気にしてはいなかった。いや、「いられなかった」といった方が正しいだろう。

「ウオオオラアアアア!!」

右腕の巨大なクローを振り上げる。腕をクロスして防ごうとしたプロキオだったが、その力と爪の前に呆気なく崩されてしまう。オーブがチャンスとばかりに狙いを定めれば、両腕のクローが眩く発光。ガラ空きとなった胸元へと突き出すと同時に溜め込んだエネルギーを解き放つ。

「ゴモラ振動波ッ!」

「ヌオオオツッ!」

凄まじい勢いで地面に倒れ込むプロキオの横で、デアポリックは己の武装を乱射する。

「……っ!? ぶねっ!」

紫の光とともに纏われた鎧と、左手に輝くのは爪のついた盾。そんな盾の中心には、あらゆるものを飲み込もうとする孔が備え付けられていた。

「ベムスターアーマー……!」

光線を吸収し数多のウルトラ戦士を苦しめてきたベムスターと同じく、左腕の盾で攻撃を吸収する。

「そんで……キングジョーランチャーだ！」

右腕はウルトランスでキングジョーカーカスタムのペダニウムランチャーへと変換。銃口から鮮紅の矢となった一撃がデアボリックを貫く。さらに光線を跳ね返す”ベムスタースパウト”も奴の体を穿つ。それと同時にオーブは跳躍。

デアボリックの頭上を取ったオーブは腕を天に伸ばす。黄色の光が右腕に集まれば、U字型のアームに同じ怪獣の尻尾が重なる。そして巨体を易々と囲むくらいには大きな、さながら銀河系のようなプラズマの渦を発生させた。

「痺れるー！ トリニティウムX^{クロス}………ライトニング!!」

目を突き刺すような強烈な光と、耳を劈くような衝撃音がデアボリックを襲う。ギンガ、ビクトリー、エックス………3つの力をその身に宿すオーブだからこそできる技だ。デアボリックは回路系統がショートでもしたのか、先ほどまでの荒々しい行動が嘘のように収まる。

「オーブッ！」

そのままデアボリックへ向かっていこうとした瞬間、プロキオが飛び込んできたためオーブスラッシュャーで受け止める。

「オイオイ、そんな面白えもん隠しときやがって……勿体ねえことしてんじやねえぞ？」
「面白いだと？　これはみんながくれた、みんなを守るための力……戦いを楽しむためのものじゃない……！」

「オマエがどう思おうと、オレにとつちや同じことだ」

「……っ！」

罅迫り合いから蹴りでプロキオを吹き飛ばし、その間に接近するデアポリックヘターゲットを変える。

ハイパーゼットンシザースとサイバーゼットンアーマーを右腕に重ねるようにして纏う。そして極限まで腕を引き絞り、無数に生み出した火炎弾を射出する。

「トリニティウムスフィア……インフェルノ！」

まるで隕石群が降り注いでいるかのような衝撃と業火。だがそんなことなど構わず、舞い上がる煙幕を突っ切って衝突するオーブとプロキオ。刃と蹴りが交差し、豪快に火花を散らす。

「チツ……！」

「こんなものっ！」

右腕のブラスタターが鈍く光る。対するオーブも右手に持った刃で銃弾を打ち消していく。衝撃が腕を痺れさせる。銃弾の熱が腕に飛び散って痛い、奥歯を強く噛み耐え

る。

短剣を受け止め、刀身をさも丸鋸のように回転させて斬りつけるも、プロキオは怯むことなく短剣で応戦。両者の間には幾度となく火花が散っていく。武器では……と判断し、拳と拳がぶつかり合う。同時に放った蹴りは互いの脇腹を捉える。

「……グツ」

「……ヘツ」

ダメージに声を漏らすオーブと、それでも尚笑うプロキオ。しかしその目だけは、はつきりと互いを睨んでいた。

「お前は……戦うことでしか意義を感じれない。争い合うことでしか、自分の存在を認識できない……」

「だからどうした!」

再度突撃し、幾度目かの鏢迫り合い。そんな中でふと口にしたオーブへ、プロキオは己の持った刃に力を込めた。

「……どうしようもなく、悲しい生き方だなんて思ってな!!」

一見すれば只の少年。だけどその中身は戦闘欲に塗れた危険な存在。誰かの命を奪うことでしか立っていられない者だ。それが彼なりの生き方なのなら否定してはいけないというのもわかっている。わかっているからこそ、どうしようもないと受け入れる

のが少し辛かった。

「オレはオレだ。オレが満足するまで、何度だって挑戦してやる。そしてオマエに勝つて、また新しいヤツと戦う。ずっとそうしてきた。そして、これからもだ！」

「クツ……!!」

鳩尾の衝撃で両者ともに後退しつつも、構えを解くことはない。辛いけど、倒さないといけないから。

《ウルトランス　グドン　ウィップ》

地底怪獣グドンのように右腕を鞭に変化させ、ファイブキングへ攻撃を仕掛けるビクトリー。さらに跳躍し、体を縦に回転。威力を増した一撃を浴びせる。怒りをむき出しにした奴は、レイキュバスの頭部と鍔が一体化した右腕を突き出した。冷気、火炎を同時に放たんと光が溢れ出る直前、ギンガが割り込んで右腕を蹴飛ばす。

「フツ！」

「ラァッ！」

ビクトリーの膝蹴りが腹部へ、ギンガの手刀が首元へ。重い一撃を、鋭い一撃を同時に味わったファイブキングは悲鳴を上げながら胴体にあるコツヴの額から光弾を発射する。

「ファイブキング……やはり強敵だな」

「ああ。なら俺たちも、気合入れ直さないと！」

ビクトリーの両足にあるクリスタルが輝きを増す。一方ギンガは全身のクリスタルが紫に発光。

「ビクトリウムスラッシュ！」

「ギンガスラッシュ！」

回し蹴りの要領で矢じり型の光弾を撃ち込むビクトリー。そして頭部のクリスタルから、それを象った光刃を放つギンガ。

光線技は左腕のガンQに吸収されてしまう。それを知っている為、一か所からではなくそれぞれ別の場所から、それでいてタイミングをズラして攻撃を放った。とはいっても吸収されてしまった攻撃もあるため、ダメージは微々たるものでしかない。しかしまだ終わりではない。ここからだ。

《ウルトランス サドラ シザース》

岩石怪獣サドラの鍔を身に着け、連撃を浴びせる。その素早い攻撃に、ファイブキングのあちこちから火花が散っていく。屈んで攻撃を回避。そのまま左側面を取った彼は、左腕きつちりと挟む。自分一人ならやる意味のない行動。しかし後ろに仲間がいるなら話は別だ。

「今だヒカル！」

「オツケー。そんじゃあ、焼きを入れてやるぜ！」

クリスタルが白く光る。ギンガは右腕から光剣“ギンガセイバー”を生成。そしてその剣を地面に突き刺す。すると地割れが起こり、足元から溶岩が噴出。下半身を、そしてコツヴの額を焼き尽くした。

セブンとガッツ星人の拳が混じる。激しくなる攻撃を防ぎ切ったセブンは即座に反撃に移行。しかし手から放った青い光線によって攻撃が中断。セブンは前転や側転で迫る光の塊を回避していく。煙が辺りを囲う中、両者の視線が衝突する。

「……であなたに会うとは……!」

ガッツ星人。今対峙しているウルトラセブンとは因縁浅からぬ関係と言ってもいいだろう。多くの同種がセブンと戦い、敗れた。この真紅の闘士に打ち勝つこと……それは最早一族の悲願にも等しい。

「フフフツ、あなたを這い蹲らせてあげましょう!!」

数秒の睨み合いは終わりを告げる。互いに地を蹴り、眼光が尾を引く。先ほどよりも威力を増した攻撃の数々が交じり合う。

「フツ!」

頬目掛けて飛んでいくガッツ星人の裏拳。しかしセブンはそれをブロック。さらにホールドし、足払いでバランスを崩してから投げ飛ばす。

「オオツ!?!」

強く全身を打ち悶えるのも一瞬。立ち上がったガッツ星人は正攻法で勝てないと感じたのだろう。そこらにある瓦礫を手に持って殴り掛かったのだ。

上半身を執拗に殴られるセブンだったが、迫る攻撃を腕で捌き空いた腹部にタックル。鉄の塊がぶつかってきたような衝撃が広がり、ガッツ星人は体のため込んだ空気をすべてを吐き出してしまふ。

「ゴオツ……!?!」

尻餅をつくように倒れこみ、そこからまた二転三転してようやく停止する。

「い、この……ふざけやがって!!」

先ほどまでの丁寧な言葉を使っていた彼が消える。本性を現したのか、それとも頭に血が昇っているだけなのかは定かではない。しかし、目の前の巨人を倒すという怒りと殺意という……奴の本性が姿を見せたのは確かだった。

首を掻き切ろうと迫る刃を避けるため、体を反る。そして流れるように片腕で体を支え、足を振り上げて二撃目の剣筋をズラす。さらにもう一発正面から蹴りを入れ、カミソリデマーガを後退させる。

《サイバーベムスターアーマー アクティブ》

上半身に紫の鎧を纏い、左腕に盾を装備したエックス。尾から放つ雷撃を吸収しながら突進。そして盾を投擲。さながらfrisビーのように風を切って進む盾は、奴の肉体に当たる――

「■■■■ツ！」

直前に弾き返されてしまう。しかしエックスも想定済み。

『……ッ！』

返ってきた盾を蹴り飛ばし、倍の威力で飛ばしたのだ。先程よりも回転と威力が増した紫の刃が肉体に食い込む。その肉体を切った音よりも、切られた悲鳴によって街が揺れた。

鎧を解除したエックスは気合を入れ直すかのように地を叩き構えを取る。

刹那、風を切って突貫。低位置から光を纏わせた拳を振り上げるエックスの顔を刃が掠める。しかし一撃を届けるために視線は逸らさない。一撃を届けるために動きは止めない。一方、刃を躲されたカミソリデマーガは頭部の角から光線を放った。至近距離で互いの力と力がぶつかる。途端、激しい閃光が辺りを真っ白に染め上げた。

く
く

「覚悟しろセブン!!」

遂にセブンとガッツ星人の戦いは終盤に差し掛かる。攻撃を的確に避け、カウンターで腹部を蹴り上げ、追撃のドロップキックで吹き飛ばす。

「このお……我が一族の宿敵……今度こそ葬り去つてやる!」

一族の仇と個人的な憎悪。それらが分身していき、因縁の相手ともいえる巨人を囲い込む。しかしセブンも幾度となくこの分身宇宙人と戦つてきており、これくらいは想定内だった。

頭部からアイスラッガーを投擲。分身体を隅から切り裂いていき、ついに本体を捉える。

「何を……!?!」

かつては苦戦し、敗北した相手かもしれない。しかし此方にも、数々の死線を潜り抜けてきた意地というものがある。ここで簡単に負けるつもりはないとセブンは語るようにガッツ星人を見据える。片腕をL字型に曲げ、カッター状の光弾を連続発射。

エネルギー光弾“ハンディショット”が足元を捉えた。起こる爆発と砂煙でガッツ星人の視界は奪われてしまう。

「く、目が! 目がああああ!!」

セブンはアイスラッガーを手前の空中で静止させる。そして両手を握手するように

組み、そのまま腕を後ろに引いてから前に突き出すと同時にハンディショットを当てて打ち出した。アイスラッガーの威力を数倍にまで高めた技“ウルトラノック戦法”だ。数倍の威力で飛翔したアイスラッガーは、見事ガッツ星人を一刀両断する。真つ二つになった身体は、倒れると同時に大爆発を起こした。

「エックスー！」

『ああ、行くぞ大地ー！』

カミソリデマーガに突進を仕掛けるエックス。右腕、左腕と迫り来る刃を避け、時には片腕で防ぎ、胸元に1発ぶち込む。相手が怯めばここぞとばかりに攻撃の連発。拳、手刀、そして両足蹴りで吹っ飛ばす。

『「そこだ！」』

手の先から鎌型の光弾“Xスラッシュ”を飛ばす。火花が舞い、憤怒の叫びを上げる奴を見据え、エックスは鎧を纏う。宇宙恐竜の両腕を模した腕のアーマーには金文字で

「Z」と刻まれており、胸部の発光器官を模した部分は金色に輝いた。

《サイバーゼットンアーマー アクティブ》

体全体をバリア“ゼットンシャッター”で覆い、錐揉み回転で突き進んでいく。土を舞上げ、金色の風が全体を包み込む。

『ゼットン……トルネード！』

カミソリデマーガと激しい攻防が展開されるものの、奮闘虚しくエックスは上空に逸らされてしまった。

「アレをやるぞエックス！」

『ああ！』

「ウウオオオオオオ!!」

上空に飛ばされたエックスは素早く鎧を解除。力を溜めた後に両腕、両足を開き、全身からX字の爆炎を解き放つ。

『アタッカー……X！』

ゼットントルネードで腕の刃が傷つき、真面に受けるわけにはいかないと判断したのか、頭部からデマーガバリオンを発射。両者の中間あたりで衝突し合い、大爆発を起こす。その炎によってエックスの姿もかき消されてしまう。

《ウルトラマンエックス パワーアップ》

途端、虹色の光が炎を消し去った。

理由は当然、エックスが形態を変えたからだ。体は黒や青の割合が増え、サイバードイストな虹色のラインが走っている。そして彼の右手には、虹色に光る剣。困難を越え、エックスと大地の繋がりがより強くなって生まれた姿。ウルトラマンエックスだ。

『エクシードイリユージョン！』

空に佇むエクシードXは掛け声と共に赤、青、黄、緑に分身。それぞれが虹の剣”エクスラッガー”を振り下ろす。上空からの4連撃に、カミソリデマーガはなす術なく切り裂かれる。

『エクシードスラアアアッシュ！』

さらにかくつもの残像を残し、七色の斬撃を浴びせていくエクシードX。大振りに薙いだ一撃で、カミソリデマーガの胸元から横一文字に火花が噴き出す。

激昂したカミソリデマーガの反撃を予測し、バク転で距離を取り通常形態に戻る。エックス達が闘っているのは、決して眼前の存在を倒すためではない。いつか共存できるその日までの――

『これで決めるぞ、大地！』

「ああー」

ユナイトが最高潮に高まったエックスは、右腕を斜め上に振り上げて更なる動作に入ろうとする。しかし、ツルギデマーガは背中にある翼状の凶器から斬撃エネルギーを乱射してきた。

『！……っ！』

エックスは即座に見切つて横へと跳躍。絶え間なく迫り来る斬撃エネルギーを左回転で弾き落とすと共に、予備動作を全て完了させる。それに伴つてなのか、高速で回転する全身から余分なエネルギーが放出される。

そしてカミソリデマーガに照準があつた一瞬、胸の前で腕をX字に組むと同時に2人は技名を叫んだ。

『ザナディウム光線ツ!!』

カミソリデマーガの胸元を貫く。直後、凄まじい規模の爆発が起こるが、飛び散った小さな粒子はある一点に集まっていく。ザナディウム光線の効力によって、奴はスパークドールズへと圧縮されたのだ。

「俺たちも負けてらんねえな！ 行くぜ、シヨウ！」

「ああ、任せろ！」

2体の巨人はそれぞれ武器を具現化する。ギンガは自身の変身アイテムであるギンガスパークが変化した槍“ギンガスパークランス”を。ビクトリーは、相棒とも呼ばれる聖獣シェパードンの上半身や背部の神秘のエネルギー結晶石ビクトリウムを模した刃が青く光る剣“シェパードンセイバー”を。

「■■■■ー！！、■■■■ー！！」

ファイブキングはメルバの羽を広げ、こちらに滑空。そのまま両者とも蹴散らそうと

しているのだ。頭部、そして両腕から光線をまき散らしながら迫りくる奴を見据え、ギリギリのところまでそれぞれ回避。だがそれだけでは終わらず、擦れ違いざまにギンガが右側面を、ビクトリーが左側面を切り裂いた。

「ギンガ……!」

「ビクトリー……!」

苦しみ悶えながらも飛翔を続けようと急上昇を始めたファイブキングへ両者は振り返り、その翼目掛け煌々と輝いた己の武器を突き出した。

「アルティメイタムツ!!」

刃から放たれた2つの光線は螺旋のように空へと延びていくと、見事翼を捉え激しい爆発を与える。空を駆ける手段を無くしたファイブキングは真つ逆さまに地へと墜落。しかしそれでも尚、己の本能と、ウルトラマンを倒すという命のために立ち上がる。

「まだまだここからだぜえ!」

「オレたちの絆……見せてやる!」

途端ギンガとビクトリーの身体が光り、重なり合う。2人が融合し、ギンガの姿にビクトリーの意匠が加わったような新たなウルトラマンが誕生した。その名もウルトラマン——

「ギンガビクトリー!!」

悪あがきレベルの攻撃を放つファイブキングだったが、ギンガビクトリーはバリアも張らず突進。拳の激しいラッシュに、素早い足蹴りの連発。渾身の回し蹴りが頭部を捉え、奴は堪らず後退してしまふ。この隙に彼らは左腕のウルトラフュージョンプレスから、力を貸してくれたウルトラマン達の技を発動させる。

「ウルトラマンガイアの力よ！ クアータムストリーム！」

大地の光を借り、超高熱の光線を発射。勿論ファイブキングはガンQの目玉で吸収していく。しかし彼らはやめるどころか威力を倍増させる。極太の熱戦を吸収し続け、遂には過剰吸収で目玉が吹き飛んだ。これが彼らの狙いだったのだ。もうファイブキングには、光線を吸収する力はない。

「■■■■ ツーリー!!」

左腕さえも使えなくなったファイブキングは苦痛からくる憤怒の声を上げ、レイキュバスの右腕から光線を放つ。対するギンガビクトリーも即座に、前に進み続ける光を借りる。

「ウルトラマンダイナの力よ！ ソルジエント光線！」

光線と光線がぶつかり合い、周りに火の手が上がる。しかし拮抗したのはほんの数秒だけ。光線を打ち消されたレイキュバスの腕も粉々に砕け散った。

「ウルトラマンティガの力よ！ ゼペリオン光線！」

反撃の隙は与えない。超古代の光を借り、L字に組んだ腕から白色の超高熱光線を撃ち込む。頭部が爆発し、炭のように黒くなってしまふ。

本来であればこれで死んでいるだろう。しかし目の前の存在は未だに身体を動かしている。それは機械的に命令を実行しているからなのか、或いは元となった怪獣たちの執念か。そのゾンビにも似たボロボロの状態で突進を仕掛けてくるが、彼らもトドメと言わんばかりにエネルギーを貯めていた。

ウルトラフュージョンブレスに宿る8人のウルトラマンの力。そしてギンガとビクトリー。計10人の力を結集させた最強の必殺技を放つために。

「これが人間とウルトラマンの……」

「絆の力だ！」

「ウルトラフュージョンシユート!!」

放たれた熱戦は一直線に胴体を貫く。停止したファイブキングは断末魔を上げることなく、頭から吹き飛んでいくのだった。

「喰らえっ!」

オーブスラツシヤーの一太刀が、プロキオを吹き飛ばした。すると倒れ込んだ彼の隣に、デアボリックも並び立つ。

「復帰すんのが遅えんだよ」

文句を言いつつ立ち上がれば、両者の銃口が火を吹き始める。

「くそっ!」

弾幕を防ぐことに精一杯で動けないでいた。するとオーブと怪獣たちの間を分けるように、緑色の光線が降り注ぐ。オーブはすぐさま、その光線を放った主の名を呼んだ。

「セブンさん!」

「チツ、アイツはやられたみたいだな」

セブンがオーブの隣に立つところを見て、ガッツ星人がやられたことを悟る。だが悲しむなんて状況でもないし、そもそもそんな感情など彼らには無いに等しかった。

「なら……」

2体のウルトラマンを相手にするのは骨が折れる。なにせ1体は長年の経験がある大ベテランだ。簡単に倒せる筈もない。残りの3体も合流されると面倒だ。ならばこの状況下では2体分の力を合わせるしかあるまい。

「オマエには頼りたくは無かったんだが」

プロキオはデアボリックの背後に回ると、背中にあるコネクタに両腕を接続。すると、奇機械怪獣の口から砲門が出現した。

「デアボリックキャノン……発射!!」

その声とともに青白い光線がオーブたち目掛けて放たれる。街全体を振動させるほどの衝撃、音。光線が走ると、ビルや地面が鉛細工のように溶けていく。

「があああああ?!?!」

苦悶の声をあげて地面を転がるオーブとセブン。

「もう1発だ。まとめて消し飛ばんじまえええ!!」

再度砲門が青白く光り、エネルギーの塊が徐々に巨大化していく。

「この程度……!!」

「消えろっ!!」

2 発目のデアボリックキャノンが彼らに迫る。だが立ち上がったオーブは咄嗟に虹色のバリアを張り、その攻撃を防ぐ。

「ううっ……!! おおおっ……!! オオオっ!!」

しかしキャノンの勢いは絶大で、ジリジリと押され始めている。するとセブンがアイストラッガーを投擲し、プロキオの腕を切り裂いた。

接続を失い、デアボリックキャノンは中断されてしまう。

「やりやがったな……!!」

腕を失ったとはいうものの、すぐさま再生するガピヤ星人サデスの体を使っている為、腕も即座に生えてきてしまう。「何をしても無駄だ」と口を開こうとするプロキオ。

だがこれはあくまで隙を作るだけの僅かな時間稼ぎ。本筋は——

「次は……こっちの番だ!」

前に出たオーブだったのだ。空中にVの字を描き、円で囲むと同時にエネルギーをチャージ。

「トリニティウムシュートオオオ！」

叫びと共にオーブスラッシュャーを持った右腕を突き出し、鏃型の光線を放った。

「ンなものッ！」

プロキオとデアボリックはバリアで防ぐ。しかし想像以上の威力に押されてしまい、果てにはバリアの崩壊。2体は地面を転がる。

「この程度の攻撃……喰らったところで……ん？」

大きな風穴の空いた胸元を再生させるプロキオ。しかし、その再生がどうもスムーズにいかない。治り、崩れ、また治る。そこから先、再生しても穴が塞がるだけ。焼け焦げている胸元はそのまま。

「この体も……もうガタが来てるってことか……」

この姿は本来の肉体ではない。他人の体を借りて、その力を使い続ける。本来異なる体と心を無理矢理結び付け無理に稼働させれば、いつかは綻びが生まれる。そのタイミングが今だったただけだ。

「ならもう一度デアボリックキャノンを使って……」

再生が不完全ならば、ここで一気にウルトラマン達を倒してしまえばいいだけのこ

と。その後の処理はどうとでもなる。プロキオはそう判断して背中に再度接続。デアボリックが崩壊しかけるまでエネルギーを貯める。今度はさつき以上の力で、塵一つ残さず焼き尽くす為いだ。

「させるか……うおっ!？」

向こうも技を発動させてくれる暇は与えてくれなかった。真正面、そして頭上から迫る攻撃が絶え間なく撃ち込まれる。極最小限、それでいて連続的な攻撃で、キャノン発射までの時間を稼いでいるのだ。

「オーブ、ここは我々が守る。その間に君は、君の持てる力のすべてを奴にぶつけろ!」「わかりました!」

周りにサイバーメカニツクな模様と光が浮かび上がり、オーブが振りかぶると虹色の光が後を追う。そしてオーブの頭上を起点に七色の光が集まっていく。

しかしオーブよりコンマ数秒、プロキオたちの方が早かった。

「最強、最大のデアボリックキャノン……発射だあああああ!!!」

体に蓄えられるエネルギーすべてを変換したデアボリックキャノン。そして備えられた武装をすべて解き放つフルバースト。それは先のデアボリックキャノンの比ではなく、光線の縦幅は簡単にウルトラマンの巨体を飲み込んでしまう。例え掠っただけでも肉体を持っていかれるだろう。実弾と光線の網……そのすべては未だ力を貯める

オーブを跡形もなく消し飛ばすためのもの。誰が見ても、オーブが負けると確信を持ってしまおう程の一撃。

——だが

「ウルトラマンマックスの力よ！ マクシウムカノン！」

「ベータスパークブラスタ―！」

ギンガビクトリー、そしてウルトラマンとティガの力を宿す金色の鎧“ベータスパークアーマー”を纏ったエックスが駆けつける。逆L字に組んだ腕から放つ光芒、ベータスパークソードの剣先から放つ光束でデアポリックキャノンを押し留める。さらにL字に組んだ腕から放つセブン最大の必殺技“ワイドショット”も加わる。

「この攻撃は俺／オレたちが止める！」

『だから一眞君……』

「君が倒すんだ！」

「今こそ絆の力を使う時だ！ 行け、ウルトラマンオーブ!!」

ぶつかり合う光の爆発を見る。覚悟を決め、足に……そして腕に力を入れる。自分を信じられる彼らに伝えるため。そして視線の先にいる存在を討つため。なによりも彼

女たちの平和を守るために。

(皆さんが繋いでくれたこの一撃……無駄にはしない……!!)

光は刃となり、その場で回転を始める。前方の眩い光で既に照らされていたオーブを虹色に染め上げるほどの圧倒的な光量。エネルギーの凝縮された刃の近くにいるオーブへ熱が伝わる。しかしそれはとても暖かなもの。目の前の焼き尽くすだけのものは訳が違う。

「撃てる」と直感が告げる。デアボリックキャノンの光の……その先を見据え、オーブははち切れんばかりの声とともに光輪を放った。

「——トリニティウム……光オオオオオオ輪!!」

皆の想いを表しているかのような虹色の刃は、限界出力で撃ち出したデアボリックキャノンと衝突。だが拮抗するどころか、まるで柔らかい豆腐でも切っているかのように裂いていく。高速回転した刃は土を舞い上げ、風を切つて疾走。勢いは衰えることなく、軌道もぶれることなく一直線に突き進む。そして……遂に両者を一刀両断。

「ああ……クソっ……ここまでか……けどまあ、楽しかったぜ……オーブ……」

最期だと言うのに、満足気に言葉を残し倒れたプロキオ。その背後で光が空を駆け抜

けていく。ガピヤ星人の体のプロキオ、そしてデアボリックは共に大爆発で消滅していきのだった。

（
）
全ての戦いが終わったのは日が沈み、星々の煌めきが見え始めた頃だった。戦士たちの周りにある瓦礫の山が、先程までの激戦を物語っている。

「皆さん……本当にありがとうございました」

セブンやエックス、ギンガ、ビクトリーに向かい頭を下げるオーブオリジン。体の節々に激痛が走り、疲労が感覚を鈍くしているが、それよりも戦いを終えたことへの安心感の方が胸中に溢れている。勿論、力を貸してくれた先輩方への感謝の気持ちも。

「人々の信頼と絆が、我々に一番大きな力を与えてくれる。それこそが、光の力なんだ」
長年戦い続けるセブンの言葉が心に染み渡っていく。それは仲間と共に戦い、助け、助けられた多くの経験があるセブンだからこそだろう。

「俺たちはこの星空の下で繋がってる」

「別の世界、異なった存在でもな」

空の下で繋がってる。異なる存在でも、異なる場所でも。それは互いに違う種族でありながらも共に生きている彼らだからこそ言えるのだろう。

オーブは先程の言葉を自分に染み込ませるように、首を縦に振る。

「そう言えば、ギンガとビクトリーは何故ここに？」

大地は問う。確かに戦いの最中で考える暇もなかったが、数多くある多次元宇宙の中でここに来るといふのはただ事ではない。宇宙人を追つてだとか、オーブ^真のことを知っている者から聞いただとか、それくらいの理由がなければここには来られないだろう。しかしこの2人はどちらでもない。

「オレたちは光に導かれたんだ」

「光に？」

「ああ。俺たちの前に現れた光を追ってきたら、この場所に来たんだ。最初はよくわからなかったが、あの姿を見て理由がわかったぜ。オーブ、あんたの使ってた力が俺たちをここに呼んだんだ」

「俺の使ってた力が……ですか？」

オーブトリニティの姿を見て理解したというのなら、おそらくギンガとビクトリーのカードが読んだということだろう。しかし、それでも何故2人を呼んだのかまではわか

らないとオーブが首を傾げていると、ギンガがその理由を推測してくれた。

「最後まで諦めなかったお前の意思に、カードが応えてくれたんだらうな」

実際のところそれが本当かどうかなんて調べる術はない。確証はない。でも、そう信じてやるべきだとギンガは笑っているように見えた。

「その心……忘れるなよ」

「……っ、はい！」

ビクトリーに頷く。オーブの背中を押すような力強い表情が、ビクトリーからは見えなかった気がした。

「ああー！ ちょっと待って〜!!」

すると、小さくともよく響く声が聞こえてきた。オーブ達が顔を向ければ、ジュラルミンケースを抱え走ってくるAquoursの姿が。

「大地さんとエックスさんの探し物ー!!」

笑顔でこちらを見てくる様に、緊張の糸が解けていくのを感じる。巨人が5体もいるのに恐れずグイグイ来るといふのは鈍いのか、それとも勇気があるのか……。しかしそれが如何にも彼女たちらしくもあり、そんな当たり前のものを守れたのだと実感させてくれる。

「ありがとう。みんなのお陰で、スパークドールズ達を取り戻すことができた」

ケースは光の球体に包み込まれ、エックスの掌の上に乗る。

『ああ。それに君たちも、最高のユナイトだった』

エックスの称賛に答えるように、そして脅威から救ってくれたことを言葉にして音に乗せるために、精一杯の声で想いを伝える

「————ありがと———!! ウルトラマン!!」

並び立った戦士たちは、星々の輝く海へと消えていく。まるで流星のような光がいつまでも、いつまでも夜の空を彩っていた。

STAGE 3 闇夜を照らす輝きⅡ

第69話 決戦の地へ

オーブ達ウルトラマンと怪獣たちの戦いから数日が経過した。沼津は未だ激戦の痕跡が色濃く残っているが、すぐさま立て直すことだろう。今迄だつてそうしてきたのだから。

「派手にやってよね〜ホント」

「ま、まだ言うか……それ？」

太陽が背後から照らしてくるが、季節が季節なので温かい程度。或いは時間帯が速いからだからか。

静かな朝に似つかわしくない、ばつの悪そうな顔で隣を歩く少女を見ていたのは、その激戦を繰り広げた一人である一真だった。

「ごめんごめん。ついね」

「まあ、我ながらに派手にやったよなつてテレビ見て思うけどさあ……」

悪戯っぽく笑って見せる珠冬に、こちらもついつい溜息をついてしまう。でも、もし被害が駅の方まで及んでいたら……と思うと何も言えなくなりそうなので、そろそろ思考を切り替える。

「遂に……か」

「……そうだね」

2人が浦の星の前まで行くと、既に9人の姿が。

「おはよう」

「うん、おはよう！」

一真に元氣よく挨拶したの千歌。その顔からは迷いはないと、やれることはやったと、そう信じることができた。でもそれは、千歌だけじゃない。A q o u r s全員が、だ。

「みんな大丈夫って感じだな」

「うん、ここまで全力でやってきたからね！」

誇らしく曜が答える。そう。ここに来るまでみんな全力だったというのは、一真も珠冬だつて知っている。なんなら一番近くで見てきたのだと言ってもいい。

ここまでとても辛かった。弱音だつて吐いた。けど、途中で投げ出した者はいなかった。それもこれも、全部この時のためだ。

今ここに並んでいるのは、そんな日々を過ごした学校への感謝の気持ちを示すとともに、自分たちの目標を再確認するためだ。——浦の星の名を永遠に刻むという。

『——行つてきます!!』

以前はとても届かないと思えた舞台。そこによく立とうとしている。ここまでは抱いてきたあらゆる想いを輝かせるために。

くく

変わらず賑わいを見せる東京の地に着いた。一度目は敗北を知り、二度目は輝きとは何かを知り、そして三度目……。今回は何を知るのだろうか。いやそれとも、これまでの集大成を示して見せる番なのかもしれない。

「お姉ちゃん……?」

「もう大丈夫ですわ」

ダイヤはもう、このゴチャゴチャした場に取り乱すことはない。春からこの場に通う、生活する、という理由もあるのかもしれない。だがそれ以外にも自身の知らぬこと……未知の経験というものに恐れず挑戦していこうという内心の変化があつたのかもしれない。

「これからどうする?」

「本番は明日だし」

「そうだな……まあ疲れない程度に、この辺を見ていくつてのでいいんじゃないか?」
「だね」

本番は明日。しかし宿に向かうのもまだ早い。となれば一眞の提案が採用されるだろう。するとどうやら、彼の提案が願ったり叶ったりつてところの者が数名。

「リリーはブクロ行きたいのよね?」

「え!」

他の者……鞠莉はどこなのかと問いかけるのだったが、善子が丁寧に説明をしてくれる前にアームロックをかけられそれどころではなくなってしまう。威力は相当なようで、早くもタップしている。

「サ、サイレント……何?」

「梨子さんが知らぬ間に善子化してる……」

「ずら……」

アームロックをしかけるところや長い名前が善子っぽい。だがそれは彼女たちの仲が深まり、互いに尊重しあっているともとれるから大変微笑ましいことだろう。と、一眞は強引に解釈していた。

「はあ……速いな」

「えへへ、そうでしょ?」

「ああ。日頃の練習の成果、ってやつだな」

「うん。気付かないうちに成長していくって、こんな風に意外なところでわかるんだって思う」

皆で向かったのは神田明神。理由は勿論、ここで祈願するため。千歌はその気持ちが強いのか、誰よりも速く階段を上ったのだった。彼女の後に続々と上り終えていく。しかしそこには、以前の疲れ切ったような姿はなかった。日々の練習が裏切ることなくここまで繋がっているということ、小さなことではあったが証明している。

全員着いたとなれば早速、手を合わせる。

「会場の全員に、想いが届きますように」

「全力を出しきれますように」

「緊張しませんように」

「ずらつて言いませんように」

「すべてのリトルデーモンに喜びを」

「浦の星のみんなの想いを……」

「届けられるような歌が歌えますように」

「明日のステージが最高のものになりますように」

個人個人、それぞれ抱えてきたものがある。耳に入ってくる彼女たちのそれは願いにも、そして自分自身に課した目標とも取れた。

「ラブライブで……優勝できますように」

それぞれの抱負ともとれる言葉を聞き届けた一真はふと、視線を横に向けた。彼の向けた先にあったのは、掛けられている多くの絵馬。

「ん？ これって……」

「ずら〜!!」

絵馬を見つめる一真につられたのか、花丸たちも集まってくる。目に入った絵馬に書かれていた内容というのが……

—— A q o u r s が優勝しますように。 11月 浦の星学院有志

「見て、こっつちにも！」

どうやら一つだけではないらしい。曜の見ていた場所にも、同じ内容の絵馬が。しかし掛けられた時期などが異なっていた。

「何回もここに通つたんだな……」

距離があり、時間だつてかかる。その筈なのに幾たびも通つて願つてくれた。しかしそのことは決して言わない。そんな生徒たちの想いに胸が熱くなつてくるのを感じる。

「千歌ちゃん、これって……」

視点を変えれば、同じく優勝を願う旨の書かれた絵馬が。だが異なっているのはそのグループ名。

「たくさんのスクールアイドルが、ここで祈願していったんだね」

掛けられているのは当然、A q o u r s の優勝を祈つたものばかりではない。多くのスクールアイドルがここで自分たちの優勝を祈願していつている。当然と言えば当然だが、勝ちたいと思つているのは自分たちだけではない。

「お久しぶりです！」

気が引き締まり、ちよつとした緊張状態に入りかけたところで声が届く。強張つていた体も幾ばくか軽くなる。そのまま声の方向に目を向けると、自然と笑みがこぼれる。

「聖良さん！」

「理亞ちゃん！」

「遂にここまで来ましたね」

「ビビってたら負けちゃうわよ」

賞賛や激励といった言葉。それは同じスクールアイドルとしてもそうだが、共に歌った仲としてだったり、なにより友人としての面からも言葉をかけてくれているのだろう。

「わ、わかってるわよ！」

「にしても、アキバドームか……」

「今までの会場とは違うすら」

「どんなところか、全然想像できないや」

アキバドーム……そこは誰もが知っている会場だ。もともとはスポーツ観戦などで使われていたのだが、あるスクールアイドルの……いいや、その当時のスクールアイドルたちの働きかけによって、ライブ決勝の舞台としても使用されることになった。

これまで立ってきた、歌ってきた場所とは桁違いのステージ。自分が立っている姿も、目の前に広がる景色も想像できない……というのも無理はない。

知らないこと、自分の想像をはるかに超えるものに恐怖してしまうのは自然なこと

だ。だから、彼女たちの反応も理解できる。

「私もあのステージで歌えたってことが今でも信じられない」

「……どんな感じ……でしたか？」

「自分の視界のすべてがきらきら光って……まるで、雲の上を漂っているようでした」

「雲の上……」

雲の上……それについては過去に同じような経験をしたことがある。だから聖良の言っていることを想像することだって難しくはない。しかし千歌には……いやこの場にいる全員が恐らく、以前見た雲の上の景色と、彼女の言う雲の上のイメージでは合致しないだろう。あくまで例えだから……なんて理由ではなく、もつと深い意味でだ。

「だから、下手なパフォーマンスしたら許さないからね！」

理亜はそう言つてルビイたちに迫る。

「当たり前だよ。頑張ルビイするよ！」

これまでの経験が、そして理亜との過ごした時間がルビイを成長させたのだろう。彼女は怯えることも、自信なく顔を伏せることもしなかった。視線を逸らさず理亜に答え、己を鼓舞していた。

ルビイや理亜の会話に混ざる1年生組。そしてその様子を見守る上級生。外見上ではしかないが、決勝前だというのに彼女たちからは「緊張している」という様子は見られ

ない。だがそれは能天気だからではない。ここまで積み上げてきたものがあり、それを信じているからこそ持てる心の余裕があるからだった。

「初めて会ったときは、〃なんて弱弱しいんだろう〃 っと思つてました。ですが今は〃なんて頼もしいんだろう〃 っと思います」

それが聖良の抱いていた印象。東京に呼ばれ、初めて神田明神この場所で会ったときはまだ何もわからず、何も知らなかった。でも今は違う。その違いが、自然と彼女たちの雰囲気、表情に出ているのだろう。

「勝ちたいですか？」

「……え？」

聖良から問いは、過去に千歌が訪ねたものだつた。輝きが何なのかを探すため、そのヒントになればと問いかけたもの。そして今、千歌彼女へと返ってくる。

「それと、誰のための……ライブライブですか？」

くく
「……」

宿の部屋から外を見つめる一眞。既に空は黒く染められ、点々と星が煌めいている。そして開けた窓から、未だ冷たい冬の空気が入り込み彼の頬を撫でる。

廻ること数時間前。宿こしに着く前に花丸とあることを話していたのだ。

「花丸、それ持ってきたのか？」

「声が大きいすら！」

「ああ、悪い……」

彼女が持つてきた木箱。その中にあるのは以前見つけた太平風土記。そして共に入っていた種だ。

「でもどうして……」

「前に伝えたこと、覚えてる？」

「前？ えつと……」

即座に記憶にアクセスしていくが、風土記の話よりもその後の起こったことの方が印象に残りすぎてどうにも思い出せそうになかった。

(やばい……花丸呆れてる)

もの言いたげな目をした彼女は溜息をつき、口を開く。

「八つの龍脈が交わる土地」って記述が気になって調べてみたずら。そしたら……」

「東京こじだった……ってか？」

先ほどとは一転した真剣な物言いに花丸は頷いた。

そもそも龍脈とは風水学における用語で、大地の中を走る太く大きな流れだ。いわば大地の血管ともいえる存在である。それが交わるといふのだから相当なエネルギーがある部分なのだろう。

「それでもしかしたら……って思って持ってきたずら」

「いいのか？ 大会前なのに……」

「大丈夫ずら」

あつけらかなと答えている様に安心感と同時に不安を覚えたが、彼女自身が言っているのだから信じてあげるべきだろう。

「転生のときを待つ存在が、毒を統べるものと交じり合う……」

だが一真にとつては見逃すことのできないものだ。太平風土記に書かれた内容の多

くの事象を目にしてきたのだ。これだけがハズれる……なんて楽観的にもなれない。しかも文面から推察するに現れるのは2体。警戒しないわけがなかった。

「ああもう、明日が決勝だつてのになに不安がつてるんだ！」

頭を何度も振り、こびり付いた不安を消し去ろうと試みる。そんなことよりも明日の決勝の方が何倍も大事だ。送り出す側が暗い表情をしていれば、彼女たちにも影響が出してしまう。花丸が一真だけに聞こえるように話していたのもそんな配慮の表れだ。

「……たーたあーちいいいい!!!」

「ん、なんだ？」

すると隣の部屋から怒号の様なものが聞こえてきた……ような気がし、一真は確認するために部屋を後にした。

「……力強すぎんだろ」

宿の廊下を歩きながら一真はぼやいていた。

あの後、何かと部屋に乗り込んだ一眞を待つていたのは枕投げをしているAqoursの姿だった。止めようと飛び込んでいった数秒後、気付いたら枕を思いつき投げていた。力が強かったせいなのか、最終的には袋叩きにあってしまった。

数刻前の出来事に「理不尽だ」とかなんとかとぶつくさ言いながら肩や首などをさすつてしていると、前方からある人物が歩いてきた。

「千歌？ 外で涼んできたのか」

先ほど行われた枕投げで熱くなった体を、休憩がてらに冷やしてきた千歌が戻ってきたのだ。

「うん。そこで梨子ちゃんと曜ちゃんと一緒に話し合つてさ、明日は現地集合にしようって決めたの。みんな大会前に整理したい事もあるだろうし」

「いいなそれ。でも、整理したいってのはお前自身がそう思つてる……つてのもあるだろう？」

彼女は凶星なのか、苦笑いにも似た表情で首を縦に振った。そしてある問いを一眞へと投げる。

「カズくんはさ、わたしたちに……Aqoursに勝つてほしい？」

思いもよらぬ質問に一眞は目を丸くするが、千歌の眼はいつになく真剣で……同じくらい迷つていようようにも見えた。

だからこそ彼は、素直に自分の気持ちをここで口にした。

「そうだな……。俺は勝つてほしいって思ってるよ。皆の一番近くにいる者として、見てきた者として。皆がこれまでずっと追い求めてきたものを、俺も知りたい。だから……最高にステージで輝いてる姿……見せてくれよ」

「うん。わかった」

そう答えた千歌は、先ほどよりもすっきりした表情に見える。そのまま他のメンバーにでも聞いていくのだろうか。彼女は部屋へと歩いて行こうとする。

「ああ、あと……」

呼び止める一真へ、千歌はもう一度振り返る。

「俺をマネージャーとして入れてくれて、ありがとうな！」

ニカッと笑う一真。そんな彼の笑顔があまりにも幼く見えたので、千歌は思わず吹き出してしまう。

「ええええ、笑うかそこで!？」

「あははははは、ごめんごめん……。だってあまりにも子どもなんだもん！」

「なんだよ……せつかく面と向かって礼したのに……」

ムスツとした顔もまた面白いが、ここで笑ったら何を言われるか分かったものではない。だが、これだけは伝えておかなければ。

「ごちそうこそ、ありがとうございます！」

夜は更けていく。日が昇るまでの僅かな時間。

明日に何が起ころうとも、今だけは……いや、
“その時”が来るまでは彼らに心の安
らぎを。

第70話 紺碧の世界

地脈のひとつに打ち込まれし毒あり。

意識を奪い、知識を奪い、女王の傀儡と化す毒。

名を■■■と云ふ。

■■■、八つの地脈すべてに流れ、転生の時を待つ魔物侵食す。

毒を統べる■■■■■■■■■■と、最後の魔王獣交わるときなれる厄災の名■■■■■■■■なり。

邪悪なる力みな併せ持ちゆゑ、かならずすべての星を喰らい尽くさむ。

くく

迎えた決勝当日。だが昨晚千歌が話した通り、時間が来るまでは各々自由に行動し、自分を見つめ直すということになっている。

「ありがとうございますました〜！」

彼の開けたドアの向こうから、入店、退店時になる心地のいいベルの音と共に店員の声が聞こえてくる。

「……………」

彼……一眞の持っている花束には菊や櫛などが見られた。それは誰かにあげる用の……ではなく、所謂仏花というものだった。

店内と外の気温差に身震いしながら、花束を片手に一眞は道を歩いていく。

「あれ……一眞？」

すると後方からよく聞き慣れた声が。首を動かしてその方向を確認すると、それはま

た見知った顔の少女が。

「珠冬？ 何してんだ」

「特に何も。1人で歩いているだけ。それより、一眞の方こそ何してんの？」

自分を見つめ直す方法は人それぞれ。珠冬は街の景色を見ながらいろいろ考えていたのだろう。その最中に偶然一眞に会った……ということかもしれない。

「ちよつとな。前東京（まへとうきょう）に来たときは行けなかつたから今日こそはつて。花を手向けにな」

首を傾げる珠冬。それはそうだ。彼の知り合いが東京にいるのだろうかと疑問を感じているのだから。

「お前もくるか？」

「いいの？」

「ああ。それにこれは、俺の自己満足でしかないからな」

少し申し訳なさそうに目を伏せる一眞だったが、すぐに顔を上げ歩いていく。珠冬は先ほど見せた表情の理由を知りたいと感じ、彼についていくことにした。

歩みを進めて数十分。彼らがたどり着いたのは――

「……路地?」

多くの建物が並び立つ中にある、何の変哲もない路地。一体ここに何が? と問いかけようとするが、それよりも早く一眞は一步前へ踏み出していた。

「俺の記憶が正しければここなんだけど」

そう言つて一眞は手に持った花束を地面に置き、手を合わせた。

「……」でさ、俺は子どもを助けることができなかった」

一眞は地面に置かれた花を見て……いや、恐らく当時の光景を思い出しているのだろう。アクセスしたくもないであろう記憶を覗き込みながらも、珠冬の抱いていた疑問に答えてくれた。

「目の前にいたのに……俺は見てるだけ」

あの時はすぐに別のドス黒い感情に吞まれてしまつて考える暇もなかったが、時間が経つてから思い返すほど、彼の中では後悔と言ひ知れぬ無力感として残り続けた。

「でもそれは——」

「ああ。これだけじゃないつてのはわかつてる。全部を救うことができるなんて思いあがつてもいいよ。……けどさ、ここだけでも……絶対に忘れちゃいけないやつて、目を逸らしちゃいけないつて……思うんだ」

一眞は花束をまつすぐ見つめ、その視線を逸らすことはなかった。すべてを救える

……なんて自惚れているわけではない。しかし、目の前の人物を助けられなかったこと……その過去を忘れてはいけなないと、彼は己の心に刻んでいるのだろう。

「ねえ、一眞……」

すると不安げな珠冬の声が一眞に投げられる。聞けばすぐさま何を言いたいのかを察し、彼は立ち上がる。

「言つとくけど、これはお前のせいじゃない。それだけは忘れんな」

命を落とした理由、それがマガオ口チによる破壊行為故だと彼女は理解してしまったのだろう。あの時の自分は理由はどうあれ“向こう側”にいたと、そう思っているのだ。

「自分から誘つておいてだけど、悪かった。軽率すぎたな」

ばつが悪そうな顔をしながら、後頭部を搔く一眞。ここに連れてくれば彼女がどんな思いをするか、そこまで汲み取れなかったことに溜息を吐いてしまう。

「……う、ううん、私が自分で判断してついでにきただけ。あと、慰めてくれてありがとうね」
そう言つて笑う珠冬に、何かを隠しているような違和感を感じた。しかし“ほんのちよつとした違和感”だったので、一眞は深く詮索しなかった。

巨大モニターに映し出されている文字。ビルに張られたあらゆる広告。道路を走る車の音、線路を駆ける電車の音。そして多くの人ばかり……。そんな秋葉原の街中に、彼は紛れていた。

彼は街行く人々の間を抜ける。まるで影のように、誰からも気にかげられることなく歩を進める。

「……」

自分の隣を歩く人、目の前を通り過ぎていく人、すれ違う人……。歩いていく中で結果的に近付くこととなる人々に目をやる。

方や何でもない日常として、変わらぬ生活の一部として、顔色一つ変えずに歩く者。方や特別な日であると知り、興奮気味に街を歩く者。

「——みんな、何も知らないんだらうな」

心の中で笑ったのか、或いは憐れんだのか……。彼自身にもわからなかった。そして彼は人混みが嫌になって、ビルの上へと飛んでいく。無論、誰にも見られないように路地まで行つてから。

「おや、彼女たちは……」

地上を見下ろすと、見覚えのある少年と少女たちが走っているのが見えた。

(そういえば、さつき見たモニターに書かれていたっけ……Love Liveがどうたらつて。じゃあ今日がつまり……)

最悪と最高が重なってしまったことに、彼は笑うしかなかった。もう自分ではどうすることもできないと。4月あの時に打ち込んでしまった時から、もう決まってしまったことなのだから。

「そろそろ……始まるね」

空気に溶けるくらい小さな声で呟いた。だが見ている方向はアキバドームではなく、ビル群の中に聳え立つ塔。

彼の言った始まるという言葉……そこには2つの意味があるのだ。1つは彼女たちが挑む決勝。そしてもう1つは——

「まったく……僕が蒔いた種だつていうのに、今更後悔するなんてね……。クグツ」
なんてもの……打ち込まなきゃよかったよ」

くく

彼女たちは走る。

過去を振り返ることはあっても、それはほんの一瞬。その先の未来を見据えても恐れずに、これまでと同じように我武者羅に、全力で。

どのくらい走り、どこまで来て、そしてどこまで続くのか……。それはわからない。だがこれまでのことすべてがあつてここに……。決勝に辿り着けた。だから今は雲の上だと、空を飛んでるみたいだと……。思いつきり楽めばいい。そして優勝し、輝きと証を見つけに行くのだ。

今まで抱いてきたあらゆる想いをあのステージで魅せる時。

0から1へ。そして1から……。その先へと向かうために、彼女たちは地面を蹴り上げた。

まるで夜空のようなステージに立ち、踊る彼女たちの姿。

楽しかったこと、辛かったこと、それら全てが掛け替えのない時間。誰だつてずっと居続けたいと思う程に。だがそれが叶うことは決してない。けどそれは悲しくはない。何故なら心に刻まれており、いつだつて共にあるのだから。

それを知っている彼女たちは今という時間を重ね、次の場所へと、新たな未来へと渡っていく。

雲の上のような、海上のような、幻想的な紺碧の世界。そこで歌い、踊る彼女たちのそれはA q o u r s にしかできない、A q o u r s だけの輝きであった。

そして優勝グループの名がモニターに映し出された瞬間、溢れんばかりの拍手や歓声に包まれた。その優勝グループというのは――

A q o u r s

ここに……ライブという歴史に刻み込まれた瞬間だった。浦の星学院スクール

アイドルAqoursというその名が。彼女たちはやり遂げたのだ。ここまで順風満帆ではなく、むしろ理不尽を強いられ続けてきた。だがそれでも諦めずに走り続けた先に……ようやく。

するとそのパフォーマンスをもう一度見たいと、誰かが声を上げた。それは瞬く間に広がって、会場全体を揺らす大きな1つの声になった。

輝きを見つけた彼女たちは、もう一度ステージへと昇り――

――青空Jumping Heart――

「みんな……おめでとう！ やったな」

会場の外で待っていた一真は、みんなと合流するなり開口一番にそう告げる。

「カズくん……わたしたち……」

未だ夢心地なのだろうか、千歌たちは旗を片手に持ちながら彼に尋ねてくる。本当のことなのかと。

「ああ、優勝したんだよ。最高に輝いてな！」

だから一真はまっすぐ、これは現実だと伝えた。

「そんで……学校の名を……残したんだ」

すると一真は千歌や曜、梨子に引つ張られるようにして肩を組み合つた。互いに顔を見て笑いあい、次第に涙が溢れ出る。他のみんなも、互いに抱き着きあつて涙を流していた。

「やった！ やつたよおおおおおおお!!!」

「ああ。ああ！ おめでどう、おめでどう!!!」

そうして互いの気持ちを、喜びをぶつけ合つた。そうしてどのくらい時間が経つたかわからなくなった頃、ようやく全員が落ち着きを取り戻していた。

「長く居すぎちゃったね」

「いいのいいの！ なんだってマリーたちはWinnerなんだから！」

「それ理由になつてる？」

「なつてないすら」

いつもと変りないやり取りができるくらいまでにはなつたようだ。

「よし、どうする？」

先頭に立つ彼女に問いかける。

「うん！ か——」

「帰ろう」と言いかけたところで、空から光が一直線に降り注いだ。

光に遅れて、強烈な雷鳴が鳴り響く。それは音だけでビルを、地面を揺らすほど。

「……………っ!？」

誰もが息を呑む。先ほどまで空気が一転、得体のしれない緊張感が場を支配した。

赤雷の降り注いだ場所へと目を向けるものの、煙が立ち込めておりよく見えない。

「なんだあれ!!」

それは名も知らぬ男の声。彼は煙の中に居座る何かを視認したのだろう。煙が晴れ、その正体が人々へと明かされる。

昆虫種のような巨大な体に鋭い両腕の鎌。毒々しい赤と黒の体色に、まるで人間のよ
うな顔……………。

それは一真が最初に倒した怪獣によく似ていた。仮に同族として捉えた場合、視線の
先にいる存在はその怪獣から進化したものか、或いは上位種であることは確定だろう。

「なんなんだ……………アイツ……………」

これまでとは違う……………と思うと同時に、ここで行けば戻れなくなるのではという本能
的恐怖が頭の中を駆け巡る。

「……………は、はあ……………はあ……………はあ……………はあ……………」

自然と息が上がる。冷たいじつとりとした汗が背中を流れる。

でも、行かなくては……。理由は1つ。みんなを守りたいから。その一心で、石のようにならざるに足を強引に踏み出させる。

「カズくん……」

そんなか細い声の方向に目を向けると、みんなが不安そうな顔でこちらを見つめていた。一眞の表情から、あの存在が桁外れにやばいのだとみんなに伝わってしまったのかもしれない。

（みんなを不安にさせちゃダメだよな）

「フウウウウ……大丈夫。いつものようにすぐ帰ってくるよ」

深呼吸し、落ち着きを取り戻した一眞はそれだけを言い残し、怪獣のもとへと駆け出していく。落ち着いた……とはいっても、外見を取り繕っているだけにすぎない。しかし彼女たちのお陰で大分マシにはなった。

「言った通り、すぐ終わらせないと!!」

恐怖を押し殺すようにして、一眞は左手に持ったオーブリングを天へと振り上げた。

第71話 女帝の一手

怪獣が現れたと同時に空は陰り始めた。先ほどまでは澄み渡るような青空だったのに、今は黒い雲が全てを塗り潰している。それまるで、人々の心を表しているではと思わせる。

だがそんな心の不安を払拭するかのようには、天と地を繋ぐようにして光柱が立ち昇る。徐々に光が収まれば、皆の希望の象徴ともいえるウルトラマンオーブの姿がそこにはあった。

「…………ツ！」

日本の首都東京。大都会の街中で対峙する2体。しかし、ぶつかるとも火花が散ることも無かった。それどころか、何も起きない。

(どういふことだ……)

オーブカリバーを構えたままのオーブは訝しんだ。

恐らく向こうも視認している筈だ。なのに目の前の怪獣はこちらを攻撃してくることも、威嚇してくることもない。それ以前に動いていない。まるで糸の切れた人形ようだ。

(この感じ……もしや……)

突如現れるも、決して動くことのない怪獣……。同じような事例を一眞は知っている。そして、それができるのは――

「久しいな。ウルトラマンオーブ」

先ほど落ちた稲妻の音よりも鋭く、それでいて氷より冷たい声が耳に響く。忘れたくても忘れたくないその声の主をオーブは探した。

その男は……意外と近くにいた。怪獣の隣にあるビルの屋上に。昔のまま時が止まっているのでは？ と同思わせるほどに、彼の見た目には変化がなかった。豪勢な服を着て。ブロンドの髪とサファイアブルーの瞳が光を反射しているが、その輝きは綺麗とは言えない。寧ろ怪しく、恐ろしかった。そして彼の右手には……鈍く輝くダークリング。

「アルファルド……レグルス……ッ」

忘れることはない。故郷の星を踏み荒らし、拳句の果てに滅ぼした男だ。そしてプロキオやヴィルゴ……アオボシを従えていた人物。

「フフッ……ワタシを知ってくれているとはね」

不敵な笑みを浮かべながら語ってはいるものの……真意といえいいのか、彼の本心はまるで理解できない。笑っているのも演技の様に見える。

「それにしても……今回も君は、ワタシを止めようとするのか」

彼の言っている「今回も」とは恐らく、自分と一体化する前のオーブとのことだろう。だが自分は先代との因縁は知らない。だからこそ囚われることなく、暁一眞としての言葉で返してやろう。

「当たり前だ。こんどこそ……いや、この星は絶対に守り切ってみせる」

オーブカリバーの切っ先を向けて宣言する。しかし彼の感情に揺らぎはない。

「そうか。だがワタシも、ようやく計画を最終段階に移行できたんだ。最大の楽しみを不意にしたくはないんだよ」

そう言つてアルファルドは、怪獣を見上げる。

「実に長かった……。意思を奪い、自在に操ることのできる力……。クイーンベゼルを探し当てるのに」

彼はずっとクイーンベゼルを探し求めていた。約3年間も。そしてようやく手に入れ、満を持してダークリングで召喚した……ということだろう。だが何のために？
そこまで執着していた理由は？

そんな疑問にオーブが考えを巡らしている間に、彼はクイーンベゼルと一体化を果

たす。同じような状況を経験したのも何度目だろう。だが、これまでとは確かに違う緊張感がこの場を支配していた。

『ほう、これがクイーンベゼルブ……。ヤツが目覚めるまでこの力……。お前で試すことにしようか！ ウルトラマンオーブ!!』

クイーンベゼルブの使えるテレパシーで語り掛けてくるヤツを見据え、オーブも地面を蹴った。考えても仕方がないのなら、今は戦うだけ。自分の持てる力全てを使って守るだけだ。

「望む、ところだー」

停滞していたような時間が……。それまで静かだった一帯が打ち壊される。

2体の激突の背景で、着々と復活の時は迫っていた。

「始まつちやったか」

戦いを遠目から眺めるアオボシは呟く。もう既に決まっていること。計画通りに進んでいるとは知ってはいたものの、こうして目の当たりにしてみると、底から湧き出て

くるような後悔で吐きそうになる。

でも自分で選んだことだ。今更どう思おうと自業自得であることに変わりはない。この結果を受け入れるしかないのだと、自分に言い聞かせる。

「わかつてるさ……今更何をやったって……」

自然と握りこぶしを作ってしまう。爪が食い込み血が出てきしまうがアオボシは構わず、そのまま両者の戦いを眺め続ける。

あと数時間で目覚めるであろう……大蛇オロチの存在を認識しながら。

くく

「……ッ!」

クイーンベゼルブの鎌とオーブカリバーが衝突。途端に凄まじい衝撃波が起こり、飛び散った火花が街へと降り注いだ。

「■■■■ー!」

クイーンベゼルブ本体の咆哮が轟く。やはりベゼルブと同じで不快な鳴き声だ。

オーブは迫りくる刃を屈んで回避。鏢迫り合いを解除したことで自由になったヤツの腕が頭部を狙う。すれば即座に足を振り上げて腕を蹴り飛ばし、畳みかけるようにしてオーブカリバーで胴を薙いだ。

「■■■■■■イイイイイ!」

大きな一撃。それが効いて激昂したのからなのか、はたまたは余裕であり、今度はこちらから仕掛けに行くぞと言っているのか……。どちらかは不明。しかし刃を光らせ、再度こちらに向かつてくることに変わりはない。

『随分と楽しませてくれる。だがワタシが本当に見たいのは君の命が散る瞬間だ』

「悪いが、お前にはだけは見せねえよ!」

再度吹き飛ばしたクイーンベゼルブの双眸から撃ちだされたのは数多の火球。オーブは聖剣を盾にし、弾幕の中を一直線に走り抜けていく。

「お前はただ取り繕っているだけだ。命が散る瞬間が美しいとして命を奪うその正体……それはただ、殺しを楽しんでいるだけだけの虐殺者だ!」

『だから?』

それが悪いことかと、まるで純粹に疑問を抱く子どものような声音で……彼は返答してきた。

『だとして……だから何だというのだ。ワタシが感じる“楽しい”という感情や“嬉し

い”といった感情の向けられる先が、“生命の終わり”だっただけのこと。何もおかしいことはないだろ？ それとも……君は否定するのか？ そんなもの……都合の良い押しつけではないか』

確かにそうだ。感情の向いてる先が不幸にも死にまつわるものだっただけのこと。それはこちらにも否定することはできない。

「けど……どんな理由があっても、誰かを傷つけていい理由にはならない！」

以前黒い体の巨人と戦って、そしてある人に師事して得た答えだ。物事の善悪は主観的なものでしかない。でもだからと言って誰かを傷つけたり、悲しませたりしていいわけがない。

風を起こす。刀身を緑の風が包む。先端に増した重みを意識しながら全身で2回転。そしてついた勢いを殺さずに振り抜く。

「オーブウインド……カリバー！」

放たれた竜巻はクイーンベゼルブに到達する直前——

『目障りだ』

呆気なくかき消され、エネルギーの残滓は宙に溶けていってしまふ。視界が開かれたものの、そこにオーブの姿は無かった。ではどこへ……。

「オーブランサー……」

上か！ と天を仰ぐ。

曇った空で瞬く青い……それでいて赤い光。ハリケーンスラッシュだ。

「シュートッ！」

オーブスラッガーランスを突き出すと同時に光を解放。青い光線と火球が中心部分で衝突。両者ともに打ち消されてしまう。

「まだまだ……ッ！」

クイーンベゼルブは、肩にある触手でオーブを絡めとろうと空中に向かって伸ばしていく。

「……ッ!!」

触手の先端にある鋭い毒針が目に入る。アレには間違っても刺されてはいけなないと本能が、或いは一体化した存在が囁く。

その反射的な思考に体も反応。身を翻して2つの触手の包囲網を潜り抜けていく。さらには触手を踏み台にして加速。突風ともいえる勢いで懐に入り込み、刃を突き立てる。

「トライデントスラッシュ！」

1発目は弾かれる。直後、頭を刈り取ろうと腕が振るわれる。

回避。そして側面へ飛び込む。

2撃目は直撃。わき腹を見事に切り裂いた。

しかし向こうも反撃に出てくる。

それも回避。そして別側面へ回り込む。

「ハアアアア……！」

体にうち当たる突風トのように。そして吹き抜ける風ウエのように。オーブは高速戦闘でクイーンベゼルブを翻弄する。数多の斬撃に、ヤツも悶絶の声を上げている。

「コイツで……！」

トドメと言わんばかりの一振りを与えんと、構えたまま突進。

「■■■■ツ……！」

咆哮を上げたかと思うと、ヤツは火球を自分の真下に撃ち込む。途端に起きる爆発。そして舞い上がるアスファルト。

「あああああつ！」

予想外で防御態勢がとれていなかったこと。そして身軽なハリケーンスラッシュという形態のこともあつて簡単に吹き飛ばされてしまう。加えて、熱を帯びたアスファルトの残骸を体全体に浴びてしまった。

「くっ……!」

全体に突き刺すような痛みが走るが、歯を食いしばって堪える。似たような痛みをこれまで経験してきた。こんなのが今更なんだというのかと。

すぐさま周囲を警戒しようと意識を向けたその刹那――

「■■■■■■■■!」

クイーンベゼルブに捕まってしまった。先の爆発で目くらましと多少のダメージで足止め。そして意識を向ける前に接近し捕縛。なかなか狡猾なやり方だ。

ヤツはその腕で、その鎌でわき腹を挟み込んでくる。肉が裂け、冷たい金属が侵入してくる感触に顔を顰めてしまう。

『随分と楽しませてくれるじゃないか。これほどの力があれば、あの3人を倒したのも頷ける』

本当に楽しんでいるのかと疑問に思うくらい、感情の振れ幅を読み取ることのできな
い声音。

「そうかよ……。じゃあ、その敵討ちも兼ねてるってわけか?」

彼に対抗するように、こちらも強がるように問いかける。

「グッ……アアアアアアアアッ……!!」

それが面白くなかったのか、クイーンベゼルブは腕から電流を流してくる。

『敵討ち……何故?』

「ち……違うのか?」

『何故あいつ等の敵討ちなどしなくてはいけないんだ? 彼らはワタシに賛同しただけの他人だ。どこで死のうと知ったことではない』

「……っ!?!」

彼は自分以外のことにはとことん無頓着なのか? アオボシは異なるとしても、他の2人は長い時間を共にした人物のはずだろう。それが悪であれ何であれ情が湧くものではないのか? 死んだりすれば悲しむものではないのか……? そこだけは人々他たちと同じだと思っていた。だがそれすらも彼の中には存在しなかった。そう思うと……本当に身震いする。

……と同時に、怒りも湧いてくる。

「アイツ等は……認めたくはないけど……ウウツ……あんたを慕ってた」

『……だから?』

己を真つ二つにしようとして鎌を食い込ませている腕を掴む。すると抵抗するように、電流も強くなっていた。

「……少しくらい……悲しんでやってもいいだろうが……!」

脱出しようと腕に力を籠める。ゆっくり、着実と刃と体を離していく。だが力が足り

ない。ハリケーンスラッシュこの姿では……逃げられるだけの力が。

『……………!?!』

心の怒りを体現するように全身が燃える。そして炎の中に現れる、2本角のシルエツト。

「ウオオ……………ツ……………スワロマイトバレット!」

拘束を振り切り、至近距離からの連弾をぶち込む。混乱するヤツの腹部を二弾蹴りすると共に後方へと宙返り。

「フツ……………」

距離を取って着地したストリウムマイトは仕切り直しだと言わんばかりに構える。だがもう睨み合いは必要ないと、渾発なく火球がこちらに飛んでくる。

「……………ツ!!」

しかしそんなものは通用しないと、オーブは焰の中を突っ切る。流れ弾はビルを穿ち、道路に小規模のクレーターを生み出していた。

「ハアアアアアアアアア!」

足を延ばして間合いに入り込む。迎撃を防ぎつつ鳩尾に拳を打ち込む。さらに畳みかけて高速のラッシュ。そして渾身のアッパーカット。その重そうな身体が宙を舞い、背中から叩きつけられる。

「今がチャンスだと全身にエネルギーを貯めていけば、比例するように体が虹色に発光。循環するすべてのリソースを左腕へ回す。」

「ブラストリウム……光オオオオオオ線！」

T字にした腕から放たれる業火。地面に跡を刻みながら進むそれはクイーンベゼルブを包み――

「……」

大爆発を起こす。

……が

「……なに!？」

火煙を打ち破り、羽を広げて飛翔していく姿がそこにはあったのだった。

あまりの事に思考が停止する。先ほどの攻撃は、そこらの怪獣であれば確実に消し飛んでいたのであろう一撃だった。なのにヤツは健在。それどころ高速で空を駆けているではないか。

いや……もしかしたら、その前提が間違っていたのだろうか。今対峙しているのは並の相手ではない。あの2人の上に立つ男だ。弱い筈がない。

「……ッ！ 待て!!」

意識が引き戻される。今は啞然としている場合ではない。前提を書き換えている場合ではない。倒せていないのなら、もう一度やるまでの事。

オーブもヤツの後を追うように、地面を蹴りつけて巨体を打ち上げた。

く

「嘘……あの攻撃を受けても生きているの……?」

遠くから戦いを見ていたA q o u r s。彼女たちもクイーンベゼルブの耐久力に……その生存能力に驚愕していた。

「でも、見てよ！ 逃げてるってことはオーブの攻撃が効いてるってことじゃ……」

曜は逃げていく怪獣を指さしながらそう口にする。攻撃が効いていないのなら、そのままオーブに攻め込めばいい。先ほどの様に、鎌で切り裂けばいいのだ。でもそれをしてない。今はオーブに背を見せて逃げている。ということは、致命傷に近い一撃になったということではないのかと。

「……違う」

「え？」

皆と同じように天を仰ぎながらも、皆とは違う視点で物事を見ていた珠冬。

「珠冬、どういう事よ？」

「アレは逃げてるわけじゃないと思う」

「しかし、現にあの怪獣は……」

ダイヤが言い切る前に「珠冬ちゃんの言う通りかもしれないぞら」と花丸が口を開く。彼女の勘も、あの怪獣の飛翔が単なる“逃げ”でないことを伝えているのだろう。

「花丸？」

「花丸ちゃん……？」

「マルもよくわからないけど……でもあれは逃げてるってことじゃない」

「一眞を……」オーブを誘い込んでる……んだと思う」

一同は空を見る。戦いが終わる気配はなく、双方の勝敗の行方なんて未だ闇の中だ。

だが彼女たちの中には、底知れない“嫌な予感”というものが渦巻いていた。それが的中しないことを、少女たちは祈るばかりであった。

運命のいたずら……なんて言葉があるが、それはこんな時に言うのかもしれない。

少女たちがいる場所から数メートルの場所に、赤いリングが落下してきたのだ。おそらく、もう用はないとアルフアルドが投げ捨てたのだろう。加えて戦闘の衝撃で空に投げ出され、“偶然”ここに落ちてきたのかもしれない。

宇宙一邪な心を持つ者の前に現れると言われているリングは、捨てられた瞬間に“次の所有者”となる者の元へと飛ばされる筈だ。しかし消えることなく、そのまま残り続けていた。

まるで自分を見つけてくれと……言っているかのように。

第72話 悪魔（クグツ）の巡る先

「待ちやがれ！」

煉獄を纏った拳がクイーンベゼルブを地上に叩き落す。落下速度やオーブの殴打によつてブーストが掛けられたせいも、ヤツの墜落地点には巨大なクレーターが形成された。

『フフフフフ……』

クイーンベゼルブの肉体が小刻みに震える。しかしそれは痛みで喘いでいるからではなく、ただひたすらに嗤っているからだ。

「……………」

一体何がそこまで可笑しいのか。真相を知るはずもない今のオーブには、ただ上空から見つめることしかできなかつた。

『ハハハハハハッ……ようやくだ。ようやく生まれる!!』

天をも貫くのかと思わせるほどの雄叫びに、オーブは警戒の色を強める。

途端、地面が揺れ始めた。いや、“地面が揺れ始めた”……なんて生易しいものでは

ない。まるでこの世界、この空間自体を揺らしているかのようだった。

「な、なにが起こってるの!?!」

「……!?!? みんな、あれを!!」

突如発生した揺れに耐えながらも、鞠莉が指さした方向に視線を向ける。

「おい、なんか光ってるぞ!」

「どうなってるのよ!?!」

その異様な光景を目にしているのは彼女たちだけではない。周辺にいる多くの人々も、“地面から光が漏れ出ている”という光景の前に混乱を極めていた。

しかし、発生した異常はこれだけではなかった。別の場所では巨大な竜巻が発生。人類が築いた建物を吹き飛ばしていく。さらに地盤沈下で多くの人やビルが沈んでいく。

それに伴って大火災も発生。大災害……なんて言葉では片づけられないような未曾有の事態に発展していく。

「そんな……まさか……」

阿鼻叫喚、地獄絵図と化し始めたその光景を目にしていた花丸。瞬間、電流が走ったかのような衝撃。そして心臓の鼓動が早くなっていくのを感じた。

彼女の手は半ば自動的に、バックからあるものを取り出した。

「花丸ちゃん、こんな時になにを……」

「そんなことつて……でも……あり得ないすら……」

今の花丸には、悠長に友達たちへと説明している暇も余裕もなかった。

彼女は可能性を否定する。正確には否定しようとしていた。彼女が取り出したもの……それは太平風土記。そして見ていたのはある項^ベ。文字と共に描かれたその絵は……今の状況ととても似ているのだ。

でもこれは歴史書の筈。過去のことを書いたものではないのか。そう彼女の理性は訴えかける。見え始めた一つの推測を否定するために。だが……

「違うすら……」

「……え？」

違う。違うんだと……自分の前提が、自分の捉え方が間違っていたのだと風土記と目の前^地の景色^景を交互に見る。

太平風土記^こは歴史書としての側面だけでなく、いざれ起きる災厄をも予言していたのではないだろうか。予言書として世に出せば、恐怖と混乱を招きかねないと危惧した当時の人々は、歴史書として残したのだろう。

そうであれば合点がいってしまふ。風と共に災いをもたらす存在、地面を引き裂き山

を破る存在、水を穢す存在、火の玉を降らす存在……。そのすべてが現代に現れてしまったのだから。

そして目の前に広がる光景……。

おそらくこれも出現を預言した誰かが、遙かな未来に向かって送った警告なのかもしれない。いつの時代に現れるのかはわからない。だがその存在だけはせめて……と。

「生まれようとしてるすら……」

「生まれようって……何がよ？」

善子も花丸の表情を見て、恐る恐る訪ねた。

「禍岐大蛇項マガタノオロチが……すら」

(なんだ……何が起こってる!?)

空中で惨劇を見渡しているオーブだったが、一体何が起こっているのか……まったく見当がつかない。

『フフフフ、アハハハハツ!! ハーハハハハハツツ!!』

先ほどまでの彼からは想像できない……騒然たる嗤い。

「何を……」

『おや、アオボシ彼から聞いていないのか?』

向けられる敵意を無視するかのよう、クイーンベゼルブはおもむろに起き上がり歩みを進める。光というにはあまりにどす黒い光源の元へと。

『大魔王獣マガオロチ。おそらく君が倒したのだろう』

「……ッ、それが何だっていうんだ!」

思いもしなかった名前が出された。マガオロチ……6つの魔王獣の残滓とベリアル
の力でこの地に現れ、一度は敗北した獣の名だ。

『……あれは謂わば幼体。その真の姿は地球そのものをサナギとし、完全体となって生
れる』

彼の言っていることが本当だとすれば、今もまだこの星に眠っているということにな
る。

そこまで考えて、雷の様に光を放ち続ける場所に目をやる。

「……!?! まさか!!」

『そうだ。今、ここで! 八つの地脈が交わるこの場で生れ落ちる!! この星に生きる

すべての物を、生命体を……そして惑星そのものを喰らう大魔王獣……マガタノオロチが!!』

アルファルドの言葉は、もう既にカウントダウンに入っていることを意味していた。今起きている災害も、マガタノオロチが生まれようとしているから起きているのだろう。歴代の魔王獣が暴れていたのと同様の事態が。

「だとしても……!」

マガタノオロチが出現するのは変えようのない事実。だとしても……だとしたら、尚更眼前の敵を真っ先に倒さなければ。彼がここに来た理由だって、マガタノオロチを利用する気であることが容易に想像できるからだ。

「ダアアアアア……!!」

捻りを加えた飛び蹴りに炎をプラス。猛火纏った脚部が胸を捉える。さらに着地した足を軸に大きく回転し、踵を頭に打ち付け吹き飛ばす。

二転三転し地面へと伏せるクイーンベゼルブ。しかし倒れる瞬間、オーブに向かって火球を乱射。

「……!」

跳躍するのとはほぼ同時に光が迸る。青い巨体が着地すれば、その衝撃で地面の土やアスファルトが舞い上がる。

蒼い剣士と海の青い巨人の力をその身に宿したナイトリキディターは、宛ら雷の如く音を置き去りにして駆け出していく。

「■■■■エエエエ!!」

ナイトアグルブレードを出現させた右腕で鎌を受け流して突撃。左の掌底で腹部を打つ。さらに追い打ちをかけるように、後退することすらも許さないと言わんばかりに、オーブは渾身の飛び蹴りを見舞った。

自分のペースに持ち越せたオーブは、その身に雷を纏い突貫。

「■■■■■■■■■■ウウウウツ!!」

だがそれは相手にも読まれていた。クイーンベゼルブは自分の下僕にしようと、背中から伸びた触手をカウンター気味に射出——

「ハアアツ!」

——させるも、オーブは直感と反射神経でどうにか回避。さらにカウンター返しともいうべきか、青い刃で触手を斬り払った。

「■■■■■■■■■■アアアアアアツツ!!」

器官の一部を失った故、痛覚が全身を駆け抜ける。苦しみの声を漏らすクイーンベゼルブの“触手だった”ものからは、毒々しい色の液体が噴き出していた。

「これで……!」

オーブはスクリュー状の波動弾“ストライクナイトリキデーター”を撃ちだす。この一撃をもつてようやく彼とは決着がつ——

——こうとする瞬間、クイーンベゼルブを庇う様に怪獣が現れた。

「なっ……!?!」

現れたのは熔鉄怪獣デマーガ。しかし通常種とは異なっており、目が赤く変色……そして体に虫刺されのような腫れが浮かび上がっていた。

デマーガは身代わりになり爆発四散。庇われたクイーンベゼルブには、波動弾が貫通したような跡はない。

「怪獣が……庇った?」

先の状況を飲み込めないまま、オーブはその場に膝をついてしまった。最大火力で撃ち込んだ故、エネルギーの残量が残り少ない。それを証明するように、カラータイマーも点滅を始める。

『……正確には違うよ。守るよう……ワタシが命じた』

「なんだと?」

『クグツ……という毒がある。ベゼルブ種が持つ、生命の意志を奪い支配する毒だ。こ

れを打ち込まれた怪獣はクイーンベゼルブの……ワタシの命令を聞く道具になつてくれるのだ』

生命の自由を奪う毒、クグツ。その存在にオーブは恐怖する。しかしオーブはさらなる追い打ちをかけられることになる。

『このクグツ……既に地球に打ち込まれているというのは知っているかな？』

「な……!?!」

彼が語つたのは内浦にベゼルブの現れた4月の事だ。あの時、ベゼルブは尻尾を地面に打ち込んでいた。それは気紛れに起こした無意味な行動ではない。その場所が、地脈の1つに位置していたからだ。

『地脈であればどこでも良かったが、アオボシの要望でね。あの場所にクグツを打つてもらったんだよ』

召喚されたベゼルブには、オリジナルほどのクグツの効力はない。しかし地脈を流れ、やがて8つすべてに流れていく頃には、オリジナルと同等の力を持つようになった。そしてそれは、地球に眠る怪獣にも影響を及ぼしたのだ。

だが本当の狙いは、地球の怪獣ではない。それは……

「マガタノオロチを……操るためか」

『その通りだ。だからこそクグツ怪獣を操れるクイーンベゼルブを欲したのだよ』

全ての発端、企みの一手は既に置かれていた。すべてが遅かったことに、オーブは拳をただ強く握ることしかできなかつた。

もう時は止まってくれない。揺れが酷くなり、竜巻の規模も拡大する。雲が晴れて、太陽が顔を出したのかと思うくらいの眩しい光。もうその時が来てしまったのだと、嫌でも理解させられる。

『さあ、ようやくだ。目を覚ませ、マガタノオロチ!!』

「待て……!! うあああああああ!!!」

爆発にも似た衝撃がビルを、道を、オーブを吹き飛ばし、辺りを砂塵で覆ってしまう。

時が止まったかと思う程の静寂。

煙の中から覗くシルエット。無数の触手に覆われ、蛇のように伸びている首が複数巻きついた球体のような身体。そこに巨大なワニのような顔が付いていると、いかにかなりグロテスクな姿。そしてクグツ怪獣に見られるような、虫刺されのような腫れも確かに存在していた。

「ウ、ウウ……」

地面に打ち付けられた痛みに喘ぎながら、オーブは起き上がる。

「あ、あれが……」

『ハ、ハハハハハハハツ！ アーハハハハハハハハハハハハツ！！！！ 遂に目覚めたぞ！！』

超大魔王獣……マガタノオロチ！！！！』

ヤツの声に呼応するように、マガタノオロチは産み落とされた赤ん坊の如く盛大な咆哮を轟かせた。

その誕生に一通り喚起した彼は、すぐさまマガタノオロチに命令を下そうとテレパシーを飛ばす。

『さあ、マガタノオロチよ！ 手始めにこの星を食い尽くせ！！ そしてこの星の命を——！！』

クグツに侵食され、クイーンベゼルブに支配されている筈。だったが、マガタノオロチはあろうことかクイーンベゼルブを捕食し始めたのだ。

（……どうなってる？）

『アアアアアアアアアアアアアアアア、ガアアア……！！ ……成程……意識を奪われて尚、その捕食本能に従おうというのか……！！』

バリツバリツと、肉を裂き骨を砕きながら喰らっている。どうやらクグツに侵食され

ても、その本来持ち合わせた性質を消しきれしていないらしい。

自身が喰われているというのに、彼は取り乱してはいなかった。それどころか、この状況を楽しんですらいいた。

『フフフツ、面白い……。ならばワタシを喰らいがいい！ この血肉を喰らい……。ワタシという存在をその体に、命に!! ……刻み付けるオオオオオオ!!!』

すべてを飲み込んだマガタノオロチに数秒後、異変が起きる。

「ツ……!?!」

内側から膨れるように肉体が盛り上がり、体内機関、骨格、すべてが変化していく。マガタノオロチは苦しみに声を上げているが変化は止まらない。

巻きついた首は腐るように落ち、代わって体から新たな首が7つ生えてくる。そのすべてはマガオロチそのもの。さらに頭と一体化していたような胴体が伸び、二足歩行だったのが四足歩行に。加えてクイーンベゼルブと同じ前腕が生える。そして尾も4つの爪が伸び、中心にコアを備えたものへと変異する。赤や紫といった体色も変化。すべてが黒く染まった肉体に血液のような、地を這うクグツのような鮮紅が走る。その姿はただ禍々しいだけ。

星を喰らうマガタノオロチ、そしてクグツを持つクイーンベゼルブ。それらをアルファルドは繋ぎ融合させてしまったのだ。

その末に生まれたのは星に存在する悉くを喰らいつくすだけの厄災。太平風土記にて予言されていた融合大魔王獣。名を――

「――
マガツオロチ
禍津大蛇……」

予知されていた通り……2体が交ざり合いつて誕生した存在を前に……誰もが恐怖と絶望の眼差しを向けるしかなかった。

第73話 逆襲の融合大魔王獣

「これが……マガツオロチが生まれるにあたった経緯さ」

アオボシは目の前で起こっている惨状の推測と、自分がこれまでにしてきた事を事細かに、それでいて素早くA q o u r sへと伝えた。

「どうしてそれを私たちに……?」

「別に……ただ君たちがそこにいたからさ。理由もわからないで死ぬのは嫌だろ?」

鞠莉からの問いに、アオボシはそう答えた。その表情はどこか申し訳なさそうではあつたが、真意はわからない。

「死ぬって、それどういうことよ!？」

「言葉通りの意味だよ。ああなつた以上、誰にも止められない。例えシリウスでもね」

「つかかろうとする善子から少し退きながら、彼は淡々と口にする。遠回しに」一眞は負ける」と言われたようなもので当然、黙っているはずもなく……

「カズくんはこれまでだつてどんな怪獣にも勝つてきた。今回だつて……」

「さあ……どうかな……」

「さつきから聞いてれば、アンタ何なのさ!? 最期だからって嫌味でも言いに来たの!」
「おやめなさい果南さん! ……確かに、この期に及んで何を言いに来たのかとは思いました……」

今にも飛びかかろうとする果南を抑えるダイヤではあったが、どうやら彼女も同じ心境らしい。

「別にそんなつもりじゃなかったんだけどね……」

本当に自分は嫌われているのだなど、アオボシは苦笑い。承知のつもりで彼女たちと接触してはいるが、実際にその雰囲気に触れるとなかなか辛いものがある。

「ねえ……」

そんな中、彼女だけは他とは全く異なった声音で話しかけた。

「それって……私のせい……なんじゃないの?」

「珠冬、ちゃん……?」

「私がベゼルブを呼び出したからこんなことになってるんじゃないの?!?!」

彼女が4月に呼び出したベゼルブ。それが最初のトリガーだった。彼女は今、これまでに感じてきた以上の罪悪感に襲われているのだ。

「その言い方なら、君を傀儡として助けた僕の方が悪いよ。それに、本来僕がやるはず

だったのを面白半分で君に任せたんだ。悪いのは全部僕さ」

そんなことを言ったってなんの慰めにもならない。でもそう言わずにはいられなかった。何故なら彼女の目元は真っ赤に腫れていたし、今にも吐き出しそうな顔だったから。

泣き崩れ丸まった珠冬の背中へ、ルビイたち1年生は優しく手を乗せる。何も言えなくても……何も言えないから……彼女たちにできることをするしかなかった。

く

「な、なんだ……」

目の前で突然変異し、8つの首を天に向けるマガツオロチ。その多重の咆哮は大地を揺らし、周囲のガラスは砕け散っていく。

降臨した厄災の獣ともいふべきその姿を見据えながら、オーブは震える脚に力を入れ

る。

「■■■■ー!!」

しかしマガツオロチはオーブのことなど眼中にないらしい。真ん中の本体ともいえる頭は周辺にあるビルを喰らい始めた。残る7つの首はそれぞれの力で破壊を楽しんでいる。竜巻を発生させビルを粉々に。雷を飛ばして爆破。火球や青白い光球を飛ばして火の海を作り、闇のような漆黒の触手を伸ばせば、建造物をなぎ倒す。純粹に……無垢に……ただ己の本能に従って街を破壊し続けている。

「や……めろオオオオオオ!!」

そんな惨状を黙って見過ごすつもりなど毛頭ない。蒼雷を纏い、ナイトリキデイターは加速する。

……が

数ある触手がオーブの行く手を阻む。光剣で斬って、斬って、そして斬り裂く。しかし制限などないのか、とどまる所を知らずになだれ込んでくる。対処しきれない多くの触手は、宛ら鞭のように体を痛めつけた。

「がああ……ん、のおー!」

オーブはさらに加速する。その速度は、残像によってオーブが分身したのではと思わせるほど。

「■■■■ツツ」

的が絞れない。しかし自分の近くには必ずいる。ならば全方向に撃てばいいだけのこと。そう判断したオロチは広範囲に攻撃できる“マガ迅雷”を7つの首から放った。湾曲し地面に穴をあける落雷の雨を前にしてしまったら最後、オーブに逃げ場などない。あるのはただ、雷光の餌食になるだけ。

避けることも叶わず何発も受けてしまうオーブ。しかし受け身を取って体制を立て直すと同時に、額へと残り少ないエネルギーを送る。

「この……クラッシュャーナイトリキデイタアア!!」

青い連弾と、紫や赤の混じった雷“マガタノ迅雷”が衝突しあう。その爆風を突っ切り、今度は極太のレーザー“マガ穿孔”が迫ってくる。

「…………ツ!」

咄嗟に展開した光剣の防御もままならず、強烈なレーザーを前に吹き飛んでいつてしまふ。刃が砕けた状態で宙に放り出されるオーブの足を“マガ触手”はしっかりと締め上げる。そのまま周辺のビルへ、そして地面へ叩きつけた。それは無邪気に遊ぶ子どものようなだった。

「ウ……アア……」

全身に走る痛みに気を失いかけるが、どうにか堪えて触手から脱出。空中でフュージョンアップ。サンダープレスターとなって今一度反撃を試みる。

連続してはなったゼットシウム光輪。それは“マガ火球”を撃ち落として首へと接近

——するが頭部のいくつかに吸い込まれ、咀嚼されてしまう。

「俺の技も喰らうのか……」

すべてを喰らうとはいえ、技ですら食べてしまうとは……。見境なくすべてを喰らう魔獣の恐ろしさだ。

『フ、フフフフ……アハハハハッ！ イイゾ!! コレガ全テヲ喰ラウ、マガタノオロチノチカラ力カ！』

聞き覚えのある声がマガツオロチから聞こえる。そう、アルフアルドだ。彼は喰われている時にこう言った。“ワタシという存在を体と命に刻み付けろ”と。おそらくそれがクグツに侵されたマガタノオロチへの命令となり、彼の言葉通り存在を刻み付けたのだろう。どこまで意識を残しているのかは不明だが。

『楽シイナア……モノヲ喰ラウトイウノハ!! 破壊スルトイウノハ……!』

本能に支配された男の声。それはもう、高い知能を持った獣でしかないということ

知らせているようだった。

『アアア……貴様モ喰ラツテヤルゾ……オオオオオオブウウウ!!』

マガツオロチは周辺に雷や火球をばら撒きながら突進してくる。エネルギーも少なく、どこまでこの体を保っていられるかわからない。しかし“迎え撃たない”という選択はなかつた。ここで止められるのは自分一人だけなのだから。

迫る触手を斬り飛ばし、撃たれる火球を叩き落とす。間髪入れず放たれるレーザーをゼットシウム光輪で防御。光芒の合間を縫って肉薄と同時に強烈な右ストレートを食らわす。7つの首からの攻撃を警戒、捌きつつ本体への攻撃を加えていく。

「■■■■!!」

だが超至近距離からの迅雷に体は呆気なく吹っ飛んでしまう。転がったオーブへ噛み付こうとする顎を蹴り飛ばしてどうにか起き上がることに成功し、再度頭部を殴りまくってからトドメに膝蹴りを見舞う。だがヤツにまったく効いていないのは明白だった。攻撃を受けている最中なのにも関わらず、首の1つがオーブの右腕を齧り、身動きのできぬうちに本体側からの頭突きを繰り返す。しかし、たったそれだけの攻撃で数百メートルの距離が離れてしまった。

それはオーブとマガツオロチの間に、途方もない力の差が存在しているということを表していた。

「デスシウムフロスト……！」

冷気を放ち這って行く氷塊の群れ。しかしオロチの前ではただの飴細工。火球と光弾の前にすべて砕かれてしまう。

「これでも……ダメか……」

ほぼ手詰まりの状態。しかし一方的な攻めは続く。“マガ臭気”と呼ばれるガスを口から吐き出して動きを鈍らせ、その隙に触手をレイピアの様にして突き刺す。そしてマガタノ迅雷で果てへと吹き飛ばしていく。

無限だと思わせるほどに長い滞空時間。そこからほんの数秒で重力が作用し、地面へと叩きつけられる。

「カ……ア……ッ……！」

肺にある空気のすべてが吐き出され、音のない喘ぎが自然と喉を振動させる。

一瞬、意識が飛んだ感覚。

「……ア……ッ!!」

ギリギリで覚醒できたのか、そもそも引き戻されたのかは定かではないが、どうにか完全に“飛ぶ”ということにはなかった。オーブはよろよろと立ち上がり、激痛の走る体に入力される。その痛みは疲労の蓄積のせいなのか、はたまたは攻撃のせいなのか。最悪……両方なのか。正直よくわからない。まず痛いのかもよくわからなくなってきた。

「ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……」

息も絶え絶え。正常なのかも怪しい意識。点滅の早まるカラータイマー。そんな状況でも、眼前の獣から視線を逸らすことはない。

『ホウ……マダコノワタシニ抗ウカ。ダガモウワタシハ存分ニ楽シンダ。ソロソロ観念シ、ワタシニ喰ワレタラドウダ？ 貴様ハ十分ニ闘ツタ。ソレデイダロ』

テレパシーで聞こえてくる彼の声音からは、金属的な冷たさは感じられなかった。皮肉なことに寧ろ今の方が生き生きとしている。大魔王獣と一体化し、自分の快楽も満たせるからだろう。でもそれだけではない。マガタノオロチの本能が彼の意識と溶け合った結果でもある。

8つの頭部すべてが嗤っているかのようにだった。そのすべてが、こちらの足掻きをただの戯れと嘲笑っている。

『存分ニワタシト闘ツタ。正直、スグニ貴様ハ倒レルダロウト思ツテイタ。ダガ未ダニ立ツテイル。ソレダケデ満足ダロ。……安心シロ。貴様ト貴様ノ大事ナモノハ……苦シマセズニ喰ラツテヤル』

「……ふざ……けるなあ!!」

ヤツの言葉が、ヒビの入った心を繋ぎ止める。まだ終われない。倒れられないと。

錘を引きずっているかのような四肢を動かし、オーブは突撃。オーブオリジンへと姿

を変え、オーブカリバーを振り下ろす。

金属音にも似た甲高い衝突音。それは肉体ではなく、マガツオロチの牙と刀身が激しく当たっている音だ。生物の歯というにはあまりにも強固で鋭いそれは、オーブカリバーとぶつかる度に火花を散らしていく。

しかしこの戦いは実質8対1のようなもの。まともに受け続けるのは自殺行為に他ならない。後方へと飛んで距離を取ろうと、首を蹴り飛ばすと共に反動を生もうとした。だがその考えは筒抜けだったか、宙へと浮いた瞬間、4つの首が押し寄せる。

「……ッ!？」

迎撃も間に合わず、手足を噛まれてしまった。さらにあることか、オーブのエネルギーを吸い始める。

「ガッ……アアア……アアアアアアア!？」

オーブの……ウルトラマンという体を構成する光を吸い取られつづけたら、体は瓦解し、今の形を保てなくなる。

(まずい……!!)

逃げようにもどうにもならない。このままでは霧散して消えるだけ。絶体絶命となつたその瞬間——

—— 2対の火球が横からマガツオロチを狙い撃つ。

助けられたオーブも、邪魔されたマガツオロチも、突如乱入してきた火球の射手へと視線を向ける。

黒い身体の胸部に怪しく光る発光体。長い突起の伸びた肩から脚部、そして側頭部にかけてはゴツゴツとした赤い体表に覆われており、頭部にはサメや深海魚を思わせる顔が付いていた。それは以前対峙した合体魔王獣。その名は……

「……ゼツパンドン」

膝をつくオーブに腕を伸ばすと同時にゼツパンドンは……いや、中にいる少女は問いかける。

「一真、大丈夫？」

怪獣の衣を纏っているのは以前と同じ。だが今回は敵対するためではなく、共に守るために……彼女は戦場に降り立ったのだった。

「珠冬……お前、その姿……ってかなんでここに——」

「説教は後で！ こっち来るよ！」

「……ああ！」

言いたい事は山ほどあるが、今は悠長に説教をかましている暇はない。彼女の言う通り、目の前の厄災に集中すべきだろう。

怪獣とウルトラマン。奪う者と守る者。そんな真逆の印象を与える両者が並び立つ。

「■■■■■■ ツーロー!!」

ゼツパンドンは火球を吐きながら突進。マガツオロチは雷撃、火球、光弾を放つて木端微塵に消し飛ばそうとする。

上空から降り注ぐ数多の死の手。彼女は視認すれば即、射線上から消える。的は消え、地面に衝突すれば巨大な爆発。煙の消えた地面は焼け焦げ、大きく抉れていた。

『ナニ……?』

辺りを見回すマガツオロチの背後に、ゼツパンドンは姿を現す。そしてすぐさま火球を撃ち、再度姿を消した。今度は側面に姿を現し、紫のレーザーを。

鬱陶しいと前腕の鎌が水平に振られた。しかし体に届く直前に姿を消され、鎌は空を斬る。

ゼツパンドンのテレポーターションで攪乱しながら、隙について攻撃を加えているのだ。

『忌々しい』

7つの首をもたげる。オーブにしたように広範囲に稲妻を放つつもりだ。

「させるか!」

跳躍したオーブは水平方向の回転斬りで発射を阻止。さらに追い打ちをかけるように地上から巨大な火球が首へと投げられる。

『ホウ……?』

着地したオーブを狙い、またもや光線の乱発。差し迫る閃光を前に、六角形のバリアーが張られる。

「今のうちに……!」

「わかってる!」

盾役のゼツパンドンが前に立っているため、直進する光線技のほとんどは使用できない。しかし地を這って向かっていく技なら……。

「オーブブランドカリバー!!」

足元に命中し体制を崩すマガツオロチ。それと同時に攻撃の手も止んだ。無防備になった今がチャンス。

「珠冬……頼む……!」

「……!!」

紫色の破壊光線、口から吐き出す超高温の火球……ゼツパンドンの持つすべてを、ありったけをマガツオロチへ向けて撃ち込んだ。

全身を貫くための、破碎するための“ありつたけ”が衝突と同時に巨大な火の手が上がる。

しばしの間の沈黙。

煙が完全に消えるまでの数秒は数分にも、数時間にも感じられた。黒煙が消えればそこには――

「……………嘘……………でしょ……………」

未だ無傷のまま、何の形跡もないマガツオ口チがそこに佇んでいた。

「これだけやっても……………」

こんなに攻撃しても、彼女のありつたけでも……………全くの無意味なのか。

『今ノハイイ攻撃ダツタ。コノ体デモ“熱イ”ト思ワセテクレタノダカラナ』

まずい。……………もう勝てる道筋が見えない。

(ダメだダメだダメだダメだ……考えるな。そんなことを考えるな。まだ何か……………何か手があるはずだ……………！)

一度考えてしまうと、とめどなく溢れてくる。考えるなと思考を切り替えようにも、こびり付いた負のイメージは瞬く間に広がっていく。そして突きつけられるのだ。諦めや絶望……………死といった言葉を。

『ヨウヤク諦メテクレタカ。先程ハ喰ラツテヤルト言ツタガ気ガ変ワツタ。敬意ヲ表シ

テ、苦シマセズニ殺シテヤル』

8つの口、そして尻尾がこちらへ向ける。計9つが同時に光を放ち始めるところで「ああ、尻尾からも攻撃できたんだな」と察してしまう。そう分かると……自分たちはまだまだ全力を出させていなかったという現実を突きつけられているようで……無力感に苛まれてしまう。

でも、でも何もせずに甘んじて攻撃を受け入れるなんてことは……絶対にしたくなかった。だからこれが最期だとしても、せめて反撃くらいはと立ち上がろうとするが……。

「あ……」

やばい。どうやら暁一眞の肉体が限界にきてしまったみたいだ。マガツオロチとの戦闘は相当な負担を彼の体に強いている。もう限界だと、まるでシャットダウンされた機械の様に全身から力が抜けていくのを感じる。

「アレは……どうやっても止められないよね……」

「そう……かもな」

あまりにも静かな、終わりへのカウントダウン。その閃光を見据えても、不思議と怖いという感情を抱かなかつたのは、心が灰になったからだろうか。

『全クノ無駄。全クノ無意味。ダトシテモ立チ向カツタその愚カサデ胸ヲ張りナガラ死

又ガイイ』

「……でもやつぱり、貴方如きに無駄だなんて言われたくない」

『……ハ?』

死神の鎌が首へ確実に迫る中、彼女はオーブの前に立つ。

「貴方如きに……私の大事なものを奪わせたりなんかしない……!!」

『散レ』

短い言葉と共に、8つの口と尾から放たれたのは業火、嵐、光、稲妻……すべてを合わせた漆黒の光束。少しでも振れば消滅するであろう死の具現化。その発射音は……終わりを告げる鐘の音ともいえた。

それをたつた1人で……ゼツパンドンシールドを展開し、受け止めた。

「う、あああああああああつっ、ああああああああ……!!!」

本来であればシールドを展開しただけでは守れるはずもない一撃。だが……だが彼女は耐えている。地獄のような時間に耐えながら、感覚がイカれ始めている両手や……両足に力を込めて。もう体の一部は溶解し、視覚も聴覚も、うまく働いていない。

極熱を防ぎながらも彼女が思い出すのは、たつた数刻前の出来事。

マガツオロチに苦戦するオーブを見続け、自分たちはなにもできないと歯痒い思いをする少女たち。それは珠冬だって同じだった。でもそれと同じくらいに、自分が成してしまつたことへの責任が重く押し掛かつていた。

「……も危ない。避難した方がいい……と思うよ」

らしくない言葉を口走るアオボシ。

怪訝な目をアオボシに向ける一同。先程は「みんな死ぬしかない」みたいなムーブを出しといて、今は「逃げた方がいいと思う」などとほざく。お前は混乱を招きに来たのかと再度突っかかりたくなる。

「……そうだね。みんな、ここから離れよう！」

彼の言う通りにするのは癪だが、それでももう少し安全な場所に行くというのは賛成だ。

全員が走り出したと思つたその時……

「………珠冬ちゃん？」

彼女だけは……あるものを拾い上げていた。それは漆黒のリング。一眞の持つそれ

とは対極に位置するもの。宇宙一邪な心を持つ者の前に現れるといわれるアイテム。
ダークリングだ。

「……………!? それは……………!!」

「珠冬、立ち止まってないであんたも逃げるわよ!」

善子の手が肩に触れる。しかし彼女は即座に

「ううん、私は行かない。……………善子たちだけで逃げて?」

はつきりと、それでいて静かに答えた。当然、善子からは「何言ってるのよ!」と返される。

「私、これ使って一眞を助けてくる」

「……………! あんた正気!? 一眞を助けるたってどうにかできる保証あるの!」

「……………わからない。どうにかなるかもしれないし、どうにもならないかもしれない」

「だったら……………!」

珠冬が言っていることの意味を……………誰もが察してしまった。どうして彼女がそんなことを言ったのか。そしてこれから何をしようとするのか。それは所謂、贖罪という名の

「ダメだよ……………」

「ルビィ?」

「ダメだよ！ 死に行くなんて!! そんなの、ルビイが……みんなが許さないよ!!!」
「そうすら！ 珠冬ちゃんは悪くないすら。悪かったとしてももう償ったすら。だから……」

何とか引き留めようとするルビイや花丸。それでも珠冬の意味は固かった。本当だったら「そうだよね」と言い、手に持ったリングを投げ捨ててみんなと逃げたい。でも……それはできない。

「自分がしてきたこと……今日まで考えなかったことは一度もないんだ。皆と楽しくやっている時も、ふと……自分にこんな幸福が許されるのかなって思ったり、夢に見たり……」

彼女はずっと問い続けてきた。操られ、自分の意思ではなかったとしても……怪獣を呼び出したこと。そのせいで罪のない人々を死に追いやってしまったこと。そんな過去があるのにも関わらず、自分は平和な世界にいいのかと、ずっと問いかけてきた。「いいのよ、ここにいても!! 何が何でもいいの！ ヨハネの言ってることだから絶対なの!! ……だから……そんなこと……言わないでよ……」

そして耐え切れなくなつて、善子すらも泣き崩れてしまった。

「あーあ、やっぱり私は悪い子だ……。ルビイや花丸や、善……ヨハネの頼みを聞けないなんて……理亞にも悪いことしちゃうな……」

今にも溢れ出てきそうな雫。それを瞼を閉じることで抑えた珠冬。覚悟にも近く深呼吸の後、彼女は3人と目線を合わせるようにしやがみ込み精一杯の笑顔を見せた。

「ありがとうね。皆と過した時間はこれまでで一生の宝物だよ」

さらに向き直り、千歌たちにも言葉を紡ぐ。

「先輩方も、これまでありがとうございました。こんな私を入れてくださって、本当感謝しています。……あんまり話していると行けなくなっちゃうからこの辺で……」

一礼し、走っていく珠冬。そこで彼女はアオボシとすれ違う。

「僕が止めても……君は行くんだろ？」

「……うん。私が決めたことだから」

「……………」

アオボシの握った拳は自然と力が入る。それを見た珠冬は、ただ……優しく笑う。

「珠冬……！ 僕は……僕は本当は……」

「言わなくてもいい。わかってるから」

それだけ言い残し、彼女はマガツオロチの元へ駆け出していくのだった。

「最後まで役に立たないなと思ってたけど……そうでもないみたい……」

「おい……珠冬……やめろ……」

一真は呼びかけているが、今の彼女に……言葉は届いていないだろう。

「私の役目はここまで。だから一真が……マガツオロチを倒して。私も……兄さんも、信じてるから」

3年もの時間を奪われた彼女。暁珠冬がただの少女として生きられた時間は、ほんの僅かだった。だがその僅かな時間に、その瞬きのような間に、彼女が手に入れた彩というものは……掛け替えのないものだった。だからこそそれを守るため、それを守る力を持つ彼を守りバトンを繋げるため……少女はその命を燃やす。

「今までありがとうね。それとごめんね」

白く塗りつぶされていく世界の中で、頭だけをこちらに向け笑う珠冬の顔が……見え
た気がした。

（——ああ……でも……Aqoursのライブ、もう少し見ていたかったな）

完全に塗りつぶされ、聞こえてくるのは巨大な爆発の音のみ。

世界が元に戻っていく。

正常に戻った世界でも、変化はあった。爆発の威力は遥か数千メートル上空の雲まで達していたようで、暗雲の隙間から、太陽の光が細々とさしてくる。

オーブの目の前には先ほどまでの頼もしい背中はない。まるで最初から存在していなかったように。でも彼女という存在はここにいたという証として、地上に焼け焦げた2つの足跡がしつかり残っていた。逆に言えば、それだけしか残っていなかった。

『哀レダナ。オーブヲ守ツタ結果、ソノ肉体ハ熱量ニ耐エキレズ消滅シタ。余リニモ呆気ナイ幕切レダツタ』

悲しみでどうにかなりそうだった。悔しさでどうにかなりそうだった。あまりにも自分が無力で……どうにかなりそうだった。

「いの……………!!」

杖替わりになっているカリバーの柄を今一度強く握る。身体は限界。これ以上の戦いは耐えられない。様々な感情が精神を砕いている。しかし、しかしそれでも尚、立ち上がろうとするために、柄を今一度強く握る。

「アル……ファルドオオオオオオオオオオ!!!」

硬化した四肢に命令を伝達する。だがすべては彫刻の如く、岩石の如く、固く……重かった。軋む音なんて呼べぬほどの、体からははいけない音がそこから中で響く。エネルギーなんてない。だから己の魂を燃料にこの体を動かしていた。

「お、おおおおおおお………!!」

だが……

「おお………お………!!」

もはや

「……………!!」

「これで。」

つまるところそれは………死だ。

第74話 決意の叫び

崩壊した東京の街を走る9人。

どこもかしこも崩れかけ。火の手が上がり、未だ燃え続けているところもある。地上には数刻前まで建造物の一部であったであろう破片がゴロゴロと転がっている。最早道なんて呼べるものはない。こんなのが日本の首都の現状であろうとは……誰も信じたくないだろう。

マガツオロチは相も変わらず、捕食と破壊を繰り返している。だが時折、16の瞳が空を睨む。険悪な頭部から火球を放っていたからだ。

火球は成層圏を超え、再度地上を目標けて落下していく。そして日本中に降り注ぐのだ。今や日本に安全な場所はないに等しかった。隕石の様な火球群の中に、時たまに光

球が混じっていた場合はさらに被害が拡大する。

火の海を歩くヤツのシルエットに、人々は怯えることしかできなかった。

（…）

（……あれ？　ここは……）

深く、深く、水底に沈んでいく感覚。なのに肌を通して伝わってくる情報は無いに等しかった。冷たくもなく、暖かくもない……不思議な空間。いや、自分の感覚がないのかもしれない。

（俺は……ああ、そうか……）

消えかけの意識の中に、先ほどまでの光景が明確に呼び起こされる。8つ首の獣に、自分を守って消えた少女の顔……。

倒せなかった。守れなかった。そう思うと、後悔や悔恨、悲しさで胸が張り裂けそうになる。一真は一人、失意の中で息を吐き続ける。そしてふと、こんなことを口にした。

「俺はこのまま……死ぬのか……？」

諦めのようにも、まだ足掻きたいと願っているようにも聞こえる彼の呟き。だがその声は誰にも聞こえることなく、寂しく空間を漂うのみ。

彼女は最期に「倒して」と言った。自分に最後の望みをかけ、己を犠牲にしてまで……一真に託したのだ。なのに見てみる。託された当の本人は目の前で倒れ、今の自分はこんなところで動くこともできず……ただ沈むのみではないか。死を待つのみではないか。

なんとも無様で、滑稽で、恥知らずな有様であろうか。

責めたところで状況が変化しないことなんてわかつている。しかしそれでも、思わずにはいられないだろう。

とその時、背後から伸びてきた両腕が一真に触れる。途端、辺りの景色は一変する。暗い水底から真つ白い空間へと。

「いつまでここに丸まつてるんだい？」

「……………え？」

男に声を掛けられる。それまで朦朧としていた意識が鮮明になり、感覚も徐々に元へ戻っていく。

「おはよう……とはまだ言えないけど、とりあえずこんにちは。久しぶりだね、暁一真くん。……ああ、そうだ……この姿で会うのは初めてだったね」

一真の目の前にいた青年は笑顔で挨拶してくる。

戸惑いつつも、一真は青年を直視する。背格好は自分と同じくらいだろうか。年齢はおそらく、1つ2つくらい上だろう。しかしそれは外見上のみ。その纏っている気配からは、もっと長い年月を生きてきたのだと思わせる何かがあった。

「あなたは……?」

一真は青年に問う。「誰なのか」と。でも彼は目の前の青年が一体何者なのかを、ある程度は察していた。

その声に、聞き覚えがあったのだから。

「オレは……うん。名前よりこっちの方がわかりやすいかな」

彼の目つきが変わる。どこにでもいる青年の目から、選ばれた戦士の目へと。

「オレはオーブ。君と一体化しているウルトラマンオーブ……その人だよ」

くく

一真がオーブと対話を始める少し前に、千歌たちは倒れている一真を見つけていた。
「カズくん!!」

誰が上げた声かなんて……そんなのはどうでもいい。1人が向けた視線の方向へ、全員が目を向ける。するとそこには、瓦礫の上に伏せた一真の姿が。

「……!!」

誰かが口を手で覆う。倒れた姿が弱弱しく、あまりにも小さく見えたからだだろう。一目散に駆け出し、彼の周りに座る面々。だがその身動き一つしない人の姿を見てしまえば、自然と最悪の結論を導き出してしまう。

「一真くん!」

「カズくん、起きて!!」

声を掛けるも、返ってくるのは沈黙のみ。それが皆の頭にある一文字をより強く、濃く描き出してしまう。

「バカ言わないでよカズ……」

果南はそんなはずないと、その可能性を否定しようと、首元に手を当てる。しかしそ

れこそが、覆しようもない証拠になってしまった。

「そんな……」

ひんやり……なんて言えないくらい、冷たくなった体。それは最早人の体を触つているといふ感覚すらも忘れさせるほど。そして何よりも……

「脈が……ない」

血液を体中へ送っているはずの器官が止まっているということ。暁一眞の体の機能は停止しているのだ。普通、全身に血液を送るといふ働きが止まることはない。止まっている……ということは即ち……。

「ねえ、起きて？　起きてっば!!」

仰向けにした彼の肩を揺する。しかし呼びかけには答えず、ただ肉体が揺れるだけ。

「帰ってくるって言ったでしょ……!!　カズくんはまたそうやって……そうやってまた約束破るの……っ!?!」

そう言えば、「ああ。そうだったよな」とボロボロになりながらも起き上がってくれ。そう思っていた。しかし今度は……今度こそは……もうダメなのかもしれないと考えてしまう。打ち消しても打ち消しても、“こうして目覚めない”という目の前の現状が、彼の死というものを残酷にも明確に提示していたのだから。

「……………」

一眞の死に嘆くのはA q o u r sの面々だけではなかった。遠くから様子を見に来たアオボシでさえ、その余裕そうな表情を崩していた。以前は倒そうとしていたとはいえ、昔からの旧友だ。彼にも思うところがあるのだろう。

（ここで死ぬ気か、これで終わりか……？ まだだろ。こんな時だからこそ立ち上がるのがお前なんじゃないのか……？）

アオボシは無意識のうちに、一眞が立ち上がることを信じていたのだ。そしてもしかしたら……と、どこか希望をも見出していたのだ。

千歌たちは一眞へ必死に呼びかける。ここが終わりじゃないはずだと。まだまだやるべきことも、したいこともあるはずだと。ただひたすら彼のことを想い、呼びかけ続けた。

くく

「あなたが……ウルトラマンオーブ」

「そう。……って言っても今は君がオーブのようなものだから、ちよつと複雑かもね」

白い空間の中で、一真と青年は話している。今日の前にいる青年が3年前、マガゼツトンを倒したウルトラマン本人。そして死にかけだった一真を、一体化によつて救つてくれた命の恩人だ。

「……」

オーブ本人であるのは何となくわかるのだが、以前の彼と少し違うのだった。“以前”というのは、夢の中に囚われた時のことだ。その時のわずかな時間に、オーブ本人と話す機会があった。しかしその時と雰囲気がまったく違う。状況もあったが、それだけではないだろう。

以前話した時の堅苦しい感じではなく、今の彼はどこか穏やかで、優しい。

「あ、あの……前に話した時と随分……」

「ああそれね。ごめん。こんなんじや示しがつかないかなって演じてただけど、上手くないもんだね」

ヘラヘラと笑うその様は緊張感がないのか、案外図太いのか。でも先ほど見せた瞳は、間違いなく闘う者の瞳であったことは確かだ。

「ようやく、君と話せる機会を作れた。だからまず言っておかないとね」

青年はゆっくりと、その頭を下げた。

「君を救うためとは言え、戦いに巻き込んでしまった。拳句には頼りっぱなし。そして今は一刻を争う状況だ。ここまで、本当に申し訳なかった。オレがもつと早く目覚めて、君から離れるべきだったのに」

「そ……そんなこと……」

確かにそうかもしれない。一眞を救ったことは事実。しかし、一眞自身が戦う必要はどこにもなかった。オーブが目覚め、一眞との一体化を解いていれば、このような空間にいることもなかっただろう。

「君の体を修復するのにかかるの力を使ってしまったんだ。だからオレは、力が回復するまで眠るしかなかった」

「でも……そのおかげで、俺はここまでやってこれた……。だから……謝らないでください」

一眞は力なく、青年に語り掛けた。ここまでではやってこれた。しかしオーブ本人であれば、珠冬を失うこともなかったんじゃないかと……考えてしまったからだ。

「……君は優しいね。やっぱり、間違いないやなかったな。君を助けたことも、そして――

――再び、君を助けると選択したことも」

「……ええ？」

彼の一言に、なにか大きな決意が垣間見えた。

「簡単な話さ。今の君はほつとしても死ぬ。オレと一体化していても回復が追い付かない。だから——オレと一真くんの体を完全に同化させるんだ」

ウルトラマンと人間が一体化する理由。例えば一体化した人物の傷を癒すため。例えばウルトラマン自身の傷を癒すと共に、惑星での長時間の滞在、活動を行うため。といったものが主な理由だろう。一心同体とはいえ、人物には人物の意思、ウルトラマンにはウルトラマンの意思として、互いの釣り合いが取れた状態で行われる。

「完全に同化って……」

「一時的に君をウルトラマンオーブそのものにするんだよ。一心同体の一時的な変身じゃない。君自身がオーブになるんだ。まあそんな事すれば、どちらかの意識は完全に消滅しちゃうけどね」

完全な同化。もう2度と離れることができなくなるということ。そして2つの意識と2つの体というバランスも崩壊し、いずれどちらかの意識がもう片方に飲み込まれてしまうのだ。

「他のウルトラマンならどうにかなるのかもしれないけど、生憎……オレは無理っぽいから」

変わらず笑顔で語るオーブに、一真は言葉を失う。だってどう考えても、受け入れが

たい提案だ。それに彼は自分^{一真}をオーブにすると言った。一体何を意味するのか、オーブは知っているはずだ。

思い違いであつてくれと願いつつ、一真はオーブに尋ねる。

「あなたは……どうなるんです？」

「うん？ 消えるよ。仕方のないことだけだ」

自分が消えるという選択をしているのに……なのにそれをさも当然のように彼は話している。

「どうして……そんなにすぐ決断できるんですか。どうして……自分を犠牲にすることのために……」

「……」

穏やかな瞳で一真の紡ぐ言葉を待っている。一真が今から何を吐き出すものを知っているかのような達観した表情で、優しく受け止めようとしていた。

「俺は……俺の意思で……ここまでやってきました。もう迷わないと、後悔はしないと。でも……俺は……珠冬を守れなかった！ オロチを倒せなかった！ 今この瞬間も、みんながどうなっているかを考えるだけで怖くて堪らないんです！ こんな俺を生き返らせるより、あなたが生き返った方が……よっぽど……」

心に決めたことは確かに覚えている。でも、何故オーブが自分を生き返らせようとす

るのか……こんなちっぽけな自分をどうして生き返らせようとするのか、問わずにはいられなかった。

一眞の叫びを聞いて、オーブはそつと目を伏せて考える。

「どうして、か……オレがそうしたいと思ったから。じゃ、ダメかな？」

「……………え？」

間の抜けた声を出した一眞。そんな自分の生すらも左右する決断が「そうしたいと思っただから」なのかと。

「だよね。そう思うよね。でもこれはき、オレの我儘なんだ。10を殺し、100を救う事しかできなかつたから、今回くらいただの“1”を救いたいんだ」

オーブは語る。戦士の頂で力を授かり、ウルトラマンオーブとなったことを。そしてあらゆるミッションをこなしたことを。

いつも、戦いの度にいくらかの犠牲が出る。少数の命を見捨てないと助けられないような大勢の命があつたからだ。どうにかして10を救おうと思つた。でも……どうやつてもできなかつた。だからこの世界はこういつた仕組みなのだと言ひ聞かせて、少数の命を見ないようにした。そうしてある時、魔王獣を倒しに来た地球で彼に出会つた。

「自分を犠牲にしてまで誰かを助けようとする君の在り方……憧れたな。だから助け

た。ウルトラマンとしての使命とかじゃなくて、ただ純粹に誰かを、1を……ううん、その選択を選べる他でもない……君を助けたかったんだ」

そう。それが彼の純粹な我儘。10を見捨てたくない、その中の1を見捨てたくない、と、それまで蓋をしていた彼の純粹な心。

「だから今も……同じ選択をする。この選択を君が教えてくれたから」

「そんなの……」

「それに君にはまだ、戻るべき場所があるはずだよ？」

オーブは天を指さす。その方向に一真も目を向ける。

『カズくん!』

『一真くん!』

『先輩!』

『一真!』

Agoursのみんなが自分を呼んでいる。必死に、目を真っ赤に腫らせて叫んでいる。

「彼女たちを裏切るのは罪だぞ？」

「……」

まだ自分には帰るべき場所が、帰りを待っていてくれる人がいる。それを裏切るなんてどうかしてた。

「それに彼女も願いだって」

ああ。ああそうだ。珠冬の残した言葉だってまだ残っている。倒れたのなら、またもう一度立ち上がる。今までずっとそうしてきたことだ。

体が軽くなつていく。心に涼しい風が入り込んでくる感覚。今までかかっていた霧も晴れていく。

「その顔、覚悟は決まったみたいだね」

一真が頷くと同時に、青年の……オーブの体は輝き始める。同時に輪郭が曖昧となり、光の粒子として消え始めていく。だがその表情はこれまで見てきた以上に穏やかであつた。消滅するという変えようもない現実が迫っているが、絶望にまみれた表情では断じてなかつた。

「君に大役を任せるのは本当に心が痛い。でも君が望めば、オーブの力も消えるかもしれない。普通の人間として生きることだって選べるはずだよ」

「いえ、そんなことはしません。あなたの意思も継いで、俺は戦っていきます。ウルトラマンオーブとして。それがあなたの生きた証になると、そう信じて！」

普通の人として生きるという選択を、一眞は断固として拒否した。皆を守りたいという願いに加え、青年の生きた証を残すためだ。彼が戦ってきた長い時間、そして彼の選択に最大の敬意を払うために。

「そっか。なら止めはしないよ。あの獣を倒し、みんなのところへ帰るんだ。……さあ、もう戻る時間だ」

「あなたには何度も何度も助けられました。本当にありがとうございます」

精一杯の感謝の言葉を伝える。伝えられるのは、これが最初で最後のチャンスだから。そして背中を押してもらった彼へ、もう大丈夫だと伝えるように一眞は微笑む。そして

「——行つてきますす！」

と。

笑みを浮かべて消えていくオーブを見届ければ、あるべき場所に戻るために生成された穴へと駆け出していくのだった。

（ ）

「……ッ!!」

「……!?!」

肺に空気が入っていく。血液の循環、途端に末端から駆け巡っていく熱。あらゆる情報が交錯する。

「悪い……約束、破るところだった……」

体は所々はまだまだ痛むけど、動かせないというレベルではなかった。彼女たちの姿を目にして理解する。本当に、オーブがやってくれたのだと。

彼が上半身を起こした途端、体にはちよつとした衝撃が走った。

「もうー!!! 心配したんだからああああ!!!」

曜や千歌が抱き着いてきたからだ。他の面々も、一真に無事に涙を拭っている。

「帰ったら覚悟しておきなよ!」

「こんなに心配を掛けたんです。何か言う事があるのでは?」

「心配かけてすみませんでした」

先ほどまで死んでいたとは思えない程の笑顔だったからか、それとも生きていたことが嬉しかったからか、ダイヤもそれ以上咎めることはなかった。

「ええ。今回はそれで許すことにしましょう」

「……」

遠くから見ていたアオボシも、一真が起き上がったことに笑みをこぼした。しかし、その表情は長く続かなかった。遠方でマガツオロチが火球を吐いたのを見てしまったからだ。放物線を描いた火球のいくつかが不幸にも、一真たちのところへ落ちようとしていた。

「まづい！」

アオボシの叫びは一真たちにも伝達していた。彼らは咄嗟に空を見上げる。飛来するのは何十もの火球。衝突すれば死は避けられない。咄嗟に一真はオーブリングを構えたがそれよりも早く、全員の目の前に、とある巨体が着地したのだった。その巨人は剣を盾のように扱い、火球を防いでいく。

「んん……」

爆発と熱風が消え去った頃、A q o u r s の少女たちは恐る恐る目を開ける。しかし、千歌たちには傷一つない。死んだ……という訳でもないらしい。

しかしそれだけでなく、暗い影が自分たちを覆っている。その正体を確かめるべく、

彼女たちは視線を上に向ける。するとそこには、思いがけない人物の姿があったのだ。た。

「……………」

するとそこには黒いオーブ……オーブシャドウが剣を構えて千歌たちを守っていたのだ。

「な、なんで……………」

純粹に敵……とは言い難いものの味方でもないはずの彼が救ってくれたのだ。そんな彼の行動に、一同は困惑。

だがそれはアオボシも同じであった。

変身を解除し、信じがたいその行動に困惑していたのは千歌たちでも一真でもなく、アオボシ自身だ。

「なんで……………僕は……………」

「やっぱりな。お前にも……………まだ光が残っているってことだよ」

「なに……………?」

歩み寄った一真の一言に、動揺するアオボシ。だがそんなこと、信じられるはずがな

かった。

だって狂乱に駆られて母星を破壊し、ここまでいくつも悪逆を尽くしてきたのだ。そんな自分が光を捨てきれない？ そんなこと、信じるわけにも、認めるわけにもいかなかったのだから。

「不思議だったんだ。どうしてお前が瀕死の珠冬を助けたのか……鞠莉さんを助けたのか。洋館で千歌や曜を助けるのに手を貸してくれたのか……」

「そ、それは……」

ただの気分だと言いたかった。珠冬に至っては、傀儡が欲しかったと言いたかった。でも、言うことができなかった。

「誰かを助けたかったんじゃないのか？ まあ、やり方は最悪だけだな」

一眞のそれは、アオボシ……リゲルの心に深く突き刺さった。

守る価値もないと、星を破壊した。

その時、彼は思い出してしまったのだ。光の巨人の噂を語る少女の輝いた目を。しかし、そんな希望を打ち砕いた。それは彼に後悔として残った。

その後、地球に降りた時に見てしまった。瀕死の少女の姿を。

あの時の後悔が頭を過つたりゲルは、珠冬を傀儡にするという名目で命を救った。褒められたやり方ではなかったが、それでも……それでも確かに、リゲルは少女の命を

救っていたのだ。

「目の前のものを救おうとするのがお前の弱点だ……。なのに……僕も同じことを……」

「自分でわかっているはずだ。リゲル」

そう、彼も憧れていた。誰ふり構わず助けようとする一眞の姿を。彼の追い求めていくその理想に。

「……」

一眞は呆然とするリゲルの胸ぐらを掴み上げたあと、思いつきり彼の顔を殴り……

そして、抱きしめた。

「……………ありがとうな。俺たちは光であって闇でもある。どちらか一方にいることなんてできないんだよ。でもそれでいいんだ。葛藤して、迷って、それでも光であろうとする。だからこそ、輝くんだ」

数多の思いが詰まった一眞の言葉に、リゲルは天を仰ぐ。

「みんなを頼む」

肩を叩き、一眞は向きを変えた。

いまだ暴虐の限りを尽くす、あの融合大魔王獣を倒すために。

あれは怪物だ。彼は……アレはただ命を奪うことしかない。それしか知らない。それしかやらない。このままでは地球が、いずれは宇宙の星々を喰らい尽くす。そうなる前に止めなければ……。

「カズくん！」

走り出す直前、背後からかけられた曜の言葉に、足が止まる。

「……………必ず倒してね！」

他にかけた言葉があつただろう。行かないでとも言いたかつただろう。しかし、彼女はそうではなく倒してと、勝ってくれと、彼の背中を押した。

「曜ちゃんの言う通り！ いつものやつでぶつ倒しちゃつて！」

「私たちの想いはひとつだから」

千歌と梨子も、一眞の背中を押す。対峙する時は一人でも、その想いは繋がつていと。

「天界墮天条例に誓つて戻つてきなさいよ、リトルデーモン！」

「ここで信じて待つてゐるぞら」

「頑張ルビィー！」

不安な筈なのに、恐怖で叫び出しただろうに、いつもの調子で送り出そうとしてくれる。

「貴方のこと、信じていますわ」

「帰ってくる……これは理事長命令デース！」

「カズ……勝ちなよ」

みんなの調子に、少し笑つてしまう。だが、背中を押してくれるその想いは、一眞の心を、みんなを守りたいと思う力を強くさせる。

そして――

「ああ……」

一眞は振り返り笑う。

「任せとけ！」

そう言い残して走り出した。

マガツオロチに向かってただひたすらに走る。傷が完全に回復したわけではない。尋常じゃない痛みが、熱がまだ残留している。

でも走る。

^{オレ}彼が、彼女たちが背中を押してくれた。いろんな思いを背負って、一眞はひたすらに走っていた。

だって――

「――終わらせない」

みんなで紡いだ今を。そしてその先に続いていく未来を……こんなところで閉ざされたくはないから。

1人では無理でも、みんなとならば出来ないことはないと知っているから。みんなの想いを背負えば、なんだって出来るから。

だから彼は走る。

そして……だからこそ、彼はそれを叫ぶのだった。

「ウルトラマンさん！」

「テイガさん！」

「光の力……………お借りしまあああああす!!」

黒煙が立ち込める空を駆ける一条の光。

「闇を照らして、悪を撃つ!!」

スペリオン光輪は八つ首の内の一つ、その眼を切り裂いた。

第75話 眩耀の行末

八首の獣は吠える。目の前にいる巨人を今度こそ完璧に殺し、その肉を喰らうために。

間髪入れずに降り注ぐ攻撃の雨。しかしその巨人は臆することなく飛び込んでいく。これ以上被害を拡大させないために。みんなを守り、未来を掴むために。

『馬鹿ナ男ダ。モウ一度ワタシニ喰ワレニ来タトハ……!』

男の笑い声と共に、7つの首が持ち上がる。口内から放たれるのは、嫌という程見たマガタノ迅雷。

オーブは即座にシールドを展開して防ぎつつ、数十発もの光輪を投擲する。しかしすべてが首を振るっただけで砕け散ってしまう。

「だよな……!」

体の紫のラインが光る。周囲をすばやく移動しながら鍬型の光弾を連射。火煙の中から、赤い光の尾を作りながら体当たり。迫る首たちを回避し、エネルギーを纏わせた拳を打ち付ける。拳自体の威力に、爆発の威力を足した二重のインパクトが肉体にめり込む。

が、身を何度も捻らせて炎を消し去った。そしてお返しとばかりに撃ち込まれた光球がオーブを弾き飛ばす。

瓦礫を舞い上げながら転がっていく姿から目を離さないマガツオロチ。ヤツはマガツオロチを放つために口元にエネルギーを貯める。

「ウウウ……ッ!!」

自分を穿とうとしている光を視線の端に捉えたオーブ。彼は咄嗟に地面へ小さな火球を放つ。すると煙が上がりオーブの姿は見えなくなった。

『調子に乗ルナ……!』

首の1つが360度回転。空から攻めるオーブを撃ち落とそうとマガツオロチを発射。

「このおおおお……!!」

迫る光束を弾こうと、エネルギーを纏わせた腕を立てる。光を纏った腕と光線が掠れる。火花、或いは己の肉片が宙に散っていく。

「があああああ……!」

全身を駆け巡り、脳天から突き刺されるような痛み。しかし、ここで攻撃を中断するわけにはいかない。珠冬はもつと熱く、酷い光線の中を耐えたんだ。このくらいどうつてことない筈だと言いつ聞かせながら、マガツオロチとの距離を詰めていく。

「ウウウウウ……オオオオオオオオオ……!」

掠っていた腕に炎が宿る。全身を命一杯回転させて勢いをつけてから、その剛腕を突きつける。

「ダアアアアアアア!!」

くく

オーブとマガツオロチの戦いを見守るA q o u r s。互角……いや未だマガツオロチの方が優勢と見える戦い。オーブは地面を転がりながらも、何度も起き上がり目の前の厄災へ果敢に挑んでいく。

「……」

視線の先にいる巨人の勝利を祈るように、曜は手を組んだ。

「……僕は……どうすれば……」

その横で、未だ答えを出せずに苦しむアオボシ。先程一真が言ったこと。それは答えになのかもしれない。しかしそれでも彼は迷ってしまう。

(僕が今更……彼と共になんて……)

「もう、決まってるんじゃないの?」

背後から声を掛けられる。ゆっくりと振り返った先にいたのは千歌だ。彼女はアオボシの隣に立ち、さらに語り掛ける。

「今からでも遅くはないんじゃない?」

「ハッ……どうだか……。それに、僕なんかが上手くやれるかどうか……」

今更何をしても……という諦めと、僕なんかが……という自虐。そしてこの事態を引き起こしたという強い罪悪感。それが彼の決断を鈍らせていた。

「やれるかどうかじゃないよ」

「……は?」

間の抜けた声で返す。すると千歌は、まっすぐな瞳でアオボシにこう言った。

「やれるかどうかじゃない。やりたいかどうかだよ」

途端、胸の奥からせり上がってくる熱い何か。そうだ。今は“やれるかどうか”なんていう不安に振り回されている場合じゃない。それに……仮にここが最期なのだとしたら、やりたいことをやった方がいいに決まっている。

「それもそうだね。感謝するよ……千歌ちゃん」

そう言つて彼は歩き出す。その表情には最早迷いはない。だが歩き出した方向は戦

場とは全くの逆方向。

「やる気も出てきたし、オマケもつけちゃおう」

すると彼はいつものような気持ちの悪い笑顔ではなく、真剣な面持ちで花丸に語り掛けた。

「——命の樹の種、持ってるでしょ？」

くく

「銀河の光が……我を呼ぶ！」

オーブカリバーを精一杯の力を込めて振り下ろしたオーブオリジン。しかし……いや、やはりというべきか……。マガツオロチの体に刃が入り込むことはない。

ならば外側の厚い肉を削るのが先か。カリバーのホイール部分を高速回転させ、丸鋸の様に押し当てる。けれど悠長に削っている暇もない。そうしている間にも7つの首が食い殺そうと牙を突き立ててくるのだから。

『無駄ナコトヲ』

「無駄かどうかなんて、お前が……いや、お前如きが決めることじゃない」

数刻前、似たようなことを言った少女がいたなど、オロチは思い出す。

ああ、虫唾が走る。お前如きだと？ 違う。ワタシだからこそ言えるのだ。すべてを喰らいつくす厄災となったこのワタシだからこそ、そのようなちっほけな行動が無駄だと言いつけるんだ。弱者は大人しく、喰われるのを……死ぬのを待てばいいのだ。

『……ハ、ハハハ。ハハハ、ハハハハハハハ！ 言ツテクレルナ。ナラバ何度デモ言ツテヤル!! 貴様ハ惨メニ負ケル。ソシテソノ後デ貴様ノ大切ナモノモ、コノ宇宙モ……全テ、全テ！ 喰ライ尽クシテヤロウ!!!』

8つの首全てが轟く。目や口から不気味な光が迸り、空気を揺らす。

「できねえよ。敬意もなく、その力をあたかも自分の様に扱うだけのお前には!!」

『消工失セロ!!』

様々な光がオーブに向かって放たれ

た。———そうになった時、紫色の軌跡を描いた一閃がマガツオロチを斬り飛ばした。

正体はすぐに分かった。

体色はほぼ黒一色と言つてもよい。だが所々にある銀色が、彼の中に残つていた光を彷彿とさせる。額のランプや両目、そして胸に光るカラータイマーは常に赤で煌めいている。姿はオーブオリジンそのもの。しかし今この瞬間、彼は模造ではなく、ただ一人の戦士としてこの地に立っていた。

そしてマガツオロチを斬つた右腕に持つ聖剣が一瞬、金色に輝いたような気がした。自分は光であろうと選択した男、オーブ^アシャド^オウ^ホだ。

「……」

オーブシャドウは振り返りもせず、ただ無言で手を差し伸べた。それを見たオーブも何も言わずに……手を掴む。

かつて対立した者。光と闇に別れた2人。同じ惑星の生き残り。あらゆる因縁を超え、今この瞬間……2体の巨人が並び立ったのだった。

『マタ助ツ人カ……幾ラ手ガ増エタトコロデ……!!』

マガツオロチは叫びながら突進。マガ迅雷、マガ火球、マガ光弾、マガ穿孔、マガタ

ノ迅雷、尻尾の破壊光線……。あらゆる攻撃手段を放ちながら突進する。
「ンン………！」

オーブが咄嗟にカリバーで防ぎ、その後ろからオーブシャドウが跳躍。上空からの一太刀に、マガツオロチはその足と攻撃を止めてしまう。しかしそれもほんの一瞬。オーブシャドウを焼け焦げにしようと雷を降らす。

「させるかああああ!!」

カリバーを大きく回すことによつて雷を弾き飛ばしていくオーブ。

「よくやったー！」

「言つてる場合かよー！」

黒い稲妻の如く。再度肉薄したシャドウの蹴りがマガツオロチを後退させる。

「シリウス、飛ぶぞー！」

「あ、ああー！」

指示に従い飛翔。オロチの攻撃を回避しながら2体は空へ上がる。だが止まつていない暇はない。常に避け続けなければ撃ち落とされて地面に真つ逆さまだ。

「息を合わせるぞー！ 僕は水、お前は火の技を!!」

「ああ………そういう事ねー！」

オーブシャドウは水のエレメントを。オーブは火のエレメントの力を解放させる。

方や青く。方や赤く刀身が光る。

「行くぞ！ オープフレイムカリバー!!」

「シャドウウオーターカリバー！」

即席だというのに、2人の息は見事に合う。そしてはるか下のマガツオロチに向かい、叫びと共に引き絞った腕と聖剣を突き出す。

「オープ……ハイブリッドカリバアアアアアアアアアア!!!」

火と水……。決して交わることのない属性を組み合わせ、理屈の通ることのない……何倍もの破壊力へと変換する大技。1人では絶対に出来ることのない技だ。

螺旋を描いた光束はオロチの7つある首……その1つに直撃。すると大爆発と共に首元から弾け飛んで行った。

「やつと一つ……つてところか……」

「ああ。けどもう少し待てば、今よりも少しは楽になるよ」

首が吹き飛んだことに悶絶するマガツオロチを見下ろしながら、シャドウは答える。だが楽とは……一体どのような意味なのだろうか。

「それ、どういう……」

の意識が揺らぎ始める。肉体が意識を離れ、独立して動こうとしている。「食べたい」という本能に従って動こうとしている。これはそう……」マガタノオロチの意識だ。

(何故だ。ヤツノ意識ハクグツデ……)

クグツで自我を奪ったはず。さらにこうやって、肉体に己の意識も刻み付けて完全に制御していたではないか。なのに……どうしていきなり……。

背後を振り返る。するとマガタノオロチが這い出てきた龍脈から青い光がこちらへ伸びてきていたのだ。

(何ダコレハ……)

マガツオロチは周辺を食い荒らすと共に、龍脈からのエネルギー、そしてクグツを吸収し続けていた。ヤツは知らず知らずのうちに、この青い光も吸収してしまったようだ。おそらく……これが原因だろう。

(ヤメロヤメロ……コノ体ハワタシノ……ワタシノモノダゾ！ 今更マガタノオロチ如キニ渡スナド……ウ、アアアアアアアアアア!!)

「これで……いんだよね？」

マガタノオロチが生まれた場所に立つ千歌たちは、そこから伸びる青い光に照らされていた。

「これでいいずら。命の樹の種が、クグツを浄化してくれる」

花丸は迷いなく言い切った。それははるか以前から予言されていたことであり、太平風土記に書かれていたことだったから。

ことはつい先ほど。アオボシに言われた言葉だった。

「命の樹の種……？」

「ああ。持つてるんでしょ？ 結構でかい種を」

彼の言葉で察した花丸は、バッグから木箱を取り出して中身を見せる。アオボシは頷き花丸に……否、ここにいるAqours全員に聞こえるように話を始める。

「いいかい。あの獣、そして地脈に流れるクグツを浄化できるのは君の持っている命の

樹の種……それだけだ。嘘だと思ふなら、太平風土記を読んでみるといい」

信じていないわけではなかった。しかし確固たる確証が欲しかったため、花丸は謂われた通り件の書物を広げる。

「どう……？」

花丸は必死に字の列を追う。そこにはクグツを浄化する際に必要となる唯一の存在のことも書かれていた。しかし「命の樹の種」に似た記述は見当たらない。

「名前まで知らなかったってことか……。けど、僕の見立てではその種が唯一の鍵だ。今迄散々なことを言ってきたけど、これだけは信じてくれ……頼む」

頭を下げる彼に若干の戸惑いを見せたが……

「わかったわ。で、これをどうすればいいの？」

鞠莉は了承するのだった。

「鞠莉、いいの？」

「ええ。どの道方法がこれしかないのなら……賭けるしかないよ！」

彼女の一言に、全員の意見が纏まる。それを見た彼はその種をどうするのか……概要を伝え始めた。

「おそらくオロチは、まだ地脈からエネルギーを吸い取ってる。クグツも一緒にね。だからアイツの生まれた場所に、その種を打ち込むんだ。そうすればクグツは浄化され

る。それで支配されているマガタノオロチも目覚める」

「でもそれって危険じゃ……」

「ああ。でもその危険こそがチャンスなんだ。同化したクイーンベゼルブの意思を、マガタノオロチは消し去ろうとするだろう。そうすれば隙が生まれ、僕とシリウスが追い打ちをかけられる」

「——つてことを伝えたんだ。フツ、みんな上手くやつてくれたみたいだね」

隣にいるオーブへ訳を話す。

「そういうことか……」

あの怪物の出現は予期されたものだった。しかしそれと同じようにカウンターとして、対抗手段の一つとして……あの種を長い間保管していたのだろう。いつしか現れる厄災と戦うために。

「これでさつきよりは大分楽になるはずだよ。マガタノオロチとアルファルドの意思が拮抗して、攻撃どころじゃなくなるからね」

目先で体を震わすマガツオロチ。攻め込むなら今だと、シャドウはオーブを一瞥す

「ンン……ッ！」

「フッ……！」

立て続けに全体重を乗せた2体が斬りかかる。その勢いは落雷を消し飛ばし、醜悪な頭部を断つ。

あと4つ。

（クツ……!? ワタシヲ愚弄スルノモ大概ニ……!）

レーザーが巨人たちを穿とうと迫る。だが難なく避けた両者。そして側面に立ったオーブの刀身から繰り出される水流。それは首を締めあげて拘束。その横からシャドウの一字斬り。

あと3つ。

（フウウウウウザケルナアアアアアアアアア!!）

竜巻が解き放たれる。瓦礫を巻き込み勢いを増す。

「煩い鳴き声だ」

シャドウから放たれる深緑の暴風。ぶつかり合った両者は掻き消え、衝撃となつて周囲に拡散する。

「ダアアアア……！」

だがオーブシャドウは止まらない。その衝撃の中を突っ切り、未だ動けない首へ狙い

今だ。倒れて未だ呻くあの2体へ、光線を放てばすべてが終わる。待て……そうだ、あれらを食べればいい。そうすれば斬り落とされた首も再生するだろう。抑えているマガタノオロチの事は……いや、それも後回しだ。今は食えることだけを……。

そう結論を出し、口を大きく開いたマガツオロチは一步一步を進める。

(オ前タチヲ……喰ラツテ……)

だが、マガツオロチの足が止まった。そして数歩下がり始めたのだ。

(……ッ!? ウ、オオオオ……オオオオアアアアアアア!!)

悲鳴に似た咆哮。ある一点が痛みだし、体中を駆け抜けているからだ。すると肉体の一部……正確には顎の下あたりから体液が噴き出てきた。

突如苦しみだし、体液を垂れ流す様は戦いを見守るA q o u r sどころか、ウルトラマン達も困惑の表情を表していた。

「どうした……?」

「……!? シリウス、顎の下を見てみる!」

指摘された部分に視線を集中させる。

顎の下は赤く光っており、さらには攻撃を受けたかのように炭化していたのだ。

「……! まさかあれは……」

(オオオオオオ……何ダト言ウノダ……)

ここにいる者が知らない出来事が一つある。

マガオロチが地底に命を託した時、ヤツとはあるものを下敷きにしていたのだった。それは御神木だ。その部分のみエネルギーの照射が阻害され、結果一部が不完全なままで生まれたのだった。

太平風土記にも“大蛇の邪気を阻む鬼門となる”と書かれている。それがこの御神木の存在と働きを予知していたものだったのだ。

だがそれだけではない。その不完全な箇所を攻撃を与えた者のお陰でもある。オーブと共に戦った少女……合体魔王獣だ。攻撃を与えた直後は効いてないと思われていたようだが、その攻撃は肉体をジリジリと焼き、弱点ともいえる場所を露出させたのだった。

「ありがとう……またお前に助けられた……」

察したオーブは小さく呟き、気合を入れて立ち上がる。彼女の作った勝利への一歩だ。決して無駄にするわけにはいかない。

(オオオ……ガアアアアア!!)

痛み、そして怒り……それらをぶつけるようにマガタノ迅雷を放つ。だがその程度の攻撃は既に見切られている。前方宙返りで回避した2体は同時に踏み込む。両者の全力で放った拳は弱点を抉った。

声を張り上げる。

「やれ！ 暁一真……ウルトラマンオーブ!!」

途方もない激痛が走り、声を上げることだって苦しい筈なのに……。それでも彼が声を上げたのは――

「……………ああ！」

彼の決死の言葉で、遂にオーブは覚悟を決めた。

ここに生まれ落ちた獣はどれよりも強く、どれよりも残虐だった。

2体の巨人による足止め

邪気を阻んだ御神木。

クグツを解毒するための命の樹の種。

そして1人の少女によって開いた……オロチの急所。

ここに至るまで多くの力を尽くして来た。

「諸先輩方……」

思えばこれまでの戦いは、いつも多くの存在に助けられてきた。地球人にも、ウルトラマンにも……。それは何十万、何百万、何千万という確率の1。偶然の出会いだった。「光の力……」

しかしその偶然は今、この瞬間……必然となったのだ。マガツオロチを倒す為のありつたけとして。この星の未来を繋ぎたいとする、みんなの祈りとして。

「お借りします!!」

己が持つ全てのカードをオーブリングへ読み込ませる。

その全てを取り込んだオーブリングはこれまでに見た事のない白銀の輝きを生み出し、両端の羽根が展開すれば……その光が体全体を包み込む。

《ウルトラオーバースラッピング》

七色の光が拡散する。その中心に立つのは、新たな形態となったオーブ。だがその姿は、これまでのフュージョンアップやトリニティーフュージョンといった系列ではない、まったく異なる姿だった。

光そのものになってしまったのかという程に、体全体は常に光り輝いている。額のランプ、オロチを見据える双眸や両手足のクリスタル。そして青く輝くカラータイマー。それだけかハッキリと見えているだけ。

(ナ、ナンダトイウノダ……)

彼から発されているのは破壊を司る禍々しい輝きではない。この星を……この星に生きる存在を守るような……温かな輝きだった。それはまるで……天から降り注ぐ――

《ウルトラマンオーブ スプリームサンシャイン》

輝きの巨人は剣を振るう。オーブカリバーとオーブスラッシュャー……その2つを掛け合わせたかのような白銀に煌めく聖剣を。

「俺は……俺たちは……闇を照らして、輝きを掴む！」

前方から自分を飲み込もうと雷が、尾から放たれた死の閃光が殺到する。

「……！」

だが逃げることなくオーブは閃光を……その先にいる怪物を見つめる。

剣を持った右腕を引き絞る。長い刀身を左腕で支え狙いを定める。

狙うは一点。大きく抉れた顎下。そこに自分の持てる全てを放つ。

「オーブ——」

刃が爛々と燃える。

多くの存在に背中を押され、彼は至高の光芒を撃ち放つ。

「——サンシャインカリバアアアアアア!!」

さらに聖剣を構成する材質までもエネルギーとし、腕を十字に組んで威力を底上げした2撃目を放射した。

「……じゃあね」

闇の光を飲み込んでいく眩い光柱。彼の……いや、彼らの想いを乗せて走る輝きはマ

ガツオ口チを飲み込む。

(ウアアアアアアアアアアアア……アアアアアアアアアア——!!!)

光に飲み込まれたマガツオ口チ……否、アルファルドは肉体が消失していく感覚の中で悟った。

己の死を。

途端、心臓が縮み内臓がもみくちゃにされるような感覚が走る。勿論、既に体内器官が残っているのかどうかなどわからないが。

息が上がリ、全身の穴が開いていく。他の人から見れば、今の彼は想像もできないような顔なのだろう。蒼白で汗がだらだらと垂れた……。

これまで自分が与えてきた感情だ。自分の欲求を満たすために、ただただ殺めてきた多くの生物が抱いてきたであろう感情だ。

(あ、ああああ……！ 嫌だ……ワタシはまだ……死にたくない……!!)

どれほどの存在がそれを願ったのだろうか。どれほどの存在がそう願ひ、無慈悲にも叩き潰されたのだろうか。

(やめてくれ……ワタシはあああああつあああつあああ——!!!)

悲鳴を上げる。しかし崩壊は止まらない。手を伸ばそうにも、既に体の半分以上が消えている。死が近づく。他の者と同じように、彼の願ひもまた……同じように叩き潰さ

千歌たちはオーブの消えたところまで一目散で走っていく。あれだけの戦いをこなしたのだ。瓦礫に座り込んで動けなくなっているかもしれない。それに何より……早く勝利を祝ってやりたい。

「……………」

足を止める。そこにいた一眞は座り込んでいる訳でも、ましてや倒れているわけでもなかった。

「……………」

一眞は瓦礫の上に立ち、天を仰いでいる。体は見るからにポロポロ。額からの出血で右目は開けないようだし、布切れのようになった制服の下からは、数多くの傷が見え隠れしている。右腕なんか血で真っ赤だ。

でも……一眞は気持ちよさそうに風を感じていた。痛みよりも何よりも……今は勝てたことが、未来を掴めたことが……ととてもなくうれしいのだろう。

「あ……………」

A q u o u r s に気付いた一眞は、いつものように笑顔を作ってこう言った。

「……………」
帰ろう

多くの声が響く。金色にも似た夕日に照らされた空は、1つの戦いが終了したことを祝福しているかのようだった。

第76話 終幕の歌声

バスに揺られる中、一眞は窓の外を見る。よく晴れた空。太陽の光に反射する海。毎度毎度見ていた景色だ。窓から淡島や富士山を見るのは……今日で最後。そう思うとやはりくるものがある。

「……」

何かを考える訳でもなく、ただぼーっと移り変わっていく景色を目で追う。すると隣に座る梨子や千歌から声を掛けられた。あまりに反応がなさすぎて乗り過ごしてしまおうとも思っただろう。

「ちよつと一眞くん！」

「そろそろ学校着くよ？」

「あ、ああ悪い。ありがとな」

そんなこんなで最寄りのバス停に到着する。外に出るとあたたかな太陽の光に身を照らされ、潮の匂いが鼻孔をくすぐる。さらにちよつと冷たい風が頬を撫でる。そして咲き誇る桜の存在が、4月からずいぶん遠くに来たことを意識させてくれた。

「おはヨーソロー！」

「ヨーソロー!!」

「うっす」

「え、そこはカズくんもやるトコでしょ！」

「ええ!!? じゃ、じゃあ……おはヨーソロー……」

校門前には既に大勢の人々が集まっていた。生徒は勿論のこと、卒業生や保護者たち。そんな賑やかな様子には文化祭や説明会ではなく、入学式を思い出させる。

「気合入ってるね！」

「そりゃあ最後だもん！」

曜の制服はまるで新品のように整っていた。今日この日のためにアイロンがけ等を張り切ってやってきたのだろう。

「まあ、俺らもそうだけだな」

いつも着ていた制服なのに整っていることもあるのか、雑には扱えないなど一眞は笑う。

「一眞さ〜ん！ 今日でお別れだよ〜!!」

するといきなり抱き着てくる男子生徒が1人。1年生の早見だ。以前、閉校祭の時に準備を手伝わされたとある部の一員だ。

「いやそれはお前らと夢野先輩だろ。俺に抱き着く前に行くべきところがあるんじゃないの……?」

「そうですけど〜」

面倒だと一眞の顔が歪む。しかしそれでも邪険に扱わないところに、彼の優しさが滲み出ている。

「松戸、頼むよ……」

「僕も寂しいよ〜」

「えええええ!!?!」

早見と同じ部に所属する2年の松戸も、涙を流しながら一眞に寄って行く。

いや待て……この2人とそんな仲だったかと、思考を巡らす一眞。そんな彼を見ていた千歌たちは笑みを浮かべながら「じゃあ、わたしたち先に行ってるから」とその場を後にする。

「え、ちよつと?! ちよつと待ってええ……?!」

「一眞さんだけずるいつすよ〜」

「そうだよ。僕たちを差し置いて〜」

「お前らとはそんな仲じゃないだろ!!」

青空の下、声が響く。そこにある心情は人の数だけ異なっている。緊張していたり、誇らしかったり、悲しかったり寂しかったり……。

一真はそんな独特の雰囲気嫌いではなかったが、かといって好んでいる……という訳でもなかった。だってこれまで当たり前のように顔を合わせていた先輩たちとも、今日をもつてお別れなのだから。

それに……浦の星はちよつと事情が違う。

今日は卒業式。ならばに浦の星の閉校式……。この学校で過ごす最後の時間が始まった。

「(ト)(ト)……こんなに広がったんだ」

部室の中心に置いた椅子に座り、千歌は呟く。心なしか、彼女の声も以前より響いている気がする。

「いろいろな物を持ち込んでたから」

「ちゃん片付ければ……つてか？」

「うん、ここでもつと練習できたかもしれない」

何も残っていない部室の広さを改めて感じる4人。最初だつて物置小屋同然で、足の踏み場がなかったことを思い出す。掃除して使えるようになった後も、思い思いのものを置いたりなんだりで随分と賑やかになつていた。

すると部室に入つてくる者が1人。果南だ。彼女は何も言わず、ただホワイトボードを撫でる。これまで色んなことを書いてきたホワイトボードも今は真つ白だ。以前のよくな消えかけの文字もない。

「全部、無くなつたな……」

一眞は目を伏せながら言った。ここにあつたものは綺麗さっぱり無くなる……なんて知つてはいるが、でもやっぱ形が残らないというのは……やっぱ寂しいものだから。

「そんなことない。ずっと残つていく……これからも」

「……うん」

形としては何一つ残らないとしても、みんなの胸の内には必ず残つていくものだ。決して消えることのない思い出として、いつまでも輝き続けるもの。そう彼女は言つてい

るのだ。

く

多くの人に見守られた中、卒業式がついに始まった。しかし参加する生徒はペンキで汚れていた。実は式が始まる少し前、全校生徒で校舎に寄せ書きをしたのだ。学校に対する気持ちをここで残しておこうと、鞠莉が提案したのだった。

そして卒業証書の授与も終わり、残るのは代表として登壇したダイヤのスピーチ。

「今日この日、浦の星学院はその長い歴史に幕を閉じることになりました」

そう語るダイヤの表情は悲しみに包まれたものではなく、実に晴れやかなものだった。

「でも、わたくし達の心にこの学校の景色はずっと残っていきます。それを胸に新たな道を歩めることを、この学校の生徒であったことを……誇りに思います。皆さんもどうかそのことを忘れないでください」

もう来ることはなく、ここでお別れだ。しかし記憶にだけはずっと残っていく。それ

を知っているから彼女はこうも誇らしく、胸を張っているのだろう。そしてその思いを胸に未来へと歩き出していく。

変わらないものを、その想いを胸に歩き出すのは3年生だけではない。ここにいる人々が、生徒が……そして一真だって。

「ただ今をもって、浦の星学院を……閉校します」

閉校しても、すべてが消える訳じゃない。

A q o u r s が刻んだのだ。これからも紡がれていくであろうラブライブという大会の歴史に。この学校が確かに存在したという証を。

「そろそろ時間ですわよ」

「まだ誰も帰ろうとしてない」

最後の行事が終了したのだが、ルビイの言う通り誰一人帰ろうとしなかった。学校を出たら最後、本当に終わってしまうから……。

「ほっといたら、明日でも明後日でも残っていそう」

「完全に籠城すら」

だからその時をどうにかして伸ばそうとしてしまっているのかもしれない。

「そうしたら、まだ学校を続けてもいいって言われるかも」

「そんなことになったら、みんなびつくりだよ」

「だね」

そしたら奇跡が起こって……なんて考えてもしまっけけれど、そんなことはない。悲しくはあるが、もう決まってしまったことだから。

「ちゃんと終わらせよう。みんなでそう決めたんだから」

だからこそ想い残しのないように、校舎中を見て回って……自分たちの手で扉を閉めていく。

一真も見ていく途中であらゆる思い出が蘇ってきた。扉を閉める瞬間、名残惜しくなってしまう場面がいくつもあつたけれど、そう感じているのだから自分だけではないだろう。

「最後は……か……」

感謝を伝えながら扉を閉めていき、最終的にたどり着いたのはスクールアイドル部の部室。

ここがあつたからみんなで頑張つてこられた。
ここがあつたから前を向けた。

毎日の練習も、衣装づくりも、そして腰が痛くても。難しいダンスだつてそうだ。
不安や緊張だつて全部受け止めてくれた。

それも全部、全部が全部……帰つてこられる場がここにあつたからだ。

ここでの想いを語つて次々去つていく。そして残るは千歌一人。

「ありがとう」

スクールアイドル部のプレート千歌が外した瞬間、この部室もその役目を終える
そして全員が校舎から出る頃には、空はすっかりオレンジ色に染まっていた。

A q o u r s だけじゃない。多くの生徒も、保護者の人達も、みんな校舎を見上げて
いる。最後の別れを告げるためにだ。

「千歌ちゃん」

校門を動かしていくのはA q o u r s。誰よりも奔走し、誰よりも足掻き、そして誰
よりも涙を流した彼女たちがその門を閉めるのだ。

「……千歌」

千歌も突き動かされるように門を動かす。それでも、受け入れていても、自身の……

否、みんなの込み上げてくる想いはやはり——

「浦の星の思い出は……笑顔の思い出にするんだ。……泣くもんか……泣いてたまるか！」

そうは言ってもとめどなく溢れてくる涙。止めようとしてもそう簡単にできることじゃない。

肩を寄せ合い震わす姿を前にするが、一眞はただ見守るだけ。あの門は彼女たちが閉めるべきだ。自分の役割ではないし、そんな責任が務まるとも思えない。学校を愛した彼女たちだからこそ相応しいのだ。

門の閉まる音がする。それと同時に学校を照らした日輪も沈んでいく。この瞬間もって、浦の星はその長い長い歴史に幕を閉じたのだった。

くく

「よっ。また来たよ」

一眞が来たのはとある墓だ。それはあの兄妹のものだ。せめて形だけでもと鞠莉が

手配してくれたのだ。

既に何度か来ている一眞は手を合わせ、いつものように話しかける。

「梨子がさ、犬を飼い始めたんだ。名前は……プレリユー……ド……だったけかな。あいつ、犬苦手だったのにな」

小さくとも新しい変化が始まっているということだ。これまでの出来事を通じ、みんなの中で変わっていったものがあるのだと……そう思える。

「しいたげなんてさ、子ども生んだんだぜ？ あそこもまた賑やかになっていくと思う」
彼がこの話をしている時には既に鞠莉もダイヤも果南も、それぞれの道へ向かい進みだしていた。ここに……内浦にはもういないのだ。

「俺もさ、いろいろ考えなきゃいけないんだよな」

そう。一眞はウルトラマンと一体化した人物ではなく、ウルトラマンオーブそのものになっている。その力をどう活かすか、どう活かせるか……まだわからないことばかりだ。

「まあ、ゆつくり考えていこうと思ってる。もし決まったら報告に来るわ」

笑顔を向け、一眞は墓を後にする。

ここまで決して楽な道ではなかったし、後悔だったたくさんある。でも……ここまで走り続けてきたことは決して間違いではなかった。

多くの出会いに助けられたこと。そして自分に託されたものがあること。それらが自分を……暁一眞を創ってくれたことを知っているから、間違いじゃなかったと断言でききる。

「もしもし? え、俺も!? わかったちよつと待つてて……!!」

電話を切り、走りだしていく一眞を見守る影が1つ。彼は黒い衣服を身に纏い、いつものように笑みを浮かべる。だがそれは敵としてではなく、以前のように仲間として歩んでいくような微笑みだった。

青い空の下、歌が聞こえる。

これまで辿ってきた軌跡を振り返るような……そんな歌が。

みんなの中に眠っていたものであり、ずっと前からあったものを示す歌。過ごしてきた、歩んできた時間が“輝き”だったことを、それが彼女たちの探していた“輝き”だったのだと……そう示す歌が。

STAGE FINAL 虹を越えて

第I章 —これまでの道、これからの道—

光の巨人ウルトラマンオーブが融合大魔王獣マガツオロチを倒してから数週間が経過した。

その間に、世界の仕組みが少しだけ変化した。ただ守られているだけではないけないと、人類は立ち上がったのだ。己の力だけで守れるように。

今迄は案としてまことしやかに囁かれるだけだったが、遂に法改正によって組織された防衛部隊。Versatile Tactical Leader……通称ビートル隊。また現れるであろう怪獣の脅威に備えるとともに、宇宙人犯罪も取り締まれる国連軍ともいえる組織だ。

そんなビートル隊に出撃要請が出たのはとある夜だった。

場所は東京郊外。黒いオーラののような邪悪な光が地に落ちたかと思うと、その光は怪獣の形を成したのだった。

——1体は胸元から両足かけて赤い筋が浮き出ている体に、頭から首元を覆う鎧のような頭部が特徴的。その重く力強い巨体が街を震わす。

——闇夜にも映える青い体に生えるのは凶悪な双頭。金色の瞳が睨みをきかせ、同時に咆哮を上げる。

——両肩、そして両腕から伸びた刃が月光を反射する。その姿はまさに剣ツルギの化身。

チヨウコダイカイジユウ
超古代怪獣 ゴルザ（強化）

ウチユウザンテツカイジユウ
宇宙斬鉄怪獣 デイノゾールリバーズ

ヨウテツカイジユウ
熔鉄怪獣 ツルギデマーガ

3体の怪獣は自由に、それでいて狂暴に街を踏み潰していく。さらに所々で発生する爆発と上がる炎で、夜の街が昼間の様に明るくなる。

あれから数週間しかたっていないとなっても、再び緩み始めていた人々の心は再度恐怖の鎖に縛られる。あちこちで上がる悲鳴。しかし弱き人類の悲鳴など、怪獣の鳴き

声でかき消されてしまう。

しばらくすると、夜空を駆ける光が到着する。それはいくつもの群体。徐々に街や怪獣たちに近付くにつれ、その形が露わになる。戦闘機だ。

青と銀に塗装された機体は、これまで運用されてきた戦闘機とは全く異なる形状だった。

ゼットビートル……。ビートル隊が用いる多用途VTOL機だ。

なぜ設立されて数日しかたっていないのに、大量のゼットビートルが飛翔しているのか。それはビートル隊が設立される何ヶ月も前に、既に量産体制が整っていたからだ。本来は戦闘とは異なる運用コンセプトだったが、隊の設立にあたって武装などを施したのだった。

『全機、攻撃開始ー!!』

リーダー機と思われる機体から号令がかかる。すると即座に3機ずつ分かれて怪獣たちを攻撃する。

「■■■■ー!!」

「■■、■■■■ウウウウツ！」

「■■■■ツツ」

3体の怪獣は攻撃のターゲットを変更する。まずは蠅のように飛び回るビートルを

墜とす気らしい。

ゴルザの額から超高熱熱戦を放つ。ツルギデマーガも口から赤色の熔鉄光線を飛ばす。デインゾールリバースは口から「何か」を振るった。

誰にも視認できなかったそれはビートルの主翼を切断。コントローロールを失った一機は墜落を始める。

「うああああああ……!!!」

ビートルが墜ちる直前、目の前に光柱が立ち昇る。

墜落する機体のパイロットは謎の浮遊感に包まれながら、閃光で閉じていた瞼を上げる。見えたのは紫色の体に、青く輝く水晶。さらに視線を上にあげると、自分を見下ろす白い双眸と目が合う。

これまで戦ってきた戦士……ウルトラマンオーブが救ってくれたのだ。

「……あ、ありがとう」

「……」

隊員に頷くと、オーブはビートルを地面に下した。そして自分に視線を向ける怪獣へ向かって構える。

怪獣たちの轟く咆哮が、戦いの開始を告げるゴングだ。

「ハアッー」

地面を蹴ったオーブが真つ先に攻撃したのはゴルザ（強化）。頭部に手刀を打ち、わき腹にも打ち込んでいく。しかしその肉体にはあまりダメージが通つてない模様。ゴルザの怪力がオーブを襲う。

「オアアア……ッ!?!」

吹き飛ばされたオーブはスペリオンスラッシュで牽制。横から攻め込んでくるツルギデマーガに対処する。振るわれる刃を躲し、頭部に手刀。怯んだ隙にアッパーカットでダウンさせる。

「……ッ!」

後ろから迫る何かの気配。ゾクリと背筋が反応し、オーブは前転で回避。すると地面とその先にあるビルがが真つ二つに切り裂かれる。

放たれた方向に視線を向けると、佇んでいるのはディノゾールリバーズ。

「また厄介なものを……!」

左右の口を開き、鞭のように舌を振るう。これは“断層スクープテイザー”と呼ばれるもので、とても細く、視認することはほぼ不可能な代物だ。

空気を斬る嫌な音が世界に響く。何とか避けているオーブだが、これでは罫が明かない。

「ッ!」

光の輪、スペリオン光輪を投擲。当然舌で壊されてしまうが想定内。デコイとして己が近付く時間を稼げればそれでいい。

「ダアアアアッ！」

空からの奇襲。体重も乗せた一撃が響く。

食い千切ろうと迫る頭部を見据え、1つを掴み、もう1つを裏拳で弾く。

「……………りりなんだよ。別々に動く頭つてのは！」

掴んだ頭部も殴り飛ばし、抵抗できない肉体目掛けて蹴りを打ち込む。

「っし。……………つと!？」

トドメに入ろうかとしたが、側面からの熱戦で中断。さらに間髪入れず攻め込んできたゴルザの力に耐えきれず、オーブはビルを巻き込み倒れ込んでしまう。

「やってくれる……………！」

口元を拭う様にしながら立ち上がったオーブ。彼は強く踏み込み、紫の光を纏って突進。

一瞬でゴルザの懐に潜り込み、今度は赤い光を纏って胸元を殴りまくる。

「ダアアア……………アアアアアアア……………!!」

最後の左ストレートが胸元に大きな傷を作る。吹き飛んでいったゴルザは痛みに悲鳴を上げながら熱戦を撃つてくる。

がしかし、オーブはスペリオン光輪を盾の様に扱い熱戦を防ぐ。そして右腕を垂直に、左腕を平行に伸ばす。

「スペリオン光線ッ！」

十字に組んだ腕から放たれる光線はゴルザの胸元に命中。傷で脆くなった肉体を穿ち、ゴルザ（強化）は爆散した。

「あとはお前らか……。んじゃあ、この力で……！」

ウルトラマンメビウス

ウルトラマンギンガ

フュージョンアップ

ウルトラマンオーブ　メビウムエスペシャリー

む。

「……ツッ！」

回転斬りが肉体を大きく引き裂く。

トドメに入るオーブの周りに剣が舞う。1本をその手に取り頭上に掲げると、他の4本と共に超巨大な光の刃を形成する。

オーブは叫びと共に、その長剣を振り下ろす。

「メビュースペシャリーブレードッ！」

縦に真つ二つに斬られたデインゾールリバーズは断末魔を上げることなく爆発した。

最後に残るはツルギデマーガ。オーブが振り返れば、カラータイマーから光が溢れ出る。

ウルトラマンギンガ

ウルトラマンエックス

フュージョンアツプ

ウルトラマンオーブ ライトニングアタッカー

「電光雷轟、闇を撃つ！」

メカニカルな印象を与えながらもどこか神秘的な雰囲気を感じているのは、顔や両肩、両腕、両脚に光るクリスタルのお陰だろう。

ツルギデマーガの放った熔鉄熱戦を腕で難なく弾き飛ばしながら、突き進んでいくオーブ。同じように突っ込んでくるヤツの頭を掴み、青と黄の稲妻が宿った腕で殴り飛ばす。そしてガラ空きになった胴体へ繰り出す殴打と蹴り。迫る刃をその硬い体で受け止め、両腕から剣を伸ばす。

「ギンガエックスセイバー！」

剣から放たれた衝撃波で苦しめられている隙に、オーブは空へ向かう。

上空で力を貯めた後、解放させるように両手両足を広げる。その形はまさしくX。

「アタッカーギンガエックス!!」

撃ち込まれた攻撃に成す術なく、ツルギデマーガは爆発四散するのだった。

爆発の後に訪れるのは、いつもと変わらない静寂。人々の称賛の声が聞こえる中、オーブは夜空の彼方へと消えていく。

勝利と平和に酔いしれた人々は、戦場となった街から消えていく黒いオーラに気が付くことはない。

3 大怪獣とウルトラマンの激突。それはこれから始まる新たな戦いの……ほんの序章にすぎないのだった。

くく

3年生のいなくなった沼津。そこで千歌は天を仰いでいた。別の場所に旅立った仲間たちを想って。

「行っちゃったね」

背後から声を掛けてきたのは曜。みんなが3年生の旅立ちを見送ったのだ。けれど、誰一人悲しい顔はしていない。

「さあ、わたしたちも戻って練習しようか!」

3年生がいなくても、学校が変わっても……それでもA q o u r sは続けていくと、みんなで決めた答えがあるからだ。

仲良くやり取りしている1年生の声色からも熱意が見えている。そんな様子を見ながら、新たな一步を踏み出すために歩き出そうとしたが、梨子の声であたりを見回すことになった。

「あれ、一真くんは?」

「そう言えばいないね……」

「昨日の夜も大活躍だったみたいだし、またどっかに飛んでいつてるんじゃないの?」

閉校式からも、3年生がいなくなってから両方に既に数週間が経っている。しかし暁一真のやるべきこと……ウルトラマンとして怪獣と戦うということは変わらない。今朝だってオーブと怪獣の戦いの様子がテレビで取り上げられていたなと思いつく。

「飛んで行ってねえよ」

善子の言葉にそう返して現れたのが件の人物、暁一真だった。

現れれば即座に「どこ行ってたのか」とかいろいろ問われたが彼はただ

「知人に会ってただけだよ」

とだけ。気になる所はあるが、個人のプライベートをそんなに詮索するものではないだろうとその答えかからは後は聞かなかった。

「けどまあ、いなくなっただのは悪かったな」

どこか律儀な彼の謝罪を受けた後、練習に向かおうとする千歌たちを止めたのはルビィの上げた声。

「練習……どこでするの?」

「どこでっていつもの……」

「学校は開いてないぞ」

一真の一声に、千歌は思考を止める。そう。浦の星は閉校してしまったためもう入ることはできないのだ。そうなれば屋上だって使うことはできない。

「じゃあ駅前の練習スペースは?」

「あそこはラブライブが終わるまでって約束で……」

どうやら Aqours はそういった星に愛されているのだろう。動き出そうと意気

込んだところに問題が出てくるといふ嫌な星に。

ではどうすべきか、7人は顔を互いの顔を見合わせる。

「鞠莉にでも頼み込む？ 何処かあてはないかって」

彼女に聞けば、いくつか候補を出してくれることだろう。

が

「自分たちで探そう」

千歌はその案に反対のようだ。疑問に思ったであろう全員に答えるべく、彼女は真意を語りながら歩き始める。

「なんかね、ずっと3年生に甘えたままじゃダメな気がするんだ。この7人でスタートなんだもん。わたしたちで何とかしなきゃ」

これから活動するのはここにいる者たち。なのにいつまでも卒業した者に頼っているのはこれまでと同じではないのか？

それが千歌の真意だった。彼女の考えに納得したと微笑む中、なぜか一真だけは視線を下げていた。それがどうも何かに悩んでいる様子。

「……………」

彼の表情が一瞬だけ歪んだのを梨子は見逃さなかった。

「閃いた！」

一方で曜はなにか思いついたらしく、千歌の指名の後にこんな案を出してくれた。

「私たちが春から行く学校を見に行くってのはどうかな？」

その提案を聞き、不安げな顔になるのは1年生組。新しい環境に溶け込めるのかどうか、ちよつと自信がないのかもしれない。

「不安なのはわかる。けど、あらかじめ見ておくってのは大事だ。ほら、ステージを視察するとイメージとか心構えとかできるだろ？ それと同じだよ」

一眞の呼びかけにぎこちなくではあるが首を縦に振つてくれた。

満場一致となった一同はそこからバスに乗り込み、春から通う学校へ出発することとなった。

「一眞くん、何か悩んでるでしょ？」

「えっ!?! ああ……いや……?」

沼津の街中を走るバスの中で、梨子は唐突に訪ねてきた。

あまりに唐突なもので、一眞は冷や汗をかきながらそんなことはないと思魔化してい

る。

「バレバレなんだけど？」

無理だったわけだが。

「……もしかして、みんなに言いづらいことだったりする？」

すると彼女は小声で再度訪ねてきた。彼があまり悩みを打ち明けない人間だというのはこの1年でよくわかった。さらに打ち明けないというのは親しい人間に迷惑を掛けたくないからという理由があることも理解している。

しかしそのままだとこの男は一生話すことはないだろう。だから少しくらいはアタックしてもいいのではと梨子は考えたのだった。

「いや、そういう訳でもないと言いますか……なんと言いますか……ハハハ……ハ……」
笑って有耶無耶にしようとする一眞の企みは、梨子の向ける視線であえなく崩れ去る。

「秘密にしといてあげるから。ね？」

視線を前に映す。曜と千歌は新たな学校の場所を送られてきた概要とマップで調べている。後ろにいる1年生組は……ずっと目を瞑っていた。

まあ、ここまで来て何でもないと言ったら梨子にも悪い。

「はあ……わかったよ。さつき駅前で知人に会ってたって言ったろ？ あれさ半分本当

「だけど、半分は嘘なんだ」

「そうして一眞の記憶は数時間前に巻き戻る。」

「……」

「一眞は一人になりたくて、A q o u r s のみんなから離れた場所で悩み込んでいた。無論……これからのことを。」

「すると彼の肩に誰かの手が置かれる。」

「久しぶりだね。そういえば、昨晚もカッコよかったよ！ 一眞！」

「うええ……お前に一眞って呼ばれるの気分悪い」

「僕なりの気の使い方だったんだが？」

「そう言つてベンチに座り込む一眞へ話しかける人物はアオボシ。どうやらあの光線を受けても尚生き残っていたらしい。嬉しいと言えば嬉しいが、戦いの後に祈りを捧げたのが馬鹿らしくなってくるので非常に複雑だ。」

「そうだ！ 昨日の戦いで最後にお前が見せたアレ、ネットでなんて言われていると思

う？」

「最後に見せた……つてギンガさんとエックスさんの力か……。いや？ なんも知らねえ」

「これ」

にやにやした黒い服の彼は携帯を渡してきた。そこに書いてあったのはライトニングアタッカーがどつからどう見ても“ 退屈から救いに来てくれる戦士” に似ているというものだった。

「……フフツ」

考えてみれば確かに似ている。そう感じた一真は思わず笑みを溢す。

「どうしたんだ。そんな辛気臭い顔してさ。いつものやる気に満ちた顔はどこだい？」

隣に座ったアオボシへ、一真はぼつりぼつりと話始めた。

「俺は……ウルトラマンとして……オロチを倒した。今もたまに怪獣は現れるけど、それでも幾分かは平和になったと思う。でもさ……怪獣や宇宙人たちによって平和を奪われるのは、ここだけじゃないんだよな。俺たちの星のように、未だ苦しんでる場所もあるんだよな……」

「そうだね。この星で起きていることは、他の星でも起きている。何千という星でね」

「だよな……」

一眞は小さく呟いて、天を仰いだ。青空を見据えても、彼の表情は晴れない。

「俺は……やっぱりそっちも救いたい。でも……」

「A q o u r s のことかい？」

一眞は頷く。ウルトラマンとして多くの星を救いたいと思うのと同じくらいに、この星に留まっていたい。その2つの感情に、今の一眞は悩まされているのだった。

「難しい問題だね。でもどっちかを選ばなきゃ、どっちも取りこぼすだけ。いくらお前でも全能じゃないんだから」

「それもわかってるんだがな……」

苦笑いで応じる一眞を一瞥し、アオボシは立ち上がる。この問題を解決することはできないと判断したからだろう。

「……まだ考える時間はたくさんあるんだ。もう少し悩んでもいいんじゃないか。僕は責任持てないけど」

そう言つて彼は歩いて行つてしまった。でも彼の言つた「もう少し悩んでもいい」という言葉を聞けただけで、どこか軽くなつたのだから感謝しなければならぬ。でもいつか出さなきゃいけないんだ。この選択の答えを。

「……つてことなんだよ」

自分の想像を超えた話を展開していた一真に、梨子は言葉を失う。

「そう……だったんだ。でも……ごめん、私にはどうにもできないや」

軽はずみに聞いてしまったことに罪悪感を感じているのか、梨子は目を伏せてしまふ。しかし一真は微笑みながら首を横へ振った。そんなことはない。

「別に梨子が気にすることじゃないよ。でもそれより、やっぱ話してみるもんだな。気が軽くなった。ありがとう」

「そ、そう？　ならよかった……かな」

なんて話しているうちにバスは学校への道を進んでいく。気付けば都市部から住宅街に来ていたようだ。

「てか、まだ着かないのか？」

結構長話をした気がするのだが、目的地には未だ到着していない。

「生徒数考えるとかかなり大きな学校っぽいんだけど……」

一真は窓から外の様子を伺う。しかしそれっぽい建物は確認できなかった。

「あれ、こつちに学校なんてあったかな……」

前方で困り果てている曜の姿を見て一抹の不安が過る。しかし学校から送られてきた資料だ。信頼している筈だろう。

そしてバスを降りた一行が目にしたのは――

「……………」

間の抜けた声が聞こえる。それもその筈。校舎は古く、壁にまで植物が生えている。お世辞にも綺麗とは言えない外見には言葉を失うしかない。

「か、過去すら……………」

「曜、間違ったんじゃないの?」

しかし曜が言うには、学校から送られてきたメールに書かれていた場所がここだというのだ。

「いやいや、嘘だ〜」

「じゃあほら! カズくんも確認してよ!!」

携帯の液晶を見せてきたため、一真も確認する。…………この場所で間違いなかった。

「ほら〜!」

「(ぎょ)ごめんなさい…………マジすんませんでした」

一真が曜に頭を下げており、花丸は善子の頬を引っ張っているという混乱の中、ルビイだけは学校銘板に目を通していた。そこには確かに“静真高等学校”と彫られて

いる。しかしその横にも字が書かれていた。見た感じ新しく書かれたものだろう。それを読み終えた彼女は思わず大声をあげてしまう。

「見て!!」

彼女の指摘に全員が銘板を凝視する。そこには白い文字で小さく浦の星学院と。加えてその下には——“分校”と書かれていた。

7人の驚愕の声の木霊したのは言うまでもないだろう。

第Ⅱ章 — 迫る困難 —

薄暗い空が広がり、寒々しい風景が広がる場所。ここに辿り着く魂を眠らせてあげるためと言っても過言ではないその静寂も、一度戦闘が起きれば呆気なく崩れ去っていく。

「シユアツ！」

2つの影がぶつかり合う。その度に激しい火花を散らし、幾度も爆発を起こしていた。

「チツ……この亡霊魔導士が」

「……」

爆ぜた光を中心にし、2体は睨み合う。

一方は青と赤の体を持ち、頭部に鋭い刃を備えた戦士。一方は青と銀の体に突起の付いた頭部が特徴の人物……戦士が呼ぶには亡霊魔導士らしい。

「ジードが成仏させた時に、そいつも眠むらせたと思ったのよ……。よりにもよってお前えが復元しやがって！」

戦士が指差すのは魔導士の右手。そこには黒い棍棒状のアイテムが握られているの

だ。

「知ったことか。私の野望に必要なものを回収したまで」

淡々と答える宇宙人へ戦士は怒りを燃やす。前所有者の置き土産が宇宙中に散らばり対処に当たっている中で、一区切りした事案を再度掘り起こされれば激昂するのも無理はない。

「てめえの顔なんざ見飽きてんだ。その野望……ここで砕いてやる！」

戦士が仕掛ける。頭部を砕こうと右足を大きく振った。だが魔導士も負けていない。棍棒で攻撃を防ぎ、リーチを生かして戦士を吹き飛ばす。

「……へッ、宇宙も違えば実力も異なるか……」

一度この宇宙に存在した魔導士と対峙している彼はそんなことを呟く。眼前に立つ魔導士は、数多に存在する平行宇宙……パラレルワールドからの訪問者だ。

今闘っている“怪獣墓場”は、怪獣たちの魂が最終的にたどり着き眠る場所である。しかしここは複数の宇宙に跨って存在しており、あらゆる次元の魂が流れ込んでくるのだ。

つまり魔導士も同じくどこかの次元からやってきたのだろう。しかしヤツは死んでからではなく、自らの意思で足を踏み入れたという違いはあるが。

「ここでの目的は達成された。さらばだ」

「行かせるかよ！」

起き上がり再度構えを取る。だが魔導士は素直に相手にする気はサラサラないよう
で……

「時間が惜しい。貴様はこいつらで遊んでいろ」

魔導士は手に持ったアイテム。“ギガバトルナイザー”から怪獣たちを呼び出した
のだ。先程まで殺風景だった場所は、多くの怪獣で埋め尽くされる。

「なっ……既に怪獣たちを蘇らせていたのか……」

「……」

波の様に押し寄せる怪獣たちと戦闘を始める戦士を横目に、魔導士は姿を消す。い
や、元いた次元に帰還したのだろう。

「クソ、待ちやがれ！ ……っ?!」

飛んでくる火の玉や光線の雨を間一髪で避けるが、その視線は消え去っていく魔導士
から外すことはなかった。

「ンの野郎……けどその前にコイツら片さないとな」

いったん距離をとり、うじゃうじゃと群がっている怪獣たちに構えた。

しかしその時、背後から自分の名前を呼ばれた気がして戦士は振り返る。するとそこ
には多くのウルトラ戦士たちが立っていたではないか。その中心にいるのは自分とよ

く似た姿の巨人。

「親父!？」

「ここは我々が引き受ける。お前はヤツを追うんだ」

宇宙ブーメランを頭部につけた赤き戦士、ウルトラセブンはそのように語る。

セブンが語り掛けたとほぼ同時に始まった怪獣とウルトラ戦士たちの戦いは苛烈を極め、怪獣墓場のあちこちで爆発が起こっている。宙を舞う光線の数々が嫌なほどに輝き、戦士の視線へと入ってくる。

「……」

追いたいのには山々だが、ここに蔓延る群れは自分を無視してはくれないだろう……。

瞬時に判断した彼は2枚のブーメランを胸のカラータイマーに装着しようとした。

「その必要はない!」

「ボクたちが道を作る!」

声と共に戦士の両脇を疾走した光で、彼の行動は中断される。

1人は蒼い体を持つ巨人へ、もう1人は赤と銀の巨人へとそれぞれ姿を変える。そして十字に組んだ腕から光線を発射した。

「ヤツはよからぬことを考えている。お前が止めるんだ!」

「そつちは任せたよ!」

蒼雷と焰が怪獣たちを吹き飛ばし、道をつくる。

それを見た彼は鼻をこすりながら笑う。そして自分に向けられた信頼や激励に応えるため、白銀の鎧を身に纏った。

「ああ、任せろ！」

戦士は飛翔し、空間に開けた大きな穴へと飛び込んでいく。それを見届けたセブンは深く頷くのだった。

「……頼んだぞ。ゼロ」

くく

「なにそれええええっ?!」

場所は変わり沼津の一角にある喫茶店。

春から通う学校が分校であったことの説明を千歌はよしみやいつき、むつを呼び出し

て聞き出したのだった。そして返ってきた答えはなんと、「浦の星と一緒にするのが嫌という声の一部があがってる」というものらしい。そんな理解できないような訳を聞いてしまえば、千歌が声をあげてしまうのも無理はない。

「一緒になるのが嫌ってどういうことよ？」

「学校側も何考えてんだか」

理解しがたいのはみんな一緒らしい。梨子や一真も飲み物片手に学校の対応に呆れている。

「しばらくは分校で様子を見ましようってことになったんだって」

「分校で様子見だって言われても、あの校舎結構小さかったぞ」

「うん、教室は今のところ1つだけなんだって」

いつきの言葉に一真は頭を抱える。なんでも、分校用に用意したのは今は使っていない小学校らしい。

「統廃合になったのに、廃校に移ったんじや意味ないすら」

花丸の言うことももつともだ。浦の星を廃校にした意味がまるでない。

さらに教室が1つだけとなれば、浦の星の生徒が入りきれないだろう。一体何を考えて分校案を可決したのか。小1時間問い詰めたいところではある。

「授業どころか、スクールアイドルもロクに出来ねえな」

「あ……」

「それもそうだね」

3年生が去つてから早々、前途多難なスタートである。

しかし、トラブルはこれだけでは終わらないらしい。

「あれ、曜ちゃんはどこぞら？」

花丸の放つた一言に、一真以外の者はあたりを見回す。気付けばいなくなっていたのだった。

「ああ、なんか電話かかってきたとかなんとか……」

一真はコーラを飲みながら説明をしているが1年生組はおろか、千歌や梨子たちも聞いていなかった。

窓の外で何かを見てしまい、必死に隠そうとするルビイたち。そしてそれを怪訝な様子で見つめる千歌たちという構図が出来上がっていたからだ。

その後すぐさま外に出ていった千歌と梨子。彼女らは相当衝撃的な光景を目の当たりにしたのでろう。互いに頬を引っ張り合っている。

「なんだよ。急に外に出たと思つたら止まるわ、頬を引っ張り合うわ……」

「カズくんアレ！ アレ見て!!」

「なんだよ……うおあつ!？」

首を90度横に向ける。

目線の先では曜ともう1人が楽しく談笑していたのだった。彼女より少し背が高い人物は、キャップを被ってはいるがそこからでも中性的な容姿が確認できる。曜も曜で、友達に向ける顔とはまた別の表情の様にも感じた。

「……………誰？」

「さあ……………」

誰も知らないらしい。追いついたルビイは弟なのかと問うが、彼女の下にいたという記憶がないのは千歌も一真も同じだ。

「じゃあもしかして……………」

「ビックデーモン!？」

善子は驚きで叫んでしまう。案の定、曜にも聞こえてしまう。

「ん??」

彼女は振り向く。しかしその背後に見えるのは、犬の散歩途中であろう女性だけだ。

「なんで隠れるずら?」

「そうだよ。乗り込んで聞きやいいだろ……………あと服引つ張るな」

「だって……………それにカズくんはいいの?」

「はあ? どうことだよそれ」

などと隠れながら小声で話しているうちに、千歌たちは2人を見失ってしまふ。となれば即座に追わなければいけない。そう思ったであろう5人は即座に走り出した。

「はあ……つたく」

「「が、がんばって」」

溜息を吐く一真も小走りで駆け出す。

彼らはよいつむトリオからの微妙な声援をうけつつ、曜たちの背中を追っていくのだった。

道中、曜に警戒されれば、その都度隠れて尾行を続行する5人。一方一真は千歌たちが隠れるたび、服を引っ張られ物陰に引きずり込まれるのだった。

そんな危なっかしく、周りの人に怪しまれながら続ける尾行も遂に終わりの時が来る。

「ほら隠れて!」

「おわっ!?! 首元引っ張るなって!?!」

電柱に隠れたり店の角に隠れたりする中で、善子だけは道の真ん中に置物を設置し、その後ろに身を隠した。

「いや……バレるだろ……」

「にゃーお〜……」

一眞の指摘に答えるためか、それとも曜を誤魔化すためか、猫の鳴き声をダメ押しと言わんばかりに発する善子。

「なーんだ、猫ちゃんか！」

助かったか？ そう思い善子は立ち上がる。

「危ない危ない。危うく見つかる所だつ……」

尾行再開、と置物を持ち上げたところで曜と目が合ってしまった。やっぱり気が付いていたらしい。

「善子ちゃん？」

「おかけになった電話番号は現在お繋ぎできません！」

苦し紛れの一言に曜だけでなく全員が困惑する。

「どうしたの、曜ちゃん？」

「あ、ごめんね月ちゃん」

「月ちゃん？」

呼称に驚愕した千歌たちは思わず顔を覗かせてしまった。

そんな彼女たちの行動と驚きに納得がいったのか、曜は“彼女”を紹介した。

「紹介したことなかったっけ。私の従姉妹の月ちゃん！」

キャップを脱ぐと束ねていた髪が下りてくる。そして曜と同じ敬礼ともに見せるその笑顔は、従姉妹である彼女の活発さを彷彿とさせるのだった。

「月です。よろしくー!」

「じゃあ、あの学校の生徒なの?」

どうやら月は統合先である静岡高等学校の生徒であるとともに、生徒会長も務めているらしい。だからこそ、浦の星と静岡の間で何が起こっているのかを曜は尋ねていたということのようだ。

「曜ちゃんも通わない? って誘ったんだけど、千歌ちゃんと一緒に学校がいいって」
「そ、そうだったっけ……?」

2年越しに明かされた秘密である。

曜はそんな覚えはないという風に装ってはいるが、視線やブラブラとさせる足の動きからバレバレである。

「照れることないじゃない」

「あ、君が梨子ちゃんだね。いつも曜ちゃんが言ってるよ。尊敬してるって」

まさか自分にも来るとは思わなかったのだろう。梨子はどう反応すればいいのかわからなかったようだ。自分の名も知ってて、尚且つ曜から尊敬されているという話を聞かせてくれたのだ。困惑するのも無理はない。

「照れることないじゃない」

先の仕返しで曜は梨子へと投げかける。

「千歌ちゃん、ルビイちゃん、花丸ちゃん、善子ちゃん。そして一真くん。本当にAqoursのことが好きみたいで、曜ちゃん会うたびにみんなのこと話してるんだよ」

それが照れ臭かったのか、曜は毛先をくるくると弄っている。

「そう思うと思うんだ。既にAqoursは曜ちゃんの一部分なんだなあって」

曇りなく笑う月。こういうったまっすぐな部分もどことなく曜に似ている。従姉妹とはこういうものなのかと思いつつ、一真は口を開く。

「でも意外だな。俺のことまで知ってるなんて」

「そりゃあもう。Aqoursのマナージャー暁一真。曜ちゃんから話もたくさん聞いてるよー」

「あ、あははは……」

そうやって一眞の背中を叩く。やっぱりこういった面はさすが曜の従姉妹といったところである。初対面でもペースに乗せられそうだ。

「それと、分校の事……」

ずっと仲良く話していたいが、本題はそこではない。

分校の事をルビィが訪ねると先ほどのような笑顔は消え、月は申し訳なさそうに視線を落とす。

「どうしてそんなことに？」

「訳があるんだろ？」

「……うん」

月が語るには、静間は昔から部活動が活発であり全国大会に出るような部もいくつかあるらしい。しかし浦の星の生徒が入ってくると、部がだらけた空気になるのではないか、または対立するのではないかと危惧しているとのことだ。そうなってしまうと練習どころではなくなり、結果を残せなくなる。そんな声が父兄から挙がっている……というところのようだ。

「だから分校で様子見……か？」

「……うん。僕たち生徒も、先生たちも心配ないって言ったんだ。けど部活がダメになつたらどうするんだとか、責任とれるのかだとか」

力及ばずだと、月は悲しく笑う。

「なんだそれ……」

そこに通う生徒でもないのに、部活とか責任とか……自由に声を上げてくれたものだ。

さらに梨子も、そんなこと言い始めたらキリがないし、何もすることができないと苦言を漏らす。

「これはまた面倒な問題だな」

「そう。だから私は月ちゃんに相談してたんだ」

「……全面戦争」

「そんな訳ないでしょ?」

極論かつどちらも全滅する案はもちろん却下である。

「その人たちが気にしているのは、浦の星の生徒が部活でもちゃんとやって行けるかってところなんだと思う」

「だから、実績のある部活もあるって証明できればいいんだよ」

言葉よりも何倍も効力を持つのは、実際に見せることだ。しかし浦の星に実績を持つ部活が果たしてあったのだろうか。今度はそこで頭を悩ます。

「……あるだろ」

一面に漂い始めた空気と沈黙を破ったのは、千歌たちを見渡して放った一眞の一言。
「……ええ、あるわ!」

続くように声を上げる梨子。

「全国大会で優勝した部活が1つだけ」

さらに続く曜の言葉。

3人の言葉と視線で、千歌は顔を上げる。ここにいるじゃないか。全国で優勝し、歴史に名を刻んだ部活が。

「私たちスクールアイドル部が、新しい学校にも負けなくらい真面目に本気で活動しているって。そして人を感動させているって、わかってももらえればいいんじゃない?」

「それ……いい!」

立ち上がった千歌に、善子はライブでもやるのかと尋ねる。

「それもいいけど……実は来週、ちょうどいいイベントがあるんだ」

月は待っていたかのように、そのイベントとやらの名を口にした。

く

「活動報告会ね……」

校門前で一眞はふとその名を口にする。

活動報告会とは年に一度、各部活動の代表生徒が部活動の実績や活動内容を説明する行事なんだとか。部活動に力を入れているだけあって、こういつたことも行っているわけだ。

「にしても……」

一眞も A q o u r s の面々と同じように、校門前から校舎を見上げる。

「み、未来ずら〜〜〜!!!」

花丸が声を上げ、ルビィが怯えるのも無理はない。浦の星の校舎より何倍も巨大な建造物が目の前に建っているのだから。玄関近くで談笑している生徒の数ですらも、当たり前ではあるが浦の星の生徒数を軽く凌駕していた。

「あれは！……能力者……我が前世を知る者……」

善子は塀のところで身を隠し、前世がどうのと言い始めている。声音からして、彼女にとつては良くないことなのは確定しているようなものだった。

「前世？」

「中学時代の同級生ずら」

「ああ……それはあ……」

察した一眞は額に手を置く。

善子にとつてはいい思い出にはカテゴライズされてないであろう中学時代。その同級生となれば、彼女のとつていた行動も見ているであろう。顔を見られれば何を言われるのかたまつたもんじやない。善子は踵を返す。

「学校とみんなのためよー」

そんな行いは許されない。今日はいくら何でもと、梨子は善子を捕まえる。

「……………」

すると静間の生徒たちの視線が、自分たちに集まっていることに気付く。何しに来たのか、どこの生徒か……。物珍しそうで疑問に満ちた目に、思わず隠れてしまう人も何人かいた。

青を基調とした制服が大半を占める中、白を基調とした制服を着た少数はどうしても目立ってしまう。

「……………行くこう」

全く別の、全く見知らぬ場所から吹く風はどこか冷たい。浦の星のような見知った暖かさがここにはなかったのだ。

拒絶されたような空気の中、千歌たちは足を踏み出した。

(こんなに大きなところなんだな……)

様々な部活動の報告を見ながら、一眞はそんなことを考えていた。浦の星の体育館とは違いここは講堂。用途も違うし大きさも違う。なにより厳肅な雰囲気で空気がピリピリしている。ここまで来て言うのもなんだが、とてもライブをする雰囲気ではなかった。

(つてか部外者がここにいちや悪いかよ。ちゃんと許可貰つてんぞ……！)

それに後ろから刺さる視線も痛い。浦の星の生徒だからなのだろうか。だとすれば随分と嫌われたものだ、一眞は苦笑する。

「次、曜ちゃんたちの番だよ」

「ありがとう。月のお陰で、特別に組んでくれたんだよな。さすが生徒会長」

「このくらいお安い御用だよ」

するとステージ裏にいた月が客席側へと戻り、一眞の隣に座る。

軽いやり取りを交わす2人だったが、張り詰めた空気はそれでも抜けずにいた。

「みんなは……どうだった？」

「かなり緊張してたみたい。特にルビイちゃんたち1年生が」

だよなと一真。疎外感だけでなく、向けられる視線も今までと違うのだ。何を思ったって不思議じゃない。

「ライブとここじゃ、大分空気が違うからな」

「それでも……」

「ああ。それでもやるよ。浦の星とみんなのためにつて」

たとえこの場に3年生がいなくても。大丈夫……できると。

「信頼してるんだね」

「まあな。みんなが信頼しているように……俺も……」

すると、講堂内にアナウンスが響き渡る。この春から統合になる浦の星のスクールアイドル部、Aqoursのライブが始まると。

アナウンスの後、小さく頼りない拍手が響き渡る。それがスクールアイドルが浸透していないこと、そして浦の星が歓迎されていないことをより強く明確にさせる。

ここから始まるのだ。新たなAqoursの第一歩が。この6人で踏み出す……

6人で……

位置に着いた時、A q o u r sが、一真が……ふと見てしまった3年生の空間を。いなくなってしまう

第三章 — 踏み出すために —

「はあ……」

溜息を吐きながらベッドに倒れ込む。

その瞬間、まるでマシユマロの様に沈み込んでいく感覚と共に全身が重くなる。

しばらく無言の間が続く。すれば耳に入ってくるのは、秒針が時を刻む音。そして外の波や風の音だけだ。

「……………」

結論から言えば、ライブは失敗に終わった。

これまで積み上げてきた彼女たちからは考えられないような初歩的なミスの連発。気が緩んでいた……という訳ではない。でも、それでも落ち着かない何か彼女たちの中にはあったのだ。

ライブ後の彼女たちにどう声を掛ければいいのか、少し迷った。でもかけた言葉が果たして正解だったのかは、未だ確信を持ってずにいる。

「6人……か……」

おそらくそれが大きな問題なのだろう。いなくなつた3人の分をどう補えばいいの

かもわからない。

でも、それだけが問題じゃない。寂しいんだ。鞠莉や果南、ダイヤがいなくなったことが、それを再度つきつけられた瞬間、寂しさと不安が彼女たちに降りかかるんだ。

さらに追い打ちをかけるのは、分校の問題は解決していないことだった。

「浦の星のみんな、わかってるから」

「古い校舎も悪くないって」

「——そちのほうが私たちらしいって」

むつ、よしみ、いつきは……いや、浦の星の生徒はそう言ってくれたのだが、こちらとしては無力感に押しつぶされそうだった。

「ねえカズくん、起きてる？」

そんな回想を終了させたのは千歌の声。襖越しに聞こえてきた彼女の声が暗かったというの、言うまでもない。

「どうした？」

尋ねてきた一真に、千歌は梨子と共に浜辺へ行こうと誘ってきたのだった。

胸中に渦巻き続ける気持ちを整理するには丁度良く、夜風が気晴らしにもなってくれるだろうと、一真は了承するのだった。

「2人ともまだ気にしてるの?」

開口一番に尋ねたのは梨子。

腰を下ろしている千歌と一眞の表情が一致して暗かったからこそ問うたのだろう。

「そんなんじゃない……いやどうだろう。まだ引きずってるかも」

いつもは否定か、あやふやにして返答してくるであろう一眞。しかし今回は素直に返してきたではないか。珍しい反面、彼も包み隠さず自分の思いを伝えられるようになってきたのだと思えば喜ばしいことだ。

梨子は一拍置いてから、自分の思ったことを伝える。

「スクールアイドルって、誤解されやすいと思うの」

アイドルとして、ステージ上ではいつも笑顔でこなしている。でもそれが真剣さが足りないように感じられてしまうし、楽しそうにしているから遊んでいるようにも見えてしまう。

「そうかな?」

見ている者とやっている者との視点は全く異なる。

実際は踊りながら歌わなければいけないし、それに応じて体力もつけないければならない。1つのパフォーマンスの裏には、相当な努力の積み重ねが存在している。

「でも辛そうだったり、不安そうにしてたら、見ている人は楽しめない」

アイドルがステージに立つとき、観客に提供するのは夢のような時間だ。そんな中で負の表情を見せてしまえば、その時間は呆気なく瓦解してしまう。故に絶対に見せてはいけないのだ。

それが誤解を生んでしまうというのは難儀なものではあるが。

「だから……諦めずに伝えていくしかないと思うの」

時間はかかるし、何度も批判されるだろう。それでも梨子は伝えることを放棄しないのだと、そう言い切った。

「浦の星の生徒も、真剣に頑張ってきたんだって」

「それは……わかってるんだけど」

千歌もその意見には賛成だ。でも、それだけでは拭えないことが確かにあるのだ。た。

「6人で踊るって、どういうことなのかなって」

6人でもAqoursを続けていくと、鞠莉たちと話し合っただけで決めて気合も入っていい。しかし3人が抜けた途端、急に不安になってしまったのだ。

「……」

「……」

「新しいAqoursってなんだろう」

新たな形が、進むべき道が定まらないことがとても不安なのだ。形は違えど一真もそれは同じ。

「どうするの？ このままだと浦の星もスクールアイドルも誤解されたままになっちゃうけど」

「それは……」

誤解されたままなのは嫌だ。けれど進もうとすればどうしても……先に見えな場所を歩んでいくことが怖くなる。

「失敗は、自分たちで取り戻すしかないんじゃない？」

梨子は立ち上がり、駆け出していく。

「まだ、間に合うと思う」

2人は問う。まだ間に合うのかと。

すると梨子は迷いなく言った。今度こそ反対している人たちにもちゃんと見てもらう、と。

「私たちの答えって、前に進みながらじゃないと見つけれないんだと思う。不安でも……やろうよ、ラブライブ」

これまでもそうだったように、答えを見つげるためには不安でも進むしかない。以前

は立ち止まっていた梨子がそう言ったのだ。らしくないような気もするが、それは彼女が成長した証なのだろう。

「私たちってきつとまだまだなのかなって」

「優勝したんだよ？」

頂点を取った。けれども未だ成長の余地を残しているという事だろう。

「そうだよな。そっちの方がお前たちらしいよ」

「そこは一真くんも入ってなきや！」

「ええ……!？」

迷いは消えない。不安も残ったままだが進み続けることはやめない。そうしないと答えが見つからないから。そう思えば、なんだかやるのがたくさんある気がしてきて、やる気が湧いてくるのだった。

「よし、明日からまた練習だー!!」

「練習って、どこでやるのか決まってるのか？」

気合を入れた千歌に一真は尋ねる。普段であればそこまで考えていなかったと言うところだが……

「うん。決まってるよ！」

いつもの眩しい笑顔で答えたのだった。

「後も1往復行くよ〜!」

晴天の中曜の声が浜辺に響く。遠くから見えるのは、ランニング中のAqoursの姿だ。

「今は浜辺で練習を?」

「そうなんです。今はちゃんとした練習場所がないので。でも、始めたての頃はここでやっていたんで、初心に帰るって意味ではうってつけだと思います」

「そうなんですか」

一真は今、聖良と理亜の2人を練習場所に案内していた。

「にしてもすみません。突然の頼みだったのに」

今は聖良の卒業旅行中で東京に来ていたのだとか。それを知った千歌がちよつとだけ練習を見てもらえないだろうかと誘ったのが来てもらった理由だ。

「構いませんよ。理亞も皆さんに会いたがっていましたから」

「姉さまー！」

そんなやり取りを見れて一眞の頬が緩む。理亞にはこのことは言わないでと釘を刺された。言わなくてもバレるのではと思うが、これは口に出さないのが吉だろう。

「……あと、ありがとう。お墓のこと」

「ああ。滅多に会えないだろうから、あいつも喜んでいると思う」

小声に近い声で理亞にお礼を言われる。ここに来る前に彼女の墓にも行ってきたのだろう。

そんな話をしているうちに、A q o u r s と合流することができた。そして案の定、理亞の本心は聖良によってバラされていた。

「では早速見てもらえますか？　今の私たちのパフォーマンスを」

部活動報告会でやったように、6人はパフォーマンスを披露した。

その最中に一眞は聖良の表情を時折見ていたが、あまりいいとは言えなかったというのが正直な感想だ。

「どうですか？」

「ハッキリ言いますよ……」

千歌が訪ね、聖良は立ち上がってA q o u r sを見る。そして彼女の発する声音から

は厳しさが目立っていた。

「ラブライブ優勝でのパフォーマンスを1000とすると今は……30……いえ、20くらいといつて良いと思います」

なかなか手厳しい評価だ。しかしそれだけ3年生の存在が大きかったという事だろう。

果南のリズム感とダンス、鞠莉の歌唱力、そしてダイヤの華やかさと存在感。それらがAqoursの持つ明るさや元気さそのものであると言つて良い。それらが失われればどうなるか……言わずともわかるだろう。

それに伴つて不安で心が乱れている……そうした感情が無意識にパフォーマンスにも表れていたのだと、聖良は推測する。

「なんか……フワフワして定まってる感じがしないカンジ」

理亜も言葉の端に苛立ちを含ませながら言い切る。

残念だがそれは紛れもない事実だった。

薄々見え始めていた“足りないもの”を突き付けられ、Aqoursは言葉を失う。

「でも……どうすれば……」

ルビィの放つた一言が、理亜の燻っていた心に火を灯してしまった。

「そんなの人に聞いたってわかるわけじゃないじゃないっ！ 全部自分でやらなきゃ……！」

姉さまたちはもう、いないの!!」

理亜は走り出していく。

自分の中にあつた不満を吐き出して。いや、今まで吐き出せなかったからこそ、ここで言う事しかできなかつたのかもしれない。

「すみません……」

「いえ……」

「理亜ちゃん、新しいスクールアイドル始めたんですか?」

聖良が卒業し、新しくグループを作つて始めようとしている理亜。何人か人は集まつた。しかし現実には厳しく、そこからあまり上手くいってないというのが聖良から語られた。

踏み出そうとする者誰もがぶつかる壁……なのだろう。

いなくなった瞬間、その者たちの存在に如何に助けられてきたのかを実感する……という話をよく聞くと、実際に体験する側となるとなかなかキツイものがある。

「……ん?」

すると遠くから響くのはヘリのローター音。

ピンク色でやけに派手だなと感じるそのヘリはこちらに向かって飛んでくる。

「なに?」

「これ、前にも確か似たような……」

「浜辺、ヘリ……うっ……」

「そんなことしてる場合!？」

速度を落とさずに通り過ぎていこうとするヘリに全員が身を屈める。そして砂埃を舞い上げながらヘリは一真たちの前で滞空。

「マジでこれって……」

「鞠莉ちゃん……」

このやり方。明らかに鞠莉と初めて出会った時と同じだ。

しかしドアが開き、中に座っている人物を見たときにそれは間違いだったと悟る。

「……じゃない!？」

乗っているのは長い金髪を風に靡かせた女性。それならば鞠莉だろと思うが、身長や顔つきが妙に違った。

「My daughterがいつもお世話になっておりマース!」

だがこの英語と日本語を妙に混ぜて話し、語尾の独特な癖は彼女とそっくりだ。

「となれば……」

「小原鞠莉の母。Mari's motherデース!!」

突然の鞠莉母登場に、千歌だけでなく一真までもが間の抜けた声を出していたのだっ

た。

くく

その後小原のホテルへ移動し、詳しい説明を受けた。

「連絡が取れない!？」

単刀直入に言われ、尚且つスケールの大きさに全員の声が重なる。

「どうやら鞠莉、果南、ダイヤの3人は卒業旅行に行つたきり連絡が取れなくなつてしまっているのだという。」

「つてか、月はどうしてここに?」

「みんなの練習を見に来たら丁度……」

6人は鞠莉母のピアノ演奏を聴きながら事情を説明されている中、一真は後方にいる月と話していた。

ちなみにさらに後方では聖良と理亜もその様子を眺めている。

「成程ね。お前も案外巻き込まれた体質だったりするのるか?」

「いやどうかな……」

すると月は何かを思い出したのか、一真に尋ねる。

「そうだ。僕が見に行つた時、黒い服を着た男子がみんなのこと見てたけど、もしかして知り合い？」

黒い服着て自分たちと関りがある男子なんて限られている。もう誰だったのかなんて見えているようだが、人違いを期待して月へ質問を投げる。

「そいつと……話した？」

「うん。君も一緒に来ない？　って誘つたんだけど、僕はそういうの柄じゃないからとかなんとかつて。あと、一真くんによるしくつて」

「ああああ……」

あいつの憎たらしい笑顔が浮かぶようだと、一真は肩を落とす。

「……はい、知り合いです」

「そうなんだ。また会えるかな？」

「もう会わなくていいかと……」

「え？」

ひきつって話す一真と対照的に、月はもう一度会いたいなどと屈託のない笑みでしゃべっている。

「あなたたちなら、きっと鞠莉たちを見つけられるハーズー!!」

ホール内に鞠莉母の声が響いたと思ったら、今度は天井から大量のお金が降ってきたではないか。

「……んじゃそら」

その様子に、口を開けて放心してしまう。

けれどそれは「探すためならば旅費はこちらから出す」というパフォーマンスと事だった。因みに中身はチョココである。

「ですが、見つけてくれればそれ相応のお礼は致しますので」

「任せて。この堕天使のヨハネアイに掛かれば、3人を見つけることなど造作もないことですよ!」

善子は立ち上がってそう言って見せるのだが、どうもお金に目が眩んだように見えてしまったらしい。

花丸の指摘にライブのための資金と言い返したのだが、そこでA q o u r sの本来の目的を思い出したのはルビィ。

「そうだよ! ルビィたちライブがあるんだよ!!」

先の失敗を取り返すためのライブを準備しているのだが、鞠莉達と連絡がつかないというのも不安だ。まさに板挟みといった状況だ。

「行つてきた方がいいと思います」

悩ましい状況下に響いたのは聖良の声。

「先ほど、皆さんの練習を見て思つたんです。理由はどうあれ、一度3人と話し合つた方がいいって」

自分たちで新しい一步を踏み出すために、今までを振り返ることは決して悪いことではないと。

「千歌ちゃん、聖良さんの言う通りだと思う」

「まあ、ライブの練習はどこだってできるしな」

「これまでだつてやってこれたし。大丈夫、できるよー」

その言葉らに千歌も遂に決心したようで元氣よく立ち上がる。

「わかつた、行こっか!!」

決まつたところで、3人が一体どこに卒業旅行へ向かつたのだろうか。

誰もが抱く疑問を、待つてましたと言わんばかりに鞠莉母はプロジェクターで映し示してくれた。

小原家の先祖が暮らした地。長い地中海の海岸線を持つヨーロッパの国——イタリアだ。

「鞠莉もハグウもデスワも、イタリアへ行つてマース！」

壁に映された異国の地を眺めていたその時、久しぶりであり2度と味わいたくないと思った巨大な揺れが一眞たちを襲った。

「なにになに!？」

「この感じは……」

「ええ、ちよつと一眞くん!？」

すぐさま揺れの正体を悟った一眞。彼は月の声も聞かずにホールを後にした。

外に出ると、無人地区の方に白い巨体が降り立っていた。おまけにその純白の全身に似合わないくらい、おどおどろしいオーラを纏いながら。

遅れるように外へ出てきた千歌たちも、降り立った存在に視線を送る。

「アレって……怪獣!？」

正直あまりいい思いが無いというのが怪獣だが、今回のはとびつきりだ。A q o u r sにも、そして一眞にもトラウマを植え付けたと言ってもいい、独善的な執行者。名を

「……Galaxy dragon!」

鞠莉母は怪獣を見上げて言った。

以前鞠莉も同じようなことを言っていたななどと呑気に考えている暇はない。怪獣は独特な機械音を響かせ、進行を始めたのだから。

「いえ、アレはサルバ——」

「善子ちゃんは黙るすら!」

花丸が善子の口を押えるが構わずフガフガと声を出している。

「一真くん……」

「ああ、行つてくる!」

「行かつてどこに!」

「え、ああ、えつと……あ、なんだアレ! 鳥かな!」

月にはまだ正体を知らない。さらにここには鞠莉母もいる。バレるのも時間の問題かもしれないが、だからといって積極的にバラしていくのは得策ではない。

一真は月たちが視線を逸らした隙に走り去っていく。

「あれ、一真くんは?」

「カズくんは大丈夫だから私たちも逃げるよ!」

「ええ!」

強引に背中を押し、その場から避難していく一同。

一方一眞は、人気のない場所に移動。懐から取り出したカリバーを空に掲げる。

青い閃光が霧散し、聖剣を持った巨人が怪獣の前に立ちはだかる。

「銀河の光が、我を呼ぶ！」

オーブカリバーを構え、オーブオリジンは目の前の怪獣に……いやロボット怪獣を睨む。

シビルジャツジメンター ギャラクトロン

こいつを前にするとどうも手足が熱が奪われ、背筋が凍るような感覚が生じる。

その理由もわかってる。以前のような事態になることを恐れているからだ。でも今は違う。数々の戦いを超え、光と闇を抱きしめた今なら……そんなことを再び起こすことはない。いや、起こさせない。

「また、生態系がどうのつてか。悪いがお前の正義を聞いてる暇はない！」

鋭い突きが喉元を捉えようとするが、ギャラクトロンは回避。すればオーブを敵対者として認識したのだろう。右腕の砲塔を展開し襲い掛かってくる。

「くっ……！」

機械故の尋常じゃない怪力で、防ぐにしても腕が痺れる。

回り込んでから刃を思いっきり叩きつけてもビクともしない。それどころか、逆に反撃として腹部に何発か喰らって放り投げられてしまった。

「■■■■ー!!」

至近距離からの光線を間一髪で回避。魔法陣が出現し、後から巻き起こる爆発の数々。

「……………があつ……………!?!」

だが回避まで読まれていたのだろう。ギヤラクトロンシャフトが首を掴み、宙へとその体を浮かせる。

抵抗がほとんどできないオーブはシャフトを切り離そうと、駆動部を何度も叩くが効果は薄い。

「あのままじゃ……………!?!」

避難した場所から戦闘を見ていた月が声を上げる。

ほとんど抵抗も、防御すらもできない今の状態で攻撃を受ければどうなるか……………考えたくもないことだろう。

(ハ、ハ)の……………!)

ギヤラクトロンの胸元にある赤いコアが鈍く光る。エネルギーを集め、オーブの胴を

貫こうとしているのだ。

絶体絶命だと思われたその時、青く澄み渡った空から2つの白刃が疾走。失速することなく飛翔する2対の刃がギャラクトロンシャフトを切り裂いた。

形状から察するにブーメランとも言えるそれは青空にくつきりと開いた大きな穴……所謂“ワームホール”に吸い込まれていく。そして穴の中で輝く小さな光がこちらに向かつて突進。近づいてくる青い輝きは、徐々に紅蓮の炎へと姿を変えていく。

「ウオオオオツラア!!」

炎に包まれた右足が、ギャラクトロンを後方へ吹き飛ばした。

第四章 — A q o u r s、故郷から離れて—

2枚の白刃がギヤラクトロンシャフトを切断。それに伴い、拘束されていたオーブも地面に落下する。

「な……!?!」

「どういうこと……?」

乱入ともいえるその出来事に、誰もが言葉を失う。

「あつ!?! 空が……!?!」

誰の声だったか……なんてことは重要じゃない。そんなことよりも、上空で起こっている奇妙な現象に彼女たちは意識を向けていた。

未だ回転の衰えない刃は、青空にくつきりと開いた大きな穴へ吸いこまれていく。いや、戻っていったと表現した方がいい。そして穴の中で輝く小さな光が突進。近づいてきた青い輝きは、徐々に真つ赤な炎へと形を変える。

「ウオオオオツラア!!」

炎に包まれた右足がギヤラクトロンを後方へ吹き飛ばす。頭部へ2つの刃を戻して、土煙を上げながら着地したのはオーブと同じ巨人。

彼は赤と青の体を持ち、上半身に纏った銀の鎧が太陽に反射して煌いていた。
「待たせたな」

銀の鎧は金色の光となり、腕輪となつて左腕に装着。

プロテクターや額のビームランプ、悪しきものを逃がんとする鋭い目は、以前に出会ったウルトラゼブンを思い出させる。いや、オーブは既に彼を知っている。本人ではなく、カードとして……。

「あ、あなたは……ウルトラマンゼロさん?!」

「へへッ……よっ。話はタイガから聞いているぜオーブ」

オーブの胸を軽く叩くゼロ。

彼の反応や言葉から、
「見た目は同じだけど中身は別人」といった事情を理解しているようだ。ゼロの言うように、一番最初に接触したウルトラマンタイガから聞いたらしい。

「つと……今はコイツを倒すことに集中だ。行くぜ!」

「はい!」

並び立った2大ウルトラマンは即座に構え、ギャラクトロンへ突進。

「ブラックホールが吹き荒れるぜ!!」

右腕から放たれる光線を掻い潜り、正に自分こそが正義だと言わんばかりの白い体に

刃と拳を撃ち当てる。即座に迫ってきた反撃をオーブカリバーで防げば、その腕をゼロが蹴り飛ばす。

「……ッ！」

「オラアアアッ！」

炎の軌跡を残すまわし蹴りと、青い光の剣筋が交わる。攻撃が直撃し、右腕に展開された砲門が折れて吹き飛んでいく。

「■■■■ッ——！」

右腕武装の欠損を確認すると、左腕のブレードを展開し襲い掛る。しかし「ギヤラク トロンブレード」もエメラルド色の閃光に弾かれ、幾錢もの斬撃で追い込まれていく。頭部の宇宙ブーメラン「ゼロスラツガー」を両手に持ったゼロの攻撃だ。

「エメリウムスラツシュ！」

一時的に距離をとったゼロの額から青緑色の線が伸びる。バリアの展開に遅れたのか、ギヤラクトロン頭部の頭部に命中し小規模の爆発が起こる。

「行け、オーブ！」

ゼロの呼び声と共にオーブは姿を変える。

ウルトラマンアグル

ウルトラマンベリアル

フュージョンアツプ

ウルトラマンオーブ サンダーストリーム

「闇を包め、光の嵐！」

上半身がウルトラマンベリアル、下半身がウルトラマンアグルのような色合いとなり、胸元にはアグルのプロテクター。そして頭部はベリアルやアグルのような鋭い瞳。特徴的な腕や脚のヒレ状のパーツや背中の背鰭のような尖ったパーツなど、どこか海洋生物を思わせてくれる姿……。ウルトラマンオーブ サンダーストリームへとフュー

ジョンアップしたのだ。

そして手に持った棍棒と三叉槍が一体化したような武器“ギガトライデント”を振るう姿は、まさしく神話世界の海神のようだった。

「ハアアアアアッ!!」

槍を振り、切っ先を突き立てる。さらに槍を支えに蹴りを繰り返す。ギヤラクトロンはなす術無く、まるで大荒れの嵐のような猛攻を受け続けた。

「喰らえー!」

渾身の突き技でギヤラクトロンを地面に倒れさせるも、ヤツは空へと浮かび上がる。既に中心のコアは光り輝いていることから、最大の技“ギヤラクトロンスパーク”を撃ちだそうとしていることは明白だった。

「させるかよー!」

するとゼロはゼロスラッガーを合体させ、半月型の剣“ゼロツインソード”とする。そして刃にエネルギーを貯めこむと同時に飛び立つ。

「ツ……ラアアア!」

エメラルド色の軌跡を描きつつ、すれ違いざまに一閃。ギヤラクトロンの腹部から火花が漏れ出した。チャンスだと見たオーブも、ギガトライデントの先端から水流状の光線を撃ちだす。

「サンダーストリームネプチューン！」

撃墜され、地上へと落下。だがこちらの勢いは止まらない。ギガトライデントの反対側、かつてベリアルが持っていたギガバトルナイザーを彷彿とさせる面から赤い稲妻を放つ。

「サンダーストリームトリトン……！」

その様を見ていたゼロも、ゼロスラッガーをカラータイマーの両側に装着。ゼロスラッガーのエネルギーを光線に転化させ、ギヤラクトロンに照射した。

「ゼロツインシューツ！」

オーブもトドメにと、体中のエネルギーを先端の刃の部分に集約。赤と青の稲妻を纏いながら、三日月型の刃でギヤラクトロンを薙ぐ。

「サンダーストリーム……ポセイドン!!」

海神の怒りの如く放たれる技の嵐の前に、ギヤラクトロンはその身を爆発させるのだった。

「さつきはありがとうございます」

戦闘を終え、一眞は目の前にいる青年に頭を下げる。キリつとした目つきで、見た目は彼よりちよつと年上の男性に。

「おう。だが、喜んででもいらねえぜ。アレは先兵……といったところだろうからな」

先ほどとまったく同じ声が青年から聞こえてきた。それもその筈。ゼロが人間に擬態した姿こそが目の前の男なのだから。

危機を脱し平和が訪れたものの、ゼロの表情は未だに厳しかった。

「先兵……ですか？」

ギヤラクトロンだけでも脅威となるのに、それが先兵でしかないというのは信じ難い。しかしゼロは嘘を言っているようには見えない。

「ああ。この件には黒幕がいる」

そして一眞へと問う。内容は最近彼が対峙した怪獣たちの……出現の仕方だ。

「お前が最近戦った怪獣、突然現れるだろ？ 地面から這い出てくることも、空から降ってくることもなく……まるで幽霊のように」

ゼロの問いに、一眞は目を丸くしながらも首を縦に振った。

「どうして……わかるんですか？」

「オレは以前、その黒幕と戦ったことがある」

彼が語るに、その名は「亡霊魔導士レイバトス」亡霊魔導士という名の通り、怪獣を蘇らすことのできる宇宙人。そして――

「レイブラッド星人の血を受け継ぐ、レイオニクスだ」

かつて宇宙に君臨し、全知全能を自称するほどに強大な力を持った存在レイブラッド。彼は自らの遺伝子を宇宙にばら撒いた。理由は後継者を選ぶためだ。そしてその遺伝子を受け継ぐものはレイオニクスと呼ばれる。

「れいぶらつど……？ れいおにくす……？」

初めての情報に一眞は理解が追い付かないようで、言葉を繰り返すのみにとどまっている。

「えくと、まあ……レイオニクスって言葉だけ覚えておけ。んでレイオニクスってのは所謂怪獣使いだ」

さすがに情報を出しすぎたかと思ったゼロは要点だけを説明する。

レイバトスは怪獣使いであり、何かを企んでいること。そのために必要になるであろうギガバトルナイザーをゼロの住む宇宙から盗み出したこと。そしてゼロはそれを阻止するため、邪気を追ってきたらここに辿りついたことを。

「それでここに……」

「ああ。アイツは何かよからぬことを考えている。おそらく、この星に関係するものだ。けどそれが何なのか……まったく見当がつかねえ」

亡霊魔導士レイバトス。この世界からすれば影もつかめない未知の存在。そんな者が何かを企んでいるとなればさすがさま動かなければいけないが……。

(レイバトスと鞠莉さんたちの搜索か……)

先の千歌と同じくどちらを選ぶべきなのかと迷う。平和を守るためであれば前者を取るのが当たり前だ。しかし、この星に生きる暁一眞としては後者の方だって大切なのだ。

「なんだかよくわからねえが、お前にもお前なりの事情があるっぽいな。なら、レイバトスの搜索はオレがやっておく。何かわかったら連絡するぜ」

「え、そんな……俺も行きます」

「馬鹿。そんな思い詰めた顔されたままじゃ、こつちも調子が狂うつてもんだ。お前も仲間と何かすることがあるんだろ？ 最初はそつちを片付けろ。いいな」

そう語るゼロの視線は、一眞よりもはるか遠くの方を見据えているようだ。一眞が振り返ると、こちらに走ってくる千歌たちの姿がある。それで察したのだろう。

「じゃあ、また後で会おうぜ。暁一眞」

それだけ言い残し、ゼロは去って行ってしまった。

「ありがとうございます。ゼロさん」

小さくなっていく背中に向かって、一眞はそう投げかけたのだった。

（ ）

しかし2人の再会は意外な場所で、それでいて案外早くに果たすことになった。

「なんで……」

「なんで……」

「「なんでお前（あなた）がいるんだよ！（いるんですか!?!）」」

人々の賑わう声が騒がしくも心地よい。青い空がどこまでも広がり、日本とは違った石造りの街並み。街中を通る水路はまさしく水の都と言われているのも納得だ。

3年生を探しに来たA q o u r sや一眞、月はイタリアのヴェネツィアへと来ていた。しかしそこで一眞はなんと、レイバトスを搜索中のゼロ（人間態）と会ったのだ。た。

「俺は仲間とやることがあるからです。ゼロさんが言ったんですよ?」

「オレはアイツ特有の邪気を追ってきたんだ。そしたらなんだかオレと近しい気配がするもんだからよ……」

目的は違えど、数日経たずして再開してしまったのだ。気まずいというか、あんなこと言っただけで即合流だなんて恥ずかしい……という気持ちで渦巻いているのだ。

「カズくん、もう現地の人と知り合いに!」

「早くない!」

「ははははっ、ううん、そうじゃないよ」

異国の地にはしやいでいた6人が集まってくる。

「ここで幸い……というのあまり良い表現とは言えないが、月は席を外している。であれば今事情を話しても問題ないだろう。」

「オレは諸星——」「彼はウルトラマンゼロさん」オイッ、言っちゃマズいでしょうが!?! ええ、堂々とバラしてくスタイル……?」

「大丈夫ですよ。みんな俺の正体も知ってますし、ヒカリさんや大地さんとも会ってま

すから」

「ああ、ソユコトネ……。てつきり一眞に化けてる宇宙人かと思つたぜ」

いきなりの暴露にゼロは取り乱してしまったようだが、彼女たちもあらゆるウルトラマンと交流していることを知ると落ち着きを取り戻す。

一眞は自分で話していて、彼女たちはウルトラマンと出会いすぎなのでは……と思わなくもなかった。

「改めて、オレはウルトラマンゼロ。つつても名前だけじゃわかんねえよ……。あゝと、オーブとともにギャラクトロンを倒したのがオレだ」

「つてことです」

「あの白銀の天使があなた……。ということね。クククツ……」

善子の発言に、ゼロは不思議なものを見たかのような何とも言えない表情をしていた。

「善子ちゃんのこととおいとくずすら」

「えつと、ゼロさんは……。何をしにここへ来たんですか？」

ルビイはゼロに向かって訪ねる。ウルトラ戦士が理由もなく、ここに来るわけがないと知っているからだ。

「ちよいと悪い宇宙人がいてな。ソイツの退治だ。なに、お前らの旅行が台無しになる

ほどデカいもんじゃないから安心しろ」

レイバトスは「ちよいと」に収まるほど小さな規模ではない。しかし、ゼロは彼女たちを不安にさせないために嘘を吐いたのだ。

(オレに話合わせとけ)

「そう。なんか……いろんな星で海賊行為を働いてるヤツらしいんだ」

「そ、そんなとこだ。そいつを探すためにオーブと知り合ったってわけさ」

テレパシーで言われた通り、一眞は話を合わせようと居もしない宇宙人を作り上げて話をでっち上げた。……が、ゼロの反応が「なんでそんなピンポイントを突いてくるの!?!」的な反応をしたような気がして、一眞は困惑していた。

「お待たせくって……あれ、あなたは？」

すると月が戻ってきた。自分がない間に、知らない男が輪の中に加わっていれば気になるというもの。月は早速ゼロに尋ねる。

「ああ、オレはゼー——「この人は諸星さん！」ええっ!?!」

今度はゼロだと正直に言おうとしたが、また一眞に阻まれてしまった。

偽名を使おうとしたら正体をバラされ、今度は正体を明かそうとしたら偽名でごまかされる。ゼロの取ろうとする動きは悉く合わないのだった。

「俺の知り合いなんだけど、まさかイタリアで旅行中だとは思わなくてさ」

「そうなんだ。僕は渡辺月。よろしくー!」

「お、おう……よろしくな」

互いに自己紹介が済んだところで、ここへ来た本来の目的（ゼロを除く）を果たすべく行動を開始した。

「ルビイちゃん、ダイヤさんとの連絡は？」

「お姉ちゃんからは何も」

ダイヤの妹であるルビイが何故彼女たちの行方を知らないのか。それは3人だけの時間を邪魔したくなかったという彼女の優しさからだった。

しかし行方不明となれば話は別だ。飛行機内でダイヤ宛てにメッセージを送ったのだが、今のところ返信はない。

「2人からも連絡はない……というか……」

「私たちも行くよって送った時に届いた写真だけなんだよね」

そう言つて千歌は携帯を取り出し、送られてきた写真を見せる。

水路を橋から撮影したものだろう。とはいっても、いったい何処で撮られたものなのかまではわからない。

「取り合えずそこまで行つてみるしかないんだけど……」

「場所がわからねえつてことか？」

「そうなんです」

「なら、このヨハ——」「そこ、すぐ近くだよ!」

善子の声を遮って飛んできた声。その主は月だ。そこにあるのかを知っているし、なんならここからすぐ近くというのは嬉しい情報だ。

「知ってるの?」

「月ちゃん、小さいころイタリアに住んでたから詳しいんだよ」

であれば、月の案内に従って目的地まで行った方が安全に、そして早く着くだろう。

「ガイド役だね。わからないことがあったら何でも聞いてよ。レッツヨーソロー!」

月を先頭に、写真の場所まで進み始める一行。その中で一眞はゼロへ、これまでの出来事や彼女たちのことを話すのだった。

くく

「へえ、スクールアイドルか。オレが見てきた地球じゃ、そういった文化はなかったな」

「そうなんですか?」

「ああ。まだまだいろんな可能性が多次元宇宙には存在するってことだな」

「ですね」

ゼロはあらゆる次元を行き来し、平行世界の地球に立ち寄ったことがあるという。しかし彼の見てきた地球には、学校でアイドル活動を行うという文化はどこにもなかった。そうだ。

一真もゼロからあらゆる話を聞いた。ギンガやビクトリー、エックスといった平行世界で出会ったウルトラマンの話は勿論のこと、自分ではないオーブの存在。一真もお世話になっているウルトラマンベリアルの話。さらにはその息子ともいえる人物が、自分の運命を変えたという事。兄弟ウルトラマンは、オーブと力の発祥地が同じだということなど……壮大すぎて脳が追いついていないというのが正直なところだった。

「どこ行つても川がある〜」

一方、千歌たちは街の光景に思わず見入っていた。日本では見られる光景ではないし、街のあらゆるところに水が通っている様が幻想的だったということもある。

「街中に水路が張り巡らされているからね。逆に車は通れないんだ」

だからここでは主にヴァレットと呼ばれる水上バスやゴンドラで移動すると、月は話してくれた。

「国ごとに色んな姿があるんだなあ」

途中から一真も、街の様子に目を輝かせていた。何せ肉眼では初めて見るものばかりだからだ。

「(一)だよー」

目的地に着いたようで、皆は脚を止める。ルビイが何か怯え花丸に抱き着いている姿もあるが、これについては何も聞かない方がいいかもしれない。

「ほんとだ……」

写真を見比べれば時間帯による光の差し方などに違いはあるものの、建物の配置などは全く同じだ。撮影された場所は間違いなくここだろう。

「確かに(一)ね」

「(一)つてのはわかったけどさ、次はどうするんだ？」

「そうよね……」

写真の場所まで来たが、鞠莉たちがいるわけではない。ここからどうしたものかと頭を悩ませ始めた瞬間、遠くの方に設置された公衆電話のベルが鳴りだした。

「電話……鳴ってますね」

「一真、行って来いよ」

「(一)はぜ……諸星さんが取ってきてくださいよ」

「嫌だよ。一真が行ってこい」

そんな醜い男2人の押し付け合いを無視し、月が駆け出していく。そのまま迷いなく受話器を耳に当て、彼女が呟いたのは……。

「ボーヴォロ……」

「ぼーぼろ？」

聞き慣れない単語が聞こえ、思わずそのまま返してしまう。

「コンタリーニ・デル・ボーヴォロだつて！」

それが次に指定された目的地だということ、月の笑顔が物語っていた。

第V章 — 水の都、花の都 —

公衆電話から次の場所のヒントを得た一行は月の案内に従い、コンタリーニ・デル・ボーヴォロとやらに足を運んでいた。

「どう考えても怪しいじゃない！」

善子の声がやけに響く。

今歩いているのは大通りから少し外れた場所であり、人通りも少ない。加えて路地のような場所でもある。善子が訝しんでいるのも無理はない。

「もしかして、元老院に……？」

「いいから行くぞら〜」

しかし月の案内だ。そこまで警戒することもないだろう。

「あれ、そう言えばゼロさんは？」

「人数が減っていることに対して、曜が尋ねてくる。」

「なんか調べたいことがあるからって」

詳細を省きつつ、一眞は答える。ゼロが一眞に伝えたことを正確に言うとするならば

「この街で蠢いている邪氣をもう少し詳しく調べたい」ということだった。

「本当にこつち？」

「多分……」

千歌も月へと聞いてみるが、彼女も自信がなさそうだった。そんな声が背後から聞こえてきて、全幅の信頼を寄せていた一真も不安という色に染まり始める。

しかし、路地から出て日の光を浴びたときにすべては杞憂に終わった。

レンガ造りで螺旋階段になっている巨大な建物を目にしたとき、ビルの立ち並ぶ現代から石や木によって築かれた中世へとタイムスリップしたような気がしたのだ。

「この上にいる筈だと思っけど……」

最上階に目を凝らすと、3人がこちらに視線を向け手を振っていた。

それがダイヤ、鞠莉、果南だと気付くのにそう何秒もかからなかった。あの3人だと認識した彼女たちは、ルビィを先頭に続々と階段を上り始める。

「よかった」

「だな。ほら、俺たちも行くぞ！」

嬉しきで駆け出していく彼女たちの背中を見つめていた月と一真も、すぐさまその背中を追いかけていく。

最上階に着けば、優し気な面持ちで待っている3人の姿があった。

これまでの不安と、ようやく会えた嬉しさ……その両方の感情から涙を浮かべたルビイは、一目散にダイヤへと抱き着いた。

「よくここまで来ましたわね。こんな遠くまで」

「よかった。3人一緒だったんだね」

「Of course! ずっと一緒だよ」

そうあつけらかんと答える鞠莉の様に、少し違和感を覚える。こちらの聞いた状況と、彼女たちの状況に少し食い違いでもあるのだろうか。

「どうして行方不明に？」

「「行方……不明……?」」

ルビイの問いかけに3人は目を細めて首を傾げる。今初めて聞きまじった的なのリだったことから、彼女たちには自覚がないらしい。

「どうなってるんだ……これ……」

想定していた状況とまるで異なることに、一真も首を傾げるしかなかった。

「やっぱり、そういうことになってるのね……!」

取り敢えず、自分たちがイタリアに來た理由を話してみると、鞠莉は少々怒りを帯びた声音で呟く。……少々どころではないような気もする。

「鞠莉のお母さんは千歌たちになんて言ってたの?」

問いかける果南も若干語尾が強くなっている気がしたので、彼女も良くない感情を抱いているのは確かだった。

「特には……」

「行方不明になって心配だからって」

「それだけです。俺たちが聞いたのは」

「それで、そちらの方は?」

すると今度は月の方へ視線が向けられる。彼女たちからしたら素性も知れぬ人物だ。怪しむのも無理はなかった。

「初めまして。渡辺月といいます。曜ちゃんの従姉妹です。ヨーロッパ!」

が、そんな雰囲気には気圧されることもなく、いつも調子で自己紹介を済ませた。その性格のお陰だろうか、特に揉めることもなかった。

「流石……」

「曜ちゃんの従姉妹」

「……………」

「わかつてないんかい……………」

初対面でもすぐに打ち解けていく様は曜と似通った部分なのだが、当の本人はあまりわかつていないらしい。けれど、逆に無自覚の方がいいのかもしれない。

すると、階段を登り切った花丸が到着。しかし螺旋階段で目を回したらしく、その場に倒れ込んでしまう。

「でも、千歌たちが何も知らされていないってことは……………」

「ダシに使われたってことですわね……………」

「俺たちは駒……………ですか……………」

花丸の心配もあるがそれよりも、話を進める。

あまりこういつた言い方はよくないが、状況からみれば自分たちは駒なのだと表現するしかない。

「ええ。千歌つちたちが来るってわかれば、私たちが必ずコンタクトを取る」

「それで誘き出して……………」

「捕まえようって魂胆ですわ!!」

ダイヤが取り出しのは一枚の張り紙。たずね人として3人の描かれたそれには涙を浮かべる鞠莉と、彼女に襲い掛かろうとしている果南とダイヤが描かれていた。正直、

描いた人の悪意が見えている気がしてならない。

どうやら街中に貼られているらしい。指名手配か何かか。

「うおっ!? ナンダコレ?」

別行動中のゼロも例に漏れず、街中でその張り紙を見つけていた。

「じゃあ、行方不明っていうのは嘘だったんですか?」

どうやら行方不明というのは千歌たちをイタリアに向かわせる口実だったらしい。

すると後ろ方からザワザワと人だかりのできていく音が聞こえてきた。振り向けば、

あの張り紙を持った人々が紙とこちらに視線を行ったり来たりさせている。

「ここにあまり long stay は無理デスネ……」

「いたぞ! 鞠莉お嬢様!!」

今度はなんと、黒いサングラスに黒いスーツを纏った屈強な男たちまでもが乱入して

きた。彼らの口調から察するに小原家に仕える人達だろう。

「まさかの黒服!」

「本当にいるんだな、黒服」

「言ってる場合!」

混乱の渦も酷くなってきたところに、鞠莉はある物を投げた。宙にひらひらと舞うそ

れは黒と白のストライプの――

「制服!!」

「「だめええええ!!」」

曜と月は制服に飛びついた。しかしここは最上階。重力に引かれ落ちていく2人を何とか抱き着いて止める。その後、一眞の力もあつて引き上げることができて事なきを得たのだが……。

「曜の従姉妹だからつてそこまで似るのかよ……」

「ごめん……」

「あれ……鞠莉ちゃんたちは!」

3人の姿が消えていることに気付いた時にはもう遅く、既にボーヴォロを降りてしまっていた。

「詳しい話は nothing デース!」

「くそ、逃げられた。追うぞ!」

「はい! あつ、押さないくだ——ああああつ!」

鞠莉を追うべく、黒服たちも大急ぎで階段を下り始めていた。

3人が消えていったことにより、すぐさま帰ってくる静寂。

だが、ここにいる誰もがその結果に納得いかなかった。鞠莉母が何故、Aqours を使つてまで3人を誘き出そうとしたのか。そして街中に貼れた紙。先程の鞠莉たち

の行動。すべてに理由があるのは明白だ。けれど、ここに居る8人はここまで知らなかったし、教えてもくれなかった。蚊帳の外といったところか。

「もしかして、お母さんから逃げてるずら〜？」

「反応を見ると、そうかもしれないな」

しかしこれも推測でしかない。真相を暴くためには、本人たちの口から行ってもらうのが一番だ。そのためにもすぐさま追いかけていところだが、彼女たちがどこへ向かったのかはわからない。

「はあ……取り敢えず、ここを降りてから考えよう」

「うん……そうだよね」

ぞろぞろと階段を降り始めるが、花丸だけはまだ倒れ込んだままだ。

「花丸、休んでるとこ悪いが降りるぞ」

「今はちよつと無理ずら〜」

「ええ……困つたな。しゃーない。じゃあおぶつてやるから。それでいいか？」

「感謝するずら〜」

そうして8人はボーヴォロを後にするのだった。

「Oh……やつてしまった……」

走りながらも鞠莉は落ち込んでいる様子だった。おそらく、手に持っている紙が原因だろう。

「制服に仕込ませたんじゃないの？」

「そのつもりだったんだけど……てへぺろ」

「じゃ、ありませんわ！ 千歌さんたちはどうするんですの!?!」

制服に仕込ませたつもりだったが、実際のところ仕込ませていなかったという痛恨のミス。

「わかってる、わーかってるって！ そう言つてもしよーがないでしょ！ それに今戻ったら捕まっちゃうじゃない」

自分のミスであることはわかっているが、どうもダイヤから言われるとついつい反論したくなってしまう。

「ならどうする？ 前みたいに一部を写真で送る？」

「それしかありませんわ」

今戻れば、間違いなく黒服と鉢合わせになることは間違いない。であれば、以前のよ

うに風景の一部だけを写真に収め、メッセージで送るしかないだろう。

「おつ、こんなところにカワイ子ちゃんか3人もいるじゃんか」

「お、ホントじゃんイタリアまで来てラッキーって感じ〜?」

「それな! つてことで俺らと遊ばない?」

最悪だ。今度はなんとナンパ3人衆に出席してしまったではないか。いかにもここで遊んでいますと伝えてくる風貌に顔を顰めそうになる。

「今はそんな暇ありませんので!」

「ええ? ここまで来て暇無いわけじゃないじゃん?」

「ああもう、私たち急いでるから!」

言い訳のない若い男たちの対応と自分達の置かれている状況で思わず声を荒げてしまふ果南。途端、男たちの表情が一変する。

「んな事言つて良いわけ? 俺たちが力尽くでやったつて良いんだぜ。なあ?」

「おうよ」

「まあ、そつちの方が面白そうだよな」

目を光らせて、ジリジリと歩み寄ってくる男たち。逃げようにも後ろからくる追手に捕まってしまうのがオチ。

挟み込まれてしまった彼女たちは、必死に考えを巡らせるが打開策は見つからない。

黒服と男3人が揉め合う状況にでもなればいいが、そこまで時間稼ぎする余裕はないだろう。現に目の前の男たちはすぐにでも飛びかかってきそうなのだから。

「フラれたからって今度は襲うのか？ そいつは感心しねえな」
響き渡る声。だがその影はない。

「ああ？」

見渡す6人の視線は屋根の上へ。男たちから見た声の主は逆光で見えなかった。シルエットともいえるそれはちょうど鞠莉たちと男どもの中心に着地した。

「なんだお前？」

「お前らに名乗るつもりはねえよ」

その男は鞠莉たちと同じ年か、少し上くらいの青年だった。

男たちはその姿に爆笑する。お前1人で何ができるとか、粋がんなほくちやんとか……。要は馬鹿にしているのだ。相手が自分たちよりも年下のようなだったから。

「あなたは……？」

「オレはゼ……つってもわかんねえか。暁一眞の知り合いだ。コイツらはオレに任せてさっさと行きな。急いでんだろ？」

彼の眼はとても鋭かったが、かと言って怪しい者ではないと直感が告げている。言うなればそう、幾度も見たあの巨人たちに近い安心感。

すると3人は見合つて頷き、4人の脇を駆けていこうとする。

「ちよ、いかせ——」

手を伸ばそうとした1人の腕を掴み、後方へと押しやる。

どうやら押しつけた力が強かったか、後ろの2人も巻き込んで尻餅をついてしまう。

「汚ねえ手で触んな」

この隙に行くようにと、首の動きだけで指示を出す。

「ありがとう。そうだ、一眞の知り合いならこれを渡してくれない？」

「おう。任せろ」

そう言つて鞠莉は紙を渡した。

「この御恩は忘れません」

「ありがとうね」

走り去つていく少女たち。残つたのは野郎だけ。

「どうする? ここまで帰れば見逃してやるぜ、僕ちゃん?」

折角のお楽しみを不意にされ、拳句に馬鹿にされたとなれば黙つちやいない。

「んだとこの野郎っ!」

殴りかかつてきた腕を掴み、逆に腹へと1発くれて放り投げる。

「そうかよ。……来な」

口元を拭い、構えを取った青年は迫る男たちへ拳を振るった。

「ここら辺に行っただけ……」

手掛かりもなかったため、取り敢えず鞠莉たちを追う人々の後をつけることにした一行。しかし途中で見失ってしまい、もう成す術なしといった状況だ。

失意のまま進み続けた一真たちだったが、とある人影を目にしたところで足を止める。

「よう。もう少ししたらお前らと合流しようと思っただけだ」

男3人を下敷きにし、その上に座り込んでいたゼロが手を振っていた。

「どうしたんですか……これ……」

「こいつらはナンパに失敗した拳句に襲おうとした馬鹿どもだ。気にすんな」

気にするなど言われても、伸びている男に座るゼロという姿を前に気にするなどは無理がある。

「ここに来たんなら丁度いい。ほら、金髪の子から預かったもんだ。お前らに渡すつもりだったらしいぜ」

ゼロから手渡された紙に目を通す。横に描かれたイラストから鞠莉が書いたことは間違いないだろう。

「読めるか？」

「いいえ。ゼロさんは？」

「……読めねえ」

千歌たちも目を通すがイタリア語で書かれている為か、読み解くことはできない。文字の羅列をじつと見つめるだけだったところに、救いの手が差し伸べられた。

「ヨハネが守護する地を見下ろす時、妖精の導きが行く先を示すであろう」

月が横から内容を訳してくれたのだ。読み解けて嬉しかったが、それでも意味が分からない。

「ヨハネ？」

自分が呼ばれたと思い、自身を指さす善子。しかし書き記されている内容は違うだろうと月。ヨハネが守護聖人の地フィレンツェの事だろうと推測した。

「じゃあ、今度はフィレンツェに行くってことか」

次なる目的地が決まったとなれば、一行は即座に移動を開始する。

善子は別の意味で嬉しさを表情に滲ませているのだったが、それに気付いていたのは梨子だけだった。

（ ）

フィレンツェに着いたのは、既に日が傾き始めていた頃だった。

「はあく、疲れた」

「やつぱり電車移動ってのは大変だな」

フィレンツェに来るのには電車で約2時間揺られたわけであり、少し体が痛い。さらにお腹も空いてきたとのことでフィレンツェ中央市場のフードコートに寄っている。

「ですよね。わかりますか」

「ああ。特に日本の通勤ラッシュはな……精神の修行にはもってこいだが、それはそれとして気が滅入るってのを覚えてる」

男仲良く話が盛り上がっている隣で、千歌たちは鞠莉たちからの再接触を待ってい

た。

「待っていれば向こうから接触してくる……のかしら？」

梨子は周りを見渡してそれっぽい人物がいなか確かめる。……がいる筈もなかった。

「携帯は？」

曜の問いかけにルビイは首を横に振る。

彼女が言うには、携帯で連絡をしようとするとうと鞠莉母にバレてしまうからでは……というこららしい。

「そりや大変だな。けど、連絡ないとどうすることもできないし……」

すると月が皿に盛りつけられた分厚いステーキを持ってきた。ビステツカ・アツラ・フィオレンティーナというフィレンツェの名物らしい。

「でつつつか!!」

そのあまりの大きさに男2人は立ち上がってまじまじと見つめている。

だがその傍ら、一眞はそれが月なりの励まし方であるとかちゃんと理解していたのであった。

「サンキューな月」

「え、僕は別になにもしてないけど？」

「そうかい。ならそうとつとくよ」

すると、はたまた一人欠けていることに気が付く。今度は善子がいなくなつたのだ。

「善子ちゃん！ ヨハネちゃん!!」

「消えた？」

「あの墮天使、今度は自分が行方不明になつてゐるじゃない」

呼びかけても反応せず、見渡してもそれらしい姿は見えない。つまりこの場所には居ないと見た方がいいだろう。知らぬ地で迷子だなんて笑つていられる事態じゃない。

「心当たりは？」

善子の生きそうな場所……。墮天使やそういつた関係で美術館とかだろうか。そんな推測を一眞が口に出す前に、ルビイがもつとも有力な情報を提示してくれた。

「善子ちゃん、ヨハネつてずっと呟いてた」

「もう、いつもいつも……」

「怒るのもわかるけど、チェリーなんたらナイトメアはすんなよ？」

「しないって！ てかなんでそれ覚えてるの!？」

そんなやり取りをしつつ足を運んだのは、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂と呼ばれる教会。巨大なドームが特徴の大聖堂は、フィレンツェのシンボルになっているとのこと。

「でつつつか!!」

男2人、2度目の驚愕。

だがその外観に見とれている場合ではない。ここを訪れたのは善子を探すためだ。しかし、辺りを何度見渡しても、ゼロの視力をもつても彼女を見つけ出すことはできなかつた。

だって、見ている方向が逆なのだから。

「善子ちゃん……」

「なにしてるはずら?」

「善子ではありません。ヨハネです」

白い羽のような装飾だったり、お団子にした髪の毛の部分に白い羽を着けていたり、普段の彼女とは真逆の色だ。

「私は今、墮天使ヨハネではありません。守護聖人ヨハネからこの地で天使の生を授かったのです」

「お、天界に引き上げられたんだな。よかったよかった」

「え、いいのか？」

呆れたのか、それとも天然なのか……善子の報告に嬉しそうに頷く一真へゼロは怪訝な表情を向ける。

「いろんな子がいるんだねえ」

隣では月が楽しそうに笑っていた。

改めて見ると確かにそうだなと、一真も感じる。どうやら、1年もいると感覚が麻痺するらしい。

さらに、善子はクーパーと呼ばれるドウオーモの天蓋部へ行こうと提案する。どうやら拒否権は無いらしく、既に天使のお導きただのチケットを手に持っていた。

加えて15ユーロをお納めしてくれとも言われた。とは言っても購入してきてくれたのだから、そのくらいはしなれば。

「あなたもよ。空から舞い降りた我が同胞」

「え、オレも？　ってか同胞ってなんだよ」

「白銀の翼を広げ降りた来たではありませんか。この地上に」

「イージスのことを言ってるのか？」

「まあまあ、あまりツツコンでも身が持たないので、諸星さんも行きましょう！」

ゼロの分も購入していたらしく、共に天蓋部へ向かうことになった。

ちなみに彼の資金ついてなのだが「何も聞くな」と言われてしまった。触れてはいけないこともあるのだと、その時一眞は思った。

「日本だと見ないわよね。こんなに統一された街並みって」

展望デッキから見渡せるのは、フィレンツェの街並み。赤いレンガ式の屋根が辺りを埋め尽くしている様は、梨子の言うように日本では見られないものだ。

「何百年も前からずっと変わらないんだよ」

月の話を聞きながら、一眞は辺りを一望する。日本と異なる街並みが、何百年も前から築き上げられて今も残っている。自分にはまだまだ知らないことがたくさんあるのだと、目を輝かせていた。

「地球……いいとこだよな」

「はい。俺もそう思います」

ゼロの言葉に笑顔で答える。

こういった素晴らしい面があるからこそ、侵略者と戦ってきた面もあるのだと、今はそう思える。

「あれは……妖精の瞬き！」

すると、遠方の方で光る何かを発見する。ここからでしか見ることができないであろう耀きは、こちらに向かい合図しているかのようだった。つまりはアレは……。

「お姉ちゃん！」

ダイヤたちが発しているということだろう。

くく

光の見た方向へと公共交通機関を駆使し到達したころ、辺りはすっかり夜になっていた。

あまり賑わっている場所ではなく、今は風で揺れる木々の音が辺りを支配するのみ。そんな中目を引くのは、1軒の大きな豪邸だ。

「でつつつか!!」

男ども、3度目の驚愕であつた。

「でも本当にここかしら？」

梨子が不安そうに尋ねる。

それもその筈。電気がついているのは正門だけであり、他に明かりが点いているようなところは見当たらない。要は人の気配がないのだ。

「うん」

しかしルビイははつきりと首を縦に振って肯定した。

ここで突つ立てもいられないと、千歌は「こんばんはー！」とあいさつを飛ばす。静かなせいか、余計に声が響く。

するとベランダの方から3人が生えるように出てきた。目を凝らすと、指を口元に当てたジェスチャーをしている。騒ぎ立てるのは良くないらしい。

「広い……」

その後中へ通されると、待っていたのは広い部屋に豪華なシャンデリアだった。

「今度は尾行されなかつた？」

「大丈夫、途中で何度も道を変えたし」

再び巡り合えたことに安堵していると、3人の視線は一真の隣にいる男に向けられる。

「先ほどはありがとうございました」

「いいや。礼なんざいらねえよ。オレがしたくてしたことだ」

フツと笑つて見せるゼロ。

おそらく、あの倒れていた3人の男どもは鞠莉たちに襲い掛かろうとしたのだろう。ゼロの助けがなかったとなればゾツとする話だ。

「あの後ママからはなにも連絡ないの?」

お礼を終えた後、鞠莉の問いは千歌へと投げられる。彼女から何もなかったという旨を伝えられ、納得した鞠莉はそれつきり黙つてしまう。

「一体何があったんです。ここまで来て何も知らないつてのは……」

一眞は鞠莉へ訊いてみるが、彼女は「ちよつとね……」とはぐらかしてくる。詳しくは教えてくれないようだ。

「なんで隠すんですか?」

この言葉を一眞が言う資格はない気がするのだが……と頭の片隅で考えてしまったのは、月とゼロ以外の全員。しかし、千歌たちも知りたがつているのは事実だった。

「確かに……ここまで来て知らされないというのはかわいそうですわ」

言い方は悪いかもしれないがダシに使われ、イタリアまで来た7人。彼ら彼女らが事情を知らず振り回されっぱなしというのは流石に思うところがあるのだろう。ダイヤ

は鞠莉を説得するが、それでも彼女は口を割らなかつた。

何かあるとは思っていたが、それほど深刻なことだとは思わなかつた一眞は息を呑む。

すると口を割らない親友に代わり、果南が答えてくれた。

「鞠莉が結婚するの」

想定よりもはるか上……いや斜めか……。ともかく頭にはなかつた衝撃の答えに、一同は固まってしまふのだった。

第VI章 — 繋いだ想いは—

「鞠莉が結婚するの」

果南から告げられた言葉に、一同は固まってしまふ。

彼女の母親から3人が行方不明になっているから探してほしいと頼まれ、現地で会えたとなれば実は嘘で……その挙句に何が起こっているのかと聞けば鞠莉の結婚。混乱しないはずがなかった。

「結婚で……いつの間にそんな話が!？」

一眞を皮切りに、曜や花丸、梨子などが問い詰める。しかし鞠莉は「しないよ」ときっぱり言い切った。

「しない……?？」

また状況が掴めなくなりそうだと首を傾げ始める千歌たちを横目に、鞠莉は混乱の元を作った人物の方へ顔を向ける。

「果南、ふざけないで!」

「でも実際そうでしょ?」

混乱を招く言い方をしたことだからか、言いづらいことを彼女が言ったから……おそら

くは両方だろう。そんな果南を鞠莉は非難するが彼女には通じていない。現状のままでは、本当に結婚することになってしまふのだからと。

「だからそうならないようにするんでしょ？」

「あーもうわけわかんないよ。わたし達にもわかるように説明して！」

こちらにはまったく意味不明なまま話が進んでいることに痺れを切らした千歌の叫びが屋敷に響く。声に出さないとはいえ、他の人達も同じ気持ちだ。

「つまり縁談の話がある、ということですか？」

「縁談って……」

「しかも相手は一度もあつたことがないような人よ？ 私が首を縦に振ると思う？」

一生を添い遂げる相手であればある程度の信頼が必要だ。なのに一度も顔を合わせたことのない人物と一緒にするというのは、一眞から見ても納得しがたいものだった。

「でもわからねえな。なんでそんなことをするんだ？」

ここまでは話を聞くだけに徹していたゼロも、黙っていられなくなつて鞠莉へ問いかけた。そこに返ってきたのは、シンプルでいて残酷な理由であつた。

「鞠莉の自由を奪いたいから」

鞠莉の母は、昔からダイヤや果南のことをよく思っていないということが語られた。先の張り紙も悪意があるような……ではなく、悪意があつてやったことになつてし

まう。完全な私怨とも捉えられるが。

素直に言う事を聞いていた鞠莉が2人と関り、勝手に行動するようになった。その果てはこれまでの行動が物語っているだろう。

「それにスクールアイドルにも、いい印象がなかったのかも……」

だからといって、自由を奪うために縁談の話を……となるのは些か強引ではないかと思ってしまう。しかし、人の家にあれこれ言うのも遠慮したいものではある。

「それじゃあ、卒業旅行も……？」

「そう。ママにわかってもらおうと思っ書置きしてきたの。私はあの時の私じゃない。自由にさせてくれないなら戻らないって」

「でもここまで本気になるとは思わなかったけどね」

確かに果南の言うとおりだ。A q o u r sを現地に向かわせ、さらには張り紙までばら撒くとは。

「おい、これってお前たちが口を出して言い範疇を超えてないか？」

「正直なところ、難しい問題だと思います。でも鞠莉さんが困っているのなら、やっぱり……」

一真にも……一真たちでも家族の問題が関わってくるようでは、できることは限られてくる。しかしそれでも、助けたいと思っっているのが友達というものだ。

ああやって聞いてきたゼロではあるが、どうやら予想通りの答えだったのか口元に笑みを浮かべている。

「天使ヨハネの願っ——!?!」

ゼロと一真が話している中、少女の絶叫と共に草木の賑やかな合唱が外から聞こえてきた。

「おいおい、どうした!?!」

ベランダに移動してみると、どうやらいつの間にか移動した善子が手すりに乗りさらに足を滑らせて落下したらしい。

けれど木の枝に助けられ怪我はないみたいだ。

「よかった」

「ほんと墮天使ね」

「上手くないわよ! それより早く助けなさいよ!!」

「カズくん」

「へい」

先ほどの空気から、若干ではあるが懐かしい雰囲気に戻った。張り詰めた空気を壊すように息を吐きながら、一真は善子を助けるために下へと向かうのだった。

「墮天使降臨！」

屋敷に戻るなり、天使ヨハネは墮天使ヨハネに無事戻つたらしい。そもそも元々のノリすらも問題あるというのは梨子の言葉である。

「善子、お前さ……」

「一眞、それ以上言うとなあなたの明日はないわよ。あとヨハネ」

「へい」

ソファアで座っている一眞は何かを言おうとしたが逆鱗に触れる内容だつたらしい。彼女に睨まれて口を閉じる。

「とにかく、これからどうしようか。千歌たちも巻き込んだからちゃんと考えなきゃ」

全員が集まり、状況を共有しあつた。ではこれからどうしていこうか。早速話し合いを始めようとした瞬間、力強くドアが開けられる。外国に来て、A q o u r s は「予想外に事態」とやたらに好かれているらしい。

「ようやく見つけマシター！」

なんと鞠莉母が屋敷に乗り込んできたのだ。

「こんなところに隠れているとは、またハグウの入れ知恵デスカ？」

「違うわ！ 私が考えたの。ママがしつこいから……」

鞠莉と母親の対面。普段であれば喜ばしい場面なのだが、今現在はそう言い難い。母親の乱入によって、部屋一帯には言い表すことのできない重たい空気が満ちていく。

「しつこくしてこなかったからこうなったのデス。小学校の頃に家から抜け出した時、学校を救うためにこつちちの学校をほつたらかして、浦の星に戻った時……。パパに言われて堪えてきましたが、その結果がこれデス！」

母親に鞠莉は臆せず尋ねれば、彼女は丁寧な答えてくれた。

「何一ついいことはなかったではないですか。学校は廃校、鞠莉は海外での卒業の資格を貰えなかったのですよ!？」

耳の痛い話だ。母親の言う様に学校を救おうと日本へ戻ったが、多くは悪い方向へ向かってしまった。

卒業の資格を捨ててまでする必要があったのかと聞かれれば、首を縦に振ることも、横に振ることも躊躇ってしまうだろうと一真は感じていた。

「待つて、でもSchool idolは全うした。皆と一緒にラブライブは優勝した

わ！」

しかし冷たく「それが」と返されてしまう。そんなものに価値はないと言っているような口ぶりだ。実際「スクールアイドルをやって何の得があったのか」と続けるように口にしていった。

「……くだらない」

母親の溢した一言に、誰もが反応する。しかし誰もが堪える。「こういう人」だと、鞠莉が言ったから。

「だから私たちは、鞠莉を外の世界に連れ出したの」

一度無駄だと判断してしまえば、どこまで行っても無駄なことだと判断してしまうのだろう。

スクールアイドルが認められない……この感覚はあの時と似ている。静真の説明会の時と。

「Shut up!とにかく、鞠莉の行動は私が——」

「くだらなくなんかない!」

鞠莉の手を引こうとするのをダイヤと果南が引き留める。さらに鞠莉の心からの叫びが、母親の行動にブレーキを掛けた。

「School idolは……くだらなくなんかない! もしSchool idol

「I がくだらなくなんかないって、凄く素晴らしいものだって証明出来たら……私の好きにさせてくれる?」

無言で見つめる母に、鞠莉は続ける。

「ママの前で School idol が人を感動させられるって証明出来たら私の今迄を認めてくれる?」

「縁談なんかやめて」

「わたくし達と自由に会うことを認めていただけますか?」

果南とダイヤの様に言葉にはしなかったが、Aqours 全員は3人の後ろに立ち母親へ訴えかける。

「いいでしょう。ただし、ダメだったら私の言う事を聞いてもらいます」

それだけ言い残し、鞠莉母は部屋から出ていくのだった。

くく

「んで、どうすんだよ。母親にあんな啖呵切つといて何もありませんってわけじゃねえだ

ろ?」

「当たり前じゃないですか。ライブをするんですよ。ライブ」

「ライブ?」

「スクールアイドルですからね。見てもらうのが最速最短つてやつです」

あの日から数日が経ち、今は再び調査で離れていたゼロに近況を報告している最中だ。

鞠莉母に証明するにはライブをやるしかない、翌日からライブ場所を探すことになった。ほとんどが観光の延長線上だったが、楽しむこともできたのでwinwinwinということまで収まっている。

しかし場所を決めたのは鞠莉たちではない。ましてや千歌たちでも。

「今回のライブ、ルビィたちに決めさせてほしい」

それが今夜ルビィの口から出た言葉であり、1年生3人の総意であった。これまで頼りきりだったからこそ、今回は自分たちに……そうお願いされたのだ。

「オレはこれまでの事を知らねえが、あいつらも成長してるってことだ」

「はい、そうだと思います」

微笑む両者だったが、そこでゼロは指を指した。

「で、お前の方はどうなんだ?」

「え？」

「え？　じゃねーよ。お前の顔に書いてあんだよ。絶賛お悩み中ですってな」

まさか言い当てられるとは思っていなかった一眞は、目を丸くして固まる。確かに悩んでいることはある。でもそれは……いや、彼だからこそ向き合ってくれる問題かもしれない。

「ゼロさんには敵いませんね。そうです。俺は悩んでる」

決意した一眞は、ポツリポツリと話始める。

「俺は……この星だけじゃなくて、もつと広く……多くの星を救いたい。助けを必要としている場所に駆けつけて、多く命を救いたい。ウルトラマンとして。でも……不安なんです。この星を、みんなと離れることが……。ウルトラマンなのに、情けない話だとは自覚してます……」

だがゼロは笑うことも、否定し軽蔑することもなくただ黙って聞いていただけ。彼の話が終わるまでずっと。

「オレはウルティメイトイージスの力で、いろんな次元のウルトラマンと共に戦ってきた」

ゼロは左腕に巻かれた銀色のブレスレット“ウルティメイトブレスレット”を一眞に見せながら話してくれた。

「そいつらとは滅多に会えねえ。それでこそ宇宙の一大事ってレベルじゃなきやな。でも、オレはそんなくらいであいつらとの繋がりが……絆が途切れたなんて思っちゃいねえ。例え別々の場所でも、それこそ別の次元でも、オレ達は繋がっている。想いはずっと……残っていく。ここにな」

そう言つてゼロの拳は、一眞の胸を叩いた。

「どんなに離れたつて、どんなに時間が経つたつて、その絆が途切れる訳じゃねえ。互いが互いを信頼し、背中を押しあっているんだ。今もどこかで戦っている仲間たちがな」
「ここに残っていく……決して途切れない……」

胸をさすりながら、一眞はゼロの言葉を繰り返す。

ここまで紡がれた絆は、そんな簡単に消え去ることはない。見えなくとも、触れることができないくとも、築かれた想いは残っている。それが力となり、背を押してくれる。

「まあ……親父たちや、メビウスからの受け売りみたいなところもあるけどな」

などと笑っているゼロだが、彼の口から語ったことは受け売り以上に自身の経験に基づく部分が大半を占めていることだろう。だってゼロの話は、自然と一眞の胸の内に響いてきたのだから。

「つつつてもこれは参考程度の話だ。実際に決めるのは一眞、お前だ。それは忘れんなよ？」

「わかってます」

薄っすらではあるが、何かが見えようとしている。それだけでも十分だ。

「さて……オレはもう少しここらを見てくる。お前ははやく戻れ。A q o u r s のマネージャーとしてやんなきゃいけないこともあるんだろ？」

「はい。ありがとうございます」

一眞はホテルへ。そしてゼロは街の方へそれぞれ歩き出していく。

戻っていく一眞の背中へ、先ほどよりもどこかたくましく見えるのだった。

くく

翌日、太陽が眩しく見渡す限りの青空の元、一眞たちが居るのはローマ。

人々で賑わう中、隣にいる月がビデオカメラを構えようとしていたのは、スペイン広場の中にある130段以上の大階段“スペイン階段”。

「ビデオカメラ、ありがとな」

「ううん、こういうのは得意だからさー！」

今の彼女たちならば大丈夫だろうという安心感が一眞の中にはあった。

昨夜、千歌と曜も果南や鞠莉と話ができたらしい。ここに来た理由、そして新しい A
ours とは何なのかを。今の一眞と同じであれば、おそらく彼女たちも何かを掴ん
でいるはずだ。

「一眞くんはどう思う。今回のライブ」

月が問いかけてくる。今回のライブに失敗は許されない。月にとつて、以前見たもの
が見たものなので若干の不安があるのだろう。だが自身を見つめ直すことができ、そ
して3年生とも話せた今であれば――

「最高の結果になると思うよ」

「そっか……うん、僕も楽しみだよ！」

「だろ？ 講堂で見たもんとは段違いさ」

しかしここでアクシデントが。

「おい、一眞！」

声の方向に目を向けると、ゼロが走ってくるのが見えた。普段とは異なる彼の雰囲気
を察し、少年の目つきから戦士の目つきに変わる一眞。

「ごめん月、ちよつと外す」

「ええ!? ライブ始まっちゃうよ!？」

「すぐ戻る！」

ライブを見れないのは残念だが、自分に課せられた使命がある。彼女たちを守ることにも繋がるため、投げ出すことはできない。

「ゼロさん！」

「レイバトスが仕掛けてきた。行くぞ！」

未だ日常を謳歌している人々を風のように潜り抜け、2人は高台に上る。

彼らが見据えるのは海。そこには禍々しいオーラが立ち込めていた。そのオーラは3つの形を作り、怪獣の肉体をもつて海に生れ落ちた。

ウチユウライジユウ 宇宙雷獣 スーパ 超パズズ

レイトウカイジユウ 冷凍怪獣 ラゴラス

ウチユウ 宇宙ロボット キングジョーカースタム

「こんな時に……」

呼び出された怪獣及び、ロボット怪獣は陸しちらに向かって進み始めた。

「ああ、こんな時だからこそかもな。オレ達を誘ってんだろう」

「……」

ゼロの推測通りであれば、自分らがイタリアに來ているのはバレていた。そして誘い出すかのように怪獣を呼び出した。まるで掌で転がされているようだ。

「だとしても……ですよね？」

「わかってんじゃないかねえか。オレ達がいる星で破壊行為なんざ、2万年早いぜ！ 行くぞ

「一真！」

「はいー！」

例えレイバトスの誘いだったとしても、怪獣たちを暴れさせていい理由はどこにもない。あの3体を倒してライブを守り抜く。そんな決意を胸にゼロは左腕を突き出し、一真はオーブカリバーを手に取った。

第七章 一海上巨人対決一

「行くぞ一真！」

「はい！」

ゼロは左腕を突き出してブレスレットから眼鏡型アイテム“ウルトラゼロアイ”を取り出す。目元に装着するゼロと、カリバーを掲げた一真。途端、光が両者を包み込みその体を超人へと変えていく。否、元の姿へと戻していく。

強烈な光が宙で爆ぜ、海上に降り立つ2大ウルトラマン。衝撃により巨大な水柱が立ち昇る。

「地上には上がらせるなよ」

「わかってます」

「オツケー、んじゃあ行くぜ！」

上陸されてしまえば街の被害は甚大なものとなるだろう。ライブだつてすることが叶わなくなる。ここが異国の地であってもやることは変わらない。大切なものを守るために、構えを取った両者は走り出す。彼らが走り出したと同時に、怪獣たちも進撃を開始したのだった。

「ハアッ！」

オーブカリバーの横薙ぎがラゴラスの胸部を捉え、柄頭の衝撃が超パズズを後退させる。側面から迫ってきたラゴラスの反撃を防ぎつつ蹴りを横腹に入れ、裏拳がもう1体の顔面にヒットする。

「オオオ……ラアア！」

キングジョーカーカスタムとゼロがぶつかり合い、大きな衝撃が空気を揺らす。肘打ちや掌底打ちを組み合わせながら攻め立てていくゼロ。そして豪炎を纏った脚部が頭部のフレームを歪ませた。

「今だ！」

ゼロが屈み、オーブは飛び越えるようにして金色の機体に蹴りをかます。背中合わせになり、聖剣の一撃が超パズズの元でスパーク。二刀の閃光がラゴラスに走る。

「ゼロさん」

「応っ！」

オーブは両腕、片足の三点を使ってゼロを投げる。渾身の力で投げ出され突き進んでいった彼の巨体が、超パズズに覆いかぶさる。

即座にとった連携技で不安があったものの上手くいったようだ。しかし安心することではできない。馬乗りになったゼロの追撃を阻止するかの如く、キングジョーカーカスタムの特徴ともいえる右腕の大口徑ライフル“ペダニウムランチャー”の砲撃が炸裂する。

「ンの野郎……！」

海上を転がってしまったゼロは即座に起き上がりつつ、ゼロスラッガーを投擲――

――するも、4機に分離され躲かされてしまった。

「……チッ」

さらにその4機の状態でゼロを追い詰めんと、翻弄しながら砲撃を繰り返していく。的が常時動いている上に、ランチャーの連発が狙いをつけることを、近付くことを許してくれない。

「クソ……オーブ、そっちの2体は頼む！」

「はい！」

乱戦だった先までの状況が一変。

意図せずしてゼロとオーブを離れたように見えるがそれは違う。戦況を鑑みて戦力

の分断を図ってきたのだ。ここまで統率がとれているのは、どこかで見てるであろう亡霊魔導士の仕業に間違いない。怪獣と戦いながら、2人はレイバトスに怒りを燃やすのだった。

「■■■■……」

自身の攻撃が一向に当たらず、攻撃を貰うだけの現状に憤慨したのだろうか、超パズズは頭部に生えた角の形状を変化させた。まるで“∞”ともいえる形をとってから、絶え間ない雷の雨を降らせてきた。

再度カリバーで防ごうと試みる。しかし無作為に落ちてくるため場所の予想などできるはずもなかった。つまるところ1、2発を防ぐのが限界で、遂にオーブは被弾してしまう。さらにラゴラスの口から放たれた冷凍光線に左足が被弾。足が氷塊に包まれる。

「やってくれる……」

身動きが取れなくなつたところに超パズズの足蹴り。宙を舞ったオーブは、巨大な水

飛沫を上げながら倒れ込んでしま——

——う寸前、オリジウムソーサーを2体に向けて投擲。一瞬の隙に体制を立て直し、空へ飛び立つ。彼のいた場所には雷と冷凍光線が撃ち込まれる。

「こつちだ！」

両方とも空を見上げるが、逆光によつてよく見えていないだろう。青い光線や雷が彼を叩き落とさんと放たれ始めるが、シルエットにも見えるオーブには一切当たらない。

網のような光の中で、オーブは最大の一撃をラゴラスに向けて撃ち込んだ。

「オーブスプリームカリバアアアア！」

空から落ちてくる虹色の柱を前にしたラゴラスは、成す術なく爆発した。

目の前で黒い煙が消えていく。しかしそんな光景には目もくれず、超パズズは攻撃の手を緩めない。攻撃対象であるオーブは空中でナイトロキデイターへフュージョンアップ。迫る雷を相殺しながら落下していく。

「クラッシャーナイトロキデイター」

空中で巻き起こる爆発と煙を突っ切つて、二刀の光剣を交差させてから振り抜いた。凄まじい音を立てながら頭部の角が切断。無論、超パズズは憤怒に満ちた目をオーブに向けて猛攻を加えてきた。だがそのどれもがオーブには当たらない。蹴りの連撃で怯ませた隙に背後へ回つた彼は尻尾を掴み、ジャイアントスイングで勢いをつけてから投

げ飛ばす。

「これで……終わりだ」

両手にエネルギーを集めて生成した波動弾を放つ。もろに受けた超パズズは爆発で粉々に砕けてしまった。

「いい加減にしやがれ……おわっ!？」

瞬間、キングジョーカスタムの拳に顔面を捉えられ吹き飛ばされる。足に力を入れ、なんとか転倒せずに済むものの、強烈な痛みが熱とともに伝わってくる。口元を拭い、殴り掛かるゼロ。しかしまたしても分離を駆使して躲される。縫うように背後へ移動し、ヒト型となりゼロを押し倒す。馬乗りになったキングジョーはゼロを一方的に殴りまくる。

「がああああ……」

機械特有の馬力にはさすがのゼロも抵抗できず、攻撃を受け続けることしかできない。

「ハアアアア！」

その時、遠方から突進してきたナイトリキテイター。彼の不意打ちがキングジョーを突き飛ばし、ゼロを救い出したのだった。

「大丈夫ですか、ゼロさん」

「ああ、なんとかな。こっから反撃行くぞ！」

ゼロの声と共に走り出す。すると両者の体から迸るのは真つ赤な炎。オーブはバーンマイトへ、ゼロはダイナストロングタイプとコスモスコロナモードの力を受け継いだ形態。前に進む力……”ストロングコロナゼロ”へとモードチェンジした。

「紅に……」

「燃えるぜー」

赤と銀の体に金色のゼロスラッガーを装備したその姿で、キングジョーカスタムの胴体を打ち砕かんと拳を振るう。

彼とスイツチしたオーブも拳のラッシュで反撃の暇を与えない。

「ハアアアアア……」

真つ赤に燃え盛った拳を両者が同時に打ち出せば、たちまちキングジョーは後方へ吹き飛んでいった。

このままドメに入ろうとするが、ここで新たな乱入者が。なんと黒い影が空から追

加で降り注いできたのだ。

天から降りた影は4つ。その内の2つは互いに交ざり合い、新たな肉体を形成する。

カザンカイチヨウ
火山怪鳥

バードン

ウチユウタイカイシユウ

宇宙大怪獣 ベムスター

ゼットンバルタン星人

「また面倒な奴らを」

数多のウルトラ戦士を苦しめてきた怪獣と、それらを融合させた存在。このことからレイバトスはこちらを本気で殺しに来ていることは確実だ。

ゼットンとバルタン星人を融合させた容姿を持つゼットンバルタン星人はテレポードでゼロを翻弄。背後に回り火球を放つ。しかしゼロも負けていない。長年の戦闘で培われた感覚が働き、振り返ると同時に炎を纏った拳で叩き落す。

「次から次に……！」

今度はオーブを分身で惑わす方向にシフト。囲まれた中心で立ち止まるオーブだったが、ゼロが横薙ぎに放った灼熱の熱戦が分身を消滅させつつヤツを地に伏せさせた。

助かったところだがまだまだ攻撃は終わらない。飛び回るベムスターとバードンが2人に襲いかかる。

「バードンの嘴には気をつけろ。一発でも当たったたら毒が回るぞ！」

「……ッ!？」

ベムスターと対峙するゼロの注意を元に、体を突こうと飛翔するバードンを冷静に捌いていく。そしてカウンターで打った拳が頭部に直撃。しばらくは意識が朦朧として動くことはできまい。

「今のうちに！」

ベムスターを払いのけ、オーブと共にゼットンバルタン星人を攻めていく。

「ストビュームバースト！」

「ガルネイト……バスターアアア！」

巨大な火球を、ゼロの右腕から放たれた猛火が後ろから押してブースト。灼熱のインパクトに耐えきれなかった合体怪獣は灰燼と化してしまった。

「次はテメエだ！ ウルトラハリケーン!!」

砲撃の雨を潜り抜け、機械仕掛けの体を高々と投げ飛ばす。名前の如く巨大な竜巻は、キングジョーカスタムと共に海水をも巻き上げる。

ハリケーンスラッシュに姿を変えたオーブも、迫るベムスターを踏み台にして空へ上

がる。

「ミラクルゼロスラッガー！」

濃淡が僅かに異なる青い体へとモードチェンジしたゼロ。コスモスルナモードとダイナミラクルタイプの力を併せ持つ守り抜く力……。ルナミラクルゼロ”となり、無数に分裂したゼロスラッガーを投擲する。

強靱なボディには通用しないが、それでも弱点は確かに存在する。人が着る鎧と同じように曲げる動作が必要になってくる部分……関節部だ。

「トライデントスラッシュュー！」

素早く、それでいて的確に切り裂いていく刃の群れ。そしてオーブスラッガーランスの斬撃。斬られ続けたヤツの体からは火花が散り始めた。

「光を超えて……！」

「闇を斬る！」

オーブの袈裟斬り、槍状の武器“ウルトラゼロランス”を手にしたゼロの逆袈裟斬りによってキングジョーカーカスタムは空中で爆発を起こすのだった。

残るは2体。着地とほぼ同時に走り出したそれは、もはや海を滑っているようだった。

「レボリウムスマッシュュー！」

ベムスターに右掌を当て、衝撃波を放って吹き飛ばす。

「くっ……重い……」

バードンと対峙するオーブは嘴をランスで防ぐが、刺し込んで来ようとする力が強く、接触するギリギリの距離となってしまう。

「エメリウムスラッシュュー！」

しかしそこへ通常形態へ戻ったゼロの光線が。なんと彼はゼロスラッガーを投擲、さらにそこへ命中させて反射、軌道を変えてある一点を狙い撃つというなんとも器用な芸当でオーブを援護した。

ゼロが当てたのはバードンの嘴の横にある袋。そこが毒腺であり、基部の血管を破壊する事で自身の毒が体内に逆流するというものであるからだ。血管を破壊されたバードンは苦しみ悶えながら後退していく。しかしその苦しみが怒りへのスイッチにでもなったのだろうか、叫びを上げ高熱火炎を放ってくる。オーブの元に着弾と同時に爆発。

———するのだが

ゾフィー

ウルトラマンヒカリ

フュージョンアツプ

ウルトラマンオーブ ブレスタースターナイト

つま先から頭頂部を包んでいた炎は光と共にかき消える。

火の中から現れたのは、蒼と赤の……両者の特徴を合わせたガウンを纏った戦士。2人の授かった勲章はカラータイマーとは異なつた輝きを放っており、その佇まいは悠然。海上に立ち太陽に照らされている姿は、まさしく誇り高い騎士であつた。

「光の誉れ、只今参上！」

右腕から光の剣を伸ばし、バードンに立ち向かつていくブレスタースターナイト。どの形態

よりも整った動きで攻撃を捌き、刃を振るう。かと思えば力強い打撃や蹴りが、毒で蝕まれているバードンを追い詰めていった。

「二眞の奴、随分と使いこなしてんな！」

幾度目かの打撃がベムスターへクリティカルヒット。海面で倒れ悶えている。ゼロはエネルギーを貯めて光線を放とうとしたが、背後に迫る気配を感じて振り返る。

「ここまで来てようやくお出ましか」

彼の目に映るのは青と銀の体を持つ、この事態を引き起こした元凶ともいえる存在だった。

「ナイト87シュート！」

伸ばした右腕から放たれる青白い超高温度の熱線。それは虫の息となった今でもウ

ルトラマンを殺そうと飛びかかってくるバードンに直撃。途端に肉体は大爆発を起こした。

「……ッ!?!」

側面からの気配を察知し、即座に避けるとベムスターの爪が空を切り裂く。

先ほどまでゼロが相手をしていたようだが、おそらく逃げて標的を変更したのかもしれない。ならばこちらが撃破するまで。オーブは角から放たれる破壊光線“ベムスタービーム”を回避しつつ突進。右腕の光剣を構え、今度は光線を刃で受け止める。

「ぜ……りやあああああああー!」

右腕や足腰に力を入れたオーブは、跳躍と同時に光線を斜めにぶった切る。まるでドリルの様に突き進み、ベムスターへ袈裟斬り。しかしそこで動作が終了することはなく、腹部を経由してから右肩へ向かって振り抜く。剣の軌道が体に刻み込まれたベムスターは、残心をとるオーブの背後で倒れると同時に爆発した。

「ゼロさん!」

怪物が消えるや否や、すぐさまゼロの元へと向かっていく。

そこで巨人が相対していたのは、見たことのない異星人。しかしオーブは直感的にこの生命体こそがレイバトスなのだ悟り、剣を構えてゼロの横に並び立つ。

「あんたが……レイバトス……!」

「そう。私こそが彷徨える怪獣の魂を操る者……」

聞こえてくる声は、どこまで行っても冷めていた。それは彼自身が死者のようであり、聞いていて気分が悪かった。死者に近づきすぎた結果とでもいうのだろうか。

「一体、何が目的だ！」

心の底から湧いてくる恐怖を消し去るかのようになり、オーブは声を飛ばす。

「宇宙を支配する。かつてレイブラッド星人がそうしたように」

「そんなこと……絶対にさせるか！」

そんな返しはヤツも予想していたのだろう。不敵に笑いながら、レイバトスは話を続ける。

「そう。だからこそ貴様らは私の企みに邪魔なのだ」

するとレイバトスは両腕から光弾を放つ。爆発とともに水飛沫が拳がり、辺りは白く染まる。

咄嗟の事で両者ともに顔を伏せてしまった。再び顔を上げたころには、先ほどまで戦闘が嘘に思えるほどの静かな海へ戻っていた。

「レイバトス……絶対に止めてやる……！」

様々な感情が混ざりあい、オーブは握っている拳の力をさらに強める。

「当たり前だ。けど追跡でないのなら、今は戻るしかねえよ」

「けど……!」

「そう焦んな。あいつが逃げたのも、今は手段がないからだ。それにオレたちだって体がもたねえ。そうだろ?」

ゼロの指摘に、オーブは自分の胸元を見る。怪獣との戦いやレイバトスとの邂逅で忘れていたが、胸の光は既に赤く点滅していた。

「そうですね……戻りましょうか」

街を守ったものの、いまいちスツキリしない気分を抱えたまま2人は光となって消えていくのだった。

くく

見知らぬ土地、見知らぬ人々の前でA q o u r sは踊る。9人の息の合ったパフォーマンスは、不安で上手いかなかったあの時とは大違いだ。

——Hop? Stop? Nonstop!

1人では無理だけど、みんなならば大丈夫。自由に未来を掴もうと歌っている。

とは言っても言語が異なり伝わっているかはわからない。しかし、彼女たちの踊り

は、歌は、それでも人々の心を繋いでいく。ライブとは、スクールアイドルとは……そういうったものなのだから。

「鞠莉」

「ママ……」

ライブが終わり、広場中に広がる歓声と拍手。夕日に照らされたスペイン広場にて、母と子は見合う。だがそこには、数日前に見た険悪な雰囲気はないように思えた。

「私がいままで歩んできたことは、全部私の一部なの」

母と父が彼女を育てたのと同じく、A q u o r s やみんなとの出会い、数多くの出来事が今の鞠莉を育てた。何一つ手放すことのできない大切なもの。

それら全てがあつて、それがあるからこそ――

「――今の私なの」

まっすぐに瞳を見つめ告げる娘を、彼女の友人たちを目の前にした母。彼女は何も言わずに笑い、去って行ってしまふ。でもそれは、実に穏やかなものであつたことは確かだ。

「どうなつたの？」

「さあ？」

鞠莉でも答えは曖昧なまま。でも彼女は信じる。母が笑つたことを。

「でも、わかってくれたんだと思う」

第Ⅷ章 —もう一度輝こう—

イタリアでのひとときを終え、無事帰国した千歌たち。燻っていた想いも、鞠莉たちとのライブを通して消えたように思えた。であれば、こちらでやることは一つ。もう一度、6人でのライブを……。

「誰もいないすら……」

帰国早々8人が足を運んだのは分校。どうやら千歌の携帯にむつ達から分校に来るようにと、メッセージが届いていたらしい。しかし校庭には誰の姿も見当たらない。

因みにゼロはまた別行動だ。

「おかえり〜!」

すると古い校舎の窓が開き、中からむつ達が顔を覗かせる。そんな彼女たちに従い、中へと入っていく。

「ごめんね。ライブの手伝いお願いしちゃって……」

6人でのライブを開催するにあたって、むつ達へ手伝いをお願いしていたことを謝る千歌。しかし当の本人たちは全く気にしていない様子。寧ろ浦の星の生徒全員が協力したいと答えてくれたらしい。

「実はステージのイメージもできてるんだ」

イメージ図を黒板に描いていたらしい。9色の虹が掛かったAqoursのステージ、バックには富士山をイメージした装飾、ロゴはバルーンを使用したりとコンセプトなどが事細かく書かれていた。

「すごいな……」

「でもこんな立派なステージ……」

「とてもじゃないけど時間が……」

豪華なステージであることは確かだし、ありがたいと思う。しかしーから作っていくとなると、生徒の数だけでは間に合うものではないと感じてしまう。

「そう言ったんだけどさ」

「浦の星だつてちゃんとやれるんだぞって証明したくて」

あれこれ言われている浦の星への印象をどうにかして変えようとAqoursが頑張っていることを知っている。だからこそ、他の生徒たちも背中を押され、ちゃんとやれることを証明したいのかもしれない。

「それでも数、足りないんじゃないのか？ 音響とかそこら辺は？」

「うん、そこら辺は不足気味なんだよね……」

やはり生徒だけでは足りない。なにか策はないかと考え始めたところ、横の方から声

が聞こえてきた。

「はじめまして……」

制服を見るに静真の生徒のようだ。どうしてこんなところに……という問いは、同じく静真の生徒である月が説明してくれた。

「僕のところに来談しに来てくれたんだ。まだ一部の反対はあるけど、協力したいって。まだ少人数ではあるけどね」

けれど協力してくれる人がいるのなら、大きな前進であることに変わりはない。

とかなんとか思っていると、静間の生徒3人の目は善子へ向けられていた。聞けば彼女たち、中学が一緒らしい。

「あ、前世を知る者……だっけ？」

「うっさい。一眞は黙ってて！」

声の様子からもかなりテンパっているようだ。さらに驚くべきことに、動画配信も観ているらしい。

そのまま写真を一緒に撮ろうとまで話が進み、連絡先交換というところに着地した。最初は戸惑っていた善子ではあるが、事が終わればどこか嬉しそうだった。

「よーし、やるぞー！」

「でも向こうで歌った時と違って今度は……」

意気込む千歌とは反対に、不安げな花丸。イタリアとは違い、次のライブでは3人がいない。一度そのことでミスを犯していることもあり、どうにも拭いきれないのだろう。

「……できる。できるよー」

しかし、その不安を断ち切ったのはルビイの一言だった。淀みなく言い切った彼女の表情は晴れ晴れとしたもの。イタリアでの出来事が、彼女をより成長させたのだろう。

Aqours、浦の星、そして静真の一部生徒。それぞれが協力し、ライブを行うために動き出したのだった。

くく

「答えはでたか？」

沼津の街中を歩きながら、ゼロと一真は話している。その答えとはこの星に残るか、それとも宇宙で多くを救うか……という旨のものだ。以前から悩んでいた一真は、イタリアにてゼロに打ち明けたのだった。

「はい。やっぱり俺は……みんなを助けたい。だから……」

その想いはやっぱり変えられない。今も怪獣や宇宙人の侵略で被害を受けている者が、この広い宇宙のどこかにいるとなれば、放っておけるわけがないのだから。

一眞の出した答えを察したゼロは笑う。

「そうか。だったら、あいつらにも言っておけよ。無言で去るだけはやめとけ?」
「わかつてますよ」

会話をしながら見慣れた街並みを歩いていると、ある石碑に視線を移す。そこは自分にとつてもまた馴染み深い場所である。多くの供え物が置かれた石碑の前には、今もまた願いを叶えんと手を合わせる人物の姿が。

「私……親友と喧嘩しちゃって……でも私は仲直りがしたい。そのキツカケだけでも……どうかお願いします」

どうやら躑躅色の髪をした少女は友達と喧嘩したらしい。その仲直りのため、思い石へ祈っているのだろう。

「一眞、お前はと思う。レイバトスについて」

するとゼロはそのようなことを問いかけてくる。レイバトスと以前対峙したわけだが、已然その目的は見えてこない。いや、宇宙を支配するという目的があるのは知っている。が、それ以前にこなすべき“何か”を隠しているように思えるのだ。

「宇宙を支配する……そのためにウルトラマンを倒すつてのはわかります。けど、今はそのためのタスクをこなしているんじゃないかと……」

「この地球でか？」

「はい。イタリアでも、特に大事を起こしたわけでもない。俺たちと対峙した時、もつと怪獣を蘇らせることだって出来た筈です」

「でも、それをしなかった」

一眞は首を縦に振る。あの時に畳みかけることだって可能だった。しかしヤツはそれをせず、姿を消しただけ。

「時間稼ぎか？」

「おそらく。その過程でウルトラマンを倒せばそれはそれでラッキー……なのかもしれません」

宇宙を支配下に置くために邪魔なウルトラマンを倒す。さらにそのウルトラマンを倒すために必要な“何か”を手に入れるため動いている。それが2人の出した結論

だった。

「あの野郎、何考えてんだか……ん？ おい、お前の携帯か？」

何処からか聞こえてきた着信音。それは一眞のポケットの中からだった。彼がさかさず手に取って見ると、相手は千歌のようだ。彼女は確か家で梨子と共に作詞をしていた気がするのだが、何かあつたのだろうか。

「はいもしもし。……え!? それ本当か？ うん、わかった」

通話を終えた一眞は来た道を急いで引き返していく。

「すみませんゼロさん。用事が入ったんでそっちはお願います！」

人間の限界を超えたスピードで走っていく一眞の背中を何も言わず……何も言えずに見送るゼロ。その後再び戻った静寂の中で、ゼロの小さな溜息が木霊した。

合流した一眞と連絡を貰ったAqoursは喫茶店内で思わず声をあげてしまう。3年生から告げられた言葉が、あまりにも予想外だったからだ。

「理亞ちゃんがA q o u r sに入る!」

要はこつちに転校してくるといふことだ。今のうちに手続きを済ませれば、ちようどこちらと同じタイミングで学校にも通えることが可能だと果南が説明してくれた。

「そうしたいって理亞ちゃんが言つてたの?」

「いいえ。聖良はまだ話してないって」

「でも、それが一番いんじゃないかって」

ルビイの問いに鞠莉と果南が答えた。

理亞の事情を知る聖良だからこそその選択。新しく始めようとするスクールアイドルが上手くいってないのであれば、これまで関係を結んだA q o u r sに所属するという選択の方が彼女の精神的にもいいと判断したのだろう。しかしまだ決定ではない。ここは千歌たち現A q o u r sの話も聞いておきたいとダイヤたちは判断し、この話を共有したのだ。

「どう思う?」

次に一真が尋ねる。

「そりゃ全然嫌じゃないよ? A q o u r sは何人つて決まりはないし」

「一緒にラブライブを頑張った仲間だしね」

千歌と梨子は異論はなさそうだった。さらに隣の席に座る善子も答える。

「いいんじゃない。面倒くさそうだけど」

「お前、一言多いって……」

「善子ちゃんよりも沢山教えてもらうことがあるすら」

そんな中ルビイが声を挟んだ。「ダメだよ」と。

「理亞ちゃんはそんなこと望んでない。Aqoursに入ったって、今の望みは解決しないと思う」

「……どうしてそう思うんだ？」

はつきりと語ったルビイに対して、一真はさらに問いかける。その声は優しくもあり、同時に真剣だった。千歌たちもルビイの言葉に耳を傾ける。

「だって理亞ちゃんはSaint Snowを終わりにして、新しいグループを始めるんだよ？」

姉と大切にしてきた……姉とやってきたからこそ大切にしたいグループだからそれを終わりにし、新しくグループを作る。Saint Snowという雪の結晶に負けないくらいの……新たな雪の結晶を。無論、それはAqoursに入ることではない。

「イタリアでお姉ちゃんたちと歌った時にわかったんだ。お姉ちゃんはいなくなるんじゃない。同じステージにいらなくても、一緒にいるんだって」

理亞は未だに気が付けてないだけ。Saint Snowを終わりにし、聖良が居な

くなくても、全部が消えて無くなるわけではないということに。

Saint Snowと同じものを作らなければと、ラブライブ優勝を絶対に果たさなければ聖良に申し訳がないと……。そんな自分の想いが彼女自身を押しつぶし、気が付いていないのだとルビィは話す。

「理亞さんの気持ちは、多分ルビィが一番わかっていると思いますわ。姉が卒業した妹という立場として」

北海道に行ったとき、同じ立場としてライブを披露し理亞とルビィ。妹の成長を改めて知った聖良とダイヤ。同じ立場だからこそ理解できるのかもしれない。

「だとしたらどうすれば……」

梨子は俯く。何を伝えればいいのかはわかる。けれどその方法がわからないからだ。

「そんなの簡単だよ」

「ああ。教えてあげればいい」

「一緒にいるって、ずっと傍にいるよって」

「一番大きなDreamを1つ叶えて」

彼女がどうしても叶えたくて、それでも取りこぼしてしまったもの。それをみんなの力で叶える。だとすれば方法なんて、いつものようにやってきたアレしかない。

皆の考えが1つになったところで、早速彼女たちは行動を開始するのだった。

く

誰もいない早朝。冷たい空気が場を支配する中、理亞は一人走っていた。ラブライブ優勝を目指す彼女にとつては日課なのだが、今はあることを考えないようにするために四肢を動かしているのだった。

(姉さまの大切な夢を……私が壊してしまった……！)

いつになってもあの日の光景は、脳裏から消え去ることはない。

地区予選での予想外の大失態。そのせいで落選し、聖良とともに決勝のステージに立つことは叶わなくなってしまった。

観客たちの声が耳を突き刺す。優勝候補だったのに、という言葉が体を突き刺す。そして何より聖良の頬を伝う雫が……理亞の心を突き刺す。

気付けば理亞は、今までの走行ペースから大幅に速度を上げていた。

そしてその悲痛な叫びは、あの時の後悔……そして今、Saint Snowを超えるようなグループを作れない己の後悔、悔しさがにじみ出たものであった。

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……」

走り疲れた理亞は、とある建物を見上げる。

今は、何も考えたくない。脳に酸素を送っているこの瞬間、少しボーつとする。この瞬きのような間は、あらゆることを考えなくていい。ずっと……このままでもいいのにと、思ってしまうくらい、理亞は苦しんでいた。

「お悩みかい？」

ふと、声を掛けられる。視線を移した先には黒い制服を纏った男の姿が。そんな彼の雰囲気は、どこか A q o u r s のマネージャーと似通っているようで……。

「昔の僕なら、適当なことでも言つて闇に引き込んだらうけど……今はしたくないな」
「な、何？」

一人で訳の分からないことを口走る男に、理亞は思わず聞いてしまった。だが男は「忘れてくれ」とだけ答える。なんだこの男は？ と理亞は怪訝な目を向ける。

「友人の頼みで北海道に来てたんだ。結果何も異常はなし。だったけど、偶然会った君はなにか訳アリ……つて感じだね？」

普段、このような見ず知らずの相手に聞く耳を持たない理亞。しかしこの時だけは違った。何も知らず、親しくない者だからこそ……自分が抱えているものを聞いてほしかった。

「そうか……。それは辛いね」

彼女の話を聞いて、男は答える。

理亞も、しっかりと目を見て頷いてくれていたことから、彼は適当に話を聞いているわけではないと感じていた。

すると目の前の男も、おもむろに口を開き始める。

「僕もね……あることをずつと後悔しているんだ。もつと別の選択肢があつたんじやないのか。もつといい方法があつたんじやないのか。あの時……僕がもつと早く決断していれば……彼女が死ぬこともなかつたのかもなつて」

男は地面を見つめる。少し経つて、息を大きく吸い込だ後に顔を上げた。両目は涙が滲んでいるように見えた。

彼も、取り返しつかない後悔を抱えている。

「でもその後悔と同じくらいに、思い出つてのは残り続ける。消えては無くならないんだ。絶対にね」

寂しく笑う男。しかしその後、「これは友人からの受け売りだけど」と続けた。調子の狂う男ではあるが、彼も彼なりに前を向こうと足掻いている。

「けどこういっただ話は、僕よりも彼女たちの方が……適任かもね」

そう言つて別の方向へ視線を向ける男。釣られるように理亞も同じ方向を見ると、再び制服に袖を通した聖良の姿が。

「その恰好……どうして？」

聖良は無言で、携帯端末を取り出す。するとそこから聞き慣れない声が。

『それでは、これよりラブライブ決勝延長戦を始めます！』

意味がわからない。ラブライブはもとづくに終わっている筈。なのに決勝とは？

それに延長戦とは一体どういうことか。理亜の思考が一瞬止まる。

『決勝に残った二組を紹介しましょうまずは——』

どうやらAqoursとSaint Snowの紹介がなされているようだった。

「今から私たちだけの……ラブライブの決勝を行います」

静かに聖良は告げと同時に、ある衣装を手渡す。それは決勝の舞台に立てたらと決め

ていたものだった。衣装と同じくダンスや曲もだ。

「姉さま……」

「もし、Aqoursと競うことになったら……決勝の舞台に立つことができたら……」

あなたに伝えようと思っていた」

目に涙を浮かべ、理亜は聖良の胸に飛び込む。叶うことならもう一度……と。

「泣いてる場合じゃないですよ……」

そう語り掛ける聖良も声が震えている。

『一緒に進もう、理亜ちゃん！』

端末から聞こえてきたのは、遠い場所にいる友の声。

『甘えてちゃだめだよ。理亞ちゃんや花丸ちゃん、善子ちゃんと出会ったから……ルビイも頑張れたこれなんだよ』

多くの人の出会いが彼女を成長させてくれた。その中でもより大きなものは、自分と同じ歳の者たち。出会いと成長を経て、今度は自分たちの力で進んでいかなければとルビイは話すのだった。

『ライブは遊びじゃない』

初めて会った時、自分が放った台詞を返されるとは。当時であれば考えられない。理亞と聖良はともに笑う。そして次の瞬間には、ステージで歌う強い眼差しへと変化していた。

「歌いましょう。2人でこのステージで……A q o u r s と全力で！」

— Believe again —

結局踊ることもなく消えていく筈だったそれは、友たちのお陰で披露することが叶った。

もうないと思った姉とのパフォーマンス。本来はあり得ることのなかったこの瞬間

を理亞は勿論、聖良も駆け抜けていく。そこにはもう迷いが無いのは明白だ。

決勝とは豪華さなんてものは比にもならないが、しかしそれでも彼女たちの……雪の結晶の輝きは相変わらず眩しいものだった。

「……今のこの瞬間は、決して消えませぬ」

すべて踊り終えた後に残ったのは喪失感ではなく、満足感だった。

聖良は理亞の手を取り、さらに語り掛ける。

「私と理亞のこの想いは……ずっと心の中に残っていく。どんなに変わっても、それは変わらず残っていく」

包まれた手が温かいのは、単にライブを踊り終えたからではない。

聖良の気持ちも、これまで積み上げてきたものも消えてなくなることはない。いくら形を変えようと、いくら時間が経とうと、そんなことは関係ないのだ。

「だから、追いかける必要なんてない。……それが伝えたかったこと」

S a i n t S n o w のように……なんて気負う必要はない。

あり得ることのない、けれどあり得た S a i n t S n o w のパフォーマンス。それを終えた姉妹は再度抱きしめ合うのだった。

答えを得たその場所から、羽根が空へ昇っていく。

その羽根ははるか遠く。A q o u r sのいる場所へと渡された。

楽しい時間はあつという間。ずっと続けていたいと思うけれど、それは叶わない。3年生にとっては、これが真正正銘のラストライブ。だから全力で伝えるんだ。彼女ら3人の想いを。

— B r i g h t e s t M e l o d y —

朝日に照らされながら舞う青い羽根は、瞬く間に白へと輝きを変える。

これは S a i n t S n o wと同じく、A q o u r sが新しく進むための決意でもある。去る者、そして続ける者。その両者に訪れる明日へ踏み出すための曲。

「凄……」

ライブを中継しつつ、間近で見っていた月がそんな声を漏らす。圧倒的な熱量で押し寄せたそれは月の心を揺さぶったのだ。

「すげえな……これがスクールアイドルか」

このライブを見ていたのは月だけではない。今回はゼロもその様子を見ていたのだ。

「ですよ。俺も……彼女たちからは勇気をもらってるんですよ！」

一真は彼女たちの姿を眺める。今の彼女たちであれば絶対……そんな確信が彼の中にはあった。

「このライブを僕たちだけしか知らないなんて……そんなの勿体ないよ！」

スマホを操作しだす月の目の前、パフォーマンスを終えた千歌は歩き出す。

「わかった……私たちの新しいA q o u r s が！」

ようやく長いトンネルを抜け出せた……そんな確信を持てた時だった。

巨大な地響きが彼女たちを襲う。

「なに……!?!」

「なんだよ一体……!?!」

「アレ見て!?!」

そう誰かが言った。すれば自然と皆の視線がある一点を見つめる。そこには巨大で邪悪なオーラが集まっていたのだった。

「ゼロさん、あれって……」

「ああ。間違いなくレイバトスの野郎だ」

ライブの余韻をブチ壊されたことに憤る2人。

ただ、これがレイバトスの仕業であれば、オーラの集まった場所から現れるのは間違いなく……。

「みんな、逃げて!」

彼女たちを一瞥し、逃げるように伝える一真。さらに月にも避難するように駆け寄っていく。

「月、みんなと一緒に逃げて!」

「一真くんは?」

「俺もそのうち合流する。だから先に行つててくれ!」

すると彼女は次の瞬間、思つてもみないことを口にした。

「嘘。君逃げないでしょ。ウルトラマンだから」

「……え?」

一瞬のことで思考が固まる。

彼女のそれは揶揄うとか、適当に言っている……というわけではなさそうだった。しっかりと一真の目を見て言つてきたのだから。

「いつから知ってたの?」

「わかんない。でもさ、白いロボットの時も、イタリアの時もどこかに行くんだよ? 疑わないわけがないでしょ」

返す言葉がなかった。今迄は上手く誤魔化せてたかと思っていたが、流石に無理があつたようだ。

「ありがとう。君のお陰で、僕たちはこうしていられる。スクールアイドルを知ることができた。だから、ありがとう」

月はそれだけ言い残すと、皆と共に避難していった。

「……ありがとうは、俺が言う方なんだけどな」

小さく呟いた一眞の言葉は警報の音にかき消される。

数秒後、彼はゼロと共にオーラの蠢く地点へと駆け出していくのだった。

「沼津に……何が……」

早朝に起こった異変は、既に聖良たちも知ることになった。

「こっちはハズレか」

そう言つて携帯を覗き込んでくるのは、理亞と話していた男。覗き込んだ後、彼はそのままどこかへ向かつて歩いていく。

「待つて！」

そう言つて理亞は男を止める。何処へ向かうつもりなのか尋ねたいのだろう。

「ちよつとやばそうだからね。僕も行かないと。今度こそ……後悔しないために」

「あなたは一体……」

聖良も同じように問いかけてくるが、男は笑うだけで答えない。

彼の手に握られているのは、円形の上部に鏢と柄が合体したようなものだった。

「みんなの絆……使わせてもらおうよ」

叫びと共に掲げたアイテムから光が放たれる。

「もしかしてあの人も……」

眩い光と共に、黒い体の彼は姿を現す。赤く煌めいた彼の眼は背後にいる2人をもう一度映し、明るくなりかけている空へと飛んでいくのだった。

第IX章 — 魔導士の企み —

突如として現れた邪気は、みるみるうちに己の肉体を形作っていく。一眞やゼロが近付くころには沼津の地を踏み、街を破壊する存在へと化していた。

姿を見せた規格外の存在に、誰かが呟く。

「なに……あれ……」

無数の巨大な触手、背中から肩にかけて生えた無数の棘の山。青と金で構成された配色。さらに特徴的なのはその大きさ。昆虫の如く生えた6本足が、既にウルトラマンの身長を超している。全体を含めれば天をも貫きそうな巨大さである。

とある異次元人がウルトラマンを倒す為に作り上げ、溜め込み続けた怨念の力によって更に強力に、より禍々しい形をとった姿。

——
キユウキヨクキョダイチヨウジュユウ
 究極巨大超獣

Uキラーザウルス・ネオ

その巨体が一步踏み出す度、地面に大きなクレーターが形成される。

「なんだよあれ……」

「オレたちを本気で殺しにきてるみたいだな」

これがレイバトスの本気……なのだろうか。その悪魔は破壊の足音を響かせながらこちらに迫ってくる。

「いきましよう。アイツを止めに」

「当たり前だ。親父たちはアレに苦しめられたらしいが、魂をもたねえなら話は別だ。行くぞー！」

苦戦した記録がある存在でも、魂を持たないものはただの操り人形。そこには激しい憎悪も怨念もない。

一眞はゼロへ頷き、両者は光を解放する。

「■■■■■■■■■■ー!!」

究極超獣の前に光柱が降り注ぎ、中から2体のウルトラマンが飛び出てくる。間髪入れずに飛び蹴りを繰り返すも、虫を追い払うかの如く簡単に叩き落とされてしまう。

「んの……!」

「クッ……」

受け身を取り再び空へ飛び立つ。先程彼らが落下した場所は、降り注いできた破壊光線で黒焦げに。もう少し飛ぶのが遅かったら、自分らも生きてはいなかっただろう。

「なんて野郎だ……!」

オーブオリジンは手に持った刃で長い触手を斬り裂こうと突進。迫り来る爪を捌き、光の網を抜け、回避を繰り返して接近する。しかしその攪乱も虚しく足首を触手に掴まれてしまった。自由に身動きがとれずとも、脱出しようと抵抗を続けるオーブ。

「オーブ！ この……エメリウムスラッシュュ!!」

額から光線を連続発射し、オーブを助けようとするゼロ。しかしその攻撃が鬱陶しかったのだろう。咆哮とともに放たれた赤色の光線はゼロを遠方に吹き飛ばした。それと同時にオーブもゴミくずのように投げ捨てられる。

「ウアアアツツ……!」

「ガアアアア……!」

ゼロは建物を押し潰しながら倒れ、オーブは水柱を上げて海に倒れ込んでしまった。

Uキラーザウルス・ネオは勝ち誇ったかのように声を上げる。感情はない筈なのに笑っているかのよう。痛みに悶える両者へトドメの一撃を食らわせようと、各発射口が鈍く光り始めた。

「マ、マズ……」

「させないよ!」

途端、彼方から聞き覚えのある声。数秒遅れ、一筋の光線がUキラーザウルス・ネオに直撃した。無論ヤツの一部が爆発し、数歩後退する。

「お前……」

光線を放った“彼”は、オーブの目の前に着地する。黒と銀の体に赤く光る両目……
オーブシヤドウだ。

「何やってるんだ。みつともないよ？」

「うるせえよ……」

軽いやり取りを交わすそれは、緊迫したこの場に相応しいものではなかった。

するとそこにゼロも合流してくる。初めて見るオーブシヤドウの姿にゼロは怪訝そうな表情を浮かべているのがわかる。

「なんだコイツ、お前の知り合いか？」

「はい。見た目はこれですけど、俺たちの味方です」

「酷くない、それ」

オーブからの扱いに、少しムスツとした表情を見せる黒い戦士。しかし仕方ない。見た目が怪しいのだから。

「しようがないだろ。ってか、もう少し早く来てくれよな」

「フツ、主役は遅れてくるってやつさ」

「ソレオレノ……じゃねえ、オーブの言う通りだ。もう少し急いで来いよ！」

「なんだよ。助けたのは僕だ。感謝くらいしたらどうだい？」

「はあ!?! なんて?」

このまま放っておけば、ゼロとオーブシャドウで取っ組み合いを始めてしまいそうだ。見兼ねたオーブは2人の話を中断させる。

「2人とも言い合いないで! 今はアレを食い止めよう!」

自分が無視されていると理解したのか、オーブが視線を向けると同時に咆哮を上げ、相撲取りの如く片足を地面へ打ち付けるUキラーザウルス・ネオ。

平和を脅かす目の前の存在は、ここにいる3人の敵だ。目的が同じである彼らは、視線を交わし頷き合う。

「よし、行くぞ!」

「ああ」

「はい!」

ゼロの掛け声とともに、再度攻撃を開始する。

地面を抉る爪を回避し、オーブシャドウは右足を、オーブは左足を斬りつけた。衝撃は地面を走る。

「まずはその邪魔くせえ触手を……ぶった斬る!」

飛び上がったゼロはすかさずゼロスラッガーを投擲。激しく回転する宇宙ブーメランが触手を切断していく。

「ハアアアア……」

赤と黒の稲妻。サンダーブレスターに姿を変えたオーブは、ゼットシウム光輪で未だ暴れる触手を斬り刻み、ゼットシウム光線を胴体に命中させる。

「ほら、ほらほらほらー！」

両手剣ともいえるその聖剣を軽々しく扱い、触手を斬り飛ばしていくオーブシヤドウ。さらに宙返りと共に距離を取った彼の片手から、紫色の光輪を投擲。触手の群れを通り抜け、上半身から下半身へと傷をつけていく。

忌々しいウルトラ戦士を捕まえようと暴れる触手の合間を縫い、地面に滑り込むようにして着地したのはストリウムマイトヘチエンジしたオーブ。

「プラスチックウム光線！」

T字に組んだ腕から放たれた熱戦が、残りの触手を吹き飛ばした。

「■■■■■■■■■■！！！！」

無数の触手が斬り落とされれば黙っていられない。怒り狂って両目から光線を発射。何としてもウルトラ戦士を殺そうと何度も、何度も放ってくる。

「くっ……！！」

うか。

静寂の後、喜びの咆哮が辺りに響いた。だがそれもたったの数秒間だけ。咆哮と同時に首を上げた時、視線の先に光り輝くものが見えたからだった。

自身の熱戦よりも眩い光の中から、その者らは姿を現す。

白銀の鎧……人々の心の光が結集し、ウルトラマンノアから授けられたバラージの盾。ウルティメイトイージスを装着した姿。ウルティメイトゼロ。

ギンガ、ビクトリー、エックス。3つの光を、絆を借りその身に宿した姿。オーブトリニティ。

「じゃあ、行こうか」

最大の一撃を放つため、その姿を取った2人。そして横に並ぶオーブシャドウ。彼の掛け声とともに、3人は流星の如く突進していく。

「■■■■■■■■ー!!!」

叫び続けるUキラーザウルス・ネオは、そんな忌々しい光を消し去ろうと背中にある

無数の棘をミサイルの様に放ち始めた。迫りくるミサイルの白煙が本体の姿をかき消していく。が、突進する3人のスピードは落ちることなどなかった。

「オラッ!!」

ゼロは右腕に装備された白銀の剣。 “ウルティメイトゼロソード” から真空刃を放つてミサイルを墜とす。

「3つの光と絆を結び……今、立ち上がる!」

ハイパーゼットンシザース、ハイパーゼットンアーマーを右腕に重ねるようにして纏ったオーブトリニティ。彼が勢いよく腕を突き出れば、無数に生み出した火炎弾が射出される。隕石群の如く降り注ぐ火球が、ミサイルを悉く消し飛ばしていく。

「僕だけ地味……だね!!」

黒い聖剣から放たれた炎の円環はミサイルと衝突し、その多くを消滅させる。地味とは言いながらも2人が消し飛ばした数ときほど変わらない。

「■■■■……」

自身の攻撃が、あの途方もない数のミサイルが……たった3人如きに打ち消された。生気は無いはずだが、底から溢れる腹立たしさは本物。ヤツの全身を駆けまわっているのが何よりの証拠だった。

「余所見……!」

ウの持つ聖剣へ、空に描かれた輪が二重、三重となって剣に収束していく。

各々が光を変換し終えた時、自分らを見上げる究極超獣も最大威力の破壊光線を放ってきた。

だが恐れることはない。誰かを守りたい気持ちは、あのような破壊だけを行うだけの力には屈することなど無いのだから。

標的を見定め、各ウルトラマンも叫びと共に力を開放した。

「ファイナルウルティメイト……ゼロッ!!」

「トリニティウム……光オオオオオ輪!!」

「シヤドウスプリーム……カリバアアアア!!」

3つの至高は交ざり合い、悪魔を無零に帰す力となる。

「二——スプリームトリニティゼロ!!」

Uキラーザウルス・ネオが放った破壊光線にも劣らない程の光、威力、巨大さで放たれた一撃。それはいとも容易くヤツの光線を撃ち壊し、胴体に衝突。風穴があいたように、真つ二つに裂けたようにも見えるその体……。そして徐々に炭と化し、ポロポロに砕けていくのであった。

「ひとまずは……っつてところか」

いつもより余裕のないアオボシの声が聞こえる。自分たちよりもはるかに巨大な存在を倒すことはできた。だが無傷でという訳にはいかない。それ相応に疲労が溜まってしまったし、カラータイマーの点滅も早くなっている。Uキラーザウルス・ネオを倒すため、大部分のエネルギーを消費してしまったからだ。

正直、ここから追加で呼び出されるのは勘弁してほしい。

が、現実にはウルトラマン達に甘くなかった。

3人の目の前で、突如ワームホールが開いたのだ。中から現れたのは忘れもしない怪

獣使い——

「……レイバトス」

「随分と派手にやったようだな」

「お陰様でな」

一触即発の雰囲気。どちらが先に仕掛けるか……一瞬の空気の変化を見合っている状況だ。

「そつちから出向いてくれるなんて、倒しやすくなつて助かるよ」

「倒す？ 私を？ それは無理だ」

自分らを嘲笑うかのような言い方に拳を握りしめる。

「それはどうかな。あのデカブツだつて倒したんだ。僕たちを舐めないでくれよ？」

するとレイバトスは急に笑い出す。一体何が可笑しいのかと、ヤツをより一層強く睨んだ。

「これまで呼び出した怪獣は、どれも時間稼ぎだ。マガタノオロチを復活させるためのな」

「な……!?!」

その一言に、誰もが驚愕する。これまで出現させてきた怪獣たちはただの時間稼ぎだったこともそうだが、問題はその後だ。レイバトスは明らかにマガタノオロチと言っ

た。あんなものを復活させられたら、多くの人々が犠牲になる。それだけは阻止しなくては。

「オレをイタリアに誘導した邪氣、それにあちこちで呼び出した怪獣……。全てが囿つてわけか」

怪獣を呼び出すときの邪氣。それはマガタノオロチを復活させる儀式によって出てしまう同じ類の邪氣を察知させない為というある種のジャミングとしての働きもあつたのだろう。

「マガタノオロチを使ってオレたちを倒し、宇宙も支配しようつてのか!」

「その通り。既に計画は最終段階に入っている。全宇宙支配の一步として、この星が喰らつてもらおう」

「そんな事……。させるか!」

「2人とも待て!」

もうあのような存在をこの地に立たせるわけにはいかない。そんな思いが強い2人はゼロの制止を聞かず、少ない力で技を繰り出した。

「トリニティウムシュート!」

「シャドウグランドカリバー!」

降り注ぐ岩石と一直線に伸びていく光。螺旋状の槍を成したそれはレイバトスの体

をドリルの如く穿ち、大爆発を引き起こした。

「これでどうだ!」

爆煙でよく見えないが、明らかにレイバトスへ攻撃は直撃したはず。これであれば――

「――いや、まだだ」

数秒前に聞いた声がと同時に放たれた紫色の光線が、2人を後方に吹き飛ばす。

「ウアアアアア……!?!」

ゴロゴロと転がる2人に追い打ちをかけようとするのは、爆散した筈のレイバトス。しかし寸でのところで飛翔してきたゼロスラッガーがヤツを両断。そこで2人は衝撃的なものを目にするのだった。

「傷が……塞がっていく!?!」

ゼロに両断されたはずなのに、レイバトスの体は時間が巻き戻るかの如く再生しているのだ。

「魔導士は不滅だ。永遠に宇宙を支配する者に、相応しい力だと思わんか?」

またしても不敵な笑いを響かせ、レイバトスは消えていく。

「待て!」

オーブの声が届くはずもない。その後辺りを支配するのは静寂。しかしそれは嵐の

前の静けさでしかない。さらに気が付けば、朝日が差し込んでいた空も暗い雲で覆われた曇天となっている。これもマガタノオロチが復活する予兆とでもいうのだろうか。ならばすぐさま止めに行かねば。

「はあ……。お前にも授けることになるとはな」

ふと、オーブの肩にゼロの手が置かれる。

「授けるつて……。何を？」

オーブは問いかけてみるが、ゼロは答えることなく前方のオーブシャドウに話しかけていた。

「オレとオーブは少しの間この場から消える。レイバトスの追跡、お前に任せていいか？」

「ああ。僕が儀式を止めてみせるさ」

「頼む」

そう言つてゼロは淡い光を点滅する水晶に照射。すると点滅が収まった。どうやら消耗したエネルギーを回復させたのだろう。

「よし！ じゃあ行くぜ、オーブ」

「え、だから一体何を……」

オーブの言葉を半場無視してゼロの体が眩い光に包まれた。途端、青い瞳や金色の体

を持つ姿へと変わっていた。内に秘められた光の力を発現させた姿” シャイニングウルトラマンゼロ”である。

そしてゼロは異空間を生成。オーブ諸共包み込んだのであった。

「なんですか……これ？」

「こいつはシャイニングフィールドっていう異空間だ」

白……というよりは虹色の空間だろうか。今いる不可思議な場所のことを、通常形態に戻ったゼロが説明してくれた。でも一体全体、なんの為にこの空間を作り出したのだろうか。あとどうやらカラータイマーが青く光っている。ここは光のエネルギーに満ちた場所でもあるようだ。

「成程……ってこんな場所に籠ってる場合じゃないでしょ!? 一刻も早くレイバトスを

——

「安心しろ。この空間は時空が歪んでる。ここに何年いようが、外じゃたったの数分だ」

「そ、そうなんですか……。で、ここで何を？」

するとゼロはさも当然のように言い放った。

「決まってるんだろ。特訓さ」

「と、特訓!?!」

く

「……散々な縁だよ。アレとは」

空を駆ける中オーブシャドウは呟く。

強力な邪気に導かれて目指すのは……あの決戦の地、東京。そこでまさに目覚めんとしているのはマガタノオロチ。以前はそれにある存在が上乘せされたもので、厳密には対峙していいともいえる。しかしどちらとて、再度戦うのは御免だということに変わりはない。

「僕がみんなを守る……なんてね」

これは贖罪とでもいうのだろうか。自分が犯してきた数々の過ちに対する。

自らへ問いかけ、そして答える。あれだけのことをやってきたのだから妥当だと。いや寧ろ生易しいくらいだ。今生きているのだから情けのようなものであると。だとしたら、その務めをしつかり果たさねばならないと。

「——ッ!?!」

途端、激痛が体を貫く。力を失い地面へと叩きつけられる。朦朧とする意識の中で自

分が撃ち落とされたのだと理解したのは、目の前の“影”のお陰だ。

影は瞬く間に消え、実態を露わにする。右腕が鎌、左腕が鉄球。それを見て対話的解決が無理なのだ と理解する。自分を殺したいと眼が語る。ウルトラ兄弟に倒された7体怪獣の各部位（念）が掛け合わせり誕生した大宇宙の凶悪暴君。

——
ボウケンカイジユウ
暴君怪獣タイラント

「…………ツ」

おそらくもなにも、レイバトスが足止めで召喚した個体だ。

タイラントを前にして、重苦しい空気が彼を襲う。数多の戦いを経験してきたゼロでなくともわかる。あの怪獣はまさしく強敵であり、生半可な力では倒すことができないということに。

すつかり冷え切った柄を握り、身構える。

「キツそうだけど……………速攻で倒さないとね……………」

大地を蹴る音とタイラントの咆哮が交差。土煙が上がり、そこかしこが揺れる。

オーブシャドウの垂直斬りと、右腕の鎌が衝突。両者の間で光が生まれ、同時に大きく散った。

あつたかもしれないし、なかつたかもしれない話（ココから形式がちよつと変わりメタ要素も入ります）

——シャイニングフィールド内

ゼロ「よし、さつそく特訓を始めんぞ」

オーブ「特訓ですか。なんだかヒカリさんとのことを思い出しますね」

ゼロ「ああ、そういやヒカリも言つてたっけな……」

オーブ「ええ。ヒカリさんのお陰で勝てた戦いもありましたし。感謝してもしきれないですよ」

オーブ「シャドウとの闘いでボコボコにされたオーブ（一真）を鍛えてくれたのはウルトラマンヒカリだったということを出す。どうやらゼロもその話を聞いていたようである。」

ゼロ「科学者にして剣士。まさにこの星で言う文武両道つてやつだな。ヒカリは」

ウルトラマンヒカリのような青い体をもつブルー族は、頭脳労働系の部署に行くことがほとんどらしい。かといって戦闘ができないわけではない。宇宙警備隊に入るブルー族だっている。

オーブ「本来はギンガさんたちの力を授けるためって言ってました」

ゼロ「だろ？ ギンガ、ビクトリー、エックスのデータは既にあるからな。複製して持ってきたってところか」

オーブ「凄いですね……ヒカリさん」

ウルトラカプセルを作った時のデータを利用して持ってきたということである。（本来オーブとセブンしか出さない予定だった2.5章なのですが、じゃあオーブトリニティをどうやって出すのって悩んだ末の設定です。）

ゼロ「そうだ、特訓つっても具体的には何したんだ？ ヒカリからはそこ聞いてなくてよ」

するとゼロは特訓の内容が気になっていたのかオーブに問いかける。

オーブ「そうですね……鉄製のブーメランを投げられて、それを叩き落とす……とかですかね」

ゼロ「……え？」

ゼロが固まる。だって知ってるから。同じようなことをしていた人を。

オーブ「あとは先の尖った丸太が迫ってくるんで、それを避けたりとか……」

ゼロ「おいおい……」

オーブ「最後は木刀使って実戦形式です。いや〜ヒカリさんは本当に——」

ゼロ「待てよ!! え、おま、え……さっきの……師匠が親父と修行してた時のやつじゃねーか!!」

オーブ「え、木刀での実践——」

ゼロ「ちげーよ、その前の2つ! てかなんでヒカリがそれ知ってんだよ!!」

オーブ「へえ〜、ゼロの師匠さんがやってた修行なんですね。なんか光栄です」

ゼロ「お前な……それやつちやマズいやつだから。いろいろ引つ掛かるやつだから」

オーブ「そ、そうなんですか……」

ゼロの声音が変わり、自分がやってた内容はいろいろマズかったのではないかと不安になるオーブ。でも、実力が付いたのも本当だし……と頭を悩ませる。

ゼロ「え、じゃあなに、お前……アレやったの?」

まるで内緒話でもするかのような小さな声で、ゼロは問いかける。

オーブ「アレ……とは?」

ゼロ「いや……ジープ」

オーブ「はい? 何言ってますか。そんなんやってませんよ。ってかなんですか

ジープって。紐でも括り付けて引っ張るんですか？」

ゼロ「あ、やってないならいいんだよ。うん。……さすがに小説でもマズかったか？」
オーブ「ん？ 何か言いました？」

ゼロ「いいや、なんでもない。……さすがに話し過ぎちまったか。気を取り直してオーブ、特訓始めんぞ！」

腰を落とし、構えるゼロ。その様からオーブは悟る。組み手をやるのだと。

オーブ「はい。よろしくお願いします！」

なんやかんやあったが、ゼロとオーブはレイバトスを倒すために特訓を始めるのだった。

第X章 —オーブの輝き—

レイバトスを止めようとするオーブシャドウ、そして彼を追い払んとするタイラントの戦い。突如として始まったそれに人々は逃げ惑い、同時に固唾を呑んで見守る。いや、見極めていいるのだろうか。目の前の巨人は本当に自分たちを守ってくれるのかと。

「…………ツ！」

一歩踏み込み、剣を振り下ろす。しかし右腕の鎌が進路を防ぎ、降下を阻止してくる。さらに岩の様に固く太い脚が腹部に直撃。軽々と吹き飛んだオーブシャドウは地面に倒れ込む。

「ク…………ウウ…………」

正直キツイ。「速攻で倒さないと」なんて言っていたが、速攻でやられるのはこちらな気がしてきた。

「■■■■■■!!」

タイラントは口から炎を吹き出す。オーブシャドウは何とか躲すことはできた。しかし肩に掠り、そこからジリジリと痛みが広がっていく感覚がある。

「つう……休ませてくれる暇もない……かつ！」

タイラントは耳から細長い針のような光線“アロー光線”を発射。突撃するオーブシヤドウは左右に避けながら距離を詰めていく。「行ける」そうオーブシヤドウが確信し、聖剣を振りかぶらんとしたその直後、鉄球の先に付いた錨が射出される。

「つたくー！」

避ける暇などなく、即座にカリバーを盾にして受け止めた。痺れる腕の感覚に奥歯を噛みしめながら、これ以上下げられまいと足腰に力を入れる。

「グ……オオオオー！」

剣ごと体を貫こうとする錨であったが、どうにか軌道を逸らせることに成功。しかし錨は鉄球と繋がっており、タイラントの操作で肉体を抉らんと戻ってくるのだった。

幾度目かの攻防の後、刀身に炎を纏わせたオーブシヤドウの一撃が活路を開いた。

（今だ！）

再度突貫。吹き飛んでも尚鞭の如く戻ってくる錨に構っている暇などない。カリバーをデコイにして自身は滑り込む。至近距離から体を貫いてやろうと、腕を十字に組んで光線を発射。……がしかし、光線は腹部の口に吸収されてしまう。一瞬、タイラントがニヤリと嗤った気がした。

（まずい……）

死神が自分の背に触れたのだろうか。体が一瞬にして冷たくなっていく。

首を刈り取らんと振るわれた右腕を掴んで防ぐも、またもやガラ空きのわき腹に豪脚が蹴り込まれ、鉄球が顔面に炸裂。激痛と衝撃に目の前の情報が遮断される。

「ガ…………ア…………！」

地面に叩きつけられた衝撃で、遠のいていた意識が覚醒する。ほぼ無意識的に受け身を取って着地。未だ朦朧とする意識を急いで手繰り寄せていく。

「■■■■■■■■■■！」

そんな時だった。タイラントは火炎、そして光線を人々の方へ向けて放ったのだ。

「…………！」

声にもならない、ほぼ空気だけが口からこぼれ出た。無意識に彼の足は人々の元へ向かう。そして腕を広げ、体全体で攻撃を受けたのだった。

「ウ…………アア…………」

膝と手をつき、悶えるオーブシャドウ。だがタイラントは待つてくれない。ゆつくりだが着実に向かってきている。

「ハア…………ハア…………ハア…………」

間隔の短い呼吸を整える。たったそれだけのことで激痛が体を駆け抜けていく。焦点があっているのかどうかもわからないし、耳鳴りが酷い。今にも吐きそうだった。そ

れでもオーブシャドウは剣を呼び寄せ、近付いてくるタイラントに構えた。それと同時に、先ほど何故「盾になどなったのか」を考えていた。けれど、そんなものはとても簡単なことだった。

(これも後悔したくないから……つてことか)

すると、背後から声が出た。「がんばれ」と。1つだけだった声はやがて2つになり、3つになり……大勢の声となつて聞こえてきたのだった。人々の声を聞き、彼は笑う。

「確かにこれは……勇気を貰える……かな」

彼がどんな時でも立ち上がってきた理由が、ようやく分かった気がした。

「一真だつてやってきたんだ。僕にやれないはずが……ないだろー!」

彼を下に見ているから出た言葉ではない。彼だからこそやれた。なら似たような姿を持つ自分ができるかどうか。そんな意味を込め、己を鼓舞する意味で発した言葉だった。

くく

「ウオオ……ラアアツ!!」

もうこれが幾度目だろうか。数えることすらやめてしまうほど、ゼロとの組手を繰り返していた。しかしその組手も、ようやく終わりを告げる時が来たようだ。

「フウ……遂にモノにしたな。見事だったぜ」

オーブ渾身の一撃によって、後方に吹き飛んだゼロが言う。互いに息が切れていることから、相当激しい特訓だったようである。

「いえ……もう何十年も修行に付き合ってもらってますから」

シャイニングフィールドの中では既に長時間が経っている。それだけの時間があれば、オーブの戦闘技術もさらに向上したことだろう。

「……? あれ?」

「どうしたオーブ?」

異変に気付いたオーブ。一眞は変身を解除し、オーブリングを見つめる。なんと新たなフュージョンカードが作成されたのだった。銀色の頭部に額のビームランプ。真っ赤な体色と胸から肩にかけて備わるプロテクター。それは紛れもなく――

「ウルトラセブンさん……?」

会ったことはあるが、力を貰った覚えはない。戸惑う一眞とは裏腹に、ゼロは納得し

ている様子だった。

「親父の奴、お前にこっそり力を与えてたみたいだな。機は熟したってことだ。使ってみろよ。オレと親父の力」

「……はい！」

ウルトラセブン

ウルトラマンゼロ

フュージョンアツプ

ウルトラマンオーブ エメリウムスラッガー

〵
〵

火炎が地面を焼く。光線が貫かんと幾たびも発射される。しかしそれすらも跳躍を伸ばすためのブーストに使い、天高く舞い上がるオーブシヤドウ。

「■■■■■■■■ー!!」

羽虫を叩き落とさんと錨が射出。

即座に弾こうと、エネルギーを纏わせた腕を立てる。光を纏った腕と鋭利な錨が掠れる。火花、或いは己の肉片が宙に散っていく。

「ガ……アアアアアア!」

全身を駆け巡り、脳天から突き刺されるような痛み。しかし、ここで攻撃を中断するわけにはいかない。彼は、彼女はもつと辛く、酷い戦いの中を耐えてきたんだ。このくらいどうってことない筈だと言いつつ聞かせながら、タイラントとの距離を詰めていく。

「ウオオオオオオオオオオ……!」

全身を命一杯回転させて勢いをつけてから、聖剣を叩きつける。

「……ッ!」

反撃を予測し、距離を取るために宙返り。しかしオーブシヤドウの目に映ったのはヤツの尻尾。長い尾が己の体を簡単に宙に浮かせ、瞬く間に吹き飛ばされる。視界がグルりと回転。自分がどうなっているかもわからない中、光線の放たれる音が聞こえた。

「シヤドウ——」

アロー光線が直撃し、伸びてきた錨に打たれた。ボロ雑巾の様に飛んでいき、幾度か地面と衝突を繰り返す。しかしながら黒い巨人は己の刃を地面に突き立てて転がるのを防ぎつつ、技を発動させた。

「グランドカリバアアアア！」

口から放たれた火炎と琥珀色の光が衝突。たちまち起こる大爆発は両者を呑み込んだ。

「これでも……ダメ……か……」

煙の中から現れたタイラントは未だ健在。ボロボロの自分とは異なり、目の前の暴君はダメージを負っているようには見えなかった。

「このままだと……」

時間は一刻と迫っている。レイバトスがアレを復活させてしまえば、ほぼ詰みといって良いだろう。

途端、横顔を掠めるレーザー。数秒後、タイラントの体に立つ煙幕。1発だったレーザーは瞬く間に数を増やし、タイラントに殺到。中にはロケット弾も含まれていた。

オーブシャドウが振り返ると、そこには多数のゼットビートルの姿があった。隊列を組みタイラントへ攻撃を与えていく。けれどタイラントは怯まず、お返しと謂わんばかりに撃墜していく。

「……遅えーよ」

非力な人間では怪獣になど太刀打ちできないし、なんなら死ぬ確率の方が高い。それでも立ち向かうのは一真と同じ理由なのだろう。そんな勇氣に押され、カリバーを杖代わりにして立ち上がろうとする。しかし、蓄積したダメージがそれを許さなかった。

——だから

手が差し伸べられた。

顔を上げれば、そこにいるのは赤と青の巨人。姿は変わっているものの、胸の輝きだけは同じだった。

「どうした。儀式を止めるんじゃないのか？」

「……フンツ、お前が遅すぎなんだよ」

「悪い。主役は遅れてくるってやつだ。行くぞ」

短いやり取りの後オーブシャドウは……手を掴み、立ち上がった。

「さあ、見せてやろうぜ。修行の成果」

「はいー」

ゼロの言葉と共に、構えを取って走り出していく巨人たち。数を減らされていくビー

トル隊も、怯まずに援護を続けていた。

凶悪な両腕をゼロとオーブで抑え、オーブシャドウが胸部や腹部に攻撃を叩きこむ。一度浴びれば致命傷の打撃を捌き、オーブの回し蹴り。瞬時にスイッチしたゼロの拳はタイラントを後退させる。すると又もや伸びてきた錨であったが、オーブの放った蹴り技が見事に弾いた。胸部を狙って打ち出された筈が、突き刺さった先は地面。

「こいつにはウンザリだ！」

錨と鉄球を結ぶ繋がりを、カリバーで断ち切る。

「タアアアアアアッ!!」

後ろから突貫してくる気配を感じ、ゼロは2人にバトンタッチ。地面を踏みしめ、腰の捻りも加えて威力を最大にまで引き上げる。光を纏った打撃がタイラントを吹き飛ばす。

突然の形勢逆転。今迄とは桁違いの痛みにタイラントは吠える。

「ゲエエエエリヤッ！」

「オオオオオオラアッ！」

紅の炎を左脚に纏ったゼロの軌道と、青い炎を右足に纏った軌道が交わる。攻撃が直撃し、右腕の鎌が折れて吹き飛んでいく。2人の追撃で放った飛び蹴りは、タイラントに苦悶の声を上げさせた。

「上出来だ。次で決めるぞ！」

ゼロとオーブはし字に腕を組む。金色の光が腕を包み増幅していく。

「ワイドゼロショット！」

「ワイドスラッグショット！」

気迫のこもった声と共に、2人はエネルギーを解き放つ。光線は無駄だと、腹部の口で吸収するタイラント。しかし、もう1人の光線を加えたらどうか？

空に描かれた輪が二重、三重となつて剣に収束。文字通り全力の攻撃を黒い巨人が放った。

「シャドウスプリームカリバアアアアアアア!!」

さらにダメ押し謂わんばかりに聖剣を構成する材質までもエネルギーとして放射。さらに腕を十字に組んだ熱戦も撃ち込む。

圧倒的な量の光線に耐え切れず、タイラントは断末魔と共に消し飛んでいくのだつた。

戦闘が終わるとオーブシャドウはその姿を維持しきれなくなり、光となつて霧散した。

地面に四肢を投げ息を荒げるアオボシ。しかし、黒幕は未だ倒せていない。本当であればレイバトスと戦うための力をここで消費してしまったのだった。

「ありがとな。後は俺に任せろ」

だが責める者はどこにもいない。彼のお陰で人々が守られたのだから。未だ巨人のままの一真と視線を交わし、隣にいるゼロへと視線を移すと彼も頷いていた。そしてすぐ、2人は曇天の彼方へと消えていつてしまうのだった。

1人となったアオボシは、倒れたまま呟いた。

「あくあ、正義の味方って……面倒くさいなあ……」

そう言う彼の口元は緩んでおり、穏やかな笑みを見せていた。

く
く

「……………」

未だ戦いの跡が残り、復興を進めている東京の地でレイバトスは儀式を進めていた。付近には撃墜されたゼットビートルの姿が。おそらくレイバトスを止めようと、撃ち

落とされたものだろう。

もうすぐ……もうすぐで宇宙を支配する力を、邪魔なウルトラマンを排除する力を手に入れることができる。その光景を見るのも数分後だろうか。魔導士はひたすら儀式を進め続ける。

——だが

「レイバトスッ!!」

頭上で轟く声を察知し、レイバトスは儀式を中断。バックステップをとって回避。先ほど自分がいた場所に、何者かが降ってきたのだ。落下の勢いを利用した強打のせいで土煙が大きく上がる。

「智勇双全、光となりて!」

土煙が消えていき、その姿が露わとなる。セブンやゼロのような鋭い瞳。頭部には3つの宇宙ブーメラン。盛り上がった両肩のプロテクター。その正体はエメリウムスラッガーへとフュージョンアップしたウルトラマンオーブ。

「まさか此処まで来るとはな」

「ここで討たせてもらうぞ。レイバトス!」

彼からはレイバトスの野望を阻止するため、この星を守るためという強い気概が感じられた。構えを取り、眼前の敵に駆け出していくオーブ。

「へへッ……後は任せませ」

彼の戦いを見守り、そのように呟いたゼロ。ファイナルウルティメイトゼロの使用やシャイニングウルトラマンゼロへと変化したことなどが重なり、ゼロもカラータイマーが点滅している状態だった。

「……ッ！」

ギガバトルナイザーを巧みに扱い、レイバトスは攻撃を加えていく。しかしオーブはその攻撃を受け流し、逆に幾度も打撃を食らわせる。光る手足と黒い棍棒が交じり合い、火花が彼方此方に散っていく。

こじ開けた胸部に、オーブの肘打ちが入る。お返しにと三日月状の斬撃に足元を狙われるが回避。攻撃も防御も遅れれば終わり。攻撃を捌き合い、撃ち合いながら相手の隙を伺う。

「リアアアッ！」

正拳突きがレイバトスを後方に飛ばす。するとすぐさま額に両腕を添え、エネルギーをチャージ。右腕の拳を突き出すと共に額のランプから緑色の光線を放つ。

「トリプルエメリウム光線！」

額から伸びていく線は凄まじい速度でレイバトスの胸部を貫通。苦しみに魔導士も声を上げる。

「フフフフ……そんな者か。貴様の力というのは」

けれど即座に回復。先程の傷はなかったものに。

加えてギガバトルナイザーから光線を発射。禍々しいエネルギーがオーブに殺到。

「ク……！」

腕で防ぐが、その威力に体が押されてしまう。

「ウオオオオオオ……!!」

底力を見せ、光線を振り払ってみせる。行き場を変えられた光束は地面に着弾して燃え上がった。

「言った筈だ。私の体は……不滅」

何度攻撃を与えても、即座に再生してしまうレイバトス。亡霊魔導士というように、まるで幽霊を相手にしているようだ。けれどヤツは幽霊じゃない。実態があり、肉体のある宇宙人。決して万能ではない。

「だったら……」

頭部のアイスラッガーを手に取り、構え直すオーブ。ここまではほんの小手調べ。次からは本気だ。

「再生が追い付かないほどの攻撃を……刻み込んでやるだけだ！」

オーブとレイバトスの戦闘は全国で報道されている。

支配をもくろむ異星人と、それを阻止する巨人の戦い。これまでの多くの戦いと同様に、誰もがオーブの勝利を祈っていた。沼津でも、函館でも。巨人となる青年を知る者であれば尚更である。モニターを前に少女たちは手を強く握り、祈りを捧げるのであった。

「……！」

「ッ！」

両者はもう一度地面を蹴り上げ、眼前の存在と距離を詰めていく。

何度も迫ってくるギガバトルナイザーをアイスラッガーで弾き、振るわれた腕をがっかりと固める。抜け出そうとする力と、抜け出させないようにする力。知らず知らずのうちに声を上げる2人。

「オーブ、攻撃の手を緩めるな！」

背後からゼロの声が聞こえる。途端、一瞬だけだがレイバトス入れている力が弱まった。これをチャンスと見て胸元を一閃。カウンターを見舞ってきた魔導士を見切り、逆

に斬撃を与え始めるオーブ。

「俺は負けない！俺を見込んで力を貸してくれた先輩方の期待に……応えるために！！」

数多の剣筋がレイバトスに走っていく。

彼の脳裏に走るのは、自分に力を貸してくれるウルトラマン達の姿。あらゆることを教えてくれた先輩方の姿であった。そして——

「大切な人たちを……守るために！！」

手に入る力がより一層強まる。湧き上がる思いが体を軽く、そして強くしてくれる。

幾度目かの閃光がレイバトスの胸を薙ぎ、激しい火花を散らせる。再生さえる時間を与えまいとオーブは突貫。同時に体が光に包まれる。

紫の光がレイバトスの放った光線と衝突。それでも突き進む光と闇の刃はレイバトスを切り裂く。紅の炎が体を焼き、同時に親子の炎と拳が魔導士を滅多打ちにしていく。

青い嵐が吹き荒れてヤツを攪乱。続いて蒼雷を纏った刃が一閃。さらに虹色の長剣が容赦なく斬りかかった。

メカニカルな腕がレイバトスを痺れさせ、海神の如く振るわれた三又がギガバトルナイザーを吹き飛ばす。息つく暇を与えんと騎士の如く苛烈に、それでいて精密に剣を振

るい、三つの光を纏った拳がレイバトスを確実に追い詰めていった。

「オーブスラッガーショット！」

エメリウムスラッガーに戻ったオーブは光刃を飛ばす。緑の軌跡と青の軌跡がレイバトスに刻まれる。

「お、おのれ……」

攻撃の手を緩めることはない。アイスラッガーを宙で静止させると同時にオーブスラッガーショットを再び召喚。強化されたウルトラ念力を使って打ち出した。

^{ハイパー}「超ウルトラノック戦法だ！」

四方八方からレイバトスを捉え、何度も何度も肉体を切り裂いて大ダメージを与えた。

数多の傷を負い、動くことができないレイバトス。ここが最初で最後のチャンス。逃すことは許されない。

「俺たちに勝とうなんざ……」

し字に組んだ右腕を再度水平に伸ばし、膨大なエネルギーをチャージ。湧き上がる力は周囲の瓦礫や岩が持ち上げ、オーブを輝かすとともに周囲に巨大な光の輪を形成させる。

オーブは叫ぶ。平和を脅かそうとするお前如きが、亡き者の魂を侮辱的に扱うお前如

きが……あらゆる願いや想いを背負い、愛する者たちのために戦っている者たちに勝とうなんぞ——

「二万年早いぜ！」

地球にはなく火星に存在している物質“スペシウム”を含んだ光線を十字に組んだ腕から解き放った。

エメリウムストラッガー

“ E S スペシウム” 膨大なエネルギーを象徴する極太の光芒がレイバトスに衝突。けれどヤツはそれでも耐えようと藻掻いている。

「グウウ……オオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!」

「ゼアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

オーブの輝きが増すと共に威力の増大した奔流は遂にレイバトスを穿つ。全身から火花が飛び散っているヤツには、もう再生するほどの余裕はなかった。

「闇は潰えんぞ……光がある限りいいいいいい!!」

最後にそのような言葉を残してレイバトスは爆散していく。

背を向けるオーブは心の中で呟く。そんなことは百も承知。だけどそれでも戦うんだ。平和を願い、愛する者たちがいる限り……と。

引き起こされた爆発は天にまで昇り、雲に覆われた空を一瞬にして消し飛ばしていく

のであつた。

最終章 一宇宙（ソラ）の彼方で輝く光一

ラブライブ決勝延長戦。そして亡霊魔導士レイバトスの引き起こした企みを、ウルトラ戦士たちが阻止してから数日が経った。

戦士と怪獣がぶつかり合った街は、その後すぐさま復興していくととなった。壊れても終わりじゃない。日がまた昇るように、何度でもやり直すことが出来る。星を救った戦士とはまた違う強さを……人類は見せているようだった。

「こつちに釘打つの手伝って〜」

「ペンキの量足りる〜?」

「風船はこのくらいでいいかな?」

Aqoursのライブに向け、分校では生徒たちがステージの組み立てに汗を流していた。しかし汗を流せど疲れた表情を見せる者はいない。自分たちで虹の掛かった舞台を整える。未体験で未知数な事を、皆でやりたいからやる。そんな作業が楽しいからだった。

「……」

生徒ともに作業をこなす一眞。彼はその中でゼロとの別れを思い出していた。

「もう……行っちゃうんですか？」

「ああ。レイバトスは倒れ、マガタノオロチの復活も阻止できたからな。これも全部、お前と仲間の功績だ。誇っていい」

片膝を立て、ゼロは小さな一眞たちを見下ろす。

あの戦いの後、最初から何もなかったかのように東京は静かになった。時間が経過しても異変が起きることがない以上、もう心配はいらないとのこと。

レイバトスが消え、平穩が訪れた。それは即ち、ゼロとの別れを示している。

「わたしたちのライブ、もっと見てほしかったのになあ」

「悪いな。オレにはまだやることがある。向こうで事後処理を進めないとだしな」

千歌たち6人のライブは見ていってくれないのかと残念がつている。仕方がないとわかっているが、残念に思っているのは一眞も一緒だ。けれどゼロの言っていること

も同時に理解できてしまう。レイバトスが荒らしたらしい怪獣墓場の様子や、多くの侵略者たち。様々な問題が山積みなのだ。

「心配すんなって。お前たちのライブ、最高だったぜ。その調子でやれば次だって成功するさ」

「ほんとー！」

「おう、このゼロ様が言ってるんだぜ？ 安心しろって」

ウルトラマンゼロに保証してもらえるところは心強い。皆の顔に笑みが浮かぶ。一眞とてそれは同じだ。

「この宇宙は、お前に任せませ。暁一眞……いや、ウルトラマンオーブ」

「はい、任せてくださいー！」

力強く、それでいてどこか優し気な微笑みを浮かべて一眞は答える。ゼロのお陰で戦いも、そして抱える悩みも解決できた。感謝してもしきれない。

「ゼロさん、本当にありがとうございましてー！」

空へ昇っていく巨人に向かい、一眞は声を張り上げる。

その様子を見たゼロは左手の人差し指と小指、親指を伸ばしてポーズを取り、直後に白銀の鎧を身に纏う。

「じゃあな。またどこかで会おう」

時空の穴の中へとゼロは消えていく。けれどその激しいまでの輝きは、穴が消えるまでいつまでも煌めき続けていた。

ゼロとの別れを経て、ライブの開催日までカレンダーが捲られる。その中で怪獣やウルトラマンの話題からライブの話題だけに移行するまで、それほど時間は掛からなかった。

「このステージで歌うんだね」

完成間近となったステージを見上げる。新たな始まりにふさわしい、みんなの思いが詰まった素晴らしいステージだ。

「楽しみだね」

「緊張……しないすら」

「なんで？」

本番は明日。けれど花丸や善子の胸に迫ってくる苦しさはなかった。それどころか、

梨子が言っていたように楽しみだと感じている。これまでと異なる感覚に戸惑う2人へ、ルビィは語る。

「多分、ルビィ達がちよつぱり大きくなったのかも」

数々の経験の末、自分たちは知らずのうちに成長してたということだ。

「みんな……」

手作りの虹を見上げる彼女らを準備の傍らに一真は見つめていた。今見える彼女たちの背中は大きく、それでいて頼もしい。部活動紹介の時とえらい違いだということは、誰が見たって明らかだろう。

「先輩、何してんすか？」

「え、別になにも？」

「嘘だ、手が止まってたよ？」

擲揄ってくる2人は早見と松戸だ。例に漏れず彼らもステージ製作に加わっている。働いてくれるのはいいのだが、こうやって茶化してくるところはどうにかならないものかと溜息を吐いてしまう。

「手が止まるくらいですから今日は……つてかステージは任せて先輩は帰ってください！」

「……いやいや、まだやるけど？」

突然、早見からの帰宅命令。一体どういう風の吹き回しか。なによりライブは明日。帰ったら準備が間に合わなくなるだろう。しかし一眞の内心を読んでいたのか、それとも予想していたのか。松戸は「大丈夫」と置いてからこんなことを口にした。

「今日は頼もしい助っ人たちが来てくれるから」

松戸の視線を追う様に振り向く。するとそこには静間の制服に身を包んだ生徒たち。中心にいるのは勿論月だった。

「月ちゃん？」

「どうしたんだ？」

月に、そして静間の生徒に対しての疑問。

だって彼らの前にいる生徒たちの数。それは協力を申し出てくれた生徒の数を余裕で越していたからだだった。

「あのライブ動画を見て集まってくれたんだ。僕たちにも何かできないかって」
「だけど……」

浦の星、そしてスクールアイドル。静間から見れば学校の雰囲気壊す存在だ。忌み嫌うとまではいかなくとも、手を貸すことは避けたいはず。

「気付いたんだ。何のために部活をやっているのか。僕たちも、父兄の人達も」

「何のため……?」

「楽しむこと。皆はスクールアイドルを心から楽しんでいた。僕たちも、本気にならなくちやダメなんだ。そのことをA q o u r sや……S a i n t S n o wが教えてくれたんだよ」

部活動に専念する理由。技術を身に着け上達し、強い相手と競い合う。それは何故か。楽しいからだ。どんなものだって好奇心から始まり、楽しいから続ける。純粹な感情が根元にある。

スクールアイドルが教えてくれた。思い出させてくれた。涙の浮かんだ瞳を向けて、月は語った。

「遠慮なんてしないで、私たちにも手伝わせて？」

ここに居る静間の生徒意思はみんな同じみたいだ。手を借してくれるのであれば、拒否することの方が失礼というもの。ならばここは――

「じゃあ、甘えちゃおうか！」

くく

ステージの作成を任せたA q o u r sと共に、一真も追い出された。一応マネージャーだからと残ろうとしたのだが、男子2人に背中を押されて校門の外に。戻ろうと思えば戻れたが、そこまでやられたのであれば素直に従うべきだろう。人を頼ることも大切。これまでで学んできた事だ。

急にできた暇だが、与えられてみるとどう使うべきなのか。歩きながら頭を悩ませる千歌たち。少しでも練習していくのもいいが、この時間はもつと別の事に使いたい。

「そう言えば、鞠莉ちゃんたちはいつまでこっちにいられるずらう？」

ふと、花丸は呟く。途端に静まり返る。イタリアでの再会からライブまで一緒だったが、今度こそお別れだ。さらにもう1人。彼女たちの隣で歩く青年である。

「カズくんはどうなの？」

一真は自分がすべきこと、したいことを皆に伝えた時のことを思い返す。

それはゼロが帰ってすぐのこと。

「みんなに……伝えたいことがあるんだ」

千歌たちが見つめる中で、一眞は言葉を紡いだ。

「俺は多くの星や、そこで助けを求めている存在を救いたい。だからさ……ここを離れようと思うんだ」

切り出した時、話している時の顔はとてつもなく真剣だったことだろう。それもその筈だ。場合によっては、もう二度とこの地球に帰ることが出来なくなるようなことなのだから。

「そっか……」

小さく呟いた声は静かに風に溶けていく。

千歌の返答は、一眞が切り出すことを知っているようにも聞こえた。

「うん。カズくんらしいね」

次に口を開いたのは曜。ウルトラマンでもある彼が何をしたいのか、暁一眞という人物は何を思うのか。口にした答えに納得しているようだった。

「悪い。真っ先に教えるって言ってたのにな」

閉校祭前日の夜の彼女とのやり取りが巡る。しかし全員がいる中で伝えることになつてしまった。一眞は申し訳なさそうに、頬を掻く。

「ううん、そんなに気にしないでよ。……でも、カズくんならできちゃう気がする」
「そうかな？」

「ええ。だつて私たちが、地球を救つちやったのよ？ 同じ風にやればいいの」

曜に続き梨子も。彼女たちに言われると、底知れない勇気を貰える。ここで生まれた繋がりには消えることはない、そう強く思わせる。

「寂しくなるぞら……」

「うん……心からは消えないってわかつてるけど……」

「また帰ってくるのよ……ね？」

「そりや帰るよ。まあ、具体的な時期とかを聞かれるとそりや困るけどさ？」

視線を下げ、不安げに訪ねてくる1年生の3人。一眞は返答しながら頭を撫でる。

「宇宙か。私たちとはレベルが違うね」

「簡単に会いに行ける距離……ではないですわね」

国内や海外とは違い、電車や船、飛行機を使って簡単に行ける場所ではない。広大すぎる宇宙を駆けようとしているのだ。いくら想いや絆は残っていくからといっても、距離を感じすぎてしまう。

「何言ってるのよ。その時は小原家でロケットを作つて宇宙に行くまで！」

果南とダイヤの間に割つて入る鞠莉。悲しみを塗りつぶして明るく振舞っているこ

となんて、すぐにわかってしまう。

「凄まじいですね……小原家……」

「It's a joke!」

「ただど一生のお別れではない。絶対にまた会える。そんな気持ちもどこかにあるから。繋がりは消えないとわかっているから、こうして笑みを見せることが出来ているのだと思う。」

「ええ……」

「たちまち起こる笑い声。やはりこうでなくては。A q o u r s に湿っぽいのは似合わない。」

「一通り笑いあつた後、千歌は手を出してきた。一眞は戸惑うことなく、その手を握り返す。スクールアイドルとマネージャー。人と異星人。人間とウルトラマン。彼女との握手に様々な意味が込められていた。」

「まだ変だけどき。また」

「ほんとに変だよ。……うん、また」

「そう、別れに涙はいらない。流すときは一眞が宇宙から帰り、次に会った時だ。」

「みんなの新しいスタートを見てから行こうかなって。俺も同じようなものだし」

かつての光景を振り返りつつ、一真は答えた。新たなAqoursのスタートと同じくして彼も飛ぶ。つまり明日には地球を発つということだ。因みに志満や美渡には既に伝えてある。事実を全て事細やかに伝えたわけではないが、それでも2人は納得してくれた。本当に、いい人達に恵まれたのだと心底から言える。

「なら、カズも私たちと一緒にだ」

「千歌さんたちのスタートを見届けたら、そのまま向かいますわ」

「それぞれの場所にね」

果南の声を筆頭に、それぞれ顔を見せる。

Aqoursのステージを新たな始まりとして定める。関わってきた者、駆け抜けた者だからこそ明日に定めたのだといえよう。

「じゃあその前に、みんなで行かない?」

現状、これがみんなが集まる最後の機会だからと鞠莉が提案した場所。どこへ向かうのかは正直予想がついていた。

「そう言えば、バス停無くなっちゃうんだってね」

「そりやまあ、学校に行く生徒が使つてたところだし……」

「もう使う人いないもんね」

何度も見て、降りてきた停留所。しかし廃校になれば誰も降りる人はいない。無くなってしまふのは寂しいことだが、バス停も役目を終えたということだろう。

錆びついた金属部に触れればひんやりと冷たい。お疲れ。ゆっくり休んでくれ。長年生徒を出迎え、見送り続けた存在に労いの言葉を贈る。

「なんだか懐かしいね」

「卒業式から少ししか経つてないのに……」

「毎日通つていた道ですから」

来る日も来る日も上つていた坂道。歩を進めて目に入る景色、体に掛かる負荷。来なくなつて半年が過ぎていているわけでもないのに、どれも懐かしい感覚だった。

「本当、いろんなことがありましたわね」

「毎日賑やかだったな」

「賑やかというよりはうるさい……かもだけど」

「人のこと言えないぞら」

「ずら丸たちだつて相当煩つたわよ！」

「でも……楽しかった」

「ああ。俺も楽しかったよ」

オレンジ色に染まり切ったグラウンド、そして校舎。見ているだけであらゆることを思い出す。ここで過ごした楽しい記憶、嬉しい記憶、悲しい記憶、時には苛つく記憶……。でも終わってみればそれらもすべて良い出来事だったと胸を張って言える。

最後に辿り着くのは浦の星の校門前。閉校した時と同じく桜が舞い、優しい風が凩いでいた。時間帯も……ちょうど夕暮れ時だったか。

「なんで、ここに来たの？」

「さあ？ 呼ばれたのかな」

「ちゃんとあつて、ほっとしたずら」

強いて言うのであれば学校に呼ばれた。未だ変わらず残っている校舎を見上げると、不思議だが納得できてしまう理由である。まるで、学校から最後の別れを告げられているかのようだ。

ふいに視線を移した時、ある場所が目に留まる。

「あ……開いてる」

涙を流しながら閉めたはずの門が開いている。また入っていいと。まだまだここに居ていいと……誘っているかの如く。

けれど千歌は優しく門に触れ……

「大丈夫、無くならないよ。浦の星も、校舎も……」

静かに門を閉めていく。閉めたのは千歌だけれど、ここに居る者誰もが同じ選択をしただろう。

だって無くなることはないから。彼女と共に日々を過ごしてきた数多くの場所。グラウンドや図書室、屋上や部室。そして海、砂浜、太陽、船、空、山、街。そしてなにより――

「――Aquoursも」

育まれた過去や時間が記憶に刻まれている限り、永遠となつて残り続けていく。消え去ることはない。だから大丈夫。もう大丈夫なんだ。自分たちの傍で、一緒に歩いていく……自分たちを形作る一部なのだから。

「……帰ろう」

浦の星を背に帰路へ着く彼女たちの表情は、これまで以上に晴れやかだった。

く

——普通星人が出会ったのは、記憶をなくした青年とスクールアイドル。輝きを探し求めながら、輝きとは何なのかを問い続けた1年。そんな中怪獣や宇宙人が襲ってきたけれど、いつも助けてくれたのはその青年だった。

——灰色の少女は石碑に手を合わす。以前自身の負の感情によつて暴走させてしまったことがある。しかし、彼女自身が強く願ったことで最悪の結末を回避することが出来た。新しい出発のライブをあなたも見せてほしいと、彼女は願っていた。

——赤紫色の少女と、ダークブルーの少女は星が煌めく空を見上げる。すると風に乗つて聞こえてくるからだ。たったの数日だけでもいた、白い獅子の鳴き声が。

——ファッション誌を読み始めたのは、彼女との出会いがキツカケだろう。ともに街を歩き、笑いあつた異星の友人。ページを捲ると、つい似たような人物に目が留まる。本人ではないかもしれないが、それでもエールを貰った気がするからだ。

——友の墓に手を合わせる。Aquorsが好きで、友達になり、そして一緒に曲を作った。数えるほどの思い出しかないけれど、貰った勇氣はそれ以上だ。だから頑張るねと、ピンク髪の少女に伝えるのだった。

——長い髪を揺らし思い耽る。小さな子たちを守ろうとした時、想像もできないような勇氣が湧いてきた。今思えば無謀だったなど呆れてしまふけれど、これも思い出

として大切にしまっておこう。

——いつも潜っていた海を見つめる。ずっと見守ってくれていた。青年が言っていた様に一度だけ、巨人として自分たちを守ってくれたのであれば、本当に感謝しなくてはならない。しばらくは来れなくなるけど、必ず戻ってまた潜ろうと約束を交わす。

——車を走らせる。以前のように9人ではなく1人で走らせるのはまだ寂しい。以前助けた黒服の青年を乗せたら楽しそうだなとも思ったが、彼は絶対嫌がるだろう。そこがまた面白いのだが。などと様々な思い出を胸に車を走らせた。

迎えたライブ当日。駅前には多くの人々で溢れかえっていた。これも全部、新たなAoursの出発を見届けるためだ。

「なんだろう……?」

その中には興味をひかれた者だっている。人混みの中を進む躑躅色の髪を揺らした少女もその1人だ。

「……おっと」

「あ、すみません!!」

キヨロキヨロと辺りを見渡していたため、前の男性とぶつかってしまった。慌てて謝るが彼は「いいよいいよ」と軽く受け流す。

「君もAqours好きなの？」

「いいえ。よく知らなくて……」

「ふうん、でも一度見ればハマるかもよ〜?」

しかし男性はステージを見る前に、誰かに呼ばれて消えてしまった。

喧噪の中でも、呼ばれていた男性の名前だけは聞き取れた。Aqoursが好きな男性、彼はこう呼ばれていた“沙羅”と。

ルビイの挨拶の後、今か今かとライブの開始を待っている観客たちの中にはアオボシの姿もあった。

「僕はさよならなんて言わないから……」

一眞が今日地球を発つことは知っている。彼が以前、少女とその兄の眠る墓の前で話していた時に盗み聞きしていたからだ。

レイバトスとの鬪い以来、彼とは会ってない。いや、一眞は会いに来てくれたがアオボシが追い返したと言った方が正しい。頑固なアオボシの意思を汲んだ一眞は最後にこう言い残した。「またな」と。

「何がまたな……だ」

寂しいからなのか、それともせいせいするからなのか……いずれにしろ胸に込み上げてくるものがあつた。一眞の出した答えなら文句はない。精々派手にやってポロポロにでもなればいい。だけど彼がまたこの星に戻ってくるまでは……

「僕が地球を守ってやるよ」

ライブを見る彼の右手には『ビートル隊隊員募集』と書かれた紙が握られていた。

くく

耳を澄ませると、彼女たちの声が聞こえる。まだ歌っているわけでもないのに、その

声は魂を震わせる。

円陣を組んだ6人は右手を重ねる。今ならわかる。重なった手は6でも、いつまでのあの3人も一緒に重ねてくれていることが。

「イチ！」

「二！」

「サン！」

——始まりはいつもゼロだった。始まって、一步一步前に進んで、積み上げて……でも、気付くとゼロに戻っていた。

「ヨン！」

「ゴ！」

「ロク！」

——それでも、1つ1つ積み上げてきた。なんとかなるって、きつと何とかかなると信じて。それでも……現実は厳しくて。

「ナナ！」

「ハチ！」

「キュウ！」

——一番叶えてたい夢は……叶えられず、またゼロに戻ったような気もしたけれ

「早く早く〜！」

「ちよつと待って〜！」

さざ波の音に交じり、少女たちの笑い声が聞こえてくる。はしやぎながら友人と談笑を交わすのは躑躅色の髪を持つ少女だった。

「ねえ、なんでここに來たの？」

「聖地だよ？　せ・い・ち」

もう一方の少女はどうしてここに來たのか疑問に思っていたようだ。海を眺めながら、簡単なステップを踏む少女は屈託のない笑顔で説明した。

「この前あつた沼津のライブ、見てなかったの？　私、高校生になったら絶対にスクールアイドル部に入るんだ〜!!」

「また始まった」

少女はライブを見てからここ最近、「輝きたい」と口にかけているのだった。

「それで、なんて名前なの？」

「うん、名前はね——」

砂浜に書かれていく文字。過去にもまさにこの場所で見つけ、輝きたいと願った少女と共に駆けていった名だ。そしてまた、彼女たちによつて輝きに焦がれた少女が再度その場に刻んだのだった。

— ■ ■ 年後 —

とある惑星にて、少年は遠方を見据える。

山のような巨大生物が、遅れて現れた巨人に撃退されたからだ。巨大生物は村の人達を踏み潰す恐怖の象徴として恐れられていたのに、あろうことか巨人はあっさりと倒してしまった。唾然とするしかない。

「お兄ちゃん！」

「兄さん!!」

背後から2人の兄妹が走ってくる。自分を心配してきてくれたのだろう。

「オレは大丈夫だよ。そっちは怪我無いか？」

「うん」

「兄さん、さっきの巨人は……？」

弟の問いに少年は首を振る。巨人は撃退した後、凄まじい光と共に消えてしまったのだ。

「あく君、大丈夫だった？」

すると自分たちの兄へ、見知らぬ顔の青年が走ってきて話しかけていた。少年と少女は表情に力を入れる。

「大丈夫だよ2人とも。この人はオレを助けてくれたんだ」

長男はそのように青年のことを説明する。けれど怪しいものは怪しい。次男は思い切ってこう投げかけた。

「誰ですか、あんたは？」

警戒する次男とは反して、青年は昔から変わることのない笑みを浮かべ、口を開いた。

「ああ、2人がさっき言ってた弟と妹か。俺の名前は——」

星は輝いている。宇宙^{ソラ}の果てでも変わりなく。あらゆる想いは巡り、紡がれ……新たな輝きを生んでいく。

この先に何かがあるのか、続いていくものはあるのか……そんなことはわからない。けれど精一杯やり遂げたといえるその時まで、最後まで走り切れたと言えるその時まで、あらゆる想いを胸に……輝き続けよう。